

# 日本漢文史

籍叢刊

第三輯

維史

十一



上海交通大学出版社  
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



圖書在版編目(CIP)數據

日本漢文史籍叢刊. 第3輯, 雜史 / 周斌, 孫錦泉,  
粟品孝主編 — 上海: 上海交通大學出版社, 2014

ISBN 978-7-313-11956-8

I. ①日… II. ①周… ②孫… ③粟… III. 日本—  
歷史—史籍—叢刊②日本—歷史—雜史 IV. ①K313-55

中國版本圖書館 CIP 數據核字(2014)第 199077 號

日本漢文史籍叢刊 第三輯 雜史

主 編 周 斌 孫錦泉 粟品孝

副主編 陳小法 尤 佳

上海交通大學出版社出版發行 北京人天書店有限公司經銷

(上海市番禺路 951 號 郵政編碼 200030)

電話:64071208 出版人:韓建民

北京中獻拓方科技發展有限公司印刷

開本:889mm×1194mm 1/16

印張:946 字數:18920 千字

2014 年 9 月第 1 版 2014 年 9 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-313-11956-8/K

定價:23800.00 圓(全二十八冊)

版權所有 侵權必究

統 籌 陳建華 施 維 劉邦權

責任編輯 陳建華 劉邦權

裝幀設計 陳燕靜

# 第三輯目錄

## 第一冊目錄（總第62冊）

雜史

佛教

元亨釋書

（目錄、表、卷一—卷三十）

本朝高僧傳

（總目、序、凡例、援引書目、卷一—卷二）

四三五

## 第二冊目錄（總第63冊）

本朝高僧傳

續（卷三—卷四十七）

一

## 第三冊目錄（總第64冊）

本朝高僧傳

續（卷四十八—卷七十五）

一

東國高僧傳

（序、卷一—卷十）

二四三

續日本高僧傳

（序、總目、援引書目、凡例、卷一—卷九）

三七九

## 第四冊目錄（總第65冊）

續日本高僧傳

續（卷十一—卷十一）

一

吉水實錄

（序、卷第一—卷第十四）

三七

正法山六祖傳

.....

二五五

日本往生全傳

（序、極樂記、續本朝往生傳、拾遺往生傳、後拾遺往生傳、本國新修往生傳）

二七三

扶桑往生傳

（序、卷上—卷下）

四〇九

總目錄

淨土真宗付法傳 ..... 四五五

三國高僧略傳 (序、例言、卷之上—卷之中) ..... 四七五

第五冊目錄 (總第66冊)

三國高僧略傳 續 (卷之下) ..... 一

近世禪林僧寶傳 (序、凡例、目錄、卷之上—卷之下) ..... 二七

高僧名士傳 ..... 一二七

和漢高僧傳 ..... 一五三

門跡傳 ..... 二四一

天台圓宗列祖略傳 ..... 三〇三

密宗血脉鈔 ..... 三二九

日本國大師一覽 ..... 四五一

唐鑑真過海大師東征傳 ..... 四五九

東福開山聖一國師年譜 ..... 四八七

蒼龍窟年譜 ..... 五〇九

東海一休和尚一代記 (上) ..... 五二九

第六冊目錄 (總第67冊)

東海一休和尚一代記 續 (下) ..... 一

智証大師年譜 ..... 一三

正受老人崇行錄 ..... 三五

東海鐵塔諸祖年譜略頌 ..... 六一

峨山禪師行實並法語 ..... 九一

方廣開山無文元選禪師行狀 ..... 九九

越溪道蹟 ..... 一一三

損翁老人見聞寶永記 ..... 一二一

近世高僧年表 ..... 一六三

淨土傳燈總系譜 (序、卷上、中、下) ..... 一九九

東大寺要錄 (序、卷一—卷六) ..... 二六九

興福寺年代記 (序、卷一—卷六) ..... 三八五

長谷寺緣起 ..... 四三九

扶桑伽藍紀要 ..... 四六一

慧超往五天竺國傳箋釋 ..... 四七七

第七冊目錄 (總第68冊)

入唐求法巡禮行記 (卷第一—卷第四) ..... 一

參天台五臺山記 (卷第一—卷第八) ..... 一四九

神道

神道五部書 (卷第一—卷第五) ..... 三〇五

皇國神社志 ..... 三七三

古義神代考 (卷第一—卷第三) ..... 三九三

天滿宮世家 ..... 四三七

祖志 (序、緒論、目次、卷一—卷三) ..... 四五五

第八冊目錄 (總第69冊)

祖志 續 (卷四—卷六) ..... 一

雜紀

古事記 (卷一—卷三) ..... 八三

春記 (卷一—卷三) ..... 一六三

玉葉 (序、例言、目錄、卷一—卷十二) ..... 二一七

第九冊目錄 (總第70冊) ..... 一

玉葉 續 (卷十三—卷二十六) ..... 一

第十冊目錄 (總第71冊) ..... 一

玉葉 續 (卷二十七—卷四十) ..... 一

第十一冊目錄 (總第72冊) ..... 一

玉葉 續 (卷四十一—卷五十五) ..... 一

第十二冊目錄 (總第73冊) ..... 一

玉葉 續 (卷五十六—卷六十六) ..... 一

明月記 (諸言、目次、第一) ..... 三九一

第十三冊目錄 (總第74冊) ..... 一

明月記 續 (第一、第二) ..... 一

第十四冊目錄 (總第75冊) ..... 一

明月記 續 (第二、第三) ..... 一

第十五冊目錄 (總第76冊) ..... 一

明月記 續 (第三、補遺) ..... 一

古語拾遺 ..... 三四三

將門記 ..... 三六一



大塔物語 ..... 三八三

保建大記 (卷上—卷下) ..... 四〇九

本朝稽古篇 (上中下、續上中下) ..... 四三七

十三朝紀聞 (慶弘紀聞) (序、卷一—卷三) ..... 四七五

第十六冊目錄 (總第77冊)

十三朝紀聞 續 (卷四—卷七、跋) ..... 一

今日鈔 (卷一—卷七) ..... 七五

柱史鈔 (卷上—卷下) ..... 一七七

近古史談 (卷一—卷四) ..... 二二一

近世史談 (卷一—卷四) ..... 二九三

帝國史談 (卷上—卷下) ..... 三六五

續近事紀略 (卷一—卷三、征臺略記) ..... 四一五

尊攘紀事 (卷之一—卷之六) ..... 四七三

第十七冊目錄 (總第78冊)

尊攘紀事 續 (卷七—卷八、跋) ..... 一

尊攘紀事補遺 (卷一—卷四) ..... 二五

行在或問 (卷上—卷下) ..... 七九

皇朝靖獻遺言 (卷一—卷八) ..... 九五

慶安小史 ..... 一七一

先朝私記 ..... 一八五

遠野史談 (卷上—卷下) ..... 二一一

西京傳新記	(初編—四編)	二三七
-------	---------	-----

日本詩史	(卷一—卷五)	三三三
------	---------	-----

回天詩史	(卷上—卷下)	三九一
------	---------	-----

和漢茶誌	(卷一—卷三)	四三一
------	---------	-----

本朝畫史	(卷上—卷下)	五一
------	---------	----

第十八冊目錄 (總第79冊)

續本朝畫史	(卷上—卷下)	一
-------	---------	---

近世畫史	(卷一—卷五)	二七
------	---------	----

雲煙略傳	(卷上—卷下)	一一五
------	---------	-----

日本國事跡考		一五七
--------	--	-----

史館茗話		一九七
------	--	-----

寤眠錄		二二三
-----	--	-----

幽囚錄		二三九
-----	--	-----

在津紀事	(卷一—卷二)	二六五
------	---------	-----

正名緒言	(上下)	二八九
------	------	-----

本朝蒙求	(上—中—下)	三三三
------	---------	-----

扶桑蒙求	(上—中—下)	四〇九
------	---------	-----

神代千字文		四九五
-------	--	-----

本朝千字文		五〇九
-------	--	-----

內國千字文		五二一
-------	--	-----

日本千字文		五三三
-------	--	-----

第十九冊目錄（總第80冊）

大統歌（上下）

盡忠錄

涉史偶筆

（卷一—卷六）、

涉史續筆

（卷一—卷七）

香亭雅談

（上下）

櫻史新編

酒史新編

（上下）

國朝佳節錄

外史劄記

歷代君臣名功錄

（上中下）

傳疑小史

仙臺支傾錄

先哲醫話

（上下）

奇談新編

第二十冊目錄（總第81冊）

中朝事實

（上下）

潛中紀事

（卷一—卷六）

正保野史

稽古要略

丙丁炯戒錄

（上下）

養真亭藏泉譜

一

一九

四一

一八九

二三五

二五五

二九七

三一

三三三

三九三

四〇九

四三七

五二三

一

一〇七

二六五

二七三

二八五

三二一

新撰寬永泉譜 (前編—後編) ..... 三九九

明治新撰泉譜 (一集—三集) ..... 四二一

明治新撰泉譜別集 (初編—貳編) ..... 四八三

大東世語 (序、卷一—卷二) ..... 五一七

第二十一冊目錄 (總第82冊) ..... 一

大東世語 續 (卷三—卷五) ..... 一

近世叢語 (卷一—卷六) ..... 三五

新撰叢語 (卷一—卷三) ..... 一〇七

修身叢語 (上下) ..... 一五一

日本智囊 (卷一—卷十) ..... 二二三

皇朝金鑑 (上書、序、凡例、總目、卷一—卷十七) ..... 三三九

第二十二冊目錄 (總第83冊) ..... 一

皇朝金鑑 續 (卷十八—卷五十五、跋) ..... 一

戰略新編 (序、目錄、卷一—卷五) ..... 四一七

第二十三冊目錄 (總第84冊) ..... 一

戰略新編 續 (卷六—卷十一) ..... 一

策府 (題、序、凡例、目次、卷一—卷二十四) ..... 七九

第二十四冊目錄 (總第85冊) ..... 一

策府 續 (卷二十五—卷三十、跋) ..... 一

外史

日本外史前記 (卷一—卷五) ..... 九七

日本外史	(序、例言、引用書目、目次、卷一—十八)	二二九
------	----------------------	-----

第二十五冊目錄(總第86冊)

日本外史	續(卷十九—卷二十二)	一
續日本外史	(卷一—卷十)	七三
近世日本外史	(卷一—卷八)	二五三
續近世日本外史	(卷一—卷二)	三九一
日本外史補	(自序、凡例、目次、引用書目、卷一—卷七)	四四一

第二十六冊目錄(總第87冊)

日本外史補	續(卷八—卷十四)	一
江戸將軍外史	(卷一—卷五)	六一

史表

皇朝金石年表	二五五
日本金石年表	二八七
史籍年表	三一九
日本史籍年表	三五九

第二十七冊目錄(總第88冊)

日本史籍年表	續(前編續—後編)	一
--------	-----------	---

第二十八冊目錄(總第89冊)

日本史籍年表	續(後編續)	一
銅鑄和漢年契		四五
增訂新撰年表		七七



近世儒林年表	.....	一三五
日本外史年表	.....	二三五
重撰和漢皇統編年合運圖 (上下)	.....	二六三
年代紀略	.....	三四一
新編分類本朝年代記 (卷一—卷七)	.....	三六一
國史年表	.....	五二九
逸號年表	.....	五三九

第十一冊目錄(總第72冊)

玉葉

續(卷四十一—卷五十五)

.....

玉葉

卷第四十一

自元曆元年七月  
至同十二月

元曆元年秋冬

七月

一日、丁晴、念誦如<sub>レ</sub>昨、先是神齋、奉<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>心經<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>例、

二日、戊晴、法皇去夜幸<sub>二</sub>鳥羽故院<sub>一</sub>、御國忌以後還<sub>二</sub>御八條殿<sub>一</sub>、又有<sub>二</sub>百日御讀經結願<sub>一</sub>云々、御即位延否事、人々申狀尋<sub>二</sub>攝政<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>三人申狀<sub>一</sub>、實房、忠親、長房等也、左府并

余申狀、光雅朝臣注<sub>二</sub>別紙<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>持云々、實房申<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行之由<sub>一</sub>、大略不<sub>レ</sub>重<sub>二</sub>劔璽<sub>一</sub>之趣也、神慮難<sub>レ</sub>測、可<sub>レ</sub>恐

々々、忠親長方申<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>劔璽歸來<sub>一</sub>之由、其中長方申子細、大都同<sub>二</sub>愚案<sub>一</sub>、此事初被<sub>二</sub>大嘗會<sub>一</sub>事之次、余依<sub>二</sub>申出<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>人々<sub>一</sub>之處、各申狀如<sub>レ</sub>此、左大臣被<sub>レ</sub>申、不可<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>劔璽

其之上、院近臣如<sub>二</sub>泰經<sub>一</sub>之小人等、皆以存<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御即位<sub>一</sub>之由云々、仍可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行之儀一定了、來五日可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>遷幸<sub>一</sub>云々、

三日、己晴、自<sub>二</sub>今朝<sub>一</sub>大將有<sub>二</sub>病氣<sub>一</sub>、仍來五日行幸不

可<sub>二</sub>參內<sub>一</sub>之由、以<sub>二</sub>書札<sub>一</sub>觸<sub>二</sub>攝政<sub>一</sub>、又以<sub>二</sub>大將<sub>一</sub>觸<sub>二</sub>頭辨<sub>一</sub>、又以<sub>二</sub>國行<sub>一</sub>令<sub>二</sub>參院<sub>一</sub>、便宜之時可<sub>二</sub>披露<sub>一</sub>之由示<sub>二</sub>定長<sub>一</sub>、初度行幸遷御之禮也、左大將無<sub>レ</sub>障之間、尤可<sub>二</sub>參仕<sub>一</sub>、而所惱有<sub>レ</sub>限、仍不<sub>二</sub>參入<sub>一</sub>、尤有<sub>レ</sub>恐事歟、

四日、庚晴、爲<sub>二</sub>藏人少輔親經奉行<sub>一</sub>、件人爲<sub>二</sub>行幸奉<sub>レ</sub>行職事<sub>一</sub>云々、大將相<sub>二</sub>扶所勞<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>行幸<sub>一</sub>之由有<sub>二</sub>其仰<sub>一</sub>、然而申<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>堪<sub>二</sub>參入<sub>一</sub>之狀、

五日、辛晴、昨今物忌也、大將所勞雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>少減<sub>一</sub>猶不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>出仕<sub>一</sub>、仍不<sub>二</sub>參<sub>一</sub>仕行幸、此日、當今遷<sub>二</sub>幸大內<sub>一</sub>、來

廿八日、依<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>所<sub>二</sub>遷御<sub>一</sub>也、無<sub>二</sub>劔璽<sub>一</sub>行幸之例始<sub>二</sub>于今度<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>希代之珍事<sub>一</sub>歟、其間儀式可<sub>二</sub>尋記<sub>一</sub>之、依<sub>二</sub>物忌<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>歟、

七日、癸晴、御<sub>二</sub>幸法勝寺<sub>一</sub>、御八講結願也、攝政被<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>行香<sub>一</sub>云々、而之間、已忽紛失、綱所申云、かひ可<sub>レ</sub>作云云、滿座解<sub>レ</sub>願云々、又堂童子之間、少將成定與<sub>二</sub>定長<sub>一</sub>

口論云々、

八日、甲晴、傳聞、伊賀伊勢國人等謀叛了云々、伊賀國者、大內冠者氏源、知行云々、仍下遣郎從等、令居住國中、而昨日辰刻、家繼法師平家即從、號平、爲大將軍、大內郎從等悉伐取了、又伊勢國信兼和泉、已下切、塞鈴鹿山、同謀叛了云々、因此事、院中物忌、取喻無物、秦經作色、只今事可出來之趣也云々、凡不能左、右世間也、可彈指云々、此日寂勝光院御八講、奉行右中辨行隆、泥々云々、又御幸忽停止之間、堂童子闕如、預法師取花宮云々、

九日、乙晴、大外記賴業來語云、去月廿九日有御即位日時定、今月廿六日爲攝政忌日、此條可憚哉否、以頭辨光雅朝臣被問左大臣、大臣被大臣被申不可有憚之由、仍廿六日之由被仰下了、而去三日賴業參殿下、乍恐忌日御出仕尤可有其憚之由申入了、仍忽召頭辨被仰下可改勘之由、然而事體不穩、仍內々可摺改本勘文摺六日可仰、之由被仰下了云々、此事希代珍事也、忌日之條被問左府、是不當其一也、左府又申不可憚之狀、不當之其二也、所被下官外記之文書、有議改易者常慣也、竊摺改之條未會有、是不當其三也、萬事以之可察、可彈

指云々、此次賴業所談說、甚多、故俊憲入道密語云、此君者指之今法、偏晉惠帝也、八王之執權敢不可相違云々、其語如指掌、誠是聖人格言也云々、

十三日、己此日有除目、被補御即位成功之輩云云、先任之後可獻功云々、

十四日、庚故女院御食供奉拜送、御堂放殿、并母儀等盆供不持來、直送了云々、尤不敵々々、今朝爲物忌之間、暗察不可取入之由持向了云々、後日

召親行一加勘發了、所陳如此、不足言々々々、十八日、甲晴、多武峯怪異、御基山物忌也、泰山府君祭如例、

十九日、乙御即位之間、右近府成功事、年預少將實明朝臣、雖示頭辨返事、不足言云々、仍大將以書札遣光雅朝臣許了、

廿日、丙晴、故御匣殿忌日也、爲修少佛事、向堂、事了歸家、傳聞、昨日伊勢謀叛之輩、出逢近江國、與官兵合戰、官軍得理、賊徒退散、爲宗者伐取了云云、天下大慶何事加之哉、頭辨返事到來、子細分明、仍大將仰頭九了、

廿一日、丁傳聞、謀叛大將軍平田入道家繼被梟首

未

了、其外兩三人爲大將軍者被伐了云々、忠清法師、家資等隨山了云々、又官軍之內、大佐々木冠者<sub>不知</sub>被伐了、凡官兵之死者及數百云々、

廿二日、<sub>戊晴</sub>、炎旱之愁、都鄙充滿云々、一切無御祈之沙汰、無用途之上、無歎國之損亡之人之故云云、可<sub>レ</sub>悲々々、問御即位吉時於賴業、申<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>申二點云々、今夜追大將物氣了、明晚依欠日一也、

廿四日、<sub>戊晴</sub>、定能卿來、中將正下事申<sub>レ</sub>院、是不存、必可成就之由、爲計御氣色之體所<sub>レ</sub>申也、而無益云々、不快之條爰而無疑歟、今夜、御即位叙位也、此日、光明院領<sub>六條坊門</sub>地十五戶主進<sub>其狀仰光長、尋先</sub>院、<sub>東洞院</sub>、<sub>例令書之、宋合</sub>如署、此事起者故寺法印知行彼堂之時、其乳母子式部大夫致親宛得<sub>件地</sub>、造<sub>作</sub>居住、而余傳領之後、猶以無相違<sub>令</sub>居住、而件男稱私領之由進<sub>レ</sub>院、院

御幸其地、御歷覽之後、賜女房丹後、已以令造作云々、而文書聞<sub>食在攝政許</sub>之由、以女房冷泉殿<sub>件女房、法皇與攝政</sub>、被<sub>二</sub>尋仰<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>件地爲<sub>二</sub>右大臣領<sub>一</sub>、<sub>交據之間爲<sub>二</sub>殿云々</sub>、仍無文書之由云々、此由密々件女房告<sub>レ</sub>余、<sub>非院</sub>、仍余即以<sub>二</sub>件女房<sub>一</sub>、彼地子細如此致親稱<sub>二</sub>私領<sub>一</sub>、不足<sub>レ</sub>言、若有<sub>二</sub>御要<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>進也、於<sub>二</sub>文書<sub>一</sub>、邦綱卿雖

申<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>沙汰與<sub>一</sub>之由、空過了不知<sub>二</sub>在所<sub>一</sub>、然而不可依<sub>レ</sub>文書有無、傳領次第顯然也、申<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>之由、仰云、致親申狀不可說々々々、抑爲<sub>二</sub>堂領<sub>一</sub>之由、雖不便思食、猶有<sub>二</sub>御要<sub>一</sub>、若令<sub>レ</sub>進者、返々可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>悅、口仍無左右所<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>進、

廿五日、<sub>亥</sub>、天晴、昨今物忌也、披<sub>二</sub>見聞書<sub>一</sub>、實宗叙<sub>二</sub>從二位<sub>一</sub>、兼光超<sub>二</sub>隆房<sub>一</sub>叙<sub>二</sub>從三位<sub>一</sub>、過分之恩也、隆房者、法皇第一之近臣泰經之甥也、兼光、法皇無雙之寵女丹後之甥也、論<sub>二</sub>其權盛<sub>一</sub>、泰經猶不及<sub>二</sub>丹州<sub>一</sub>歟、忠良叙<sub>二</sub>正三位<sub>一</sub>、中將不被<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>正下<sub>一</sub>、勿論歟、

廿六日、<sub>壬</sub>、晴、傳聞、隆房事、泰經泣愁申、仍叙<sub>二</sub>三位<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>兼光上<sub>一</sub>之由、更被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>云々、朝務輕々以<sub>レ</sub>之可<sub>レ</sub>察、自<sub>レ</sub>元依何過怠、隆房可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>超<sub>二</sub>越兼光<sub>一</sub>哉、若有<sub>二</sub>過失<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>越者、又不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>追叙<sub>一</sub>、凡此輩忽<sub>二</sub>三品之條<sub>一</sub>、驚<sub>二</sub>耳目<sub>一</sub>者歟、云<sub>二</sub>大事<sub>一</sub>云<sub>二</sub>少事<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>彈指<sub>二</sub>之世也<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>悲々々、入<sub>レ</sub>夜大風、有<sub>二</sub>雨氣<sub>一</sub>歟、聊有<sub>二</sub>他事<sub>一</sub>、

廿八日、<sub>日</sub>、晴、此日有<sub>二</sub>即位事<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>治曆四年例<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>太政官正廳<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>行之、抑相<sub>二</sub>待劔璽歸來<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>行即位<sub>一</sub>哉否、豫被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>人々<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>攝政及左大臣



等、申、不備、劔璽、踐、天子之位、異域雖有例、我朝  
曾無蹤、然而依、叙庶并識者等、議奏、不知、天意、  
不測、神慮、所被、行、只以、目耳、

已刻、大將着、束帶、束帶、平胡、參內、隨身裝束垂袴壺  
胡鉢也、延久久壽保元、攝政關白等隨身皆如此、各被  
着、螺鈿劔也、云、攝政、云、將軍、其儀可、同仍追、彼  
例也、而或人云、久壽當時、入道關白爲、中納言中將、  
供奉隨身狩胡鉢云々、猶可、依、主人胡鉢、入、然者大  
將隨身猶可、着、狩胡鉢云々、此條一旦雖、可、然、重  
廻、恩案、禁中警固、及宮中行幸之時、大將雖、帶、平胡  
鉢、隨身豈是流例也、於、此行幸、攝政及大將隨身着、  
狩胡鉢、例未、見、又當時之見目、庶胡鉢垂袴尤穩便  
也、仍不、用、狩胡鉢也、亥刻、大將歸來語云、未一點、  
行、幸官廳、公卿前行、實房、堀河、御、能、平、胡、鉢、攝  
政螺鈿劔、隨身如、大將也、入、自、官東門、於、門、內、立、  
御見、治、列、立、幔外、公卿立、西上北面、右大將立、幔  
門外西頭、東、寄、御輿於後房東第五間、下御之時無、  
警蹕、是又治曆例也、即位吉時申二點、須彼刻限以前、  
可、辨、備堂上堂下諸儀也、而吉時至之後、始着、御禮  
服、吉時以前可、其後渡、御高御座、仍吉時頗相違、其後

更內辨着、幄、侍從等參上云々、因、之萬事懈怠、大將  
依、足所勞、不、待、還御、早出了云々、還御可、仰、御  
綱、哉否不審、而治曆土記云、於、東門內、仰、御綱、云  
云、內之條不審、而兵衛陣在、件門內、云々、仍於、內被  
仰、之條尤可、然、於、兵衛陣前、仰、御綱、爲、故實、之  
故也、定能卿成、不審、問、大將、々々答、此由、退出了  
之由所、語也、內辨左大臣、仁安、治承、今度、并、三、度、  
外辨

大納言、定房、中納言、兼房、實宗、參議、通親、經、

堂上侍從

左 親王代、左宰相、中將、

侍從代、前、越前守、宗雅、朝臣、

少納言、重綱、

右 親王代、左、兵衛督、隆房、

侍從代、如、家俊、盛宗等朝臣、共初、

少納言、有家、

典儀、少納言、賴房、

大將代、左、季長朝臣、

廿九日、乙、晝間天頗陰、微雨下即止了、

八月

一日、巳晴、未刻、頭中將通資朝臣、送書於大將許云、明日<sub>二</sub>可有還幸<sub>一</sub>、里內可<sub>二</sub>供奉<sub>一</sub>者、院御氣色云々、昨日御教番也、右足有恙不能騎馬云々、仍申其由了、抑、件人去年送<sub>二</sub>札上所云々、謹<sub>二</sub>上右大將殿<sub>一</sub>云々、依<sub>二</sub>忘<sub>一</sub>禮節返還了、而今書進上字了、已伏<sub>二</sub>理歎<sub>一</sub>、傳聞、御即位右方、殿上侍從盛定朝臣、兼日進預狀、前日解退、遂以不參、法皇六借給、其罪何様可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行哉之由被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>攝政云々、早可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>勅定<sub>一</sub>之由、而於<sub>レ</sub>院人非人等集居評定者、可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>贖銅<sub>一</sub>歎云々、盛定其身爲<sub>二</sub>雲客<sub>一</sub>、除籍之外不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>他事<sub>一</sub>歎、君暗而迷<sub>二</sub>少事<sub>一</sub>、況重事哉、國家之敗亂宜哉々々、或人云、鎮西多與<sub>二</sub>平氏<sub>一</sub>了、於<sub>二</sub>安藝國<sub>一</sub>與<sub>二</sub>官軍<sub>一</sub>云々、六ヶ度合戰、每度平氏得<sub>レ</sub>理云々、

三日、<sub>未</sub>晴、及<sub>レ</sub>晚雨下、大夫史隆職來語云、御即位之間、雜事偏成功也、諸國之勤無<sub>二</sub>一<sub>一</sub>座云々、又云、去一日被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>釋奠正廳高御座<sub>一</sub>、以西懸<sub>二</sub>廟像<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>西懸<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>都堂<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>例、是師尙申狀云々、賴業傾云、裝<sub>二</sub>高御座之所<sub>一</sub>、懸<sub>二</sub>廟像<sub>一</sub>之條有<sub>二</sub>禁忌<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>西懸<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>廟堂<sub>一</sub>、打<sub>レ</sub>幄可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>都堂<sub>一</sub>云々、然而被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>師尙申狀<sub>一</sub>了云々、

隆職云、幄條雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>例、近代幄柱甚短難<sub>レ</sub>立、高座不可<sub>レ</sub>叶、又高御座傍懸<sub>二</sub>廟像<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>憚、猶以<sub>二</sub>都堂<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>廟堂<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>南門<sub>一</sub>用<sub>二</sub>都堂<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>宜云々、如<sub>レ</sub>聞者、三人意趣過分、是非未<sub>レ</sub>辨、

六日、<sub>戌</sub>晴、泰茂來問<sub>二</sub>天變事<sub>一</sub>、法皇御慎殊重、所謂白衣會必可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>々々<sub>一</sub>、金<sub>作金</sub>星與<sub>二</sub>歲星<sub>一</sub>相犯云々、又語<sub>二</sub>占之間事<sub>一</sub>、其才尤高、可<sub>レ</sub>貴々々、午刻、源中納言來數刻言談、語云、去比賴朝可<sub>レ</sub>還<sub>二</sub>納言<sub>一</sub>之由、推舉付<sub>二</sub>泰經<sub>一</sub>申上云々、定有<sub>二</sub>不快事<sub>一</sub>歎、爲<sub>レ</sub>恐、又云、明日可有<sub>二</sub>除書<sub>一</sub>、九郎可<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>官者<sub>一</sub>、今夜依<sub>二</sub>方違<sub>一</sub>向<sub>二</sub>大將亭<sub>一</sub>、

八日、<sub>子</sub>晴、及<sub>レ</sub>晚向<sub>レ</sub>堂、先是沐浴之後、請<sub>二</sub>佛殿聖人<sub>一</sub>受戒、恒例事也、其後渡<sub>二</sub>居堂<sub>一</sub>也、自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>至<sub>二</sub>來十五日<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>一心不亂念佛<sub>一</sub>之故也、年來每年九月有此事、而今年九月上旬可<sub>レ</sub>服<sub>二</sub>蒜<sub>一</sub>、彼忌限內不能<sub>二</sub>念佛<sub>一</sub>、仍縮<sub>二</sub>行今月<sub>一</sub>、改<sub>二</sub>月之條<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>輕<sub>一</sub>佛事之恐哉否、問<sub>二</sub>聖人<sub>一</sub>、答云、不可<sub>レ</sub>然、故何有、八月者西建也、即當<sub>二</sub>西方彌陀緣月<sub>一</sub>也、何況非<sub>二</sub>延忌<sub>一</sub>、已早速也、何謂<sub>二</sub>如在<sub>一</sub>哉者、酉刻始<sub>二</sub>念佛<sub>一</sub>了、

十日、<sub>寅</sub>晴、念佛如<sub>レ</sub>昨、大將頗得<sub>二</sub>減云々<sub>一</sub>、頭中將通資

朝臣、送三書於大將之許、催、可、勤、仕大嘗會檢校、之由、申、所勞了云々、

十一日、丁晴、念佛如例、院八條院渡、御鳥羽、自今、日恒例成菩提院御念佛也、

十二日、戊晴、念佛如例、通資重催大將云、其狀云、定房、實房有障猶可領狀、有所勞者、後日可解申、明日可有國郡卜定一事已闕如了云々、此事希有也異體也、猶不堪勤仕之由申了、

十三日、己晴、念佛如例、此夕、小童二人兄八歲、弟六歲、密々

着袴、大將結腰前物、陪膳經家、基輔兩朝臣、有公事、歟、役供六人、藏人五位皆衣冠也、吉時戌刻云

云、先着袴、次供前物、其後入內、出居着始指貫云、兩人裝束例、薄物直衣、二重織物指貫蘇芳織單衣、濃袴、余白地雖可出、猶依一心不亂念佛不出、依事不可闕也、

十五日、辛晴、酉刻、念佛欲結願之處遲々、亥終結願

了歸宅、無事遂了、爲悅々々、

十七日、酉晴、鳥羽御念佛結願了、兩院還御云々、八條院聊有御不豫事云々、傳聞、賴朝出鎌倉已上洛之間、逗留伊豆國、秋中不可入京云々、此事甚不甘

心、天下勿滅亡、歟、藏人左衛門權佐親雅可奉行御即位山陵使之由催大將辭申了、

十八日、戊晴、大外記賴業來、召簾前談雜事、其次語云、院御領之中、京地等、被分獻太神宮以下宗廟靈社等云々、此事希異之中希異、凡非言語之所及、割華洛之中、施入神社事、何聖代例哉、國之衰微、朝之陵夷、只起自如此之政、此事左相府意見云々、彼大臣當時朝之宿老也、國之重臣也、而依此事顯其智慮之賤、可彈指々々々、又語云、爲定長奉行、一昨日內々被尋問云、於日吉社欲被行如法仁王會、而兒女子說云、先例被行如法仁王會之時、必爲君有不快之事云々、先々被行件會之後、兩三年之內、吉凶之事可勸申云々、此事又不足言歟、依如法仁王會、爲君可爲凶事之條、實不可觸耳々々々々、愚暗之世、吉還爲凶、善又似惡、可悲々々、又云、義朝者于今在囚關、而可被免罪、其間事可勸申之由、爲泰經奉行被仰下了、橘逸勢等有此例云々、可復本位之由可被仰下一歟、申其旨了云々、良久之後退下了、此三箇條依珍事所注置也、或人云、文覺聖人上洛、取在獄之義朝之



首可<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>鎌倉<sub>一</sub>云々、今日爲<sub>二</sub>頭中將奉行<sub>一</sub>、催<sub>二</sub>大將五節領狀<sub>一</sub>了、

廿日、<sub>丙</sub>晴、入<sub>レ</sub>夜參院、依<sub>二</sub>入<sub>レ</sub>夜參院御膳<sub>一</sub>、今日<sub>乙</sub>晴、又參<sub>二</sub>女

院御方、即退出了、今日、陰陽師兩人來、廣元、語<sub>二</sub>八條

院御惱御卜并天變等之間事、又召<sub>二</sub>施藥院使賴基<sub>一</sub>針<sub>二</sub>

齒下、女院御惱六借御座云々、仍彼御所欲<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御祭<sub>一</sub>、

仍可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>何陰陽師<sub>一</sub>哉之由令<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>女院<sub>一</sub>、仰云、廣元可<sub>レ</sub>

宜者、仍召仰<sub>レ</sub>之、

廿一日、<sub>丁</sub>晴、自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>女院御祈、以<sub>二</sub>天文博士安倍廣

元、令<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>天曹地府御祭<sub>一</sub>、三<sub>レ</sub>其用途賜<sub>二</sub>地一<sub>一</sub>戶主、<sub>成<sub>二</sub>政所申<sub>一</sub>也、</sub>

此日、定能卿來、傳聞、賴朝出<sub>二</sub>鎌倉城<sub>一</sub>來<sub>二</sub>着木

瀬川<sub>一</sub>、伊豆與<sub>二</sub>駿河<sub>一</sub>之間云々、邊<sub>二</sub>暫逗留<sub>一</sub>、進<sub>二</sub>飛脚<sub>一</sub>申云、已所<sub>二</sub>上洛

仕<sub>二</sub>也、但ひさはりても不<sub>二</sub>上洛<sub>一</sub>候也、先參河守範賴

是也、令<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>具數多之勢<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>參洛<sub>一</sub>也、雖<sub>二</sub>一日不

可<sub>レ</sub>返<sub>二</sub>留京都<sub>一</sub>、直可<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>四國<sub>一</sub>之由所<sub>レ</sub>仰含<sub>二</sub>也云々、

又聞、以<sub>二</sub>荒聖人文覺<sub>一</sub>申云、當時攝政藥<sub>二</sub>置平妻<sub>一</sub>留

洛、敢無<sub>二</sub>過怠<sub>一</sub>之上、君又如<sub>レ</sub>此思食、不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>異

議、爰又入道關白尤可<sub>レ</sub>偏<sub>二</sub>顧問<sub>一</sub>之人也、莊園少可<sub>レ</sub>然

之國<sub>一</sub>尤可<sub>二</sub>宛賜<sub>一</sub>云々、或說云、文覺頗有<sub>二</sub>不請之氣<sub>一</sub>

云々、然而取<sub>二</sub>在獄中之義朝首<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>來由之仰付云々、

傳聞、不思議人一定見存云々、見<sub>二</sub>其手跡<sub>一</sub>知<sub>二</sub>一定不

可說々々々、

廿二日、<sub>戊</sub>晴、故季行卿忌日也、仍女房相<sub>二</sub>具母堂<sub>一</sub>、密

密向<sub>二</sub>法性寺邊堂<sub>一</sub>、母堂<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>忌日<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>布施<sub>一</sub>取<sub>二</sub>諸大

夫、少々催遣如<sub>レ</sub>例、今日向<sub>二</sub>大將方<sub>一</sub>、

廿三日、<sub>己</sub>晴、入<sub>レ</sub>夜雨下、傳聞、攝政可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>賴朝賀<sub>一</sub>云

云、是法皇仰云々、仍修<sub>二</sub>理五條亭<sub>一</sub>、被<sub>二</sub>移住<sub>一</sub>、賴朝上洛

之時爲<sub>レ</sub>迎<sub>二</sub>新妻<sub>一</sub>云々、

廿四日、<sub>辰</sub>雨降、自<sub>二</sub>此日<sub>一</sub>仰<sub>二</sub>信助<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>不空羅索護

摩、仍余爲<sub>二</sub>精進<sub>一</sub>、

廿六日、<sub>壬</sub>晴、此日家所宛也、範季朝臣、能業等着行

之年預光長朝臣、御服所季長朝臣如<sub>二</sub>年來<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜觀性

來、

廿七日、<sub>癸</sub>陰晴不<sub>レ</sub>定、大外記師尙來依<sub>レ</sub>召也、召<sub>二</sub>藤

前<sub>一</sub>仰<sub>二</sub>文書之間事<sub>一</sub>、今日<sub>乙</sub>晴、所<sub>レ</sub>借召<sub>二</sub>之處文等申<sub>一</sub>可

進之由、云<sub>二</sub>才漢<sub>一</sub>云<sub>二</sub>器量<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>賴業<sub>一</sub>歟、定能卿

來、上西門院御發心地、昨日御平癒、昌雲僧正奉<sub>二</sub>祈

落、仍任<sub>二</sub>大僧正<sub>一</sub>了云々、

廿九日、<sub>乙</sub>晴、大將五節之間事、光長注進、大概就<sub>レ</sub>之

仰<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>了、依<sub>二</sub>略定<sub>一</sub>余時不<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>定文<sub>一</sub>、

九月

一日、<sup>丁</sup>陰晴不定、朝間寫心經如例、入夜參八條院、<sup>法皇</sup>爲訪御惱也、先院御方入見參、以養時朝臣仰云、依勞事不謁者、次參女院御方、謁女房、大外記師尙持參先日所尋召之書等、隨聞抄并雜例抄等也、<sup>各詔</sup>

二日、<sup>戊</sup>晴、入夜光長來、申五節之間事、召前仰他雜事等、五節事、光長爲大嘗會主基行事辨、頗依可指令、左京權大夫光綱、<sup>光長</sup>可奉行之由召仰了、今度依下官長寬例、存<sup>第</sup>宿署儀、又不書定文、今日八條院有御灸治、施藥院使賴奉參勸之、

三日、<sup>己</sup>晴、早旦範季朝臣來、示不思義事、參河國司範賴、<sup>件男幼穉之時、範季爲養育、仍相親云々</sup>上洛間、件事答不聞不知之由、頗有疑殆、然而事跡顯然、猶不可不信歟、余自今日欲服蒜、而口熱忽發、服藥停止了、

五日、<sup>辛</sup>陰、已刻、以後雨下、依御月忌、向堂如例、大將同之、入夜聊有病氣、<sup>戊</sup>刻、

六日、<sup>壬</sup>晴、今日猶不快、然而依口熱更發、召施藥院使賴基、加針於齒下并舌等、入夜心地殊發動、終夜惱亂、病之體似當初之所勞、事體不輕歟、自今夜

三ヶ夜修土公鬼氣之祭、陰陽師晴光、

七日、<sup>癸</sup>晴、今日所勞殊增、大略如不辨前後、仍卜筮、<sup>五日</sup>申本病之上邪氣之由、雖有可加持之議、依有溫氣、七ヶ日之中不能加持、

八日、<sup>甲</sup>晴、所勞同前、今日宰相中將爲訪來、以宿曜師晴仁、自今夜修鎮星供、自今日於春日社、始大般若讀經、<sup>覺乘法眼</sup>又以大藏大輔泰茂、修如法泰山府君祭、但依隙用代官、雖汗快出、溫氣不散、

九日、<sup>乙</sup>雨下、自今日請醍醐宗嚴閣梨、<sup>事弟子始</sup>尊勝念誦、<sup>引</sup>二日九時之行、出自經文之上、前々施効驗之故也、今夜、以在宣修泰山府君祭、<sup>法</sup>

十日、<sup>丙</sup>雨下、自去八日三ヶ日請佛嚴聖人受戒、<sup>每日給法印於山被始不動供</sup>

十一日、<sup>丁</sup>大風大雨、自今日以宗嚴阿闍梨修愛染王供、<sup>鳥羽尼上</sup>今夜、以權曆博士憲定修泰山府君、<sup>隆顯之</sup>自今日於春日社轉讀大般若唯識式論、<sup>沙汰</sup>

十二日、<sup>戊</sup>晴、早旦、請佛殿房令見所勞之體、善依見死相也、雖病重無恐之由、花山大納言、二



位中納言、刑部卿等來、晚頭大夫史隆職來、自今日、尊勝念誦今三ヶ日延引、

十三日、紀陰、今日、宰相中將來、以觀性法橋修文殊八字供、二七日以晴暹阿闍梨修佛眼供、二七日於中堂以久住者三人、藥師經讀經七ヶ日、於無動寺以久住者一洛又念誦二七日、於小比叡御社仁王講二七日、已上法印之沙汰、依病可上表之由、內々申院、其次以右大將被任大臣なんや之由、同以奏聞、不承分明之勅答、

十四日、庚晴、早旦、法印被下於山、雖被示可逗留、百日入堂、依日數不滿、示可被歸山之由、此間奉始如法不動尊加持衣木之後、申刻被登山、自今夜以猷勝阿闍梨修不動供、即居物付渡邪氣、雖溫氣不散、汗頻發之上、占去々所申偏邪氣也、仍過七日所加加持也、自今夜以行珍已講修尊星王供、道沙汰、今日、尊勝念誦結願、給布施、定能卿來、語院御氣色之趣、定長說云々、如狀、似有天許、余內心不信之、知法皇御心之故也、仰上表事於光長、

十五日、辛晴、法皇自今日御參籠日吉社、供奉之輩

淨衣云々、可草進表之由、仰藏人權少輔親經、上臈之儒者雖多、有所思仰親經、清書事仰伊經、光長參上、申上表雜事等、於大原來迎院、始藥師供、本成房、於二日野藥師堂、始同供二壇、又供養尊勝陀羅尼千反、沙汰、自今日以實殿阿闍梨、始愛染王供、於日吉社仁王講七ヶ日、今夜、大原聖人本成房來、數刻談法文、

十六日、壬晴、今日、右大辨兼光來、親經可草進表之由、領狀、伊經稱病重、加催猶稱重疾、疑無衣裳、依行成卿當座清書之例、刑部卿賴輔卿可清書之由、仰遣之、有可參之報、件卿手跡甚異様、依無他人之可、仰慈用此人、且入道關白之時度々勤此役云々、今日早旦受戒、本成房、又於如法佛前一七ヶ日間、修不斷佛眼念誦、觀性事弟、

十七日、癸晴、今日修靈氣祭、祭產健喉、大上公祭、在宣、等、今日宗殿阿闍利進祕藏之護、經之類、自今夜、即令修三件供、以病愈爲期云々、鳥羽尼、此日、於日吉社被修如法仁王會、致國家之費云々、導師證憲法印說法、又如說云々、余及大將、甲斐裝各一帖、獻行事所、昨日所獻也、日吉、按、導師執當隆雲等蒙

賞云々、

十八日、甲晴、是日、上辭大臣及兵仗之表、權右中辨光長朝臣行之、藏人宮內權少輔親經草之、刑部卿賴輔卿清書之、使右近權少將親能、定能編干、五位也、大將及賴輔卿之外不招他卿、表函新造之、足、無花作者給祿、白大褂一領、四清書依公卿不給祿、先使圖書頭在宣衣冠、勘申日時、覽之見了返給、其後儀始、余依疾厚、猶不能臨、應中、用以如在之禮、臨清書欲終之期、大將入、應中、代余表函、招使給之云々、余依不臨、其席不能委記、可見大將記、後聞、檀紙并結緒之帖紙等、以職事經奏進之云々、或子息或親昵殿上人、若奉行家司所持參也、未聞以職事傳獻例、光長之所行忘故實、大將不答之、又未練之所致也、客亭不置、脇息硯宮、先例或置或不置、共無其難、是行成今度件硯宮蓋盛筆硯料紙等、置清書公卿前、例也、仍彌兼撤之也、其外全不異尋常之儀、但母屋際懸簾垂之、爲余表、在簾中之由也、今日不領勅答、又不返給表、依疾上表之時、先例如此、今夜須申吉書、余病間忘却、光長又不申沙汰、然而非後日可申之事、仍空以默止、又隨

身等給腰差、可返遣本府、而左番長忠武之外一切無隨身、一人給之頗失禮儀之上、光長申云、依御惱上表、何必今夜給之、雖理不當隨宜從此詞耳、

表草案、

臣某言、黃鵠之出、春谷、誰責、凌霄之翮、螽母之祭、秋婆何求、助月之光、非據之任取、譬如斯、臣某誠惶誠恐、頓首々々、死罪々々、臣聞、大臣者、上應天心、下叶民望之官也、群職因茲理亂、庶政爲其弛張、是以漢朝升平之時、匡張仕兮致其治、唐室貞觀之昔、房杜登兮贊其業、誠可拔駿茂而授之、豈敢課無怯而致之、臣竊冠朝廷之殊弊、忝履函相之高位、家有餘慶、叨雖荷天子之寵、身無遠慮、未能問漢丙之牛、加之、常懷宿病、匪迫夙興、兢々無聊、踐冰而春幾翅、區々多謬、○石上恐、石而年漸舊、就中散之七不堪焉、臣皆稟性、楊大尉之三不惑矣、臣皆謝、嬰休去之心於焉差催、然猶君恩其難報盡、何遽逃名、臣齡未及強仕、無由乞身、爲之密勿、淹引時月、於是旬日以來、風霧殊劇、病源湛兮忽深、類于海湖之浚、

日、命葉薄兮彌悴、危於梧楸之待霜、況乎、粗聞雲物之奏變、正當星位之可慎、臣之罷退誠在此時、夫休明之代、先聘隱士、顯懿之朝蓋招遺賢、洞底雲暗、綺里季之歸山、湘中水清、丹崖翁之在宅、求而用之、庶績咸熙、伏冀、鴻慈曲下、鳳銜、早弭大名於槐鼎之任、俾養餘生於藥爐之前、兼又認少翼燕之才、早賜羽衛之備、事惟殊常、彌爲非分、隨身兵仗宜令歸歟、然則、收王言之如絲、更賜續命之一縷、述臣心之匪席、閑臥不死之床、不耐懇款憂懼之至、謹拜表陳請以聞、臣某誠惶誠恐、頓首々々、死罪々々、謹言、

元曆元年九月 日

從一位行右大臣藤原朝臣上表

今夜、以天文博士廣基修填星祭、先日以同人雖修同祭、頗依不法所重修也、又以主稅助晴光修泰山府君祭、光長、今朝右大辨兼光來、今夜有大除目云々、爰知任大臣事決定、不可有其沙汰也、十九日巳晴、早旦見聞齋、前中納言朝方、朝方無其參要人也、議左中將定能、參議左大辨經房等任權中納言、其闕元一、實守辭退之所、須被任其代一人、其仁之處、利任二

人、已十中納言歟、近代不吉例也、定能雖有道理、強不被忍任、有何愁、經房年齒未至、參議勞甚淺、早速恩爲朝家、何要哉、偏依定長一人之辨官御用、不顧任官失理之難、日月爲一物、不祕其明、天子爲一人、不枉其法、已背此大意歟、參議基家親宗、辨官轉任如次、定長任右少辨、兼三、光房其身短命而雖不昇貫首八座、其子三人皆兼三事、就中、經房先長器量堪其用、子息繁昌勝一族歟、此外事等非理無道、雖不可勝計、不能具錄、此日、法印下京、入堂雖不滿百日、依所勞危急所招下也、以中道房晴退爲手代、令滿謹廉日數、於中堂供花三七ヶ日者、昨日滿了云々、自今夜所被住京也、入夜隆職來、余受病以來、每日隔日之參、敢無闕怠、無雙之者、可謂過分之忠節歟、天文博士廣基來云、月犯東井、大臣可慎云々、余上表已了、行懸其殃、自今日於吉社始大般若經讀經、經入、自今日藥師供二七ヶ日、并於根本中堂百座仁王講等、隆職宿禰悉沙汰云々、今日、春日社奉獻馬一疋、又進納手筥一合、

廿日、丙晴、權右中辨兼忠爲父納言使爲訪來、彼



納言、日來參龜鞍馬、明後日可出京云々、先日所始不動明王、終造立之功、今日供養、法印爲導師、自今日於余持佛堂法印被修法華經供養法、有所思所示付也、

廿三日、酉晴、二位中納言爲訪來、大將謁之、今夜於山上、以中道房阿闍梨晴邇令修冥道供、法印沙汰也、自今夜始修不動法、阿闍梨此法印也、伴僧六口、取拂常出居及客亭爲壇所、以其北庇爲承仕宿、於事有便宜、余遇初夜時、即於其所加々持、過時先例如此、於日吉十禪師法華八講、於八王子仁王講、今日以寶嚴阿闍梨爲使、令參詣春日社、進小物、仰可啓謝意趣之由、其趣者、余自幼年之昔、奉係志於大明神、於其深淺者、神慮定有照鑒、凡所志者、偏社稷之安全也、政道之反素也、或告文、或願書錄事趣、致啓白及度々爲世爲君敢無非常之心、無奸濫之思、何因天資之受此重惱哉、祈願之趣、若不叶時運者、可有靈告之由、兼以祈請、縱雖無其告、何及冥罰哉、若又、天魔妬其心之貞直、懷害心欺、然者、大明神何不致其助哉、本性之所受雖不惜命、至今度者、若非定

業者、必蒙神德、欲全餘命、故何者、偏依有非常曲折之心、當其附之由、遠近親疎謗家怨敵、必可名稱普聞也、此條深可痛存也、暫休松柏之筭、欲顯清潔之性、若又爲定業者、必可遂順次往生之望也、立爲先二親、可離生死之願之者、只鄙生緣也、三寶其捨諸哉、雖無上菩提之願、非大明神和光同塵之利益者、難遂其願歟、見當二世之願、旨趣如此、門業照覽、速蒙冥德者、彼寶嚴阿闍梨、多年爲故殿御持僧之上、粗知余意趣、又爲東寺僧、旁依得便宜所差進也、仰含子細之處、拭淚隨喜、信心愛顯、可憑々々、

廿四日、戌晴、大外記、大夫史等來、大將謁之云々、去夜心神聊落居、佛神之驗歟、有憑可信々々、就中、啓謝春日趣、若有納受歟、

廿五日、亥晴、大將聊不例云々、昨日所惱同前、

廿七日、丑晴、所惱又重、苦痛難忍、今曉追物氣了、邪氣之體殊不見之故也、智詮阿闍梨自山家歸來、仍令誦妙經一部、

廿八日、寅晴、今日又以智詮令誦經、心神頗動搖、似可渡邪氣、仍自今夜又渡物氣、自今日爲

藤中納言沙汰、修不空羅索供、

廿九日、卯晴、邪氣快渡、然而神心猶無減、日數淺之故也、此日、以在宣令行大將軍祭、

## 十月

一日、丙晴、自今日修法延行、辰刻、壇所、火出來、壇外無燒物、本尊免餘烟、可謂驗佛、件佛、故殿年來御持佛也、又此

家天井甚下、其所又狹小、而不及大事之條、實不思議也、抑、近衛院御惱之時、青蓮院座主動、仕藥師法之間、有、如今日事、寸分無相違云々、彼度御藥早愈、人稱吉祥云々、今度阿闍梨彼孫弟也符合吉例、可悅々々、

六日、辛晴、今夜被行除目、權中納言賴實任左兵衛督、又受領少々被任、其外大嘗會御祓可獻成功之輩、衛府廿餘人所被先任也、朝家之政、其德衰微、以之可察神鏡劍璽事曾無其沙汰、強行即位大祀之禮、自本滅亡國土、人民彌致其費、是可叶天意哉否、如何、

七日、壬晴、早旦、佛殿聖人來、其後加少灸治、今日、花山院大納言來大將方、

八日、癸晴、藤中納言定能、招內庭之、新中納言經房等、

不獨之、以人謝道、又爲訪來、今日之發宜於昨日、自

今日又延引修法過初夜時、今日又加灸治三ヶ所、

今日、天文博士廣基、密々持來奏案、金水火之三星相

互犯之、一所倚合、未曾有之變云々、其占文立王女

主慎之外偏兵革也、

九日、甲陰晴不定、今日又加灸治、此日依吉日、初

欲浴之處、無力依不可堪、只洗手足不浴其身、

身、

十三日、戊傳聞、爲教盛卿等、在長門國之源氏菰

敷、被追落了云々、又平氏五六百艘着淡路云々、

十四日、己、本命日泰山府君祭如例、依所勞都狀不

加署、今夜逢初夜時、依明曉可結願也、信心頗發、

傳聞、去比竊盜等亂入禁中、候朝餉之女房等衣裳

悉以剝取了云々、未曾有々々々、

十五日、庚陰、日中晴、寅刻結願修法、余過其時、於

同所有御加持、尋常之儀、後夜時御加持、雖無發

願之詞、結願之時有之、又加五大願、御加持了被歸

了、于時天曙、送布施於本房阿闍梨、綾被物一重、布

施一襲、番僧各一襲、以職事經奏爲使、其後以基

輔爲使、送牛一頭、依有法驗、殊所加送也、以  
 嗣示其由、始此法之後、聊有苦痛之隙、修法三七  
 夕日之中、大略屬減氣了、豈非法驗哉、何況、今晚  
 女房見靈夢、委細不違筆端、事趣非當此所惱一  
 事、拂一切怨敵、可成就大願之由也、殊勝々々、其  
 中有珍重事等某別紙、雖末代法驗尤新、可貴々々、  
 今日依還身日不加灸治、晚頭、招法印語夢想、  
 頗有悅氣、又自身及房中之輩、各有感應之夢想  
 等、然而不及申出之處、有此御夢、於今者散齋  
 陶了云々、後聞、去夜、右少將伊輔來大將方、任例  
 乞半臂下襲等云々、五節大嘗會御禊等指合之上、父  
 所勞殊重之間、無他子看病非一事二事故障旁多、  
 於今度者無計略之由辭退了、雖有限之事、故障  
 之時辭退、又先例也、每度先々勤此事、今度眞實依  
 無計略、始出故障也、事非矯飭者也、今夜始浴、  
 如形、其後無別事、

十六日、辛晴、右近廳頭清景來云、御禊步陣裝束、近衛  
 次將等皆悉辭退、各以先日仰雖催申、猶被申力  
 不及之由云々、先日年預將此由、仍以大將命置所備也、先例將不勤之時、  
 何樣被行哉之由、問清景可申之由仰了、仁和寺

宮、昨日被授灌頂於仁降律師、成隆公卿待臣多以參  
 入云々、自八條院被催遣云々、今日引布施云  
 云、公卿已下皆束帶云々、今日又加少灸治、

十八日、西晴、泰山府君祭如例、此日、請高野穀斷  
 聖人、行勝房受戒、件上人、不動持者、效驗殊勝之人云  
 云、且可結緣之由、雅賴卿所勸進也、即申仁和寺  
 宮所請送也、見上人之爲體、實以無相也、尤足歸  
 敬、於病者、先是雖有減、爲結緣令受戒也、野  
 劔一腰入錦袋爲戒布施、法印被示河內國法性寺  
 領事、仰光長內々仰遣賴盛卿許、有可致沙汰  
 之報、

十九日、甲晴、入夜新藤中納言定能卿爲拜賀來申、  
 次職事兼親衣冠示出行之由、納言欲退出、內々招入  
 臥內、依病謁之、前駈六人、諸大夫云々可其息少將親  
 能爲共人、無他共人云々、慶忠來夜居、

廿日、乙晴、廳頭申云、步陣裝束、近衛中少將所役也、  
 不勤仕例、古來未曾聞、即注申其由、有次將散  
 狀、即副別使者、遣御禊奉行職事親經之許、仰可  
 奏聞之由、又本府幄成功之間事、同以申之、歸來  
 云、早可奏聞者、



廿一日、丙晴、家職事國行保行等、被<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>催女御代前  
驅云々、仍內々觸<sub>二</sub>遣奉行經仲之許<sub>一</sub>、依可<sub>レ</sub>動<sub>二</sub>大將<sub>一</sub>、將前<sub>レ</sub>也、可<sub>二</sub>沙  
 汰免之由申<sub>レ</sub>之、法印被<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>座主許<sub>一</sub>了、其次先被<sub>レ</sub>來、  
 廿二日、丑晴、法印來、被<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>座主所望之事等<sub>一</sub>、辭<sub>二</sub>法  
 務可<sub>レ</sub>讓之由云々、其事不可<sub>レ</sub>叶、辭<sub>二</sub>法務可<sub>レ</sub>舉<sub>二</sub>僧  
 正云々、法印云、所<sub>レ</sub>示爲<sub>二</sub>本意<sub>一</sub>、又雖<sub>二</sub>大切<sub>一</sub>、又非<sub>二</sub>惡  
 望<sub>一</sub>、世間<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>事不<sub>二</sub>執思<sub>一</sub>之故也、於<sub>二</sub>法務者不可<sub>レ</sub>叶、  
 又無益云々、奈其情正決定公訴、又爲<sub>二</sub>道理<sub>一</sub>歟云々、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>然々々、可<sub>レ</sub>  
 供<sub>二</sub>奉明日行幸<sub>一</sub>之由催<sub>二</sub>大將<sub>一</sub>云々、申<sub>二</sub>所勞之由<sub>一</sub>  
 了、又頭中將同觸<sub>二</sub>申同旨<sub>一</sub>了、明日可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>除日<sub>一</sub>之  
 由有<sub>二</sub>風聞<sub>一</sub>、

廿三日、戌晴、但時々陰、本府事功事、示<sub>二</sub>子細於奉行  
 職事親經、次第不當事等出來之故也、近代職事勿論不  
 足<sub>二</sub>言々々々、返事有<sub>二</sub>披陳旨等<sub>一</sub>、全不當、

廿四日、己陰晴不定、時雨間濕、大將御禊供奉雜事  
 等、終日致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、大略沙汰調了、又以<sub>二</sub>日記等<sub>一</sub>、教<sub>二</sub>訓  
 子細經房卿、明日、大將可<sub>二</sub>騎馬供送<sub>一</sub>之、

廿五日、庚陰晴不定、拂曉、大將渡<sub>二</sub>藤中納言定能卿  
 樋口大宮亭、女房相具余依<sub>レ</sub>疾不<sub>二</sub>相具<sub>一</sub>故也、大將女  
 房不<sub>レ</sub>向、無<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>之故也、已<sub>二</sub>二點參內了云々、于<sub>レ</sub>時

他人未<sub>レ</sub>參、攝政其後被<sub>レ</sub>參云々、子細在<sub>二</sub>大將記<sub>一</sub>、節下  
 內大臣實定、御前次第司別當右衛門督家通、次官式部  
 權少輔範光、御後次第司長官右兵衛督隆房卿、次官兵  
 部權少輔平親實云々、裝束司長官新中納言經房卿、次  
 官右中辨光長朝臣、左大將代<sub>二</sub>源宰相中將通親<sub>一</sub>云々、  
 大將不<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>染裝束<sub>一</sub>、余重惱不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>他事<sub>一</sub>之故、兼不  
 致<sub>二</sub>用意<sub>一</sub>、滅氣之後僅七八日、不可<sub>レ</sub>叶之上、世上之  
 爲體、不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>美服之興<sub>一</sub>者歟、及<sub>二</sub>深更<sub>一</sub>大將歸來、語<sub>二</sub>  
 今日之儀式<sub>一</sub>、

廿六日、辛晴、大將猶來語<sub>二</sub>昨日事<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>殊違例<sub>一</sub>云々、節  
 下不<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>御輿<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>行鼓<sub>一</sub>云々、近例歟、大將渡<sub>二</sub>御棧敷<sub>一</sub>之  
 時、取<sub>レ</sub>弓如<sub>レ</sub>常云々、節下、頓宮幔門外座<sub>二</sub>南面<sub>一</sub>云々、  
 大將已下於<sub>二</sub>西幔門外<sub>一</sub>立替、御輿經<sub>二</sub>公卿幄南東<sub>一</sub>御<sub>二</sub>  
 々膳幄<sub>一</sub>、通親卿先示<sub>二</sub>合大將<sub>一</sub>、々々答、又頭中將通資朝臣、豫  
 問<sub>二</sub>大將<sub>一</sub>云、入<sub>二</sub>御幔門<sub>一</sub>、先例時刻至之時、先御<sub>二</sub>々膳幄<sub>一</sub>  
 者例也、而攝政遙供<sub>二</sub>奉御後<sub>一</sub>相待、彼御參可<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>歟  
 云々、大將答云、刻限至之時、先御<sub>二</sub>々膳幄<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>先  
 例、至于<sub>二</sub>皇后同輿之時<sub>一</sub>者無<sub>二</sub>此例事<sub>一</sub>、理又須<sub>レ</sub>御<sub>二</sub>々  
 膳幄<sub>一</sub>、然者何必待<sub>二</sub>彼參<sub>一</sub>、早可<sub>レ</sub>御<sub>二</sub>々膳幄<sub>一</sub>歟者、仍渡  
 御云々、御<sub>二</sub>々膳幄<sub>一</sub>之時、寄<sub>二</sub>御輿於西面<sub>一</sub>、異<sub>二</sub>去年<sub>一</sub>

去々、長元以後多西面也、又北山抄所載如此、而承平天慶下御自東面、安和寄西面、小一條大臣難之、以之案之、上古寄東面、中古以來西面歟、而去々年復古儀歟、今度又逐近例、今日節下作法頗未練之氣云々、又公卿列在西幔門外、而實家卿入幔內、即退出、此作法不足言、賴實卿又同入幔門、渡御々々、禊帳之時、例立之後早出云々、後日定能卿語云、賴實示定能卿云、今日無幔內之列如何、定能卿答云、有外例之時無內列、有內列無外列、今日已有外列、何重有內列哉、賴實開口云々、識者之不知先例如何、

廿七日、壬晴、頭辨光雅來云、今年五節無勤仕御覽之人、右大將相搆可勤仕者、申無計畧之子細了、入夜以書狀重仰云、遣基輔朝臣之許之狀也、猶可廻秘計者、申猶無術之由了、此責甚無謂、如何々々、廿八日、未晴、入夜藤中納言定能卿來、御視日事等、公卿列事在廿六日記、又語云、清暑堂御神樂可候末拍子之由被仰下了、其子親能可筆策、父子勤仕一座之役、尤足自愛、加之、故季行卿其身爲散三位、勤此役、本拍子公能公也、子時大納言右大將、今又定能備納

言勤仕同役其役雖同、其官已高、又今度本拍子、內相府即公能息也、彼者大納言右大將也、是者內大臣左大將也、云々、本云々末、其雖繼父、其職高於父、自愛之處有與有感、云々所云之旨、尤可然々々、此日、橘以政、橘氏長者、來余問云、散位之人有勤仕帶是定之例哉、申云、宇治左大臣是也、此例甚不可、然又仰云、可舉誰人之由令存哉、申云、可隨仰、但大將殿令當仁給歟云々、此事無異議事也、然而此男爲尾籠之人、仍爲聞所申所問也、但隨重仰可上舉狀之由仰含了、

廿九日、甲陰晴不定、光雅朝臣送札云、御覽事猶可勤仕者、答以使者可申之狀了、此事尤有恐、仍內々可申入歟、疎遠之身愁在朝廷、於事損面目、以非預誼責、生涯彌可厭歟、雖存此理不遂其事、可悲々々、今日子刻、余家女房生大將之子、女子、卅日、乙晴、早旦、招法皇近臣藏人右少辨定長、謝辭退御覽之恐、入夜與大將居改居所、本之大將之居所、丈六佛常晴御座、五節之神事雖不密、與佛同居、非無憚之上、女房之中聊有夢想云々、仍所居改也、此日、春日百日奉幣終日也、仍行水又修祓、依



灸治不<sub>二</sub>遙拜<sub>一</sub>、陰陽師天文博士廣元也、依<sub>二</sub>先日之召<sub>一</sub>持<sub>二</sub>來乙巳占<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>不審所<sub>一</sub>召見也、如<sub>レ</sub>案相<sub>二</sub>違先日之奏案<sub>一</sub>、仍余竊問<sub>二</sub>子細於廣元<sub>一</sub>、々々申云、此事極失錯也、只任<sub>二</sub>先達之奏案<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>載、密奏令<sub>レ</sub>獻、尤至恐也、依<sub>二</sub>先日之仰<sub>一</sub>、今披<sub>二</sub>此書<sub>一</sub>之處、已有<sub>二</sub>相違難<sub>一</sub>、通云々、失錯々々也、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>申盡<sub>一</sub>云々、此事爲<sub>レ</sub>人甚不便、仍不<sub>二</sub>口外<sub>一</sub>、公家不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>咎<sub>二</sub>如此之事<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>道之陵遲<sub>一</sub>、此事竊加<sub>二</sub>恐案<sub>一</sub>、已相<sub>二</sub>兼天文人文之徵<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>奇々々、本書文云、

金水共出<sub>レ</sub>東、東方國勝、西方國大敗云々、

此文爲<sub>二</sub>官兵<sub>一</sub>、尤爲<sub>二</sub>要須<sub>一</sub>、他文等皆雖<sub>二</sub>不吉<sub>一</sub>、此文猶爲<sub>二</sub>吉祥<sub>一</sub>歟、

廣元奏案云、

金水共出<sub>レ</sub>東、東方國大敗云々、

此文爲<sub>二</sub>官兵<sub>一</sub>、尤咎徵改<sub>二</sub>本書之吉祥<sub>一</sub>、載咎徵於<sub>二</sub>密奏<sub>一</sub>、偏非<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>人文徵<sub>一</sub>、即天文相兼<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、廣元爲<sub>二</sub>天文之正流<sub>一</sub>、尤雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>貴頗無<sub>二</sub>稽古之聞<sub>一</sub>、今之越度即不<sub>二</sub>習學<sub>一</sub>之所<sub>レ</sub>致也、

十一月

一日、丙晴、定長爲<sub>二</sub>院御使<sub>一</sub>來、猶被<sub>レ</sub>責<sub>二</sub>御覽之事<sub>一</sub>、勿論々々、然而不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>申<sub>一</sub>領狀、只奏<sub>二</sub>恐歎之趣<sub>一</sub>了、計畧無<sub>二</sub>其力<sub>一</sub>之上、事又爲<sub>二</sub>非據<sub>一</sub>、何爲々々、

二日、亥晴、自<sub>二</sub>女院<sub>一</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>云、院仰云、御覽日童女裝束事、右大臣所<sub>レ</sub>申之永久例、實難<sub>二</sub>獻止<sub>一</sub>、但院中無物、又有<sub>二</sub>指合事等<sub>一</sub>、仍可<sub>レ</sub>調<sub>二</sub>賜一<sub>一</sub>具、早可<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>申色目<sub>一</sub>之由、可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>遣彼大臣之許<sub>一</sub>者云々、即付<sub>二</sub>御使<sub>一</sub>注<sub>二</sub>進色目<sub>一</sub>、此事一昨日招<sub>二</sub>定長<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>子細之次<sub>一</sub>、永久二年故殿<sub>大臣</sub><sup>子時內</sup>被<sub>レ</sub>獻<sub>二</sub>五節<sub>一</sub>之時、自<sub>二</sub>白川院<sub>一</sub><sup>即出家之後、又無<sub>二</sub>要后<sub>一</sub></sup>被<sub>レ</sub>調<sub>二</sub>獻<sub>一</sub>、御覽日童女裝束、若難<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>御覽<sub>一</sub>者、任<sub>二</sub>彼吉例<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>院可<sub>一</sub>調<sub>二</sub>賜<sub>一</sub>之由、雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>所望<sub>一</sub>、事體似<sub>二</sub>逆鱗<sub>一</sub>、仍不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>申出<sub>一</sub>之由、內々語<sub>二</sub>定長<sub>一</sub>、而伺<sub>二</sub>招容<sub>一</sub>奏聞云々、仍有<sub>二</sub>此勅命<sub>一</sub>歟、凡今度御覽譴責之次第、不當之上失<sub>二</sub>面目<sub>一</sub>、仍致<sub>二</sub>固辭<sub>一</sub>、而若頗有<sub>二</sub>優恕沙汰<sub>一</sub>、誇<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>此營<sub>一</sub>、若又猶<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>無道之責<sub>一</sub>者、更不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、存<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>出彼例<sub>一</sub>之處、不慮有<sub>二</sub>此沙汰<sub>一</sub>、仍恐可<sub>レ</sub>經營<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、但可<sub>レ</sub>調<sub>二</sub>預<sub>一</sub>〔一〕具<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、奇特之中奇特歟々々々、未曾有<sub>二</sub>獲麟<sub>一</sub>、殊勝第一之事也、可<sub>レ</sub>彈指<sub>二</sub>々々々<sub>一</sub>、然而近代之事、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>、只奏<sub>二</sub>恐悅之趣<sub>一</sub>許也、今日、源中納言雅賴卿來、談<sub>二</sub>世上事<sub>一</sub>、其次

〔云〕、或小僧<sup>通達東國之者云々</sup>、語云、攝政之邊人、謾余事於賴朝、因之先日奏聞之大事、默止了云々、余聞如此事、可<sup>レ</sup>悲々々、推舉事非所好、謾言何可<sup>レ</sup>痛哉、只家之前途、國之重事、懸田夫野吏之詞之條、悲而有餘者歟、

三日、<sup>戊</sup>晴、自女院被仰云、自院乍<sup>二</sup>具可<sup>レ</sup>調給<sup>一</sup>云々、尤畏申之由申了、攝政之許以宗雅朝臣<sup>一</sup>觸可<sup>レ</sup>被改參、入夜、下仕裝束、<sup>先日申了、有承諾</sup>於御覽日<sup>一</sup>之由了、

四日、<sup>丑</sup>陰、及<sup>レ</sup>晚雨下、藤中納言定能來問<sup>二</sup>着陣事<sup>一</sup>、今日未刻、大將不豫、問<sup>二</sup>遣陰陽師等之許了<sup>一</sup>、宗雅來示<sup>二</sup>攝政返事云、早可<sup>レ</sup>調獻<sup>一</sup>者、注<sup>二</sup>奉色目了<sup>一</sup>、法印被<sup>レ</sup>向<sup>二</sup>白川了<sup>一</sup>、依<sup>レ</sup>逢<sup>二</sup>明日故座主遠忌也<sup>一</sup>、

五日、<sup>寅</sup>陰、風吹、彌勒講如<sup>レ</sup>例、依<sup>二</sup>所勞餘氣不快不<sup>一</sup>參、大將又依<sup>二</sup>神事不參、今日初雪紛々、

六日、<sup>卯</sup>晴、傳聞、法皇御惱不快、是御不食增氣云々、七日、<sup>辰</sup>晴、此日、大將會<sup>二</sup>三社奉幣、并國司除目等云<sup>一</sup>云、

九日、<sup>午</sup>晴、自<sup>二</sup>今夕寄宿大將亭<sup>一</sup>、<sup>日來余居所也</sup>、是當時居宅有<sup>二</sup>丈六堂、而自<sup>二</sup>明日三ヶ日神事之故也<sup>一</sup>、

十日、<sup>未</sup>晴、依<sup>二</sup>灸治亂、自<sup>二</sup>河原立<sup>一</sup>幣、神齋如<sup>レ</sup>恒、十一日、<sup>申</sup>晴、此日、春日祭也、右少辨定長爲<sup>二</sup>行事下向、相<sup>二</sup>具侍五十人、以<sup>二</sup>榮曜爲<sup>一</sup>事云々、近衛使右近少將伊輔也、先日乞<sup>二</sup>陪從半臂下襲於大將、然而旁依<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>故障等所辭退也<sup>一</sup>、晚頭、花山大納言被<sup>レ</sup>來、余謁<sup>レ</sup>之、

十二日、<sup>酉</sup>晴、此日、梅宮、率川等祭也、梅宮奉幣又自<sup>二</sup>河原立<sup>一</sup>之、此日、臨時除目云々、

十三日、<sup>戌</sup>晴、早旦歸<sup>二</sup>南宅、此日召<sup>二</sup>集下仕所望之輩、撰定之童女同前、

十四日、<sup>亥</sup>陰、晴不定、此日、大外記賴業相<sup>二</sup>具其息直講良業來、今日同所<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>初參大將殿也云々、召<sup>レ</sup>前見<sup>レ</sup>之、

十五日、<sup>子</sup>晴、拂曉向<sup>二</sup>北家、依<sup>二</sup>今日大原野祭也<sup>一</sup>、<sup>紙子</sup>見<sup>二</sup>自<sup>二</sup>川原立<sup>一</sup>幣如<sup>二</sup>先々入<sup>一</sup>夜女房來、自<sup>二</sup>今日五節之間、可<sup>レ</sup>經<sup>二</sup>廻此宅之故也<sup>一</sup>、

十六日、<sup>丑</sup>此日、五節參入也、公卿三人、<sup>右大將、左兵衛督、宗云、受領二人、但馬守範能、紀伊守範光、</sup>右大將御覽、左兵衛督參入、自余三人參入、御覽、共不<sup>レ</sup>勤<sup>二</sup>仕之、右大將雖<sup>レ</sup>無<sup>二</sup>參入之儀、依<sup>二</sup>長寬<sup>一</sup>、<sup>余獻五節之例、</sup>例、童女下仕等着<sup>二</sup>裝束參

入、但舞姬不着裝束、舞姬出車、左少將親能、殿上人、童女、君達、

院殿上、下仕、前馬助國、行職事也、源仲盛、藏人五位、奉仕童女下仕等

裝束雖爲密儀、花山大納言、新藤中納言等來訪、各

布衣也、戊刻、自八條院、賜童女裝束一具、童女裝束、色目等在

左、薰物、入、薰物、入、打亂薄樣廿帖、今案、於、薄樣、者、內、可、

下、御使別當右馬權頭基輔朝臣、行、依、無、其、原、雖、有、

家、出、家、出、門、邊、相、具、所、來、也、是、依、有、先、例、也、先大將、出、客

亭、不、及、置、膳、息、等、大、將、直、衣、冠、也、大奉行家司左京

權大夫光綱、五位家司也、本奉行右中辨光長也、而依、出、逢中

門邊、歸、昇申女院御使參之由、大將仰可令敷座、

并可取裝束之由、次職事二人、國行、各取裝束一

具、入、自車寄戶、大將前長押上、次又職事一人、

取圓座敷前廣庇、次大將召人、光綱參入、仰云、

可召御使、光綱退下告召之由、次基輔朝臣進候圓

座邊、次前皇后宮亮季經朝臣、殿上、取祿賜御使、女

東、依、東、也、二拜也、基輔取祿降、自中門內方進、砌外二拜退

下、衣冠之時、一拜敷、次職事二人出來、初、取童女裝束一

世北面出居、其後薰物薄樣等內々所持來也、於薰

物者具裝束可置大將前也、兼不知有薰物

之由、仍不仰其由、奉行者可存此旨也、不足言

歟、下仕裝束二具、余調之、內々儀也、色目在左、先

是、舞姬裝束忠親卿調送之、使者藏、人五位、公時送童女扇、

御覽日之由今日送之、雅賢儀、參入之日之由未見、後聞、這五

節所云々、若裝束之間、大納言在其所、余在障內之十五字注、

頭、定長送下仕扇裝束、來集之後、童女下仕等着裝

束、依、無、其所、於、上、邊、部、座、令、着、童、裝、各着丁參內、依密

儀、出車侍等着布衣、相副之、其後大納言被歸了、

六人、四點、大將着直衣、堅文織物、指、色、指、實、參、內、中、都

冠如恒、曉天歸來、語今夜子細、攝政被出帳臺、扈從

公卿實房與大將只二人云々、

今夜五節所着力櫛、先例云々、

童女二人、一人行和女、大將女房、舞姬、前寮頭、君達、

下仕二人、女房所、進也、

十七日、寅、晴、御前試、并皇后宮淵醉云々、大將先日

有淵醉之儀、親雅、領狀先了、而入內忽停止、於本所

持別院、可、有、淵、醉、之、由、風、聞、不、可、依、內、裏、本、宮、尤

可參之處、遼遠之間、於事有煩之上聊有恙、爲明

口出仕今日盤居、仍不參入、今日以札觸奉行親

雅了、自今朝五節所出打出、去夜不出、故實云

云、裏增紅梅掛五領、濃紅梅單衣、他所皆白掛云々、

此日於攝政直殿、被、行、脫、叙位儀云々、



十八日、癸晴、此日、踐祚大嘗祭也、先有童女御覽事、  
寬治江紀云、大嘗會年無御覽云々、按先例、寬和長元承保久志無之、長和永承治曆有之、寬和以後除久壽之外皆有之、但無御覽者、皆由結云々、長元先帝御事、承保上東門院御事、久壽近衛院御事、長元例云々、於寬和、者無指由緒、歟、余察之、神護院在、外公、豈非三朝家之歟、此先帝之心、蓋經重不辨、況寬和例無殊、故又爲吉例、加之、天下衰弊之比、過差之遊興、太以無所據、御覽及酒醉者、非三神事、非儀式、只爲儲、與實也、旁案、道、理、今年御覽事不可、然後製有御覽、爲後代、聘注之、已刻、自院賜童女裝束二具、一面目可足、御使別當宮內卿經家朝臣、水久長實卿爲御使、經家爲一族、可爲吉例、歟、大將出客亭、光綱相、逢御使、申事由、置裝束、召御使等之儀、同八條院御使、次光綱取祿、女親束、宴唐衣、湯袴等也、獻之、大將取訖、之、乍居目御使、經家朝臣參進、大將頗居寄被之、經家取之、降庭再拜退出、抑、自授祿是先例也、就中、知足院殿仰云、御使來五節所者、親呢公卿可取之、來里亭者、自可取之、見合、爲先蹤之上、有此仰、仍手自所校也、凡先例、御覽裝束賜五節所之例也、而今度五節所事、參入以下併省畧了、此一事不可調威儀、仍可賜里亭之由、內々觸奉行定長了、仍所賜也、先是、攝政以家司信廣、被送下仕裝束二具、賜祿、職事取之、次裝束等送五節所了、大申將刻着直衣、淨文織物、薄色指其、薄筋木衣、三紅草紅梅淨文織物、出衣、機物散花、參內、隨身上高已下、相具裝束弓箭劔笏等、於直庭改着、

可供奉廼立殿行幸之故也、及曉天歸來、語行幸事及御覽事等、秉燭之後御覽始、少將公衡禁色、一人付童女、當時近衛大將之中、公衡公守等爲花族、而皇太后宮亮行雅、侍從兼康等付下仕、是又內々相語也、然而當日、各以攝政命、奉行職事令相催云々、家習五位侍臣付下仕吉例也、永久雅兼卿爲右中辨付之、兼忠尤當其仁、而昨日依爲國司叙四品了、仍所語兼康也、件卿曾孫也、右中辨雅兼卿、少將國雅子也、強雖不可追其例、自然爲便宜之故也、事了退直庭、改着束帶參陣、依供忌火御湯了不昇殿、於恭禮門邊招職事、五位藏人親經、申攝政云、依不合卜可候大忌之由存之、於大臣大將者、不論合否着小忌、和長植記、寬治江紀等所見、於納言大將卜合之時着小忌、也、然而不奏其由云々、於三納言大將卜合之時着小忌、而或依別御定有供奉之例、天仁保安廣治云々、隨仰欲進止如何、攝政答云、就近例可被供奉者、仍於南殿御後邊着小忌着陣云々、先例被仰留守、而今夜不被仰云々、前行左大臣修廼立殿邊云々、今夜依保安例無同與、於龍尾壇遷駕腰輿云々、先幸廼立殿着小忌座、遷御悠紀大嘗宮之後、小忌人々欲着小忌座之處、不儲其座、只有大忌

輕、敢無大忌之人云々、仍人々相議着件輕云々、上首大將也、其外兼房、賴實、隆房等云々、檢校大納言忠親卿雖合ト不出仕、依中納言二人例、賴實着ト云々、小忌供奉、大將依有風氣早出了、不見此後儀云々、兼房、隆房等檢校云々、今夕、五節所渡官廳、猶有打出云々、今日、大將御覽勤仕事、

去八月之比、蒙五節催三時、頭中將奉行領狀已了、彼時、付奉行人、及院近臣定長等奏聞云、家習於五節者殊所刷也、而近年之爲體、每事失計畧、下官爲大納言獻五節之時、長寬元年依故禪問命參入、御覽共無其儀、即爲愚父例、今度欲被免彼兩事、可獻五節之人五人、今四人之中何無勤一事之人哉者、有可然之御氣色云々、仍不致用意、其後依余重病、彌以無沙汰、而去朔比譴責再三、事失理致口又無面目、仍堅以辭退、而及逆鱗之由有其告、仍招定長奏子細、不能具載此次申云、五人之中招一人譴責、人之所思、依天氣不快有此責云々、此條頗難堪也、永久三年禪問獻舞姬、白川院關賜御覽童女裝束、任彼例關預者、

且可施當時之面目歟、不然者眞實不可叶者、翌日定長來仰之趣、雖無免除之仰、頗似和顏、然間、內々自八條院被傳仰、可注進裝束色目之由、注兩三進上、即可調預之由有院宣、仍忽然而有此儀之間參入、已下五節所禮儀等、不能卒爾之經營、只御覽之一事、依別院宣所勤仕也、雖乖家隨時之宜有此營、不可爲例耳、今夜、廻立殿御浴殿之間、幼主偏如成人、見者稱奇異事云々、

十九日、甲辰晴、內辨左大臣云々、大將不出仕、此夕依爲吉日、渡住法性寺邊女房宅、去秋比依犯大將軍方、即欲埋其墮之處爲土用、其後又當王相方、仍爲違其方借他人之家、可滿十五日之由、陰陽師在宣所申也、仍所移住也、此日、所々獻棚、目錄在左、以隨身番長已下爲使也、

廿日、乙巳晴、早旦向九條、入夜歸法性寺、今日、內辨實房卿有消暑堂御神樂、子細追可尋記、廿一日、丙午晴、早旦向九條、此日、大嘗會、豐明宴會也、大將着束帶參內、其後歸法性寺、廿二日、丁未晴、大將注送去夜儀內辨實房卿、外辨上首

大將云々、五節事了、舞姫已下今已夜退出、  
大將五節裝束已下凝祿等注文、  
舞姫裝束、

丑日

赤色織物唐衣、濃打袖、裏濃蘇芳袖一領、  
青單衣、濃張袴、赤色扇、地摺裳、

已上堀川太納言、入織物裝、

寅日

裏濃蘇芳袖一領、青單衣、濃打袖、濃張袴、青色  
扇、

已上中御門大納言、入假裏、

青色唐衣、裙裾比禮、蘇芳末濃裳、

已上借三花山大納言、

午日例年辰日也、大嘗會年  
以午日稱三豐明也

青摺唐衣、濃打袖、裏濃蘇芳袖一領、青單衣、濃  
袴、目染裳、裙裾比禮、青摺裳、

已上前源中納言、入假裏、

日蔭(糸)羅、古今呂葉、赤紐、

已上於此殿新調、

七尺襖、通疊用三意之、

童女裝束、

丑日三具

八條院各置衣箱裝、(件爲使  
日返上之)細赤色織物裝、

織物白菊行袴、濃打衣、裏濃蘇芳袖三領、青單衣、

白表袴、織物、濃袴、扇、權實朝臣、

卯日二具

院各置赤色織物裝、  
不置衣箱裝、

黃菊行袴、而細紅打袖、紫勾袖四領、青單衣、則之

龍膽、白菊表袴、紅三重打袴、扇、公時朝臣、下仕裝

束、

丑日余沙汰、

紫光福爲庄所  
「保」即「進」之

梅唐衣、立文、裏增紅梅樹三領、青單衣、濃打衣、

濃袴、村摺裳、釵子、在膝、扇、定長、

卯日攝政、生絹假裏、不置衣箱裝、

萌黃唐衣、黃樹四領、皆同色、濃蘇芳打袴、紅單衣、

紅張袴、村摺裳、釵子、在膝、扇、兼定、

打出四具保元八具、今度略定、

裏增紅梅樹五領、入三綿五百兩、  
裏高一尺六寸濃打衣、濃紅梅單衣、

梅表着、葡萄染唐衣、不出袴、是故  
實也

五節雜事、依略儀無定  
文、長寬例也此注文經奏注進之、

一調度

二階、泔坏、在臺、薰爐、在籠打亂宮、每夜入三紅脇息、  
薄機一風

行事國行、所司重經、

一理髮具

末額、七尺盤、蔣櫛、彫櫛、上櫛、下櫛、釵子四、  
花釵子一、本結、二兩許、日蔭、在緒、心葉二、六筋、簪、

行事國行、所司重經、

一裝束、

屏風五帖、四尺一帖、泥繪、壁代七帖、儿帳八本、在、幅、三、

四尺、茵二枚、唐錦、東、御簾十三間、母屋四間、疊十五枚、在、

二枚、高麗十、弘筵五枚、差筵卅枚、鎮子十二、燈樓

四、在、燈臺二本、在、打、火櫃二口、在、鉢、炭取八口、

行事、以政朝臣、光綱、賴高、二、兼親、經泰、

所司、政職、侍仲政、下家司久行、

一盥具、

手洗二口、椀二口、

行事、

一舞姬裝束、色目在、端、

行事經泰、所司政職、

一童女裝束四具、色目在、端、

行事、兼親、經泰、所司重經、

一下仕裝束四具、色目在、端、

行事、保行、長俊、所司重經、

一打出四具、色目在、端、

行事、賴高、兼時、所司賴重、

一仕丁裝束八具、

退紅、襖袴、襖衣、帶、烏帽子、

一祿、

大師、

長絹六疋、綿三連、廿兩、凡絹百疋、代、白、布、白布七

反、共、女、官、長絹一疋、執行、女、亂宮一口、在、料、美、

火櫃一口、在、鉢、炭取一口、帑立菓子十合、

雜菓子二百七十合、蜜料、

理髮、

長絹三疋、綿二連、廿兩、掛一領、執行、女、官、凡絹卅疋、

代、白、布、疊三枚、高麗、白布一反、執行、女、官、白布七反、共、

官、七、椀手洗一具、亂宮一口、在、料、蕭物一具、

白物一帖紙、顏粉、一盤、細綿一盞、紙立菓子十

合、雜菓子百七十合、七十合、共、蜜料米三石、

小師、

上絹三疋、綿二連、廿兩、掛一重、青、單、衣、襖袴一

腰、凡絹卅疋、代、白、布、細美布一疋、手、巾、美絹四丈、



料、几帳一本、在舖料、美手宮一合、在納屏風一

帖、紙、唐火桶一口、在鉢炭取一口、

疊七枚、高禮二枚、紫五枚燈臺一本、簾三間、圓座一枚、

貨布七反、共女官七人料、璆料米二石四斗、紙立菓子十

合、

雜菓子二百五十合、炭一籠、

琴師、

絹一疋、綿五屯、凡絹二疋、

聞司、

絹二疋、綿十屯、凡絹五疋、

小歌、

絹一疋、綿五屯、凡絹二疋、

拍子、

絹一疋、綿五屯、凡絹二疋、

今良三人、

各綿二屯、信乃布二反、

小舍人三人、今度不給之、不參之故也、

一人、六丈絹一疋、凡絹各三疋、二人、二疋、

仕人二人、

各布一反、

一襲、

行事、光綱、經泰、侍貞光、

朝餉、

寅日、二位中納言、卯日、梅小路中納言、午日、新宰相中將、

各白布五反、以絹裹之、

前物、

大師、右衛門督、理髮、右兵衛督、

小歌衝重、

右近府、廳頭清景、

屯食十具、

六府各一具、北陣一具、藏人所小舍人二具、進物

所膳部一具、

大破子十一荷、

小哥二荷、脇陣二荷、掃部寮一荷、主殿寮一荷、

內膳司一荷、主水司一荷、朔平門一荷、和德門一

荷、玄輝門一荷、

雜菓子、

內侍所女官卅合、掃部女官廿五合、同男官十合、

御服所女官廿合、洗女官十合、東童三十合、御手

水女官十合、御匣殿女官十五合、主殿女官廿合、



御藥女官十五合、御膳宿女官十五合、御湯殿刀自十五合、進物所女官廿五合、水司女官十合、御樋殿女官十合、小哥女官四十合、大盤所女官卅合、上御厨子所十合、上刀自廿五合、命婦十五合、藥殿十合、書女官十合、油守十合、主水十合、御門守十合、女史十合、內膳刀自十五合、采女中廿合、同官人中十五合、縫殿女官十合、御井廿合、墨摺十合、關司十合、絲所十五合、水取十合、女嬬十合、當女十合、上御厨子所廿合、御廁人十合、長女十合、御服所命婦廿合、下御厨子所十合、御髮上女官廿合、主殿十合、女工所十合、嬬十合、藏人所五十合、行事所小舍人卅合、仕人中廿合、內豎中五十合、官召使廿合、木工寮十合、和德門十合、朔平門十合、脇陣廿合、左右各縫殿陣十合、內膳十合、六府各十合、

一棚、

內十荷、院十二荷、上西門院八荷、八條院十荷、皇后宮八荷、殿下八荷、已上御使三位殿五荷、右大臣殿五荷、權大納言五荷、源中納言三荷、藤中納言三荷、中御門大納言三荷、已上

也、

行事經奏、所司重經、

一櫛、

內、唐船、院、和船、八條院、火爐、皇后宮、柳、殿、鏡臺、此夜寅午兩夜、裝櫛少々被儲三五節所、

行事、國行、發時、所司重經、

一雜事、

打覆七間、打出長櫃四合、例長櫃四合、疊臺四脚、覆筵卅枚、炭百籠、油一斗八升、雜要用途高足二脚、簾代、筒木、九平、針絲、

一貴所御使祿、

院、

宮內卿經家朝臣、

女裝束一襲、

廳官、

六丈絹一疋、

八條院、

右馬權頭基輔朝臣、

女裝束一襲、

廳官、

六丈相一疋、  
殿下、

兵部權少輔信廣、

白樹一領、

廿三日、戊申自昨日有五體不具穢氣、仍吉田祭不奉幣、然而神齋如恒、又不由祓、

廿一日、壬子實殿阿闍梨來、密語云、少納言入道相者、俗名宗綱、三條宮近去夜自坂東上洛、言語之次申云、賴朝云、問、右

府殿御事於京下之輩、之處、人別稱其美、未聞其惡、爰知社稷之臣云々、見其氣色、深有甘心之色、且是殊不通音信之故云々、

廿八日、丑癸陰晴不定、太外記賴業來、可供奉春日詣

〔御〕前、而每事闕如之由歎申、頗加裝束、有所望之氣歟、

廿九日、寅甲晴、早旦向九條、今日、大將參院、御逆修

依穢限過也、午刻參院了、其後中御門大納言、藤中

納言等被來、謁談移刻、大將自院歸來之後、大納

言被授催馬樂於大將、高砂一段、乘燭之後余歸法性寺、

今日定能卿語云、兼雅卿辭大納言了、傾奇無限云云、

卅日、乙卯朝間雪下、不及積地、法印大將中將等來、申刻相伴此人々、信部同先詣故殿御臺所、金衆手與他念佛念誦等之後、參女院御幕、又所作少々了、乘燭之後歸宿所、年來雖有參詣之志、自然不遂之、今日參詣、其期至歟、

十二月

一日、丙辰終日天陰、午上神齋、寫心經如例、藤中納言定能竊告送云、定房卿依執柄推舉、有可仕幕府之儀云々、事若實者不足言事歟、若不知人、可悲々々、實房、兼雅有就望之聞、雖非專一、其父各拜此職、被抽任有何難哉、兼房、隆忠苟爲執政之後業、豈非其器量哉、乍置此輩、大飲大食之窮者、若拜將軍之頭要者、永不可有官職之與、或云、隆忠今度大尊會叙位、加給泰經之引級云々、其故者、彼納言可嫁隆房女、隆房者、妻經也、仍雖爲賊首禪門之子息、忽浴恩、又有可仕將軍之儀云々、是又於品秩雖不賤、於君已爲謀臣之子、依佞臣之強緣、忽預殊私之朝恩者、朝野之士庶、彌爲事奸謀、敢不存忠勤歟、逆賊與窮者、抽賞在誰哉、除書之

後朝可<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>歟、今日、仁和寺宮被<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>札右大將<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>知音<sub>一</sub>之由也、

二日、丁<sub>二</sub>天陰<sub>一</sub>、尊忠僧都持<sub>二</sub>來日吉社御正體圖繪<sub>一</sub>一鋪、被<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>書<sub>一</sub>銘之由、即馳<sub>レ</sub>筆了、今日、大將參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、御八講依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>五卷日<sub>一</sub>也、深更歸來云々、

三日、<sub>戌</sub>自<sub>レ</sub>夜雪降、雖<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>地不及<sub>レ</sub>寸、早旦呈<sub>二</sub>一首於內相府<sub>一</sub>、

おもひやれ、このはをちすく、みやまきの、

ゆきにはなさく、ふゆのこするを、

暫而返歌到來云、

かせをいたみ、ある戸あけては、なかめねと、

こゝろはゆきに、むもれやはする、

又云、

きみのみと、いろをもかをも、しるらんと、

おもふにたふ、けふのことのは、

此歌重可<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>返歌<sub>一</sub>之處、有<sub>二</sub>關<sub>一</sub>聖人<sub>一</sub>事、仍今日不

送<sub>レ</sub>之、遺恨々々、

申刻、高野穀斷聖人<sub>行</sub>來、數刻談語、此聖人有<sub>二</sub>奇異

之靈驗等<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、余問<sub>レ</sub>之、粗語<sub>二</sub>之實<sub>一</sub>、仰而可<sub>レ</sub>信歟、天下可<sub>レ</sub>直之由、去冬有<sub>二</sub>夢想<sub>一</sub>云々、伴僧自<sub>二</sub>去春比<sub>一</sub>

示<sub>二</sub>付祈者<sub>一</sub>也、余及女房、大將姫君等皆受<sub>二</sub>護身<sub>一</sub>了、大將爲<sub>二</sub>謁<sub>一</sub>此上人<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>來也、參<sub>二</sub>女院御墓所<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜歸了、

四日、<sub>未</sub>紀陰、及<sub>レ</sub>晚歸<sub>二</sub>九條亭<sub>一</sub>、滿十五日了之故也、用<sub>二</sub>

人車<sub>一</sub>無<sub>二</sub>前驅<sub>一</sub>、男共少々騎馬在<sub>レ</sub>後、昨日返歌送<sub>レ</sub>之、

五日、<sub>申</sub>晴、此日、故女院御忌日也、仍午刻許參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、

小時始<sub>二</sub>講演<sub>一</sub>、導師伊學阿闍梨、龍僧導師也、抑、僧宿

裝束布施取衣冠也、而僧兩三人着<sub>二</sub>鈍色裝束<sub>一</sub>、臨<sub>レ</sub>期依

無<sub>二</sub>計略<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>改<sub>二</sub>直之<sub>一</sub>、其講師同鈍色裝束也、雖<sub>レ</sub>不

可<sub>レ</sub>然、因<sub>レ</sub>茲不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>改<sub>二</sub>導師<sub>一</sub>、仍乍着<sub>二</sub>鈍色<sub>一</sub>勤<sub>レ</sub>之、

例時後引<sub>二</sub>布施<sub>一</sub>、大將直衣、在<sub>レ</sub>座取<sub>二</sub>布施<sub>一</sub>、事了歸宅、今

日、仁和寺宮被<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>送百首詩<sub>一</sub>、作者公卿、儒者非成業、

相并十五人也、

六日、<sub>辛</sub>自<sub>レ</sub>夜雪降、未明開<sub>レ</sub>戶見<sub>レ</sub>之、積<sub>レ</sub>地五六寸、此

五六年未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>如此之雪<sub>一</sub>、雪者豐年之瑞也、明年天下

可<sub>レ</sub>治之祥也、此日、院御逆修曼陀羅供日也、仍大將

着<sub>二</sub>束帶<sub>一</sub>、<sub>御</sub>參院、入<sub>レ</sub>夜歸宅、導師東寺長者

法務定退、<sub>也</sub>、讚衆八口云々、自<sub>二</sub>昨<sub>一</sub>日<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>犯<sub>二</sub>大將軍方<sub>一</sub>之

障等悉埋了、以<sub>二</sub>在宜<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>大將軍祭<sub>一</sub>、

七日、<sub>壬</sub>晴、近日群盜之恐連夜不<sub>レ</sub>絕、去比院御所有<sub>二</sub>

放火事、即打、又近邊一二町村之中、強盜入害、數人、然而敢無其沙汰云々、仍付泰經卿、捧上疏、疎遠之身雖不能獻諫、諫靜、不納之條、全非耻、仍徹忠之至獻狀之許也、其書狀如此、

可被禁遏放火群盜等事、

右天下騷亂以後、海內不靜之間、五畿七道海陸路塞、調庸租稅乃貢已空、適往反之境、災難猶不免、或依炎旱之愁、盡爲亡損之地、或恐武士之妨、敢無子來之民、加之、山門嚴穴未聞安全之栖、社內寺邊併爲合戰之場、如此之間、貴賤忽失安堵之計、縑素各懷危困之歎、國土之凋弊、逐年雖增、朝家之大營因茲無減、富者虛倉廩、以僅存身命、貧者無衣食、以難忍飢寒、何況近會以來、放火間起、盜賊頻聞、不嫌月卿雲客之居處、不論洛内城外之舍屋、連夜之灾迫、日無絕、非曾奪資財、殆又及死傷、萬人之歎只在、此事而已、於逆黨之征伐、勞雖運籌策、至盜賊之嚴制、速可行刑法、鎮亂之政自運及遠之故也、早仰有司并武士等、儘可被禁遏、其間子細宜防、有司之輩、可被勉無爲之謀也、此沙汰遲引者、人

家忽滅亡、衆庶彌失度者歟、夫君者、臣之元首也、人臣之愁歎、數襟豈不傷哉、不待顧問、進而上奏之條、恐懼多端、戰慄難謝、然而依存恩忠、令驚聖聽、許也、可被計披露之狀如件、

十二月七日

在 判

大藏卿殿

入夜泰經返札到來、早可奏云々、

九日、甲子晴、此日、院御逆修結願也、大將着直衣、中

車、國身參院、入夜歸來云、定房卿已下公卿濟々云々、

結願導師辨曉律師引布施了、例時其後又有布施、

公卿等皆兩度取布施云々、定長催大將云、來十五

日可有荷前事、可奉行云々、有所勞相扶可奉

行、但於使者、不可勤仕之由答了、

十日、乙丑晴、藤中納言來、談世間事、院明後日可參

日吉給、依輕服事、不參云々、此次語云、春日詣恩

從公卿事、自院御沙汰殊火急也、供奉京出不參社

頭之輩、可有御沙汰云々、仍皆悉可參社頭

云々、

十一日、丙寅晴、内々示送定長許云、基輔十五日荷前

當日可有定云々、大納言上卿之時、多勸仕使例



也、而大將校使者雖勤仕之由申于綱下、勤仕可前使也、就中、近衛大將內後之儀、可勤仕、而當時不可、云々、作勤仕上卿、不勤使之條、雖有遲遲之例、仍不釋事也、加之、十五日朝有故障、雖出仕、凡大納言已上、謂可勤仕、前上卿者、是使定也、一上奉行事也、若有障者、未大巨行之、大臣皆中納言定申之例、正層、障者、大納言行之、無及中納言之例、但通有三三年之例也、於當日事者、使之上騰使于行之、不論大中、是定例也、然則於當日事者、雖大納言不參、不可事關、荷前擬侍從定者、十二月十三日式日也、今度延引何故哉、若無指由緒者、十三日可定申、於十五日者、旁難參、答云、仰旨可、然可存此旨、於定長者、明曉、日吉御奉供奉難歸參、仍申違頭辨之許也云々、

十二日、丁晴、早旦、明日可有荷前定儲文書、及可令催參議之由、仰大外記賴業、又可催儲辨、爲召中務名目也、之由、仰大夫史陸、各承了之由有、通稱、又仰賴業云、元日擬侍從事、荷前定之次、定申者例也、雖無職事之催、恒例爲同日事、仍可被致、用意歟、抑、大極殿炎上之間、先例如何、賴業申云、天喜、康平之間、大極殿炎上之後、未通之例也、無此定、而治曆四年依爲代始被定之、依件例、治承又有此定、但當今

去年不續定之、今度可在時議云々、案之、去年依爲御即位以前無沙汰歟、理可然、於治承例者、專不可爲指南、治曆例尤可被據用歟、而檢經信卿記、依代始有此定之由不見、大極殿出來之故云々、以之思之、當時明堂未及出來、朝拜豈及定侍從哉、此事又不可必依代始事歟、今日院參、日吉給云々、

此日、賀茂臨時祭也、使左中將公時朝臣、大將參入、爲上首有三獻云々、

十三日、戊晴、此日、元日擬侍從、及荷前定也、右大將依勅定一所定申也、早旦、大將以書札示送頭辨許、曰、大極殿燒亡之間、天喜、康平之比、無擬侍從定、而治曆四年有此定、若依代始歟、治承依治曆之例、同被定云々、但於彼治曆例者、大極殿雖不遠、道了、大略出來云々、今度未及出來、頗不相似歟、今日可定申哉否、從上仰可進止事也、且尋外記、且申事由、可被定下者、返事云、擬侍從定尤可被行候也云々、攝政命歟、私計歟、願不審、然而職事許可申定之由示送、而否可被行之由計也、非自由事歟、加之、外記執可有定之

由云々、仍大將定申了云々、猶於三恩意一者、不可有、此定一歟、又擬待從定文ニハ、元日大極殿擬待從、書也、而當時大極殿無實、仍件字可、書哉否有疑、治曆例書之云々、依三其例治承又書之、而余案之、治曆ニハ依三太極殿出來一書之歟、治承不及爲例、於三今度ニハ、略三太極殿三字、只元日擬待從ト可書也、仍此由合三太將了、入、夜歸來云、示三合大外記并執筆左太辨兼光等ニ之處、尤可、然之由令申、仍摺三除太極殿三字了云々、大將退出之次、參攝政亭、爲防三春日詣之經營也、

十六日、辛未晴、此日、攝政被參詣春日社、自五條東  
洞院第三被<sub>レ</sub>出立、着衣冠<sub>有出</sub>、乘唐車、々副布衣、<sub>若可</sub>  
<sub>蘇芳獨歎、天仁攝政之時、</sub>隨身上薦下薦、皆騎移馬、在車  
<sub>着稱之由見爲陸記</sub>前一如例、檢非違使二人在車後、御前權右中辨兼忠、  
少納言賴房、<sub>兄弟也、共雅</sub>大外記賴業、大夫史隆職<sub>已上</sub>  
<sub>留、先例多着</sub>等也、屬從公卿十人、大納言定房、權大納  
言宗家、<sub>近客四人、已上有前</sub>權中納言朝方、定能、經房、二位中將  
忠良、<sub>德盛、朽岸、持將重市</sub>參議親宗、兼光、<sub>左大辨、井氏</sub>從三位顯  
信、<sub>治部</sub>季能<sub>右京</sub>大夫、等也、各着衣冠、二毛車、中納言已  
上懸下簾一如例、供奉殿上人、院司相并冊餘人云々、

各着衣冠、侍從侍從一人名、紅梅出衣云々、家司職事已下、諸大夫廿餘人各布袴如例、舞人十人、皆近衛舍人也、先例或三家子、衛府勳之云、將監中臣近武、候院、下毛野武成、本府、將曹下毛野厚助、候院、府生下毛野師武、殿、同厚景、候院、同泰兼平、候院、同下毛野武盛、殿、同忠武、本府、同中臣武友、候院、番長泰兼次候院、等也、公卿車後、有檢非違使二人、隨兵舞人馬舍人、院御馬同舍人也、裝束朽葉、彩色紙薄螺丸付之、薄色衣、蘇芳單衣、移馬舍人裝束、攝政殿馬同舍人等也、虫襖、付物、款冬、其色、隨身裝束、褐衣染分狩袴、左蘇芳、右朽葉、付鶴丸、彩色、菜巾狩胡錄、車副裝束、白張上下、家文、濃打出衣、牛童菊、其色、紅打出衣、辛櫃覆赤色、非二重、五位已下各布衣著三級模若唐綾其等也、五六人許在檢非違使後、於五條亭、舞人為先、上臈渡、南庭、先例為先下臈云々、法皇於願盛卿八條亭棧敷、御見物、

十七日、壬申、陰、大風、後聞、黑木屋儀如例云々、長者與三長吏一相並昇階、是尊崇長吏之儀也、

十八日、癸酉、晴、風吹、酉刻被入浴、後聞、今朝於佐保殿、院御隨身六人給纏頭、二位中將忠良、治部卿顯信兩卿傳給之云々、此日、源中納言雅賴卿來、談世間事等、今夜、自院以右少辨定長被仰下云、梅宮社



務、以權預卜部仲遠可令執行云々、是元忠有不快事云々、

十九日、甲戌此日、内御佛名云々、

廿日、乙亥陰、此日、京官除目也、執筆左大辨兼光、一夜儀、此夜八條院御佛名也、傳聞、平大納言賴盛辭申大納言、以男光盛申任近衛司云々、大將事散々風聞、不可勝計、歟或人云、實房卿可任云々、法皇暗文簿、不知先例、仍若以上臈被加左云、爲大將可爲愁、仍奏聞子細、無分明之勅報、今夜光長來、

廿一日、丙子陰晴不定、自夜雪降、頗積地、早旦、内大臣送一首、

ゆきふれば、にはのあとこそ、をしけれと、

さみかりつかひ、まつそやらるゝ、

返事、

しらしかし、さみかつかひを、まちかほに、

あとをしみつる、にはのしらゆき、

右近府生下毛野忠武持付、參雉、小忌狩衣毛沓等召前、先午持跪、依命指西方立蒔、須指簷、而依無便宜也、其後、頗朔而渡前庭、此間、自簾中

押出衣、基輔朝臣取傳給、忠武進寄中門内方縁邊取之、於砌内一拜退、件衣大將御節所出之濃打衣也、不必指其色、只隨見在也、先々近衛舍人雪朝持來山梁之時給御衣爲故實、入夜宗雅來、語春日詣之間事、今旦、見聞書之處、不被任大將、又内府示送云、返給辭狀了云々、爰知、大將忽不可被任其替歟、尤善政也、愚息良經叙正四位下、自院仲遠梅宮社務事、返給是定、被仰云、庄務事可加載者、仍書加進上了、

廿二日、丁丑陰、此日、院御佛名也、仍右大將參院、先參院、女事歸來、立行香取祿云々、

廿三日、戊寅平氏之勸靜風聞非一、大略不可事切事歟、

廿四日、己卯雪降、即時及四五寸、凡今年連日降雪、嚴寒超例年、街談巷說以之爲吉瑞云々、

廿五日、庚辰風雪殊甚、今日、萬機旬也、右大將爲上首、出居頭中將通資朝臣、行事職事藏人左衛門權佐親雅云々、未刻、大將着束帶、時給御、相具親并深沓等、依雪深、陣中爲令着、所具深沓也、參内、子刻、歸來語云、每事懈怠之間、戊刻事始云々、凡次第違亂不可敢云々、大略行事職事如泥歟、所

司又不存歟、儲饌之體偏同、節會云々、子細見大將  
 記、歟、今日、大將爲上首之間、先可昇殿哉、將出  
 居先可昇歟有疑、而天慶四年右大將實賴爲上首、  
 大納言、康治元年左大將雅定爲上首、大納言、共先率諸  
 卿昇殿、其後、出居昇之由見日記、仍追彼兩度例、  
 先所昇殿也、此外、大納言大將爲上首之例、未  
 檢得之、新儀式、西宮、北山、九條〔殿〕年中行事等所  
 注、大臣大將先昇、納言大將之時、出居先昇云々、如  
 此文者、出居先可昇也、而重加案、大將先可昇、  
 不可依本官之尊卑歟、彼抄等所載、指非上  
 首之大將、稱納言大將也、禮須大臣必爲上首  
 之故也、因茲檢先例之處、古今之先蹤如此、仍  
 以道理與先例、大將所先昇也、今日奉爲故殿  
 於山書寫一日經、仍今日、余書之間、請進念佛讀  
 經、

廿六日、辛巳此夜、爲違春節、向法性寺、翌日晚歸來、  
 其所依無車輿之路、不具女房、

廿七日、壬午自去廿日、奉爲故殿於西山法印被始  
 如法轉讀、其上每日有舍利講、今日其結願也、仍調  
 百種供具所送道也、今日、余念佛讀經致信心、奉

訪後世菩提、

廿八日、癸未法印被示送云、舍利講結願之時、舍利有  
 神變云々、奉出了、欲奉入之時、凡不入給、仍爾  
 伽陀再三讀歟、其後入給了云々、可尊々々、天王寺  
 舍利、以出煩爲不吉、以入煩爲吉祥、是即善根  
 成就之時如此云々、可喜悅々々々、法印去比仰小  
 僧、密々所詠哥等、遣俊成入道之許、令付勝負、  
 返事云、和歌判起請了、然而於仰者、不可准他、  
 仍可付勝負、明日可返上云々、此日、於春日奉  
 供養自筆心經如例年、

廿九日、甲申早旦、俊成入道昨日和歌等付勝負返送、  
 其次詠一首副之、其詞云、

くれはつる、まつのとほそのゆきのうちを、

はるこそしらね、きみたにもとへ、

返歌云、

ゆきのうちは、いつこもおなしさひさを、

わかやとゝても、はるをしるかは、

右元曆元年秋冬此一帙墨付七十五枚者先年松殿右  
幕下道昭卿依爲子三男任戀望聽繕寫仍被染真痕畢  
抑法性寺忠通公之有職其二男松殿基房公親面授而  
傳于後法性寺兼實公且加目錄號玉葉爲后昆之龜鑑  
自爾以來其雲抄無讓他家吾後者守此旨代々秘握而  
可貯深奧者也

于時慶安二年<sub>己丑</sub>季夏虫拂之節陶化翁(花押)誌焉

玉葉卷第四十一終

玉葉

卷第四十二

爲文治元年

自元曆二年正月  
至同 九月

元曆二年春夏 文治元年

正月

一日、乙晴、早旦、四方拜、須寅刻有此事、如例、但依  
辭大臣不帶劔也、未刻、大將着束帶、如例、先  
來此亭、此間余手水、依家司不參、以右馬權頭基輔朝  
臣、上爲陪膳、次大將參院了、其後見鏡如例、子  
刻、大將歸來、語今日事、依攝政遲參、院拜禮遲引、  
攝政參入之間、諸卿豫下立中門、忠親已下也、是正禮  
也、近代、攝政先以昇殿、不可然、又依庭短參議立  
後云々、拜禮了、申大成攝政已下不昇殿、直退出云  
々、參內之後、小朝拜、節會等儀如例、內辨忠親卿、  
也、外辨上定能卿、但賴實卿爲謝酒時之上首云々、  
大將不着外辨、尤奇怪、但爲見忠親卿內辨作法云々、  
內辨作法無殊失、但舍人已下音聲太見苦云々、  
又銀鈍下殿催之、飯汁仰參議催之云々、是納  
言內辨之時、每事下殿可催之云々、又國栖一節了

之後可復座、而催了、不待一節、即復座、小失也、  
二日、丙晴、齒固手水、陪膳高、如例、大將來此亭、直衣、  
車、今日藤中納言定能、相具其子右大辨兼光、相具其子等  
來、上官列參、大外記、大夫史等來、  
三日、丁晴、右中將公守來、大將在此第仍即謁之、余  
又謁之、爲恐父面相之所聞也、此外方將等多來云  
云、又辨官光雅、兼忠、定長來、又經房卿來、余謁之、  
抑今日付定長奏、良經三品事、并余辭表不可返  
預之狀、  
四日、戊晴、明日、依故女院御月忌、可向堂、年始初  
度出行頗有憚歟、仍今日先向大將第、今日、顯信卿  
來、不謁之、  
五日、己晴、向堂、彌勒講如例、大將相具、此間、天文  
博士廣元來、申云、去元日、異方赤氣、其跡類替、所  
謂虫尤氣、氣一作旗也云々、其占尤重、除舊布新之象也  
云々、



六日、晴此日叙位儀也、昨日依公家御我日也、入夜攝政送札云、中將殿三品事可有沙汰之由所承也云々、夜半、定長告同旨、

七日、卯天陰、申刻以後雨降、右大將爲取白馬奏參

內、先參院、良經三品事畏申之由、爲余使令申、攝

政同被參院云々、其後參內、子刻歸來語云、內辨忠

親卿、外辨上卿大將雨儀云々、有加叙正下、親宗

卿書入之云々、白馬奏之間、瓦硯無筆、仍以官人

尋取外記筆加署云々、此事先例未知、只以今案

所爲云々、余案之、此外無他計歟、又左奏允落失

了云々、仍以帖紙代之、又右奏無禮紙、仍以懷紙

一枚加右奏禮紙、以今一枚爲左奏云々、此所爲

又以可然、頗可感歎、粉熟著下之後退出云々、

八日、壬戌天陰、此日、御齋會初日也、大將未刻參官廳、

八含無實之後、於此所、於北廊座、天喜以後例、東座諸公、公卿座、

有此禮、天喜例如此、於北廊座、近年如此、今案、北廊尤有、

立先召外記、問上膳參否之處、申不參之由云

云、仍問諸司、又召辨問僧參否之處、忠親卿參入、

外記有若亡也、其後之儀如恒云々、但行香之間不

解劔、近代之例云々、是則有失劔之人等之故云

九日、癸巳今日隆職來、召前仰雜事、去夜、大內記光輔家、群盜亂入、父長光入道同居、同遭此殃、依所望綿衣一領、小袖一領遣之、今日依爲吉日召智詮、余已下子息等、皆始護身、

十日、甲午

十一日、乙未此夜爲方違欲向法性寺、而依方塞俄止、

十二日、丙申天晴、大外記賴業來、語云、只今自光雅之

許示送云、彗星出尤旗等例可勘申云々、去正朔東

方有赤氣、而司天之璽各有執論、泰親子息等、李弘、泰茂、

申彗星之由、廣元資元等申、蚩尤旗之由、時晴晴

光等、申客氣之由云々、此間、大藏大輔泰茂來、召

前問天變事、彗星之條申、無異議之由、余問云、本

無星云々、然者彗之條如何、申云、去治承元二年所

現之彗、又以無本星、然而泰親申彗之由、季弘稱

與尤旗、相論之間、泰親朝臣仰天而請天判、若泰親

申非彗、申彗者可蒙天罰、季弘乖父申非彗、

若訛者又可蒙罰云々、而不經淺程、受重病及

危命、于時泰親自書祭文、修祭祀、申請天、即病

愈、然則、彼時事切了、全不可依星有無、加之、宋

書天文志、以雲氣稱力星、以氣稱星之證、以之爲指南、何況替體不似于客氣異雲等、更不可見誤事也云々、余問云、會釋可然、但以有星爲替、以無星爲蚩尤之旗、而謂替無星者、以何可分別替與蚩尤哉、申云、只同體異名也云々、此條頗不分明、歟、(然而)不及執論、余案之、當時天下之爲體、替字之災猶以可爲輕、而于今不見天星、成奇之處忽出現、誠可謂替歟、但於無星者、猶難一定歟、天喜四年安章親與中師平、有此論、章親依無星申客氣、師平依五星浸沒之次第申替、各雖進勘文、不盡沙汰、不決雌雄、但其後災殃非一、即大極殿已下火災其明年也、凡司天之事、其道之難猶難窮知、況於不習學人哉、隨此後之禍亂、可定是非歟、泰茂又申云、公顯僧正病惱之間、修祭兩度天口地府、泰山府君、每度有盛夢、彼僧正自筆注送之云云、即以其正文、令見事體、實嚴重殊勝、末世之珍重、一道之名譽也、泰茂依爲信者、有如此之事、驗德歟、今夜欲違方之處、依在宣申狀不違、法性寺御所塔有修違事、而付寺家了、然其沙汰、猶余不可、仍可違後、將依付寺家、不可違歟、違問之處、若有方違者、依是彼付寺家之條無誤、仍不可違之

十三日、丁天陰、自今日七ヶ日、使山法印修三尊合行之法、佛眼、愛染王、不動明王、其旨趣不違具注、余又七ヶ日之間有少行法、入夜大外記師尙來、申靈夢之事、件事旨趣者、去年三冬之比、依尋召借進秘藏抄物、雜抄抄、故、然間稱有夢告、第四以後不借進、仍雖師元自抄、不能重尋召、內心深禱念、只於師尙之秘申者、不可及左右、若有憾之靈夢者、取諸身生涯之遺恨也、所以何者、下官於文書成尊重之思、又輒不外漏、何況下官得此書、爲朝不可有損、凡人心如面、雖有萬端之異、非權者無知人之心底、至于靈魂者、以通力必知之、而不可許下官之披閱之由、有夢之條、一ハ可耻於身、一ハ可怨於靈歟、靈若靈者、悉心無隱歟、此條深以爲遺恨、仍自聞此事之後、寤寐不忘、而今夜師尙申云、去年夢趣、師元之前師尙相對而居、即前二披置此抄、然間、父氣色太不快、即覺了、仍進借之條、不叶先親之心歟、成恐之處、去九日又夢云、如初師元之前對居、于時自此御所也、有御敎書、師元乞被見之後、殊有和顏之色、殆及悅歟、仍於今者、存不可以奉秘之由、所持參也云々、持來第、四卷、靈魂感應臣



之心操、忽許相見、歎、可悅々々、可憐々々、

此夜有僧事、後見開書、僧綱及四十人、未曾有々々

々、仁和寺宮弟子院師、蒙親王宣旨、道法々親王云々、

十四日、戌、天晴、依御齋會竟、大將參官廳、深更歸來

云、布施堂事了、不參內參院、供奉御幸云々、此事

甚無謂、已爲日上、而不知禁中事、他行可謂不

忠、仰知其旨了、爲自今以後也、大將東廊申文之

時向座上、布施堂之後、一拜之時置笏、又初三拜之

時解劍、後一拜、了帶之、是等皆勸先例所教諭也、子細

見大將記一歎、

十五日、巳、天晴、已下、奈良僧正被來、依爲勸內論

議之番事、去十三日所被上洛也、只今下向之便所

被來也、余示付祈事、子細同法印、今日、女房姬御

前共參吉田祇園等、忍而詣是年來之例事也、

十六日、庚、天晴、

十七日、辛、

十八日、壬、自今日被始行除目云々、執筆左大辨

兼光、

十九日、癸、天晴、自去十三日所始之念誦、今日結願

了、光長來、爲取宮文、只今參內云々、申中將拜賀

之申次散狀、法印祈同今日結願了、

廿日、甲、除目入眼也、

廿一日、乙、天陰、時々小雪、此日、三位中將拜賀也、唐時

云、中將申刻着束帶、藤輪細御、先降立中門、申余

及夫人、申次右中辨、次參院、申次基、次皇后宮、次上西門

院、次八條院、已上四、次詣攝政第、申次實稱、次參內、

經床子前并陣座前小庭等、進立中門、准、付少將

範能朝臣奏事由一拜舞、依召參御前、歸出居

殿上退出、

前班五位八人、扈從基輔朝臣一員、二人、府生、隨身四

人、白持將、舍人二人、居飼二人、牛童等賜當色、

廿二日、丙、天晴、實嚴律師來、示付祈事、於佛前仰

今日意趣之間、賀茂幸平持來夢記、其趣、余可有

慶之吉祥也、折節、悅思不少、仰而可仰々々、

廿三日、丁、見下名聞書、去夜被、更無事、只內舍人一

人、又諸司三分一兩被改任、又史巡清業、和盛、任大

隅、尙被改對馬云々、

廿四日、戊、大將方機、今日滿七日了、

廿五日、己、雨下、此日、奉幣賀茂春日兩社、陰陽師曆

博士憲定、陪膳基輔朝臣、爲密議之上、近日家司等

有隙之故也、余著束帶、依辭大臣、取幣拜之、先賀茂、被學先拜上、次春日、又有、今案、只各雖、可副、別拜下、各同度、可有、一度、就、使、依爲密々事、稱私人幣、送社司許也、近白如此之事有其恐之故也、

傳聞、平氏強々云々、今晚、三位中將見未曾有之夢、未刻許、余相共望東方天、爰黑雲自東走西、余云、天道之令伐平氏給也、因茲有此雲云々、其後、女宿與熒惑、取合、落自天、未墮地、歸昇取合之間、女宿在上、熒惑在下云々、

廿六日、戌頭辨光雅以書問、今年可有神社行幸哉否、院宣也、申不可有之由了、有煩無用之故也、

廿七日、亥天陰、刑部卿賴輔卿來、余謁之、此卿庶幾治政之志、勝傍輩之人也、可憐々々、

今日、大將密々有作文事、右中辨光長、權辨兼忠、肥後守敦綱、文章博士業實、前少納言有家、菅式部大夫長守等會之、題霸中春色滿、花中、今日、大將聊有風氣、申期、

廿八日、天陰小雨、余輕讀心經千卷、奉樂春日御社、又寫心經一卷、是正月分也、今晚、女房有吉夢、可信（々々）、

廿九日、丑天晴、賴業真人來、語世間事、自是向大將亭、授尙書云々、余又爲訪大將、向其亭、入夜歸來、

卅日、寅

## 二月

一日、乙雨下、此日、大原野祭也、仍余奉幣、依辭職不帶劔、陪膳範季朝臣、奉行賴高、便取幣、陰陽師在宣、依雨中同儲拜坐、自今日大將方有五體不具（之）穢氣、仍余家不混合、

二日、丙天晴、源中納言雅賴來、語雜事、其中、余有負無實事、彼納言以或僧爲使、示遣雜事於賴朝許、其次、賴朝示彼僧云、右大臣御事、京下人皆稱美、而以土肥二郎實平遣折紙、頗心劣者也云々、此事蒼穹在頂、定有照覽歟、可謂不祥、以事次可陳披歟、

三日、丁實嚴來、令行愛染王供養法一座、給少布施、依有所思也、

四日、戊今晚、余見夢、其次第不可說也、可取信歟、昨日、源中納言云、兼房卿爲拜賀、詣攝政家、須

被稱退出之由也、而只有萬事不能面謁、此方可被光臨之由、被云出、仍不拜參上被引馬云々、奇異次第也、

五日、己此日、式部省官人持來三位中將位記、若可給祿敷、先例忽不覺悟、仍仰後日可持來之由、歸遣了、恒例彈勒講如常、余依神事不參、大將又依所勞不參云々、

此日、春日幣如例、陪膳範季遲參之間、以基輔用之、布衣團身也其後、範季參入、行事國行、陰陽師晴光、光長來、召前仰雜事、又召範季仰雜事、有申事等、此日、召典樂頭定成、施藥院使賴基等、問大將不例、共申無殊事之由、

六日、庚申天陰雨下、春日使左少將親能朝臣、行事辨右中辨光長朝臣、神事如例、

七日、辛酉天陰、今日猶神事也、今日已刻、余心地不快、例所勞也、

八日、壬戌天陰、觀性法橋爲法印使來、示條々事等、九日、癸亥天晴、時々小雨、此日、三位中將良經着陣也、先陰陽師在宣參上、勘申日時、家司皆故障、仍只職事長俊仰出行事、令勘申之、不可爲例也、申刻參內、次第

如例云々、奏時中先於陣腋間、時着與座、納言座下親着座也須臾而起、座退出、仰檢非違使、禁止路頭狼籍、又以如例、

共殿上人基輔朝臣一人、前驅三人、前上野守賴高、皇后宮少進長俊、就位兼時、天仁以後、只數如此、隨身等多稱院、裝束、白狩袴、壺胡鏡、今夜、家賴入道住大原、稱顯運房來、依三請也、

十日、甲子天晴、此日、先妣遠忌也、催送佛經已下、布施取等於光明院如例、今日、又謁顯運房、讀止觀第一卷四五帳許、今日、大外記賴業來、大將第、授尙書十三卷了、大將賜衣一領、繩之降庭再拜云々、

十一日、乙丑天晴、藤中納言定能卿來、語云、白馬節會、內辨忠親卿雨儀謝座無拜以前揖爲失云々、此事尤不審云々、

十二日、丙寅天晴、入夜、爲三方遠向法性寺、十三日、丁卯早旦歸來、入夜富小路方騷動出來、尋問

〔之〕處、川原有引剝者、即搦取之間、打煞了云々、入夜有他行事、密、今日、藏人宮內權少輔親經問送松尾社穢氣之間事、注新統、送之、賴朝之問、自歸還云々、折紙狀云、

松尾社旅所寶殿下、去年死人出來、不取棄之間、即令爛穢了、仍寶殿可被造替、又如此神社穢物令總取棄之後、被行清祓者先例也、於今度者、於其所令爛穢、不似他時事、然者可被改其地、歟之由、社司申之、被尋先例於官外記之處、於造替者、有先例之上、不可及異儀、改其地之條不分明、何樣可被行哉、

請文狀云、

松尾社旅所、穢物出來之間事如此、神事偏守先例、可被計行也、被改其地之條、社司存申之趣、子細未分明、定是爲古來不易之地、歟、若然者、只依一旦之穢氣、難改萬代之基跡、歟、但又可有可准據之事哉、重可被問本社也、所申猶殘狐疑者、宜下宜決占卜、歟、愚案如此、仍執達如件、

二月十三日

〔在判〕

十五日、已晴、早旦向堂、依俊經卿勸進、爲轉讀妙經也、入夜供燈明於佛、是又依或人勸進也、密事也、以智證申上之此日、泰茂來云、一昨日有變、月犯大微屏星云々、此有去年正月、即自攝政被取了云

玉葉卷四十二 元曆二年二月

云、占文云、乙巳占輔臣有殃、又被免罷云々、

十六日、庚午傳聞、大藏卿泰經卿爲御使、向渡邊、是爲

制止義經發向云々、是京中依無武士爲御用

心也云々、然而敢不承引云々、泰經已爲公卿、依

如此小事、輒向義經之許、太見苦云々、

十七日、辛未院主典代來、催中將尊勝陀羅尼、

十九日、癸酉雨下、依故殿御忌日向堂、導師實顯法

眼、題名僧九口、布施取、衣冠如例、今日、余轉讀妙

經一部、他所作等了歸宅、

廿日、甲戌雨下、入夜殊甚、範季朝臣示送云、自住吉

社進奏狀云、去十六日自寶殿神鐺指西方飛去

了、神官聞之云々實希有事也、昔被征討將門之時、住吉

大明神合力之由、有證據等、今又如此、神明未棄

國歟、但無德之世猶以難憑歟、爲之如何、今夜依

夢想、俄修泰山府君祭、

廿二日、丙子先年、余命期、聊有靈告、而女房參詣春

日之時見直了、此事日來忘却、今日、重所語也、仍爲備忘、故注之入夜雨下、

廿四日、戊寅小御堂修二月、行事家司左京權大夫光綱、

職事右馬助國行、公卿左大辨兼光一人也、女房行向聽

聞、大導師行瑋、事了行布施、公卿不取之、大導師被物、基輔取之

六十七



廿六日、庚辰此夜、最勝金剛院修二月也、行事家司木工

頭範季朝臣、職事中務權少輔兼親、公卿不參云々、

今日始日野精進、仍洗髮、此日、上北對屋假棟、依

爲吉日也、大將居所四壁不全、世間狼藉之間有

恐、仍欲同宿此宅之處、屋少程狹、不能同居、仍

立加難屋一兩、可居一所之故、尋日次之處、今

日雖爲天燭日、元慶被立大極殿、爲最吉例、又此

外有吉例等、仍不可憚之由、在宣所申也、仍今日

上之、道勳文吉時午時行事兼親也、如形行小祿云々、

召大藏大輔泰茂、仰泰山府君祭可修、子細有三ヶ

條意趣、天下解體、安穩、除病等也、

廿七日、辛巳此兩三日、寒氣太於冬天、傳聞、九郎去十

六日解纜、無爲著阿波國了云々、件日、住吉神鍋鳴

日也、可謂嚴重云々、

廿八日、壬午天晴、辰刻、參詣日野、相三伴三位中將所作了羞食、

實長入道未刻歸洛、院依御方達可渡御伏見、仍歸洛

率逢御幸、坂イ歟、可用意之由、定能卿告送、仍爲異

其路、自交坊方歸洛、自蓮華王院南大路、出河原

歸宅了、入夜加灸治、依吉日灸初項一所也、此夜、

以大藏大輔泰茂、令修泰山府君祭、都狀之外注意

趣遣之、

廿九日、癸未天晴、未刻、藏人宮內權少輔親經爲院御

使來、仰云、東大寺大佛之後、被築山、而今度欲立

堂之處、彼山爲妨、仍可壞退之由、勸進上人所申

也、更不可有傾危之恐云々、可計申者、申云、此

大佛無煩奉成事、偏彼聖人之力也、至此事一定無

失歟、但猶被召上人、委細問答之後、所申協理

者、早可被壞歟、傾危之條、猶非無不審之故也

者、親經云、左大臣被申、可被行御卜之由、此不

心、內大臣被申、早可被壞退之由云々、今日、法

橋觀性、阿闍梨隆通光房等來、各謁之、隆通初所謁

也、覺成法印弟子、真言事有稽古之聞、仍爲見法

器所逢也、今日、灸治三ヶ所、

三月

一日、甲申天晴、今日、灸治三ヶ所早旦、神事並寫經如

例、其後所加灸治也、

二日、乙酉天晴、灸治七ヶ所、以使者示送切法性寺

樹之間事於尊忠法印許、執行經算、一作會下同所行寄依

之故也、日來以侍等令注之處、切杭四千九十餘本

也、凡非言語之所及、而彼法印、猶經尊不誤之由被答、不足言之人也、

今日、攝政依宇治一切經會、被入宇治、出車三兩云々、是母堂女房等歟、

三日、丙天晴、大夫史隆職來、

四日、丁天晴、隆職注送追討之間事、自義經許申上狀云々、去月十六日解纜、十七日着阿波國、十八

日寄屋島、追落凶黨了、然而未伐取平家云々、

五日、戊雨下、向堂、彌勒講如常、大將同參、尊忠法印被參、最勝金剛院執行經尊依切樹之罪科、欲改

定所職、而今日、尊忠枉可免行之由、泣被乞請、勿論事也、仍不改定、事次第不足言歟、今日、花山大納言來大將亭云々、

七日、庚此日、立北對屋、大將同宿之料也、去月廿六日依爲吉日、上假棟了、依犯土事、相具女房姬君、向堂、入夜犯土了、修土君祭歸來、

八日、辛奉迎惠心僧都造立地藏、三尺、奉禮種々物等、奉禮之、

九日、壬天陰、雨下、

十日、癸微雨、此日、刑部卿已下、鞠足七八人會合、少

將親能在此中、尤有其與、

十一日、甲天晴、此日、造作終功、大將渡居、大將綱代

車、女房同車、大將降自門、常祗候男共乘松明、在

車前、不出車一兩、傳去日、自左大臣家、有追入

事、犯人二人於彼家中自煞了、左大臣逃去之間、件

犯人欲切其首、而礙脇戶不及其身云々、希有

之中希有〔之〕事也、

十二日、乙陰晴不定、大夫史隆職宿禰來、去年以後追

討間所被下之宣旨、注出持來之、

十三日、丙微雨、中御門大納言被來、大將習難波海、

余依灸治隔障子謁之、

十四日、丁雨下、右少將雅行來、大將方、所望祭料陪

從半臂下重、當時輕服之後未除服、仍答、只今身有

憚、難領狀之由云々、及晚、余大將姬君等除服、

陰陽師在宣、大將出川原、余依灸治於門外、除

之、姬君同出門外、家中無便宜之故也、今日、大將

中將等注每日行事、賜之、日々不可懈怠之由

仰之、自今夜以觀性法橋令修月天供、

十五日、戊甚雨、此日、月蝕也、宗嚴阿闍梨率弟子二

口參入、修金輪念誦、月他祈也、又請尊忠法印弟子

三口、欲修大將方念誦之處、依河水溢入馬不通、忽以不參、仍仰宗嚴令修兩方祈、仍結願之後、給兩方布施了、亥刻歸初、子刻復末云々、然而依甚雨不現、

十六日、己天晴、傳聞、平家在讚岐國シハク庄、而九郎襲攻之間、不及合戰引退、著安藝嚴島了云々、其時僅百艘許云々、神鏡劔璽歸來事、公家無殊祈禱、微臣豈欲此事、仍近日殊修隨分之所等、又中心察此事、佛天定有照覽歟、

十七日、庚傳聞、平氏或在備前小島、或在伊豫五々島云々、鎮西勢三百艘相加云々、但實否難知、近日異說非一、此日、旨聖人法華來、參龜大神宮之間、天下可直之由有夢想旨所語也、

十九日、壬天晴、東大寺勸進聖人重源相、具指圖目錄等來臨、大佛後山可壞退之間事也、先壞小分可奉鑄御佛御背云々、此條尤可然歟、

廿一日、甲天晴、院主典代來、催大將云、無緣聖人善妙、於賀茂下社來廿六日可奉書供養一日大般若、而書手不足、可召進五人廿五日夕可召進云々者、申承了由、事體極以見苦沙汰歟、抄貞觀政要、並故殿御記

等、

廿三日、丙甚雨、此日、臨時祭也、大將參入、深更歸來云、依每懈怠、乘燭以後還而被始御禊云々、

廿四日、丁天晴、頭辨光雅爲院御使來、余依灸治

隔物謁之、光雅仰云、追討及神鏡劔璽歸來之間事、

尤可被行御祈、其中可被立公卿勅使之由思

食、而神寶已下用途不可叶、驛家雜事又難叶、然而

於件條者、被廻計略者盡叶哉、神寶事尤有煩、

被減少々如何、兼又、此外何樣御祈可被行哉、可

令申所存者、申云、減神寶、何事之有哉、公卿勅使

尤可被立、他御祈等事、承當時被行之趣、可申

子細如何、光雅云、諸社奉幣、御讀經、御神樂等也、此

外殊無聞事云々、余申云、先可被行秘法兩三壇、

又仰諸宗本寺僧徒等、限期日可轉讀經卷之由、

可被仰本寺長吏也、光雅云、如此事等、皆雖爲

思食事、依用途不可叶無其沙汰歟云々、余答云、於

諸宗御讀經者、忽不可及用途之沙汰、只可被

仰本寺也、但御願成就之後、殊可恩給之由、豫可

被仰歟、於御修法者、誠無供料者不可叶、然

而殊被廻計略者、何兩三壇之程事無沙汰哉、又



申云、東大興福兩寺事、同可有沙汰、抑雖有御祈、不被行德化者、難答天意、仍雖一事、可被施德政者、光雅退下了、

廿五日、戊申御祈之間事、注別紙、送光雅之許、其趣太委、雖恐不叶時儀之事、依冥之照鑒、所申子細也、其趣在別紙、

廿六日、己酉天晴、此日、女房姬君等、依別心願、最密々盡諸春日、共之人淨衣、侍三人、車只一兩也、不使人知之、以母堂尼上爲名云々、去夜有雨氣、而今日天晴、可悅々々、余今日轉讀心經千卷、定長承院宣、可爲賀茂詣扈從之由、僅右大將、申所勞之由了、

廿七日、庚戌天晴、一昨日、付光雅之注文之中、聊有可直事、仍遣尋、即送之、改直又遣之、已欲奏之、傳聞、院昨日參七觀音、給云々、今日、頭辨送書於右大將、上所遣、上右大將殿云々、(仍)傳聞、平氏於長門國被伐了、九郎之功云々、實否未聞、可尋之、又聞、臨時祭日、依及深更、使舞人翌日參社、自<sub>云々</sub>上被答云々、彼日子刻事了云々、遲參之條不<sub>云々</sub>過事歟、廿八日、辛酉右少辨定長來、依招也、余表可<sub>云々</sub>返給之

由、去冬除夜親經告送、仍退可有沙汰之由答之、其後付此定長、申暫不可返預之子細、而去比或人云、已返給表了之由、院知食云々、仍爲示其事、所招也、定長云、件事奏聞了之樣思給候也、但猶可伺便宜云々、又云、賀茂詣扈從公卿皆悉被催、領狀九人、辭退人々又多、其中、實房、實家、隆忠等之事、殊被六借仰云々、又大將事同有種々仰等、尤不便候云々、余云、所勞之上、無可出立力、一切不可叶之由答了、又云、平氏被伐了之由、此間風聞、是佐佐木三郎、申武士說云々、然而義經未進飛脚、不審尙殘云々、小時退出了、

廿九日、壬子天晴、定能卿來、語平氏之間事、如昨日定長語、

卅日、丑寅天晴、今日、灸治三ヶ所、加之、玉堂巨穴中骨等也、玉堂巨穴等、神在心之時可避之云々、但丹家申云、不可避玉堂、膈中可避之云々、和氏申云、紫宮玉堂等同可避云々、而卅七人三月神在心云云、仍日來不灸之、今日入四月節、依爲三月中、依用節分今日灸之、抑、月神事、丹家申無月神之由、和家申有之由、不審之處、余先年見千金秘髓



方有年、月、日神<sub>二</sub>之由見<sub>レ</sub>之、仍所<sub>レ</sub>信<sub>二</sub>和家說<sub>一</sub>也、  
 今日、左中辨行隆來、依<sub>二</sub>灸治<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>謁<sub>レ</sub>之、以<sub>レ</sub>人申云、  
 東大寺之事、條々有<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>、今兩三日之間故可<sub>レ</sub>參  
 云々、余云、造寺料材木之中、大物等可<sub>レ</sub>執<sub>二</sub>大神宮御  
 杣木<sub>一</sub>之由、先日聖人所<sub>レ</sub>示也、有<sub>二</sub>靈告<sub>一</sub>等云々、而明年可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>正  
 遷宮山口年<sub>一</sub>云々、仍年內可<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>彼材木<sub>一</sub>之由所存  
 也、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>忍申沙汰<sub>一</sub>事歟者、行隆日來不<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>、尤  
 可<sub>レ</sub>然之由歸伏云々、抑、余非<sub>二</sub>執權之臣<sub>一</sub>、又非<sub>二</sub>指造寺  
 上卿<sub>一</sub>、然而中心思<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>之條勝<sub>二</sub>等輩<sub>一</sub>、仍聖人及行隆  
 等常來臨示<sub>二</sub>合此事<sub>一</sub>也、余外存<sub>二</sub>奉公之由<sub>一</sub>、內爲<sub>二</sub>勝  
 因<sub>一</sub>所存等所<sub>レ</sub>示也、

#### 四月

一日、寅陰、平座如<sub>レ</sub>例、右兵衛督賴實、源中納言通親、  
 左大辨兼光參行云々、今日、朝間神齋、午後解<sub>レ</sub>之如  
<sub>レ</sub>常、早旦寫<sub>二</sub>心經一卷<sub>一</sub>例事也、

二日、卯天晴、今日、依<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>幣於春日神齋<sub>一</sub>、此日、爲<sub>二</sub>方  
 違<sub>一</sub>向<sub>二</sub>法性寺<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>定法寺<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>本所<sub>一</sub>姑渡宿也、雖<sub>二</sub>靈告<sub>一</sub>方<sub>二</sub>於<sub>一</sub>本宿之所者、無<sub>レ</sub>禱之由、在<sub>二</sub>宣所<sub>一</sub>申也、

三日、辰天晴、大夫史隆職來、語<sub>二</sub>世上事<sub>一</sub>、伊勢杣材木

等、役夫工之山口祭以前可<sub>レ</sub>取之事、余示<sub>二</sub>隆職<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>甘  
 心之氣<sub>一</sub>、此夜、祭除目云々、

四日、巳雨下、早旦人告云、於<sub>二</sub>長門國<sub>一</sub>誅<sub>二</sub>伐平氏等<sub>一</sub>  
 了云々、未刻、爲<sub>二</sub>大藏卿泰經奉行<sub>一</sub>、義經伐<sub>二</sub>平家<sub>一</sub>了由  
 言上、其間有<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰合事<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>參入之由、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>下  
 之、灸治無<sub>レ</sub>術之間、相<sub>二</sub>勢今兩三日之間<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>參之由申  
 了、相次頭辨光雅朝臣來臨、余如<sub>レ</sub>例隔<sub>二</sub>障子<sub>一</sub>謁<sub>レ</sub>之、  
 依<sub>二</sub>灸治<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>衣服<sub>一</sub>之故也、光雅仰云、院宣云、追討  
 大將軍義經、去夜進<sub>二</sub>飛脚<sub>一</sub>、相<sub>二</sub>副<sub>一</sub>札申云、去三月廿四日午  
 刻、於<sub>二</sub>長門國圍<sub>一</sub>合戰、於<sub>二</sub>海上<sub>一</sub>合戰云々、自<sub>二</sub>午正<sub>一</sub>至<sub>二</sub>哺時<sub>一</sub>、云々  
 伐取之者、云々生取之輩、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其數<sub>一</sub>、此中、前內大臣、  
 右衛門督清宗、內府子也、平大納言時忠、全真僧都等爲<sub>二</sub>生  
 虜<sub>一</sub>云々、又寶物等御座之由、同所<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>也、但舊主御  
 事不<sub>二</sub>分明<sub>一</sub>云々、次第如此、此上事何樣可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行哉、  
 先生虜等事如何、次三種寶物歸來之間事又如何、此兩  
 條殊可<sub>レ</sub>計申云々者、余申云、生虜等事短慮難<sub>レ</sub>及、只  
 在<sub>二</sub>數慮<sub>一</sub>、三種寶物歸來事、自<sub>二</sub>戰場<sub>一</sub>歸洛之間事、偏  
 爲<sub>二</sub>武士之沙汰<sub>一</sub>、公家不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知食<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、只不<sub>二</sub>事問<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>  
 左右<sub>一</sub>率<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>具三神<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>歸洛也、其後始可<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>天應<sub>一</sub>、  
 其來着之所、鳥羽御所可<sub>レ</sub>宜歟、豫得<sub>二</sub>其告<sub>一</sub>、先法皇可<sub>レ</sub>

渡御也、其後奉迎取御璽神鏡、更可被告申公家也、其時忽促車駕臨幸、奉爲先御璽還幸內裏、次第尤穩便歟、故何者、先公卿次將等參戰場事、太不叶物儀、還可爲擁扈之基、仍武士等無左右奉相具、可參洛也、次入御內裏之次第、次將奉持之、公卿步行供奉之條、偏可似讓位之儀、頗有憚、此外又無他計、仍爲奉迎三神、有行幸之條、於儀可謂崇重靈器、於禮又穩便歟、次可來着鳥羽給之由令申故者、武士等奉具不備威儀令入洛中給之條、尤非穩便歟、仍可有行幸鳥羽之由所申也、愚案之所及大概如此者、光雅云、上皇之宮御璽渡御如何、余云、此儀可然、但御璽渡御之時、避正居可御他屋也、是恐思食之儀也、惣非院御所之條者、還又可無便、隨宜之儀、何難之有哉、又云、歸京之間、海陸其路如何、余云、以無恐可爲先、可被尋知案內輩也、

光雅私示云、欲被十二社奉幣、而既成追討之功了、然者於今者暨被延引、可被申此慶由歟、是內々所申也、余云、努力不可然也、殆可被縮行也、其故追討之條雖無疑、三種寶物事猶以有不審、

是脚力中狀、不分明之由、光雅所申也、

縱雖安穩御座、非無歸路之恐、然者彌依得此告、雖片時可被忝立也、不可及異議云々、光雅甘心退出了、今日、佛殿聖人來、聊有示付事也、爲鎮夢、植小禮於南築垣下、五本植之、書藤花字也、早旦見聞書無殊事、季長朝臣任大宮亮以外之慶也、

五日、戊天晴、法性寺山立五輪卒都婆二本了、同依夢想也、今日、隆職宿禰來、談世上事、

八日、辛天晴、梅宮祭也、然而依爲輕服日數內不奉幣、又無由被、去四日、松殿女子、逝去、年八歲云々、

入夜、頭辨送札云、神鏡神璽歸御之間事、可注申子細、先日余令申趣、頗叶寂慮云々、

九日、壬天晴、隆職來、語世上事等、此中、語昨十二社奉幣延引事、此事太不可然、先日余示光雅一事也、

十一日、甲雨下、大外記賴業持來神鏡神璽歸御之間勘草、

十四日、卯天晴、入夜除服、依灸治不出川原、於門邊除之、大將姬君同之、是依入道關白女子亡

沒也、圖書頭在宜來、口日時方角之間事、

十八日、辛未花山院大納言來、明日賀茂詣、大將可參之

間事等示合之、施樂院使賴基參來、令見女房顏腫、

申難熱之由、余又針、退下、

十九日、壬申雨下、此日、攝政欲參賀茂、而依甚雨延

引、來廿二日可參詣者也、今日覽神寶、賜舞人陪

從裝束了云々、今日雨若有改事歟、可恐々々、賀

茂社司等進葵大將方同前、今明日神齋如例、

廿日、癸酉天猶陰、此日、賀茂祭也、近衛使右少將雅行朝

臣、皇后宮使大進家實、院有御見物者、午刻、頭中將

通資朝臣爲院御使來、問云、神鏡等已着御渡邊之

由、義經自路進飛脚、去夜到御入洛之日、可被擇日

次、仍被問陰陽家之處、明日<sup>日</sup>并廿五日等爲吉

日之由所注申也、而明日事、卒爾而議之間、自有

御後悔歟、仍被延行廿五日如何、兼又建禮門院、

并前內府同以所相具也、彼人々事何樣可有沙汰

哉、可計申者、

余申云、先被忌日次之條、可依入御之儀也、若

有行幸城南者、何強及日次之沙汰哉、於內裏

被奉受取者、尤可被擇日次歟、但縱雖可被

擇日時、於入御諸司者、全不可及異儀、徒御

逗留城外之條、一切不可候事也、凡者今日評定

了、明日入御何有煩哉、然而件條若難叶者、不論

日之吉凶、早速可入御諸司也、其後擇日、可有

次第之沙汰歟、兼又生慮等事、偏在寂念、左右不

能計申者、頭中將退出了、

廿一日、甲戌陰晴不定、申刻許、頭中將通資朝臣送札

云、今日、於院懸鏡入御事、可有議定、可豫參者、

乘燭之後、着直衣冠參入、經家朝臣來門下云、人

人皆束帶也云々、余以件朝臣示頭中將云、昨日可

有仗議之由、有命之時、上表之後、未返給之上、

依病加灸治、盛爛不能着朝服、乃難參仗議、於

院有內々議定者、非稠人之時、及夜漏可

參候閑所之由申了、而不被仰裝束事、只被示

送於院可有議定之由、仍存內議之由、參入之處、人

人皆束帶、仍不能候座、欲罷出者、歸來云、相觸

左府之處、全不可有憚之由被申云々、余猶云、一

切不能候座、旁無便歟者、追可被入見參、已罷

出了者、即廻轅欲退出之間、經家又走來云、只候

別座、可預其儀之由、有別御定者、仍銷燭竊以



參人、候上達部座、左大臣以下公卿十餘人、候殿上、即頭中將通資朝臣、下官外記勘文於左大臣、仰云、官外記勘申神鏡神璽歸座之間事、就勘文趣可定申者、左大臣見勘文了、更招頭中將被與余、々不能披見返了、其後次第見了、至左大辨兼光前披勘文、此間、左大臣仰可讀申之由、即兼光卿讀申之、先官、大官勘文皆悉讀之、於外記勘文者、取要略之、依大臣命也、於據勘所者皆讀之、皆悉讀申了取笏候、大臣仰可定申之由、兼光發語取條云、官外記勘申神鏡神璽還御間事云々、已上大臣、略同前歟、皆悉定申了、至左大臣、其後、頭中將人々定申旨也、來余前、余申所存了、人々定申之間、余於參御所、又次通資朝臣歸來、仰左大臣云、猶一同可定申云云、人々議定太狼藉也、定了、余又申存旨如初、其後、頭中將仰內覽之後、可被仰左右、人々早可退出之由仰之、仍人々退出、依見證待三人々退出、最末余退出了、人々定申趣、大概注之定有御事、歟、取要注之也、左大臣、實房卿、忠親卿等申云、爲武士之沙汰、可入御諸司、官初自彼以吉日、調威儀、次將卿奉威儀、可入御大內、諸衛司之外、上卿參議各一人可候、不

可及皆參者、

內大臣、實家卿等申云、遣當時在內裏之內侍所御辛櫃於鳥羽、奉納神劍、暨以武士守護之、待吉日可入御閑院、大內不可然、又內侍所御神樂召人可被用御祈之時御神樂所作人云々、

雅賴、經房、通親等申云、臨幸城南可被受取、又可被報、山陵諸社云々、重仰云、城南臨幸不可然、就入司、諸衛、上卿參議等於鳥羽、可被奉迎云々、御之儀、可申者、各申云、並遣諸

兼光申云、諸司、諸衛、上卿參議等相具年料辛櫃、參

鳥羽可奉迎云々、

宗家、雅長等申狀不聞及、仍不記之、

余申云、可臨幸鳥羽之由、先日定申了、是入御之儀、爲新儀之上、叙威之餘爲奉迎、臨幸便宜之離宮、被奉受之條、頗可然之由、存思給故也、而可被忌日次之由有其沙汰、然者、此儀頗可違歟、其後、吉日若在今明者無異儀、如承者、廿五日七日之間云々、仍其間御逗留留城南之條、一切不可然、仍此儀不可叶、於今者雖一日早速先可有入御諸司也、其儀、參議次將已下、諸司諸衛御迎可參也、是天平勝寶元年被奉迎八幡之時、參議年足



以下參入之由見國史、今當近將之參議尤當其仁、  
歟、爲武士之沙汰、入御諸司之條、凡以不可然、  
太可無便歟、其後、以吉日可被奉受取里內、  
儀不可然歟、尤可被用大內也、件日、大臣以下  
諸卿可皆參也、於南殿受取之、可有宣命宣制  
之儀歟、但宣命不御、頗似遺恨、仍縱雖無宣制、猶於  
南殿可被受取也、其後有遷幸、內侍所移御之後、  
可被行御神樂歟者、

以泰經卿密々被尋問事等、

一建禮門院御事如何、其御所京中歟、城外歟、將又不  
知食、只可爲武士之家歟、

申云、被付武士事、一切不可候、古來、女房之  
罪科不聞事也、可然片山里邊可被座歟、

一前內府事如何、義經申云、相具可入京歟、將又可  
留置河陽之邊歟、死生之間事、可被仰合賴  
朝歟、私申遣了、飛脚未到、進退惟谷者、此上如何  
可計申、

申云、此事更不可思食煩也、被仰追討之由、  
可梟首之由雖無疑、爲生虜參上、其上可賜  
死之由難被仰、我朝不行死罪之故也、保元

有此例、時人不甘心、仍今度、無左右可被處、  
遠流也、而其國可有用意、於南北西之三方者  
不可然、可被遣東海東山等之遠國也、沙汰之  
趣無難、而叶賴朝之雅意歟、被遣御使、徒經  
數日之條、太以見苦歟、又事似有私之故也、泰  
經大以甘心、

一賴朝賞事、可被仰依請之由、將暗可被行歟、  
其實如何、

申云、理須暗被仰也、而彼意趣難知歟、仍被仰、  
依請之由如何、但其賞上階之上、都督若衛府督等  
之間歟、此賞等定無不快之思歟、仍被行之條宜  
歟、但可在觀念者、泰經奏事之由、賴朝賞事、猶  
暗被仰事、有猶豫可被仰合云々、他事等有  
御甘心云々、

退出之次、參入條院、深更退出了、

廿二日、乙天晴、此日、攝政賀茂詣也、依別院宣大將  
相伴、不召具一員等、依事體無骨也、爲大將之  
人初參、必召具一員、後々不然也、上臈隨身番長、萌  
木狩袴垂之騎、移馬下臈五人、朽葉狩袴垂之、并壺  
胡錄也、是久安三年、雅定卿爲納言大將、第二度供奉

例也、此外、先例不見之故也、前駟六人、雜色百卅人、隨見口長或着<sub>レ</sub>沓垂袴云々、然而皆步、垂<sub>レ</sub>裾、平禮、在也、異樣雜色等不平禮、又插<sub>レ</sub>尻也、牛童垂<sub>レ</sub>裾如<sub>レ</sub>雜色、車副插<sub>レ</sub>之、又故實也、他人皆垂<sub>レ</sub>之、非也、舍人裝束、虫襖濃款冬衣帷等也、不着牛童赤色款冬衣、番長厚次所<sub>レ</sub>騎之馬頗揚々、於<sub>レ</sub>院御棧敷前、優美之由、後日見人示<sub>レ</sub>之、

抑、今日賀茂詣、萬人歎息、殆不<sub>レ</sub>異禽獸歎、可<sub>レ</sub>悲可<sub>レ</sub>々、一、天下餓飢、二、神鏡等歸來之沙汰、無<sub>レ</sub>他事之境節大營不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然事、三、天下穢氣充滿有<sub>レ</sub>恐事、四者舊主二品等事、心中無<sub>レ</sub>哀傷之思哉、不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>恩者禽獸也、萬人彈指云々、

爲<sub>レ</sub>發二日之榮華、不<sub>レ</sub>願四々之謗難歎、叶<sub>レ</sub>神慮哉否、始終可<sub>レ</sub>見事歎、

自<sub>レ</sub>去夕有<sub>レ</sub>五體不具之穢、晚頭、大將歸來、自<sub>レ</sub>祇座退出了云々、本所并神館、行雅取<sub>レ</sub>沓云々、

廿三日、丙天晴、申刻、頭中將通資朝臣來、依<sub>レ</sub>穢於<sub>レ</sub>緣謁之、傳<sub>レ</sub>院宣云、神鏡入御事、任<sub>レ</sub>定申旨、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>差進諸司諸衛也、而公卿可<sub>レ</sub>相具哉、上卿參議各一人歎、將公卿不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>參歎、又職事一人可<sub>レ</sub>參候歎、

五位藏人歎、又自<sub>レ</sub>諸司入<sub>レ</sub>御大內之間儀可<sub>レ</sub>計申、又<sub>レ</sub>候前後之內侍、前行內侍不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>物歎事、又入京之日供奉人、騎馬步行事、申云、

可<sub>レ</sub>參御迎人事、

先日、子細議奏了、辨官職事各一人、諸衛諸司等無<sub>レ</sub>異儀、其上可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>副公卿一人也、兼<sub>レ</sub>近將之參議宜歎、上卿之條不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>必然歎、且如此事、可<sub>レ</sub>追<sub>レ</sub>先例、而彼天平勝寶元年例尤宜歎、但又雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>副上卿一人、全不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>難、

職事誰人可<sub>レ</sub>參哉事、

頭中將參可<sub>レ</sub>宜歎、

入<sub>レ</sub>御內裏儀事、

公卿可<sub>レ</sub>皆參也、又於<sub>レ</sub>南殿可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>受取給、須<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>宣制之儀之處、寶劔不<sub>レ</sub>御、頗以遺恨、宣命之趣如何、但不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>寶劔之有無歎、假令雖<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>宣制之儀、必於<sub>レ</sub>南殿可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>受取也、行<sub>レ</sub>返節刀之時例、尤可<sub>レ</sub>相准歎、其後臨<sub>レ</sub>幸內侍所、奉<sub>レ</sub>還<sub>レ</sub>納本辛櫃之後、可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>御拜、其後供<sub>レ</sub>神膳、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>御神樂歎、其召<sub>レ</sub>人被<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>公卿如何、似<sub>レ</sub>消暑堂之儀可<sub>レ</sub>

「憚哉否、宜在勅定者、抑自諸司入御內裏之間、神璽近將可奉疊敷、可納辛櫃敷、可有儀敷、又忌部供奉此事如何、  
內侍事、

前行內侍可空手敷、將可先聖敷、可被止一人、事專不可然也、

入京日、供奉人、騎馬步行事、

洛外騎馬、京中步行、可宜敷、

廿五日、戊寅此日、神鏡神璽御入洛云々、兼忠爲行事、仍問雅賴卿、返札如此、

元曆二年四月廿三日頭中將通資朝臣、奉狀曰、

來廿五日神鏡可令入御朝所、其間事可令奉行給者、依御氣色執達如件、

四月廿三日

左中將 在判

謹上 權辨殿

逐申、大藏省辛櫃二荷候、

神殿御裝束事、殊可令尋沙汰給、以吉日渡御本殿、彼御裝束、同任例可有沙汰候也、所置御辛櫃、無渡綱、早々可令尋沙汰給、入御諸司之時、以大藏省辛櫃可被渡候也、同可

令下知給、內々且可申遣卿許也、定其沙汰候敷、

同廿四日、雅賴相具行事辨參朝所、雖非奉行者口入、雖有其憚、爲教示兼忠密參也、史生盛安、官掌爲久等、相具入官東門、令開朝所之新造廊、大藏省所新造也點定賢所御所了、於朝所本屋者、寸法高廣、其隔等不可叶於卒爾之造作之上、新造廊尤有便宜之故也、以西第三間母屋一間南庇一間、合二壺、可爲神殿、北壁腋戶也、西東每間有妻戶、南有部、不及新隔、如溫明殿西向戶懸簾可開之由下知了、第二間南部、又可懸簾、又爲女官祓候、疊兩三帖可仰掃部寮、爲安御辛櫃床可令造之由等、行事辨下知官掌了、今成宣旨令付也、退出後、頭中將奉狀又到來、

明後日、廿五可有賢所御入洛、可令參向給者、依御氣色執啓如件、

四月廿三日

左中將 在判

謹上 權辨殿

逐申

每事令沙汰具給、午着御草津也、未明、可令

參給(歟)之由候、

行事辨奉了由、令返答了、

且又陸職宿禰參仕朝所、可沙汰其所御裝束事之由下知了、

廿五日、戊天晴、雅賴密々相具行事辨參向草津、船

侍五人、辨侍一人在後、行事辨相具深沓并裏無等、

是爲備步行也、史生盛安、官掌爲久等、今朝沙汰、

具幄慢等、參向草津了云々、酉初、參着高島橋下

方、不幾付御船、二河市古勢船也、中程船、爲神殿

去御船岸上北方立幄、之、女房一人在御船、稱典侍、不知誰人、

方差退立幄、南北爲職事次將等座、上卿權中納言藤

原經房、參議左中將藤原泰通等卿、權右中辨源兼忠朝

臣、着北幄座、藏人頭左中將源通資朝臣、藏人左衛門

權佐藤原親雅、左中將藤原公時、右少將藤原範能等朝

臣、着東幄、官掌召使無指座歟、左右近將監已下參

否、可尋之、

內侍所命婦、云々一博士、女官等參仕、乘燭之後、職事

等入御船中、令博士奉、令移入寶所於省辛櫃了、

次泰通卿參入、取神璽奉入同辛櫃了、女官等奉

昇出之了、駕輿丁奉荷寶所、衛士奉荷神璽

了、

此間、頭中將乘車先行了、

次行事辨着深沓一行前、

次參議、御、

次上卿、次將、御、

次御辛櫃、以兩面覆之、

次神璽御辛櫃、同上、

次藏人佐等供奉、

路間或騎馬各別路云々、行事辨兼忠、始終步行云々、

路自作路經羅城門、自朱雀大路北行、於六條朱

雀有院御見物、御、云々、自六條東行、自宮城東

大路北行、自待賢門官東門入御、奉安朝所、陸職

宿禰經沙汰候也、注可尋、祓候女官交名、注之、

今夜、尤可有供神物歟、爲藏人方沙汰、行事辨不

知之、其事不聞也、守護諸衛交名、同可尋注之、

廿六日、卯天晴、此日、前內府、并時忠卿以下入洛云

云、各乘車、上車簾着淨衣云々、清宗卿同車前內

府云々、盛隆、季貞以下生虜、并歸降之輩、騎馬在車

後、武士等圍繞云々、兩人共安置義經家、如風聞

者、來月四日相具義經可赴賴朝之許云々、昨日實



家廟寢去云云、可憐也、今日、頭辨光雅朝臣來、依穢余下廣廂、謁

之、光雅朝臣、賴朝賞事、於官者、指其官、

兩、可、依、請之由、可、被、仰遣也、於位者、且可、被

受之、而先例於殊功者有越階之恩、仍可、叙正

三位之處、清盛之例不快、於從三位者頗無念歟、

賴政雖無指功叙之、不可必庶幾歟、仍被叙

從二位如何、可有其難哉、可計奏者、余申云、

正三位清盛之例、從三位賴政之例、賴朝共以不可嫌

申事歟、雖然若有其疑者、被叙二位有何難

哉、勳功之超先代、和漢無比類之故也者、光雅退出

了、

余竊案之、太爲過分、只被叙三位、可被相加

官也、然而此儀出來之上、誰人申不可被許之由

哉、勿論事歟、

又泰經卿以御教書問云、明日、女院可有入洛、其

儀如何、申云、更不可及威儀、仰付可、然之人一

人、內々可有其沙汰者、

廿七日、庚辰天晴、此日、神鏡神璽自朝所入御大內、

先有行幸云々、子細可尋記之、自今夜、即被行

內侍所御神樂云々、東大寺勸進聖人來、余奉渡、可

率、隨大佛之舍利三粒、奉納五色五輪塔、相具願

文、其上入錦袋、是又五色也、

廿八日、辛巳天晴、傳聞、去夜入御諸司之時、供奉之輩

參仕、無諸卿皆參之儀、先行幸、其後渡御云々、神鏡

御溫明殿之後、奉移元御辛櫃云々、神璽同入御

溫明殿、開辛櫃蓋、頭中將通資朝臣取之、持參御

殿云々、

昨日被宣下賴朝賞、叙從二位云々、上卿實房卿、依

云々、又聞、自草津入御之儀、泰通不帶弓箭云

云、太不可然歟、

廿九日、壬午天晴、大外記賴業來、授左傳第三於大將、

又語世間雜事、不具記、以字治左大臣、九條大相

國、信西等之力、支外記之事之由所語也、

## 五月

一日、癸未雨下、御幸法勝寺云々、卅講初也、

二日、甲申藤中納言定能來、余通達平氏之由、自攝政

邊被云出云々、其事可申院之由所示也、先物語

之體、可申之由相含了、

三日、乙酉天晴、午後時々雨下、申刻、內大臣息侍從公繼

來、著水于綾束、浮線綾白水生年十一歲、容顏美麗、進退叶  
干機、細葛袴、紫衣、度、先彈尋陽之曲、次有連句之興、云、彼云是、得  
其骨、足歎美、及晚歸了、余志與手本二寫、和字漢字、各一寫、行  
成中宮宜、目等筆也、綾紅薄樣、件人能書之由傳聞、仍尋取見之、  
實垂露之點、有其勢、仍感荷之餘與、屬一本、故殿御、爲  
謝、彼悅、今日所來也云々、觀性法橋相具密令所來  
也、

今日午刻、頭辨光雅朝臣、爲院御使來、余著直衣、  
謁之、問二條事、

一時忠卿申云、伴賊赴西海之條、雖爲難、通之過  
息、於神鏡之安全者、時忠之殊功也、縱有重科、  
依此功、被免流刑、欲安堵京都、卽剃首染衣、  
可隱居深山也者、申狀如此、可有寬宥哉否、  
宜計奏者、

申云、左右偏在勅定、不能計奏是非、  
一前內大臣未、被下除名宣旨、被勸罪名之時、  
被除名了、載配流官符之時、左遷之條如何、大  
臣之配流、被補太宰權帥一定例也、而今度可被  
遣關東、仍東西參差、不能左遷、准納言以下  
例、左遷權守、又無其罰、歟、左右之間可計奏

者、

申云、於權帥者、一切不可、然、權守之條又無謂、  
同爲新儀者、只無左遷之儀如何、不可似彼高  
明伊周等之例之故也者、

四日、丙天晴、藏人次官定經送書於大將、送人曰、來  
六日廿二社奉幣事可奉行、申承了之由、又立神  
事簡、

五日、丁早旦以御教書、奉幣行事辨、并大外記賴業、  
大夫史隆職等之許、仰遣明日奉幣雜事可催具、并當  
日可有定之由、定經可有當日、又大內記之許、可早  
參之由殊仰遣之、皆大將之奉書也、今日依彌勒講  
參堂、先令讀懺法、一時講了歸來、

六日、戊天晴、此日被發遣廿二社奉幣、當日先被  
報賽追討成功之由、兼又寶劔可出來之由、被同  
被謝申也、右大將勸上卿、辰刻參陣、先有被事、先是  
也、申刻歸來、具在大將記、歟、行事辨權右中辨兼忠  
云々、

自神祇官被發遣近年例、近日皇居大內也、仍引  
參彼官了、路不審、雖問人々、不分明、仍以今案、  
經宣仁、布政、宣陽、春華等門、并壬生、大炊御門等、

入自神祇官北門云々、又爲給伊勢宣命、着東屋之時、用南面東第一間、是元永元年故殿令用給之路也、上欄座在第二間也、

七日、丑天晴、入夜大將有小文會、資隆入道來、今曉、左馬頭能保、大夫尉義經等下、向東國、前內大臣父子、并郎從十餘人相具云々、是非配流之儀云々、

九日、卯天陰、今日吉競馬五番云々、大將隨身番長敦次合近衛助信、敦助持云々、

大夫史隆職來、去月廿五日、神鏡神璽入洛之儀、行事史注文、并船津指圖等持來之、

十一日、巳天晴、自今日被始院供、尤每年例事、

今日、佛殿上人來、語此文事、隆職志與馬一疋云云、

十四日、申今日、轉讀法花經一部、依或人勸進也、傳聞、六月法皇幸日吉、可有競馬云々、

十六日、戌陰晴不定、時々小雨、大將可參最勝講之由來催、申承了由了、

十九日、丑雨下、早旦歸九條、午刻許大外記賴業來、追討以後可被行之事、頭辨光雅內々尋問其勘草、所歸來也、又云、明日可被行流人之事、其人未

承及云々、

廿日、寅天晴、傳聞、賴朝所申給之國々、多以可返上云々、可被施德化之由、以假名狀付定能卿奏院、偏依思天下也、不願時議、只存恩志耳、

廿一日、卯天晴、昨日被行流罪僧俗并九人云々、上卿通親卿、請口參議兼光云々、

時忠卿、能登、信基朝臣、備後、

時實朝臣、周防、尹明、出雲、

良弘、前大備部、全真、前備部、

忠快、前律師、能圓、法眼、

行命、熊野別當、

今日、定能卿來、依院穢不昇上也、

廿二日、辰此日、大夫史隆職來、入夜民部卿成範來、余謁之、件人觸院穢了云々、而無左右入來、不足言也、

此晚有指期之吉夢、六廿三、

廿三日、巳雨下、此日、最勝講初日也、

證議者、山階寺別當僧正信圓、

講師、

範玄、雅緣、

靜嚴、覺辨、

辨曉、信宗、

公胤、行舜、

顯忠、貞敏、

聰衆、

隆延、尊長、

增運、勝信、

親俊、眞雲、

範慶、貞慶、

範圓、顯圓、

依觸院穢、大將不參最勝講、

廿五日、未天晴、右近廳頭清景來、申云、來月廿日可

有日吉御幸競馬、本府可用意幄、而件幄具等、爲

群盜被取了、尤可有御沙汰云々、付年預將可

申上之由仰了、此夕、佛殿上人來、有示付事等、

廿七日、酉甚雨、最勝講結願也、大將中將等參內、皇太

后宮亮行雅在共、中將先歸來、大將依行賑給事遲

遲、不經幾程、又以歸來、

今日、大將爲上首參入、公卿七人云々、大將行香路、

中將祿路、頗相違人々所存云々、是皆有二所存也、

行香路故殿御例、祿路知足院殿御例也、

今日、大將賑行定、以外記內覽云々、余所存以辨

可內覽、而依兼光申、以外記覽之云々、若是近例

歟、然而何乖父祖之跡哉、仍加勘發了、

今日、有僧事、並小除目云々、上卿賴實卿云々、

廿八日、戌自去廿三日、基輔有所勞、存風病之由、

浴湯、其後增氣、若近日之病歟、世稱入海今日、汗出云

云、

六月大

三日、甲天晴、自今日令參僧於春日御社、限廿ヶ

般金剛爲祈夢想也、示付僧正了、又自今日法

印被始十一面供了、同依夢也、又或僧一人令參

詣長谷寺、

今日、午刻、右馬權頭基輔朝臣、忽然而逝去、余聞此

事、悲泣無限、自幼稚之昔至壯齡之今、偏生長自

家中、大小巨細、一事已上未曾違命、心操穩便、有

志奉公、況又暮年之父母、眼前遭此悲、失現當之

羽翼、推其哀憐、無物於取、噲者歟、今夜、其父母先



以向雲林院、明曉、竊送亡者於同所云々、

今日、大外記賴業來、余傳受三路、是又依夢想也、

四日、乙基輔今日葬了云々、依存日遺言、不口日吉凶已下障障等云々、

八日、己未入夜、定能卿傳院宣云、可給國也云々、而無可然之國、伊賀、甲斐、上野、此中如何、申云、皆不能更務、朝恩以此仰可足、須期後關敷云々、

九日、庚申定能卿依妻產、退出自今熊野云々、仍泰經卿之許、申彼三ヶ國辭退之由、若依恐被推任之故也、

十日、辛酉此日、除目也、入道關白給能登、本上四門院知辭退、被給余和泉、資賢卿辭退、塞置國也、二位大納言兼房給出羽、遠遠之頃、雖不備當要、拜領一州之仁、是此外事不記、抑、和泉國司申補基輔息小男也、雖在中陰中、依有例也、依思彼父之遺德、強所申補也、人以爲可云々、

十一日、壬戌天晴、靜賢法印來、語世上事、并基輔之間事、深更雨下、見聞書、經家任內藏頭、季經始任刑

部卿、賴輔卿子賴經任宮內卿、叙四品、而賴輔卿依爵申、季經任宮內卿云々、輕々沙汰敷、

十四日、丑天晴、大外記賴業來、大將受左傳第六局、此次申云、此間、有被尋問事等、可被求寶劔之間事、并先朝御後可被行之間事等也、

明後日、十六可有還幸閑院、其後可有仗議云々、今日、光雅朝臣以書問云、寶劔歸來以前、行幸之儀如何、前行之內侍可持神璽敷、將存如在之禮、空手之內侍可前行敷、可計申者、請文狀云、

寶劔歸來以前行幸儀事、

右此事誠難思得候、但被祈申歸座之間、雖須用如在之禮、空手之內侍前行、持璽之內侍扈從之條、偏重未歸來之寶劔、似輕已歸座之神璽、加之、云劔云璽、皆是守護君之靈器也、當時現在之御護、尤可前行敷、寶劔歸御之時、被復舊儀、有何事哉、君猶可被行如在之儀者、兩內侍共前行又如何、空手之內侍在左、可准持璽內侍可在右、凡內侍奉從君之禮、尋常之儀雖在前後、威儀之時依候左右也、朝拜之儀如此此事已爲無例之新儀、被准有跡之大禮、不可有其難敷、兩ヶ之間、宜

在聖斷者、以此等之趣、可被議奏之狀如件、

六月十四日

十五日、丙寅天晴、召使來云、

明日可有行幸、右大將可參云々、申承了之由、此日、長光入道來、

十六日、丁卯天晴、此日、自大內還幸閑院第、大將欲

參之處、有觸丙穢之事、仍不參、行幸之後有仗議云々、依丙穢難參社頭之由申院、被仰路頭可供奉之由、

十七日、戊辰天晴、昨日定事、大外記師尙示送之、

參入公卿、

左大臣、內大臣、

中御門大納言宗家、

左衛門督實家、

梅小路中納言長方、

新藤中納言經房、

左大辨兼光、

被定事、

神社報賽事、

同封戶事、

改元事、

山陵使事、

德政事、

爲凶卒修善事、

定文章尋遺兼光之許之處、人々未注送、申狀隨到來、可付上卿、明日明後日之間可進云々、

廿日、辛未天晴、此日、法皇相率舞人、并競馬乘尻等、

參詣日吉社、但御出家之後、依無被召具一員之例、六府不供奉、且又保延三年八月、故院御幸日吉

之例也、但彼御出家以前也、右大將供奉、依觸丙穢、不參社頭、自栗田口邊歸家了、供奉之儀、頗異他人云

云、

保延例、上下蒔繪劔、隨身又垂袴之由見日記、不注其色、然

而記如格、而天仁有日吉八幡、競馬御幸、無一于時、知

足院殿帶螺鈿劔、御隨身着染分袴、左蘇芳、右朽葉、

府生以下如此、但垂袴、壺胡錄之由、見御曆、

今日、大將供奉、依彼例也、近代人謂以、着染袴之

時、必絹葉巾、垂袴之時、必爲襖袴云々、此事不知

案內也、仍逐天仁例耳、攝政并內大臣、只如常

也、

舞人、

左中將公時朝臣、

左少將兼宗朝臣、

右少將伊輔朝臣、

左少將親能朝臣、雜色八人、白院給、當

色依、龍愛也、

右兵衛佐仲經、

右兵衛佐顯象、

左少將宗長、

左兵衛佐範行、

藏人右兵衛尉康宗、

藏人右兵衛尉正光、院藏人、

乘尻、近武已下廿人、交名在朝日號馬記、

今夜子刻、大地震、不異治承之例、可忍々々、今夕、

隆職來、

廿一日、壬天晴、此日無三片舞云々、舞人不着三舞人

裝束云々、

競馬奏、次將取之、左公時朝臣、右實明朝臣、

一番、左近將監中臣近武、鼓、右近將曹下野厚助、

二番、左近將曹下野厚助、鼓、右近將曹下野厚助、

三番、左近將曹下野厚助、鼓、右近將曹下野厚助、

過掉了、近文雖被引落、猶被定持、

四番、左近府中臣武友、追勝、右近府長泰兼弘、

五番、左近府生下毛野忠武、持、右近府長泰兼弘、

六番、左近府生下毛野厚近、追勝、右近府長泰兼弘、

兼景嫌申馬、厚近申、可乘替之由、勝了、高名之由、人々令稱云々、

七番、左、番長播磨良弘、桑行弘、儲勝、

八番、左、番長下毛野賴久、近衛下毛野助信、追勝、

九番、左、番長下毛野助廣、番長桑兼澄、儲勝、

十番、右、下毛野厚近、儲勝、右近府生佐伯國方、儲勝

廿二日、癸天晴、大藏卿泰經傳院宣云、前內府、并其

息清宗、三位中將重衡等、義經相具所參洛也、而乍

生入洛無骨、於近江邊可梟首其首、可渡使廳

哉、將可棄置一哉、可隨院宣之由、賴朝卿令申旨、

義經所申也、可計申者、但重衡ハ遺、南都了云々、余申云、此事左

右只可在勅定者、

廿三日、戊天晴、入夜雨下、泰經卿又示送云、此事難

計申之由令申、太以無本意、自今以後如此事、不

可被仰合、歟云々、此事勿論也、不足言云々、光

長朝臣來、只今於院定長語天氣之趣、即如此云々、

不能左右、々々々、古來備勅問之人、若有不思

得事之時、伏請聖斷、已為流例、然而未聞、蒙勘

實之例、凡於事為法皇不許之身、爭雖一日、經廻

哉、可忍々々、就中於此事者、初為生虜、參洛之

時、所存計申了、事宜之由有天氣、又人々響應、而其

事不遂行、其後沙汰之趣一切不聞及、今又有此問、

誰人申是非哉、可謂嗚呼々々、

傳聞、重衡首於泉木津邊一切之、令懸奈良坂云、於前內府父子者、及晚渡使廳了、院有御見物云々、是左大臣申行云々、

廿四日、乙亥天晴、入夜、以國行爲使、訪八條中納言長方所勞、歸來云、其息甲斐守宗隆謁之、長方依前後不覺、不逢御使云々、大略必死云々、可惜可惜、院藏人來、催八萬四千基塔事、

廿五日、丙子傳聞、長方今日出家入道云々、大震占文云、豪傑之士可憐之、長方雖不及豪傑、當世之名士也、朝廷之失臣、公之巨損、何事如之哉、今日賴業來、

廿六日、丑近日、食乖例、有風氣、仍今日爲灸治、吉日之故、一所僅三草始灸之、就寢之後、丑刻許、眠忽覺、病侵身、溫氣如火、寸白攻心、悶絕僻地、辛苦惱亂、此後敢不寢、

廿七日、戌天明彌增氣、大略難存命、仍招智詮令滿三千手陀羅尼、已刻、依辛苦難忍、加灸治、所其後、聊以落居、然而溫氣猶不散、神心彌惱、及晚溫氣漸微、入夜如醒、問占之處、申無殊事之由、今日

又加灸治三所、

廿八日、卯雨降、興福寺所司持來牒狀云、東金堂爲寺家之沙汰、造營已了、於造佛之條、其力難及、仍勸進氏公卿已下受領等、可遂其功云々、牒狀之外副廻文、大臣一紙、大納言已下一紙、受領等一紙、余大將中將各奉加、廻文不書之、注別紙給之、一通余分、

前右大臣家、

可奉加東金堂造佛用途事、

能米五十石、

令散位大江政職奉、

大將中將如此、但大將三十石、中將廿石、

所勞雖減於昨日、猶不快、醫博士信康來、召前問病之體、今日猶加灸治兩所、大夫史隆職來、今日、有祈雨奉幣、上卿通親卿云々、今日、法印自西山被出、

廿九日、辰大風、雨降、除目云々、

卅日、巳雨下、及晚日景口口、見聞書、賴盛入道給備前播磨、爲院分口、九郎無賞如何、定有深由緒、歟、凡夫不覺得之、



六月祓如例、但陪膳家司等、依故障不參、仍以盛房爲陪膳、卒爾之間、布衣不可例設、經泰可衣冠、而同布衣不可、然先余方、余女房、姬君居一所、同時視之、余依病不洗手、女房又有月障、然而解之、繩撫大麻、無憚、於管貫者、有月障之人不爲之、以衣裳代之、次大將方、次中將方、各召居所各別、陰陽師主稅介晴光也、

右元曆二年春夏一帙墨付六拾六枚、先年松殿右幕下道照卿依爲予三男以陶化古筆少々被繕寫之畢、不容與他末苗之輩十襲而可秘之者也

慶安二年丑季夏仲旬 陶化翁〔花押〕誌焉

元曆二年 文治元年

七月

一日、壬午

二日、陰晴不定、頭辨光雅朝臣問先朝御事、副兩大外記勘文、當時所勞無術、不辨前後、退可令言上之由答了、光長朝臣來、爲違秋節宿堂、

三日、申天晴、先帝御事、示送頭辨之許、

其狀云、

先帝御事、如外記勘申者、和漢之例、共以有追尊之儀、殊無被行者、只淡路帝而已、然而彼尙追有改葬修善之事等、何況先帝伴逆賊之黨類、雖避宮出城、察幼稚之報念、不及同心合謀、歟、優恕之條、專無異儀、歟、成人奸謀之敵君、猶爲謝怨靈、有尊崇之儀、幼齡服親之先主、須傷非命、施慈仁之禮、歟、所謂追號修善是歟、如師尙勘申、仰長門國被建一堂、尤爲上計、歟、上奉始先帝、凡爲戰場終命之士卒等、可被置永代之作善也、且是叶先朝追尊之趣、抑又爲罪障懺悔之法、歟、但國土殊凋弊、營造若有煩者、強雖非火急、漸可終土木、歟、愚案之旨、大概勤狀、

以此等趣可被計奏之狀如件、

七月三日、

頭辨殿

親紙

追申、

崇道天皇已下之例、或爲太子、或爲親王、仍贈帝王之號、其理可然、不似今度之儀、院號之條、又不叶物議、歟、何只以謚號可爲詮歟、如此之間事、委可有沙汰歟、廢朝錫紵事、專不可被行也、

五日、戊辰天晴、依彌勒講參堂、法性寺座主、并尊忠法印、并大將等參會、

七日、戊辰天晴、此日、大將參御八講御幸、辰刻參白川御所、如例、相具馬并舍人居同等、參會法勝寺門外者、御幸殊被忿之故也、事訖供奉還御云々、自今日申刻、大將有病氣、或者夢云、忽遇大王饌云々、此夢有秘事、

九日、庚戌天晴、早旦、予有吉夢、早旦、法印被歸西山了、

午刻、大地震、古來雖有大地動事、未聞損亡人

家之例、仍暫不廢之間、舍屋忽欲壞崩、仍余女房等令乘車、大將同之引立庭中、余獨候佛前、舍屋等雖不伏地、悉傾危、或棟折、或壁壞、於築垣一本如不殘、如傳聞者、京中之人家、多以顛倒、又白川邊御領等、或有顛倒之所、或築垣許破壞、法勝寺九重塔、心柱雖不倒、瓦已下皆震剝、如無成云々、大地所々破裂、水出如涌云々、又聞、天台山中堂燈、承仕法師取之、不令消云々、但於堂舍廻廊者、多以破損、其外所々堂場、悉破壞顛倒云々、余家前邊使、馬助於院八條院等申事由、依所勞不能參入也、法皇降庭上、御坐樹下云々者、女院又乘車令立庭給云々、院御所破損殊甚、大略寢殿傾危、不足爲御所之間、御坐北對云々、凡往古來今、異域他鄉惣以未有如此之事、末代之至、天地之惡、君奔國、爰而炳焉者歟、法皇御參籠今熊野、而依恐此事、忽被出御云々、今日、廣基博士持來地震之奏案、占文云、

大喪、

天子凶、

七日動、

百日内大兵起、

上旬動、

害諸大臣云々、

或又女主慎、早魃等云々、

於未來之徵者次事也、見當時天下損亡了、凡不能左右云々、主上渡御池中島云々、其後又南庭打幄、爲御在所云々、內裏西透廊顛倒云々、

十一日、壬辰及晚、頭辨光雅、送札於季長朝臣、問地震之間事也、院宜今日、書寫外記勘文之間及深夜、仍明日申之、

十二日、癸巳天晴、昨日光雅書札云、

地震事、

外記勘文如此、今度大動、先規少聲、旁驚、敏慮者也、每事何樣可被計行候哉、委可被注申候、

皇居事、

當時御所西廊已顛倒、四壁殆無實、須遷御大內、歟、而日華門、弓場殿同顛倒云々、彼此何樣可被進退候乎、誠難治事候、同相計可被申候也、

兩條事、內々、

院御氣色如此、仍言上如件、  
光雅恐惶謹言、

七月十一日

右大辨光雅奉

進上 大宮亮殿

請文狀云、

地震事、

御祈事、具見外記勘文、其中抽要須、就時議可有其沙汰、且又隨御卜趣、可被計行歟、抑、追討之後、國土窮困、地震之間、舍屋顛倒、云彼云是、人力旁疲、御祈用途、定多煩費歟、須廻秘計、被休民肩也、聖主先成民、而後致力於神、民和而神降福之故也、代々例、有改元事、尤可被遵行歟、兼又任天平例、差遣官使、可被檢知神社佛寺、及山陵等之破損頽壞之事歟、

皇居事、

當時御所於外堀無跡者、雖一日爭爲皇居、哉遷幸大內、不可及異議、縱雖有一兩顛倒之門廊、不可留四壁無實之離宮之故也、大內閑院各有修造者、御忌方事、定有尋沙汰、歟、不限大將軍、王相、公家、被避、雖御忌之間、禁忌之方非一、仍驚達者也、右兩條、短慮之

趣、大概言上如此、抑於天地之災異者、以武略不可鎮之、以威勢不可服之、非佛神之利益者、豈人力之所可冀哉、今度大震、即爲悟人心也、震動忽急、梁棟欲頽之時、萬端之計略忘胸間、三寶之冥助仰心底、不遑于廻智力、無由於假人功、誠知拂妖之源、所歸在冥衆、々々之加護、偏限德化、天道福善禍淫之故也、其德化之旨趣、可尋意見之最要者、開心腹、然則、宜使公卿已下諸道博士堪事之輩、獻封事之由、可被下宣旨也、上疏深秘、敢冀外聞、具陳所必不可詔諛之旨、殊可被仰下敕、就彼上奏之趣、可被議定政道之要也、此法若緩者、天變地妖、繼踵不絕、逆亂騷動、舉足可待歟、但德政之條、若不叶時議者、意見又無其益歟、微臣只思國家之亂亡、已忘微功之招恐者也、謹抽鄙懷、上聞如件、

七月十二日、

兼實

今日、法印被出自西山、無動寺三昧院等爲地震、破損之故也、

十三日、甲午天晴、自今日、大將祈二壇始之、普賢延

命、靜賢、不動智證等也、又修太白星祭、天文博士廣基今日、泰茂來示地震事、各徵不空乎、上皇攝政等慎云々、法勝寺阿彌陀堂顛倒、不可思議事歟、觀性法橋來、十四日、乙未天晴、觀性向或所歸來、今晚有吉夢事、拂怨家之徵也、猶可修六字法云々、示觀性了、拜盆送三堂如例、或人云、隆憲法印云、三條宮必定現存云々、

十五日、丙申天陰、同暮日、諺云、今日又可有大震云云、然而余不信受之、午刻向堂、爲念誦也、未刻、經房卿來、余歸家謁之、世間雜事多以談說、不能具記、地震之間事、所云叶恩案、今日爲故基輔修小佛事、又女房母儀尼上、聊有供養佛事、十八日、己亥大風、申刻、渡居堂廊、日來居所依地震損壞、仍有犯土造作事之間、暫所起避也、大將中將同以所渡也、自明日五ヶ日爲大將軍遊行之間、仍東方築垣爲修補也、大將軍方、四十五日方遠忌去之故也、入夜殊風烈、

十九日、庚子大風如昨、入夜又同、但此風不及損物、疑洪水之徵歟、東風頻故、黑雲走亂之故也、今日占在宣問、最勝金剛院修理事、宗雅、并資隆入道等



來、

廿日、辛丑天晴、此日、御匣殿遠忌、於此堂修之、

今日、藏人少輔親經傳院宣云、東大寺大佛開眼來月廿八日也、而爲下吉日、之由有時難云々、然而彼大佛、天平勝寶初度開眼、卽下吉日也、仍不可有其憚哉如何者、余請文云、

大佛開眼事、猶被擇用上吉宜歟、來月廿八日戊寅、若與天平勝寶例爲同支干者、雖爲下吉、偏就相應例、被遵用其理可然、於爲他支干者、只以謂下吉例、被用他下吉日、專無其謂歟、凡如此之日時、方角等之沙汰、上古強不避忌、然而近代殊被定用捨、然則偏難被准古昔之風歟、我朝第一之大佛事、被擇用下吉之條、猶可有思慮事歟、以此趣、宜被議奏之狀如件、

七月廿日

私申

大佛開眼、強被悉之條、子細定候歟、今如被仰下者、委曲頗不詳、見參之時、承披之後、且又可廻恩案歟、

恩案、件大佛、偵雖奉鑄御體、未及治營、又不

押減金云々、加之、開眼之儀、頗爲大事歟、而強被悉開眼之條、未得其意者歟、

廿三日、甲辰入夜宗雅來云、三條宮御現存、自院被獻御使之由、猶以政所示送也云々、此風聞、同近日所謳歌也、事若實者、天下之大幸、

廿四日、乙巳典樂頭定成來、談醫道事等、早旦、花山大納言被來、又大外記賴業參來、授左傳於大將、

廿五日、丙午天晴、歸本宅、日來修造地震之破壞、依修其功也、自今夜大將渡物氣、神心猶不快之故也、

廿六日、丁未天晴、觀性法橋來、雅賴、定能卿等來、各謁之、入夜成範卿來、沮物謁之、大將重煩之、大略發心地之體也、泰茂來、有天變、月犯彗惑云々、占云、戰場之中、大將軍戰死也、

廿七日、戊申天晴、神心快、佛殿房來、談夢想事、依天下政違亂、天神地祇成怨有此地震之由也、入夜於門外、除服、大夫史隆職來、又光長來謁、平大納言入道歸來也、今日、地中雖鳴不及震動、至昨日連日不同、或兩三度、或四五度、又其大小不同、連々不斷也

廿八日、己天晴、今日又地震、定能卿來、

# 八月

一日、亥天晴、早旦、大將所始不空觀音像、佛嚴聖人加持御依木、東寺僧、起經師曰、近々無其人之智證所、故也、此亦俄思立之詞、大將一如日來、今日、大將平愈了、仍給纏頭、物、付又給小祿、今日、少將親能來、

此日、佛嚴聖人語曰、去頃有夢想事、着赤衣之人、來彼聖人房、奉法皇御祈之壇所之儀、謁聖人曰、今度大地震、依衆生罪業深重、天神地祇成瞋也、依源平之亂、死亡之人滿國、是則依各々業障、報其罪也、然而所歸猶在君、何況、其外非法濫行、不德無道、不可勝計、且又流人之問、有不誤之輩等、如此等事、頗不被施慈仁者、天下不可叶、汝等所修之御祈、凡衆僧之御祈等、効驗難量、可悲々々、然間、下官手取丈尺之杖、降立地上、紮定京都之狼藉、始自九條、漸入京中、欲及一條、或壞退人屋、或洒掃路頭、紮其非違、忽通正路、聖人中心悅此事、爰赤衣人語聖人云、爲彼御沙汰、指下官也、被行此法者、天下歸正、禍亂不起、祈禱可彰、驗者也、不然者不

可叶云々、

見此夢了、注進法皇、但依非法亂行、天下不治之事、并余開正路等之事、秘而不奏、其故君臣共有隔心、以正夢雖奏聞、天下之人不可信用、恐處僞夢詐言、歟、爲自爲他、有恐無益之故也云々、

其後、又經兩三日夢云、稱帝釋御使之者一人、出來、不見其體、語云、依汝并衆僧所修之御祈等之功力、於法皇御壽命者、此般延了、但於天下之禍亂者、以此御祈之力不可叶、仍明日々中時、可結願御祈也者、

此夢、又禍亂不可止之由、不奏聞、是又不可叶、時議之故也、即結願御祈了云々、

愚心案之、以前夢、以其事天下可治之由、指掌見之、而其事不達天聰、又無施行之間、後夢、依御祈、天下禍亂不可止之由見之、尤有其謂歟、下官雖至愚、思社稷之志、已勝人、仍自叶天意、有此靈告歟、依微運其事不顯、只可悲宿運者也、

三日、癸天晴、已刻、光長申云、經房卿、并定長等告送

云、實自海底奉<sub>レ</sub>求出了云々、但未<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>飛脚<sub>一</sub>、然而定說之由云々、余聞<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>、不覺之淚數行、聖君在世之由風聞、當<sub>二</sub>此時<sub>一</sub>、又有<sub>二</sub>靈劍出來之告<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>直也事<sub>一</sub>歟、入<sub>レ</sub>夜人傳云、三條宮御座之由謬說、子細可<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>記之<sub>一</sub>、今晚、大夫史隆職可<sub>レ</sub>有、○可有一命危之由有夢想、而依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>明日管轄<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>僧徒<sub>一</sub>修<sub>二</sub>彼祈<sub>一</sub>、又告<sub>二</sub>隆職之所<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>畏申報<sub>一</sub>、

四日、寅陰晴不定、早旦、範季朝臣來語云、三條宮御事、以<sub>二</sub>或寺僧說<sub>一</sub>雅緣僧都聞<sub>レ</sub>之、雅緣又語<sub>二</sub>證憲<sub>一</sub>、々々以<sub>二</sub>彼說<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>證據<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>達<sub>二</sub>法皇之聞<sub>一</sub>、同泰經仍<sub>レ</sub>法皇悅、而爲<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>音信<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>由來<sub>一</sub>之處、證憲問<sub>二</sub>雅緣<sub>一</sub>、々々更反<sub>レ</sub>舌改<sub>レ</sub>詞、稱<sub>二</sub>不知之由<sub>一</sub>、始隨申<sub>二</sub>有<sub>一</sub>證文之由云々、仍證憲尋<sub>二</sub>件條<sub>一</sub>、全無<sub>二</sub>件證文<sub>一</sub>云々者、次第勿論、仍搦<sub>二</sub>取本體<sub>一</sub>之寺僧了、問<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>之處、偏爲<sub>二</sub>渡世之方法<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>構<sub>二</sub>詐僞<sub>一</sub>也云々者、重尋<sub>二</sub>證文<sub>一</sub>之處、件札等所<sub>レ</sub>報也云々者、而件法師一文不通云々、今展<sub>二</sub>書他人<sub>一</sub>歟、次第非<sub>二</sub>言語之所<sub>一</sub>及、於<sub>二</sub>雅緣尾籠<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>、證憲者通憲法師子也、非<sub>二</sub>音顯<sub>一</sub>辨辭、又熟<sub>二</sub>政理<sub>一</sub>之由云々、而於<sub>二</sub>此條<sub>一</sub>者、專可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>無<sub>一</sub>思慮者歟、退廻<sub>二</sub>思

案之處、此事、不意披露之間、今一重有<sub>二</sub>隱遁之意<sub>一</sub>歟、眞僞難<sub>レ</sub>決、誠是天地之殃極了及<sub>二</sub>人倫<sub>一</sub>、奇異者歟、大外記賴業來、授<sub>二</sub>左傳第八<sub>一</sub>弓於大將、此次語<sub>二</sub>三條宮御事<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>成範卿<sub>一</sub>、并光雅朝臣<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>說<sub>二</sub>聞<sub>一</sub>之云々、又虛誕之由、昨日風聞、入<sub>レ</sub>夜、大夫史隆職來臨、爲<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>昨日畏<sub>一</sub>歟、其次有<sub>二</sub>示旨等<sub>一</sub>、

六日、丙辰傳聞、三條宮御事、覺親內供<sub>成親</sub>、弟子小僧、心上野房、又號心月房云々、構<sub>二</sub>出事<sub>一</sub>云々、子細可<sub>レ</sub>尋聞、此事猶有<sub>二</sub>疑<sub>一</sub>、

七日、丁巳三條宮事、如<sub>二</sub>風聞<sub>一</sub>者、雅緣、證憲、共以無<sub>二</sub>思慮之所<sub>一</sub>致也、雅緣須<sub>二</sub>企<sub>一</sub>參洛<sub>二</sub>披<sub>一</sub>陳<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>過之子細<sub>一</sub>也、而籠<sub>二</sub>居南都<sub>一</sub>、是又題之其一也、

八日、戊午或人云、雅緣參<sub>二</sub>詣太神宮<sub>一</sub>云々、此事甚以爲<sub>二</sub>奇者<sub>一</sub>也、

九日、己未範季來語云、竹園結<sub>二</sub>構上野房<sub>一</sub>云、彼御手跡等之中、假名<sub>二</sub>左衛門權佐親雅筆也<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>消息等<sub>一</sub>者、在<sub>二</sub>俊完僧正之許<sub>一</sub>、小僧所<sub>レ</sub>書也云々、

十日、庚申天晴、爲<sub>二</sub>方達<sub>一</sub>宿<sub>二</sub>堂北對<sub>一</sub>、此夕、或者來、談<sub>二</sub>世上謳歌事<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>具<sub>二</sub>記<sub>一</sub>、眞僞之間、疑殆猶多、余所思、猶此事有<sub>二</sub>深志<sub>一</sub>、被<sub>二</sub>隱忍<sub>一</sub>歟、但是餘之推量也、

十二日、壬戌雨下、申刻、大地震、雖不及初度大動、又騷人意、少々有顛倒事等、

十四日、甲子陰晴不定、此日、改元曆二年、爲文治元年、有敕令事、上卿堀川大納言忠親卿、左内兩府、稱病不參者、大納言上卿、其例甚多云々、依地震所被行也、

十五日、乙丑雨下、昨日改元事、問定能卿之所、注送旨如此、

忠親、實宗、定能、已上、仁實、家通、賴實、已上、文治、雅長、文治、萬安、親宗、仁實、貞和、通資、文治、建久、

申刻事始、戌終事訖、執政被執文治云々、實此事號不惡歟、仁實ハ、人の財とよまる、わろしと云々、親定難ニハ、文ノ字ハもとろせしと云有讀可有忌云々、強之難歟、不可々々、今日可有三大動之由、院中被騷云々、然而今日無動、

十六日、丙寅天晴、今夜有除目、依賴朝申也、受領六ヶ國、皆源氏也、道路以目、不能左右々々、此中、

義經任伊豫守、兼帶大夫尉一條、未曾有々々々、十七日、丁卯此日、釋奠云々、上卿通親卿依穢上丁延引也、座外兼光、通親參入、題光輔出之、

廿日、庚午雨降、大外記賴業來、授左傳於大將、如例、未刻、内府息侍從公繼來、彈琵琶、大將中將、并藤中納言定能卿等在座、資博孫同彈比巴、大將歌催馬樂、定能付之、終頭彈揚真憚、惣而非幼稚之所爲、感涙難抑、先是有連句事、資隆入道在座、其後與扇一本、令書詩、爲手跡也、是又得其骨、生年僅十一歲、藝能非一、余情感之餘、與比巴一面、其勢小而令相應之故也、入夜聊有他行事、

廿一日、辛未内府送札被悅示、與比巴於侍從事、再三有慰勸之詞等、彼拾遺、鍾愛殊甚之故也、入夜隆職宿禰來、此日、五輪塔三百五十基、於鳥羽勝光明院、隨被勸出者、有供養云々、

廿二日、壬申今日、山上如法經十種供養也、余調送雜具金銅簡二、同軸二部料、表紙等、先日送之、被物一重、絹裏一、顯文爲結線、余消遣之、又余修調、有調文、中將書之、

廿三日、癸卯天晴、無動寺法印相具如法經、被參笠置寺、爲先師法親王、書寫如法經、爲奉瘞彼靈咽、



也、又書寫黃紙同清淨經二部、一部奉<sub>レ</sub>爲先供、余通<sub>二</sub>反古之間、死亡候單、奉<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>先帝<sub>一</sub>、色紙<sub>一</sub>送<sub>レ</sub>之、一部近年合職至<sub>二</sub>大宮<sub>一</sub>、十爲<sub>二</sub>出離<sub>一</sub>也、送<sub>二</sub>東大寺<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>籠<sub>二</sub>大佛御身<sub>一</sub>也、大將可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>御方違行幸<sub>一</sub>之由、親經催<sub>レ</sub>之、來廿五日云々、廿八日大佛供養、當<sub>二</sub>大將軍遊行方<sub>一</sub>、仍廿五日有<sub>二</sub>此御方違<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>廿二日<sub>一</sub>大將軍可<sub>レ</sub>遊布之故也、有<sub>二</sub>所勞快得<sub>一</sub>者、可<sub>レ</sub>參之由令<sub>レ</sub>申了、

廿六日、丙泰茂來有<sub>二</sub>身堅事<sub>一</sub>、相次在宜來、余尋問事等、一塞方不<sub>レ</sub>憚<sub>二</sub>神社造作<sub>一</sub>事、

申云、大神宮賀茂以下宗廟靈社等、於<sub>二</sub>修造<sub>一</sub>者不<sub>レ</sub>憚<sub>レ</sub>之、於<sub>二</sub>祈奉祝<sub>一</sub>者可<sub>レ</sub>憚<sub>レ</sub>之、近則今熊野、今比叡等社、有<sub>二</sub>御方違<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>之、又崇德院廟、同有<sub>二</sub>御方違<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>建<sub>レ</sub>之、定例也、是則在憲朝臣口傳也云々者、所<sub>レ</sub>申有<sub>レ</sub>謂、尤有<sub>レ</sub>興云々、

一木像佛不<sub>レ</sub>安<sub>二</sub>置塞方<sub>一</sub>、供養如何、

申云、安置供養、共以可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>憚、來廿八日大佛開眼供養、依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>大將軍遊行之意<sub>一</sub>、仍廿五日有<sub>二</sub>御方違<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>廿二日<sub>一</sub>、大將軍可<sub>レ</sub>遊南<sub>二</sub>之故也<sub>一</sub>、行幸去夜所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行也、口奉季弘已下、於<sub>二</sub>供養<sub>一</sub>者、申<sub>二</sub>不可<sub>レ</sub>憚之由<sub>一</sub>、然而依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>證據<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用云々、法印歸<sub>二</sub>洛自<sub>一</sub>笠置寺、被<sub>レ</sub>來<sub>二</sub>余第<sub>一</sub>、

廿七日、丑天晴、依<sub>二</sub>明日大佛開眼<sub>一</sub>、法皇八條院已下洛中之緇索貴賤、併以下<sub>二</sub>向南都<sub>一</sub>、又余依<sub>二</sub>先日之行隆<sub>一</sub>催<sub>二</sub>送<sub>一</sub>寶樹一本懸物於件辨之許、先例一本、別懸<sub>二</sub>法服裝束六具大衣等<sub>一</sub>云々、然而今度、行隆卒爾之沙汰不可<sub>レ</sub>叶、仍所々只不<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>其物<sub>一</sub>、隨有<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>懸<sub>レ</sub>之云々、大略如<sub>二</sub>市邊<sub>一</sub>如<sub>二</sub>屋云々<sub>一</sub>、余有<sub>二</sub>所思<sub>一</sub>、送<sub>二</sub>袈裟七帖<sub>一</sub>、季長消息書<sub>二</sub>副目錄<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>待貞光<sub>一</sub>民部大夫五位、爲<sub>レ</sub>使内々所送也、依<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>上催<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>家令加判<sub>一</sub>之送文也、件袈裟目錄、

白九重袈裟 一帖、在<sub>二</sub>櫃<sub>一</sub>、

同七重袈裟 一帖、同、

同五重袈裟 一帖、

袈裟 一帖、在<sub>二</sub>錦櫃<sub>一</sub>、

香染袈裟 一帖、在<sub>二</sub>櫃<sub>一</sub>、

紫甲袈裟 一帖同、

青甲袈裟 一帖、同、

今日午刻、小童<sub>九生年</sub>始入<sub>二</sub>法性寺座主法印慈圓室<sub>一</sub>、彼粟田口房、地震之後破壞、未<sub>レ</sub>終<sub>二</sub>修造<sub>一</sub>、仍任<sub>二</sub>故七宮<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>青蓮院座主房<sub>一</sub>之例、僧<sub>二</sub>中京極殿<sub>一</sub>御所被<sub>レ</sub>居之後、彼宮被<sub>レ</sub>渡也、借<sub>二</sub>渡堂<sub>一</sub>、々於<sub>二</sub>彼法印所<sub>一</sub>向<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>也、行口可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>六尺<sub>一</sub>、於

事有便、大將相伴也、是又彼法印、被<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>故七宮許<sub>一</sub>之時、余大將相伴例也、綱代車、車副、隨身布衣、云々、前驅衣冠、法印例、前驅布衣、云々、而今度衣冠、不覺、權右中辨兼忠朝臣連、車、愿從人爲<sub>二</sub>辨官、須<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>直衣若束帶也、而布衣頗不當、余兼不<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>裝束<sub>一</sub>之間、存<sub>二</sub>密儀之由、父納言被<sub>レ</sub>教<sub>二</sub>訓布衣之由<sub>一</sub>云々、行向着座之後、法印被<sub>二</sub>出座、少時、前僧都玄理取<sub>二</sub>引出物<sub>一</sub>、松錦、枝、於<sub>二</sub>大將前<sub>一</sub>付<sub>二</sub>氣色<sub>一</sub>、即過<sub>二</sub>其前<sub>一</sub>、授<sub>二</sub>共殿上人兼忠、云々、授<sub>二</sub>前驅、次同人又取<sub>二</sub>小童引出物<sub>一</sub>、五結裏、清樣、同氣色、小童過<sub>レ</sub>前授<sub>二</sub>兼忠、云々、又授<sub>二</sub>前驅、其後、兩人共起<sub>レ</sub>座歸<sub>レ</sub>家、大將引出物尋禪僧正三結云々、小童引出物同人五結也、入<sub>レ</sub>夜法印被<sub>レ</sub>來<sub>二</sub>此亭<sub>一</sub>、小童讀<sub>二</sub>始俱舍論<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>吉日也、今月中、今日之後無<sub>二</sub>日次<sub>一</sub>、來月有<sub>レ</sub>忌、仍俄有<sub>レ</sub>心儀也、今日、或人產具等調送也、在別、密々、之<sub>レ</sub>亭也、廿八日、戌此日、東大寺金銅廬舍那佛開眼供養也、自朝有<sub>二</sub>雨氣、午之後大雨、若妨<sub>二</sub>法會之威儀<sub>一</sub>歟、尤遺恨、若<sub>レ</sub>是半作之供養、中間之開眼、不<sub>レ</sub>叶<sub>二</sub>大佛之照見、本願之寂念<sub>一</sub>歟、但開眼儀了有<sub>二</sub>此雨<sub>一</sub>、還又可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>効驗<sub>一</sub>歟、今日之雨、兩般之疑相兼者也、

廿九日、卯天晴、自旦至暮、上下細索多以歸洛、未刻、八條院還御、日沒、法皇還御、昨日兩法會中間云々、子細可<sub>二</sub>尋記<sub>一</sub>之、且問<sub>二</sub>歸洛之輩<sub>一</sub>、各答云、法皇自取<sub>レ</sub>筆入<sub>二</sub>佛眼、定遍僧正<sub>別當</sub>、滿<sub>二</sub>神咒<sub>一</sub>云々、如<sub>二</sub>天平勝寶例<sub>一</sub>者、波羅門僧正自奉<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>佛御眼<sub>一</sub>、又誦<sub>二</sub>真言<sub>一</sub>、今度左府所<sub>レ</sub>造式云、佛師入<sub>二</sub>佛眼<sub>一</sub>云々、然則法皇爲<sub>二</sub>佛師<sub>一</sub>歟、是何例哉、可<sub>レ</sub>尋<sub>レ</sub>之、或人云、彼天平例、聖武天皇<sub>上皇</sub>、自取<sub>レ</sub>筆、奉<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>佛眼<sub>一</sub>給云々、此事未<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>記文<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>要錄<sub>一</sub>者、菩提僧正勳<sub>レ</sub>之也、今日、召<sub>二</sub>道志明基<sub>一</sub>、大將中將共傳<sub>二</sub>受名例律<sub>一</sub>、今日始受<sub>レ</sub>之也、卅日、辰一昨日、開眼供養儀、問<sub>二</sub>遣雅賴卿許<sub>一</sub>之所、返札如此、

去廿七日酉初、參<sub>二</sub>着東大寺<sub>一</sub>候、即奉<sub>二</sub>禮滿月御顏<sub>一</sub>候了、自昔御面相、一定令<sub>レ</sub>劣給之樣見給候、御面許金色候也、未<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>他所之磨瑩<sub>一</sub>候、借屋以<sub>二</sub>錦鋪<sub>一</sub>類、<sub>二</sub>襲<sub>一</sub>傍之、葺以<sub>二</sub>松葉<sub>一</sub>、後山同以<sub>二</sub>松枝<sub>一</sub>傍<sub>レ</sub>之、壇上巽角造<sub>二</sub>立院御所<sub>一</sub>、假屋<sub>高座</sub>、高座等立<sub>二</sub>壇下<sub>一</sub>、左右立<sub>二</sub>幢<sub>一</sub>、高九丈、各懸<sub>二</sub>錦幡<sub>一</sub>、流<sub>二</sub>是上人結撰云々<sub>一</sub>、廻廊跡立<sub>二</sub>數間<sub>一</sub>、借屋<sub>二</sub>柱<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>諸僧座<sub>一</sub>、其內東西又立<sub>二</sub>假屋<sub>一</sub>、東公卿以下座、西行事官座、中門東西假屋爲<sub>二</sub>樂屋<sub>一</sub>、中央有<sub>二</sub>舞臺<sub>一</sub>、

廿八日、卯時、以車輿參入、如此之輿、不知若干、男女數員、雜人如恒砂、左大臣已下、着行事屋、其後數刻無音、及未時、事始、樂音風聞候き、而雨脚已欲下之間、不知爲術歸京候了、不知後事也、善綱トテ、糸數丈候き、諸人結付念珠、若懸紳髻等、雜人以腰刀投入舞臺上、上人弟子等、出來取集之候き、凡事儀式非公事、又非無緣事、上下作法、只如交菓子候歟、

今日、小童着水干、參法印方、得引出物手本一弓歸來、密々以輿所向也、依近々也、傳聞、舞臺左右、各立松樹三本、右方、第一、院御第二、院御分、已上各同第三、物、左第一、八條院、第二、同餘分、并第三、餘分、各有一見物輩云、余分尤優美云々、功德事、人不入心歟、或人產祈、愛染王供、自今日始修、醍醐泉海僧都、

## 九月

一日、辛巳陰晴不定、午後小雨、入夜大雨、法印被來、大將方密々有作文、每月三ヶ度例事也、本六ヶ度也、而此兩三月減三ヶ度也、今日、中將代人而書序云々、今日道志明基來、授名例律於大將中將等、

六日、丙戌天晴、明基參上、昨日被行赦、觸大神宮、並賀茂社訴之輩、並殺害實宴法印之中人等不被免候云々、法條之間、不審事等問、今日、大將方又有密々時、其後又有當座和歌、各序、題云、月照菊花云々、資隆入道在座、

八日、戊子雨下、早旦洗頭、自今日、恒例七ヶ日念佛也、未刻、渡居堂、請大原聖人本成受戒、其後酉刻、始念佛、今日、大將女房夢云、余修此念佛、件女房見之、而余自口放金色光、見了云々、隨分慰懃之志、自有三寶之感應歟、不覺之淚千行萬行、彌起信心、所勤行也、

十日、庚寅天晴、爲頭辨光雅奉行、有尋問事、申所存了、

御教書狀云、大神宮禰宜成長、内々所進狀如此、兩條事、共雖無先規、寄事於神威、頻驚天聽、何樣可候哉、可令計申御候者、依院御氣色、言上如件、光雅頓首謹言、

九月十日

右大辨光雅上

進上大宮亮殿

請文案如此、

大神宮禰宜成長、兩條所望事、禁色之恩許、上階之宣下、共爲新儀、曾無舊例、彼祭主之叙三品、非神宮之異諸社哉、其上剩以禁色上階之殊賞、被授卑賤下劣之祠官、宗廟之靈意享否、其奈何、但先年之功不可不賞、可申請他事之由、可被仰下歟、抑、如此臨時之處分、偏起自微慮、可有三左右也、況於寄事於神威哉、恐暗短慮、迷成敗者也、以此旨可然之樣、可被計披露一歟謹言、

九月十日

禮紙狀、

折紙返上之、

十五日、<sup>乙</sup>念佛如例、今日酉刻結願、日來念佛結願也、禮拜卅

八度、今日依二月餘不歸宅、

十六日、<sup>丙</sup>念佛一萬遍之後、辰刻歸家、今夜他現否不

見之、自今日不論淨不淨、可滿念佛一萬遍也、

十八日、<sup>戊</sup>天陰、申刻以後雨下、巳刻、女房中將相伴

向寂勝金剛院、中將率女房等、入山採取松茸、

又拾栗、余立堂又參詣故女院御墓所、申刻歸宅、路

間余用輿、侍等步行、女房姬御前同車、其後出車二兩、中將騎馬、男共四五人、同騎馬、東國領等、可隨領家進止之由、自院遣御教書於賴朝之許、泰經卿奉書所下給也、

十九日、<sup>己</sup>今日加灸治、胸腹之間少々也、不招醫人、灸舊跡、東國領事、光長書副御教書於院宣、可遣賴朝許之由仰之、以政所舍人爲使、

廿日、<sup>庚</sup>今晚寅刻、或女房有誕生男子事、<sup>八條院女房草朝臣娘、被院無雙之寵臣也、</sup>落胤女子甚異樣事也、而生男子可悅々々、即遣護劔一腰、<sup>入寄地</sup>以國行爲使、觀性法橋

自今日永以籠居、始清淨潔白之念誦、大日五字真言也、年來、件咒每日滿十萬遍、自今日縮反數可致誠心也、仍件本數不足、仍請增越、同行弟子等之中、心操貞直之者、各配分少分、可滿件闕分也云々、余其中可滿每日百遍、仍今日精進潔齋奉

滿了、法印又被滿一千反云々、

廿一日、<sup>辛</sup>今日又加灸治、入夜食始蘇、今日、雖爲三月口日、非初度服藥、仍強不憚之也、抑、灸治與蘇同時之條、俗人憚之、然而下官計病之體、內外之治尤要須也、仍以今案所爲也、又示問定成朝臣、



答可然之由、猶依有疑以卜決之、其趣吉兆也、仍旁服始之也、此日、隆職宿彌來、

廿四日、甲辰傳聞、天王寺舍利乍三粒紛失了、去四日事云々、可悲々々、去々年有此事、經兩三日、自長押上求出之、今度早々○早々一作于今不出來給云々、佛法滅相也、

廿五日、乙巳天晴、東國領等、如元可知行之由、賴朝成下文送之、所送光長朝臣許也、光長爲湯治在河湯邊、自件所所令進也、下文六枚、先日以院宣欲遣賴朝許、使者未進發、仍召留之、漏件注文之所々事、可仰遣之由仰光長、又賴朝令申云、伊豆國馬宮庄、亂初之比不知御領、寄進當國走湯山了、此條進退有恐、仍欲進其替、而八條院御領、肥後國豐田庄所給預也、件所領家、有御沙汰如何々々、此條子細有疑、件所自女院被給賴朝者、今馬宮庄代令進之條、理可然、若賴朝給預所職許者、下官爲女院御庄預所之條、太以可見苦、凡家之習、無如此事、保元之初、一所庄園等、故知足院入道殿、稱被寄進鳥羽院上、可爲公家御沙汰、執政人爲預所、可知行庄園之由、被仰下之時、故殿令

申給云、只偏可爲公家之御沙汰、一切不可罷入、自累祖大職冠至微臣、數十代之間、苟爲朝之管轄、身居攝錄之任、且蒙君之恩容、且傳家之餘慶、所領掌漸以有數、然而未聞補領家之職、知行田舍之事例、然則於有御用者、更以不可執申、於上下之沙汰者、已爲家之瑕疵、敢不肯受者、于時公家有耻色、不再仰耳、彼時法皇御宇、信四所申行之由、雖余且案此例又先規、仍以此子細可計答之之、由、同仰光長朝臣了、法印被來、今日定長爲院御使來、和泉國之訴事、先日仰付所、未示其御返事也、廿六日、丙午雨下、時々日景見、法印今日被登山了、蒲冠者範賴入洛云々、守也、廿七日、丁未花山大納言兼雅有腫物云々、以書問之、無殊事歟、堅根々々、廿八日、戊申天晴、男子誕生、卯刻歟、或女房先々所生之母也、廿九日、己酉天晴、大將方有九月盡會、題云、江山秋景盡、題中典樂頭定成來、問兼雅卿所惱事、申全不可有怖畏之由、

玉葉卷第四十二終

玉葉

卷第四十三

自文治元年十月  
至同年十二月

十月大

一日、戊天晴、內府以使者示云、美作國可獻五節之由有、戊譴責、每事無計略、童女下仕裝束之間、一具欲調給如何、報云、童女下仕等裝束、若可調進者、可調進一雙也、二具也、調進一具之條、太可異樣、二具者又不可叶、仍可調送舞姬裝束一具者、今日、大將方有密作、

二日、辛天晴、隆職注進僧事聞書、去夜被行云々、去〔々〕年、道山之書籍等、今日召寄之、參河國司範賴與牛二頭、

三日、壬天晴、內府送札云、舞姬裝束御沙汰、尤悅思給、可進色目云々、又實詮法印能讀人也、有聽聞之志之由先日示之、其返事被示送也、相副彼法印返札被送也、殊悅思之由云々、件法印內府弟也、或人云、昌雲法務率怨法皇、可籠大原、上西門院同以可有御籠居云々、世人所傾奇也、

季長去比參高野、天王寺等、今夕歸洛云、天王寺舍利三粒皆以紛失了、雖致種種祈禱、未出來給云々、可悲々々、未出給堂中給之由、有夢想等云々、定長示送云、右大將殿、兩社御幸可令執金銀幣、并三衣宮給者、

四日、癸天陰、明基參上、兩息讀名例律下寫、又笛師守方來、大將習樂、

五日、甲天晴、余依服藥不參御堂、大將參入、講了歸來、今日、藏人宮內少輔親經來、仰大將云、法皇也、可堂行太神宮事者、申年少之間、不堪奉行之由了、此事不可說々々〔之〕事也、誰人申行哉、廿未滿之人、奉行如此重事之條、古來未曾有事也、宗賢今日又來、

六日、乙天晴、早旦、主稅助安倍晴光參來、申天變事、從去月廿三日、填星守犯太微東蕃上相星、又從同廿八日戊申、歲星守犯同右執法星、相去各八寸所、是大臣大

將等傾也、就中填星變、大將傾尤重云々、

又文云、天下有悅喜、人主改政云々、又云、有立王事云々、典樂頭定成來、

七日、丙辰天晴、光長來申、條々事、東國庄々子細仰、遣

賴朝之許之間事也、小兒許在能樂之女子也、病危急、仍召施樂

院使賴基、問之、又佛殿聖人來見之、誕生之小兒等

剃髮事、禁忌月、陰陽等申狀非一、仍問、遣在宣之

許、當道數置之中、器量按詳之上、申云、正三五七九十、已上

月忌、又處訓在耳、仍余以之爲證、申云、仍來月可垂髮云々、

他人廣基、明光等、申云、十月不忌之、十一月忌之、他月在前、宜同前

但晴光云或說不忌霜月云々、因茲問、在宣之處、

申旨如此、仍可用此說、先年姬君誕生之時、在憲朝

臣所申、同、在宣說之故也、

八日、丁巳天晴、和泉守行輔、進羊於大將、其毛白如草

毛、好食竹葉枇杷葉等云々、又食紙云々、其體太無

興、

九日、戊午天晴、早旦以季長示、送定長許云、大將御

幸之間所役等、取三衣笠、并可傳進金銀帶、爲院司所役、

然者早可被仰下一歟、凡家例、二條關白殿已下至三

治槐門、多以爲院司、而入道關白、下官等、及其子息

等不被補、且是早昇丞相之間、殊無其沙汰、於

恩息等者、尤可申補之處、自然懈怠、又自上無

被仰下之故也、而今有其沙汰、尤畏申、早可被

仰也、三位中將同可申補歟、但是非懇望、存恩

忠許也、可計披露、抑、寬治之間、白川院有春日御

幸、知足院殿爲納言院司、被取金銀幣、爲君爲

家、已爲先例、此有同松容之次可令披露者、此

外、又和泉國訴訟事等、季長私示付云々、又仰遣云、大

將去比服、來十五日相當四七日、勤仕神事之役、

有憚哉否、私難進止、但先問宮寺之處、殊無定置

之例、之由所申也、此上事可相計者、定長答云、院

司事、可奏此旨、次第尤神妙、蒜忌事、不及奏事

之由、過三七日了、定無其憚歟、如此事、頗無

御成敗之間、付申出、似有煩事、爲公事、強不可

有、其恐憚事歟云々、午剋許、藏人次官定經來、示

康季非藏人事、爲非重代之者、之由有院宣并攝政

命云々、余答子細了、以通定例、當時重代者、只二人

云々、申剋、藏人左衛門權佐親雅來傳、院宣云、宇佐

宮黃金、或稱神寶、之間事、條々可計奏者、副調度文書、外記勘文等數

通、此事爲經房卿奉行、所被仰下也云々、件狀如

此、

宇佐宮兩條事、

一外記勘申黃金事、

當宮之習、以<sub>レ</sub>勘御驗、并黃金、奉<sub>レ</sub>稱<sub>二</sub>御正體<sub>一</sub>之由、上洛神官等所<sub>レ</sub>申也、然而寬治之比有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、事不<sub>レ</sub>切之由、見<sub>二</sub>外記勘文<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>縱爲<sub>二</sub>神寶<sub>一</sub>、非可<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>崇重<sub>一</sub>、安置所奉送之儀、并被<sub>二</sub>奉謝<sub>一</sub>之間事、就<sub>二</sub>外記申狀<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>之由、向<sub>二</sub>左右內三府<sub>一</sub>許可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰合<sub>一</sub>、兼又可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>申<sub>一</sub>攝政<sub>一</sub>者、

一可<sub>レ</sub>給<sub>二</sub>官使勘錄<sub>一</sub>、神殿舍屋破壞被<sub>二</sub>造替<sub>一</sub>、行<sub>二</sub>清祓<sub>一</sub>、安置御體、被<sub>レ</sub>調<sub>二</sub>進御裝束<sub>一</sub>事、

今度不<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>太宰府解狀<sub>一</sub>、御有<sub>二</sub>繪像<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>進云々又所<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>彼宮解狀<sub>一</sub>、只所<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>大宰府之牒案<sub>一</sub>也、就<sub>二</sub>其狀<sub>一</sub>忽有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之條、雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>其謂<sub>一</sub>、旁思<sub>二</sub>神慮<sub>一</sub>、已驚<sub>二</sub>寂聞<sub>一</sub>、何樣可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>哉、內々先可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>合<sub>一</sub>三丞相、且又可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>攝政<sub>一</sub>者、

右兩條存<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>申沙汰<sub>一</sub>給<sub>二</sub>者<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>院宣<sub>一</sub>執達如<sub>レ</sub>件、

九月廿二日

權中納言經房上

藏人左衛門權佐殿

兩大外記勘申之趣、付<sub>二</sub>和氣使<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>本社<sub>一</sub>之由也、但師尙申云、若又覽被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>安<sub>二</sub>置神祇官若八幡宮<sub>一</sub>、猶御體實否之條、糺決之後、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>歟者、余答云、具披<sub>二</sub>見文書等<sub>一</sub>、退可<sub>レ</sub>奏<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>者、返<sub>二</sub>給經房卿御教書<sub>一</sub>了、他文書等覽留<sub>レ</sub>之、此日明基來、授<sub>二</sub>名例於大將中將等<sub>一</sub>、此夕、和泉守行輔初參院、先來、召<sub>レ</sub>前見<sub>レ</sub>之、著<sub>二</sub>重喪之服<sub>一</sub>、父舊德忽思出、悲淚難<sub>レ</sub>仰者也、

十日、未己雨降、定能卿來、

十一日、庚申此夜有<sub>二</sub>小除目<sub>一</sub>云々、

十二日、辛酉見<sub>二</sub>聞書<sub>一</sub>、經房任<sub>二</sub>帥、兼忠任<sub>二</sub>近江守<sub>一</sub>、元經房知行同也、

十三日、壬戌天晴、早旦、季長朝臣來申云、義經、行家同心反<sub>二</sub>鎌倉<sub>一</sub>、日來有<sub>二</sub>內議<sub>一</sub>、昨今已露顯云々、雖<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>巷說<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>浮言<sub>一</sub>、義經之邊、郎從之說云々、相次說々甚多、賴朝失<sub>二</sub>義經之勳功<sub>一</sub>、還有<sub>二</sub>遏絕之氣<sub>一</sub>、義經中心結<sub>二</sub>怨之間<sub>一</sub>、又鎌倉之邊、郎從親族等、爲<sub>二</sub>賴朝<sub>一</sub>失<sub>二</sub>生涯<sub>一</sub>、結<sub>二</sub>宿意<sub>一</sub>之輩、漸以數積、彼等內々令<sub>レ</sub>通<sub>二</sub>義經行家等<sub>一</sub>之許、加<sub>レ</sub>之、賴朝乖<sub>二</sub>法皇寂慮<sub>一</sub>之事太多云々、仍見<sub>二</sub>事之形勢<sub>一</sub>、義經竊奏<sub>二</sub>事趣<sub>一</sub>、頗有<sub>二</sub>許容<sub>一</sub>、仍忽及<sub>二</sub>此



大事云々、或云、秀衡又與力云々、於子細者雖實說不定、於蜂起者已露顯也、入夜慶俊律師來云、法印被辭申法性寺座主之間事、付泰經奏法皇、日來無左右之仰、今日以書札示不許之由云々、其趣、本寺之修造、他人彌不可叶、猶可有計沙汰云々、件慶俊者行家子、今且向江州了、其勢非幾云々、仍自院賜甲冑云々、凡事之次第如夢如幻、亥刻許、小死人在南庭、大將自見付之、驚奇無限、已卅日穢也、明後日八幡御幸、必可供奉、依有所役等、忽可被補院司、而忽此事出來、凡不能是非、自元院邊疎遠之者、適備職掌可叶御要之處、臨期觸此穢、勿論事歟、即以使者觸遣定長之許、又觸兼雅定能等、兩納言有歎息之報、定長答、可申入之由云々、供奉之雜事、皆悉沙汰具、而忽留了、且遣恨多端者歟、

十四日、癸雨下、入夜定能卿示送云、申法皇之處、強無不快之氣云々、爲悅、世上騷動、昨今殊甚、京中諸人運雜物、必爲近年之流例、可悲云々、平氏誅伐之後、賴朝在世之間、忽可及大亂之由、萬人不存事歟、苛酷之法殆過秦皇帝歟、仍親疎含怨之所

致也、世人之謂以、今度天下之結願歟云々、今日、院主典代來門外、仰大將中將等之補院司之由、依穢中不賜祿、仰穢限以後可來之由了、

十五日、甲天晴、此日、法皇相具競馬、參詣八幡、無只如日、余不見物、大將中將竊以見之、大將番長厚吉、余不乘尻、口左大將供奉云々、拂曉、定能卿問送云、

可勤三衣宮、并金銀幣等之役云々、件等役、大將可勤、其替也、先例、英雄之人云々、今此廟當其仁、而取幣之時可解、劍哉、又徒

蹴歟云々、於劍者不可解、著履哉否、未辨先例、可被隨便宜之由答了、

十六日、乙天晴、法皇今朝還御、依爲歸忌日、御八條院御所、明日可有還御六條殿云々、大外記賴業來、依穢緣端懸片尻、余謁之、問字佐宮濫行之間

事、又賴業談世上事、昨日競馬、厚次合賴武細文持云々、下官自昨日有病氣、今日頗增、入夜殊甚、

十七日、丙天晴、早旦、大藏卿泰經爲院御使來門外云、依穢不入門內、以季長傳申、去十一日、義經奏聞云、行家已反賴朝了、雖加制止不可叶、爲之如何者、仰

云、相構可加制止者、同十三日、又申云、行家謀

叛雖加制止、敢不承引、仍義經同意了、其故者、奉身命於君、成三大功及再三、皆是賴朝代官也、殊可賞概之由令存之處、適所浴之恩之伊豫國、皆補地頭、不能國務、又沒官所々廿餘ヶ所、先日賴朝分賜、而今度勳功之後、皆悉取返、宛給郎從等了、於今者、生涯全以不可執思、何況遣郎等、可誅義經之由、慥得其告、雖欲遁不可叶、仍向翌侯邊射一箭、一決死生之由所存也云々、仰云、殊難思食、猶可制止行家者、其後無音、去夜重申云、猶同意行家了、子細先度言上、於今者、可追討賴朝之由、欲賜宣旨、若無勅許者、給身暇可向鎮西云々、見其氣色、主上法皇已下、臣下上官、皆悉相率可下向之趣也、已是殊勝大事也、此上事何樣可有沙汰乎、能思量可計奏者、義經內々曰、左內兩府今可參之由、左府未承返事云々、被遣召了、內府中只余申曰、被下追討宣旨事者、罪犯八虐、爲敵於國家之者、蒙此宣旨者也、賴朝若有重科者、可被下宣旨、何及異議、若又無指罪科者、可被追討之由、更以難量申、但平家及義仲等之時、雖不起自觀念、暗被下此宣旨了、天下亂逆、即在

如、此之漸、然而爲避當時之難、可被追彼等例哉否之條、宜在聖斷、敢非臣下之軍敷者、泰經重示曰、此事猶能可有御思慮敷、賴朝過意全不候、追討之條又不思食寄、然而義經等結構之趣、可謂勿論、仍只可給件宣旨之由、內々有天氣爲御存知、竊所申也、而如今令申御者、已追討猶豫之趣也、外聞之處、似引級賴朝且者、去年聊有申旨、爲報彼芳言、抑留此追討敷之由、若君有御疑殆者、尤無由事也、隨又彼兩度不意之宣旨、賴朝更不爲怨、今度又可同敷、仍宣下之條、旁何難之有哉、猶分明可令申切給敷者、余云、朝家大事、可依私阿容阿容一本作行家之由、於及御疑殆者、更不及申左右、凡者被尋問事、恐慮之所及全不憚時議、是存忠之故也、而無罪之者、可被追討之由、爭令言上哉、爲近當時之害、可被宣下哉否之條者、只可在勅定事也、若於有一決者、更非申止之議、抑、以前兩度宣旨、賴朝不結怨、今度可同之條、頗不可似彼例敷、凡此事恐意之所及、先被誘仰義經等、可被問子細於賴朝也、義經已有度々之勳功、且依爲汝代官、偏惡思食之處、聞可

有「濫刑」之由、恐申旨如「此之條、罪科何事哉、若依「傍輩之讒口、暗加「私刑」者、尤不便事歟、又其罪無「疑、必可「行「科斷」者、召「下其身、可致「其沙汰」也、乍「置「京都、差「上武士、可「誅之由風聞、狼藉之條已似「忘「朝章、若又義經等聞「謬說、令「驚申、歟、早聞「食子細、可「有「成敗之由、可「被「仰遣」也、而猶乖「勅命、企「濫吹」之時、處「違勅、可「被「下「追討宣旨、歟、不定「罪科、宣下之條、若奈「後悔、何、但此議於「今者難「叶歟、去十一日、始達「天聰之剋、被「仰「義經、暫抑「狼藉、可「被「達「子細於關東「カリケル事歟、濫行風聞之後者、縱被「仰遣、定無「承引、歟、誠是難「治次第也、今私被「示之旨、偏引「級賴朝、抑「留追討之由也、此條返々有「恐、於「不「思得「事者、小事猶難「申切、況大事哉、是全非「申止、只申「理之所「當許也者、泰經服膺退出了者、余聞「此事、神心惘然、天下之滅亡、結句在「此時、歟、賴朝失「義經之勳功、殆及「害「命之條、事若實者、義經起「逆心」之條、一旦可「然、賴朝之心操、以「之可「察事歟、但又義經於「賴朝、偏父子之義也、忽申「下追討宣旨、欲「誅「滅賴朝」之條、大逆罪也、自他共失「道理、天魔豈不「得「便乎、不

能「左右「云々、及「晚大夫史隆職來、談「世上事、今日、宇佐宮追補事文書、并下官申狀等、以「淨所之人、令「書「送親雅之許、奉長早可「奏聞」之由、有「返報、余申狀、續「加之、

宇佐宮條々事、

一以「黃金、可「爲「御正體「哉否事、

自「寬治之初、至「嘉保之末、云「仗議、云「問注沙汰、雖「及「數度、御體歟神寶歟、左右猶不「一決、但愚案之所「覃、此條強無「疑慮、歟、所以何者、如「師尙勘申、嘉保三年十一月卅日問注記者、放生會之儀、以「薦御枕、率「乘「神輿、以「香爐宮、黃金在「此中、令「列「神寶、修正之時、只以「件宮、率「移「彌勒寺、云々者、以「之思、之、神寶之條、雖「無「異儀、崇重之趣殆類「御體、歟、倩案、宗廟之用「靈寶、譬猶「公家之重「劔璽、推而准「之、自叶「物議、歟、抑此事不「召「官勘文」之條如何、

一付「和氣使、可「被「奉「進件金「哉否事、

縱雖「靈物、已爲「神寶、被「付「彼使、其儀可「然、但件黃金不「可「准「尋常之神寶、何況如「本宮解狀「者、武士之狼藉會無「比類、神寶之紛失不「殘「一物、適所「出來、只此黃金而已、靈寶獨殘、彌可「尊崇、歟、仍奉送



之間、聊可有議、須摸本納之宮、被設新造之器也、當時參治之神官等、定存其損却歟、早被尋子細可隨申狀歟、抑、付初度進發之使、被申當宮有事之趣、頗雖可思慮、如賴業勘申者、件靈寶久安、置他所、專可有其恐、被准天慶等之例、何難之有乎云々、恐遲留之條、頗非無其理歟、但彼和氣使發向、若在今明歟、期日已迫、沙汰有煩者、豈延引勅使之進發、可催具奉送之難事歟、將又以別御使、後日可被奉遣歟、依本宮之損亡、定有實檢之勅使歟、付彼送之、又得事宜之故也、兩樣共無巨難、一決只在敬慮耳、

#### 一同金安置所事、

徒於國司之里第、空經若干之旬月事、似疎簡、尤多恐懼、速奉納神祇官、豈可被待沙汰之趣歟、殊仰本司官人可被奉守護也、宿納石清水宮之條、雖似有由緒、假奉安置之儀、還以無便宜歟、

#### 一發遣公卿勅使、可被謝申事趣事、

今度狼藉往代無跡、賊是廟庭無雙之濫行、朝家第一之重事也、尤差遣公卿勅使、可被告謝歟、抑、我朝

鎮亂之根元、多在彼宮之神德、近年海陸路塞、祈請屢怠、雖然遂逆賊之誅伐、猶靈廟之玄應也、自今以後、徧以德化、彌期靜謐、心可垂冥德之由、殊可被祈申歟、逆亂猶不絕、非如此之答徵哉、

#### 一自本宮言上條々子細事、

雖無幸府之解狀、專非可默止、早以本宮之申旨、可有其沙汰也、但注進之趣、子細雖具、成敗之處不審猶殘、被仰彼勅使、可令勘注言上神殿破損、及宮中狼藉之事等、若猶於京都、有可被尋問之事者、召具大宮司已下神官等、可參洛歟、隨彼等之狀跡、可有次第之沙汰也、抑、本宮解狀已非正文、以牒案經言上、頗不似公事之法歟、召當時參洛之神官於官庭、早尋問子細、且可被散不審歟、

#### 一濫行武士事、

張本之輩、召上其身、尋造意勘罪名、任法可被糺斷歟、國家大事莫過宗廟、所行之旨殆超大逆、斷罪之法、暗難寬宥者歟、

#### 一召諸道勘文、及可被行仗議事、

粗案寬治之例、依黃金一事之沙汰、猶有連日數度



之仗議、況於今度者、累代寶物、悉以紛失、神殿舍屋多以顛倒、事絕常篇、曾無蹤跡、早仰諸道之儒士、被勘和漢之證據、專訪群卿之議奏、可有次第之成敗也、

一廢朝事、

如神宮申狀者、以薦御枕爲正體云々、付之案之、諸社之火災、猶有此儀、況於宗廟之有事哉、論御體之紛失、由、數、本宮解狀、超神殿之同祿、校量之處、輕重不侔、然則、乍達此災於天聽、爭闕其禮於朝廷哉、濫行雖爲去年沙汰、已在近日違期之條、不可有其難、但此條同可依諸道之勘奏也、亥刻、人走來告云、北方有作時之音、余聞之、事已實也、未知何事、然間人又告云、武士打國法皇宮云々、神心失度、奉念三寶之外無他、堅閉門戶、待勅靜之間、襲院御所之條已僻事也、賴朝郎從之中、小玉黨武藏國住人、卅騎許、以中人之告、寄攻義經家、院御所近邊也、殆欲乘勝之間、行家聞此事、馳向、追散件小玉黨了云々、如此之間、院御所殊警固、不知案內之輩、習先例、院御所有恐之由、下人令稱云云、凡世上之爲體、不可安堵之世也、可悲可

悲、

十八日、丁天晴、傳聞、被下賴朝追討宣旨云々、十九日、辰、天晴、早旦、隆職注送追討宣旨、其狀云、

文治元年十月十八日 宣旨、

從二位源賴朝卿、偏耀武威、已忽諸朝憲、宜前備前守源朝臣行家、左衛門少尉同朝臣義經等追討彼卿、

藏人頭右大辨兼皇后宮亮藤原光雅奉、

上卿左大臣者、

傳聞、一昨日左內兩府參院、內大臣先參上、被仰合追討事、內大臣申云、此事一身難定申、可被待左大臣參者、即左大臣參上被申云、凡不可及異議、早々可被下口宣旨也、其故、當時在京武士、只義經一人也、被乘彼申狀、若大事出來之時、誰人可敵對哉、然者、任申請可有沙汰也、更不可及議定云々、內府同之云々、經房卿參會、聞此事頗傾奇云々、廿一日、庚、天晴、傳聞、法皇臨幸鎮西之儀、都無許容云々、仍義經行家等、忽變件議云々、今夜向堂違方、

廿二日、辛未傳聞、宣下之後狩武士、多以不承引云、

廿三日、壬申人云、近江武士等、不與義經等、引退與方云々、

廿四日、癸酉天晴、自今日始祈等、余祈二壇、一壇不助供、法印被修之、一壇受染大將祈一壇、靜通阿闍梨、如意輪、依恐世間之物忿也、

廿五日、戊戌天晴、大藏卿泰經爲御使來、雖爲檢中、院仍泰經余隔障子謁之、泰經傳院宣云、遣使於賴朝之許、可被披陳子細歟、而隱而遣之者、義經

等之傳聞有恐、仍只仰聞件兩將、且覽被止當時之狼藉、被遣顯露之御使、其次含密語、被加披陳之詞如何、可計奏者、余案之、申下宣旨、時值近國武士之失度云々、仍忽余申云、事已發覺、被下追討宣旨畢、

其上更被仰遣和平之儀、賴朝豈可受勅使哉、暗可有推察歟、但於其條者、縱不承引、推而可遣歟、賴朝之忿怒、雖遣使、雖不遣使、更不可有差別之故也、而在京之武士等被仰合之時、各

聞申者如何、若可有此儀、不被下追討宣旨之以前者、頗叶物議歟、先日被尋問之時、內々存申之趣已是也、而不事問、被下宣旨之後、更此儀出來、首尾似不相應歟、惣非愚意之所及者、泰經曰、左大臣申云、早可被遣、尤上計也云々、即泰經歸參了、余竊案之、此事可彈指、誰人所申行哉、今日、泰經密語云、法皇只不可知食天下也、我君治天下、保元以後、亂逆運々、自今以後又不可絕、仍只爲全玉體、枉可有此儀者、余、君不知食天下者、誰人可行哉、泰經云、只臣下可議奏也、余曰、此事都不可叶、只以法皇御力、可被直天下也、泰經云、極雖有其恐、於被直之條者、一切不可叶、可被直得者、はやく直て、天下安穩にてこそは心てましかと云々、

廿六日、乙亥人告云、明曉、一定引退鎮西、法皇已下、直可率引率云々、大將軍之邊輩各稱此由、余在其中心云々、雖不信受此事、女房等同宿、猶非無怖畏、仍先今夜遣法性寺邊堂、光明院也、今明日經廻、

廿七日、丙子巷說等猶不止、萬人周章云々、或云、義經雖不甘心、郎從等猶可引率人々之由勸申云々、又不率具院者、一切不可相具之由、各令申云

云、

廿八日、<sup>丑</sup>早旦、相<sup>レ</sup>伴大將、密々向<sup>二</sup>光明院、謁<sup>二</sup>女子、  
即歸來、今日、女房等密々遣<sup>二</sup>賀茂雲林院邊、問巷云、  
云逐<sup>レ</sup>日倍増、猶奉<sup>レ</sup>具<sup>二</sup>法皇<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>赴<sup>二</sup>西海<sup>一</sup>之由、普以  
令<sup>二</sup>謳哥<sup>一</sup>其故也、凡洛中諸人、於<sup>二</sup>女人之類<sup>一</sup>者、一人  
不<sup>二</sup>殘留<sup>一</sup>云々、一身于<sup>レ</sup>今雖<sup>レ</sup>不<sup>二</sup>願思<sup>一</sup>、事已火急、仍  
竊所<sup>レ</sup>遣也、兼親盛房等、令<sup>レ</sup>相<sup>二</sup>具女房<sup>一</sup>、亥刻、兼親歸  
來、申<sup>二</sup>賀茂宿所相違之間事<sup>一</sup>、次第不可說候、賴輔入道  
兼日語<sup>二</sup>幸平<sup>一</sup>云々、而慥不<sup>二</sup>仰聞<sup>一</sup>歟、

廿九日、<sup>寅</sup>未明、差<sup>二</sup>道國行並牛等<sup>一</sup>在<sup>二</sup>賀茂<sup>一</sup>女房迎<sup>二</sup>  
取雲林院<sup>一</sup>也、昨日違亂事、尋<sup>二</sup>道賴輔入道之許<sup>一</sup>、大略  
無<sup>レ</sup>所<sup>二</sup>于披陳<sup>一</sup>歟、老耄之所<sup>レ</sup>致也、傳聞、義經猶可<sup>レ</sup>奉  
具<sup>二</sup>法皇<sup>一</sup>之由風聞、仍以<sup>二</sup>泰經<sup>一</sup>被<sup>レ</sup>尋<sup>二</sup>之<sup>一</sup>、仍以<sup>二</sup>誓  
狀<sup>一</sup>諍申云々、

卅日、<sup>卯</sup>天晴、義經等、明曉決定可<sup>二</sup>下向<sup>一</sup>云々、或云、  
攝州武士太田太郎已下、構<sup>二</sup>城郡<sup>一</sup>、九郎十郎等、若赴<sup>二</sup>  
西海<sup>一</sup>者、可<sup>レ</sup>射之由結構者、又九郎所從紀伊權守兼  
資、爲<sup>レ</sup>點<sup>二</sup>定船<sup>一</sup>、先以下<sup>二</sup>遣件男<sup>一</sup>、爲<sup>二</sup>太田等<sup>一</sup>被<sup>レ</sup>打了  
云々、依<sup>二</sup>如此事<sup>一</sup>、俄可<sup>レ</sup>引<sup>二</sup>退北陸<sup>一</sup>之由、又以風聞、  
凡近日、數々說、縱橫難<sup>レ</sup>定者歟、此日、余落胤女子四歳

天亡了、兵部少輔能業所<sup>レ</sup>養之女子也、日來病惱、或増  
或減、今日遂以如此、傳聞、去夜、法皇有<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>臨<sup>二</sup>幸他  
所<sup>一</sup>之議、聞<sup>二</sup>此事<sup>一</sup>、攝政無<sup>二</sup>左右<sup>一</sup>、逐電晦跡、其間、二  
位中將被<sup>レ</sup>棄<sup>二</sup>置于道路<sup>一</sup>云々、然而聞<sup>二</sup>御幸不實之由<sup>一</sup>、  
今日歸住云々、

## 十一月

一日、<sup>辰</sup>天晴、今晚、九郎等下向延引、或曰、變<sup>二</sup>西海之  
議<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>趣<sup>二</sup>北陸<sup>一</sup>云々、依<sup>二</sup>路次狼藉<sup>一</sup>歟、此夜、定能卿  
告送云、<sup>秀爲使</sup>義經等奉<sup>レ</sup>相<sup>二</sup>具法皇<sup>一</sup>之儀、都不可<sup>レ</sup>  
候之由、再三言上、此上強無<sup>二</sup>疑殆<sup>一</sup>之處、猶可<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>其  
儀<sup>一</sup>之由、今日謳哥於院中、或又可<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>遷都<sup>一</sup>之由、  
有<sup>二</sup>申行之輩等<sup>一</sup>云々、

二日、<sup>巳</sup>天晴、未刻許、右少辨定長<sup>和</sup>爲<sup>二</sup>法皇御使<sup>一</sup>  
來、召<sup>二</sup>簾前<sup>一</sup>、<sup>依傳、續、</sup>謁<sup>レ</sup>之、定長仰<sup>二</sup>院宣<sup>一</sup>曰、義經  
明曉可<sup>レ</sup>向<sup>二</sup>鎮西<sup>一</sup>、其間、聊有<sup>二</sup>申請旨<sup>一</sup>、其狀云、可<sup>レ</sup>奉  
動<sup>レ</sup>君之由、達<sup>二</sup>天聰<sup>一</sup>、依<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>其恐<sup>一</sup>、書<sup>二</sup>進起請<sup>一</sup>先畢、  
其上不可<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>疑之由存之處<sup>一</sup>、院中祇候之輩、猶致<sup>二</sup>發  
向之用意<sup>一</sup>云々、此事都不可<sup>レ</sup>候事也、即從等難<sup>レ</sup>遂<sup>二</sup>  
先途<sup>一</sup>、猶臨幸可<sup>レ</sup>宜之由雖<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>申、於<sup>二</sup>義經內心<sup>一</sup>者、



更不可乖<sub>レ</sub>叙慮、敢以不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御不審、抑、山陽西海等庄公、共爲<sub>二</sub>義經之沙汰、調庸租稅年貢雜物等、儘可<sub>二</sub>沙汰進上<sub>一</sub>之由、欲<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>、兼又、豐後武士等、被<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>院、義經行家等殊可<sub>二</sub>扶持<sub>一</sub>之由、欲<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>者、件兩條可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>哉否、宜<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>計奏<sub>一</sub>者、余申云、可<sub>レ</sub>追<sub>二</sub>討賴朝<sub>一</sub>之由、被<sub>二</sub>下<sub>一</sub>宣旨<sub>一</sub>之上、如此細々事、更不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>議定<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>今者、只任<sub>二</sub>申請<sub>一</sub>有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、早速可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>出<sub>一</sub>洛陽<sub>一</sub>歟者、及<sub>レ</sub>晚、大夫史隆職來、聊有<sub>二</sub>申旨<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜賜<sub>二</sub>院宣於義經等<sub>一</sub>云々、

三日、<sub>午</sub>天晴、自<sub>二</sub>去夜<sub>一</sub>、洛中貴賤多以逃隱、今曉、九郎等下向之間、爲<sub>二</sub>疑<sub>一</sub>狼藉<sub>一</sub>也、余猶敢不<sub>二</sub>動搖<sub>一</sub>、只奉<sub>レ</sub>念<sub>二</sub>太神宮、春日大明神<sub>一</sub>之外、更以無<sub>二</sub>他計<sub>一</sub>、其上事可<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>宿業<sub>一</sub>歟、忽逃隱之條、不<sub>レ</sub>似<sub>二</sub>君子之翔<sub>一</sub>、仍遂以不<sub>二</sub>搖動<sub>一</sub>者也、辰刻、前備前守源行家、伊與守兼左衛門尉<sub>大夫尉也、從五位下、</sub>同義經<sub>爲<sub>二</sub>殿上<sub>一</sub>侍臣、</sub>等、各申<sub>二</sub>身暇<sub>一</sub>、赴<sub>二</sub>西海<sub>一</sub>訖、是則無<sub>二</sub>指過息<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>賴朝<sub>一</sub>欲<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>誅伐<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>免<sub>二</sub>被害<sub>一</sub>所<sub>二</sub>下向<sub>一</sub>也、始推雖<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>下可<sub>レ</sub>討<sub>二</sub>賴朝<sub>一</sub>之宣旨、事不<sub>レ</sub>起<sub>二</sub>自<sub>一</sub>叙慮<sub>一</sub>之由、普以風聞之間、近國武士不<sub>レ</sub>從<sub>二</sub>將帥之下知<sub>一</sub>、還以<sub>二</sub>義經等<sub>一</sub>處<sub>二</sub>謀反之者<sub>一</sub>、加<sub>レ</sub>之、引<sub>二</sub>率法皇已下可<sub>レ</sub>然之臣下等<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>鎮西<sub>一</sub>之由、披

露之間、彌乖<sub>二</sub>人望<sub>一</sub>、其勢逐<sub>レ</sub>日減少、敢無<sub>二</sub>與力之者<sub>一</sub>、仍於<sub>二</sub>京都<sub>一</sub>難<sub>二</sub>支<sub>一</sub>關東之武士、是以下向云々、院中已下諸家、京中悉以安穩、義經等之所行、實以可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>義士<sub>一</sub>歟、洛中之尊卑無<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>隨喜<sub>一</sub>、若如<sub>二</sub>以前風聞<sub>一</sub>者、王侯卿相一人而不可<sub>レ</sub>全身、然則人別爭有<sub>二</sub>失<sub>一</sub>生涯之果報<sub>一</sub>哉、因<sub>レ</sub>茲無<sub>二</sub>此濫吹<sub>一</sub>歟、可<sub>レ</sub>悅々々、今日、女房等自<sub>二</sub>雲林院邊<sub>一</sub>歸宅、京中所<sub>二</sub>殘留<sub>一</sub>之武士等、少々爲<sub>レ</sub>追<sub>二</sub>義經等<sub>一</sub>下向云々、

四日、<sub>未</sub>天晴、今日又、武士等追<sub>二</sub>行義經<sub>一</sub>云々、傳聞、昨日、於<sub>二</sub>河尻邊<sub>一</sub>與<sub>二</sub>太田<sub>一</sub>合戰、義經得<sub>レ</sub>利、打破通了云々、

去二日諸社祭、可用<sub>二</sub>次支干<sub>一</sub>之由被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>了云々、今日、不<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>春日幣<sub>一</sub>、不<sub>二</sub>神祭<sub>一</sub>、是等例也、

五日、<sub>申</sub>天晴、依<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>堂、春日率川等祭、依<sub>レ</sub>穢延引、然而氏神祭猶可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>之由有<sub>二</sub>所見<sub>一</sub>、仍終日神齋、但強不<sub>レ</sub>密也、九郎等於<sub>二</sub>室乘船畢<sub>一</sub>云々、六日、<sub>酉</sub>天晴、大外記賴業來、依<sub>レ</sub>穢不<sub>レ</sub>昇<sub>二</sub>堂上<sub>一</sub>、候<sub>二</sub>緣邊<sub>一</sub>、授<sub>二</sub>左傳於大將<sub>一</sub>、此次賴業云、去二日諸社祭可用<sub>二</sub>次支干<sub>一</sub>之由、被<sub>二</sub>下<sub>一</sub>宣旨了云々、若依<sub>二</sub>穢氣<sub>一</sub>歟、大將中將密々有<sub>二</sub>和歌<sub>一</sub>、中將書<sub>二</sub>序<sub>一</sub>、



七日、丙天晴、入夜、人曰、九郎義經、十郎行家等、爲豐後國武士、被誅伐了云々、或云、爲逆風、入海云々、兩說雖不詳、解纜不<sub>レ</sub>安隱、歟、事若實者、仁義之感報已空、雖似遺恨、爲天下大慶也、彼等若能鎮西者、爲追討之武士等、巡路之國彌可滅亡、關東諸國又依此亂、不可通其路、仍中夏之貴賤、可無活計之術、而不<sub>レ</sub>遂前途滅亡、豈非國家之至要哉、義經成大功、雖無其詮、於武勇與仁義者、貽後代之佳名者歟、可歎美々々々、但於賴朝起謀反之心、已是大逆罪也、因茲天與此火歟、〔凡〕五濁惡世、圖靜堅固之世、如此之亂逆繼踵而不絕歟、可悲々々、傳聞、豐後武士等伐義經等事、說云々、

八日、丁天陰、午後雨降、傳聞、義經、行家等、去五日夜乘船、宿大物邊、追行之武士等、寄宿近邊在家、手島冠者、并範季朝臣息範資等、爲大將軍云々、件範資雖生國家、其性受勇士加之、痛冠者範賴親昵之間、僅具在京之範賴之即從等行向未合戰之間、自夜半大風吹來、九郎等所乘之船、併損亡、一艘而無全、船過半入海、其中、義經行家等、乘小船一艘、指和泉浦逃去了云々、於家光者梟首了、豐後武士等之中、或爲降人來範資

之許、又乍生被<sub>レ</sub>捕取了云々、鎮西武士等伐取義經等之由、風聞尤謬說、次第如此云々、件範資今日上洛、所談說云々、已是實說也、仍隨聞及記之、

九日、戊午後天晴、傳聞、義經等渡淡路國了云々、但未聞實說、今日物忌也、

自院賴朝之許可被<sub>レ</sub>遣御使之由、有其定、經房卿、光長朝臣、定長等廻其謀云々、又證憲法印同廻沙汰云々、而此輩皆停止、若宮別當丸、賴朝近臣、日昨朝來在京云々、被<sub>レ</sub>遣了、其御定之趣、人不<sub>レ</sub>知、秘密事云々、

十日、己天陰、今日物忌也、入夜範季來、語日來成怖畏之間事、并其息範資、追戰九郎黨類之間事、愚父一切不<sub>レ</sub>知之由、立誓言爭<sub>レ</sub>申之、又云、被<sub>レ</sub>下賴朝追討宣旨之間、余申狀、存道理之由、世人譏歌云云、

十一日、庚天晴、傳聞、經房卿感追討之間余定申詞云々、

晚頭、雅賴卿來、談世間事等、余示合三位中將改名之間事、中將名良經、九郎名義經也、良與義其訓惟同、義經須改名也、而敢以不<sub>レ</sub>改、然間忽類刑人滅亡、

於今者、中將之改名不可及、異議歟、仍內々問其字於長光法師之處、擇申云、良輔經通云々、輔字九條殿御名、經通雖爲公卿之名、無被子孫、當時非可憚、被用有何事、哉云々者、以此趣問雅賴、々々曰、公卿名雖不担任、經通爲勝、被用宜歟云々、入夜爲三方達向堂廊、

十二日、辛卯天晴、隆職宿禰來、談世上事、入夜光長參上、有申事等、

義經行家等可奉召之由、被下院宣云々、其狀云、被院宣、源義經同行家、巧反逆、赴西海之間、去六日於大物濱、忽逢逆風云々、漂沒之由、雖有風聞、亡命之條、非無狐疑、早仰有勢武勇之輩、尋搜山林川澤之間、不日可令召進其身、當國之中、至于國領者、任此狀、令遵行、於庄園者、觸本所致沙汰事、是嚴密也、會勿懈緩者、院宣如此、悉之、謹狀、

十一月十二日

大宰權帥經房奉

和泉守殿

件札、遣和泉守行輔許狀也、被下諸國御教書皆如此云々、件兩將昨日、蒙可討賴朝之宣旨、今

日、又預此院宣、世間之轉變、朝務之輕忽、以之可察、可彈指々々々、

十三日、壬辰天晴、關東武士、多以入洛云々、參河守範賴爲大將軍、可上洛云々、或云、爲與之疑、留置坂東云々、實說未聞、

十四日、癸巳天晴、前源中納言示送曰、相摸國住人、其有久

夜前入洛、入來申云、京事、十月廿三日聞候、範賴、并公顯僧正、廿二日下著、然而範賴成憚直不申、粗被

露傍輩云々、廿四日堂供養、卯時事始、申剋終、願主

淨衣云々、布施物之長櫃百八、導師馬卅疋、十疋、讚衆廿口、各三疋、一疋、自廿四日、有上洛沙汰、有久

廿七日出國、次官親能、今四々日之後可出國云々、

賴朝一定可京上之由風聞、已超足柄關之由、於

路頭所承也、非如先々決定可上洛之由、下知

郎從等云々、若宮別當達美乃國云々、去廿七日ま

ては京都子細不委云々、

今日、範季來語、入洛武士等之氣色大有恐云々、大略

天下大可亂、法皇御邊事、極以不吉云々、梶原代官

下向播磨國、追出小目代男、倉々付封了云々、件

國、院分國也、佛嚴聖人來、余問法文事等、今日、又有

安來語云、去三日、女房冷泉殿參院、法皇眼前被仰  
 云、今日可參向攝政第、可申之樣、世間事、於今  
 者、雖帝王雖執柄、更不可通耻辱、今度之怖畏、  
 情案次第、偏朕之運報之盡也、何況、賴朝忿怒之由  
 有其聞、攝政之邊事不<sub>レ</sub>受之由、自元風聞、右府邊  
 事、殊爲賢相之由令<sub>二</sub>庶幾云々、去年比、再<sub>二</sub>有<sub>二</sub>申  
 旨、然而依<sub>二</sub>朕之抑留、不<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>其意、今度定<sub>二</sub>重<sub>二</sub>有<sub>二</sub>申  
 事、歟、於今者、非朕之力所及、仍未聞其事、以  
 前、遮目避職、右府令沙汰天下事尤穩便歟、但自  
 是<sub>二</sub>之<sub>二</sub>使<sub>二</sub>トテハ不可<sub>レ</sub>申、只伺氣色可告也云々、  
 即馳參攝政第、申勅語之趣之處、其氣色甚不請、殆  
 被<sub>レ</sub>處御使之過怠、一切無御返報、只參上可承候許  
 被<sub>レ</sub>示、事體依不足言、彼日不歸參、翌日<sub>四日</sub>、參上、  
 奏此旨、其後無沙汰云々者、<sub>已上有</sub>此事若實者、法  
 皇仰尤可謂有<sub>二</sub>理致<sub>二</sub>歟、凡如此事、只天運之令然  
 也、但亂代執朝之柄一事、太不甘心、法皇與當時  
 攝政、尤相似<sub>ル</sub>君臣也、疎遠不得心之恩翁、太以不  
 足其器、又不叶<sub>二</sub>時議<sub>二</sub>歟、傳聞、三條宮息、年來被  
 座北陸之宮、<sub>生年十九、號加元</sub>一昨日入洛、賴朝之沙  
 汰云々、

十五日、<sub>甲日</sub>晴、今日、終日念佛、隨分致信心、是  
 自去月<sub>午鬼宿</sub>、思企、每月十五日可修此行也、<sub>指有公事</sub>  
 只月內一日可<sub>修</sub>、亥刻終之、今日依<sub>二</sub>最上吉日<sub>二</sub>始<sub>二</sub>祈等<sub>二</sub>、近  
 日、問巷叢々說、付<sub>二</sub>冥顯<sub>二</sub>有<sub>二</sub>其恐<sub>二</sub>、仍只爲拂<sub>二</sub>不祥厄  
 會、并怨家之咒咀也、  
 不動護摩、<sub>法印、於無</sub>  
 愛染王護摩、<sub>宗殿阿闍梨、於</sub>  
 尊星王供、行參律師、  
 一字金輪供、座主全主、  
 千手供、智證阿闍梨、  
 尊勝聖觀音等念誦、行曉法印、  
 藥師大威德等念誦、靜通阿闍梨、  
 日吉仁王講、經國阿闍梨、  
 佛眼供、<sub>觀性法橋、件所、日來所修也、</sub>  
 此日、有<sub>二</sub>齋宮卜定<sub>二</sub>、<sub>高倉院女王、生年六歲、母賴定卿女、高倉院</sub>  
 十六日、<sub>未</sub>天晴、已刻、越後前司宗雅朝臣來語云、去  
 比、全家招出納男、於攝政家<sub>二</sub>弔<sub>二</sub>釜殿<sub>二</sub>之間、狼籍出  
 來、件出納男、還被<sub>二</sub>召<sub>二</sub>籠政所<sub>二</sub>、而攝政聞此事、大歎  
 息、遽而被<sub>二</sub>免<sub>二</sub>、高佐朝臣承仰、召<sub>二</sub>件男<sub>二</sub>、誘示云、此事



我不過之由、爭可達下官之聞哉之由、內々有攝政氣色之由、顯象<sup>宗雅</sup>也、所示也云々者、余驚而尋問之處、事實也、召問出納男、全無所于披陳、仍付三件宗雅、送攝政之許、被返送之時、可給檢非違使、歟、宗雅內々云、今日、殿下御物忌、又私有隙、明日可參也云々、今日、定能卿來、雖爲服暇除服了、仍所謁也、是先例也、但法家不甘心云々、今日、春日祭可立幣之日也、余家中聊有、不審事、<sup>天下檢</sup>也、仍自川原欲立、而陰陽師忽相違、及亥刻、在宣奏上、仍發遣也、定能卿云、法皇、明後日可參給八幡、又可<sup>有</sup>三日吉御幸云々、被下賴朝追討宣旨之間事、余申狀、達關東、有歸仗之由、世間謳歌、此事還以有恐、無由事歟、傳聞、近日、白川邊顛倒之堂舍等、往還之輩偏用薪、此事猶以爲罪業之處、於今者破取佛像云々、云金色、云彩色、散々打破佛體爲薪云々、聞此事、神心如屠、雖云末世、爭有如<sup>此</sup>之事哉、國土之亂逆、只如此之漸也、武士之郎從、并京中誰人等所爲云々、可悲々々、或人云、賴朝決定可上洛云々、頭辨光雅送書狀於季長、大將中將等催可參五節之由、中將辭退、大將領狀了、

十七日、丙初雪積庭上、申刻、大外記賴業來、呼前示合中將名可改哉否之由、申云、雖不改何事哉、若改者、可用良輔、<sup>其輔經通、共長光入道所攝中也</sup>、於經通者公卿名、猶可被避云々、大將中將賦雪詩、<sup>經云、雪中思故序并歌等、會者不及廣、此日、春日吉田等祭也、</sup>申、依<sup>舊座事也、</sup>自河原立吉田幣、<sup>式日也、</sup>十八日、丁天晴、梅宮、并率川祭也、自川原立梅宮幣、如例、自一昨日至今日、神事如例、余聊內心有憚事、仍自川原所立也、入夜藤中納言定能來、又有安來云、舞人近久語云、<sup>件近久、左內國府近習者、凡日本大藏卿泰經語可然之人々、入道關白可執行天下之由結搆云々、</sup>禪門相國、并資賢人道同心云々、去七日以若宮別當玄雲、<sup>賴朝之專一之者、所奉說彼本國之八幡(今)宮別當也、仍有此說云々</sup>爲法皇御使、不可知食天下政之由被仰遣、彼次泰經送三件結搆之趣云々、如此之事、偏春日大明神之御謀也、非人力之所及歟、如此之說、不可注付、就中、下劣之輩所言、甚不可聞入、然而後代爲思合、故所記置也、此事傳聞之次第、已爲實說云々、

傳聞、賴朝卿決定出國、當時就駿河國、自彼國先



立、上洛之武士說云々、其後、於參河遠江邊、一兩日可逗留云々、計入洛之行程、可及今月廿五六日云々、或說、又聞九郎十郎退散之由、自路可歸國云々、然而多分上洛之由、所謳歌也、猶不信受之、松出納九昨日令相具宗雅所、攝政家付使被返送之、今日神事、仍明日、可給檢非違使、

十九日、戊天晴、陰晴不定、凝寒殊甚、松出納九賜檢非違使明基了、物忌也、大將方有詩、

廿日、己自隆職之許進僧事聞書、去夜被行云、義經行家等、可奉取法皇之由風聞之間、寄事於追討、所被行之御祈等、有効驗之故被行賞也、仍爲御祈之驗也、

仍爲御祈之驗也、

法印永弁、座主全玄、四天王法寶、權大僧都延杲、同御祈五壇法寶、權小僧都

覺鏡、同法眼宗通、同法僧正、權律師俊通、同法寶印、寬經、同法寶印、園城寺大寶院、可置阿闍梨二口、同御祈法寶印、金剛童子

已上御祈賞、

宮崎宮檢校道清、大上法皇御幸八幡宮、度清讓、

廿一日、庚天晴、大原野祭、自川原奉幣、神齋如例、

大將有豐明節會習禮、又有詩、賴朝上洛決定留了云

云、

廿二日、丑天晴、此日、五節參入也、

公卿二人、和中納言經房、新受領二人、美作內大臣知行、大將

依催參內、直衣如例、出紅梅織物衣、不給、隨身上臚

冠如例、今日、頭辨光雅以札送季長計、問、祭主競望之輩、

是非如何之由、其狀如此、

祭主闕以誰人可被補哉事、

右公宣、能隆等朝臣申狀如此、官位次弟、重代差別登

用之條、以何可爲先哉、可令計申御之由、內々

御氣色候也、仍以言上如件光雅恐々謹言、

十一月廿二日 右大辨光雅奉、

進上 大宮亮殿

申狀如此、

公宣、能隆、祭主競望事、狀狀之趣各存理致、位次與

重代、登用之差別、遞雖有勘申之旨、猶逼可被

尋先例也、凡於祭主之職者、須爲先重代、歟、

宮中〔之〕繁務、有便於掌行之故也、但公宣之一門、

未曾補此職者、頗難抽任之處、祭主公長者、雖

非先祖、已彼一族也、中絕之條、用捨惟同、然則被

優衰老之上臚、強不可爲後進之訴訟、歟、左右之

間、宜在聖斷歟者、以此趣可被計奏之狀如件、

十一月廿二日、

花押

今夜、送舞姬裝束於內大臣、帥納言等之亭、以馬助國行、送內府之許、納衣宮蓋、件並使權、先例也、裝打裘、以

經奏送納言之許、(也)色目同前、內府自不出之、

知行之美作國之勤也、然者雖不可必遣職事、其營

已亟相之經營也、近代又如、此之事、更無差別、仍隨

宜差遣職事也、丑刻、大將歸來、攝政之外、隆忠、

出薄賴實不出云々、

廿三日、寅天晴、傳聞、賴朝聞義經行家等退散之由、

早以歸國云々、

又傳聞、秦經結構之趣、以入道關白可令、達攝政之聞、

大以歎息、即以女房奏、院云、天下事不可知、食之

由、人々結構、敢不可有御承引候、只如本可有

御沙汰也云々、院御返事云、可通世之事之條、更非

依人之勸、朕自所案也、云世之運、云身之運、更

以不可執著、於今者、一向思往生之大事、(之)不

惡災殃之條、深々所庶幾也、朕雖不知天

下、執柄之運、全不可依其事、已上御返答趣、內々勅定云、

攝政不熟政事之由、人口難塞、歟、攝錄之初、殊親

昵右府云々、彼間、殊違失事不聞歟、近年頗疎遠歟、尤不便、猶示合萬事、可有沙汰ものをと云々、先

日可被避所職之趣、內々有其氣、而不申其左

右、今有此奏請、爰法皇依私之要、奉催君之萬機、

歟之由、思食之故、有此勅報歟、攝政之奏請、可謂

不足言歟、抑、下官、院邊疎遠不請、逐日陪增、

成恐之處、此次第頗存外也、或人云、今度義經反逆、

及賴朝追討之宣下之間事、思食合人々申狀之

處、下官議奏之旨、始終符合之由、寂慮顯然也云々、又

此沙汰之間、攝政被申之旨、不足言、非管轄之器

量之由、御覽取畢云々、萬事只可任運也、不越不

媚、存廉存忠、一生之昇沉、只奉任佛神者也、

廿四日、卯天晴、童女御覽也、申刻、大將參內、直衣、

浮文織物、半蓐車、隨身上臈冠、各給裝束、秉燭之後

歸來、御覽只內府許也、通資雖傾狀、遲參之間不被

待云々、若可被待具歟、參入公卿、大將、權中納

言、隆忠、賴實等云々、隆忠紅條厚衣、賴實蘇芳厚衣、面唐物云々、新嘗祭上卿、

賴實卿云々、

此日、隆職來、賴朝宣下之間事、頗有忿怒之氣之由、

上洛武士所申也云々、傳聞、賴朝妻父、北條四郎時

政、今日入洛、其勢千騎云々、近國等可爲件武士之進止之由、問巷謳歌、

廿五日、甲辰雨下、豐明宴會也、大將欲參陣昨日、頭辨於內裏云、

大納言不參、必之處、午刻、召使來觸云、大外記賴業申云、可出仕云々、

今日、內辨堀川大納言所被參也云々、仍大將不參

陣、其由以消息、觸光雅朝臣了、傳聞、御前試夜、

少將雅行與侍從定家、有鬭諍事、雅行嘲哂定家之

間、頗及濫吹、仍定家不堪忿怒、以脂燭打雅行

了、或云、打面云々、依此事、定家除籍畢云々、及子夜、向

堂、依方違也、

廿六日、乙巳天晴、早日歸自堂、辰刻、大夫史隆職來

云、昨日、或武士語示云、賴朝追討之宣旨奉行之人々、

可損亡云々、此事還不、被信受、議奏之人猶以非

重科、況奉行之辨史哉、但近代之事、依聊事、及追

捕、此條極以有其恐云々、又云、去夜自鎌倉、泰經

卿許有書札、於院御所、相尋之處、當時不祗候之

由、人々答之、于時大怒、投文宮於中門廊、逐電了、

仍定長披件文籍、奏聞其趣、人不知云々、此日、中

御門大納言息左兵衛佐宗國始被來、余及大將謁之、件武衛與楠三裝於女房方、午刻、右少辨定長爲

法皇御使來、余呼簾前逢之、定長與書札一通、仰

云、賴朝卿申狀如此、召問于細於泰經、取陳狀、可

遣歟、將又無左右、可被行罪科歟、可令計申

者、披見賴朝書札之處、先立文表書云、大藏卿殿御

返事、其下無署名、其內狀云、行家義經謀叛事、爲天

魔之所爲、之由被仰下、甚無謂事候、天魔者、爲

佛法成妨、於人倫致煩者也、賴朝降伏數多之朝

敵、奉任世務、於君之忠、何忽變反逆、非指教慮

之被下院宣哉、云行家云義經、(不)召取之

間、諸國衰弊、人民滅亡歟、日本國第一之大天狗、更

非他者、候歟、仍言上如件云々、申云、以披陳狀

被仰遣、雖普通之儀、一切無沙汰、聊可有恐哉否

之條、又以難知、只在勅定、就中、於此事者、殊

以不可及、他人計、偏可在教慮者、

今日、內藏人來、大將方來、卅日臨時祭、可進狩立御

馬也云々、可進一疋之由申了、

廿七日、丙午天晴、藤中納言定能卿來、談世間事、又語

節會之間事、內辨堀川大納言忠親、外辨上卿權中納言

隆忠、內辨作法不審等、一被日、終日雨下、入夜雖雨脚休、其地甚濕、而官



裝御裝束於晴、仍內辨招頭辨裝束司不候云々、問云、今日兩日也、可奉仕雨儀御裝束之處、設晴儀之條、別御定歟、頭辨申云、非御定、只依雨止、官存晴儀歟、但庭上水溢、晴儀不可叶云々、仍內辨召大夫史依無辨也、可奉仕雨儀之由不奏事由、仰之、但於外辨座者不可改之、大內之儀、晴雨儀無差別之故也者、仍不改外辨裝束、猶以爲晴儀云々、

余案之、南庭裝束者、用雨儀、外辨裝束者、爲晴儀之例、古今未聞、大內者、長樂門東廡、已屋內也、何可有晴雨之差哉、仍全不足准據、改御裝束於雨儀はかりにては、外辨獨爲晴儀之事、太無謂、然之間、外辨公卿下襲裾泥之云々者、

一參入之參議三人、所役四ヶ事、而今一事召大哥無別當使不足、召仕小忌云々、此事不甘心、二人參入之時、猶以各可勤雨役、況三人哉、召仕小忌事、參議一人參入之時事歟、  
一改大哥座之時、內辨自召內堅仰之云々、大臣內辨之時、仰參議也、納言之時、可如此歟、先例不審、可尋之、

一國栖二獻仰之、歸著之時不居座、奏事由召仰御酒勅使云々、此事家々故實也、他人強不可勤歟、於內辨官奏除目叙位等者、推而非可行之事歟、如此之秘事、受誰人說哉、  
一中間入御之時、即令撤御膳云々此事分明不覺悟可檢見也、外辨不審等、

一不問式部彈正云々故殿令問給也、禮問不被尋歟如何、  
一列立之時忘却揖第二、定能揖之時、其後更揖云云、

一小忌上卿候御前、奉仕御裝束、其間、參議一人祇候、諸卿向外辨之時、只爲先參議可著之處、數待賴實卿、甚無所據云々、如此之事、未練之令然也、今夕、大將方密々有詩歌、

廿八日、丁陰晴不定、傳聞、賴朝代官北條九、今夜可謁經房云々、定示重事等歟、又聞、件北條九以下郎從等、相分賜五幾山陰山陽南海西海諸國、不論庄公、可宛催兵糧段別五并、非雷兵糧之催、惣以可知行田地云々、凡非言語之所及、

廿九日、戊陰晴不定、傳聞、昨日、法皇先日被仰遣之趣、重被達攝政、今度、直以勅定被仰云々、



而猶以無承引云々、

卅日、己酉陰晴不定、此日、賀茂臨時祭也、大將中將相

伴參內、大將前四人、中將前二人、大將爲上首、奏宣命、無辭、別、使季

經朝臣云々、中將著壁下座、又執插頭花者、乘

燭之後事了、相具參法成寺御八講、攝政被參、各立

行香云々、亥刻歸來、今夜光長來、聊有告示事、關東

所知仰付青侍光景、上洛、於賴朝邊有聞及事、當時賴朝

國云々、秦經卿殊結意趣、又射山不可知、食天下

事之機令存云々、此事尤不便事歟、可願前車之覆

誠也、

今日有地震、戊刻、今日、天文博士廣基來、申天變符

合事、去廿三日、月犯昴星、而泰經有此事、尤可恐云々、

## 十二月

一日、戊戌陰晴不定、依八條院御佛名、大將參鳥羽、

於御堂有此事、仍撤御筵云々、子刻歸來、今夜、

範季來、有告示事、

二日、辛亥陰晴不定、覺乘法眼、并弟子僧等、爲余見

最上之吉夢云々、各注進也、在別紙、可蒙神德之

條炳焉、仰而可信、

三日、壬子天晴、召家實示春日神人事於攝政之許、傳

聞、秦經來七日可向關東、是非被攝召之儀、進而

爲陳謝、行向云々、但是聞內儀遮而所首途歟、遂

不可通得之故也、侍從能成、九郎一腹弟、故長成子、今日、相具

保田子男下向了云々、猶人々多可損亡之由風聞云

云、

四日、丑癸天晴、申刻、大外記賴業來、公朝持參賴朝返

札之後、院中頗安堵、其狀有和顏之趣云々、賴業所

語也、笛師宗方、來大將方授樂、甘州、又大內記長

守已下、儒士兩三不期而會、有百韻連句、并當座詩

等、

五日、寅甲天晴、故女院御忌日也、女房先參堂、相次大

將參入、其後、余以與自閑路參向、導師慶智僧都、題

名僧本範僧也、其中忠玄入滅之替召經圓、公卿只大

將一人也、著佛前座、又取布施、直衣也、殿上人季經朝臣

已下衣冠、或布衣少々相交、例時了引布施、其後有恒例彌勒

講、此日、來九日可參院御佛名之由、催大將中將

等、

六日、卯乙朝間天晴、午後霰降、今日、終日精進、聊有乞

夢事、

七日、丙天晴、此日、書願書、遣覺乘法眼之許、依恐世間怖畏、爲啓白御社也、入夜光長來、談世間雜事、今晚、女房大將、又女房三位等、同時見吉夢、昨日乞夢之所請、靈驗揭焉者歟、

八日、丁天晴、明基來、授律於大將、宗賢同來授笛、或人云、秦經親宗等之所領、自賴朝之許、可注送之由、仰遣北條之許云々、兩人損亡決定歟云々、所宛諸國之兵糧、皆可募官物內之由、下知之間、庄公之運上不通、人命殆不可待元正云々、非言語之所及、

九日、戊雪降、院主典代、佛名延引十五日之由、來告大將中將等、

十日、己陰晴不定、申刻、院主典代景信來、職事經泰著衣冠、先申事由於大將、歸出取祿授之、被物一重也、須重生失也、次又申三位中將方、歸出同授祿、共於中門外給之也、是先日穢中、兩人補院司之由來告、仍穢以後可來之由仰合、仍所來也、今日依日次宜也、中將昨今有風病氣、

十一日、庚天晴、自今日三ヶ日、獻幣帛於春日御社、仍卯刻、先浴之後著衣冠、降庭修禊、陰陽師時光、陪隨季長、役

信光、各布衣、陰陽師者衣冠也、路問無骨之故也、其後取笏、兩段再拜、幣物相副串、不施之、度遣之、明日明後日各辰刻、可奉獻之由仰遣之、今日、終日神事、女房大將中將姬君皆有服暇事、季行入道、去六日逝去、仍今日、祓以前各向堂、女房中將姬君余祓之後、除服等了、大將者、依爲室衰日、今日不除之、明日可除服也、仍大將獨留堂、明日除服之後、可歸來、殘三人今日歸來、今日、又獻金小笠イサメカサ也、於御社、一日比依夢告也、余聊書銘祈願之趣也、又御幣之串、以水同書所祈、是故女院御教也、先蹤必成就所願事云々、

十二日、辛朝雨、神齋、傳聞、去夜、自賴朝之許、送使於經房卿許、兼能云々、被下、追討賴朝宣旨之間事、猶爵申云々、此一兩日公顯僧正入洛云々、

十三日、壬天陰、朝問神齋如昨日、自一昨日至今日、春日御社所獻奉幣也、仍昨日早旦、先行水之後、著衣冠、取笏、降庭遙拜、自今晚咳嗽病不快、有小溫氣、然而疑信心中丹之底、誓曰、所祈申、若叶大明神之神慮者、雖浴此病勿增者、即帶病浴湯、其後無爲、及午後溫氣散、神心頗驗、爰知有大

明神之加護、歟、於後日之增者、非祈念之限者也、  
〔今日大將方有詩題二云々、〕今日曉、又余見吉夢、  
今朝有安來、聊有示事、

十四日、亥自夜雪降、但不及寸、今晚、或女房又有  
夢、自當時攝政之家、所獻春日之神馬被追歸了  
云々、去治承三年入道關白有事之時、有此夢、

或人云、賴朝貢物於法皇、其物甚輕微、殆似奉輕  
慢云々、國相八十疋、白布十段、馬引物廿具云々、此次申、北面下薦五人、可

被追却之由云々、但如此事、多謬說、追可尋、一  
定後聞、供物無實云々、傳聞、經房卿正月七日首途、

爲御使可趣關東云々、後聞、賴朝進物、秀平所  
進云々、而取件書札申云、日來風聞事、已有其實、

仍爲證文留之云々、  
十五日、甲今日、每月所作終日念佛也、定能卿來語云、  
下北面輩勘當之事、依土肥北條等申狀、更免除云々、  
勿論事歟、

此日、院御佛名也、大將參入、先申院司慶、右少辨定  
長爲申次、進立中門、申事由歸來、仰聞食之由了、  
拜舞之後、昇候殿上、必候殿上例也、其後、人々參集、兼  
雅卿爲上首者、事訖行香祿等之後退出、兼雅、忠

親、大將三人取祿云々、正月依御忌月、二月可有  
朝覲行幸、仍今夜不被定行幸難事也、近例、正月  
有行幸之時、必御佛名次有<sub>三</sub>其定者也、

十六日、丑頭辨之許送人々申文、依明日京官除目  
也、返札云、除目延引、來廿四日可被行云々、今日、  
大將聊有不豫事、

十七日、丙光長朝臣來語云、去夜謁經房卿談語世  
上事等云々、法皇不可知食天下事之樣、有<sub>三</sub>內々  
御氣色云々、爲被仰仰件事、經房爲御使、可下<sub>三</sub>

向關東之由有勅定、再三辭申猶無許容、仍此條可  
被仰仰合人々之由令申、然而他人一切無可當<sub>三</sub>  
其仁之人、不可及議定之由、重有仰、仍於今  
者、可行向之儀也、兼遣觸了、正月十六日可首途<sub>三</sub>

云々、此外、種々有所談說等、不能具錄、申刻、五  
位藏人定經來、仰云、宇佐宮黃金、暫可被奉納石清  
水宮外寶殿之間事、兩大外記所勘申、如此、何

樣可被行、可令計申給上者、被制下形二通、勘文二通、  
水外寶殿、何吉設之由、被行、軒廊御等、被納神祇官與石清  
卜官察共下申石清水吉之由也、見披文書等、退可令  
申之由答了、留文書等了、今日、在宣持來新曆、

其次召前問本道故實等、在宣於當道之末代之名

士也、可讚美、

今夜宿寢勝金剛院內定法寺、以彼所爲本所之故也、卅五日余宿此宅、而東築垣可修理覆、而依當東方<sup>大將</sup>爲移、忌所宿本所也、於本所者、一夜其忌付之故也、

十八日、大外記賴業注送云、昨日被行解官、左大臣下知師尙云々、

大藏卿兼備後權守高階朝臣泰經、

右馬頭高階朝臣經仲、

待從藤原朝臣能成、

越前守高階朝臣隆經、

少內記中原信康、

左大臣宣奉、勅、件等人宜令解却見任者、

文治元年十二月十七日 大外記中原師尙奉

今朝早旦、自定法寺歸來、大將依猶不快、今夜以

在宣令行土公鬼氣祭、

十九日、<sup>或</sup>天陰、親雅、可定申荷前事之由、催右大

將、依所勞、申其由了、內藏頭經家朝臣、相具其

息家平<sup>生年七歲、去十一月加吉服也</sup>、來召家平於前、給作物、其父

於余頗雖爲不忠之者、其息爲賴輔入道之孫、仍殊

所召前也、入夜有他行事、定遍法務<sup>東寺第</sup>、昨日入滅了云々、又忠雲<sup>山忠預公</sup>、去比入滅云々、

廿日、已雨下、風吹、未刻大地震、雖不及去七月之

震、普通無比類之動也、其後連々六ヶ度、相并七ヶ

度震動、此震非他武士諸國押領之徵也、日本國之

有無、只在今冬明春歟、已及獲麟歟、

先日、定經所來問之字佐宮黃金事、隨折紙旨<sup>今日</sup>送

之、文書等返遣了、

件折紙狀如此、

字佐宮黃金、可被奉納石清水外寶殿間事、

外記勘申旨、先規雖不詳、准據粗有例、任件等之

趣、可被計行歟、八幡聖御宮事、尤雖足准據、彼

者新造之器也、是者擬御體之神寶也、尊崇之儀、

輕重不詳歟、神祇官供奉、并可被行大秋之條、賴

業勘奏尤可被據用歟、可被新造宮并辛櫃之趣、

師尙申狀、又以不可及異議歟、但件黃金本納香

爐宮云々、其體暗難知、被尋本宮之條、忽不可

叶、仍只追黃金之寸法、先新造其宮、可被納辛

櫃也、退委尋宮體、臨奉送本宮之期、可被改

造也、



抑、八幡靈御宮破損之時、度々有奉幣、今度之事爲新儀、奉納之、奉幣以前、先可被<sub>レ</sub>告申<sub>一</sub>歟、但彼例依<sub>二</sub>公卿之議<sub>一</sub>、設<sub>二</sub>新造之宮<sub>一</sub>沙汰之趣、神慮難測、破損之條非<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>其恐<sub>一</sub>、仍旁所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>告謝<sub>一</sub>也、於<sub>二</sub>今度<sub>一</sub>者、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御卜<sub>一</sub>了、官寮共申<sub>二</sub>最吉之由<sub>一</sub>、神告之條已無<sub>二</sub>疑殆<sub>一</sub>、加之、件黃金事、達<sub>二</sub>天聽<sub>一</sub>之後、依<sub>二</sub>世上之騷亂<sub>一</sub>有<sub>二</sub>沙汰之機<sub>一</sub>、適事定議決者、雖<sub>二</sub>一日<sub>一</sub>早速可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>奉遣<sub>一</sub>也、於<sub>二</sub>良平之住宅<sub>一</sub>送<sub>二</sub>若干之日月<sub>一</sub>、深以<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其恐<sub>一</sub>之故也、而有<sub>二</sub>再三之奉幣<sub>一</sub>者、定爲<sub>二</sub>遲緩之因緣<sub>一</sub>歟、仍雖<sub>二</sub>無<sub>一</sub>兼日之使、豫定<sub>二</sub>其日<sub>一</sub>、殊仰<sub>二</sub>宮寺<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>祈請<sub>一</sub>、歲內被<sub>二</sub>念奉納<sub>一</sub>、自叶<sub>二</sub>神慮<sub>一</sub>者歟、奉<sub>二</sub>送本宮<sub>一</sub>之儀、退可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>議定<sub>一</sub>、凡彼宮之濫行、我朝之重事也、先日被<sub>二</sub>尋問<sub>一</sub>之時、粗言<sub>二</sub>上旨趣<sub>一</sub>了、勘<sub>二</sub>諸道<sub>一</sub>訪<sub>二</sub>群議<sub>一</sub>、殊可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>也、

廿一日、庚午樂人宗賢來、申<sub>二</sub>右近將監所望之由<sub>一</sub>、

廿二日、辛未息小兒、七歲、密々參<sub>二</sub>詣春日<sub>一</sub>、初度也、所<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>僧正<sub>一</sub>之小童也、明曉、可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>詣御社<sub>一</sub>、仍今日所<sub>二</sub>下向<sub>一</sub>也、

廿三日、壬申天晴、時々小雪、兼雅、雅賴等卿來、各以謁<sub>レ</sub>之、大外記賴業申送云、明日、左相府上表云々、年來

全無<sub>二</sub>避<sub>一</sub>職之心<sub>二</sub>人也<sub>一</sub>、而忽此儀出來、其故如何、若依<sub>二</sub>追討宣旨事<sub>一</sub>、賴朝成<sub>レ</sub>怨之由風聞之間、恐而被<sub>レ</sub>辭歟、事甚似<sub>二</sub>周章<sub>一</sub>、猶過<sub>二</sub>此時<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>辭退<sub>一</sub>歟、今日聊有<sub>二</sub>聞及事<sub>一</sub>、次第勿論々々、入<sub>レ</sub>夜光長來、今日修<sub>レ</sub>積、降<sub>二</sub>庭遙<sub>一</sub>拜大神宮、依<sub>二</sub>有所思<sub>一</sub>也、

廿四日、癸酉此日、京官除目也、執筆兼光卿云々、

廿五日、甲戌見<sub>二</sub>聞書<sub>一</sub>、盛房任<sub>二</sub>宮內大輔<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>八條院未給<sub>一</sub>、與<sub>二</sub>親經<sub>一</sub>相轉也、又明法博士明基、元道忠也、此兩事、下

官所<sub>レ</sub>推舉<sub>二</sub>也<sub>一</sub>、又實家卿任<sub>二</sub>皇后宮權大夫<sub>一</sub>、此外無<sub>二</sub>指事<sub>一</sub>、此夜、自<sub>二</sub>左大臣大炊御門亭<sub>一</sub>、還<sub>二</sub>幸開院亭<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>家賞<sub>一</sub>、其息中納言賴實卿叙<sub>二</sub>正二位<sub>一</sub>、實宗、隆忠兩卿、爲<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>超越<sub>一</sub>臨時叙<sub>レ</sub>之、入<sub>レ</sub>夜雪降、及<sub>二</sub>深更<sub>一</sub>甚降、積<sub>二</sub>地及<sub>一</sub>五六寸、

廿六日、乙亥夜雪、高積殆及<sub>二</sub>尺<sub>一</sub>、近年之間、彙少之甚雪也、大將方企<sub>二</sub>雪山<sub>一</sub>、忠武持<sub>二</sub>參雉<sub>一</sub>、此日下名云々、

廿七日、丙子天晴、午刻、右中辨光長朝臣持<sub>二</sub>來賴朝卿資札并折紙等<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>夢如<sub>レ</sub>幻、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>珍事<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>後監<sub>一</sub>續<sub>二</sub>加之<sub>一</sub>、

賴朝書狀、

言上

## 事由、

右言「上日來之次第」候者、定子細事長候歟、但平家奉背君、旁奉結遺恨、偏企濫吹候、世以無隱候、今始不能言上候、而賴朝爲伊豆國流人、雖不蒙指御定、忽廻籌策、可追討御敵之由、令結搦候之間、御運令然之上、勳功不空、始終令討平候、伏敵於誅、奉世於君、日來之本意相叶、公私依悅思給候、先不待平家追討之左右、爲停近國十一ヶ國武士之狼藉、差上二人使者久經國平候、猶私下知依有恐、一々賜院宣、可成敗之由仰含候了、仍彼國狼藉、大略令沙汰鎮候之後、依別仰、重又件使者男、被下道鎮西四國候、已賜

院宣、令進發候了、如此之間、種直、隆直、種遠、秀遠之所領者、依爲沒官之所、任先例可置沙汰人職之由、雖令存候、且先乍申事由、尙輒于今不成就候、何況自余之所、不及成敗候、如近國沙汰、任

院宣可鎮旁狼藉之由、兼令存知候之處、不審之次第出來候、以義經補九國之地頭、以行家被補四國之地頭候之條、前後之間、事與心相違、彼

輩各相憑其柄、巧非分之謀、令下向候之刻、雖無指寄攻之敵、天隨難通、乘船解纜之時、入海浮浪、即從奢爲、即時令滅亡候之條、誠非人力之所及、已是神明之御計也、而彼兩人、其身未出來、晦跡逐電、旁分手令尋求候之間、國々莊々、門々戶々、山々寺々、定狼藉之事等候歟、召取候之後、何不相鎮候哉、但於今者、諸國莊園平均可尋沙汰地頭職候也、其故者、是全非思身之利潤候、士民或含暴惡之意、值遇謀反之輩候、或就脇々之武士、寄事於左右、勳現奇恠候、不致其用意候者、向後定無四度計候歟、然者雖伊豫國候、不論莊公、可成敗地頭之輩候也、但其後先例、有限正稅已下國役、本家雜事、若致對捍若致懈怠候者、殊加誠、無其妨、任法可被致沙汰候也、兼可令御心、得此旨給候、兼又當時可被仰下一候事、愚意之所及、乍恐注折紙、謹以進上之一通院奏料、令付帥中納言卿候了、今度天下之草創也、尤可被究行淵源候、殊可令申沙汰給也、天之所令、率與也、全不可及御案候、以此旨可令洩申右大臣殿給之狀、謹言上如件、

文治元年十二月六日

賴朝 在判

謹上 右中辨殿

禮紙狀云、

逐言上、

同<sub>レ</sub>意謀反人行家義經<sub>一</sub>之輩、先可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>解官追却<sub>一</sub>交名注<sub>二</sub>折紙<sub>一</sub>、謹以進<sub>レ</sub>覽之、一通院奏料、令<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>帥中納言卿<sub>一</sub>候也、民部卿成範卿者、令<sub>レ</sub>同<sub>二</sub>意彼輩<sub>一</sub>候之由、雖承及候、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>御緣人<sub>一</sub>、輒不<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>候、定御計候歟、恐惶謹言、

折紙狀云、

可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御沙汰<sub>一</sub>事、

一 議奏公卿、

右大臣、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>下<sub>二</sub>內覽宣旨<sub>一</sub>、

內大臣、

權大納言實房卿、

宗家卿、

忠親卿、

權中納言實家卿、

通親卿、

經房卿、

參議雅長卿、

兼光卿、

已上卿相、朝務之間、先始<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>神祇<sub>一</sub>、次至<sub>二</sub>子諸道<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>彼議奏<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>計<sub>一</sub>行之、

一 攝錄事、

可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>下<sub>二</sub>內覽宣旨於右大臣<sub>一</sub>也、但於<sub>二</sub>氏長者<sub>一</sub>々、本人不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>也、

一 藏人頭、

光長朝臣、

兼忠朝臣、

二人相並可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>補歟、光雅朝臣被<sub>二</sub>下<sub>二</sub>追討宣旨<sub>一</sub>了、天下草創之時、不吉之職事也、早可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>停<sub>一</sub>廢之、

一 院御厩別當、

朝方卿、本奉行之職也、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>還補<sub>一</sub>歟、

一 大藏卿、

宗賴朝臣、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>任<sub>一</sub>之、

一 辨官事、

親經可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>採用<sub>一</sub>歟、

一 右馬頭、

待從公佐可<sub>レ</sub>任<sub>一</sub>之、

一 左大史、

日向守廣房失<sub>二</sub>任國<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>任<sub>一</sub>之、隆職成<sub>二</sub>追討宣旨<sub>一</sub>、天下草創之時、禁忌可<sub>レ</sub>候者也、仍可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>停<sub>一</sub>廢、

一 國々事、

伊豫、

右大臣御沙汰、

越前、

內大臣御沙汰、

石見、

宗家卿可<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>之、  
忠(實)

越中、

光隆卿可<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>之、

美作、

實家卿可<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>之、

因幡、

通親卿可<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>之、

近江、

雅長卿可<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>之、

和泉、

光長朝臣可<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>之、

陸奥、

兼忠朝臣可<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>之、

豐後、

賴朝欲<sub>二</sub>申給<sub>一</sub>其故者、云<sub>二</sub>國司<sub>一</sub>云<sub>二</sub>國人<sub>一</sub>、同<sub>二</sub>意行  
家義經謀反、仍爲<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>沙汰其黨類<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>

行國務<sub>一</sub>也、

一 關官事、

撰<sub>二</sub>定器量<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>採用之、

十二月六日、

賴朝 在列

一 解官事、

參議親宗、

大藏卿泰經、

右大辨光雅、

刑部卿賴經、

右馬頭經仲、

左馬權頭業忠、

左大史隆職、

左衛門尉知康、

信盛、

信實、

時成、

兵庫頭章綱、

同<sub>二</sub>意行家義經<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>亂<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>之凶臣也、早解<sub>二</sub>官

見任<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>追<sub>二</sub>却<sub>一</sub>之、兼又此外、行家義經家人、

追從勸誘之客、相<sub>二</sub>尋淺深<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>官位輩<sub>一</sub>者、一々可

被<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>官俸<sub>一</sub>廢之、

世、陰陽師之類、相交(由)有<sub>二</sub>其聞<sub>一</sub>、同可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>追<sub>二</sub>

却<sub>一</sub>之、

十二月六日

賴朝 在列

此事、旁以不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然、仍招<sub>二</sub>遣經房卿<sub>一</sub>、及<sub>レ</sub>晚來、付<sub>二</sub>件  
卿<sub>一</sub>進<sub>二</sub>消息折紙等於院<sub>一</sub>、其上申<sub>二</sub>固辭之子細<sub>一</sub>、其狀云、  
自<sub>二</sub>賴朝卿許<sub>一</sub>注遣旨如此、須<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>之處、近日武  
士奏請事、不<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>有<sub>二</sub>施行<sub>一</sub>、仍若無<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>被<sub>二</sub>  
宣下<sub>一</sub>者、後悔無<sub>レ</sub>益、仍忌憚遮以所<sub>二</sub>言上<sub>一</sub>也、以<sub>二</sub>不肖  
之身<sub>一</sub>、當<sub>二</sub>重任之仁<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>悅、不當<sub>レ</sub>非<sub>一</sub>、先此事、  
依<sub>二</sub>何事<sub>一</sub>其沙汰出來哉、由緒不審、如<sub>二</sub>申狀<sub>一</sub>者、天下  
之草創也、可<sub>レ</sub>究<sub>二</sub>盡政道之淵源<sub>一</sub>云々、已是可<sub>二</sub>鎮<sub>一</sub>亂



致治歟、而內覽兩人一之條、偏禍亂之源也、敢非靜謐之計、延喜仁平之例、古今彙少之非據也、醍醐帝者、雖我朝無双之聖代、以首亟相事、爲失、是則其權分二之故也、鳥羽法皇者、末代之賢主也、而依寵賞凶惡之臣、字治左大顯萬代之失、保元以後、天下亂逆、論其源、非因仁平之兩權哉、上古中古、治政之代、其亂猶如此、末代末世、亂逆之今、其禍又不可疑、欲致治似求亂、譬猶加薪求熾消、挽水期流、是帝王政者、兼鑒將來、塞其亂、待其治者也、當時天下之縉素、以延喜仁平之例、偏處不吉、殆及忌諱、世忌其例、人斷其望之處、此時若貽其例者、後代爲例、繼踵不絕歟、亡國之基、無過於斯、爭以人君之政、萌亂亡之源哉、是成人御時、以可覽天子之文書、先觸委任之臣、謂之內覽、幼主之儀、攝政就南面、代君攝天子之政、仍攝政之時、別置內覽之臣者、以可覽攝政之文書、先可觸內覽之人、以之謂之攝政、與內覽殆似、有君臣之禮、加之、叙位除目官奏等、於攝政之直慮所行也、其外有內覽臣者、相分又於彼直慮可行歟、旁以無其謂、仍古來未有比例、縱雖無例、有叶物

議事者、隨宜立法、是聖代之流例也、於此事者、依無理又無例、緣底忘當時後代之禍亂、可被行古今無例之新儀哉、是縱雖有三ヶ之非據、若致萬機之懸望者、以爲一人枉法之謂、可有此議歟、而亂世之執權、愚心全不欲者也、然則、爲世爲君爲身、此事惣無所據、固辭之趣如此之由、須被仰遣關東也者、經房卿云、賴朝卿所申抽賞刑罰、其事已多、必悉不可叶、敎慮、然而偏任彼奏請、併可被行云々、而至于此大事、被仰返子細者、定乖彼意趣歟、此條何樣可被仰遣乎、敎定之趣、定如此歟、仍乍恐爲存知所驚申也者、余云、此事率爲上、全以不可及御煩、其故者、宥刑抑賞者、可乖奏請之旨趣、尤可有御猶豫、至此事者、可蒙恩之者、自致辭遁、具述子細、於被仰遣其趣者、敢不可爲君御抑留、若有權臣之爵者、其恐可在愚臣者也、只枉可被仰遣之由、可被奏聞者、經房伏理歸參、又以光長申攝政云、賴朝申送旨、經院奏了、若有被宣下事者、暫令待重院宣給哉、暗非可有御抑留、院宣之儀、只申達子細之間、片時可被相待、於宣下之後、

者、無<sub>レ</sub>由<sub>二</sub>于奏聞<sub>一</sub>之故也、此事雖不可必然、經房稱云、此由、被中<sub>レ</sub>攝政了、然者先被<sub>二</sub>申<sub>一</sub>、及<sub>二</sub>亥刻<sub>一</sub>、光長歸來云、帥卿殿下<sub>二</sub>次第宜<sub>一</sub>云々、仍所<sub>二</sub>申<sub>一</sub>也、及<sub>二</sub>亥刻<sub>一</sub>、光長歸來云、帥卿相共先參<sub>二</sub>院、經房被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>之趣、付<sub>二</sub>定長<sub>一</sub>具以奏聞、仰云、先例之有無不可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>議、自<sub>二</sub>關東<sub>一</sub>恣行<sub>二</sub>任官<sub>一</sub>解官等、言上之條有<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>事歟、此上事、萬事不可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>沙汰、只任<sub>二</sub>彼申旨<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>也者、經房申云、處、空模所勞殊無術、夜已及<sub>二</sub>三更<sub>一</sub>、汝聞<sub>二</sub>勅旨<sub>一</sub>之趣了、已爲<sub>二</sub>同事<sub>一</sub>且可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>此由<sub>一</sub>之旨、所<sub>二</sub>申<sub>一</sub>付<sub>二</sub>光長<sub>一</sub>也云々、於<sub>レ</sub>院雖承、不被<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>御辭退<sub>一</sub>之由、依<sub>レ</sub>不可<sub>レ</sub>默止<sub>二</sub>猶參<sub>一</sub>殿下、而一有<sub>レ</sub>情不<sub>二</sub>祗候<sub>一</sub>、仰天之處、定長爲<sub>二</sub>院御使<sub>一</sub>參上、先是、先以參上、尋<sub>二</sub>出近習者一人<sub>一</sub>申入、付<sub>二</sub>件傳奏之人<sub>一</sub>申<sub>二</sub>參入由<sub>一</sub>、定長先參<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>歸、參院之後、依<sub>レ</sub>召光長又參<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>、即申<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>了、攝政返事云、此事已御定切了、此上於<sub>レ</sub>中、雖<sub>二</sub>片時<sub>一</sub>難<sub>レ</sub>抑、只可有<sub>レ</sub>邊迹<sub>一</sub>也云々、今日次第如<sub>レ</sub>此云々、又云、定長密語云、攝政披<sub>二</sub>見折紙狀<sub>一</sub>云、此事如<sub>レ</sub>狀不限<sub>二</sub>內覽<sub>一</sub>一事歟、於<sub>二</sub>氏長者<sub>一</sub>々々、不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>之由已載<sub>レ</sub>之、爰知相違事決定在<sub>レ</sub>之歟、仍此事奉行宣下、猶以有<sub>レ</sub>恐、只自<sub>レ</sub>院直仰<sub>二</sub>上卿<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>歟云々、而院仰云、如<sub>二</sub>狀云<sub>一</sub>、二人內覽<sub>二</sub>トコ<sub>一</sub>見<sub>レ</sub>、不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>不審<sub>一</sub>云云、

廿八日、丑<sub>二</sub>天晴<sub>一</sub>、卯刻、著<sub>二</sub>烏帽直衣<sub>一</sub>參院、定能卿可<sub>二</sub>參會<sub>一</sub>之由豫觸<sub>レ</sub>之、而遲參、親信卿自然參入、以<sub>二</sub>件人<sub>一</sub>欲<sub>二</sub>入<sub>一</sub>見參之處、隱而不<sub>二</sub>出來<sub>一</sub>、又可<sub>レ</sub>謁<sub>二</sub>法皇愛妾<sub>一</sub>、號<sub>二</sub>升後<sub>一</sub>、近日朝、稱<sub>二</sub>在<sub>一</sub>彼居吻、之由、以<sub>二</sub>前駟兼親<sub>一</sub>、件男有<sub>レ</sub>緣<sub>二</sub>於彼<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>相觸<sub>一</sub>、稱<sub>二</sub>無<sub>一</sub>便宜不<sub>レ</sub>謁、疑有<sub>二</sub>法皇之制止<sub>一</sub>歟、彌以爲<sub>レ</sub>恐、經<sub>二</sub>數刻<sub>一</sub>定能卿參入、以<sub>二</sub>件人<sub>一</sub>申<sub>二</sub>參入之由<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>左右仰<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>定長參否<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>未<sub>一</sub>參之由、有<sub>二</sub>可<sub>一</sub>遣召之仰、仍遣召了云々、此間陳<sub>二</sub>所思<sub>一</sub>、便宜之時可<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>敕聞<sub>一</sub>之由、示<sub>二</sub>定能卿<sub>一</sub>、小時定長參入、即參<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>了、歸來傳<sub>二</sub>敕語<sub>一</sub>曰、近日上臈職事不<sub>二</sub>出仕<sub>一</sub>、光雅解官、其不出<sub>二</sub>仕<sub>一</sub>、仍仰<sub>二</sub>五位職事<sub>一</sub>已宣下了、其實未<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>召<sub>二</sub>親仕<sub>一</sub>云々、自<sub>二</sub>賴朝之許<sub>一</sub>所<sub>二</sub>申事<sub>一</sub>、一事無<sub>二</sub>違亂<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>致<sub>一</sub>沙汰者、余付<sub>二</sub>此仰<sub>一</sub>申<sub>二</sub>所存<sub>一</sub>畢、其趣委細不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>具錄<sub>一</sub>、昨日以<sub>二</sub>經房<sub>一</sub>所申之三ヶ條不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>重奏<sub>一</sub>、今日所<sub>レ</sub>申者、只自<sub>二</sub>敕慮<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>起事、更非<sub>二</sub>本意<sub>一</sub>之由、并密<sub>二</sub>通關東<sub>一</sub>之疑、恐申之趣等也、內求<sub>二</sub>權臣之媚<sub>一</sub>、外表<sub>二</sub>謙退之詞<sub>一</sub>歟之由、敕慮疑思食之條、深耻思之故也、歸來示<sub>二</sub>無<sub>一</sub>許容<sub>二</sub>之旨<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>此奏請往反及<sub>二</sub>三四反<sub>一</sub>、遂不<sub>レ</sub>承<sub>二</sub>分明之敕答<sub>一</sub>、只逆麟之天氣也、此間、定能語云、定長謁<sub>レ</sub>余之間、得<sub>二</sub>便宜<sub>一</sub>欲<sub>レ</sub>奏<sub>二</sub>余所<sub>一</sub>示、而不可<sub>レ</sub>奏之由有<sub>レ</sub>仰、奉<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>追

立了云々、彌以怖畏不能左右、其後參八條院御方、謁女房退出了、

入夜、藏人少輔親經來、傳院宣云、任官解官等事、仰攝政之處、申不可下知之由、汝儘可奉行云云、余申云、微臣奉行之條、未得其心、若爲上卿可參陣歟、然者、上表之後、未返預其表、前官之者不能奉行公事、又依執政之儀可加下知歟、於件條者、今日參入述所思致固辭、不承分明之仰退出、未被下件宣旨以前、雜事奉行如何、縱雖被下宣旨、不見吉書以前、先例如此事不執行者也、今仰旁以無其理、若是傳言之誤歟、儘可返奏此趣者、親經歸參了、

抑、今日請謁法皇愛妾、誠可謂忘廉耻、但深有思慮者也、其故何者、自去治承三年以來、武權偏奪君威、恣行朝務、因之天下之貴賤、只恐彼權不盡君命、小臣獨不媚權臣、不蔑朝憲、以之爲德、仰佛神之感應、而依議臣之一言、偏被類奸邪諸侯之輩之條、進而有恐、退而有耻、仍爲顯陰德之深、故貽陽狂之名者也、有情之人、定察此案歟、況天道哉、況佛神哉、當時一旦誹謗、更不爲

苦耳、

廿九日、戊午刻、親經來、傳院宣云、任官解官事等、猶可申子細、是非可執行之儀、所申尤有其謂、只依叙慮不決、所被仰合也云々、其子細等、

一自關東皆悉注進任人、而置參議之闕、不任其人、雅賢朝臣不入解却之內、而又任其替、此間進退如何、欲任雅賢於參議、不載鎌倉之舉任、欲從其職、於解却已漏罪科之注文、左右之間、宜計奏者、

申云、已不載解任之折紙、爰知無罪科歟、仍空被奪其職之條、於理不可然、爲人爲疑歟、須被任參議之處、闕官等撰定器量、可被計任之由、載彼意見狀、雅賢已爲貫首、雖非可嫌八座、猶可有思慮歟、一切不知漢家之人、中居愚按之八座故、然而此條不出、所及、被叙三品爲上計歟、但此上、左右在敕定者、

一辨官轉任事如何、

申云、只任次第可被轉任歟、不可及異議者、親經歸參了、又馳歸示云、雅賢事、所申可然、但可被問祖父入道、又猶可計申者、申云、子細先度申



了、而被問「祖父」者、可被用「彼申狀」之故歟、其上有「恐于重奏、但若被尋下所申者、猶三品可宜之由、可被奏者、親經云、經房當時雖候御所、八座可宜之、此申狀甚奇異也、只當此時、候御所、八座可宜之、云、此申狀甚奇異也、只當此時、候御所、八座可宜之、又云、辨官轉任者、所被尋仰者、左少辨基親可任、權右中辨歟、又親經可任、權右少辨歟、此兩條也云々、余申云、左右只可在「御定」、全不可及煩事歟、但任「普通之儀」、基親轉「權右中辨」、何事之有哉、雖「少事」爲有人慶也者、今朝、史賴清、大外記賴業等、持「來內覽宣旨」、去夜深更被「宣下」、仍今日所「持參」也云々、各不「披見」、後自「是告仰之日」、可「持來」之由示之、聊有「所思」之故也、且又康和保安之例、以「件宣旨」用「外記方吉書」、而年內不可「見吉書」、且爲「承保之例」之上、同又有「所思」之故也、仍明春撰「日可」見「吉書」、彼時爲「用」外記方吉書、今日所不「召見」也、

賴業、親經等各相語云、余去年上「辭表」了、其後可被「返之由」、有「院宣」、而余再三「辭通」、不「返給」、空經「兩年了」、忽欲「被下」此「宣旨」、理須「先被返」件表、而夜及「五更」、不能「催」中使、又依「此事」、難「抑留宣旨」之間、各相議、竊以「本官載宣旨」了、件表先以返給

了之由、可「披露」也云々、近代之事、此程沙汰、全不可「爲後難」之由、上卿已下議定云々、余不知「此事」、暗被「載本官」了、更不能「申是非」、事頗雖「不穩」、又不「及私之進退」事歟、

今夜、被「行」任官解官等云々、卅日、已「披見聞書」之處、雅賢被「任參議」、是祖父懇望之上、經房之唇吻云々、太異樣事也、經房者、當時卿相之中、頗爲「下人」之由、年來存之、依「此事」頗見「其心操」了、雖爲「少事」顯「心底」者也、其外事如「關東折紙」等、

今日、自「關東」飛脚到來、其狀云、大藏卿泰經、刑部卿賴經等、同「意行家義經」者也、早可「被處」遠流、一人伊豆、一人安房云々、可「付」經房之由、仰「光長」了、件狀、送光長之許也、光長以「書狀」送「帥卿」、返札云、任「申請」早可「有沙汰」云々、以「件狀」可「仰」遣關東之由、仰「光長」了、

又去廿七日返事案、光長書「進之」、少々加「取捨」返給了、明曉可「遣云々」、

招「定能卿」、示「合法皇逆鱗之間事」、即以「其息親能〔卿〕」、可「申入」之由示付了、惟准「思食義仲之時入道



關白執朝務之例之條、無極訴也、蒼天在頂、更無過怠者也、

右元曆二年秋冬

八月十四日改元  
爲文治元年也

此墨付百廿枚者先年

松殿右幕下道昭卿依爲予三男任懇望聽書寫仍彼卿  
繕寫之畢抑法性寺忠通公之有職松殿基房公親面授  
而傳于後法性寺兼實公且加日課號玉葉是也累代爲  
後昆之儀範其末苗不讓他秘握而可貯深奧者也

于時慶安二年己丑季夏虫拂日 陶化翁〔花押〕誌焉

# 玉葉卷第四十三終

玉葉

卷第四十四

自文治二年正月  
至同年三月

文治二年春

正月

一日、庚晴、昨日雪終夜不止、今朝望<sub>三</sub>前庭、白雪滿<sub>レ</sub>尺、已是豐年之瑞也、萬福可<sub>レ</sub>悅之春也、卯時拜<sub>三</sub>天地四方、須<sub>二</sub>寅刻拜<sub>一</sub>而還、帶劔拜<sub>レ</sub>之、去々年上表之後未<sub>二</sub>返給<sub>一</sub>、仍去年春不<sub>二</sub>帶劔<sub>一</sub>、而舊年被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>內覽宣旨<sub>一</sub>之時、暗被<sub>レ</sub>載<sub>三</sub>本官<sub>二</sub>、于細見、仍帶劔而已、抑、年來當日浴、而舊年浴之後、身無<sub>二</sub>不淨<sub>一</sub>之時、當日不<sub>二</sub>必浴<sub>一</sub>之由、見<sub>三</sub>故殿御記<sub>二</sub>、仍今日不<sub>レ</sub>浴之、未<sub>レ</sub>刻、手水陪膳左京權大夫光綱運參、仍遲怠、其後見<sub>レ</sub>鏡服藥、申<sub>レ</sub>刻、右大將三位中將相共先參<sub>レ</sub>院、大將一員如例、前庭四人、中將前庭二人、中將舊年補<sub>三</sub>院司<sub>二</sub>之後、連々相障、令<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>慶、仍今日出仕之次、申<sub>二</sub>件慶<sub>一</sub>拜舞、其後相具參<sub>レ</sub>內、小朝拜、大將、上首、節會、大將、內辨、等用雨儀、依<sub>三</sub>庭雪不<sub>レ</sub>拂也<sub>二</sub>、院拜禮、同依<sub>三</sub>庭砂濕<sub>二</sub>延引、明日欠日、明後日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行云々、此日、入道關白以<sub>三</sub>少將忠季<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>賀<sub>三</sub>內覽慶<sub>二</sub>、忠親、同賀、經房

聊來、余謁<sub>レ</sub>之述<sub>三</sub>鄙懷<sub>二</sub>、余慶事、其理不當之于細也、彼卿有<sub>二</sub>談說事<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>具錄<sub>一</sub>、其中示<sub>レ</sub>雅賢補<sub>三</sub>參議<sub>二</sub>之間事、祖父入道懇望之上、經房申<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然之由云々、余申<sub>三</sub>三品可<sub>レ</sub>宜之由<sub>二</sub>、不堪<sub>三</sub>八座之器量<sub>二</sub>之故也、而不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用<sub>三</sub>其狀<sub>二</sub>歟、經房所<sub>レ</sub>言甚無<sub>レ</sub>謂、當<sub>二</sub>此時<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>協<sub>三</sub>叙慮<sub>二</sub>、隨<sub>レ</sub>宜令<sub>三</sub>計申<sub>二</sub>歟、良久談話之後退出了、大將欲<sub>レ</sub>出之間、內大臣中將公守來、大將謁<sub>レ</sub>之、其外補任辨官等爲<sub>レ</sub>慶來、又他人々多以來、亥刻、大將中將歸來、節會之間無<sub>二</sub>殊事<sub>一</sub>云々、深更頭辨光長來申<sub>レ</sub>慶、傳聞、今日、大外記賴業雖<sub>レ</sub>持<sub>三</sub>參叙位勘文<sub>二</sub>於攝政亭<sub>一</sub>、不<sub>二</sub>披覽<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>追歸云々、攝政雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>催<sub>三</sub>出行之儀<sub>二</sub>、忽以停止云々、子細不審、今日、五位藏人定經來、問<sub>三</sub>小朝拜之間事<sub>二</sub>、兩貫首未<sub>レ</sub>從事之間、定經可<sub>レ</sub>勤<sub>三</sub>仕申<sub>二</sub>次<sub>一</sub>歟、又出御之間事、攝政不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>參者、何樣可<sub>レ</sub>存哉云々、余云、雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>未<sub>二</sub>受取<sub>一</sub>、又不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>吉書、仍如此事不能<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>、

早經<sub>二</sub>院奏<sub>一</sub>并申<sub>二</sub>攝政<sub>一</sub>可<sub>二</sub>進止<sub>一</sub>者、內々粗示、入<sub>レ</sub>夜節

供、政所動之、陪余不<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>之、

二日、辛巳天晴、時々風雪、手水陪膳季長朝臣、齒固如常、前源中

納言雅賴來、呼<sub>レ</sub>入內出居、談<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、今明之間可<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>使者於鎌倉<sub>一</sub>者、

藤中納言定能相<sub>二</sub>具其息少將親能<sub>一</sub>來、余謁<sub>レ</sub>之、殿上人等少々來、今日依<sub>二</sub>欠日<sub>一</sub>無<sub>二</sub>院拜禮<sub>一</sub>云々、

三日、壬午天晴、今日可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>院拜禮<sub>一</sub>之由、豫々風聞、猶

有<sub>二</sub>不定議<sub>一</sub>之由、昨日定能卿密語、仍今朝問<sub>二</sub>定否於兼雅卿<sub>一</sub>、大將問之、件人執事也、仍問之、示<sub>二</sub>大略不可<sub>一</sub>有<sub>二</sub>歟之由<sub>一</sub>、仍大

將中將不<sub>二</sub>出行<sub>一</sub>、且是大將番長俄稱<sub>レ</sub>病不<sub>レ</sub>來之故也、

今日、上官列參、昨依<sub>二</sub>欠日<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>來歟、五位外記兩人

今日不<sub>レ</sub>來、賴業昨日來、師尙一昨日來、大夫史廣房未<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>拜賀<sub>一</sub>、仍不<sub>二</sub>

出仕<sub>一</sub>云々、此日、雅長季能等卿、兼宗公衡等朝臣來、

手水陪膳左京權大夫光綱、齒固如例、三々日之間、人々多不<sub>レ</sub>來、

皆有<sub>二</sub>由緒<sub>一</sub>事歟、彌天下事怖畏甚多、所<sub>レ</sub>仰只佛神之

加護而已、

四日、癸未天晴、藏人勘解由次官定經來、傳<sub>二</sub>院宣<sub>一</sub>云、叙

位事被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>攝政<sub>一</sub>之處、只可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御定<sub>一</sub>云々、但元日

不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>覽<sub>二</sub>叙位勘文<sub>一</sub>、又職事等雖<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>吉書<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>覽

云々、左右可<sub>二</sub>計奏<sub>一</sub>者、申云、叙位議於<sub>二</sub>攝政直廬<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>

行更無<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>、忽此沙汰如何、攝政不可<sub>レ</sub>行之由被<sub>レ</sub>

申歟、然者不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>叙位<sub>一</sub>之外無<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>歟、古昔或

兩三年一度被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>此議<sub>一</sub>、寬平以來隔年有<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>、中

古以來每年被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>之、除目之次被<sub>レ</sub>付行<sub>一</sub>者、不吉例

也、亮聞然者如此難治之時、逐<sub>二</sub>古跡<sub>一</sub>、今年不可<sub>レ</sub>

行<sub>二</sub>叙位<sub>一</sub>歟、將又以<sub>二</sub>新儀<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>計歟、將猶可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>

仰<sub>二</sub>攝政<sub>一</sub>歟、此等之間可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>勅定<sub>一</sub>者、晚頭又來云、

雖<sub>二</sub>往昔例<sub>一</sub>有<sub>二</sub>不被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>叙位<sub>一</sub>事者、今年不可<sub>レ</sub>

被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>攝政有<sub>二</sub>障難<sub>一</sub>出仕<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>申故也云々、此次

可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>節分御方遠行幸<sub>一</sub>事、內々仰<sub>二</sub>合定經<sub>一</sub>、大內當<sub>二</sub>

乾方<sub>一</sub>、即公家鬼吏御方也、仍可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御方違<sub>一</sub>之故也、

今日、在宣來觸<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>也、定經口今朝宣憲申<sub>二</sub>此旨光

長與<sub>二</sub>親雅云々<sub>一</sub>、彼若不<sub>二</sub>申沙汰<sub>一</sub>者、定經早可<sub>二</sub>申

沙汰<sub>一</sub>者、余不見<sub>二</sub>吉書<sub>一</sub>、仍不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>如此沙汰<sub>一</sub>、只內

內驚示許也、

五日、甲申天晴、未刻、藏人次官定經來云、去冬所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>發

遣<sub>二</sub>之字佐和氣使<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>路頭<sub>一</sub>狼藉事出來、難<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>前

途<sub>一</sub>之由依<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>申、內々仰<sub>二</sub>北條時政<sub>一</sub>、差<sub>二</sub>遣武士<sub>一</sub>、欲

鎮<sub>二</sub>件狼藉<sub>一</sub>之間、重於<sub>二</sub>播磨國<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>武士等<sub>一</sub>有<sub>二</sub>濫吹

事、神馬神寶等案路頭、逃上了、此上何樣可被行

哉、未奏事之由、於內覽者雖可期九日以後、

事爲重事、內々所令申也云々、早可奏事之由之

旨仰了、件事且同先例於外記、又可被導人々歟、先遣使者、件神馬神寶等安否早々可被導歟、又云、御

方違行幸事、其所未定、八條院御所地震之後末、及修

復、雖三片時不能爲皇居、其外賴盛入道宅、件家、女院御所

邊、若鳥羽之間、何様口口口、又不被行叙位之

時、節會同可承存云々、無叙位之年、節會全不

可有別事、近則、久安五年依攝政之遺、無叙位、有七日被行節會了、

此例、官外記定存先規歟、行幸御所事、賴盛入道

家爲洛中、尤有便宜歟、不然者、鳥羽之外無異

議歟、同早可奏事之由者、定經退歸了、

此日、彌勒講如例、余及大將不參堂、件佛事擬月

忌、仍內覽官旨以後未見吉書之前、頗非無事憚、

於大將者雖無此儀、七日以前強不可參上、於

御忌日者、不可願萬事、神事猶不便神今食齋中御堂御入講也、況

他事哉、於此佛事者、非遠忌之日、只如三月忌也、

仍強忌等口口非可豫參、且是吉事、境節頗無便宜

之故也、

此日不被行叙位、子細見昨日記、入夜長光入道來、非亮

聞不被行叙位例、

延喜十六年、延長八年、

承平五年、吏部王記云、無叙位、上御南殿奏御弓引、青馬云々、

天慶五年、天曆三年、雨儀、

天德三年、天祿二年、天元二年、

正曆五年、久安五年、內辨內大臣雅定攝政遣、

今日、藏人左衛門權佐親雅以書狀有勞、示送季

長朝臣云、尊勝寺修正并不參、可催少納言歟如

何、答、內覽以前不能成歟、如此事、任先例可中沙汰之由了、

六日、西天晴、未刻、五位藏人定經來云、宇佐使事奏

事之由之處、可計申之由有院宣者、申可被問

人々之由申了、又云、賴盛入道稱穢之由、不借進

其宅、仍可臨幸鳥羽殿、大外記賴業來、余不誤、大將謂之、

來九日吉書之間事、光長下知官外記藏人方等了、昨

日以折昏注申先例、注付度可被行之子細給了、

召使來催節會行幸事等於大將、各申可參之由了、

七日、丙微雨間降、此日、白馬節會、并御方違行幸也、

未刻、大將中將共防鯨魚如例、隨身紅梅持持、上臈前未如例、後於便宜所爲改也、保延三年正月七日、節會以後有行幸人々改裝束之故也、馬々副等追道之、參內、依內

侍遲參、戌刻節會始、子刻行幸鳥羽、鷄鳴還御、於八



條大宮邊二天曙、京中及辰刻、供奉之輩如舊狐、實不便云々、翌日已終、兩息歸來、各語云、節會內辨大將

勤之、現雅隆忠卿爲外辨上卿、無叙位之間、下

下名賜位記奏、叙位宣命并叙列等之儀、皆以停止、

只如元日節會、只其異白馬而已、內辨無失云々、

大將猶已爲若少之齡、又大納言六人之內爲寂未、

而元日今日共勤內辨、上臈之不仕以之可察歟、

兩度共無失、實不慮事也、行幸之間中將落馬云々、

然而不伏地、仍無別事云々、節會訖出御南殿

之間、攝政參入、供奉行幸云々、鳥羽御所南殿、破壞

頽危、凡非言語之所及、雖片時不足爲皇居

云々、賴盛入道八條宅稱穢不借進、仍早參節會

之輩供奉遼遠城南之行幸、實是可謂奉公歟、大

將已下參入公卿七人、其外隆忠、雅長不供奉行幸、只參節會、和實於路留云々、就中、

大將中將自九條參開院、仍節會供○恐行幸及還

御更歸宅、勝傍輩者歟、兩人宿安樂壽院御所、申

請八條院也、

八日、天晴、行幸還御子細見昨日記、

此日、小兒爲戴餅來、誕生以後今日始來也、車井共侍

遣、只母堂之沙汰也、密々儀也但、大將勤戴役、三ヶ日料一

日之所爲也、是例也、申終來、入夜歸了、此日、諸寺

修正始、并御齋會初日也、家通卿爲上卿云々、今日

招宗嚴阿闍梨示付祈事、光長朝臣進人々請文、

相繼吉書之職事、辨官等請文也

九日、天晴、此日被下內覽宣旨之後、始所見吉

書也、以承保二年大殿、康和元年宮家殿、保安二年故殿、

等例、彼是相准所行也、兼日事、頭左中辨光長奉行、

而當日依持病更發不出仕、年來宿病脚氣也、此五六日發

減、仍不委、家司伊豫守源季長朝臣奉行、於日時及申次役

者、依爲實言不可動仕、仍准康和泰仲例、雖所然季

長朝臣也、彼時泰仲爲伊豫守、吉例符合、自然吉祥也、秉燭辨官

職事外記等參集、其後季長朝臣告大外記賴業內覽宣

旨持參之由、仰暫可候之由、是例、次余先是著東帶、持給

件銀井笏、果代、出資筵、右大將良通中納言定能三位中

將良經等同着座、件座如尋常、不置、應息、觀等、次余召

人、家司伊豫守季長朝臣參上、余仰日時可勘申之

由、即退下侍所、使圖書頭賀茂在宣朝臣○令成

勘文、入覽宮持來進前庇、余目之、季長膝行昇長

押上、置覽宮於余前、退候長押下、可拔歟、余披禮

紙於宮中見勘文、如本身之置前押出宮、季長參上

取宮退下、保安二年故殿不返給日時勘文、國彼例所留也、但

表內覽宣旨、即覽吉書、出仕除目、凡行事繁多之日也、仍且覽之歟、  
廣和例、出御之後覽日、時、彼日無他公事、今日又無指合事、仍追廣  
和例、次季長朝臣參上申云、基親候、余目之、季長退  
下、次權右中辨平基親也、覽官方吉書、其儀插近江  
國年料米解文於杖、入自車寄戶、即跪候、向、深揖  
小起、押候氣色、余目之、基親稱唯、起進、來  
跪、長押際、膝行昇、長押、兩三度膝行指寄杖、余置  
笏以左右手、拔取文、置前、基親取空杖、口巡退  
候、長押下、不、次余披禮紙、上下、見、文如、本  
卷之衝遣二三尺許、取置、基親置杖進來取文退、歸結  
申、如、余目之、基親微唯、卷文取、加書杖、以書置、左  
廻經、本路退去、次季長朝臣參上申云、兼忠朝臣候、  
藏人頭也、猶可、余目之、季長退下、次藏人頭右中辨源兼  
忠朝臣插、美乃國廣絹解文於杖、持來覽之、其儀一  
如官方、但初跪候所北面也、又進文、退歸之時有揖、  
又右廻退下、件三ヶ事相違基親作法也、次季長又參  
上、申云、大外記賴業持參內覽宣旨候、余目之、季長  
退下、次大外記清原真人賴業入、內覽宣旨於覽宮、入  
自車寄戶、經中門廊、西行降、同間簀子、北面跪深  
揖候、余目之、更揖起北行、入自次間、中門廊、跪、長  
押下、膝行昇、長押、置宮於余前、遙巡退、降、長押、

候、南東柱下、余見宣旨、披、如、本卷之置  
前、押、出宮、賴業取、宮揖退降、左廻經、本路退下、  
如、次申、政所吉書、其儀家司季長朝臣插、美作  
國御封解文於杖、保安加賀御封也、而國司重  
經、仍用此國、廣和例國也、入、車寄戶、  
即跪候、無、余目之、季長不稱唯、可、進來奉、文  
如、余取、文披見、例、衝遣、又季長進寄取、之、不、退  
下、長押下、取、加杖、左廻經、本路退下、於、待所、加、下  
行、云、次余歸入、日、公卿等同起座、各指、入、內出居  
方、交語、此間、右少并親經以、季長傳、申伊豫國年料  
米解文、國也、見、之返給、但可、奏之由、又頭辨覽、吉  
書、內藏寮臨時公用請奏同見、之返給、仰可、奏之、先  
兼忠基親等參、內裏了、數刻之後、定能卿退出、子刻  
兩人自、內裏、歸來、余出座、兩、在、座、返給之時、爲  
下文、用、杖、余結申、此、同、兼忠、退候、長、返下、同辨兼忠取、之  
退降、長押下、又結申、余目之、兼忠退下、次基親同插  
杖參進下給、結申之儀一同、兼忠、但基親余見、文之  
間退候、長押上、仰、詞、之後、退候、長押下、卷、文衝  
遣之時、更參上取、之退下結申、基親退下之後、余歸  
入、次親經以、人、下、給所申之文、即返下了、又頭辨  
覽、美乃國廣絹解文、是、私吉書也、件、本所存、廣絹解文、只一通  
也、即內覽吉書、私吉書可、混合、之由、今

存缺、而於內覽吉書者、康和保安例皆退給下、下、史也、於私藏人力吉書者下、出納云々、仍不能混合、賦云々、定能稱仰、合此由之時、始覺悟、金內之時、更令一通、見了返給、次兼忠基經等書、廣相解文、今持來所、內覽也、於侍所各下、史云々、次各退出、次余及兩息解脫就寢、今日吉書等奏幼主被返下也、攝政不見文之故也、

日時書樣、

擇申可、御覽吉書日時、

今月九日戊子時戊、

文治二年正月九日圖書頭賀茂朝臣在宣

宣旨書樣、

權中納言源朝臣通親宣奉、勅、官中雜事、先觸右

大臣、可奉行、者、

文治元年十二月廿八日 大外記清原真人賴業奉

例、

御堂、

長德元年五月十一日丙辰、于時大納言、御年冊、

六月十九日任右大臣、

同 二年閏七月廿日任左大臣、

八月九日辭大將、

十月九日賜兵仗、府生已下、

京極殿、

承保二年九月廿六日乙酉、于時右大臣、御年冊四、上卿中納言經信卿、

十月二日庚寅、始覽吉書、官歷方、藏人頭中將、(施實)外

記師平、政所實卿、外記覽三月奏云々、

十二月三日受長者印、

同十五日關白詔、

富家殿、

康和元年八月廿八日戊戌、于時大納言左大將、御年冊二、上卿大納言師忠卿、

同日覽吉書、官權左中辨能俊、藏人頭右大辨宗忠、外記定俊、(覽宣旨也)政所伊豫守泰仲、(申次并奉行同人)

同十月六日受長者印、

同二年七月十七日任右大臣、

長治二年十二月廿五日關白詔、廿八、

法性寺殿、

保安二年正月廿二日戊午、于時內大臣、御年冊廿五、上卿中納言宗忠卿、

同日覽吉書、又有出仕、官左少辨實光、藏人頭中將宗權、外記師忠、(覽宣旨)政

所主殿頭、雅信朝臣、

同三月五日關白詔受長者印、

此日、頭右中辨兼忠、大夫史廣房等申拜賀、又權辨基

親初參、與三二字、

十日、丑天晴、午刻、藏人右少辨親經<sup>○恐持</sup>內覽文書等、目錄在別、余着冠直衣、<sup>來脫</sup>謁之、先例吉書之後無際之由、申無忌諱之文、仍去夜職事等仰此旨、今日即吉日也、仍先申神宮文書、次申御齋會事等也、此間前源中納言來、謁之、又花山院大納言被來、余謁之、數刻言談、入夜被歸了、

自今日職事四人<sup>兼親、國行、結番、爲逢</sup>職事辨官等也、今兩三日可着衣冠之由仰之、

十一日、<sup>庚</sup>雨下、申刻、藏人勘解由次官定經來申、條々事、先以職事兼時<sup>常番</sup>、申子細、余着衣冠直衣、出賓庭、謁之、<sup>故人云、執政臣必可謁職事辨官云々、今爲</sup>定經先申吉書、<sup>內覽文書時不用、仍無殊障之外必可謁之</sup>、云、余內々疑此事、兼時密々觸此由之時、稱可申之由、忽書請奏、覽之云々、此事人々所爲歟、委可尋之、未辨是非、不見證據文、不能制止者也、

令申事等、

字佐宮黃金可被奉納八幡之間事、  
同和氣使不遂使節、爲武士等有濫行、有路頭歸京間事、

頭辨光長申、依病不能行、宸勝成勝兩寺修正、可依假辨一歟事、

御齋會終日可有僧事一歟、所望輩注折番、令申事、

件等事、子細在目錄、此日、入夜小兒有戴餅事、

自一昨日、九日、三ヶ日、每朝行水解除、遙拜大神宮、

并春日御社、<sup>衣冠取務</sup>、即三ヶ日之間奉幣於春日、<sup>兼社司親</sup>、又仰中臣氏人基親、仰內外宮禰宜、同三ヶ日

致祈念也、仍三ヶ日神齋、今日入夜解齋、始念誦、

依吉日也、  
十二日、<sup>卯</sup>陰晴不定、念誦如恒

十三日、<sup>辰</sup>天晴、午時許、藏人右少辨親經來、以前職

事兼親、申條々事、<sup>子細在別目錄</sup>、御齋會雜事也、其中東寺法

務未補之間、以昌雲法務可令結番之由有院宣云々、

又用途成功、大威儀師俊緣募法橋之功、可口

納之由所申也、可宣下之由有院宣云々、余云、

大威儀師兼帶法橋、希代之珍事也、況以成功貽

邂逅之例、後監如何、先日諸司三分功可被召之由令

申、其事如何、親經申云、問例之處、覺昭珍賀兩人

有其例、於諸司三分之功者、忽以變改了云々、仍



奏事之由、有例者、何事之有哉之由有御定者、余云、猶可然之由難計申、只依勅定、可被下知者、入夜藤中納言來、余有示合事等、

十四日、已天晴、此日、御齋會結願、諸寺修正竟、寂勝光院高倉院御國忌也、

申刻、右大將參八省、欲早參之處、昨日親經云、寂勝光院御國忌同以奉行、其事了後可參八省、仍示大將云々、今朝自藏人業長許、示送光長之許云、

奉行職事闕如了、頭右中辨兼忠先可奉行神事云、

云、右少辨親經八省事兼行、難早參不可叶云々、定經所勞、親雅同前、光長未從事、已上散狀如此、親經、定

經等、光長可遣催之由仰了、晚頭兩人請文到來、定

經近日奉行萬事奔營之間、所營更發、今日惣不能出仕云々、親經法勝寺已下諸寺修正兼行之間、一切不

可叶云々、仍以別御教書遣親雅定經等許、又以余書札、兼忠事示父納言許了、戊刻返事到來、兼忠

只今可參勤云々、爲悅不少、親雅返事相續到來、痔所勞猶以不快、不堪出仕云々、定經又申可參

之由云々、子刻、大將歸來、御齋會竟無殊事云云、東寺長者法印權大僧都俊證加持香水、山階寺權別

當覺憲召立大法師等云々、大將着御前座、不待

請參法成寺云々、事雖不當、年來必參御堂修正、而今年不參者、必似有意趣歟、所令參也、咒師一手了退出云々、

十五日、甲雪積庭上三四寸、凡今年凝寒猶勝於窮冬、今日依例終日念佛、八萬入夜藏人次官定經來申、

條々事、手細在其中申、明後日八幡奉幣之間事、上卿

大臣大納言等皆悉辭退云々、仰有大將可參任之由、又云、宇佐黃

金爲御正躰之由、大宮司言上、若然者、自左衛門

陣被發遣如何、內侍所之外、神明神躰無入御宮

中之例之故也云々、余云、此事全不可及議、就

中、黃金爲御正躰之由、指而無所見、嘉保之比、沙

汰出來、度々及問注、然而依無體證、宣命猶載

神寶之由、今緣底輒可定御躰哉、還神靈有恐、子

細先日被尋問之時令申了、兼又八幡靈御宮被進

之時、其儀如此、旁以不可有其憚之由所存也、但

猶可有難者、左內兩府及忠親卿可被尋問歟、

可被奏事之由者、定經云、仰旨有其理、不可

及儀定、事歟云々、又云、當日可有定、官方奉行權

辨基親云々、余云、宣命趣被仰內記哉、子細尤可

被仰聞事也、申云、下知先了、重可仰此趣者、今

日節供如恒陪陪、此日、小兒戴餅大將爲之、入夜和泉守長房光良、爲拜賀來、呼前見之、已成人男也、生年十七歲云々

十六日、乙天晴、年首政始以前奉幣之條、聊以不審、仍內々檢先例之處、承平二年正月二日、天慶三年正月十三日有此例、然而爲避彼難、件等例前避之上、可被問例之由仰遣定經之許、但刑部卿賴輔卿所惱危急之由云々、件黃金在彼卿家云々、仍有不慮事者以外大事也、仍內々檢例粗以如此、殊非可有憚事者、猶被忿遂宜候之由同所加示也、入夜注送賴業勘奏例、如余勘見、又余內々問賴業注送天慶例、不載承平例、仍今日申剋許、大將頓病、有辛苦太難堪、終日無平減、仍觸此由於定經之許、上卿可催他人、若無參入之人者、使兼行上卿、又非無其例、何事之有哉之由同仰遣了、終夜大將惱亂、臨曉天猶不減、仍所々修諷誦、此日、俊成入道送一一首、アサヒサスカス、モノ、ツノ、ウ、返歌、シラサリツウ、シカルヘキアサヒ、幼主之時、内覽宣旨、古米トロアトナキ峰サテラスト思ハ、之間、曾無還跡、故也、十七日、丙天晴、今晚寅剋許、大將加灸治、依苦痛無減也、灸治之後即落居、爲悅不少、自昨日申剋終

夜服種種藥、敢不怠、以智詮加護身、此日被發遣石清水一社奉幣、權中納言源通親卿勸使、又兼上卿、右大將欲勸仕上卿之處、依頓病一俄辭退、他人忽難出仕之間、依先規多存、使上卿所兼行也、須延日被奉遣之處、前刑部卿賴輔卿所惱危急之間、黃金奉迎自無便事出來者、尤可有其恐、仍不願萬事所有忿沙汰也、件奉幣事、去年可有忿沙汰之處、院宣并攝政命、彼是相讓、不分明之間、于今逗留云々、彼黃金者、宇佐宮神寶也、昔聖武天皇被奉納黃金三廷於彼宮之其一也、去年七月之比、豐後國武士等亂入宮中、始自薦御驗件黃金已下、累代靈寶不殘一物、掠取了、其後自然件金一廷不慮之外出來、于細次第文書、不遺其錄、而奉納本宮之間、可被奉納何處、哉之由、神祇官及八幡外有軒廊御卜、官察共被納石清水外寶殿、最吉之由、所卜申也、仍任彼狀、今日付幣帛使所被奉遣也、未剋、權右中辨基親行事、持來日時定文等、內覽之、今朝余仰先可有内覽文、日時定文、及宣命草等也、而於宣命者、必可有内覽之文也、於日時定文者、可免内覽、其故者、院院與九條遠近之間、往反及兩度者、一日空可、事之故也者、初度事雖必可有内覽、依恐公事之端、不願私要、雖示此由、上卿及辨猶存正禮、所特、次基親申云、季長傳上卿被申云、奉遣之間、被

相具神祇官、其上可被差副史一人、歟、依爲重  
事也、余答云、件事召外記勘文、被問人々、任  
狀有其沙汰歟、但被差副官史、又何難之有哉、且  
被尋先例、隨宜可有計沙汰者、又申云、黃金奉  
納辛櫃可付封歟如何、答云、思事理必可付之、  
于時源中納言在座曰、行事辨可付、又申云、件黃金二迂之  
封、稱勅封、即謂辨官官封也云々、由、豫奉行職事定經所申也、而所奉送一只一迂、須  
問賴經之處、爲流人已發向了、爲之如何、余答  
曰、件黃金案所聞只一迂也、二迂之由誰人說哉、本數  
三迂之中、一迂出來、一迂同雖有持來之者、不知  
行方之由見所進注文、奉行職事若聞誤歟、於今者  
不可叶、只今之沙汰、退可被尋沙汰一事也者、即  
披見日時定文等舉、日時有禮紙無、無禮紙、定文、返給了、  
仰可奏之由、基親歸參了、申刻、大內記長守持來宣  
命草、以番職事參親傳覽之、入、爲、帶、余着冠直衣、  
披見之處、遂可被奉納本宮、其間假奉納之由、儘  
不見、仍令書入其狀、若此趣不、作者、期日奉納本宮之  
細尤可被、否、又彼時同紛失神寶之內、多有累代之靈  
物等、所謂薦御驗、件黃金殘二迂、及同香呂宮納物等  
也、件靈寶等、殊依冥助、如舊可歸坐之由、可加

載祈請之詞之由仰之、改直覽之、一兩度改直了、此  
子細可觸攝政及上卿之由相舍了、別帶同草、以少  
仍出于細更難、今日午刻、藏人頭右中辨兼忠朝臣爲院御  
參啓云々、使來、仰云、前少將平時實、平家滅亡了之時爲生虜  
參洛、依所勞罪科被處配流了、而不赴配所、  
伴賊徒、行案、赴西海之間、彼等爲逆風退散、時實  
又爲生虜、不慮外下向關東了、而源二品卿所召  
進件時實也、即彼卿書札如此、其狀云、被定罪科、而不  
進止、左右可在勅、此上事何樣可被計行哉、且觸  
攝政一定罪科可被計行、此上罪之輕重成敗一切不  
可、知食者、余申云、理須重被勅罪名歟、但先可  
被問先例於官歟、雅賴卿在座云、政治如此沙汰有忌諱  
歟、被過彼日、宜歟者、余同此議了、  
兼忠朝臣退歸、在前廣庇申之、余雖示可、昇長押上之此  
後雅賴覽交語、即相伴兼忠退出了、雅賴云、爲  
定長奉行、被召兼忠、依不審、同車所院參也云  
云、  
此日、余神齋、雖非攝關執政臣、諸社祭、及公家神事  
之日、同所神齋也、御堂知足院殿等御例如此、八幡  
神事、精進也、而忘却朝服魚類、依思出其後更精  
進、



入道相國以憲親法師爲使被示內覽慶、答吉凶不存得之由了、

十八日、丁天陰、申剋、藏人次官定經來、余依風疾不臨之、以番職事國行、申條々之事、昨日黃金奉遣之間事、無爲被遂了、今日、通親卿使、安穩奉納之由所示送也云々、又和氣使空歸洛事、且大外記師尙進勸文、賴業未進云々、件勸文爲書寫竊留之、今日、大外記師尙持來父師遠所抄出之雜例一卷、依去年召也、

十九日、戊天陰、已剋、大外記賴業持來政始日時勘文、入宮有以番職事兼時傳覽之、見訖返給、仰可奏之由、可仰可覽攝政之由也、然而近日不被見文書云々、仍仰此由也、此日、法皇渡御伏見御所、或人云、仰意怒之餘、傳暫可爲御所云々、令隨居給云々、傳聞、自關東窮冬所進之折帛狀、猶攝政外可有內覽之由、賴朝令存云々、但實否難知、攝政之邊棟範從女爲賴朝之緣人、仍所告送云々、其後攝政出仕、又人氣色安堵云々、下官幸不媚、極暗有此沙汰、始終事、只奉任大明神之外無他事、廿日、己天晴雪降、申剋、藏人辨親經來申條々事、中次

一大神宮御領攝津國薦免論事、  
件薦被宛<sup>云々</sup>四度御祭、而爲武士被滅亡、難進濟祈年祭薦了、  
一內膳司申綱曳御厨訴事、  
同武士濫行之、  
一後七日法用途、大阿闍梨俊證申法橋功事、  
依御齋會功、大威儀師俊緣進用途物之由有地戶、仍以件地宛行件法用途之處、用近代滅直之由、不<sup>云々</sup>受取、猶申法橋之功云々、  
一大藏卿定賴申昇殿事、  
在消息、  
一右大辨行隆申、造東大寺長官重可被宣下事、  
一檢校左大臣新表之後、無其人、朝家大事不被置上卿、尤不便事、  
已上早可奏之由仰了、左大臣表尤可被返欺之由申、奏下仰了、  
廿一日、庚天晴、左大辨定長轉任之後、來申吉書、余依風病不<sup>不<sup>入<sup>宮</sup></sup></sup>過、仍以番職事兼親傳申之、廣校國史料米解仰可奏之由、返給之後、召<sup>廣校國史料</sup>前問天氣之趣、殊示無逆鱗之儀、內々令歎息、數日可有御經



題之由風聞、仍問之、定長云、未承定云々、

此日、年始政、上卿左武衛賴實、都督納言經房等、

廿二日、辛丑天晴、前源中納言雅賴卿送札曰、流人時實

罪狀事、昨日政始過了、仍可勘罪名之由下知已了、

件宜官仰詞如此、兼忠依所勞、雅賴爲代官、昨

日參攝政第、今日猶不快、仍內々所進上也、勘文

雖未到、所詮不過遠流一歟、仍尋官之處、廣房申

云、遠流國々皆悉被遣流人了、近代管國同遣流

人、對馬之外無流人、可被計遣一歟云々者、官申狀

如此、々々上何樣可候乎、明日々次宜、仍行此事了、

明後日參伏見、可申行了之由也、流國內々可承

存云々者、余答云、如官申狀者、管國之中可被

計歟、北陸者、父納言流國同方也、可有思慮、關東

又泰經賴經等被遣了之故也、本流之國周防也、仍長

門如何之由納言示之、余云、被改本國者、管國ハ

猶宜歟、周防長門大略如三同國、依罪科之重疊、猶可

處遠流者、改周防遣長門之條、頗無改國之

餘歟、但可被相計之由示之、又仰遣云、此事猶大

事也、罪名勘文進上之時、猶注立國々可奏聞一歟、

先日一切不可申上之由雖有仰、自由成敗猶有

後日之恐一歟、今度猶不可知食之由、被仰之時可

有私之計事一歟者、

遠流國々、近代例歟、或武國太少歟、此  
外上總下總等有先例云々、

伊豆、阿房、常陸已上東國、

越後、佐渡、已上北陸、

隱岐、已上山陰、

周防、長門、已上山陽、

土左、南海、

管國等、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、

宣旨仰詞、

文治二年正月廿二日 宣旨、

流人時實不赴配所、隨逆黨義經行家等逃去

之間、猶懸赦網、再來雍州、憲章所指科條非

一、宜令明法博士等勘申所當罪名、

藏人頭右中辨源兼忠

今夜戌刻地震、

廿三日、壬寅天陰及晚雨下、早旦、頭右中辨兼忠朝臣持

來明法博士明基範真依  
降不娶勘申流人時實罪名勘文、余謂

之、兼忠云、先問例於官申不分明之由、仍任先

日仰、仰法家之處、勘申旨如此者、勘文駁即以件  
朝臣奏院曰、法家勘文如此、滅死一等、被處遠  
流之條、無異議歟、而其國若東西之間可隨勅定、  
於北陸者父屬配能望仍可無礙、兼又今日々次無障云々、而上卿等各  
申障、可催誰人哉、兼忠持最者、兼忠即馳參伏見、  
午刻、歸來傳院宣云、余謂東西國及其國事、只相計  
隨宜可被行者、又上卿事申、未着陣之由、太以  
不可然、又申所勞之輩、相扶可參之由可被催  
仰、今日被立行宜歟云々、以定長傳兼忠云、奉其  
國可下知云々、余云、本配流周防國也、而不赴  
配所、空在京、伴賊退散、因茲被勅罪名、死罪難  
逃、然則可被處遠流也、而西國可有思慮、北陸  
又父時忠所在之方也、仍東國方宜歟、安房伊豆等雖  
載式之國、今度流人秦經賴經等之配國也、同罪之人  
被遣同國、無其謂歟、上總下總等雖不載式有  
先例、當時又無流人、可宜歟、若隱岐如何、同載  
式國也、所存如此、此上左右且又攝政又可被尋問  
官歟、其故件等國之中、若爲有其難等也者、兼忠  
申云、長門國如何、余云、伴條不可然、本遣周防  
之人、依罪科重疊、被改國者、尚可遣遠國也、

周防長門無幾之差別、加之、西國之條、猶可有  
猶豫者也者、又申云、上卿可催誰人哉、余云、如  
散狀者、一昨日參政之輩、兼通今日申障、頗無謂、  
重可被催歟、又未着陣之人々事、任院宣可被  
催歟、但各所申頗有謂、不可叶今日之事歟、其  
中經房卿申服假之後、未着陣之由、不可以慶  
賀之後、着陣歟者、兼忠退起了不退出、乍候遣御  
教書於上卿等之許了云々、  
此間親經申條々事、申次番職事兼時、  
一掌侍員數不足、仍去年爲光雅奉行、可被補者二  
人、被定仰、一人少納言兼侍、一人越中、而其後不  
被行女官除目之間、未補、來月春日大原野祭、內  
侍闕如、可被忿補之由、勾當伊與掌侍所申  
也、仍今日流人之次、被行女官除目如何之由、內  
內間賴業、申有憚之由、爲之如何、兼又先朝內  
侍讓位之時被沙汰之外、後日令補之例不詳云  
云、此條又如何者、  
余答云、賴業申旨有其謂、今日不可被補、春除目  
以前有被行女官除目例哉否、可問例、先朝內  
侍之條、去年沙汰之趣、可問光雅、不可憚之條、

御定切了者、雖先例一可被行、女官除目、其例不詳者、見任內侍可搦勤之由、尙可仰勾當內侍者、一神祇官申、近江國甲賀郡內治國、爲伊與內侍以字定茂房被致妨事、

仰、奏事之由、可問勾當、

一左兵衛少尉藤原宗行、於三條中納言家有致害事、先解却見任、任罪狀一可處科斷之由、可

仰別當卿旨、有院宣事、

仰早可下知者、

及申剋、兼忠朝臣申云、上卿返事且到來、實宗未着陣之上、申所勞之由、賴實卿申及晚可參之由云云、此次猶申流國事、被遣東國之條、奉行之者相計歟之由、定有傍人之難歟、但可隨御定云々、兼時傳中余云、件條全不可及、謗難、但又隱岐何事有哉、子細先度示了、早攝政可被隨處分也者、兼忠退下之後、持參經房宗通等返事之條、以辭退遣兼忠之辭了、

入夜法性寺座主自山被下、昨日參社、又今日歸白川房云々、自今暫可被住此邊也、余忽依思出以書札示送雅賴卿云、上總者、時家時實配流國歟、

若然者、兄弟同國、似無他國、猶被遣隱岐、宜歟者、返札云、尤可然、可作改官符之由下知了云云、

廿四日、卯天晴、已剋、雅賴卿送札曰、官符已請印了云々、更行請印、以外大事也、爲之如何、彼時家弟全無配流之儀、只故平禪門私所遣云々

余答云、請印了者、不及改國歟、隨弟無配流之儀者勿論歟者、後聞、件時家於今者不注彼國云云、又官所注進之流人所在之國々之中、不載件上總國云々、凡者爲如此之事、可仰官之由、昨日所含頭辨也、而委不尋歟、未刻、泰茂來申、天變地震事等、未奏、只內々所申也、

右近府頭清景申、春日使散狀、爲大將使、各可相催之由仰了、

廿五日、甲辰今日、靜實法印來、聊有示合事、

廿六日、乙巳天晴、大夫史廣房來、以番職事國行申云、近年月奏斷絕、又東寺國忌、偏以無沙汰、凡禁中狼藉、陣中破損、不可勝計、雖仰本寮本職、敢不承引、如此違例陵遲之事、一臨期申子細者、依其恐難遁、豫所申也云々、仰云、所申尤可然、陵遲事爭



不與行一哉、但申<sub>二</sub>上及攝政、可<sub>レ</sub>有其沙汰、推而雖被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>內覽宣旨、每事有<sub>レ</sub>恐、等口入仍不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>仰旨趣<sub>二</sub>耳、

此日、主稅助安倍晴光持<sub>二</sub>來天文密奏、國行傳<sub>二</sub>進之、余着<sub>二</sub>直衣一見<sub>レ</sub>之、召<sub>二</sub>晴光於前、問<sub>二</sub>子細、申<sub>二</sub>常途變之由、件密奏卷<sub>二</sub>籠<sub>二</sub>一通於一禮紙、一通奏料、一通可<sub>レ</sub>留余加<sub>レ</sub>封<sub>二</sub>件名不<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>封<sub>二</sub>之外也、如<sub>レ</sub>例、余留<sub>レ</sub>案、卷<sub>二</sub>奏料於<sub>二</sub>本懸帶、更切<sub>二</sub>封紙、用<sub>二</sub>案<sub>二</sub>可用<sub>二</sub>右サマニ卷<sub>二</sub>テ封<sub>二</sub>之、<sub>二</sub>封<sub>二</sub>、書<sub>二</sub>余名片字<sub>二</sub>返<sub>二</sub>給<sub>二</sub>晴光<sub>二</sub>畢、抑、內覽兩人之時、下臈內覽若有<sub>二</sub>作法<sub>二</sub>哉否、未<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>、其故若以<sub>二</sub>奏料一通、覽<sub>二</sub>兩內覽<sub>一</sub>者、加封返給之條有<sub>レ</sub>疑故也、依<sub>レ</sub>勘<sub>二</sub>得仁平之例<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>晴光<sub>一</sub>、<sub>二</sub>祖<sub>二</sub>父晴道、仁平之間、申云、奏料案文設<sub>二</sub>一通、覽<sub>二</sub>兩所<sub>一</sub>各加<sub>二</sub>御封<sub>二</sub>所<sub>二</sub>返給<sub>一</sub>也云々、然則同奏<sub>二</sub>三通<sub>一</sub>奏<sub>二</sub>內也云々、

廿七日、<sub>二</sub>丙午<sub>一</sub>、晴、藏人左兵衛尉橘業長持<sub>二</sub>來月奏十三通<sub>一</sub>、<sub>二</sub>左右近、左右衛門、左右兵衛、左右馬寮、藏人所、通口、御厨子所、惣卷<sub>二</sub>籠<sub>二</sub>一禮紙、以<sub>二</sub>紙<sub>二</sub>撰<sub>二</sub>結<sub>一</sub>中、并請奏<sub>二</sub>三通<sub>一</sub>、<sub>二</sub>春日、大原典、內藏寮<sub>二</sub>等分所納物之內<sub>一</sub>、卷<sub>二</sub>籠<sub>二</sub>一禮帶<sub>一</sub>同結<sub>二</sub>中<sub>一</sub>、各見了返給、仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>奏之由<sub>一</sub>、右近府頭清景重申<sub>二</sub>春日祭使散狀<sub>一</sub>、<sub>二</sub>皆辭退<sub>一</sub>、年預少將實明有<sub>二</sub>書札<sub>一</sub>、<sub>二</sub>候<sub>二</sub>伏見<sub>一</sub>之同、大將以<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>來云々、

自消息可<sub>レ</sub>申沙汰之由送<sub>二</sub>頭右中辨兼忠之許<sub>一</sub>、稱<sub>二</sub>所勢不<sub>レ</sub>請取、仍又遣<sub>二</sub>親經之許<sub>一</sub>了、

入<sub>二</sub>夜大藏卿宗賴初參、以<sub>二</sub>國行<sub>一</sub>先進<sub>二</sub>二字<sub>一</sub>、余呼<sub>二</sub>前<sub>一</sub>、<sub>二</sub>謁<sub>レ</sub>之、少時退出了、宗賴着<sub>二</sub>衣冠<sub>一</sub>也、先是、自<sub>二</sub>女院<sub>一</sub>殊可<sub>レ</sub>哀憐之由有<sub>レ</sub>仰、宗賴者、入道大納言光賴之鍾愛之小子也、而委<sub>二</sub>附成賴卿<sub>一</sub>、傳<sub>二</sub>文書<sub>一</sub>受<sub>二</sub>口傳<sub>一</sub>、繼<sub>二</sub>彼家人<sub>一</sub>也、才幹優長、心操穩便、而依<sub>二</sub>射山之疎遠<sub>一</sub>、漏<sub>二</sub>度々顯官<sub>一</sub>、仍叙<sub>二</sub>四品<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>帶<sub>二</sub>一職<sub>一</sub>、已如<sub>二</sub>弃置人<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>惜<sub>レ</sub>之而賴朝推<sub>二</sub>舉萬人之內<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>任大藏卿<sub>一</sub>了、彼養父成賴入道、年來於<sub>レ</sub>余有<sub>二</sub>其忠之人<sub>一</sub>也、雖<sub>二</sub>通世之後<sub>一</sub>、芳志常不<sub>レ</sub>變、而去比可<sub>レ</sub>初參之由教<sub>二</sub>訓宗賴<sub>一</sub>云々、宗賴又素有<sub>二</sub>其志<sub>一</sub>云々、自他相應、今日所<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>初參<sub>一</sub>也、凡勸修寺之輩、代々自<sub>二</sub>執政之家<sub>一</sub>出身、而顯隆、顯賴、光賴等、偏寓<sub>二</sub>員仙洞<sub>一</sub>、疎<sub>二</sub>遠一所<sub>一</sub>、光雅朝臣<sub>二</sub>宗賴<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>故平禪門之命<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>當時攝政之執行家司<sub>一</sub>攝政始<sub>二</sub>其後忽變<sub>一</sub>君臣之儀、被<sub>レ</sub>改<sub>二</sub>定執事<sub>一</sub>了、<sub>二</sub>在<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>時也、

光雅雖<sub>二</sub>爲<sub>二</sub>宗賴之兄<sub>一</sub>、父之所<sub>レ</sub>用不及<sub>二</sub>宗賴<sub>一</sub>云々、今有<sub>二</sub>志初參<sub>一</sub>本懷云、是感悅不<sub>レ</sub>少者歟、又前近江守爲季同以初參、<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>件人<sub>一</sub>、故右中辨爲親之男、帥納言經房養子也、即經房卿之所<sub>レ</sub>進也、



此日、大膳權大夫安部季弘持<sub>三</sub>來密奏、留<sub>レ</sub>案返<sub>三</sub>給奏料、<sub>如封</sub>

廿八日、<sub>丁</sub>陰晴不定、午刻、藏人右少辨親經來、申條條事、<sub>申次國行、今日經奏當番也、而有<sub>レ</sub>障相管云々、</sub>

一 春日祭、近衛使散狀事、右近府皆悉辭退、

仰、令<sub>三</sub>奏聞、但指<sub>三</sub>其人、以<sub>三</sub>別御定<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>催歟、

一 同祭參向內侍見任輩、各申<sub>三</sub>雖<sub>レ</sub>叶之由、仍春除目

以前被<sub>レ</sub>行<sub>三</sub>女官除目<sub>一</sub>之例、<sub>尋</sub>外記<sub>一</sub>之處、賴

業真人注<sub>三</sub>申臨時除目例、女官除目例不<sub>三</sub>分明<sub>二</sub>云

云、但寬德二年有此例、依<sub>レ</sub>爲<sub>三</sub>不吉例<sub>一</sub>、故不<sub>三</sub>注

申<sub>三</sub>云々事、闕<sub>三</sub>除目<sub>一</sub>如例、

仰、可<sub>レ</sub>奏<sub>三</sub>事之由、雖<sub>三</sub>有<sub>三</sub>臨時除目例、女官例不

告、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>憚哉否、可<sub>レ</sub>有<sub>三</sub>勅定<sub>二</sub>者、

一 新補內侍之中、先朝內侍可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>憚哉否事、去年沙

汰趣、問<sub>三</sub>光雅朝臣之處、申<sub>三</sub>殊無<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>定下<sub>二</sub>事

之由、忌否如何、

仰、強可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>憚之由不<sub>三</sub>相存、但同奏<sub>三</sub>事由、可<sub>レ</sub>隨<sub>三</sub>

勅定<sub>二</sub>者、

同剋、權右中辨基親來、申條々事、

一 祈年祭用途、諸國難<sub>レ</sub>濟、可<sub>レ</sub>召<sub>三</sub>付成功<sub>二</sub>否事、

一 伊勢別宮御裝束等可<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>調進、自<sub>三</sub>去年<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>有<sub>三</sub>

其沙汰、依<sub>レ</sub>無<sub>三</sub>用途、于<sub>レ</sub>今無<sub>三</sub>沙汰、加<sub>レ</sub>之、自<sub>三</sub>本

宮不<sub>レ</sub>進<sub>三</sub>御劔粉等、本樣今度難<sub>レ</sub>叶事、

一 初齋宮入御諸司用途、并御月料等併闕如、可<sub>レ</sub>召<sub>三</sub>

付成功<sub>二</sub>之由、本宮被<sub>レ</sub>申如何事、

已上、仰、可<sub>レ</sub>奏<sub>三</sub>事由、

入<sub>レ</sub>夜、藏人次官定經申條々事、申次經奏、

一 和氣使自<sub>レ</sub>路歸洛事、可<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>尋<sub>三</sub>人々<sub>一</sub>之由先日令

申、日來御<sub>レ</sub>伏見之間、不<sub>レ</sub>能<sub>三</sub>奏聞、今日還御、

即令<sub>三</sub>奏聞<sub>一</sub>之處、仰云、賴朝注進十人之中、相計

可<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>尋問、於<sub>三</sub>其人<sub>一</sub>者難<sub>三</sub>定仰、兼又左府不

入<sub>三</sub>彼注進之內、同可<sub>三</sub>相計<sub>二</sub>者、

申云、議奏人十人、皆悉可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>問歟、將上臈少々可<sub>レ</sub>被

尋歟、猶任<sub>三</sub>御定<sub>二</sub>可<sub>三</sub>相計、私撰用專有<sub>三</sub>其恐、兼又左

大臣漏<sub>三</sub>此列<sub>一</sub>之條、尤不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然歟、抑、如此大事、先

例多賜<sub>三</sub>文書於<sub>三</sub>可<sub>レ</sub>然上卿、始終令<sub>三</sub>申沙汰<sub>一</sub>歟、且被

行<sub>三</sub>仗議<sub>一</sub>尤宜歟、爲<sub>三</sub>重事<sub>一</sub>之故也、左右之間可<sub>レ</sub>在<sub>三</sub>

御定、大臣若未<sub>レ</sub>返<sub>三</sub>給表<sub>一</sub>之由、可<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>下<sub>三</sub>文書於內大

臣歟、

一 內藏寮申、內侍所供神物、來二月分丹波國月

宛也、而寄事於造與福寺對捍、已欲闕如事、仰、令奏聞、

今日、花山院大納言被來、余謁之、

傳聞、去比自鎌倉飛脚到來、今朝被仰遣御返事云々、

令申事等、

經房不可下向、先日爲御使可向之由示送云々、其返事歟、

甘苦六百帖所進事、

去冬奏聞條々、解官、只雖奏愚案之趣、所詮可在、

勅定事、

義經謀反之間、追討宜旨事、不起自叙座之由、聞披之由事、

今日、法皇自伏見還御六條殿、明日可有嵯峨之御幸云々、

廿九日、戊申、傳聞、先日賴朝所申之事、委被仰遣

御返事、其內奏經不過之由、殊被仰遣、又北面下薦等、糸惜思食之由有仰云々、

二月

一日、己酉、晴、早旦浴、依每月幣神齋如例、又寫心經一卷、如常、今日、法皇又臨幸伏見云々、召使可參新年祭上卿之由來催、申大將當時有所勞、得減者可參之由、

二日、庚戌、晴、樞右中辨基親來、申條々事、申次、

一、新年祭用途諸國難濟事、奏院之處、有可催之仰、仍兩度雖加催、敢不承引、於今者闕如了、去年例幣裘神祇佐明茂知行之富永名宰籠事、被仰遣祭主親俊許、即賜件御教書、令搦沙汰彼用途了、而今度申云、每祭主被仰遣、有煩、賜宣旨、欲沙汰件用途者、又初齋宮成功之由、藤祐茂春兵衛尉功、當時申可進用途之由、召越彼用途可宛此幣料歟如何、兩條可隨御定者、

仰、明茂申宣旨事、頗不當歟、如去年賜御教書令搦沙汰之條、以不似公事法、然而近例已、仰遣祭主能口許、可令搦沙汰之由、可被仰歟、將又可召越祐用齋宮成功歟、早經奏聞、且申攝政可致沙汰者、

基親云、先日八幡奉幣日時覽攝政之處、如、此  
事不可申之由、有其仰、如何者、

仰、早可奏聞者、

一 伊勢別宮御裝束事、齋宮入諸司用途事、可召  
付成功輩之由、有院宣者、

仰、隨院宣早可尋付歟、

藏人右少辨親經申條々、申次同前、

一 神宮上卿事、誰人當其仁哉、可令計申給之  
由、有院宣者、

仰云、源大納言、中御門大納言、堀川大納言之間、可  
在勅定者、

一 春日使闕如事、奏事由之處、少將成家儘可勤  
仕、若猶辭退者、可辭申所職之由可有仰、

院宣者、

仰、早任御定可遣仰遣者、

一 神祇官申、近江國保田口妨事、問伊與內侍之  
處、不可致妨之由、令申奏聞之處、可有

計沙汰之由、

仰、內侍避申了、不可停止妨之由可仰本官  
者、

一行隆申、東大寺別當、及造寺檢校長官等事、院宣  
云、別當未補之間、可被付上人<sub>二</sub>之由、行隆令  
申、不可然、檢校事無分明仰、長官事如本可  
仰行隆者、

仰、別當事、願喜、定遍兩代、本寺造營一切不致沙  
汰、雖自今以後被補別當者、以同前歟、若必可  
被補者、此條兼能可被仰合歟、不然者、造寺  
之間、被付上人<sub>二</sub>之條、實不似公事、只可被  
付造寺所歟、愚案如此、重可奏聞者、

檢校事、便宜之時、覆奏、可早左右歟、  
長官事、任御定可下知者、

一 大藏卿宗賴朝臣申昇殿事、院宣云、被聽之條、何  
事之有哉、且相計可被仰下者、

仰、申攝政可被仰下歟、

一 春日祭供神物、并大原野祭幣料等、諸國難濟散  
狀、經奏聞之處、各申旨無謂、重可催之由有  
院宣者、

仰、早任御定可加催者、

一 大膳職申、諸社祭用途之間、馬部濫行事、申院之  
處、無左右仰、

仰、馬部等不可致<sub>レ</sub>濫行之由、可有<sub>二</sub>下知<sub>一</sub>歟、

一 御齋會成功事、俊證法印申<sub>二</sub>法橋之功<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>分明仰<sub>一</sub>者、

仰、法橋許容者、尙可<sub>レ</sub>返<sub>二</sub>給地<sub>一</sub>歟、

一 春日祭內侍闕如之間、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>內侍<sub>一</sub>、而除目以前女官除目先例不吉之由、外記申、奏聞之處、不可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行之由有<sub>レ</sub>仰云、

仰、當時內侍猶可<sub>二</sub>勤仕<sub>一</sub>者、申云、仰伊與內侍之處、申在內侍、機動之由云々、

一 左府表事被<sub>レ</sub>收之條、何樣可<sub>レ</sub>候哉、且可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>給者、

仰、被<sub>二</sub>返下<sub>一</sub>宜歟、

三日、辛天晴、權右中辨基親以<sub>二</sub>書狀<sub>一</sub>示<sub>二</sub>送兼親許<sub>一</sub>曰、祈年祭用途可<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>付祐用兵衛尉功<sub>一</sub>之由有<sub>二</sub>院宣<sub>一</sub>、但今度除目必可<sub>レ</sub>任之由、可<sub>レ</sub>賜<sub>二</sub>證文<sub>一</sub>之旨所<sub>レ</sub>申也、件功內五百正所<sub>二</sub>召付<sub>一</sub>也云々、副定長奉行院宣狀云、祐沙汰、仰云、院宣切了者、早可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>召付、賜<sub>二</sub>證文<sub>一</sub>之條、何事之有哉者、今日、小童<sub>親所養、生年八歲、</sub>來、今年始所<sub>レ</sub>來也、

天文博士安陪廣元持<sub>二</sub>來密奏<sub>一</sub>、奏料案文卷、龍一禮部、加余封書各二字、如例、余見了、留<sub>二</sub>案卷<sub>一</sub>、龍奏料於本禮紙、更切<sub>二</sub>封紙<sub>一</sub>封<sub>レ</sub>之、

書<sub>二</sub>名片字<sub>一</sub>、兼返<sub>二</sub>給<sub>一</sub>、

所<sub>二</sub>注申<sub>一</sub>之變異等、

一 去月廿日己亥晚寅時、太白犯<sub>二</sub>建星<sub>一</sub>、

外國使來見<sub>レ</sub>主云々、

一同廿八日丁未寅時、歲星犯<sub>二</sub>太微右執法星<sub>一</sub>、

國有<sub>レ</sub>變、天下大亂、大臣有<sub>レ</sub>憂有<sub>レ</sub>畏、又天下有<sub>レ</sub>惡、

一同廿九日戊申晚寅時、太白犯<sub>二</sub>牽牛<sub>一</sub>、

賢臣退逝、大水、貴人棄<sub>二</sub>道路<sub>一</sub>、

又云、軍破、大將令<sub>レ</sub>致、期<sub>二</sub>五十日<sub>一</sub>、

又云、東夷起、不出<sub>二</sub>九十日<sub>一</sub>、

又云、牛車有<sub>二</sub>急行<sub>一</sub>、兵革期<sub>二</sub>六十日<sub>一</sub>、一日妖言無<sub>レ</sub>已、

此日、依<sub>二</sub>祈年祭前齋神事<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>例服者僧尼不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>家中<sub>一</sub>、月水女房在<sub>レ</sub>局、不<sub>二</sub>念誦<sub>一</sub>、今旦却有<sub>二</sub>不淨事<sub>一</sub>、仍行水、其後潔齋、

四日、壬天晴、大藏大輔泰茂來、余修<sub>レ</sub>祓、降<sub>レ</sub>庭奉<sub>二</sub>拜

大神宮春日等、是不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>必然、依<sub>レ</sub>有所思<sub>一</sub>也、藏人次

官定經來申條々事、申次錄觀、

一 春日社司申、伊賀國社領武士妨事、去年歲暮經<sub>二</sub>



奏聞之處、早可問武士者、

仰、早可問之、

一 日吉社司申、但馬國木前庄馬足米、爲國司被

妨事、同奏聞之處、可問國司者、

仰、早可問之、

一 大原野祭、并分配親經也、而春日祭分配、定長依

服假、親經可下向、仍兩社兼行難叶之由、親經

令申如何、但可被隨重御定云々、

仰、可奏聞、但先催他弁、無領狀者、可仰親經歟、

一 宇佐和氣使自路歸洛之間事、奏聞之處、被行

仗議尤可宜、可令相計云々者、

兼又先日參洛之播磨國在廳等、不申身暇逃下

了、爲之如何、

仰、付職事、左府可被返給表云々、其事若爲

今明者、其後可被下文書於左大臣歟、忽不被

下者、內大臣可被申行歟、可隨御定、

一 內侍所供神物、丹波國依爲月宛國、雖致對

捍、責取領狀請文、給內藏寮、而乍進請文、

關口供了、仍彼寮所訴申也、

仰、早可奏聞、

一 王氏等訴申、近江國王氏田、爲伯被押領事、

可問伯之由有勅定、可下問宣旨歟、又以

消息可尋問歟、

仰、兩方只相計可問之、

一 法勝寺修二月上卿事、本上卿重服、實房也、仍左衛門

督奉行修正了、修二月同可然歟、同可催他人

歟、

仰、奏聞可隨御定者、

今日、祈年祭也、上卿權中納言隆忠卿、始從神也、辨權右中

辨基親、

余神齋如例、

此日、余少兒參八條院、爲御養子、今夜、大藏卿宗親

妻惟方入、參上爲乳母、件兒、被院女房三位殿腹、件參上後、其密

五日、癸丑雨下、依祈年祭後齋、不向堂、大將所參

也、去夜戌刻、以六口僧修不斷念佛、今日戌刻結

願了、聊依有夢想也、入夜外記來云、明後日大原

野祭、分配上卿朝方卿申御幸供奉之由、其外人々

雖相催、或所勞或故障、皆以辭退、仍觸職事等之

處、皆不取爲之如何者、注散狀於折帟、令進

申狀、不當輩加合點、定經可奉行之由召仰了、

今日、藤中納言來、已剋許、鎌倉飛脚列來、先日返報、幼主時内覽無例之趣、具以注遺了、而無其返事、只攝政長者事、以置文於御社、可決之由申、院了云々、奇代之珍事、凡不能是非、

六日、天晴、定經爲父卿使參伏見、奏聞鎌倉申狀云々、仍明日大原野上卿事仰親雅了、辭退之輩雖加催、敢無領狀之人云々、院御伏見、如此事輕口之身、不能沙汰之上、近日之有様、每事口入旁有恐、仍只觸攝政可左右之由仰了、入夜定經來光長許云、奏院之處、父卿參上之時、可被仰合云々、

七日、天晴、早旦、藏人左衛門權佐親雅來申云、大原野祭上卿事、泰通通資等卿猶以固辭、爲之如何、近例辨官勤代、若可然哉、余仰云、如此事下官之下知、雖自今以後不可叶、早申攝政可左右者、此日、大原野祭、余不獻神馬、只獻幣帛、且例年帶長者之人獻神馬之故也、陪膳季長朝臣、奉行經泰、陰陽師漏刻博士晴綱、

八日、天晴、靜賢法印來、藏人次官定經來云、明日釋奠用途、大藏省納物之内、美作因幡等之勤也、而雖催

省雖催國、共對捍、爲之如何、余云、早申院申攝政可成敗者、

九日、天晴、此日、釋奠也、上卿通親卿云々、文章博士業實本所出之題、論語文泰而不驕、文云、君子泰而不驕、小人驕而不泰、而通親卿難云、下文不宜云々、仍止件題云々、此難返々奇恠々々、可謂不足言、近日才卿無朝、通親等稱口可彈指々々々、今夜雷鳴甚雨、定變異歟、入夜有他行事密々、今日、女房加灸治、今日、中御門大納言被來、大將習催馬樂、葛城、

十日、天晴、今日遠忌也、沙汰送佛經布施、々々取等如例、此日、小兒八條院女房、三位局所生、於八條院御所、蓋日、五十日百日一度食之、依密儀無陪膳人、祇候女院、殿余并大將等例也、依密儀無陪膳人、祇候女院、人北諸大夫等、若布衣、注送之、自中居邊、女房傳取、持參御前、乳母宗賴朝臣妻勤陪膳、女院令食之給、余食百日之時、曾祖母一條殿知足院、令食給、于時爲居以後例不快也、戊剋儀了、折櫃物五十合自女院下給、以侍爲使、今夕遣鎌倉返札、頭辨光長奉書也、其趣君臣合體、天下可爲正者、雖無内覽宣旨何不竭臣忠哉、上下乖誤、理國難叶者、無例之所職、公私無詮之由也、生涯運報、只奉任

春日大明神也、

十一日、祀天晴、奉幣春日社、依明日祭也、陪膳季

長朝臣、奉行兼時、陰陽師主稅助安陪晴光、依非長

者、口獻神馬十烈也、仰、檢先例、爲攝政關白內覽

臣之輩、十一月入月之後祭以前爲散齋、今度雖

被下內覽宣旨、不帶氏長者、仍不獻神馬十烈

等、故不用散齋、只如例年也、於諸社祭齋者、公

家無此儀、爰知依長者有此齋也、不慮長者之執

柄古來無例、保安二年正月廿二日故殿蒙內覽宣

旨給、同三月五日蒙關白詔、受長者印給、仍二月

齋可吐今度例、而正月廿六日依內裏死穢、二月諸

祭皆延引、仍無所見、又自仁平元年、至久壽二年、

宇治左大臣奪取長者、然而忽改年來之例、解齋之

條、定有其恐歟、但彼間齋否之條、又以無所見、仍

今度爲新儀、問雅賴宗家等卿、光長朝臣等申下同

愚案、仍不齋也、

入夜大將送陪從半臂下襲於春日使少將成家之許、

圖書頭在宣持今年吉凶占、白虎占、并太一其占共以凶年

也、可慎々々、

十二日、天晴、此日、春日祭也、依有所思、早旦浴、

着衣冠、取笏降前庭、遣拜、昨日奉幣、今日遙

拜、共以信心發起、有其愚者歟、春日祭行事辨右少

辨親經云々、傳聞、賴朝別進法皇、上稱三百正、國稱五百正、

起前介兼能爲使、其次奏聞種々事等云々、召三天

文博士廣元問天變事等、歲星自去夜歟、月入

大微中未出、尤可恐、又太白犯牽牛、重變也云

々、

十三日、陰晴不定、入夜雨下、候八條院之小

兒來、及晚歸參了、花山院大納言被來、余謂之、被

示云、今日、法皇還御自日吉、經房卿依所勞不

能出仕、直廬まで相扶參入、以定長條々奏聞、賴

朝書札有三通、攝政事每狀令申、皆可置文之

由也、但如狀者、其意趣顯然可被改之由令存歟、

置文之條、只爲謝自由之恐、令申之詞也、而法皇攝

政不被覺悟此旨、尤不便云々、院仰云、置文之條不

可然、其事不可有其益、無故不及改易、於今

者如本內覽文書、叙位除目每事示合右大臣可被

行之由、即以定長朝臣仰攝政了、不承其左右、

自院所參也云々、已上大納言此日、施樂院使賴基來、問

灸治服藥之間事、

十四日、壬戌、自夜雨下、物忌也、巳刻、頭右中辨兼忠來、依物忌、在門外、以職事經奏、香職事兼時不罷、物忌、仍聞候令傳申也、申條々事、

一 光長朝臣依所勞、籠居、臨時祭事可申沙汰之由申送、仍欲奉行先使事、當今未役之上臈經家朝臣、實教朝臣等也、先可催經家、歟如何、

仰云、奏事之由、攝政可相催之、

一 宣憲朝臣申、可有四十五日御方違之由、行幸奉行可與奪定經、歟如何、

仰云、同申事之由、且又相計可被下知之、

一 瀧口近日不祇候、禁中兩三夜之間、問籍闕如之由、藏人所申也、何樣可申沙汰哉、

仰云、早奏事之由、任法可有沙汰、

一 近日主上有御手習事、依無御本、被尋攝政之處、被申無本之由、閣下若令持給者、可奏進給、可令書進給之由、女房所申也云々、仰云、手本等依召皆悉進院了、其外一切不候、又書進之條不可叶、早可被尋召攝政、又可被申院歟、

入夜大膳權大夫季弘持來天文密奏、如例、留脫、雨案返給奏料、如解、雖物忌、強不堅固之由、陰陽師先例不憚、仍召前問、變之間事、太白犯牛宿之變、尤邂逅也、但歲星變有告文、天下有異、天者、何不消妖哉云々、

今日、姬御前密々加灸治、余指驗也、女房灸治、又今日灸了、爲悅、

十五日、卯、天晴、頭左中辨光長、日來依所勞、籠居、今日始出仕申吉書、先來余亭、以職事兼時傳申之、兼日依膝灸治不愈、不可有出御之由所申請也、吉書二通、美乃國廣相解文、內藏寮臨時公用二通也、是初任職事定例也、見了返給、仰

可奏之由、其後召光長於前、前、光長云、除目事、今來何樣可候哉、余云、今月可被行歟、正月延引之時、多二月被行、三月例頗邂逅之上、案事理無指故、被過二月如何、光長云、今日參院并攝政

可申事由云々、又云、祈年穀奉幣事、內々問日次之處、廿二日廿四日吉之由所申也云々、同可奏事之由、仰了、小時退出了、入夜向堂、女房同前、依法印行廿五三昧也、五更歸來、入夜雨下、十六日、甲藏人左衛門權佐親雅來申條々事、目録、此在別、此



中申御方違行幸事、去正月臨幸鳥羽、而件御所遠遠有煩之上、依地震御所併傾危、殆有其恐、仍八條院御所、左大臣亭等之間如何、八條御所、地震之後、破損之後、未及修造、左大臣亭又不便之由有院宣、爲之如何、余答云、早重經奏聞可隨御定、抑、左大臣亭自大內當東方、禁忌之條可被尋陰陽敷、又云、同輿事、去正月并去年行幸一兩度無此儀、如何、余云、凡不知子細、早奏事之由、可隨御定也者、兼口口次之口此日、藤中納言來、今日、姬君灸腹二ヶ所、女房又灸頭、

十七日、親雅來申、御方違之間事、以人令申之間、子細猶不審、仍召藤前尋之、申云、大內自左大臣亭當西、公家御絕命方也、然而節分夜御宿鳥羽、仍其忌付彼了、然者雖有行幸左大臣亭、不可有忌憚之由、在宣所申也、仍申院之處、然者可召左大臣亭之由有仰、但又行幸大內、全不可有苦歎、其故ハ、東方ハ大將軍王相等方也、然而去年四十五日有御宿大內、仍今更不可及議、若可有東方之修理者、可待遊行之間、於王相方者、又殘春不幾、仍雖宿御大內、東方不可有其苦、鬼吏

一方猶可有憚、而乾方忽無修造之要者、大內可宜敷云々、可奏事之由旨仰了、

十八日、寅天陰、此日、奉爲故知足院殿、於堂供養佛經、導師佛嚴聖人、無請僧、佛一鋪、阿彌陀、不空、觀音、於一鋪也、件臨士二鉢ハ、彼殿御平生之間、殊奉仰給、仍所圖也、但將賢ハ、強無御給致、愛染王爲御本尊、而爲亡者之佛事、三圖件銀、事無便宜、仍將賢與愛染王同轉之故所奉圖、普賢也、經一部、布施絹一疋、紙三十帖也、

近日天下之亂、偏保元怨靈所爲之由、有夢想等、仍且爲鎮天下、且爲訪冥途、殊所修此佛事也、今日頭辨光長來申云、除目來廿八日之由所申也、御修法自廿二日可被始云々、又帥卿所示事等條々申之、天下大事也、親雅來申條々事、光長又申條々事、已上在別、中大兼時、

十九日、卯天晴、此日、故殿御遠忌也、仍未剋向堂、導師寶顯法眼、題名僧、九口、大將在座事了、雅賴卿來、余謁之、

今日又於御墓所、有小佛事、題名僧所用三昧僧也、導師公蒙、

今日、五位藏人定經來申條々事、在別、入夜左少辨定長來、余仰內覽辭退、及天氣不快有恐之子細可奏

聞之狀了、

廿日、戊辰天晴未刻許、頭左中辨光長朝臣來、申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、申次其後召<sub>二</sub>簾前<sub>一</sub>、光長云、定長云、去夜答仰事、今朝有事次、具以奏聞了、先奏<sub>二</sub>國事<sub>一</sub>、御口云、于<sub>レ</sub>今無<sub>二</sub>御沙汰<sub>一</sub>之條、尤以不便、早遣沙汰者可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>廻口<sub>一</sub>作了、謀<sub>二</sub>農耕懈怠<sub>一</sub>者、爲<sub>二</sub>天下不便<sub>一</sub>、其中於<sub>二</sub>院中之御要事<sub>一</sub>者、忽無<sub>二</sub>御覺悟<sub>一</sub>御沙汰之時、子細定國相存歟、又自<sub>レ</sub>祗<sub>二</sub>候御邊<sub>一</sub>之輩有<sub>二</sub>申<sub>一</sub>旨<sub>一</sub>歟、隨<sub>二</sub>彼趣<sub>一</sub>且可被<sub>二</sub>注<sub>一</sub>申子細、其時可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>御成敗<sub>一</sub>云々、天氣不<sub>レ</sub>惡之故、彼大事御辭通之旨趣、具以奏聞、仰云、子細承了、但自<sub>レ</sub>彼令<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>事、其上是非左右更以不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>被<sub>一</sub>仰遣、此旨、先日令<sub>レ</sub>申了、於<sub>レ</sub>今者、朕天下事不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>口入<sub>一</sub>、攝政相共可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御沙汰<sub>一</sub>也、且者一日比攝政參入之時、此旨相含了、定自<sub>レ</sub>彼有<sub>二</sub>被<sub>一</sub>申旨<sub>一</sub>歟、又自<sub>レ</sub>其も毎事無<sub>二</sub>隔心之體<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>示合<sub>一</sub>也、此外凡不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>云々者、此條天氣之善惡不<sub>レ</sub>見得、大略猶以不快歟、是存內也、光長又云、除目御修法、自<sub>二</sub>來廿三日<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>始行<sub>一</sub>、多是結願與<sub>二</sub>入眼<sub>一</sub>相當同日所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>行也云々、余云、辛未者、不<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>佛事<sub>一</sub>日也、然而非<sub>二</sub>大佛事<sub>一</sub>、強不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>苦歟、況無<sub>二</sub>他日<sub>一</sub>哉、光長云、在宣所<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>

此之由也云々、又云、新年般奉幣、藏人方內々雖<sub>二</sub>申沙汰<sub>一</sub>、定日以後事、親經<sub>并</sub>行<sub>二</sub>藏人方事<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>口行之由與奪了云々、件使等事相催之處、一切無<sub>二</sub>領狀之人<sub>一</sub>、又御修法用途不通了、如<sub>レ</sub>此事等雖<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>申<sub>一</sub>攝政、一切無<sub>二</sub>左右之仰<sub>一</sub>、實天下難治之比也、偏可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>職事辨官之進止<sub>一</sub>歟云々、又云、來廿五日爲<sub>二</sub>滿頂加行<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>臨<sub>一</sub>幸天王寺、而俄延引、是布施料布絹等之類、召<sub>二</sub>遣賴朝之許<sub>一</sub>、隨<sub>二</sub>到來<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>遂云々<sub>一</sub>、又爲<sub>二</sub>經房卿沙汰<sub>一</sub>、被<sub>二</sub>尋<sub>一</sub>召件用途於北條時政、而不<sub>二</sub>進上<sub>一</sub>云々、可<sub>レ</sub>彈指<sub>二</sub>々々々<sub>一</sub>、

廿一日、己巳天晴、新年般奉幣、上卿無<sub>二</sub>參仕<sub>一</sub>之由、先日光長令<sub>レ</sub>申、仍右大將可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>勤仕<sub>一</sub>旨仰了、而未<sub>二</sub>相催<sub>一</sub>、明日可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>定<sub>一</sub>、件間事、今日可<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>仰官外記<sub>一</sub>、初度如<sub>レ</sub>仍以<sub>二</sub>御教書<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>催之由<sub>一</sub>、內々仰<sub>二</sub>光長<sub>一</sub>、即遣<sub>二</sub>御教書於大將許<sub>一</sub>、其後立<sub>二</sub>神事札<sub>一</sub>、又召<sub>二</sub>遣賴業廣房等<sub>一</sub>了、賴業參<sub>レ</sub>政了云々、廣房參入、大將着<sub>二</sub>冠直衣等<sub>一</sub>出逢、余方、上進上座、大將居、端坐、奧座、以爲、余座之故也、大夫候、廣座、明日可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>新年般奉幣定<sub>一</sub>、催<sub>二</sub>陰陽寮<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>候<sub>一</sub>陣、口口仰<sub>二</sub>之云々<sub>一</sub>、廣房高唯退下云々、余此間向<sub>二</sub>堂謁<sub>一</sub>法印、又密々謁<sub>二</sub>或聖人<sub>一</sub>、法花五位藏人定經參來之由、人來告、仍歸<sub>二</sub>宅

謁之、申三條々事、在別其內和氣使歸洛事、可被行仗議也、上卿催內大臣之處、稱病辭退云々、早可奏事由之旨仰了、此日、本命日泰山府君祭也、

廿二日、庚午天晴、早旦大外記賴業參來、大將着冠直衣等出居、余公卿座召前仰、今日祈年穀奉幣定、催具諸司、可候陣之由云々、

酉刻、大將參內、自身隨身皆行幸裝束也、但不從、又不思老懸、先着仗座、有

祈年穀奉幣定、依參議及大內記等不參、奉行辨親經書定文、承宣命云々、三事一身兼行、珍事歟、其後

有行幸召仰事、親雅其後行幸左大臣亭、大將稱病不還參、御退出、余今日文書皆悉免、內覽了、日時定

等也、於宣命者必可免、然而今度無辭別之上、居所歸之間、計時隨所免也、但今日無宣命草、當日可奏之云々、及深更、大將歸來、語今日次第、

此日、奉幣定以前、親經申三條々事、在別多是初齋宮

廿三日、辛未晴、權右中辨基親來申三條々事、

事也、在別廿四日、壬申晴、申刻、頭左中辨光長來申三條々事、在別

其中左馬頭能保可被任衛府督之由、自關東

付帥卿奏院、而當時無闕、何樣可被行哉之由

有院宣云々、余云、私不可申左右、只可有御

定、又可申攝政、光長云、即申攝政了、被命令同前云々、又對馬守親光可還任之由、同自關東、令申云々、件事者、治承三年依成功一任當國守、即赴任國之間、逢平家之亂、仍恐彼亂行、越渡高麗國、聞平氏滅亡之由、歸朝在國之間、史大夫清業依巡年、被拜當國了、而親光攀向關東、觸此子細了、仍賴朝卿感不從平氏之意趣、奏此旨云々、而清業又無指過意、此上事如何、可被問人々歟云々、余云、是又可、在勅定、有口口問之、仰早可問歟、凡近日事、每事不能發言者、口云、行家義經等猶可尋搜之由同奏聞、仍可下知之由有院宣、可賜宣旨歟、以御教書可下知歟云々、余云、大事也、可賜宣旨歟者、良久談雜事退出、相續定經來申三條々事、在別其中、和氣使歸洛事、依內大臣辭退、中御門大納言可奉行之由被仰下、可加催歟云云、又云、諸社破損殊太、去年爲親雅奉行、被取損色、其後無沙汰、而新任受領等募成功、可修造之由、可下知旨有院宣云々、余云、早勘功程、隨其多少、可被計宛歟者、



此日、祈年穀奉幣也、上卿右大將、如法已剋參內、  
先有先奏宣命草、免內覽、子細其後參神祇官、依內  
 侍遲參、經二時許之後、發遣幣帛之後、及晚退  
 出、先是、奉行辨親經來申、今日奉幣子細幣物等如  
 法、近年無此例云々、取朝卿所進物等也余云、近代使不參  
 社頭之由有其聞、能可致沙汰者、親經云、付使  
 申於口口口追其所之由召仰了、又可被進社司請  
 文之由同下知云々、今日、九條小堂修二月也、大將不  
 改裝束參入、三位中將着直衣參仕、大將早出、中  
 將事終退出、又女房及大將女房同車參入、事了歸  
 來、

廿五日、西自夜甚雨、午後天晴、此日、八條院於常磐  
 御堂仁和寺被供養御筆大般若經、院有御幸云々、大  
 將如法已剋着直衣牛蓆並、隨身參入、及夜漏歸來語  
 云、參入之後頃之事始、公卿宗家卿、兼雅卿、大將雅  
 賴卿、定能卿、季能卿、通資卿云々、大藏卿宗賴行事、  
 導師隆憲法印、請僧六口云々、件御經當時二百卷被  
 終寫功云々、且所被遂供養也、

廿六日、戌晴、申剋、藏人辨親經來申條々事、申次第時、在目録  
 以內藏權頭高佐朝臣有達攝政邊事、件事去比

以定長余進退之間事、奏法皇、々々仰云、辭退之  
 由、被仰遣關東事、一切不可有也、朕不  
 可知天下、於今者、攝政與汝示合、可執行萬  
 事、此旨被仰攝政了、汝又可示攝政云々、仍今  
 日召高佐所相觸也、此事雖不可必然、始終不  
 過、慙所驚達也、其趣自去冬以來之次第、大概示  
 之、凡此職無例、又無其用之故、再三雖致辭  
 遁、遂以不許、重奏聞之處、仰旨如此、日來閣下不  
 覽文書、近日僅雖有御覽文書、又無成敗、其上  
 微臣又不能成敗、法皇不可知食天下之由有仰、  
 兩執政共相讓、無成敗之間、近日朝務偏如無、此  
 條尋其源、只在愚臣之故、仍雖致辭退、無勅許、  
 此上次第何樣可存哉、雖自今以後、萬事於無御  
 成敗、在臣又不判是非左右之間、進退維谷、請承  
 分明之御答、欲存愚暗之進退者、高佐參入了、酉  
 刻、奈良別當僧正被來、今日上洛云々、良久談話、秉  
 燭以後被歸了、小童令謁之、入夜源中納言來、只  
 今參軍勝金剛院修二月云々、

今日、自關東書札到來、除目事偏可爲下官之口  
 云々、此事又何事哉、凡下官之不祥只在此事、依此



申狀、射山周公彌以不可被成敗、凡難堪第一之次第也、又自經房鄉許密々注送賴朝申狀、其趣下官猶可爲攝政之趣云々、實不知洛中之有樣歟、所謂下官之不祥也、不能左右云々、

廿七日、亥天晴、依明日除目、大夫史廣房持來新叙

舊史成功輩小草子、名官小葉子是也、新叙舊史者、偏可任受

注、件草子三帖、裏紙一枚押入上下也、又納覽莒、

余留草子返給莒、午刻、藏人左衛門權佐親雅來申

條々事、在日賀茂社四月御更衣之御服、先例爲社領

庄園等之勤、而近年依武士之勤、運上不通之間、去年

被付成功、今度同可然云々、余披見社解之處、

件庄々非當時武士之妨、仍先可被尋件子細於社

家、猶口不可叶者、重可奏事之由旨仰了、申刻、

頭左中辨、光長來、召前謁之、今日參院仁和寺所歸來

也、院仰云、除目事一向爲下官之沙汰、一切不可

奏事由者、光長又云、一昨日夜竊盜入禁中云々、

今日、高佐歸來傳攝政返事云、如此蒙仰尤畏申、

如仰萬事可申合之由所存也、但今覽不可及

朝議成敗也、只依院宣時々出仕、并文書許、雖

令內覽、萬機不可成敗云々、余申云、此條依

自院被仰下所令申也、而如令仰者、相違院宣之趣、其條早可令申、院給歟、法皇不可知、食天下之由有仰、又不可有御沙汰云々、其上一身朝務奉行、更不可思寄事歟者、高佐服膺歸參了、

此日、陪從等引率來臨、依奉公勢、第一可任受領

之由也、申文仰可付職事、由返給了、又彈正官人

同引來以參參、第一賴行可被任民部丞之由所申

也、返答同前、

或人曰、能保女可嫁攝政之由風聞、而其事口口朝

之制止停止了云々、實否難知、

廿八日、丙天陰、及晚降雨、入夜殊甚、此日除目初日

也、執筆參議雅長卿、依左大弁兼兼忠朝臣來覽申文、

余着冠直衣出客亭、以番職事兼親冠召之、

兼忠捧申文於杖持來覽之、其儀只如余取之置前、

解結緒引延、其上被禮帟一々見了、文數僅七知也、申

文數少、解結取之、今依如本卷禮帟結其上、片二三尺許

突道之、不取通文、件申文等各有兼忠取之結申、於長

結、二通許結、結取其上、卷二一頭帟也、兼忠取之結申、押下

親申之、余仰可召之由、即定經來覽之儀同前、但申

文十餘通也、然而禮帟被卷籠ル程也、仍猶解結

緒見之、但見三通許、定經返給結申、三通退下、先是、頭左中辨光長雖參入、依膝脛等灸治、不堪膝行、因之以兼親傳覽、申文同通許歟、見了返給、光長兼忠等有申事等、具在目録、兼忠申、臨時祭成功之間事也、光長申云、明經道舉大博士師直與助教信頭所口申也、大儒每年春舉、末々博士候巡舉秋、但於口年者、不論春秋、最前除目大儒所放也、仍去年秋師直放之、今春又依恒例巡舉之、而信頭申云、強無定法、只隨便宜也、仍去年秋大儒舉了、今春當仁信頭也云々、各申旨如此、爲之如何、余云、凡年來除目事、隨分雖尋沙汰、未聞此事、可謂未曾有、依不知本體、難示是非情案之、全不及上成敗、只本道之進止也、自今以後、示合一同可推舉也、連々相論不可絕、依不便所仰此由也、五位藏人親雅親經等稱無申文不來、不內覽申文等也、各歸參了、爲摸申文所忍歟、光長朝臣今日依吉日宿仕內裏云々、

廿九日、丑晴、巳剋、頭右中辨兼忠來申、臨時祭舞人不足、并內藏寮御服闕如之由、各仰可奏由了、又陪云、去夜可有臨時祭定、而依攝政不被出座延引

云々、申終、頭左中辨光長來、仰院御返事、今日兼仁和寺、院自一昨日御法、以定長奏余所申、其狀云、依口日仰相觸攝政之處、猶不能成敗朝務之由有返事、院不可知食天下事云々、攝政又無成敗、一身不能奉行、就中、自關東重有申旨云々、彌以爲恐、攝政縱雖不被致沙汰、君都不可知食萬機之條、何樣可候哉、除目之間事、若無分明御定者、一切不能申沙汰、若然者、四所等、公卿給等之外不可任歟、此條關東之所思、爲君爲世似無所據歟、爲後恐所申置也者、勅報云、朕不可知天下、叙位除目事、又不能成敗一條、今始非申事、此兩三年來頻雖仰攝政、一切不被承引之間、愁纏牽之間、不當非理事等定多歟、且天下之亂如此之故也、旁世間事細思食之間、萬事令致沙汰尤神妙也、猜、公之執政、非被仰不可知天下之由、是多年之御素懷也、敢勿奉置心於攝政者、依關東申狀被引入之條、尤可然、但今度除目事、一向汝之沙汰也、其中也可被仰口事、今被仰出口也、大事、又爭不開食哉、細々事不可奏聞、併口沙汰者、此次余奏家房入道關白息、實兼良納言、等侍從

事、已有勅許、次第神妙々々、光長又云、東大寺別當  
事、可問雅實之由有仰、仍仰遣子細之處、本  
寺偏可勵沙汰之由令申、奏事由之處、觸下官  
可仰下云々、先日余申云、可被付遣官所、若猶可被任別  
者、仍被、又雅實元所舉元與寺別當、可被補範玄僧  
都、範玄元所帶大安寺別當、豈不可被補云々、院

宣之趣、頗似和顏、此上猶一切不可、知之由令申之  
條、又有恐、仍愁注付目錄於折紙、明旦可申之由  
仰之、光長於前注折紙、持參內裏了、明旦自內  
裏可參仁和寺、其後又可來此第一之由所申也、  
今度又申云、日來殊成恐、今仰頗散鬱尤畏申、但除  
目者、朝家大事也、偏令計任事尤有恐、又一向通申  
之條、還似無便、仍注目錄進上、於一決者、可  
在御定者、今日、除目中日也、執筆同前、公卿無人  
數、無顯官舉云々、

卅日、或晴、此日、除目入眼也、申刻、光長朝臣又來傳  
院宣云、所注申大概經御覽了、只無人愁之樣  
可計云々、神祇副并主稅頭口口聖者多而無分明  
仰云々、仍不能計任、自餘注一定任人給光長、  
々々清書持參了、先例執政臣所清書也、而攝政行除目、  
不知任人事、余又作攝政、自不能書

之、仍仰、子刻、光長自內裏、以書札示送云、任人  
折希進院之處、定長返事如此云々、其狀云、仰各人、  
可計沙汰云々、  
他事今日申定了、藏人巡事、聊有不審、而仰不分明、  
仍今夜不可任之由仰了、

### 三月

一日、卯天晴、卯刻、大外記賴業注進聞書、申刻、光長  
來語去夜次第、宗家卿已下公卿四人、又任人注文、攝  
政直可與執筆之由有命、仍竊給雅長卿云々、  
又云、今日、九郎行家追討宣旨持向內大臣亭下、知  
之、其次丞相被賜、除目殊感口口云々、又帥經房感悅  
之由示送云、如見聖代之口云々、

今度除書、愚案之所及、無私之所致也、藏人事重  
可申定之由仰了、下名來四月之由云々、  
抑、今日不出御燈、又無由被、是年來余無御燈事、  
而初度由被無便宜之故也、今日恒例神事宴經等  
如常、入夜念誦、信心靈起、有冥感事一狀、  
二日、陰及晚雨降、早旦太原聖人本成來、數剋謁  
談、實無止之聖人也、可貴々々、未剋、藏人左衛門權  
佐親雅來申一條々事、申太、相次藏人辨親經又來申、其



後藏人次官定經申之、各目錄在別紙、已上兩人申事、申  
 剋、頭左中辨光長又來申一條々事、今日先參院、今熊野昨  
 所歸來也、除目之時不被注之置事奏之、仰云、  
 藏人巡、并基親安藝事等、早可被注云々、公衛兼忠  
 等申加級事、無分明仰云々、此外申一條々事、在別  
 今日以象親遺定長之許、候今申伊與國院新御領  
 之間事、今朝、大博士師直來云、經道非滿堂舉、以自  
 解任書博士之例古來無口、然而今度非訴申、今一  
 人書博士依不任、解口以舉狀欲任之云々、仰  
 可付職事之由了、

三日、辛巳天晴、三月三日相當上巳、希代之嘉瑞也、仍  
 余已下子息等皆有祓事、但自不出河原、只遣撫物  
 於陰陽師之許也、入夜頭右中辨兼忠來、申臨時祭  
 間事、在目

四日、壬午天晴、巳刻、頭右中辨兼忠來、申臨時祭事、大  
 略去夜如余申、有沙汰云々、此次又仰云、仁和寺  
 法親王被申牛車宣旨、被仰可有沙汰之由了、  
 且相計且又問例可致沙汰者、余申云、不及問  
 例、早可被仰下、無左右事也、申攝政可被  
 下知者、件親王、年餘未至、又非指御持僧、無參內之要、然  
 而於被所望者、又非可被懷之上、已御定切了、仍

申不可被同西剋、光長朝臣來申下名之間條々事、其  
 外又繁多、在目其中有寶劔可被求之問事、其使景  
 弘之狀、并官注申旨等所覽也、余云、早問奏事由、但  
 此事臨奉求授之期可修法立奉幣使、其事兼可  
 奏者、仰、近年文口外國及五人之外記注申云々、此  
 事未會聞、獨三人定可存之由仰了、除目之時、被  
 任三人、仍今三人可被加之由、外記所申也、仍余  
 仰今一人可加之由了、光長參院了、

今日早旦、奉幣春日御社、仍修祓、浴陰陽師圖書  
 頭在宜、陪膳季長朝臣、余衣冠降庭通拜、其後聊有  
 所作等、又今晚、智證阿闍梨參東大寺、其次可參春  
 日云々、

入夜念誦如恒、彼岸之間所修之念誦今夜結願了、  
 亥刻許、光長自院御所示送云、定長依病不出仕  
 之間、萬事不奏達、以女房右衛門、如形申入、先日御  
 定切了事等聞食了、早可仰下一云々、自餘事凡不  
 能達得、仍參攝政亭了云々、此夜、下名也、免內  
 覽了、今日被任安藝基親行之、日向藏人等、其外無別  
 事、

五日、癸未天晴、巳刻、頭辨兼忠來申、臨時祭間事、仁和



寺宮牛車宣旨事、今日可宣下云々、又父納言有示送事、此日依故女院御月忌向堂、其事了後、法印被行法恩講、此次密々被講誦歌、大將中將同詠之、深更歸來、

六日、甲申天晴、大外記賴業、○來大將習左傳、頭忠兼

來云、仁和寺宮牛車事、今日可宣下、東下右大將殿如何、余云、左右可在命、但如此事多於陣可被下歟、若於里亭被下者、猶大臣宜歟、可被向內府亭歟者、兼忠諾、又云、臨時祭事沙汰具了、舞人今四人、五位三人、六位一人、院宣云、申病之聲可遣實檢使者、靜賢法印來臨、法印今日被向白川、觀性法橋歸西山了、

七日、乙酉朝晴、及晚陰、入夜雨下、靜賢法印白川殿炎上云々、仍以使訪之、

九日、丁亥今晚女房夢云、十一二日之間可有吉慶云云、可信之、

十日、戊子天晴、藏人辨親經來申條々事、在目辨光長同來申數々條事、目録今日、藤中納言定能卿來、又大外記賴業授左傳於大將、

傳聞、自關東攝錄事重奏院云々、又宗方來授樂於

大將、今日、奈良僧正被送卷數、日來余祈於御神社轉讀金剛般若經也、

十一日、己丑天晴、早旦、定長告送光長之許、曰、攝政氏

長者等事、今日可被仰下云々、驚思無限、午刻、頭

右中辨兼忠、父納言為院御使來、依國產檢來居、藤邊、

可仰之由余於簾中謁之、兼忠仰云、攝政藤氏長者

事、可被宣下之由可申、案內旨有仰、於長者事

者、重而所被辭申也云々、余申云、此事承驚不少、

思緒何事哉、就中、本人上表事未聞、旁以為恐、忽

宣下事、專不可口事也、且可被奏此之由者、父

納言同指寄緣邊、余在談語、各歸去了、先是、招遣

定長、及申刻來臨、余申條々子細、口念不快、并天下

政猶不及口素者、天下奉行口以不可叶、非此

時者難申披存旨、宣下之後令申者、可無其詮、

仍就此仰所述思緒也、若悔非歸正、治政有御

最負者、不願身之不省、可披腹心歟、其事不

可、然者、此大事一切所不致也、更以不可被宣

下之由所奏也、子細雖多大概不過之、入夜定長

歸來傳院宣、其趣太以神妙、敢無逆鱗、實以不可

說也、其趣全不被置御心天下事、細々臣務一向

可申沙汰也、於大事者又爭不聞食哉、被直亂世之條尤神妙、賴朝之所申、頗不當事等雖相交、又於有理事者、何無御承引哉、凡通萬機御事、非依此大事、年來之御善懷也、而前攝政一切無承諸之間、自然所行也、於今者、一向可申沙汰之由也、御定甚以委細、不追記錄、定長云、此事偏爲春日大明神御計之由思食賢所見給也云々、凡此事次第非直也事也、佛神冥助、紅淚滿眼、今日、山法印被來、此日人々以來、

十二日、庚寅天晴、定能、雅長兩卿來、其外辨官殿上人等甚多、又清通卿來、此日、院尊勝陀羅尼也、大將參入、事訖日沒之程歸來、早且、頭右中辨兼忠來申今日攝政詔書宣下之間事、條々相含了、即院參了、自院示送云、

長者事、或下宣旨、或又不然、申合外記、可沙汰云々、  
一座事、早可宣下、

已上院宣如、此云々、

上卿已闕如了、爲之如何々々、

返答云、雖誰人早々可被相催者、自是定能卿之許示送可被參之由之間、依參尊勝陀羅尼不

見返事狀、口圓來臨、但通親可參入云々、入夜藏人行經來、臨時祭可進馬之由仰大將、亥一點、大內記長守持來詔書草、披見之處、文體雖似寬仁詔書、遂彼舊儀之由不見、件寬仁之詔云、逐承平之舊儀、授攝錄之繁務云々、彼寬仁以往攝政、貞觀、元慶、昭宣、承平、良信等也、彼皆當踐祚之初、載宣命之文、然而就近吉例、以承平比之、於今度者、臨時攝政詔、已稀代也、我朝例并五ケ度、所謂天祿元年、公、永祚、隆、長和六年、字治、永萬二年、入道、壽永二年、攝政、等是也、此中、天祿永祚非規模、永萬壽永足忌、口可逐用者、只寬仁元年是也、長和六年也、仍今度詔文、尤可載追寬仁之由也、仍以此旨含長守了、又清書內覽免了之由仰之、長治例也、況居所遠遠哉、相次大夫史廣房持來氏長者宣旨、有禮、余問云、理之所至、此宣旨可留家也、而保元被、被返官之由、粗以聞及、信入、頗有不審、若被返下者、定而官底歟如何、申云、彼度所被留御所也、近年只被下口不被下官、今度被下兩方之由所承也云云、仍余留口旨返給宮了、凡古來於長者者、不及宣下、所讓來也、而保元依亂逆、此事出來、以

彼爲例、非讓之時、每度被宣下也、其中於保元者、爲最吉、以後例皆不吉、仍今度所用保元例也者、子剋行隆來、依及深夜、不調之、今日宣旨等須光長傳申敷、而此日不見吉書、每事無沙汰之上、此宣旨非可備威儀之事、仍兼不仰其旨之間、只以候達家司令傳進也、口兵部少輔能業、五位家司、衣冠藤氏也、

十三日、卯陰、午後甚雨、巳刻、大外記賴業持來氏長者宣旨云、去夜及曉更之間、所勞更發、今日所持參也、先例留御所云々、余案之、今日雖爲衰日、昨日見攝政詔了、又受取官宣旨了、每度不可

忌日、仍隨宜密々受取了、家司兼親傳進之也、衣冠又申云、去夜不被下一座宣旨、依左大臣表未返給也、然而、愚案之所及、件表未被仰給之由於諸司、然者只被下宣旨、不可有其難、是下官素所案也、仍來十六日兵仗宣旨之次、可被仰下之由、示遣雅賴許了、兼思朝臣未練之故也、寬仁例、後日被仰下三ヶ事、一、度牛、今度自然符合、可然之吉瑞也、素賴武來、自院所召賜也、依所望也、

十四日、壬晴、人々多來、中御門大納言、前源中納言等

來、余着冠直衣、調之、三ヶ日替冠可調人々之由、見殿云々、仍余着前官人三ヶ日可有憚敷、然而已來臨之上不及追歸、又雖不及憚事也、昨今祇候之家司職事、皆衣冠也、三ヶ日可然云々、光長來申拜賀之間難事、所々申次、吉書役人等仰了、隨身事、兼次可來由被仰下、而辭退云々、重雖被仰下、今日事不切云々、此夜、月蝕也、余可有吉慶事之由勘之、可悅、大內記長守來云、寬仁詔ニ、追承平舊儀、ト書タルハ、外戚之相似タル所ヲ書タリケル也、仍今度不能書寬仁跡之由也者、

十五日、巳晴、隨身下薦等少々有初參之輩、元府番長等也、是已爲近代之例、申剋、左近番長素兼次來、自院所下賜也、持來定長御敷、召前給女房御衣、于時辦兼來會、仍退出了、件男於院殊爲御糸惜之者、又舍人之中筆強也、仍殊所響應也、容貌美麗、大藏卿宗賴朝臣來、明日於女院可有贈物之間事、示合之、大略可示合之由有仰敷、以比巴可爲贈物、而不可入袋旨、人々計申云々、又件贈物、院司公卿可取之由有沙汰云々、余云、此事其不可然、先例等比巴皆入袋者也、公卿院司取之事專不當、只







間、余揖起座、降中門廊內方、也、從院、持之、取上  
手網末一拜了、給網於大將、中將、立寄中  
門北腋方、大將傳給網於殿上人左少將親能朝臣、親  
能給前駐國行、下殿司、可仰之人也、是房上殿司、可仰、隨  
等、國行、本殿司也、國行引、出中門、賜隨身左近府生下  
野忠武、々々賜御厩舍人、也、次余歸立本所、申  
八條院御方、申、大別當丹後、舞踏了、又告召之由、即昇  
自中門外方、入自車寄戶、進候上達部屋、女房  
窺簾、仍余進候簾中、被殿、因、余、即女房持來琵琶  
一面、入、余取之招三位中將、候、件、面、也、給之、中將取  
之給親能、々々賜前駐親、馬、并、是、共、即余退起  
於自中門廊車寄戶退出、公卿、立、殿、上、前、經六條東  
洞院三條坊門等參內、到陣口下車、經左衛門陣  
代、并床子座、依、兩、經、初、依、陣座前、同、經、初、已、上、隨、身、等、相、  
到中進立中門、無、人、不、持、使頭右中辨兼忠、從、公、卿、殿、上、人、前、奏  
事由、歸來仰聞食之由、拜舞之後着殿上、兼、忠、於、中、  
也、是非、攝、殿、之、人、拜、舞、之、儀、也、於、攝、於小板敷下一揖、昇天入  
自第一間、居御倚子前願下方、次兼忠入自明義  
門代、於小板敷下一告出御之由、告、召、由、之、時、向、可、余起  
座經上戶、并年中行事障子北御殿南廣庇等、五位、藏、人、

候、候、內、藏、頭、經、家、等、西面簀子敷圓座揖、豫主上着御直  
衣、取、御、相、從、一出御查御座、小時揖起座、經本路降自小板  
敷、不、坐、退出、依、甚、雨、存、略、儀、不、於殿上邊一可被留  
之由示中御門大納言、且是先例也、況甚雨深更哉、歸  
宅於門外下車、直着客亭座、大將以下公卿等同着  
座、右、大、將、藤、中、納、言、定、能、左、京、大、夫、清、通、三、次余召人、職事  
兼時來、位、中、將、其、經、等、也、宗、家、雅、長、等、不、來、仰光長可召之由、即藏人頭左中  
辨光長朝臣來居前、余仰家司職事等、家、司、安、泰、朝、臣、  
朝臣、朝、臣、賴、業、長、房、等、光長退歸仰之、保、安、例、吉、書、之、後、被、仰、家、  
事、事、泰、來、勿、當、宣、房、光長退歸仰之、司、職、事、等、而、今、座、宗、賴、朝、臣、  
補、補、三、年、預、可、行、政、所、事、仍、同、可、申、吉、書、之、故、先、所、補、家、司、也、加、  
之、之、嘉、保、九、年、被、波、朱、器、之、日、公、卿、來、集、之、後、未、事、始、以、前、被、補、  
家司職事等、次家司職事等列立中門、也、依、雨、申慶賀之  
由、申、次、家、司、伊、賀、再拜了歸昇、次有吉書事、先家司宗賴  
朝臣進申云、光長朝臣候藏人方吉書者、余目之、宗  
賴退下、次光長朝臣入自中門廊車寄戶、即跪候同  
間、四、深揖起揚候氣色、余目之、光長稱唯、不、高、起  
進來跪余座當間簀子、即昇長押、爲、先、右、膝、依、錄、  
兩度如形膝行、依、間、狹、指寄杖、余以左右手一拔取  
文、置、前、光長退居長押下、座定之後披見文、如、  
文、內、藏、家、臨、時、公、用、美、濃、國、廣、如本卷之、二尺許突遣、以、  
下、下、爲、辨、方、光長置杖參進取文退下結申、二、通、共、每度目  
或不起、或、不、起、

之、光長又每度稱唯、卷文加杖退下、已上、次官方  
權右中辨基親朝臣申之、伊豫國年料米解文宗口（賴力）朝臣先參進申之如初、其作法又同光長、但昇長押之時、爲先左、又遠文復座之時有損、此事共不實、次外記方大外記清原  
真人賴業宗賴先申、奉捧覽宮、八月癸入自中門廊戶、  
跪候、同廊內緣、蒙目稱唯、參進跪、長押下一膝行進  
宮、退歸居、余座東間簀子敷、歸居也、余拋禮幣於宮中、  
一々見文、余上日入廿五、攝政關白也、如本卷之返入、覽  
宮、出宮、賴業參進取之、稱唯退下、次政所、無先申事、  
與國、家司大藏卿宗賴朝臣取書杖進候、中門廊、所、但御封、  
目參進、不稱進、作法優、余取之置前、宗賴座定  
之後、余見文返給、宗賴取之不結申、退出、次又  
官方、宗賴先申、右少辨親經申之、其儀如前々、廣成國年料米解文、  
次光長朝臣申云、範光參上、前攝政家司、被渡、余仰可、  
問時之由、光長退下、更歸參申云、吉時子刻已至了、  
余仰早可、覽目錄之由、光長退下、渡目錄於杖、  
參進、無先跪中門廊、進文、余披見了返給、光長承之退  
下、更參上申云、於旁辛櫃者、松殿之時、今案十二攝政事款、紛失  
之由、御使所申也、仍只有印櫃一合、爲之如何、余  
曰、非力之所及、早可、覽印櫃者、光長退去、次藤  
氏家司能業、五位、職事類高、同昇印櫃、件櫃甚小、然而依先例二人昇

之、置余前簀子敷、役人、次光長朝臣參上解、封關櫃  
蓋、拔番、取出印、置蓋覽之、余曰、定有細金、歟、  
不見如何、此事見、光長取出加蓋覽之、余引寄櫃蓋、  
取上印、見之、返置推遣蓋、光長取之、如本納之、  
掩蓋、如本指、結之退下、次本役人參上、撤印櫃、次  
余召宗賴朝臣、仰曰、左中辨光長朝臣爲氏院別當  
者、此次賴仰云、有官無官別當、今夜共可補之也、仍辨別當、宗賴事、唯可仰其人者、先例六位別當候之時仰彼云々、  
便申基親候吉書之由、退下、次官方吉書、今度爲先、官保安例也、  
權右中辨基親朝臣申之、如初、伊與國年料米解文、次藏人方  
光長朝臣申之、吉田景、其儀如初、次政所宗賴朝臣申  
之、御封、次隨身等前庭立明、此間、次下家司等若衣  
冠、昇辛櫃蓋、參進砌下、納朱器、持歸之後、又昇出大  
盤、覽之、又持歸、次年預下家司親行取、葛權衡、  
進庭中、持歸、光長朝臣候中門廊、抑、嘉保、々安例、家司取、朱器、持參之、但嘉保記難、此事、承保、康和無此  
儀、加之爲藏人頭之人、直取下家司之所持物、  
之條、於禮無便、仍就承保等佳例、不持參朱器、  
余豫以此旨、含光長朝臣、次余召光長朝臣、仰庄  
司、并既隨身所別當、氏院有官無官等別當、鹿田光長、方長房、小藏國行、隨身所安泰長房、  
有官別當康衡、無官別當康廣、光長退歸居、中門廊疊、召

宗賴、資泰、仰之、次長房降立、中門廊外庭、使預左衛門尉廣遠令、受取菟權衡、案主傳、取之、其後着、麻點近邊、令懸、始葛、案主勸、一献云々、次人々起座退出、余入、內寢、解脫、

今日扈從公卿、

權大納言宗家卿、前庭四人、

右大將良通卿、前庭四人、(維賴、定成、知家、邦賴、國直、重隆、重盛、)

權中納言定能卿、參議雅長卿、左京大夫清通卿、

三位中將良經卿、前庭二人、(信光、真清、)

已上無文帶、々劔之人蒔繪劔、主人雖、用螺鈿劔、

扈從之人如此、是先例也、

前庭殿上人、

宮內卿季經朝臣、內藏頭經家、

左近少將兼宗、左少將親能、

頭右中辨兼忠、藏人勘解由次官定經、

藏人右少辨親經、左近少將家經、

侍從定家、少納言賴房、

侍從兼保、藏人給料藤原基定、

已上十二人、

諸大夫、

彈正大弼資泰朝臣、

前攝津守以政、

中務少輔兼親、

前馬助國行、

皇后宮少進長俊、

前安藝權守信泰、

民部少輔長房、

勾當藤原宣房、大膳亮、

已上家司職事、

前近江守爲季、

前皇后少進仲盛、

散位範實、

散位康宗、

已上非職、

并廿二人、

隨身、

左府生下毛野忠武、賴文子、

左番長兼賴武、賴文子、

近衛、中臣恒光、兼元子、本府番長、

伊豫守季長、

前兵部少輔能業、

上野守賴高、

散位仲資、

散位兼時、

日向守泰家、

勾當藤原業清、

前下野權守親行、

散位信賢、

散位光茂、

右府生兼兼次、兼賴子、本候、

右番長兼兼助、兼清子、本三、

下毛野友利、友武子、本府番長、







也、仍所成、遂被兩國返抄也、宗賴覽政所告、次第見下之、且得之後、即加下書於御所、被下給親行、了、次第見下之、且取上之、即各加署、次召親行下給之、次自下臈起座、次第退出、

件返抄事、宗賴一人判所、仍家司等皆悉可連署歟之由、相尋親行之處、年預家司一人加署、他人不之由令申之、雖然、新任家司等、今夜着政所不連署者、追且可申吉書歟、其條更無謂之上、先例必連署歟、仍示合基親朝臣之處、可連署之由同以口口、仍且密々令改直之了、但不着座之輩、判所不書之、且是已及曉更之上、可經時刻之故歟、抑、政所三ヶ日間不可改歟之由、亦尋問親行之處、不然、今夜可令擬之云々、宗賴重仰云、三ヶ日不可改之由、見于康和元年十月六日爲房卿記、仍殊仰含其旨了、但申光長朝臣可令一定歟之由下知了、且是纔雖守家記、不知近例之上、諸事不知案內之故也、今度於政所家令計朱器御廐別當請取草之儀無之歟、件兩事、光長朝臣於中門、發行此事了、若是依爲實首不着政所〔之〕故歟、時又於中門有此事歟、先例可尋之、吉書一通、

下政所、

可成返抄、

別當大藏卿藤原宗賴

伊豫國司解 申進上 御封庸來事、

合佰解、

右當年料進上如件以解、

文治二年三月十六日

正四位下行大皇太后宮亮兼守源朝臣季長、

下政所、

可成返抄、

別當大藏卿藤原宗賴

讃岐國司解 申進上 御封庸米事、

合佰解、

右當年料進上如件以解、

文治二年三月十六日

從四位下行左馬頭兼守藤原朝臣能保、

返抄二通、

攝政右大臣家政所返抄 伊豫國、

檢納御封庸米佰解事、

右當年料檢納如件、故返抄、

文治二年三月十六日 案主中原有列

令散位大江朝臣在列 大從民部錄安倍有列

別當大藏卿藤原朝臣在列

權右中辨平朝臣在列

散位藤原朝臣在列

攝政右大臣家政所返抄 讚岐國、

檢納御封庸米佰斛事、

右當年料檢納如件故返抄、

文治二年三月十六日 案主中原有列

令散位大江朝臣有列 大從民部錄安倍有列

別當大藏卿藤原朝臣有列

權右中辨平朝臣有列

散位藤原朝臣有列

十七日、乙雨下、藏人左衛門權佐親雅來申、條々事、入

夜皇后宮大進家實爲、院御使、來申、彼宮祭使之間

事、依、無、可、勤之人、或已役、或見病、可、被、加、任大進、歟、將

可、被、任、亮、歟、亮有、云々、

去夜儀余不見及、事可、注進、之由仰、光長朝臣、又政

所始之間事可、注進、之由仰、宗賴、各申、承了之由、亥

刻、右大辨行隆來申、東大寺之間事、又其息行長相共

與、二字、二通也、余以、書賀、中御門大納言去夜被、來訪、之慶、

十八日、丙天晴、自、院以、光長朝臣被、仰云、泰經、賴

經等可、免、配流、之由、被、仰、遣關東、申、可、然之由、

被相、就、此狀、可、被、原免、歟、且又可、計奏、者、

余申云、自、本無、過怠、云々、被、從、寬宥、可、然、但

依、爲、被、仰合、事、所、申、子細、也、如、賴朝申、者、

似、宿意深、只以、此狀、無、左右、被、原免、自有、彼

口、歟、武士忿怒之上、自、上以、理被、仰仰、事、先々全

以不、見、然者重被、仰、遣子細、之後、被、優免、無、後

悔、歟、是奉、爲、君、又爲、彼兩經、也、此上事可、在、

御定、余内々自、上被、仰遣事、若有、論議、者、私以、御定之、申、

遣子細、如何、此條雖、不、及、申出、觀念深爲、思食事、仍、以、達、

旨趣、即歸參了、無勸寺法印被、來、此日、恒例泰山府君

祭日也、然而慶之後未、始、祈、仍延引、

廿一日、己右府生兼次着、布衣、白襖上下、薄、色衣、黃單衣、參上、召、前

見、之、近代第一之若者也、光長、親經、親雅等來申、

條々事、宗賴朝臣來申云、氏院參賀日次、擇、申來月十

七日甲子廿三日等吉之由、但廿三日伐日、法興院殿攝

政之後氏院參賀日也、用檢可、在、御定、者、仰云可口

之所、冷泉朝臣家被、損、甚、修造可、懈怠、仍十七日不口、法

興院例可謂寂吉、可用廿三日者、即在宣朝臣召候也、

廿二日、庚子天陰雨下、早旦、辨別當光長朝臣覽可遣興福寺之長者宜、寺家吉事可、行之由也、是定例也、

被長者宜、稱、寺中恒例吉事、任先規可、勤行之由、宜遣仰者、

長者宜如此、悉之、謹狀、

三月廿二日

左中辨在列

進上 興福寺別當權僧正御房

此日、始終祈招魂祭、在宣朝臣勅、之使侍、是保安例也、

廿三日、辛丑、入夜右大辨行隆來、覽延曆寺戒牒狀、二通於一、余見了返給、此文申、一上辨端書下知云々、

左大辨爲別當辨、而兼光依所勞行隆申之歟、行隆

又申云、以周防國被口東大寺、偏可爲聖人之沙

汰之由、被仰下條々、以應御下文所被下知、

即覽、余云、猶可被下宣旨歟、行隆云、尤可然、可

申沙汰云々、大和國段米事、自山階寺所沙汰渡

僅百石也、本數可及、此條可被問彼寺、聖人申狀如

此注于細、經院奏處、申長者殿下可有沙汰、所

被仰下也、執事兼光率、公令見之、云々、余爲尋沙汰取件聖人

札了、即以件狀先問興福寺長官兼光、且又可尋

寺家之由、仰光長了、今日又補家司職事等、家司、

爲季、職事、光長、

廿四日、壬子天陰、此日依吉日始見厩馬、頭辨光長

相具馬九疋、別當長房依所、即進解文、季長朝臣

依隨身等遲參、暫相待、參集之後見之、光長朝臣在

前緣下、厩別當國行在砌下、行事其外藏人五位等皆

候中門邊、定例也、先上臈三疋、武、率各一疋、須

一度可引之、而庭狹之間、同時難口置、仍先見三

疋、各乘之三匹打廻之後、依仰下引出了、更下臈

三疋又引、三疋見了、知初、更又引三疋、下臈再率之、

各見了、此中有揚馬一疋、下臈行廣騎之、其後

騎番長賴武、其非不堪事歟、其後忠武、兼次等渡南

庭一見之、兼次誠優美也、忠武又隨分無過失歟、

忠武、上下、款冬衣、事訖、右番長兼助參上、又渡庭見

兼次、白襖、薄色衣也、之、二、藍上、此夜、始終三尊護摩、不空、王令、行、法印於

御堂修之、余逢時口、又兼雅卿來、余謂之、北條時

政賴朝妻父、近、日珍物歟、來、明曉下向關東云々、以季長朝臣

云々、田舍之者尤可然、物體太尋常也云々、又進馬二疋、能保又進一疋、光長、親雅、親經等申條々事、

廿五日、卯天晴、入夜雨下、定經申條々事、諸社修造之間事在其中、余云、各仰社司令注進神領田數、以後爲本、其上可被付受領功之故也、定經云、帥卿所勞自一時日殊增氣、殆及獲麟云々、

藏人行清持來諸社祭請奏等、宮、宗等也、見了返給、仰可奏之由、

廿六日、辰雨降、申刻以後天晴、外記持來詔覆奏、余不加署返給、寬仁宇治殿攝政御時例也、大殿、知足院殿、故殿、三代關白詔初加署、更召返被摺除云々、爰知不可加款、但以此例、前攝政近衛、加署更被摺云々、其理不可然、是以不加、

廿七日、巳天晴、中御門大納言被來、大將習催馬樂、余又謁之、又見馬二疋、此夜、左馬頭能保來、召離前謁之、談關東子細等、不遑具記、

廿八日、午天晴、此日、始奉幣春日社、并着直衣參、所々、共是攝政詔之後初度也、奉幣、無神馬十列等、祭之時可發遣是例也、早旦浴、依使遲參及已刻發遣、余着束帶袴、

着庭上座、國書下儀一人、陰陽師着半帖、又供贖物、祓儀如常、使取幣立八足南南、被了、持來幣、余採笏取幣兩段再拜、信返授幣、仰殊可祈申之由、使賜幣退下、相卒小使出門了、余還昇堂上了、使賜厩馬一疋、路頭爲騎用也、

使、上野守藤原高、保安例、氏職事、阿波守邦忠、勤之、依彼例用氏職事也、陪膳、伊與守源季長朝臣、

奉行、散位藤原經泰、

陰陽師、國書頭實茂在宣、

今日奉幣檢先規所奉遣也、保安例正月蒙內覽宣旨、三月被下關白詔、其後四月梅宮祭奉幣、其以前無春日奉幣、雖須逐彼例、同四年正月補攝政、傳國之後、同四月梅宮祭、日記云、應德大隆攝政、嘉承知足院殿、等例、奉幣春日社之後、被口他社幣、仍今日不奉幣梅宮社、只修由祓、未奉幣春日之故也云々、同月八日有奉幣春日、以之思之、攝政之時三ケ度其例已炳焉、加之、思事理不可依攝政關白、只受長者印之後、軍前可有奉幣也、況攝政之時指而有其例哉、仍兼日間日於在宣、今日軍吉之由擇之、強出仕以前可奉遣也、



直衣出仕事、依、無、日、次、自然遇引、

未刻、人々來集、申刻、着、直衣、綾羅色指實、無、出、衣、又不、

宣下之後、直衣出仕之日、出衣帶、今度有、降、自、中門廊外方、

所恩、返、明日度例也、且年齡漸開之故也、

出、自、車、頭辨兼忠朝臣獻履、右番長、執、前、近、經、奏、々々

寄、月、之、例、隨、身、直、先、是、右大將良通、少將伊、三位中將良

經、殿、上、人、也、

經、殿、上、人、也、

經、殿、上、人、也、

經、殿、上、人、也、

經、殿、上、人、也、

經、殿、上、人、也、

經、殿、上、人、也、

經、殿、上、人、也、

經、殿、上、人、也、

經、殿、上、人、也、

經、殿、上、人、也、

經、殿、上、人、也、

經、殿、上、人、也、

左近番長秦賴武、

右近番長秦兼助、

已上揭衣壺胡錄垂袴、

次余車、毛車、々、副六人白張平禮、

次下臚隨身六人、

次雜色十餘人、

次大將居飼舍人各一人、舍人朽葉、

次前駟四人、衣冠、

次大將軍、隨身雜色等在、

次三位中將、前駟二人、衣冠、

次扈從殿上人三人、

頭辨兼忠朝臣、

左兵衛權佐定國、

抑、大將中將等扈從事、同隨身車事、兼日口口卿忠親、

經房、其狀云、先例直衣出仕公卿不從、而嘉保度公

卿濟々扈從、知足院殿爲中、納言在其中、今度不可件他公卿恩息兩

人相具、叶、物儀、歟、而其車毛車歟、網代歟、其隨身

布衣歟、褐衣歟、相計可被示云、恩息兩人相伴事、

三卿、同、車隨身事、  
忠親經房等卿云、毛車隨身褐等可宜、可准、春

日詣之儀、主人毛車、扈從網代、尤無便歟云々、此條似「愚案」、

雅賴云、網代車布衣隨身可宜也、今日就兩卿說、

於門前稅駕、頭辨獻沓、昇中門、候上達部座、以定能卿入見參、良久不歸來、不堪不審、以伊輔（近臣也）問之、以件人示云、御對面可候之樣承之、仍所相尋也云々、其後於依經親定能卿先可來之由、同人招遣之、歸來云、只今御雙陸之間也、然而一定可有御對面之由所承也、一昨（日）幸伏見、今日可有還御、而依可有御參、俄當日還御、又去夜令剃御髮、仍存其旨之由、女房語之、而只今中間之故靈所遲々也云々、余云、自本承御所中間之由者、早以可退出、必非見參、而承可有御前召之由、數刻祇候、還以為恐、今日於內裏可有種種公事、若有尋者可申此旨者、定能卿走來云、只今重取御氣色之處了兼日せ口て被候歟云々、然而參入之後已經一時、又殆欲及夜漏（于此時日已欲沈西山之間也）、仍即以參內、昇自小板敷、經上戶參御所、暫候東面方、女房來告召之由、仍參朝餉方、主上着御

御引直衣、小時余退下宿所、（四子）改着束帶、出上達部座、（殿前見）見吉書、先藏人方、（頭右中辨兼奉朝臣、臨時公用）次官方、（權右中辨基親朝臣、讀岐國年料米）共無家司申次之、是又例也、其後歸入解脫、大將中將依着直衣不候此座、各差膳、兩息歸九條亭了、余依吉日始宿仕直廬事、兼日仰家司右少辨親經、職事兼時等、令催口、指圖在別、鋪設自家渡之、修理事藏人方（親經同行之）致沙汰、不足事自家又令汰汰、此日、初齋宮御禊前駈定、并女官除目也、上卿通親卿兼行之、定文除目等各內覽之、女官除目、與侍掌侍各一人任之、廿九日、丁天晴、已刻、着直衣參御所、午刻退出、前駈八人、毛車如昨、但前駈衣冠也、共殿上人少納言賴房一人也、

右文治二年春一冊墨付百拾八枚者陶化家古筆之本被懇望松殿右幕下道昭卿被摸寫焉畢虫拂之節爲後證加老筆不可有外見者也

慶安二年（己丑）季夏仲旬 陶化翁〔花押〕誌焉

玉葉卷第四十四終

玉葉

卷第四十五

自文治二年四月  
至同年六月

百七十八

文治二年夏

四月

一日、戊申〔天〕晴、此日、松尾平野等祭也、平野上卿源中納言通親卿、辨頭右中辨兼忠、使少納言賴房、御禊之間、余雖可參候、今日凶會日也、余未參、如此公事強雖不及憚、又依不可事闕不參入、松尾行事辨親經申、內侍不參之由、頭左中辨光長參內、可申沙汰之由召仰了、又平座上卿左衛門督實家卿、參議源宰相中將通資云々、此日、山階寺所司等、爲別當僧正使來、付辨別當光長申一條々事、依神事不參家中、候近邊、所申之事等、皆悉可仰遣賴朝卿許事也、仍仰可進解狀之由、又御寺末寺大學寺在嵯峨邊爲仁和寺宮被押領了、可被止彼濫妨云々、件事自是爲觸遣彼宮、召遣隆通阿闍梨了、件僧在嵯峨邊候彼宮、又光長朝臣兄弟來余邊者也、此事、仁和寺宮所行甚不當、若不被知子細歟、仍先所觸遣也、

二日、己卯雨下、早旦隆通參上、在光長、仍遣解狀仰含子細了、此日梅宮祭也、奉幣如恒、先浴、依雨於中門一拜之、陪膳大弼資泰朝臣、奉行〔職事〕信光、兼帶陰陽師主稅助晴光、依爲春日祭以前、不立神馬十列、是先例也、今日召右府生泰兼次、賜馬、召前先令騎之、自院被遣之者也、仍殊爲饗應、寂前所賜也、此日召圖書頭在宣、問禁忌月修造築垣下小門并織戶等、有憚哉否事、申云、本文分別門與戶、而於築垣下小門并織戶等者、非門即戶也、仍禁忌月新造修共無憚之由、先達所注置也云々、可進證文之由召仰了、藤中納言定能卿來、良久言談、密語、一日出仕之間、於院無御前召之間事、藏人辨親經來申一條々事等、賀茂祭女使命婦事、陰陽頭宣憲女子、內女房日來辭退、今日頗有領狀之氣、尤神妙云々、去廿八日余祇候內裏之間、依所司卜定事傳宣憲、參候陣頭、以親經召仰子細之間、頗伏

理云々、又申行幸之間事、

三日、庚(天)晴、右中辨基親初齊宮行事辨來、申行事所并本

宮用途不足之間事、法印被來、此日被歸白河、暫可

被經廻云々、

四日、辛(天)晴、初齊宮行事辨經親來、申雜事等、大

外記賴業參上、依今朝召也、余召關所調之、來六

日可有除目、光長朝臣御仰而於直廬可<sub>レ</sub>行之由存

之、攝政初度除目、檢先例之處、寬仁於直廬行

之、但依任大將、歟、保安又<sub>レ</sub>准賞坊官於直廬

行之、凡於踐祚同時之攝政者、最前行即位叙位、仍

於除目雖不可<sub>レ</sub>行直廬之儀、保安例猶如此、中

間蒙攝政詔之例、寬仁又爲直廬儀、各雖有其故、

攝政最初之除目、未見陣頭儀、仍今度縱雖無勅

任、准彼兩度例、於直廬可<sub>レ</sub>行之由所存也、且又有

所見哉否之由尋之、賴業申云、非初度、又無勅任

之除目、於御直廬被<sub>レ</sub>行例、所勘出也、即注進之、

其外又寬治元年雖無勅任、於直廬被<sub>レ</sub>行之、旁以

無異議事歟、仍每事可<sub>レ</sub>催具之由仰了、其後大將

受左傳、此日、隨身賴武兼助等參上、各召前給馬、

五日、壬(天)晴、慶賀之後、不參御堂、仍今日不臨講

筵、大將所參入也、光長依脚病明日難出仕之由

申上、仍爲用意兼忠親經等可參之由仰遣了、先是、

以親經舉昇殿人、明日除目家司一人候申文座之

故也、宗賴朝臣、基親朝臣、兩人之間可<sub>レ</sub>在勅定者、

保安四年、故殿實光初陞之間可<sub>レ</sub>在勅定、此日、基親々經等申

條々事、多是賀茂祭、并初齋宮之事也、

六日、癸陰、此日於內裏直廬始行臨時除目、雖無

勅任、依爲初度於直廬所<sub>レ</sub>行也、蓋先例也、于細

四日、午刻、奉行職事頭左中辨光長朝臣持來申文、氣以

申、須於內裏宿廬覽也、然而撰申文之間、自

經時刻歟、余雖早參仍於里第所<sub>レ</sub>見也、基親親經

等來、申成功之間事、不能具記、未刻、著直衣、毛車

衣冠、隨身攝冠、初任之節、先例多如此、就相仲右大將、束帶

中未乘始綱代車之前、所用毛車也、

參院、候上達部座邊、以左少辨定長入見參、歸

來傳仰云、此一兩日有咳病之氣、仍不能面謁云

云、余以件定長、奏今日除目任人之間事、光長朝臣共

付目錄、定長歸來、只仰可<sub>レ</sub>計沙汰之由、余披目錄、

於定長、定長歸來、只仰可<sub>レ</sub>計沙汰之由、余披目錄、

加恐點、此定可<sub>レ</sub>行歟之由重奏聞、是緒任等也、偏讓勅

之故、其中神祇副主稅頭等事如何、若欲慮不決者可<sub>レ</sub>被

問二人々歟者、歸來仰云、早任合點可<sub>レ</sub>計行、能可





之故也。退復座、拔笏置申文等座前、如本引寄硯、申文在硯與摺墨染筆、二卷共指、各拔之、置之、先披見申文等、而引披見之如何、先可任之申文等七八通許、並置硯上、也、不可任之申文等置硯北方、也、又有分置座前之文、不知何文、若皆悉置了後披置折紙、取綴紙、先書神祇官、堂御流書他人不書之、次書任人、如此次第任了、書年月日兩三反覆勘之後放與、更自與卷之置硯上之後、取笏候氣色、余目之、更摺墨放除目與餘紙端、取放區硯北、方餘紙也、書叙位、〔逆〕上三叙之、了、書年月日一卷加、置除目之後、更披申文等、一々懸勾置硯下方、也、及三通之時、取不可任之申文、在抽書、一通破其與、他之不可任之申文等、件申文、設紙捻結之、更披申文等、一々指加之、皆悉指成文了、乍置硯北結固其緒、真結結之、以刀切緒餘、結目引墨如例、成文可調首、而置硯北、不可任之申文、并今一撤硯已下同置柳宮北、登壇紙等在成文北、取除目叙位、盛件柳宮、擇笏押硯已下雜具并成文殘文等於北方、取柳宮、伺氣色、進來與余、々置笏取叙位除目、不取、置前、執筆取空宮、復座拔笏、此間、余披見除目叙位、而文字一字有相違、仍

返給、密々給之、擇笏之儀略之、令直了進之、余取之置前、次如本納硯已下成文成殘等次第引寄了、揖退下著本座、次余召親經、仰清書上卿可召之由、親經退下、告實宗卿、在公卿、即件卿參上著端座了、余目之、實宗起座經廣庇來余座前、執筆圓座北方也、余置笏叙位除目各少披見、一度給之、實宗又置笏取之、副笏揖退下、次公卿等退下、宗家卿中、問退出了、於休所披除目、是定例也、此間、余起座歸入了、其後成文成殘等文等取入直廬了、又外記覽除目清書、見了返給、文武有、其後及曉天、又持參除目草、執筆所書之、〔留之〕余歸入之後、檢非違使宣旨以親雅、仰請書、上卿須給除目之次仰之、而忘却、依親雅申驚仰之、尤至思也、奉行光長依病退出、示付親雅云々、除目了、大外記師尙來悅主稅頭事、又大夫史廣房來賀子息兩人慶事、參入公卿、

中御門大納言、宗家、早出、右大將、瓦通、左衛門督、實家、大宮中納言、實宗、早出、源中納言、通親、右兵衛督、隆房、執筆、源宰相中將、通實、

通資卿參入不定、仍清書執筆可相兼歟、將又就近例辨官可書歟之由、豫光長朝臣申事由、余仰云、可問例於外記、々々勘申云、保安四年例、執筆清書相兼、可謂吉例云々、仰可依彼例之處、通資參上、仍不及此議耳、

奉行、頭左中辨光長朝臣、

持參續紙職事、五位藏人親經、

清書上卿、權中納言實宗卿、

參議、源宰相中將通資、

今日、公卿議定、

神祇少副事、定輔勅准據例申、自四位可任少副之由、基親爲五位上臈申、任少副、理運之由、

左大臣申云、無四位任少副例者、基親拜任穩便

歟、親雅行向同之、

中御門大納言、左衛門督、大宮中納言、源中納言、源

宰相中將等申云、就上臈被任定輔、何事之有

哉、雖五位相當官、自四位任之、傍例已多、就

中有「自」五位任神祇大祐之例、尤可被准

據歟者、此通親申云、位高官下無其妨、之由見唐令、彌無其難歟云々、

右大將、右兵衛督等申云、自四位任少副、已無

其例、所勘申者皆准據例也、基親爲五位上臈被

任少副有何妨、強被求非例哉者、

愚案同此議、然而人々多舉定輔、仍輒難任基

親、仍退爲奏事由、今夜不任之、

主稅頭事、陰陽頭宣憲、大外記師尙、大博士師直、醫博士信康、明教信弘等申之、

左大臣申云、各所立申、其理可然、退秋除目之時

可被任歟、

中御門大納言、左衛門督、大宮中納言、右兵衛督、源

宰相中將等、舉申師尙、其上兼申師尙有系惜之

由、

右大將申、師直信康之間可在御定之由、源中納

言申、師直有其理之由、

重仰一同可申切之由、

此度一同舉申師尙、右大將獨申狀同前、仍任師尙了、

今日執筆不審作法等、

一不知申文、就折紙皆悉任了之後、更勾申文、

事、此事甚奇異作法歟、可謂未曾有、

一成文勾懸小狀不懸其名事、諸司奏諸道舉等之類、懸小狀者例也、至自解

者懸名上也、而皆懸小狀尤失故實歟、

今夜宿仕、依明日行幸也、大將同以宿仕、今日除目

裝束在指圖、



七日、<sup>寅</sup>自夜有雨氣、午上間瀝雨、及晚天晴、入夜月明、此日依御方違幸左大臣大炊御門宮小路亭、余攝政之後、依爲初度行幸、騎馬供奉、此廿年來未曾騎馬、今日始騎之、中心不悅哉、午刻、先着直衣參御前、主上出御、數刻遊戲給、右大將同祇候、及申刻退下直廬、此間、右中辨基親朝臣來申、條々事、又以藏人左衛門權佐親雅申、神祇副主稅頭等、人々申旨於院、<sup>午刻參今熊野申刻歸來</sup>、聞食了之由有仰、又前源中納言雅賴爲仁和寺宮使來、高野山濫行之間事也、即以件卿問御寺作事之間事於前長者、及晚歸來示報旨、丹波國辭退了、於今御寺事不可知給云々、及晚親經來申、行幸供奉人散狀、左大將依不參、重仰可加催之由、又申云、攝政詔書未覆奏、今日可申、行其事之由、外記所申也如何、仰可申行之由、兼燭著束帶、伴兩息、<sup>大將自去夜宿侍、中將自九條參仕</sup>、參御前方、予居殿上御倚子前、<sup>其所無疊、尤不敷、仍仰召</sup>、召親經、仰詔書覆奏可早行之由、親經歸來申云、中御門大納言被申云、若此公事、外記兼日可相觸也、卒爾申上條尤奇怪、仍不能奉行、者、予答曰、外記兼不催申、雖有懈怠之咎、事更無煩、強不可及、兼日之御案、

歟、加之、微臣候內裏之時、可被行此事、<sup>爲御也</sup>而明日退出以後暫有難出仕事、仍必今夜可被行也、猶有御尊、右大將所候也、以後欲勤仕如何、親經又歸來、卒爾之間召遣如次第者、定經時刻歟、大將殿御勤仕、又何樣可候哉云々、<sup>大略不被存詔書覆奏儀、頗不足言</sup>又答云、外記兼日催大將云々、而依有上臈御參、一旦避申歟、於今大將早可勤仕也、更不及異儀者、<sup>大納言不案覆奏之儀、尤不便、仍爲稱大將被催之由、令謝彼違恨也</sup>即大納言起仗座、排伺中門廊邊、大將相替着陣、行詔書覆奏事、小時右大將進弓場、付親經覽之、<sup>杖、</sup>親經取書狀入無名門、昇小板敷、跪候長押下、予同之、親經膝行昇長押、<sup>入自第一</sup>指寄杖、予以左右手、拔取文置前、親經取空杖、遂巡候長押下、予披見文、<sup>其儀如常、了、無禮紙</sup>召藏人、々々業長來仰、查御座御硯可持來之由、藏人特來御硯宮、入自上戶、置予前、<sup>白元入予磨墨</sup>染筆書御書、<sup>公卿連署之典、半號之典、一字許指上書可字</sup>書了如本卷之、<sup>加</sup>禮紙二三尺許突遣、親經置杖進來取書、引廻下退下、加杖揖退下、歸出無名門代返授上卿、々々懷中笏取書、先賜杖於外記、開見御書有無之後、卷之賜外記、<sup>外記如本</sup>歸仗座了、次予召親經、



親經持參行幸日時勘文、候三板敷前地、予目之、親經昇三板敷并長押、獻日時、不、入、爲、予披見返給、親經仰召仰及留守人、中納言藤原朝臣、(定能卿)左少辨定中、仰召仰及留守人、長、近代其人實不、案內、只以、虛言、仰親經向仗座、仰右大將、次又召親經、問行幸具否、申云、公卿以下皆參、但左將未參、定輔有頌狀、重催遣了者、予起座參朝餉、召經家朝臣、令奉仕御總角并御裝束、今一人女房奉仕之、即經家朝臣、臣愛物也、發召親經仰、無御絲鞋之由、親經云、近代不候者、仍御草鞋仰、可令持候之由、其後暫相待、內侍遲參、入之後、予出鬼間、召親經、問定輔參否、申云、依頓病、申不可參之由、甚勿論、然而忽依無他計、任例仰、可令渡候右次將之由、三十人、次將一、直山洞、不動、仕、中、公事任官授位、訴訟、斷、偏在、注、島、格、動、不、依、朝庭拜禮、是以不、仕、宜哉、即歸參朝餉方、天皇出御南殿、內侍二人相從前後、前內侍取型、後內侍空手、實劍指坐以前年、來之例如此、於御殿額間長押上、親經持來御草鞋、寸法依不叶空持歸了、仍主上御徒跳、令、御、計也、右中將實教付前內侍、右少將成定付後內侍、予取主上御裙、親經又取予裙、取、御、草鞋、臣、死、事、皆、人、頭、所、役、也、而、光、長、有、偏、偏、思、加、出、出額間、經二棟廊前緣、及南殿北庇東面妻戶同庇等、當御帳後主

上立留御、御路敷、遙道、件、遙道不、數、兩面、太見苦、近代例云々、自今以後儘可、數之由仰之、自御帳後戶、立南庇御帳東西間、次主上入同戶、從御帳後、立御西間母屋、南、余候御後方、西、此間、陰陽頭宣憲朝臣奉仕御反間、退出賜祿如例、此間引陣、次主上令立御帳前、給、經、御帳與、母屋四柱、同、今、立、底、給、也、候御帳西間南庇邊、催將可渡之由、右將渡左、經、次公卿列立、暫、遲、之、次聞司奏、次鈴奏、少、納言、予鳴笏示勅答之由、如常、次倚御與、風、泰述良經等卿離列傍之、御與昇居階間簀子、宰相中將泰通卿昇自御與西方、跪簀子、置弓、經御與與長押之間、先開簀戶、入自中間、取御璽、西內侍持之、尋常儀上、立、御帳前、之時、又在左、而實經未歸座、仍爲、重、置、前行、內侍雖持、之分立之時、猶守舊規、在右相待、實作歸座之心也、依之上、攝內侍在右、遠、案、御與退候西方簀子、次主上乘御、如、常、余參進奉扶持之、疊入御下重尻於御與中、之後歸居本所、次泰通卿閉簀戶、退降、先、是、昇、下、經、南庇、出、東面妻戶、於、東階下、著、靴、宗雅并前驅一人令著之、他前驅在中門外、御與過給了進行、其後大將於中門、仰御綱一如例、御與出左衛門陣了、予於同門下、騎馬、懸平緒於劍柄、揮下重前於帶騎之、入、爲、於、馬、前、按、供奉腰與之後殿上人前、其路自洞院入、入、經、於、右、手、

西大路ニ北行、自<sub>二</sub>一條大路<sub>一</sub>東行、自<sub>二</sub>洞院東大路<sub>一</sub>北行、自<sub>二</sub>大炊御門〔大路〕<sub>一</sub>東行、富小路ヲ北ニ折テ、至<sub>二</sub>左大臣亭東面四足門<sub>一</sub>、余供奉儀、

陣中隨身爲<sub>レ</sub>先<sub>二</sub>下臚<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>松明<sub>一</sub>前行、二行、馬副十二人相<sub>二</sub>隨馬後<sub>一</sub>、二行、皆取<sub>二</sub>松明<sub>一</sub>、其上臚二人張口舍人著<sub>二</sub>褐冠<sub>一</sub>結市比、副馬雜色一兩人在<sub>二</sub>馬副後<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>持<sub>二</sub>梟也<sub>一</sub>、晴時不可<sub>レ</sub>具、於<sub>二</sub>一條町辻<sub>一</sub>上臚四人騎<sub>二</sub>移馬<sub>一</sub>、二行在<sub>二</sub>馬副<sub>一</sub>、左府生番長在<sub>レ</sub>左、右府生番長在<sub>レ</sub>右、皆番長在前、各取<sub>二</sub>加松明於<sub>二</sub>弓<sub>一</sub>、移馬居飼舍人在<sub>二</sub>其前<sub>一</sub>、下臚隨身爲<sub>レ</sub>先<sub>二</sub>上臚<sub>一</sub>、在<sub>二</sub>馬後馬副前<sub>一</sub>、布衣烏帽舍人二人副<sub>二</sub>馬口<sub>一</sub>、

予於門下一々馬、下二々襲前一直緒、改著淺履入  
門、昇中門廊外、經透渡殿并南殿南庇東面妻戸、  
候御帳東間邊、泰通卿參上、開疊戸取預授兩内  
侍、次予參進御輿下、主上下御、予奉扶持之令立御帳  
前、給御裾、予退候御帳西間庇邊、次泰通卿閉疊戸  
退下、次昇退御輿、公卿將加列、次少納言鈴奏、次名  
謁、或件名謁、還御時有之、於旋所無之、次主上入御、内侍  
理之所至、已及夜漏、何無其儀哉  
候前後、予取御裾、其儀如例、以寢殿北面爲御  
在所、南面不懸簾、擬南殿北面立大床子、擬御

殿、御乳母以下女房等祇候、予向直廬方、豫敷<sub>レ</sub>疊、  
燭、藏人力沙汰奉<sub>二</sub>東面北門中寢殿良方<sub>一</sub>也、兩息同來、各  
不<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>裝束<sub>一</sub>、乍<sub>レ</sub>居休息、一寢之間、人告<sub>二</sub>鳴鐘<sub>一</sub>、伴兩息  
參<sub>二</sub>御所<sub>一</sub>時也、主上猶御寢、女房奉<sub>レ</sub>驚<sub>レ</sub>之、尋<sub>二</sub>經家  
朝臣<sub>一</sub>之處與<sub>二</sub>女房卿局<sub>一</sub>會<sub>二</sub>合閑所<sub>一</sub>、頗移<sub>レ</sub>刻、被<sub>二</sub>搜  
求<sub>一</sub>之後、適以參上、男女同時自<sub>二</sub>南北<sub>一</sub>參上、尤以揭  
焉、其後御總角御裝束了、此間、親經參上申云、可有<sub>二</sub>  
閑司奏<sub>一</sub>哉否、予云、前蹤忽不<sub>二</sub>覺悟<sub>一</sub>、且可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>近例<sub>一</sub>、親  
經曰、可有<sub>レ</sub>之由、相催之處、閑司申云、行在所無<sub>二</sub>此  
儀<sub>一</sub>云々、余云、無<sub>二</sub>體例<sub>一</sub>者可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>彼申狀<sub>一</sub>、又告<sub>二</sub>出御  
之由<sub>一</sub>、內侍遲參間、暫遲々參上之後、出<sub>二</sub>御南面<sub>一</sub>、內侍  
候<sub>二</sub>前後<sub>一</sub>、予取<sub>二</sub>御裾<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>例、公卿列立之後、鈴奏、次  
寄<sub>二</sub>御輿<sub>一</sub>、泰通奉<sub>二</sub>仕神璽役<sub>一</sub>、乘御後、於<sub>二</sub>中門內方<sub>一</sub>著  
靴、排<sub>二</sub>徊同北腋邊<sub>一</sub>、御輿過了後、大將仰御網如例於<sub>二</sub>門外<sub>一</sub>騎  
馬供奉、行列如<sub>レ</sub>初、御路又同、卽至<sub>二</sub>閑院<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>左衛門  
陣下<sub>一</sub>馬、經<sub>二</sub>中門并南殿東階<sub>一</sub>參上、而內侍未<sub>レ</sub>進、  
仰<sub>二</sub>職事<sub>一</sub>催<sub>レ</sub>之、小時參入、候<sub>二</sub>御帳左右<sub>一</sub>、次下御、泰通稱勤  
神璽之役如常次御輿退、鈴奏名謁又如<sub>レ</sub>前、次還<sub>二</sub>御本殿<sub>一</sub>、予  
取<sub>二</sub>御裾<sub>一</sub>、親經取<sub>二</sub>予裾<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>出御之儀<sub>一</sub>、予伴<sub>二</sub>兩息<sub>一</sub>歸<sub>二</sub>  
九條亭<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>四五條<sub>一</sub>程天明、其後就<sub>二</sub>寢<sub>一</sub>、

今日參入公卿、

大納言宗家、良通、

中納言實家、通親、

參議泰通、隆房、

三位良經、

宗家、通親不候還御、隆房卿終夜乍祇候不

候還御、未得其心、

八日、乙還宮以後即歸九條、此日依當大神祭、無

公家灌佛、先例件祭使立日爲神事、祭日非神事歟、而中古以來用神事云々、未見其證據、然而就近例爲神事、余同神齋、

九日、丙親雅親經等來、申條々事、其中宗行等殺害罪

名勘文親經持來、院御參籠今熊野之間、有憚子

奏達、十四日還御之後可奏之由仰之、又勘文之趣聊

有不審、可尋問之由仰之、又宗賴朝臣來申參賀

之間事、

法印所勞大事之由告送、仍遣人尋子細、付件使門

跡事附屬狀等被送遣之、附屬狀、小宣也、披見之處、落淚難

抑、但遂不可及、恐歟、聊有存旨也、今日法印新

修泰山府君祭、陰陽師在宣、此夕、光長朝臣申御寺

間條々事、依病不參、以兼時傳申、比夕、始乘綱代

車、今謂車加兼問、日次於在宣、著直衣冠、於門外乘

之、車副遣之、自九條辻遣返、於門外下車歸入

了、願信卿來、又左大辨兼光來、

十日、丁早旦、法印昨日所送遣之附屬狀、并次第文

書等返遣之、且副返札、又遣使者也、自今夕法

印新始祈、又以季長朝臣爲使尋問安否、明基來

授律於大將中將等、此日、右中辨基親來申初齋宮之

間雜事、齋王祖母春日重服之間、內々事無人于沙汰、

仍御稟可延引哉否之由、問本宮、至不可延引、不

可依祖母之重服之由、被申云々、抑、件女房初爲

教良子、而兵庫頭重俊爲養子、仍着養父服、不著

教良服、然間不著刑部卿賴輔又爲我子、其後存賴

輔子之由云々、然間、賴輔去比卒去了、爲重服、但不

觸穢云々、然而內々事不可離彼口入、仍猶神事

有恐、爲之如何、已上基親申狀、仰曰、若雖可延引、非一

兩月事、可及明年夏卜定之後、徒過一年之例、已

以未曾有、所詮齋王御身非服、於祖母之服者、殊可

被忌之、他女房等奉行雜事、宜歟、且又可奏事

由者、



十一日、戊午、自申刻許、女房病惱、發心地體也、

十二日、己未、雨下、親經申、祭出車之間事、其外有、條々、

又親雅來申、皇后宮使之間事、

十三日、庚申、(天)晴、今日物忌也、基親親雅等來門外、

申、雜事、親雅爲、院御使、申、除目之間事、丹波國給、

實教之間事也、元知行周防國、而被、宛、造東大寺、國司不可、執行、仍其替給、丹波、元前攝政國也、而辭退云、

以、元周防守公基、可、被、任、丹波守、周防國一向、

被、付、東大寺事、然而猶若可、有、國司號者、可、被、

任、公基兄公賴、實教男、侍從也、又不可、任、國司者、非、此、

限、可、計、申、者、申云、被、下、濟物免除宣旨之時、以、

造寺長官行隆并上人等連署解狀、被、下、宣旨了、然、

者國司專不可、罷入、歟、但爲、後代、尙被、置、假名之、

國司、又何難有哉、兩々共在、御定、若又可、被、尋、如、

左大臣、歟、此次能保朝臣以、讚岐國、可、令、任、相親、

者旨、先日除目之時申之、而依、事多、不、申、沙汰、此、

便仰、付親雅、且問、能保、且可、奏、事由、旨示含了、親、

雅歸來云、丹波國司事、只以、公賴、可、任、丹波、周防、

事忽不可、有、沙汰、元國司不可、改之故也、讚岐事、

任中改任無、謂云々、此仰尤可、然、元自所存也、然而、

依、權門申事、一旦令、聞食、許也、而此仰尤珍重也、他、

事有、如、此者、天下忽可、直立、歟、親雅云、任人只一、

人、何樣可、候哉、仰云、先々必有、加任事、諸司二分中、

不、及、沙汰、輩一人可、計任者、此日、藏人基定來取、

第三車牛、(轅)、先日親經、米綱也、此日、遣、陰陽師在宣并職事一、

人於川原、無、賀茂詣、有由、秘事、年來不、奉幣、仍、

今日又不、改也、又降、庭著、衣冠、遙拜、爲、謝恐之由、

也、

十四日、辛酉、此日祭也、使左少將定輔朝臣、以、職事兼、

時、遣、舞人半臂下重六具、依、使中將、去夜遣、猶今日可、遣也、今日使無、

御前召、只給、勅祿、近代例也、是又使所望云々、昨日、

親經所、觸也、余雖、可、參依、物忌、不、出仕也、

十五日、壬戌、早旦、卯一點、相、具女房、向、堂、今日相、當發、

日之故也、須、加持也、然而依、卜筮不快、參、此堂、

先々不動尊施、驗給、仍所、參也、然而午刻發了、尤遣、

恨、今日雖、可、歸、南家、依、無、術不、歸、又明後日相、

當吉田祭、余家其程太狹、依、神事、難、修、佛事之故、

自、今日、可、候、此堂也、仍不、歸也、

十六日、癸亥、天陰、自、昨日宿、堂、已刻、權右中辨基親來、

之由告之、仍歸、本宅、依、神事、於、堂、不可、聞、是以歸、本宅也、基親以、經、

奏、申、條々事、初齋宮之間諸國不濟事等也、仰、可、奏、



聞之由、即參院、歸來云、猶可召成功者、任御定、可沙汰、由仰了、又頭右中辨兼忠參上申、藏人所衆不仕事、又申、大和國依御園與坂戶牧、堪論事、各仰可奏之由了、又內藏頭經家朝臣申、一昨日祭、當寮官人依典侍出立、沙汰進代官不渡大路、爲向後、可有沙汰之由、儘可召出其身、又付職事、可申上之由仰了、申刻歸堂、入夜爲方遠、向隆房卿冷泉家、依京中無居所、借請日來所加修理也、元件家無井、仍今欲堀、而自明日、土公遊北、加之、十七日當太白方、堀井之吉日、明日之外無可然之日云々、仍今夜可違方、依無其所、且爲加檢知件家、乍乘車所立門邊也、依日次不宜、不宿家中、

十七日、甲鐘鳴之後歸宅、依吉田祭神事、不歸堂也、今日吉田祭、社頭事余家行之、氏家司光綱左京權大夫、職事賴高等差進之盃盤、菌等送之、又他雜事等家司催送之、又饗祿等自納殿遣之、此日依發日修百座仁王講、又語阿勝房、令受戒、然而女房發了、辰刻、其氣出來、已刻、如法發動、余依神事、不向、依爲堂中也、不審無限、終日終夜不減以外大事也

云々、返々、歎思不少、入夜隆職密々竊謁之、有尋問事等、今日可有北政所始事、而檢先例、後二條殿信長女、中攝政白川、等例爲四月、依不吉延引、

十八日、乙巳刻許向堂見女房、自今曉雖溫氣散、辛苦不止、食事不通、氣力殊憔悴、甚爲歎、仍明日可加持、又可令轉讀一日大般若、件用途光長朝臣一向所申沙汰也、此夜宿堂、

十九日、丙天晴、此日、女房瘧病平愈了、智詮阿闍梨

自寅刻、以三千手陀羅尼祈之、又請卅口僧、一日之內轉讀大般若經、發願已畢、依僧部源實通也、其後又派實參入、仍勸結願、導師領被物了、

以六口僧、令轉讀藥師經、依佛法之靈驗、時刻早過、瘧病即愈、悅思不少、各賜布施、結願了、驗者薄色生衣二領、重生單、又牛一頭、左府生忠、大般若各布施一裘、結願導師有被物、又中間給僧前、樂師經

各布施一裘也、僧徒各分散了、申刻、五位藏人定經來申、子細在條々事、目錄酉刻歸南宅、余先是在堂、有病氣、

大略瘧病歟、女房平愈悅思之處、自身又以病惱、不能左右、境節人口不安歟、然而內心不過、始終之事不可依、一旦之病歟、宗賴朝臣申參賀之間事、

又後日可分侍藏人所之間事、同可奉行之由仰

宗賴朝臣、此日、覺成法印始來、東寺真言之名匠也、  
廿日、丁天晴、今日雖無發動之氣、神心猶不快、持病  
之所致歟、今日親雅來申、條々事、大藏卿宗賴參入、  
申、待藏人所可被分之間事、

廿一日、戊〔天〕晴、基親親雅親經等來、申、條々事、此  
日、余病發動、爰知瘡病、苦痛無術、爲之如何、驚問  
占、其趣強不重歟、典藥頭定成自南都歸來曰、別  
當僧正之腫物加灸針之後無異事者、今日以國  
行遺訪了、

廿二日、己初齋宮御禊日次事、元所擇申十七日廿三  
日等也、而十七日甲子、支干依叶不吉例、可被  
用、廿三日之由議定了、而諸國難濟、成功不足、云、本  
宮雜事、云、行事所事、都以闕如、枉可申延之由、先  
日基親朝臣所來觸也、余答云、儲日有哉、申云、廿  
八日晦日等也、予曰、件兩日共有難、廿八日重日、晦日雖  
專不可延引、於事之闕如者、更非此限、早奏事  
之由、可隱御定者、基親經奏聞、歸來曰、延引何事  
有哉、且可計沙汰云々、予可問兩日之優劣於陰陽  
道之由仰之、後日基親又來觸曰、宣憲勘兩方例、  
申可隨御定之由、季弘重日專可忌避、晦日申何

難之有哉之由、余曰、季弘申狀有謂、但尙仰可問濟  
憲業俊在宣泰茂等之由、今日來觸件等輩之申旨、雖  
其狀逾一決不詳、仍仰可問兩日及五月等例於外  
記之由、基親乍候于此亭、以書遣賴業師尙等之  
許、待請文祇候、哺時師尙返事到來云、雖兩日共有  
例、其難尙不輕、五月兩度之例、昌泰取吉、或吉或凶、  
雖一向難舉用、今所欲被行、四月吉凶相交事同  
五月、然而辨近例之凶、用上古之吉、以之思之、嘉  
應縱雖不快、昌泰已爲佳猷、被用五月、何難之有  
乎者、所勘申叶愚心、尙待賴業請文之間、戊刻到  
來、只勘先例、不述子細、余仰基親曰、以陰陽  
道、及兩大外記之勘狀、今月之兩日及五月等之間可  
用何哉之由、宜問左大臣內大臣權大納言忠親卿  
等者、基親退出了、

廿三日、庚〔天〕晴、自今曉始不空羅索供、季弘之沙汰、  
不勤供、輕輒入道沙汰、大威德供、經房觸之沙汰、等、又慶智  
僧都率五口之番侶、轉讀大般若經、件僧都之先師覺智  
餘三代之間勸此役、每度有自今夜始愛染王法覺成注  
効驗、思彼到事、所請定也、僧正、故殿故女院  
僧四口、光長、智詮、阿闍梨、番僧四口、等、余精進祇候持  
朝臣之沙汰、干手法、宗賴朝臣之沙汰、佛堂之佛前、終日念誦、依卜筮不快、不召驗者、修

法供等皆在本房、眼前之祈大般若一事而已、而至三時刻之間、雖有其氣、汗快出、病氣忽散、佛法之効驗可謂揭焉、就中於驗者之加持者新顯佛德、古今多矣、偏依般若之一德、忽除愚老之衆苦、佛法之可信向、以之可爲證、不堪感悅、賜纏頭、余衣一房取之、又引牛一頭、依物忌不離、隨自余僧五口各賜正絹、入夜覺成法印參御加持、宿房在仁和寺、老僧之遺日許、及深更智詮御加持、行々程依無心、發願之仰之、

抑、今日基親朝臣來申、人々申狀、一同可被用五月之趣也、余曰、早可奏、兼又內々可問日次、可抑也、基親又曰、元以今日爲點地之日、可延引哉、余曰、示合上卿、可進止者、宗賴參上申、參賀之間事、來廿八日〔上〕重日之難與五月之忌、輕重如何、又分侍藏人所事、同可忌重日哉之由、可問忠親雅賴等卿之由仰之、

廿四日、幸未晴、巳刻、藏人次官定經來、依昨日余仰云、依物忌候門之和氣使歸洛事、給文書於上卿之後、仗議外、以人仰之、太爲懈怠、早可催促、兼又宿納石清水之黃金、付彼使、可被送本宮哉之由、同可有議定、存此旨可申沙汰者、定經唯諾退出、未

刻、頭右中辨兼忠朝臣持來平野恠異之文、依物忌不披見、仰可奏之由、兼忠退出、入夜宗賴朝臣來申、忠親雅賴等申狀、忠親向其亭、雅賴以書札問之、忠親申云、重日依先年之吉凶避之也、而此兩三代皆爲不吉、仍尤可被忌避、歟、被分侍藏人所事、雖不可似參賀、猶被忌避、有何事哉、雅賴卿云、重日者不忌吉事、仍不可有禪云々、忠親卿申狀叶愚案、明後日中將家房入道闕爲拜賀可來云云、其事可申沙汰之由、并申次可動之由、仰宗賴朝臣、

廿五日、壬申〔天〕晴、早旦、大原聖人房、來、余大將中將女房姬御前皆受戒聽聞之間、信心發起、不覺之淚數行、受了給小布施、又靜賢法印來談世上事、今日、基親々經等來申條々事、義經行家徒黨在京中之由有風聞、但不爲信用者歟、中將家房拜賀明日延引、來廿八日云々、

廿六日、癸酉中御門大納言被來、余依所勞餘氣、不謁之、親經來申條々事、奈良僧正祈三ヶ日修泰山府君祭陰陽師了、今日送撫物於奈良、使侍兵衛尉重經也、



廿七日、甲親雅申三條々事、此次仰二位大納言息侍從拜賀之間事、申次事、湯濱對揚事、件對揚事、一人于息、實首五位大臣及余等干息如此、此外無例、仍不可必然事歟、亞相息取不可然、只依爲三人申事、仰付職事一計也、且非推舉之儀、只遣人申事之由

廿八日、乙雨降、此日相具女房、始渡冷泉萬里小路家、右兵衛督屋敷宅也、而依爲內裏近邊、借之、日來加修理、去年大地震之後破損殊甚、仍始如新造、舍屋垣垣皆悉仰、家中男共、乘燭出行、寄車於寢殿南面、大將中將女房姬君、余皆同車、余乘後方也、仰、常途例不必同車、而故殿元永渡給從之時定例也、今度爲事之初度、仍准彼等例、所同車也、仍車尻不出衣、余外他女房不乘之故也、中將車々副六人如例、余烏帽直衣、前驅地下君達諸大夫相交、皆布衣、始渡御東三條之日、前驅君達諸大夫皆布衣、所道被例也、彼度保安二年三月被下、關白詔而年內依北政所意、無兩人御行之儀、次年春始有此儀也、相并十二人、在典、隨身上臈四人、布衣、侍胡、垂袴、是又流、騎移馬、出車三兩、用殿上人車、季經朝臣經家朝臣經二、各出衣如例、其後大將直衣、中將衣、同車、用、不引移馬、前驅二人、殿上人前越後守宗雅朝臣一人布衣、扈從、是大將中將等之共、其後隔數町、大將女房同渡、前驅二人、大將番長厚次一人在車後、出車一兩、家司季經朝臣連車也、到冷泉遣入車寄、寢殿階隱近此宅之間、大將等車自出、有屏風几帳打板等、兩息寄車傍、進退早來、爲寄車也、下車之後、同所寄大將女房車也、皆下了、先見廻

家中、所課等無過失、其後侍從兼良爲拜賀來、申次家司左京權大夫光綱、余於上達部座一謁之、爲賀、來、申次家司大藏卿宗賴朝臣、余出上達部座一謁之、有引出物一疋、府生兼兼次、左番長同和武、各著布衣、下臈一、於中門、中將取綱一拜、殿上人右少將顯家受取之、殿上人之間雖不可必然、依存禪門之所思、有此響應、加之、大將任侍從一拜賀之時、參禪門之御許、于時給疋馬、且爲報彼也、件中将付簡、湯濱對揚、頭右中辨兼忠云々、侍從對揚事、院仰云、可計沙汰云々、依無分明之仰、無對揚、又不必然之故也、

今日中將共人、右少將顯家、侍從公仲、騎馬御共、最後、惟賴、(衛府長中臣武友、)被具本府隨身四人、其外小隨身一人著布衣、侍從共殿上人、左少將隆保朝臣、但不居不諸大夫、親行、忠光、無衛府長、仍不被定、余隨身、然而非衛府長具、共例不分明、沈論、依余沙汰、任侍從、被、紫色、須存于息之儀也、先例皆知、此而雖示身之要、不存人之所思、爲之如何、今日御渡、前驅十二人、



前少納言有家朝臣、四位、宮內大輔盛房、

兵部大輔保能、前安房守有經、

治部少輔朝輔、散位忠行、重季〔子〕

經重、經家朝臣保季、季經朝臣

已上地下君達、但有家、經重、保季非君

達、然而先々如此役准君達所奉仕

也、

中務少輔兼親、

前馬助國行、

散位兼時、

前安藝權守經泰、

已上家司職事、

今日、余出行路之間雨止、其後又降、

廿九日、丙〔天〕晴、親雅來申、條々事、大將今日又心

地不快、若瘧病歟、不及大事也、

卅日、丁雨、頭來、光長申、條々事、親雅依服假不出

仕、初齋宮上卿辨勅使宰相事申、不能申沙汰之由、

仍可申沙汰之由仰、光長朝臣丁、又祈雨事可申行

之由同仰了、今日召忠武賴武等、令乘馬、賴武優美

令乘、仍欲給纏頭、然間馬臥被敷足、殆絕入、然

而即蘇生、懸僕從等向隨身所召醫師令見、賴基

晚頭前源中納言雅賴卿來、余謁之有示事、在、門生南都

邊之青女房有神託事、多演說未來事、粗有符合之

證、觸緣近日在家中、而一昨日地震之後、件女告云、

法皇重御惱也、六月十五、六日之間有云々之事、八

月廿一二三日之間、決定可有大事、殆可及御命

之危云々、事雖難信用、後日爲思合所申置也、

件女常示云、依託之神明不限一二社、本體卜天

魔所託也云々、凡時々所託宣之神明等、大有歎息

事、所謂法皇御悟不定、隨事有變易、御心不靜、如

此之間、天下逆亂不絕、實悲事也、神明有御

歎云々、事體雖不足信伏、依奇異事所記置

也、小時被參陣了、

此日、宇佐和氣使歸洛事有仗議、余攝政之後、初度仗

議也、而依非吉事、先有條事定、肥後守敦其後有和

氣使定、上卿中御門大納言、參入公卿八人、條事定通

資卿執筆、和氣使事同前、隆房讀勘文云々、

### 五月〔小〕

一日、戊朝間雨降、午後天晴、親經來申、最勝講事、又

有他難事等、大將去廿七日有病氣、又一昨日不快、

病體雖不重、隔日發動、疑發心地歟、仍自今朝、以智

詮令祈之、時過病愈了、仍給小祿、近日頻施<sub>二</sub>願德<sub>一</sub>、可貴々々、又權侍醫丹波經基令服桂心酒、令付<sub>二</sub>附子散<sub>一</sub>也、付背余發心地之時、施此療治有驗、今日又然、依<sub>二</sub>重疊<sub>一</sub>不堪感、給小祿物、

二日、己天晴、親經申<sub>二</sub>寂勝講間事<sub>一</sub>、又申<sub>二</sub>他事等<sub>一</sub>、光長朝臣申<sub>二</sub>數々條事<sub>一</sub>、又申刻、東札到來、有<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>等、入<sub>二</sub>夜宗家卿來<sub>一</sub>、又隆職卿來、此日、玄壽僧都來相<sub>二</sub>具弟子二人<sub>一</sub>、余依<sub>二</sub>暇塞<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>謁之、

三日、庚辰晴、定經來申<sub>二</sub>今日祈雨奉幣上卿不參之由<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>參右大將之由<sub>一</sub>仰了、大將催<sub>二</sub>僕從之間<sub>一</sub>、遲々及<sub>二</sub>晚參內<sub>一</sub>、秉燭之後發遣了、歸來先行事辨基親內<sub>二</sub>覽日時<sub>一</sub>、其後小內記內<sub>二</sub>覽宣命草<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>不可<sub>一</sub>持<sub>二</sub>來清書之由<sub>一</sub>了、此日、光長基親等來申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、今日可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>行<sub>一</sub>初齋宮御禊日事定、并點地、而依<sub>二</sub>上卿不參<sub>一</sub>、延引、大將雖<sub>レ</sub>勤<sub>二</sub>仕初齋宮<sub>一</sub>、上卿仍不<sub>二</sub>奉行<sub>一</sub>也、本上卿通親依<sub>二</sub>病惱<sub>一</sub>辭退之替、諸人厭却、于<sub>レ</sub>今不<sub>二</sub>領狀<sub>一</sub>、一所々領等事、自<sub>二</sub>關東<sub>一</sub>有<sub>二</sub>申<sub>一</sub>院之趣云々、高陽院、冷泉宮、堀川院、中宮等領、前攝政可<sub>レ</sub>沙汰、其殘餘可<sub>レ</sub>沙汰者、但此趣不<sub>二</sub>甘心者<sub>一</sub>、重可<sub>レ</sub>示之由云送、然而於<sub>レ</sub>中不可<sub>レ</sub>止之故、付<sub>二</sub>東札於帥卿<sub>一</sub>了、爲<sub>二</sub>無私<sub>一</sub>也、

四日、辛巳陰晴不定、早旦召<sub>二</sub>藏人辨親經<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>初齋宮上卿事<sub>一</sub>、光長朝臣昨日參院、不<sub>二</sub>申入<sub>一</sub>退出、而今日依<sub>二</sub>所勞不出仕<sub>一</sub>、返<sub>二</sub>上人々請文<sub>一</sub>、仍召<sub>二</sub>親經<sub>一</sub>所<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>也、即參<sub>二</sub>今熊野<sub>一</sub>、歸來依<sub>二</sub>御所中間<sub>一</sub>、不得<sub>二</sub>達<sub>一</sub>子細、僅雖<sub>二</sub>申入<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>御成敗<sub>一</sub>、只可<sub>二</sub>計沙汰<sub>一</sub>之由有<sub>レ</sub>仰云々、勿論、仍申<sub>二</sub>所勞之輩不及<sub>一</sub>譴責、左金吾來月營<sub>二</sub>亡室之法事<sub>一</sub>之由令<sub>レ</sub>申、始終奉行辭退頗有<sub>レ</sub>謂、仍先日時定、點地御禊等事許、可<sub>レ</sub>奉行之由仰<sub>二</sub>遣之<sub>一</sub>、只奉<sub>二</sub>點地不可<sub>一</sub>及<sub>二</sub>御禊之由<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>申、極以不當、仍重仰<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、已上親經御教書也今夜返事不<sub>二</sub>到來<sub>一</sub>、余爲<sub>二</sub>用意<sub>一</sub>、隆忠卿參勤哉之由、以<sub>二</sub>書札<sub>一</sub>示<sub>二</sub>入道關白<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>可<sub>一</sub>令<sub>二</sub>參之報<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>悅<sub>一</sub>、

五日、壬午晴、巳刻、基親朝臣申云、點地七ヶ月之中例、永承之嘉猷也、仍先日申<sub>二</sub>其旨<sub>一</sub>、七日可<sub>レ</sub>宜之由被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>之處、委引<sub>二</sub>見之<sub>一</sub>、彼度衆七ヶ月先洒<sub>二</sub>掃其地<sub>一</sub>之後御禊、隔<sub>二</sub>中一日<sub>一</sub>有<sub>二</sub>點地<sub>一</sub>、此外無<sub>レ</sub>例云々、仍今日可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>行<sub>一</sub>點地之由所存也云々、仍告<sub>二</sub>今日之由於<sub>一</sub>禪門、又以<sub>二</sub>定經<sub>一</sub>遣<sub>二</sub>隆忠亭<sub>一</sub>催<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>可<sub>一</sub>參之報、藏人方事、親雅依<sub>二</sub>服假<sub>一</sub>不<sub>二</sub>出仕<sub>一</sub>之故、便仰<sub>二</sub>定經<sub>一</sub>了、今日定經持<sub>二</sub>來宇佐和氣使歸洛<sub>一</sub>仗議定文、先可<sub>レ</sub>

問左大臣內大臣等、相具被申狀、可奏之由仰之、基親定經等參內了、今日、大外記師尙參上、申云、五月五日當午日之時、必有御馬御覽、先例也云々、依此申狀、忽見厩馬、今日、余依可參內、隨身等來會、上臈布衣冠也、不改其裝束、引御馬、仍乘之時撤劍也、申刻、余着直衣牛蒡車、前並衣冠、隨身上臈冠、參內、參朝餉、小時歸九條家、于時日未、沉西山、乘燭之後、女房大將中將等自冷泉家歸來九條、暫可經廻冷泉之由兼存之、而近日世上訛言、人口不安、非無怖畏之故、忽以歸此第二之間事、倉卒不及備威儀、以方違爲名、各用人車出家司職事車也、無前又侍在御供、其外武勇之輩少々令相具、依恐路頭狼藉也、今日旦以經奏遣帥卿示合世間物騒事等者也、今日、女院御月忌如例云々、

六日、未雨下、及晚止、光長朝臣申條々事、其中有離宮祭使沙汰祇園神人對捍、此事遂問注之處了、而猶所遣、仍重仰遣座主許了、遣問注記、儘可令勤仕之由仰了、此日以光長朝臣奏世上物騒事於院、歸來仰云、京中山々寺々、仰使廳可被尋搜、又可仰遣關東者、

七日、申、甲晴、離宮祭使祇園神人可令勤仕之由所申也、以理責伏之間、領狀歟、此五六年依件神人辭退、使每年闕如云々、親經來申最勝講僧名之間事、且定仰講師等奏院可廻請之由仰之、於聽衆者、延曆園城兩寺各問長吏、即申子細、與福寺分問遣別當僧正許、隨彼返事可左右凶徒事、今日爲光長奉行、以檢非違使章廣道爲使仰遣大理卿許、又以御教書賦所々了、今日、大夫史廣房來、申圓宗寺御八講、并初齋宮可闕如之間事、

八日、乙晴、此日離宮祭也、任例自政所送幣、又催送乘尻六人、在移余隨身下臈二人不足四人召勤之定例也、雖爲氏社十烈以前、依自取幣、不拜立之、先例也、又非神齋云々、然而忌重服人、光雅朝臣隆職等可出仕之由仰下之、光長奉行也、先日典大藏卿宗賴朝臣來、召離前仰雜事、又自女院有被仰下事等云々、入夜範季朝臣參入、有申事等、所勞之後未出仕、竊所參入也、聊有聞及事、爲告示所來也、此日、關東使首途了、親雅持來大宰府解、字佐宮、復籍事余返與文書、仰大辨可取之由了、

九日、丙晴、今日吉小五月、有競馬云々、余隨身



三人、右番長兼助、近衛友利、行弘、大將隨身二人、番長厚次、近衛武宗、入乘尻、友利行弘勝了、殘三人員了云々、兼助有現尾籠事云々、此日、基親申初齋宮之間事、光長朝臣來、余有仰舍事等、親雅來申大宰府解之間事、官申狀頗不詳、仍重可問之由仰之官申云、無帥大貳之時直付職事、近代例也云々、儘可申其年例之由仰之、十日、丁天陰雨降、基親參上、余仰、先日廣房申云、初齋宮事可闕如之由（之間）事、條々有陳申旨等、又召廣房宿禰、小時參入、各不可事闕之由召仰子細了、又親雅參上、府解事廣房申旨猶不分明、仍縱雖爲近例、用官人解狀、猶可付官大辨可申之由仰之、廣房申云、其狀載府裁之由、仍不能取上云々、余云、密々摺○京一作直、官裁之由可付官之由仰親雅、又余仰親雅云、近日天變頻呈、司天之所奏其徵惟重、加之、世上訛言、是又魔緣之所爲也、旁可有御祈、兼又炎旱涉旬、窮民愁深云々、云彼云是、尤可被修禳法也而諸國對捍用途闕乏、爲之如何、近例萬事被用成功、至此一事、何限嫌成功事、爲急用不可默止、且被定功國歟、若又可被召任官功歟、此外寶劔御祈三壇供自去年被始行、大略去冬以後一切無其沙汰云々、被用途同可

罷入件等用途事、早可被定仰下者、此日、親經來、定仰聽衆等偏可計沙汰、之由有院宣、先定八人、今二人難決、仍可在聖斷之由奏之、即歸來云、八人此定可宜、今二人猶可計請者、相計定仰了、法相四人、與福一人、延曆三人、（三輪一人）三井二人、此中古參五人、新參五人也、今日、定能爲院御使來仰條々事、世上物騷事、（義行々家等在射山并前攝政家中、仍可搜求之由事、又余恐一夜打歸九條亭之同一所々領事、余有押領之結事、已上儘可尋沙汰云々）、御返事畢、此仰次第不能是非左右、藤中納言歸參了、以書札示云、前攝政の可夜打とて被騷るは聞食しかと云々、凡如夢如幻、愁生聞如此事、可悲々々、

十一日、戊戌雨降、此日欲行祈雨奉幣、而自朝甘雨下、仍今日不行之、入夜頗有晴氣、仍明日可被行之由仰奉行職事定經、已刻、能保朝臣來、余召簾前仰世間訛言等事、能可致沙汰子細等、此次能保語云、昨日自院有召馳參、以丹後被仰下云、前攝政ハ殊糸惜ク思食人也、萬人云付虛言云々、尤不便、耻かましき事となき様可致沙汰、每事不可見放云々、良久之後退出了、此日、權辨基親參上來、初齋宮之間條々事、勅別當于今無其人、早可申



定之由仰之、季經朝臣、成定朝臣、親實、資賴、明日參院可  
已上有錄于本宮、人々也、奏云々、入夜親雅申云、依物忌不出仕云々、仍初齋宮、  
以香札示送兼時許、上卿事、可催源中納言、御祈事、尤可然、阿闍梨可  
召三全支、用途并其法等事、攝政可計沙汰之由有、  
仰旨、定長所告也云々、上卿事任御定、早可令催  
之、他事參入之時、可被仰之由仰了、內大臣息右中  
將公守今晚卒去、去二日向三宇治離宮馬場射笠懸之  
間落馬、左足踝上二寸許打折了、雖加種種療治、敢  
不得減、遂歸逝水了、人々翔不善、遂以如斯、入  
夜隆織宿禰來、密々謁之、

十二日、己天晴、親雅來申云、明日祈雨御讀經事、仰  
長者俊證法印之處、申可參勤之由、又云、可有  
堂童子哉否如何、余云、東寺作法不用堂童子之樣  
覺悟、如何、又申云、御祈事奏事由了、尤可被行之  
由有仰、成功之間事、并可被修何法之由、可隨  
殿下御氣色者、余云、且爲鎖上天之變異、且爲鎖  
天下之騷亂、可被修秘法、行何法可退彼殃  
哉之由、宜問大阿闍梨、山座主、全支也、用途事可申付功國、  
其上今度御祈料任官功一可申付歟、爲成卒爾之要  
也、又云上卿事、通親卿未申左右云々、余此次示

云、今日事等、奉幣并御讀經定、共皆免〔內〕覽了、參  
內之次各可相觸者、即歸參了、申刻、基親來申云、勅  
別當事、自本宮舉申彈正少弼長基、仍昨日雖未奏  
聞、又召物國々可付使廳使之由、依被催三十ヶ國  
許領狀、猶對捍國々又十餘ヶ國也云々、余云、少弼赤  
衣不甘心、只昨日四人事可奏聞、難濟國々事可奏  
事由、晚頭、親經來申云、御讀經之、事明日難叶、  
屋難叶之由本寮申故也、仍十五日之由勘了云々、入  
夜基親申送云、季經朝臣有實等可催勅別當之由  
有御定、難濟國事不可事關、暫可開其責云  
云、

十三日、庚雨降、此日列見、并初齋宮御禊點地、及祈雨  
御讀經等欲被行、皆以延引、依甚雨、廳屋漏濕、仍  
列見延引、依上卿辨別別當未定、并甚雨一點地延引、  
依雨降并葺屋懈怠、祈雨御讀經延引、基親來申、季經  
朝臣有實等稱服假稱申勅別當之由、余仰云、可  
問服假子細、又申成功之間事、親經來申最勝講僧  
名之間事、講師有辭退之輩、又本請之內、三論宗人漏  
了、尤失也、仍闕請可請彼宗人之由仰了、自今  
夜始佛眼護摩、仍精進、

十四日、卯〔天〕晴、親雅來申、祈雨御讀經、并公家御祈之間事、

十五日、辰〔天〕晴、辰刻、光長朝臣告送曰、於和泉國、

獨得備前々司行家了、北條時政代官平六儀仗時貞

相親者國人相共捕之也、天下之速報未盡、可悅可

悅、自今日於神泉苑被行祈雨御讀經、孔雀限以

五ヶ日、毎日口別三部轉讀之、東寺長者檢證已下廿口也、今日終日念佛、恒例勤也、

十六日、巳晴、申刻、著直衣、中御車、隨身、參内、參朝餉、

覽而向直廬、於上達部座有最勝講定事、頭右中辨

兼忠朝臣捧日時勘文於文杖持來、跪候前廣庇、余

目之、微唯更起、進來跪長押、膝行、指寄杖、余拔

取文、置前、兼忠退降長押候、吹余披見日時、如例、

如本寫之指置又如例、兼忠置杖進寄取文、退降

結申、宣蒙申云々、宣憲朝臣勘申下可結敷、可證之、余目之、兼忠卷文副杖退

下、次盛硯例文續紙等於柳宮持來、候、廣庇中

程、躰居、此事不可然、余目之、更起進居長押下、置柳

宮、拔笏撤硯續紙等、置例文於柳宮、爲面、膝行昇

長押、進寄引廻進之、余取例文置前、返給柳宮、

兼忠取之退居長押下、如本置硯筆、寫返續紙、此

余按見染筆書之、先可伺氣色、而無書了如、初盛柳

玉葉卷四十五 文治二年五月

百九十七

宮持來、余取之置前、兼忠取柳宮退歸、余披見了、指出置之、兼忠進來取之加盛柳宮、挿、笏取之、揖退下、次余歸參御前、小時退出、今日、不置脇息硯宮、定以前召兼忠朝臣仰六位并瀧口等不仕事、出仕以前光長朝臣親雅親經等來、示雜事、此日、行家首入洛、先是、能保朝臣送使申云、行家首渡大路、可給使驅、使驅、如何、余云、申院可隨仰者、又云、駿河二郎行家同賜取了云々、今日自關東送書狀於光長朝臣云、世上事殊可被計申之由、所觸示議奏公卿之許也、其旨可有御存知、今夜召宗賴朝臣、聊有告仰事、

十七日、甲午及晚雷雨、親雅來申雜事、宗賴又申雜事、行家首遣關東云々、今朝辰刻、奉幣春日社、陪膳資秦朝臣、奉行國行、使氏職事良清、陰陽師漏刻博士晴綱、依別願殊所奉遣也、自今日三ヶ日所奉也、明日明後日打付、自今日三ヶ日之間、讀心經千卷、三ヶ日之、此日進供御菓子、使右府生兼次、今日被行、列見、上卿通親卿云々、又有初齋宮日時定、辨御祓點地、今日雷雨、御讀經之驗歟、可貴、但其雨即止、頗不足歟、光長進春日社解狀、去十五六七三ヶ日金色虬

出來云々、仰可<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御占<sub>一</sub>之由、返<sub>二</sub>給<sub>一</sub>之、

十八日、<sup>乙</sup>〔天〕晴、兼忠、親經、基親、親雅、宗賴等各來

示<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、及<sub>レ</sub>晚兼光持<sub>二</sub>來大宰府解<sub>一</sub>、先日余返給府解也、余著<sub>二</sub>

冠直表<sub>一</sub>出逢、兼光進寄進<sub>レ</sub>之、余取<sub>レ</sub>之披見<sub>二</sub>此間兼光了<sub>一</sub>

置<sub>レ</sub>前、此次談<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、良久退出、

十九日、<sup>丙</sup>〔天〕晴、召<sub>二</sub>光長朝臣<sub>一</sub>賜<sub>二</sub>府解<sub>一</sub>、著冠直衣出逢給<sub>レ</sub>之、先

例如<sub>レ</sub>此大事、多上臈職事奉行加<sub>レ</sub>之、和氣使事奉行、

已爲<sub>二</sub>一具之事<sub>一</sub>、仍旁所<sub>レ</sub>賜<sub>二</sub>光長<sub>一</sub>也、仰可<sub>レ</sub>奏<sub>レ</sub>院之

由、又可<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>間上洛神官<sub>一</sub>之條々仰<sub>レ</sub>之、此日有<sub>二</sub>春日

社佐異占<sub>一</sub>、光長朝臣奉<sub>二</sub>行之<sub>一</sub>、在宣占<sub>レ</sub>之、長者慎、又氏

中辰戌人云々、親經、親雅、宗賴等又申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、神泉

御讀經今日結願、今夕定能卿來、

廿日、<sup>丁</sup>〔天〕晴、辰刻、密々向<sub>二</sub>法印栗田口房<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>所

惱體<sub>一</sub>、當時非<sub>レ</sub>重、然而病未<sub>レ</sub>捨<sub>二</sub>離其身<sub>一</sub>之體也、歎思

不<sub>レ</sub>少、談<sub>二</sub>雜事等<sub>一</sub>之後、午刻歸來、被<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>道風自筆

普賢經<sub>一</sub>、又被<sub>レ</sub>差<sub>二</sub>小膳<sub>一</sub>、及<sub>レ</sub>晚光長朝臣來云、府解事如

此事不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>食案內<sub>一</sub>、能樣可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>計沙汰<sub>一</sub>之由有<sub>二</sub>院

仰<sub>一</sub>云々、又先日仰下事等仰<sub>二</sub>左大臣<sub>一</sub>、向<sub>二</sub>其<sub>一</sub>此事等尤可

然、早可<sub>二</sub>下知<sub>一</sub>云々、

一上官不勤、本局結政陣等上日事、

一月奏久絕不<sub>レ</sub>奏事、

一諸社祭國忌等、諸司不參事、

一宮中公事守<sub>二</sub>式月<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行事、

一上官俸祿事、

已上五ヶ條也、

此外近日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行事等、代始年中又殊可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行事條

條、注<sub>二</sub>一紙<sub>一</sub>賜<sub>二</sub>光長<sub>一</sub>、次第仰可<sub>レ</sub>申汰汰<sub>一</sub>之由、件注文、昨日

所<sub>レ</sub>給<sub>二</sub>此日<sub>一</sub>、親雅來云、御方違行幸可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>左大臣第<sub>一</sub>、

先日仰<sub>レ</sub>之、被<sub>レ</sub>而家主丞相日來煩<sub>二</sub>一禁<sub>一</sub>、昨日陪增、加<sub>二</sub>

灸治<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>違冷<sub>レ</sub>之、如此之間不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>立避<sub>一</sub>云々、仍方

角無<sub>二</sub>禁忌<sub>一</sub>之所、問<sub>二</sub>宣憲朝臣<sub>一</sub>之處、鳥羽殿并冷泉殿

等無<sub>二</sub>其忌<sub>一</sub>、自余皆有<sub>レ</sub>憚云々、而〔於〕鳥羽者、地震之

後傾危殊甚、雖<sub>二</sub>片時<sub>一</sub>有<sub>二</sub>事危<sub>一</sub>云々、余云、冷泉第築

垣覆、未<sub>レ</sub>終<sub>二</sub>其功<sub>一</sub>、又門不<sub>レ</sub>葺<sub>二</sub>檜皮<sub>一</sub>、旁見苦歎、於<sub>二</sub>築

垣者左大臣第同以假覆也、卒爾夜陰事、須無<sub>二</sub>巨難<sub>一</sub>

歎、門不<sub>レ</sub>葺<sub>二</sub>檜皮<sub>一</sub>之條、無<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>者、雖<sub>二</sub>臨<sub>一</sub>夜內々可

問<sub>二</sub>賴業<sub>一</sub>者、即以<sub>二</sub>親雅消息<sub>一</sub>、密々問<sub>レ</sub>之、賴業申云、

雖<sub>レ</sub>引<sub>二</sub>勘先例<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>詳、但夜陰事、須不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>憚歎云々、

余云、左府申狀者可<sub>レ</sub>奏<sub>レ</sub>院、又冷泉家子細如此、非<sub>二</sub>

恠惜之儀、無<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>進之條、且無<sub>レ</sub>便歎、爲<sub>二</sub>別御定<sub>一</sub>



者非此限、故邦綱卿正(親)町東洞院亭如何、同可(奏)者、又冷泉亭自(開院)當(太白方)哉否、可(問)宣憲(者、親雅參院了、及(晚以(書申云、院宣云、板棟門之條、全不可有(憚、左大臣亭不能(重被(仰者、申(承了由、入(夜親雅又來云、方角事問(陰陽師(宣憲、等之處、申可(被(打(丈尺)之由、若當(正方)者可(延引、廿二日之處、自(廿三日)大將軍遊西、仍還御有(憚、其外無(殘日、爲之如何、猶可(幸(大內)歟、自(夜御殿)當(乾方、今年一歲之間不可(及(犯土造作、依(當鬼吏方)也、然而於(無(他所)者、無(他計)之故也云々、今夜打(定丈尺、明旦可(告(左右)之由仰了、

奈良僧正被(召)送南都寺僧(大連君、行家兄弟云々、若無(指犯過)者、及(耻辱)之條、尤不便之由被(示、件者非(自(公家)被(召)之儀、平六(僦丈時貞以(私使者(召)之云々、仍余以(使者(仰(遣能保朝臣許(曰、御寺事、偏長者之最也、若有(犯人)者、觸(長者)自(氏院)下(知御寺)可(召進)也、武士直以(郎從)隨責之條、太可(謂(狼藉、如(此之事)尤可(被(禁遏)也、兼又所(被(召)之僧、自(長吏僧正)之許(所(被(召)送)也、若可(獻歟、但爲(寺僧)之者、無(指過怠)者及(耻辱)之條尤不便歟、委

被(尋被(召置)之犯人等、指而有(犯科)者非(此限、當時在(兄弟經光法師許(母同行家、可(被(重令)申者、即使者歸來云、(先)武士使直向(寺家)致(狼藉詞)之條返々承驚不少、此事也不(相(觸能保)之所不(知給、早可(誠仰、又自(今以後)可(停止、兼又件僧只(暫可(候(經光法師許)也、委尋問、若有(可(召問)事者、重可(言)上事由(者、

廿一日、戊(天)晴、今明春日社恠異物忌也、仍開(門戶)慎之、以(智詮阿闍梨)修(仁王講)未刻、右少辨親經來申(最勝講)之間條々事、并賴朝卿申安樂寺別當之間事、以(安能陳狀)可(遣(鎌倉)之由、可(仰(經房卿)旨仰)之、件事、院宣云、可(問(諸卿)云々、而事已(大事)也、被(尋)左右(食膳)之條、必人之(整頓)歟、論人全珍在京者、可(被(尋)彼是、而在(鎌倉)仍只以(此陳狀)可(遣(賴朝)許(之由余奏)之、法皇被(仰)可(然也、又親雅以(出納)申云、仕行幸(事、相(語兼忠)之由、昨日所(申、冷泉殿不(當(太白正方)之由、陰陽道所(申也、今朝打(丈尺)同(此日依(御方違)行(幸冷泉萬里小路亭)宣憲云々、件家右兵衛督(隱居宅)也、而余依(物忌堅)余不(供奉、幼主御時、攝政不(供奉、其例太多之故也、此旨昨日奏(院了、右大將供奉長番厚次重服、去(比父厚)仍召(權番長)可(然也、舍人(仍以(余下(儀奏)連(冷泉亭事依(卒爾)每事不能(營紹補(番長)所(召假)也、



之、只致掃除鋪設、御座六帖新掌燈等沙汰、又寢殿內

中隔等元母屋分、立障撤之、又母屋庇簾皆撤之、擬南

殿可寄御輿之故也、又臺盤所方立棚白木、居繪折

櫃菓子十合、其外置火櫃炭取等、他事不能左右、倉

卒之上、先々又如、此云々、御輿寄藏人方仰修理職

又例也、置路仰使廳令勤仕之云々、門前狼藉仍

爲隱小屋、切竹差之、件雜事等、家司資泰朝臣、職

事兼時等參上致沙汰、雜事等豫仰光長令用意、

廿二日、己天晴、昨今物忌也、大將歸堂廊、此第物

忌之故也、卯刻歸來云々、光長朝臣申云、春日神主以

消息申云、非社去十八日子刻御山光云々、此事可被

行御占歟、將內々可遣問歟、可隨仰云々、余

云、進社解之恠異、猶內々被尋其例已多、見御況

神主狀內々書札也、加之、若爲恠異者、明日明後日

可當物忌日、仍只今早々可遣問在宣、泰茂、者、入

夜大將來此亭、亥刻雨下、天下之大慶也、入夜持

來占形、可慎口舌火事、卅日內庚辛日物忌也、在宣他

茂、晴光占形到來也、明日明後日物忌也、仍明日出仕停止之由下知

了、

廿三日、庚天陰風吹、今日、初齋宮御禊牛前驅等御覽

之間、貫首候御前者例也、而兩貫首共申故障云

云、仍昨日仰光長申可參之由、然間長方卿母亡

沒、懷忠女仍光長服假之由令申、奉行職事雖未來

觸、且聞此之由、必可參之由、仰遣兼忠許、申可

參之由、未刻、藏人辨親經來申條々事、依物忌在

門外、以國行令申事等、

一最勝講御願趣、幼主之時不被仰歟如何、又可被

仰ハ、貫首可仰也、而兩貫首出仕不、輒爲之如

何、仰云、光長服假也、兼忠必可候之由、可召仰之、

抑被仰御願趣事、全不可依幼主有故之時、被

仰者例也、所謂凶年天變別御惱時等也、當時炎旱有

愁、又天下不靜、亂逆連々、如此事等尤可被仰

也、貫首當座仰之儀、難盡委曲、豫奉行職事殊可

仰含僧徒也、其趣昔被始置此講演、偏是爲鎮護

國家也、天下之大事祈請不可外求、而近代人意輕

古重今、弄舊好新、仍恒例御願如弄置是恩之中

至愚也、僧徒深存此旨、專神猛利之惡志、可祈天下

之康寧也、王法之紹隆、宜任靈勝王經之功力者

也、依五日之丹祈、盡期四海之靜謐哉、以此等

趣、殊可祈請之由、先可召仰參入僧徒者、

一禮盤半帖、多用高麗端、而近例用縹緗云々、是非未辨如何、

仰云、此事儘不覺悟、又舊記無所見、只守先例可致沙汰〔者〕、

一御在所置香爐、昔幼主御時如何、

仰云、六條院以後最勝講皆幼主也、何今始及此不審哉、尋近例可進止者、

一去廿一日行幸之日、先爲公事奉行御下實宗卿參入之

之間、彼牛童與衛士鬪諍出來、相互取合、散々陵

轢、但不及及傷云々、而彼納言殊致訴訟、爲勤公事參入之卿相〔相〕預如此之狼藉、太難

堪、若無此誠者、誰人勵奉公哉云々、衛士等又陵轢公人難堪之由訟申、何様可候哉者、

仰云、如聞者、理非難分別事歟、然而委尋事之濫觴、以下手之重者、可處科歟、且又可奏事由之故也、

一覺辨律師申服假之由如何、

仰云、神事之時、輕服者有從神事之例、況佛事哉、就中雖有重服之儀、輕服之條不致沙汰云々、早猶可參之由可仰遣者、且又一旦可問綱所歟、但

此條勿論事〔也〕、

申刻、親雅來申云、御牛前駟御覽之間、貫首可候、而光長雖申可參之由、忽成服假了、兼忠先々如此事、凡不叶傍官之輩、兩頭不候者、五位藏人可候歟如何、仰云、於不參者非此限、但聞光長服假之由、職事雖未申上、自是仰遣了、定參仕歟者、余又返給先日所進鴨社訴申文書、此事重遂問注、可下勘法家之由仰之、後聞秉燭有前駟御覽、其後無爲被逐御櫻了云々、度々延引雖恐思、遂被行了、尤爲悅、

廿四日、辛卯朝間天陰、細雨間濕、午後時々天晴、此日、最勝講初日也、余依物忌不參、兩息未一點參內、其後親雅來申公家御修法之間事、成功之輩未尋付、已明日事也、定及闕如歟云々、仰云、來廿七日又最吉日也、延今一兩日猶可尋成功者、又申云、去夜御禊前駟所衆等、其體異様、實以見苦云々、〔又〕爲勤堂童子只今可參內云々、明日如法午刻可參內、其由可仰親經者、

廿五日、壬寅天晴、此日、最勝講第二日也、午終許、著束帶袴袖伴兩息殿上人相房參內、初日依物忌不參、今日始所參也、入左

衙門陣、昇三板敷、有入自第一間御倚子前、下方也、

先是忠親卿獨在端座、兩息各經小庭、昇自履脫、

有、着端座、召頭辨衆忠問事具否、證誠兩人未參

云々、仰可遣召之由、此間、親經出、來小庭申云、侍

從高通乍參對、捍堂童子、爲之如何、仰、儘可令催

勤之由、此間、余起座、動座、參御所方、親經又申云、高

通申云、今日無術事候、明日并結願日必可參之由、

申、然間今日堂童子員數滿了云々、然者明日必可參之

由可仰、男體頗未練也、申狀難信用、儘可催仰、旨仰

之、重申一定可參之由、小時證誠參上之由告之、余

歸著殿上、以頭右中辨衆忠奏事由、不經上戶、經小

庭、歸來仰可始之由、便仰、鐘、衆忠乍居三板敷、

召藏人仰之、次槌鐘、次出居、次將五人起下侍、

經殿上前小庭、昇青環門代、其前有履脫、或脫、者於殿

無件香脫、今案於庭、或昇、件履脫上、脫之、大內

可脫款、依無便也、著御前座、次余氣色忠親卿、起座

經上戶御殿南廣庇等、著西面簀子敷座、大臣座可敷、

端、而短不見、後日思出之、忠親已下、兩息在、同著座、次僧

昇、各入南第一間、次第分著、座、大內經、廣庇、此皇居依

前、無便宜、經、佛、皆悉著座了、威儀師著、聽衆座上、前在、次

講讀師先著禮盤、三禮之後登高座、講師經、御領之、次威

儀師打磬、公卿置笏、次唄師發音、此間、堂童子著座、即進分花宮、次散花行道、同、次散花師對揚、次打磬、堂童子收花宮、此間、威儀師分御經、朝夕兩座、打磬、次講師勸請、初日二、先、次釋經、次論義、二帖、次打磬、次六種廻向、衆僧退下、次公卿退下、下、余同歸著殿上出居、退出之後、以衆忠奏事由、又仰、鐘如例、出居參上之後、余已下著御前座、次僧參上、次第同朝座、無分御、事未終之間、余參御前候、二間、夕座始之後、不經幾程、忠親卿著陣、有賑給定井內文、余候御前之間、傳女房覽賑給定文、見了返給、講訖之間、覽官符見了返給、其後即退出、同息、于時日未沈西山、證誠、法印澄憲、權大僧都覺憲、今日講師問者、朝座、權大僧都雅緣、問者增運、東大寺、夕座、權少僧都勝詮、問者明智、圓城寺、堂童子、左方、御所方也、範光、賴房、

右方、

仲經、清信、○信一作實

出居、

成經朝臣、定輔朝臣、兼宗、成定、忠季

、範能、

參入公卿、

大納言、忠義、夏通、

中納言、定能、

參議、兼光、

三位、夏經、

入夜光長來申僧事之間事、今朝參伏見、終日祇候、有僧事沙汰、申定所歸來也、其中實慶可任僧正云々、依非據乍恐申其子細了、定有逆鱗歟、然而依存忠也、

廿六日、癸天晴、已刻、著直衣、乘網代車、大將同車、不件車新調也、依今日次不、其車中將、宜、去夜乘始也、前駟衣冠四五人許、賴房一人在共、入自東面北門、參御所、小時下宿所、休息、僧侶參入之後、著束帶、著殿上、今日、大將外上薦不參、雖不可必著座、爲事之始、猶爲專禮、今日所著座也、故殿初一兩年雖大臣不參、常所著座

給也、依貫首不候、召親經問事具否、申事之由、歸來仰聞食之由、便仰鐘、次第存例、朝座了參御前、夕座事大將行之、事了下宿所、今日參入卿相、

大納言、夏通、

中納言、實宗、通親、

參議、雅長、通實、

堂童子、

左方師廣、

右方棟範、

家實、

藏人行經、檢非違使、

今日、堂童子高通進奉不參、仍奉行親經可勸仕之、而先例爲職事之者多勤上薦、今日其座次當下薦、無便宜、雖不可必苦事、六位勤仕又例也、加之、職事立後之例未見、仍隨宜用六位也、

講師問者、

朝座、覺辨律師、

夕座、信宗律師、○宗一作宣

問者尊長、

問者眞雲、

出居、

公時朝臣、定輔、成定、範能、



廿七日、辰〔天〕晴、此日依有勞事、著直衣候、藤中、

早旦、覺來宿所、隔簾謁之、相續雅緣僧都來、同

謁之、〔僧〕雖不可必然、爲寺僧之上、又爲丞相

子、仍爲優之所謁也、午刻、著直衣參上、光長參

上申云、實慶事、定長以予申狀奏聞、敢無逆鱗、被

仰可然之由、被止了云々、親雅基親等申祈雨御

祈廿二社奉幣之間事、來月二日云々、明日最勝講了可有定

之由仰之、有例之故也、又賴業勘申寛治二年例也、

未刻、僧侶參上、余候二間、大將著殿上、付光長

申事之由、光長來二間、慶前申之、仰可始之由、槌鐘之後、出居

公卿等參上、僧昇皆如例、高通〔今日〕參上、依奇怪

經三院奏領處勘事、而親經申云、明日堂童子闕如、昨

日不參之過怠、今明兩日令勤仕、誠將來被從寛

宥宜哉、余從此言、即以親經加勘責了、且又昨日不參之大

弊、故無疑云、朝夕兩座了、大將著陣有減服御常膳

詔書事、以親經先覽草、見了返給、小時進清書於

鬼間、以藏人召查御座御硯、入御晝日了、廿七日

也、先例或書日字、返給、次參御所方、此後又有僧事、明

日可被行、事繁多、仍今日行僧事也、上卿同右大將也

今日參入卿〔相〕、

大納言、互通、

中納言、家通、通親、

參議、雅長、

三位、顯信、

出居、

實教朝臣、公時朝臣、雅行朝臣、成家朝臣、○家一作定、

堂童子、

左方、光綱、高通、

右方、定家、清實、

講師問者、

朝座、公胤律師、問者實教、興福寺、

夕座、行舜律師、問者範慶、同、

入夜雨降、終夜不止、今度御八講殊被仰祈雨事、

而修中降雨、可信可貴、

廿八日、乙此日、最勝講結願也、朝間雨降、午後止、未

刻、著束帶參御所、於二間改機、此間、召親經

仰僧徒云、今度御八講御願趣、殊被仰祈雨之由

了、而昨日雨、誠感應之至也、祈願之効驗可謂揭焉、

殊感思食之由、宜仰僧徒者、親經向弓場殿邊仰

澄憲法印、澄憲之上、歸來申云、申各畏承之由云々、余

即著殿上、御椅子下、大將入、自無名門代、著端座、中將在三鬼間方、余招、光長朝臣、問事具否、申、具了之由、仰、可申事之由、之旨、經、上戶參御所方、歸來仰、聞食之由、便仰、鐘、光長於小板敷、召藏人、仰之、即槌鐘、次出居著座如先々、次余已下著御前座、次僧昇、次講讀師著禮盤三禮、次登高座、次第皆如先々、論義訖歸著殿上、以光長申、夕座可始之由、歸來仰、聞食之由、便仰、鐘、出居著座、余已下參上、僧參入、次講讀師先著禮盤、威儀師經緣云、惣禮、衆僧從之三禮、次講讀師登講座、次唄散花之後、出居右近中將實教朝臣、就講師右邊、仰、賜度者之由、講師貞覺已講啓白說法了、論義如常訖、講師著下座、次經緣經、長押與行香机之間、跪證誠座邊、告、呪願之由、次澄憲法印著北禮盤、貞覺已講著南禮盤、此間、余已下解、劍加笏置座、威儀師就行香机邊、余已下進寄取、傳輪如例、經、同机西二棟廊南緣、作輪、東上南面、藏人、更入、自北第一間南、行、行香呪願三禮、行經取、大地、更入、自北第一間南、行、行僧綱講師了、依座想、僧綱等多著西、證誠等自北第三間入、母屋、行僧綱講師了、依座想、僧綱等多著西、經、御帳後并北等、自北第一間、出、簀子、經、行香机西南、行、南面廣庇、作輪、南面、更經、簀子、歸、居行

香机邊、返、置輪了、次第復座、余及兩息乍座橫、劍、余御劔之同、大將扶持、宗家卿起座、仍其間無他人之故也、余人皆起座、帶劔復座、次宗家卿已下取、祿、大內儀、取證誠祿之人、經、行香机與長押之間、而此內裏簀子立、件机、仍追、長押立之同、無其路、故經机西也、宗家卿九人取、僧綱祿、頭辨兼忠取、凡僧講師祿、經家朝臣以下殿上四位五位取、聽衆祿也、僧綱白掛一重、已講赤、次衆僧侶退下、貞覺已講、留居佛前、受、次會、應來白掛一領也、取證誠祿、相從退出了、公卿自下薦、退下、余參、御所方、光長來申云、除目任人事申、院、定長返事只今到來、聞食了之由有報狀云々、余即下宿廬、解脫休息、大將同之、中將先以退出了、

今日被、行事等、

祈雨廿二社奉幣定、上卿宗家卿、

龍穴清瀧御讀經定、

臨時除目、

擬階奏、

已上上卿實宗卿、

余在宿廬之間、內覽奉幣日時定文等、改、著直衣、參、御所之後、內覽御讀經定文、除目等、叙位不見、仍記、是近、欲、及深更、仍相、具大將、退出了、擬階奏直可、奏之由仰、親經了、又藏人不仕之事等誠仰了、

今日參入公卿、

大納言、宗家、夏通、

中納言、實宗、隆忠、

參議、兼光、隆房、通實、

三位、顯信、夏經、

講問、

朝座、成實律師、問者圓家、

夕座、貞覺已講、問者範圓、

出居、

實教朝臣、實明、基範、成定、

雅行、成家、

堂童子、

左方棟範、高通、

右方定經、五位藏人、顯象、

今夜親經申云、宇佐宮事、於官底先可被問、參洛

神官、件條辨官可著問者、可被宣下如何、余云、

先召官外記一例取勘文、被仰下仗議事之時宣下、

問注事即可著問、不可經程歟者、

廿九日、丙午雨降、及晚晴、早旦、山階寺權別當覺憲法

印來、余謁之、今度慶殊悅畏之由示之、又三會巡

不被任如何之由示之、余答子細了、且此旨可披露寺中、追可有御沙汰之由相含了、

### 六月

一日、未晴、親雅來申、明日祈雨奉幣之間事、八幡使

申、催參議之由、余云、近例被用納言、敬神之禮有

增無減、九人之中納言、一人盡催出哉、皆悉有所

勢故障之時、有被用參議之例、更不可用、迺

違非常之例、早可催納言者、又昨日雖雨下、猶

不遍滿率土、仍明日奉幣不可延引者、頭右中辨

兼忠朝臣來、申、祗園御靈會之日、可有臨幸他所

之間事、爲臨時御靈會路也、可申、圖書頭在宣朝臣同參會、

申云、大內尤可宜、依一夜之御宿、更不可有方角

之禁忌、今年鬼更在乾、仍曆五日有御宿院者、大內可當鬼

之禁忌、東方仍自今春有御方違、然者雖有大內之御宿不

可、兼兼忠申云、行幸日次十二三日凶會、十日十一日

宜之由、宣憲朝臣令申、又、還御十九日之由所申也、

而大內之體、數日之御經廻不可叶、爲之如何、余

云、二條院御宇當日曉有行幸、其夕有還御之由、側

以所覺悟也、任彼例十四日平日臨幸、同夕還御、

尤叶時儀歟如何、于時大外記師尙委會、仍問二條院御時

四日々次宜之故也者、兼忠又申云、賢所同可渡御哉、無夜宿者不可然哉、于時親經參會申云、不可依夜宿、爲避御靈會路、行幸之時、賢所先々同所避給也者、親經所申可然、仍同可有渡御之由仰之、兼忠退出了、其後親經申數々條難事、其後典藥頭定成來、遣法印許、自彼房所來也、問病體、如余案所申皆符合了、雖不及忽大事、病極重云々、宗賴朝臣來申條々事、及晚親雅歸來云、於內裏通親卿參會、申八幡使之間事、可勤仕之由所申也、凡件卿奉公之至、無比肩之人、卒爾之催又以領狀、旁可謂忠士、仍故差遣使者仰感悅之由、返報之趣尤懇切、頗爲本意耳、

明日奉幣使闕如甚多、仍家職事六人催出、注交名遣奉行職事及大外記等之許了、近代放埒之輩勤此役、尋常藏人五位、更以不從世間役、太不當、仍常召仕男共云、又云、身未勤如此役之輩等、同以催遣之、爲傍輩也、各雖有辭遁氣色、余作色責之、依存奉公也、神明照鑑之、入夜光長朝臣來申條々事、或人云、九郎在鞍馬云々、先日所遣關東之書札返報到來、子細以使者追可申云

云、去月廿日狀也、

二日、戊申天陰、申刻以後大雨下、神明之感應可謂嚴重、此日祈雨廿二社奉幣也、上卿中御門大納言宗家卿、辨權右中辨基親朝臣、職事左衛門權佐親雅、奉幣使不足、職事等已刻催獻神祇官了、

申刻、藏人辨親經爲院御使來、依物忌堅不闕之、以人傳申云、兼親九郎義行在鞍馬之由、能保朝臣所申也、彼山寺僧圓豪告送西塔院主法印實詮之許、本云々實詮告能保、々々申院、而無左右遣武士者、一寺之魔滅也、仰彼寺別當入道關白、可令

搦進、歟、可仰合入道關白者、即以親經遣苦提院、申一手續、途之由、今朝依召參仁和寺、花園院依上四路不可叶之、仍昨日所渡御也、自彼參此御所、更歸召光長牛給也、申子細、又以使者遣能保許、密々此沙汰次第太不當、不廻踵可搦取之子細仰遣之、雖和議爲天下也、及深更親經以書狀申入道關白返事、別當之力不可叶、只可遣武士云々、早

可院奏之由仰遣了、明且又遣能保許之使者歸來、申旨大略無沙汰歟、奇異也々々々、爲奉幣使差獻之職事等歸來、上卿已刻參入、使々早參、而依王

太夫訴訟、并內記未練、申始發遣使等云々、



三日、<sup>依三物忌</sup>天陰、微雨間降、入夜甚雨、召大外記頼業、<sup>在門外</sup>仰條々事、

一昨日奉幣不參之使々、持入幣於其家云々、儘付使申可追下事、

一自今以後、不領狀之人家打入幣事可停止、兼日能催取領狀、可釣出其身事、

一凡局中難事、近代六位上官不足言、今暫如此公事、可被興行之間、大外記偏相代可申沙汰事、

一佐實城外之者云々、持入幣於其家、太不便、取件幣可遣參時家、件男依家職事令催獻、而遂以不參會、事訖參陣、太奇恠、儘可追下大和使也、早可遣件男家事、

一字佐宮勘文可急勘申事、

條々申承訖之由、

右少辨親經兩度以書札、申義行之間事、依所勞不參云々、院宣并能保朝臣申旨等也、

四日、<sup>依三物忌</sup>雨下、午刻、右少辨親經爲院御使來門外、

云、<sup>依三物忌</sup>能保朝臣申云、鞍馬寺別當依告、官兵可入之由、於本寺、義行不可留跡、此上事於今者、

可被下宣旨於諸國、兼又土左君云僧、彼寺住侶、義行知音也、付本寺可被召出彼僧云々、此事相計可致沙汰者、余申云、宣旨事并可被召土左事等、尤可然、被召件僧事、先可被召本寺別當、兼又義行必定避彼山哉否、密々可尋聞之由、可被仰能保朝臣、欺、推察之所、及於今者定逃去、欺、然而還又爲違諸人之案、自有隱居之疑、欺、仍始付稱申之輩、重尤可被尋在無欺者、良久歸來云、如此事一切不知、食案內、先々無沙汰之故、爲身招殃、今又可同、仍只是非左右、能樣可令計沙汰者、重奏云、如此之大事非勅定者、始終不可叶、存旨令計申之上、於可否者可從詔旨也、偏不可知食者、又爭令申沙汰哉、返々所恐申也、(者)、親經又歸來云、素所被仰、更非心置思食之儀、事爲大事、仍可然之樣、可有計沙汰之由、所被仰也、聊もは、めやうにて、被仰ニハ非ス、此旨若披露ハ、定又招恐欺、努力々々、不可及他聞云云、仍即以親經、土在可被召出事、先内々示遣入道關白許了、親經又云、奉行事親經不當其仁、如此之大事、猶執權職事可奉行、欺之由内々申院、

尤可然、如光長朝臣ニモ、可被計仰之由、有院  
宣旨、定長所申也云々者、此事爲通有煩之沙汰、  
自擯之詞、雖不足信用、於此事者、親經奉行實不  
相應歟、仍仰光長朝臣了、親經自院承仰、而忽改  
定雖無謂、隨御定可申沙汰云々、又頭右中辨  
兼忠朝臣來申來十四日行幸之間事、并尊勝寺修造之  
間事、

五日、辛亥雨下、未刻小晴、自去二日、四ケ日物忌也、  
仍余大將共不參堂、午刻許、大外記師尙參上、在門外  
申云、宇佐宮勘文今日付奉行職事、而依他行持歸、  
重欲遣、先日可忿勘之由有仰、仍殊所忿勘也云  
云、又申云、今旦依召參左大臣亭、上官不仕事、并不  
奏月奏事等被仰下了、先例如此之時、以口宣  
被仰下、而以職事折紙被下知、依不審雖尋申、  
何事之有哉、只可下知之由、有大臣命、仍從命欲  
下知者、

又申云、依奉幣感應、甘雨忽降、緇素莫不悅、凡一  
日奉幣、云幣物云使等每事嚴重、當職以後廿年于  
茲、未見如是之嚴重之奉幣、凡每有所請必垂  
感應、就中今度奉幣可謂珍重、以御信力有如此

此之沙汰者、政之反淳朴事、神助有憑者歟云々、  
此次仰條々事、相續親經參上、今旦參上入道關白  
亭、書申昨日仰御返事云々、如此內々被觸  
仰、尤爲本意、隨心之及廻秘計可致沙汰、但是  
內々仰也、早直可被仰遣別當禪師許者、入道  
此旨早可奏院之由仰親經了、又宣旨之間事、依  
院仰可下知光長之由同可奏者、親經歸參了、小  
時光長參入、義行可擯進之由諸國宣旨事、能保朝  
臣申鞍馬住僧可召進之由可仰別當事、京中夜行  
以下事微々殊可札行之由可仰使廳事、三會巡追  
可被任事、神今食以後、第一明通辭職、第二(○恐別當二字脫)備  
因通分、四以下雖不少、任有例云  
云、因通分、四以下雖不少、任有例云院可奏聞、義  
行之間事、本爲親經奉行、而如此大事、猶質首可  
申沙汰、加之、去春件宣下之間事、光長奉行也、旁  
可被改仰之上、親經存不當奉行之仁之由、申  
入院之故、可改仰之由有院宣、仍改仰之由同仰  
之、光長參院、申刻歸來申云、法皇幸女房丹後宅、  
了、不能奏達、明日可參奏云々、又申云、宣旨事遲  
遲者、且以御教書仰國司如何、其國々可承存  
者、仰云、且仰國司尤可然也、其國々、近江、丹

波、伊賀、伊勢、若狹、越前、丹後、但馬、五畿內、

紀伊、播磨、備前、美作、淡路、美乃、尾張〔等〕且可

仰歟者、此次仰殿上番事、西刻、親雅參入、外記役

諸大夫事、可奏聞之由仰之、院北面、女院等殿上

人、皇后宮亮、家職事、各定人數、注立、其外可給外

記、歟、奉幣以下仕諸大夫之公事、併以擁息、每事成

催促之煩、尤不便、殊可有御沙汰之由、可奏聞

之旨仰之、一日所仰賴業之在城外之者家之幣

宣命等、今日遣兼時許、摺改宣命使交名、明日可發

向云々、余仰光長云、拔近國、雖遣御教書、於

重宣旨者、只諸國一同可被下也者、申承之由

六日、壬〔天〕晴、未刻定經來申諸社諸寺修造之間事、

又申他事等、相續光長參上、申數々條事、其中可

討義行之宣旨事、申院之處、早可宣下之由有

仰云々、其宣旨狀令見之、

文治二年六月六日

宣旨、

謀反首前備前守源行家、前伊豫守同義行等、敗奔之  
後、不成歸降之思、殆有囁語之間、展仰都鄙尋  
搜之間、行家已伏誅、義行獨逃脫、雖歟戮資猶  
欲擒充、重仰五畿七道國々司等、隨令搦進義行

身、若有殊功、賞以不次、

藏人頭左中辨藤原光長奉、

又三會巡事、仰云、可問明遍、猶辭申者、辨曉、勝詮、

等之間、可相計者、但辨曉爲巡之上薦、不可、依去

年任少僧都歟云々、先可問明遍之由仰了、又他

難事千萬不能具記、人傳云、爲搦義行、武士、東西

馳走云々、尋遣能保之處、申云、大內惟義申、聞得

在所之由、然而未知實說、承定之後可令申云々、

傳聞、先搦取母并妹等、問在所之處、稱在石藏之

由、遣武士之處、義行逐電了、捕得房主僧了云々、

其後事未聞、又親經申送云、入道關白被申云、昨日

蒙仰教馬寺住僧事已召取了、可遣何處哉云々、可

遣能保之許之由仰了、此日大夫史廣房來、仰一日

幣物如法感悅之由、彼廣房息公尙奉行奉幣事之故

也、兼忠朝臣來申尊勝寺修造之間事、又持來奏事目

錄、依一日召仰也、

七日、癸大風甚雨、藏人辨親經持來宇佐宮濫行、官外

記勘例三寫、兩外記、依爲大事、召藤前謁之、勘文

等略見了返給、今日早奏院可給上卿之由仰、左大

臣依腫物不出仕、內大臣遣嫡男公守之喪之後、



未<sub>レ</sub>出仕、定房籠居日久、實房重喪未<sub>レ</sub>解、仍宗家、忠親等之間、取<sub>二</sub>御氣色<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>仰、但依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>上臈<sub>一</sub>先可<sub>レ</sub>仰、宗家歟、仗議日豫披<sub>レ</sub>曆之處、來十日之外、近無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然之日、而今中二ヶ日定難<sub>レ</sub>廻<sub>二</sub>文書<sub>一</sub>歟之由、親經令<sub>レ</sub>申、仍來十六日可<sub>レ</sub>宜之由、仰<sub>二</sub>之親經<sub>一</sub>、申云、十四日行<sub>二</sub>幸大內<sub>一</sub>、一日可有<sub>二</sub>御經廻<sub>一</sub>、件日可有<sub>二</sub>便宜<sub>一</sub>歟、余云、於<sub>二</sub>旅宿<sub>一</sub>所被行<sub>二</sub>仗議<sub>一</sub>、先例如何、又頗不<sub>レ</sub>叶<sub>二</sub>物義<sub>一</sub>歟、十六日可<sub>レ</sub>宜者、此外申<sub>二</sub>條々事等<sub>一</sub>、又定經來申<sub>二</sub>諸社諸寺修造之間事<sub>一</sub>、同召<sub>レ</sub>前仰<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>、此事爲<sub>二</sub>大事<sub>一</sub>、猶置<sub>二</sub>上卿一人<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>歟、往昔雖<sub>二</sub>最少事<sub>一</sub>、上卿奉行、近古以來、無<sub>二</sub>此儀<sub>一</sub>、只非<sub>二</sub>一社二社事<sub>一</sub>、已莫大也、上卿奉行尤可<sub>レ</sub>宜之由可<sub>レ</sub>奏<sub>レ</sub>院、其人經房卿之外全不<sub>レ</sub>覺悟、且內々可<sub>レ</sub>觸<sub>二</sub>嚴親<sub>一</sub>、又可<sub>レ</sub>奏聞<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>仰<sub>レ</sub>之、自<sub>二</sub>今夜<sub>一</sub>、院被<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>今熊野御精進<sub>一</sub>云々、

八日、<sup>寅</sup>陰晴不定、祇<sub>二</sub>候八條院之小兒來<sub>一</sub>、此日、光長朝臣、宗賴朝臣、親經等來申<sub>二</sub>條々難事<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>追<sub>二</sub>記錄<sub>一</sub>、其中三會巡事、光長申<sub>レ</sub>院可<sub>二</sub>相計<sub>一</sub>之由有<sub>二</sub>仰云々<sub>一</sub>、又親經云、昨日雖<sub>レ</sub>參<sub>レ</sub>院不能<sub>二</sub>申入<sub>一</sub>、定長退出之故也、仍今日參上申<sub>二</sub>宇佐宮事<sub>一</sub>、只能樣可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>計御沙汰<sub>一</sub>之由、有<sub>二</sub>仰云々<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>是可<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>上卿許<sub>一</sub>云々、宗賴申<sub>二</sub>平

等院佛聖之間事、仰<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>了、又申<sub>二</sub>參賀之間事<sub>一</sub>、來廿又官奏來十九日由仰<sub>二</sub>光長<sub>一</sub>了、前飛彈守有安註<sub>二</sub>獻夢想<sub>一</sub>、一昨日丑刻所<sub>レ</sub>見云々、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>希代之事<sub>一</sub>註<sub>二</sub>載之<sub>一</sub>、夢記曰

文治二年丙午六月七日癸丑、去夜丑時、有安住宅<sub>二</sub>客人來會<sub>一</sub>、<sup>一人ハ諸司長官、一人式部大夫、五位、共以五六年之前早世人也、</sup>相語曰、殿下御攝錄、世人雖<sub>二</sub>相悅<sub>一</sub>、兩三之謗家、廻<sub>二</sub>計略<sub>一</sub>、惡<sub>二</sub>望之<sub>一</sub>間、射山邊御氣色不<sub>レ</sub>快、然而殿下<sub>二</sub>ハ全非<sub>一</sub>自搆<sub>二</sub>偏佛神御進止也<sub>一</sub>、天、敢無<sub>二</sub>御傾動<sub>一</sub>云々、此後有安出自<sub>二</sub>住宅之門<sub>一</sub>、南サ<sub>二</sub>ニ行<sub>一</sub>、天俳<sub>二</sub>個可<sub>レ</sub>然之所<sub>一</sub>、<sup>不<sub>レ</sub>覺云々、</sup>此處<sub>二</sub>有<sub>二</sub>築垣<sub>一</sub>、<sup>東西、其北有<sub>二</sub>竹林<sub>一</sub>也、大和竹、</sup>東西行七八丈許也、敢無<sub>二</sub>人屋<sub>一</sub>、然間自<sub>二</sub>東方<sub>一</sub>副<sub>二</sub>築垣<sub>一</sub>、天、如<sub>二</sub>蛇ナル物<sub>一</sub>ハキ來、委見<sub>レ</sub>之即件大和竹一本、<sup>無<sub>レ</sub>枝、如<sub>二</sub>蛇<sub>一</sub>ニハキアリクナリ、昇<sub>二</sub>竹梢<sub>一</sub>、天更下天、西方ニハキ行畢、<sup>于<sub>二</sub>時未<sub>レ</sub>時也、</sup>心中成<sub>二</sub>奇特思<sub>一</sub>之處、當<sub>二</sub>西南方<sub>一</sub>天京中<sub>二</sub>有<sub>二</sub>騷動<sub>一</sub>、即經<sub>二</sub>築垣西妻<sub>一</sub>、出<sub>二</sub>大道<sub>一</sub>、天聞<sub>レ</sub>之、其音只有<sub>二</sub>喜音<sub>一</sub>、敢無<sub>二</sub>恐音<sub>一</sub>、于<sub>二</sub>時人三四人許<sub>一</sub>、足ヲトハカリシ天自<sub>レ</sub>西行<sub>レ</sub>東、其スカタハ不<sub>レ</sub>見、爰有安問曰、京中ノ騷動何事哉、對曰、ヨニユ、シク、アサマシキ事候ハ、只今ノ事也、院ノ御所ニ</sup>



參天侍ツレハ、殿下〔ノ〕御事、自三方々就申人有  
 天、内々ニ不便議トモ聞侍リツ。殿下ハ御身上事ナレ  
 ハ、不レ及ニ御沙汰、然間今日只今佛神ノ御使也ト天、  
 竹ノスカタシタル蛇、御所へ參テ申云、此新殿下ハ、  
 全非ニ御懸望、非ニ御結構、我朝守護ノ佛神の成タ天  
 マツラセ給テ侍ナリ、而依ニ不善之聲申狀ニ天、イカ、  
 ト思食事有ハ、佛神ノ冥鑑其恐可レ候、爲レ世爲レ君、  
 尤不便ニ候ナム、只彼人ノ運ノ、御セム程ヲサテオ  
 ハシマセ、佛神ノ御使ナレハ、事々御違背不可レ候  
 ト、眼前ニ申侍ツレハ、上ヨリ下サマニ令レ聞給人  
 人、畏承伏候ツ、クチナハ如レ此申託天、罷出テ又  
 參ニ他所了ト申天、去行スル足ヲトス、于レ時如レ本  
 歸立ニ竹林北邊〔京〕中ノ音未レ止、踐祚可有トコ  
 ソ、又不レ可レ然トコソ、ナト云音マ聞ニ、然間ハシ  
 メノ竹蛇經ニ本路ニ天、東方へ歸去了、依レ聞ニ神明  
 御使之由、伏レ地恐懼、蛇去了、更起揚天望ニ青天ニ  
 爾、朝日高懸天照ニ竹樹之根、爰春日神人末包、  
 之者也、垂氷見知、奉ニ他神人二人、黄衣者冠天來臨、末包  
 牧供衆人、曰、殿下御事ヲサマノ、ニ、下膳共ノ申候ヘハ、下  
 部マテモ不ニ安堵ニ候ヘハ、爲レ承ニ侍事ニ所ニ參來ニ

也、有安申云、只今所承如レ此者、神人成レ悅歸去  
 了、此後夢中ニ夢懸天、心中ニ思樣、世間ニさま／＼  
 に、いかにそや申つる事を、儘にかく夢に見了、返  
 返珍重殊勝事也、早々ニ不レ忘之前ニ書注テ、付ニ女  
 房ニ天可ニ申入、但夢ハ不レ語日有ト思テ、取ニ寄曆ニ天  
 欲ニ披見、于レ時前ニ居タル人云、返々目出タキ事也、  
 早速ニ可レ被ニ申入、世人悅申事也云々、即取レ曆天  
 欲ニ披見ニ之間、夢覺了、

六月八日注進之、

九日、乙親經參上、申ニ神今食之間事、定經又申ニ條々  
 事、諸社諸寺修造事、帥卿申云、神事無レ術、余云全不  
 可レ有ニ神齋、猶奉行可レ宜之由可レ仰者、定經云、有ニ  
 重仰者定奉行歟、但至ニ廿三日ニ爲ニ輕服日數内、彼日  
 以後可レ承之由、内々所レ申也云々、

十日、丙辰雨下、光長朝臣來、條々事可レ奏院之由仰  
 之、三會巡幸、明可レ宜、不レ然ハ勝證又如何、實觀事有ニ靈夢之由、  
 景弘注進之、可レ有ニ旁御所之由也、追討宜官事、又有ニ他事等、  
 入レ夜歸來、雖參ニ今熊野、依ニ御所中間ニ不能ニ申入、  
 追討宜官事下ニ知左大臣了、宗賴又申ニ條々事、宣  
 旨中云陵ニ九重之曉浪、求ニ三尺之秋霜ニ云々、頗優  
 歟、

十一日、丁〔天〕晴、此日、月次神今食也、月次祭上卿權中納言隆忠卿、神今食大宮中納言實宗卿、右兵衛督隆房也、辨親經兼行之、少納言師廣神馬六疋、左寮三疋、領狀、右寮三疋對捍、仍繫伺之國々催之、伊豫一疋進之云々、入夜兼忠來申、行幸之間事、此日召親雅云、召祭主能隆朝臣於陣頭、參籠本宮、寶劔事殊可祈申、有靈夢靈瑞等、殊可念歸坐之由、致丹精可祈念之由、可仰含者、

十二日、戊雨下、光長朝臣自院來云、三會巡事、明通事爲第一、而龍居不申之、余只可被押任三論定無入、相稱可從召請之由、可被仰之由申之、奏聞之處、無分明仰云々、季御讀經僧事、次重可驚奏之、又云、義行在所聞得之由、自旁有其告、北條時政代官時貞稱平六條、同聞之、竊欲搗遣云々、在大和國宇多郡邊云々、親雅、定經等又申條々事、定經云、經房卿申社寺修造事可奉行、之由、仰親雅云、寶劔御祈、七社若九社、奉幣事、申事由可問日次者、十三日、己朝天晴、晚雨降、申刻、兩息車同、參內、明曉爲避御靈會路、可經三條、遷幸大內、即夜可有還幸、爲供奉所令參兩人也、余雖可供奉、依物忌堅固、加覆推之處、重可慎云々、仍不參仕、恐思之

由、以大將觸女房了、醫師賴基來、余問左大臣二禁事、大略付滅氣了云々、今日時貞九來、光長許、義行事重有申事、在所一定字多無云々、入夜月明、此日、宗賴來申、條々事、法成寺修造行事、泰覺、執行、聖顯、別爲、相分可奉行、旨仰下之、今日、觀性法橋來、

十四日、庚天陰、及晚一時許大雨、其後又止、此日自開院第一行幸大內、爲避御靈會路也、實所同渡御、雖白地事、雜人往反陣頭、依無便也、是先例也、親雅以消息、申奉幣之間條々事、及曉天兩息歸來、問遲息之由、各陳云、近衛司只一人忠季、參入、被尋催之間遲々、行事頭辨兼忠、臨行幸之期、逐電退出、雖搜求禁中、敢不候、遂以退出云々、如此之間殆及鐘鳴、衆人稱奇異、凡此貫首未練之由、天下謳歌、父卿年來其志深、此人又見來、而爲人被輕賤、實以遺恨也、天性頗非其器量、歟、實以不便々々、歎思不少者也、明日祇園臨時祭上卿已下事、尋遣光長朝臣、申云、上卿事、外記未申散狀云々、此事藏人方沙汰歟、申狀不審、仍尋遣大外記賴業之許、如案申爲藏人方沙汰之由、十五日、辛雨下、藏人辨親經參上、依物忌在門外、

申明日仗議公卿散狀、又有他事等、余仰云、今日祇  
臨臨時祭事、定無奉行人之歟、參內可尋沙汰、若有  
奉行人之者神妙、不然者可尋沙汰一歟者、即參內了、  
此事偏六位相存可申沙汰、而近代藏人等爲體不足  
言、仍上薦職事等、雖可申沙汰、又以各懈怠之間、  
所驚尋也、御祿陪膳光長朝臣、爲輕服日數內有  
憚、仍可催他人之由仰之、又上卿事猶可催之  
由、同仰之、及申刻光長申云、上卿源中納言、使光  
綱、陪膳經家朝臣所領狀也云々、然間聞闕如之由、  
余直催遺賴房、又領狀、後聞賴房早參仍發遣、光綱其  
後參上云々、禁中事親經申沙汰云々、

十六日、壬戌〔天〕晴、申刻參內、直衣、依字佐仗議也、乘  
獨公卿等參集、仗議之間無別儀云々、子刻事訖、余  
退出、冷泉家女房先是渡居、大將綱代車、二人、前驅諸  
大夫六七八人、布衣、余隨身右府生兼次在共、大將中將  
等乘車也、相從、在出車之前、出車召家司職事車  
二兩也、侍等相、大將召人車、朝臣、侍從高通恩從、今  
日出仕以前、光長宗賴、親經等、條々事來申、〔光長〕  
所進之文書之中、有寶劔求使景弘注申靈夢靈端等  
之解狀、可被行孔雀經法之由有夢想云々、

今日仗議、上卿宗家卿、執筆左大辨兼光、自餘公卿等、  
忠親卿、宗家卿、(雖輕服日數之內、先例神宮事猶不憚之、仍所召  
也、但除服之後也)家通卿、通親卿、雅長卿、隆房卿等也、(已上八人也)  
十七日、癸亥雨下、五位藏人親經親雅等、申條々事、神  
宮上卿事、以親經遺宗家卿亭、仰神宮上卿事、  
未定、被申可奉行之由、又親經申云、去十五日祇  
臨時祭奉行之間、爲吉上等散々被放言了、無術  
事也云々、仰他職事、可致沙汰之由仰之、親雅  
申寶劔御祈奉幣之間事、大外記賴業參會、社數之  
間事有沙汰、大略十二社宜歟之由存之、但去年依  
此御祈、九社十六社等之奉〔行〕幣例、可注進之由  
仰賴業了、明後日可有北政所始事、吉例之事多辨  
官一人被補之、仍仰遺基親朝臣許、殊畏申之由令  
申、

十八日、甲子〔天〕晴、頭右中辨兼忠來、申初齋宮并奉幣  
之間事、又行幸供奉次將、不參遺御事申院之處、  
可計沙汰之由有院宣、定長奉書如此云々、余云、  
如此事參上可被申也、爲自今以後、可有御沙汰  
之由所申也、於其上成敗者、可在御定、私不可  
申是非、此〔之〕由早參上可奏聞者、大藏卿宗賴  
參上、申明日明後日條々事等、密々仰北政所家司侍



所別當等、各爲告示也、自光長許又申條々事、依所勞一兩日不出仕也、多武峯惡僧龍歸房召出之間、仰遣能保之許之處、不申左右云々、仍可相尋之由仰了、件法師隱置義行之由有指申者、仍日來被尋之處、此兩三日之間所召出也、

十九日、丑〔天〕晴、此日、女房政所始并分藏人所侍所等、先有北政所始事、未刻、宗賴朝臣參來申、今日不審事等、晚頭家司等參集、先是圖書頭在宣朝臣參入、令勘可造藏人所簡之日時、入宮付近習者覽之、見了返給、其後陰陽師退出、無可入之事、故也、北政所始者兼日間日、當日無成勘文之儀、先例也、次余召宗賴於前、仰北政所家司、并年豫、親朝臣、及侍所別當等、昨日密、次宗賴入、令旨二通於宮、持來、一通家司、余取之披見了、令見女房之後、返授宗賴了、宗賴取之退下、次家司五人列中門外、西上、光綱申次之、先申余方、於二棟廊南、次申女房方、就藏殿面要月、共二拜、豫宗賴朝臣申云、可爲先何御方、說余仰曰北之禮、可爲先夫之上、廣和知足院殿內覽之時、家司等先申、次家大殿、以之思之、可爲先家之長、況余爲攝政之重位、說者、次家司相引着政所、假爲其所、年豫基親朝臣申吉書、近國御封米、先以職事傳覽余、令見了返給、其後基親自百石解文、

取之、入、就寢殿南庇東面妻戸、傳女房覽之、女房面、朝臣前、見了返給、基親歸着政所、成返抄了、注、藏殿、北政所云々、

令旨書樣、

正四位下行太皇太后宮亮兼伊豫守源朝臣季長、大藏卿正四位下藏原朝臣宗賴、從四位下行權右中辨平朝臣基親、正五位下守左京權大夫藤原朝臣光綱、民部少輔從五位下兼行和泉守藤原朝臣長房、右被仰仰、件等人宜爲北政所別當者、

文治二年六月十九日、

別當大藏卿正四位下藤原朝臣宗賴奉、

正六位上行民部少錄安倍朝臣親行、

右可爲知家事、

右辨官史生從七位上口口季俊、

右可爲案主、

被仰仰、件等人宜行北政所事者、

年號月日署所 同前



次職事十人許着藏人所、臺盤行事訖、上野守賴高申吉書、方上庄年貢米見了返給、成定器儲給諸國、次侍所別當三人、國成、今日列中門、以職事兼時、申事由、再拜、相引着侍所、在北又行臺盤、又成定器儲云々、侍所別當、

彈正大弼高階資泰朝臣、

中務少輔源兼親、

散位藤原經泰、

藏人所々司三人、

散位家職、今補、少判事基貞、本所司、

文章生盛尙、今補、

侍所司二人、

散位時輔、前大膳進重俊、已上本所司

廿日、丙寅陰不雨、此日、勸學院衆、參賀攝政之慶、寢殿南庇東第一間、敷高麗端坐一枚、南北裝件間東面妻戶、南面格子等懸几帳但

爲余座、妻戶以北東西三ヶ間、南面東第二間以西六ヶ間、垂簾出几帳帷、不出女房凡寢殿東南兩面不懸燈爐、余座東面妻戶前、透渡殿西造合間、迤北

欄、舉燈、中門廊四ヶ間、敷滿弘筵、敷紫端坐六枚、座上下井典座後有路、端座

追柱、○追一作通敷之、座上下中央立燈臺舉燭、與平頭

立之、依其、中門廊北三ヶ間、尋常公卿座也、敷高麗端六枚、對

爲上達部座、障子上臺盤不撤之如例、藏人所又同、申刻、奉行家司大藏卿宗賴朝臣參上行雜事、

酉刻、奉行職事經泰、仰所司令辨備饗饌、机廿前、人着衣冠、件饗饌、政所勤之、兼日備用、乘燭、上達部、殿役之、

上人、役諸大夫等來集、未事始以前、中御門大納言、并權中納言等、招入出居、先大納言、其後謂中納言、來隨之、學生等遲參、相待之間暫移刻、戌終學生等參來、余在寢殿異角間座、衣冠、嘉承直衣、保安二同四年等仍還保安、次有官無官別當、文章生、學頭、氏秀才範時依所爲良、依無先、學生等各廿人、列立東中門外、已上着東例不召之、家司大藏卿宗賴朝臣、氏家司也、相逢取見參、插文杖、入

自車寄戶、經學生座末、依余前掌燈消、儀、井中門廊西緣、透渡殿等、跪指寄文杖、余以左手、裏簾、取見參、如本垂簾、宗賴取空杖、經本路退下、余見文、有禮紙、無、紙、留置之、此間、余隨身府生以下着揭冠、立明前庭、次有官別當以下學生等、入自東中門、上首當階間、但依庭狹人多、漸西進、知院事等在後列、此事先例或留中門、今用保安皆悉列了再拜、次自上膳、經列前、昇自中門外方、次第着座、典端相分、有官無官別當着典座上、文章生學頭着端座上、抑先例多昇、自中門內

方而此家中門此無<sub>三</sub>股間、仍不<sub>三</sub>持<sub>三</sub>香脫之<sub>三</sub>次一獻、與座權大納  
同、無<sub>三</sub>便<sub>三</sub>于<sub>三</sub>昇降<sub>三</sub>之故、自<sub>三</sub>外<sub>三</sub>方<sub>三</sub>昇也、<sub>右大將承保以後例、中納言</sub>  
言宗家卿、端座權大納言良通卿、<sub>動<sub>三</sub>一<sub>三</sub>獻<sub>三</sub>動<sub>三</sub>孟<sub>三</sub>而<sub>三</sub>勸<sub>三</sub>新例<sub>三</sub></sub>  
之<sub>三</sub>處<sub>三</sub>寬和<sub>三</sub>寬仁<sub>三</sub>神安<sub>三</sub>大納言<sub>三</sub>勸<sub>三</sub>之<sub>三</sub>就<sub>三</sub>中寬仁<sub>三</sub>例<sub>三</sub>今<sub>三</sub>度<sub>三</sub>仍<sub>三</sub>復<sub>三</sub>舊<sub>三</sub>  
規<sub>三</sub>用<sub>三</sub>大納言<sub>三</sub>也<sub>三</sub>宗家爲<sub>三</sub>親<sub>三</sub>呢<sub>三</sub>其<sub>三</sub>通<sub>三</sub>爲<sub>三</sub>子<sub>三</sub>息<sub>三</sub>得<sub>三</sub>境<sub>三</sub>川<sub>三</sub>例<sub>三</sub>類<sub>三</sub>以<sub>三</sub>自<sub>三</sub>設<sub>三</sub>  
各起<sub>三</sub>座<sub>三</sub>經<sub>三</sub>學生<sub>三</sub>座上<sub>三</sub>出<sub>三</sub>南<sub>三</sub>第四<sub>三</sub>間<sub>三</sub>東<sub>三</sub>面<sub>三</sub>妻<sub>三</sub>戶<sub>三</sub>於<sub>三</sub>障<sub>三</sub>子<sub>三</sub>  
上<sub>三</sub>取<sub>三</sub>孟<sub>三</sub>與<sub>三</sub>座<sub>三</sub>勸<sub>三</sub>孟<sub>三</sub>人<sub>三</sub>居<sub>三</sub>學生<sub>三</sub>座上<sub>三</sub>之後<sub>三</sub>端<sub>三</sub>座<sub>三</sub>勸<sub>三</sub>孟<sub>三</sub>人<sub>三</sub>  
更<sub>三</sub>經<sub>三</sub>座<sub>三</sub>上<sub>三</sub>着<sub>三</sub>端<sub>三</sub>座<sub>三</sub>學生<sub>三</sub>座上<sub>三</sub>也<sub>三</sub>更<sub>三</sub>昇<sub>三</sub>界<sub>三</sub>各<sub>三</sub>瓶<sub>三</sub>子<sub>三</sub>取<sub>三</sub>相<sub>三</sub>  
從<sub>三</sub>與<sub>三</sub>座<sub>三</sub>人<sub>三</sub>右<sub>三</sub>衛<sub>三</sub>門<sub>三</sub>橋<sub>三</sub>佐<sub>三</sub>親<sub>三</sub>雅<sub>三</sub>各<sub>三</sub>轉<sub>三</sub>孟<sub>三</sub>於<sub>三</sub>第<sub>三</sub>二<sub>三</sub>人<sub>三</sub>之後<sub>三</sub>起<sub>三</sub>  
座<sub>三</sub>復<sub>三</sub>座<sub>三</sub>先<sub>三</sub>與<sub>三</sub>座<sub>三</sub>勸<sub>三</sub>孟<sub>三</sub>人<sub>三</sub>經<sub>三</sub>座<sub>三</sub>上<sub>三</sub>下<sub>三</sub>長<sub>三</sub>押<sub>三</sub>之後<sub>三</sub>端<sub>三</sub>座<sub>三</sub>  
勸<sub>三</sub>孟<sub>三</sub>人<sub>三</sub>起<sub>三</sub>座<sub>三</sub>也<sub>三</sub>二三<sub>三</sub>獻<sub>三</sub>勸<sub>三</sub>孟<sub>三</sub>後<sub>三</sub>准<sub>三</sub>可<sub>三</sub>知<sub>三</sub>次<sub>三</sub>二<sub>三</sub>獻<sub>三</sub>與<sub>三</sub>座<sub>三</sub>  
權<sub>三</sub>中<sub>三</sub>納<sub>三</sub>言<sub>三</sub>隆<sub>三</sub>忠<sub>三</sub>卿<sub>三</sub>瓶<sub>三</sub>于<sub>三</sub>紀<sub>三</sub>伊<sub>三</sub>守<sub>三</sub>純<sub>三</sub>光<sub>三</sub>聖<sub>三</sub>儒<sub>三</sub>士<sub>三</sub>端<sub>三</sub>座<sub>三</sub>權<sub>三</sub>中<sub>三</sub>納<sub>三</sub>言<sub>三</sub>  
定<sub>三</sub>能<sub>三</sub>卿<sub>三</sub>從<sub>三</sub>定<sub>三</sub>家<sub>三</sub>此<sub>三</sub>間<sub>三</sub>學<sub>三</sub>生<sub>三</sub>等<sub>三</sub>欲<sub>三</sub>發<sub>三</sub>朗<sub>三</sub>詠<sub>三</sub>宗<sub>三</sub>賴<sub>三</sub>加<sub>三</sub>制<sub>三</sub>止<sub>三</sub>  
先<sub>三</sub>例<sub>三</sub>三<sub>三</sub>獻<sub>三</sub>有<sub>三</sub>此<sub>三</sub>儀<sub>三</sub>之<sub>三</sub>故<sub>三</sub>也<sub>三</sub>次<sub>三</sub>三<sub>三</sub>獻<sub>三</sub>與<sub>三</sub>座<sub>三</sub>參<sub>三</sub>議<sub>三</sub>雅<sub>三</sub>長<sub>三</sub>卿<sub>三</sub>瓶<sub>三</sub>于<sub>三</sub>紀<sub>三</sub>伊<sub>三</sub>守<sub>三</sub>純<sub>三</sub>光<sub>三</sub>聖<sub>三</sub>儒<sub>三</sub>士<sub>三</sub>  
侍<sub>三</sub>從<sub>三</sub>端<sub>三</sub>座<sub>三</sub>三<sub>三</sub>位<sub>三</sub>中<sub>三</sub>將<sub>三</sub>良<sub>三</sub>經<sub>三</sub>卿<sub>三</sub>瓶<sub>三</sub>于<sub>三</sub>少<sub>三</sub>納<sub>三</sub>言<sub>三</sub>類<sub>三</sub>房<sub>三</sub>次<sub>三</sub>居<sub>三</sub>汁<sub>三</sub>諸<sub>三</sub>大<sub>三</sub>夫<sub>三</sub>役<sub>三</sub>  
高<sub>三</sub>通<sub>三</sub>之<sub>三</sub>家<sub>三</sub>司<sub>三</sub>職<sub>三</sub>事<sub>三</sub>及<sub>三</sub>世<sub>三</sub>而<sub>三</sub>此<sub>三</sub>間<sub>三</sub>學<sub>三</sub>生<sub>三</sub>發<sub>三</sub>朗<sub>三</sub>詠<sub>三</sub>初<sub>三</sub>度<sub>三</sub>加<sub>三</sub>佳<sub>三</sub>辰<sub>三</sub>之<sub>三</sub>  
兩<sub>三</sub>字<sub>三</sub>第<sub>三</sub>二<sub>三</sub>反<sub>三</sub>署<sub>三</sub>之<sub>三</sub>已<sub>三</sub>上<sub>三</sub>次<sub>三</sub>四<sub>三</sub>獻<sub>三</sub>與<sub>三</sub>座<sub>三</sub>式<sub>三</sub>部<sub>三</sub>大<sub>三</sub>輔<sub>三</sub>光<sub>三</sub>範<sub>三</sub>朝<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>  
用<sub>三</sub>音<sub>三</sub>第<sub>三</sub>三<sub>三</sub>反<sub>三</sub>用<sub>三</sub>調<sub>三</sub>音<sub>三</sub>瓶<sub>三</sub>于<sub>三</sub>職<sub>三</sub>事<sub>三</sub>仲<sub>三</sub>盛<sub>三</sub>端<sub>三</sub>座<sub>三</sub>文<sub>三</sub>章<sub>三</sub>博<sub>三</sub>士<sub>三</sub>業<sub>三</sub>實<sub>三</sub>朝<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>瓶<sub>三</sub>于<sub>三</sub>職<sub>三</sub>事<sub>三</sub>仲<sub>三</sub>盛<sub>三</sub>  
但<sub>三</sub>樂<sub>三</sub>實<sub>三</sub>端<sub>三</sub>座<sub>三</sub>文<sub>三</sub>章<sub>三</sub>博<sub>三</sub>士<sub>三</sub>業<sub>三</sub>實<sub>三</sub>朝<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>事<sub>三</sub>仲<sub>三</sub>盛<sub>三</sub>此<sub>三</sub>兩<sub>三</sub>人<sub>三</sub>共<sub>三</sub>故<sub>三</sub>人<sub>三</sub>  
也<sub>三</sub>兼<sub>三</sub>家<sub>三</sub>司<sub>三</sub>四<sub>三</sub>獻<sub>三</sub>勸<sub>三</sub>孟<sub>三</sub>故<sub>三</sub>人<sub>三</sub>勸<sub>三</sub>之<sub>三</sub>蓋<sub>三</sub>先<sub>三</sub>例<sub>三</sub>也<sub>三</sub>但<sub>三</sub>故<sub>三</sub>人<sub>三</sub>一<sub>三</sub>人<sub>三</sub>  
之<sub>三</sub>時<sub>三</sub>或<sub>三</sub>家<sub>三</sub>司<sub>三</sub>或<sub>三</sub>殿<sub>三</sub>上<sub>三</sub>人<sub>三</sub>相<sub>三</sub>逢<sub>三</sub>勸<sub>三</sub>之<sub>三</sub>次<sub>三</sub>五<sub>三</sub>獻<sub>三</sub>與<sub>三</sub>座<sub>三</sub>左<sub>三</sub>少<sub>三</sub>將<sub>三</sub>  
兼<sub>三</sub>宗<sub>三</sub>朝<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>瓶<sub>三</sub>于<sub>三</sub>職<sub>三</sub>事<sub>三</sub>仲<sub>三</sub>盛<sub>三</sub>端<sub>三</sub>座<sub>三</sub>右<sub>三</sub>少<sub>三</sub>將<sub>三</sub>伊<sub>三</sub>輔<sub>三</sub>朝<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>瓶<sub>三</sub>于<sub>三</sub>職<sub>三</sub>事<sub>三</sub>仲<sub>三</sub>盛<sub>三</sub>  
復<sub>三</sub>飯<sub>三</sub>也<sub>三</sub>其<sub>三</sub>體<sub>三</sub>非<sub>三</sub>飯<sub>三</sub>只<sub>三</sub>湯<sub>三</sub>飯<sub>三</sub>各<sub>三</sub>六<sub>三</sub>丈<sub>三</sub>美<sub>三</sub>相<sub>三</sub>一<sub>三</sub>正<sub>三</sub>々<sub>三</sub>四<sub>三</sub>位<sub>三</sub>以<sub>三</sub>  
復<sub>三</sub>飯<sub>三</sub>也<sub>三</sub>先<sub>三</sub>例<sub>三</sub>云<sub>三</sub>々<sub>三</sub>可<sub>三</sub>尋<sub>三</sub>次<sub>三</sub>賜<sub>三</sub>祿<sub>三</sub>別<sub>三</sub>以<sub>三</sub>紙<sub>三</sub>卷<sub>三</sub>其<sub>三</sub>上<sub>三</sub>々<sub>三</sub>四<sub>三</sub>位<sub>三</sub>以<sub>三</sub>

下家司職事役<sub>三</sub>之<sub>三</sub>次<sub>三</sub>學<sub>三</sub>生<sub>三</sub>等<sub>三</sub>退<sub>三</sub>出<sub>三</sub>次<sub>三</sub>撤<sub>三</sub>饗<sub>三</sub>諸<sub>三</sub>司<sub>三</sub>官<sub>三</sub>人<sub>三</sub>  
乍<sub>三</sub>机<sub>三</sub>取<sub>三</sub>之<sub>三</sub>賜<sub>三</sub>學<sub>三</sub>生<sub>三</sub>從<sub>三</sub>先<sub>三</sub>例<sub>三</sub>下<sub>三</sub>人<sub>三</sub>兒<sub>三</sub>童<sub>三</sub>等<sub>三</sub>昇<sub>三</sub>堂<sub>三</sub>上<sub>三</sub>  
慢<sub>三</sub>取<sub>三</sub>之<sub>三</sub>今<sub>三</sub>度<sub>三</sub>仰<sub>三</sub>隨<sub>三</sub>身<sub>三</sub>等<sub>三</sub>禁<sub>三</sub>止<sub>三</sub>之<sub>三</sub>但<sub>三</sub>於<sub>三</sub>庭<sub>三</sub>相<sub>三</sub>互<sub>三</sub>取<sub>三</sub>  
之<sub>三</sub>甚<sub>三</sub>以<sub>三</sub>狼<sub>三</sub>藉<sub>三</sub>次<sub>三</sub>人<sub>三</sub>々<sub>三</sub>退<sub>三</sub>出<sub>三</sub>宗<sub>三</sub>家<sub>三</sub>卿<sub>三</sub>賜<sub>三</sub>祿<sub>三</sub>之<sub>三</sub>時<sub>三</sub>被<sub>三</sub>今<sub>三</sub>日<sub>三</sub>來<sub>三</sub>集<sub>三</sub>  
公<sub>三</sub>卿<sub>三</sub>所<sub>三</sub>役<sub>三</sub>六<sub>三</sub>人<sub>三</sub>外<sub>三</sub>無<sub>三</sub>之<sub>三</sub>是<sub>三</sub>又<sub>三</sub>先<sub>三</sub>例<sub>三</sub>抑<sub>三</sub>或<sub>三</sub>祿<sub>三</sub>以<sub>三</sub>前<sub>三</sub>撤<sub>三</sub>  
饗<sub>三</sub>然<sub>三</sub>而<sub>三</sub>案<sub>三</sub>事<sub>三</sub>理<sub>三</sub>學<sub>三</sub>生<sub>三</sub>起<sub>三</sub>座<sub>三</sub>之<sub>三</sub>後<sub>三</sub>可<sub>三</sub>撤<sub>三</sub>饗<sub>三</sub>也<sub>三</sub>加<sub>三</sub>之<sub>三</sub>  
保<sub>三</sub>安<sub>三</sub>四<sub>三</sub>年<sub>三</sub>如<sub>三</sub>此<sub>三</sub>仍<sub>三</sub>遂<sub>三</sub>彼<sub>三</sub>例<sub>三</sub>也<sub>三</sub>委<sub>三</sub>旨<sub>三</sub>可<sub>三</sub>見<sub>三</sub>宗<sub>三</sub>賴<sub>三</sub>記<sub>三</sub>  
廿<sub>三</sub>一<sub>三</sub>日<sub>三</sub>丁<sub>三</sub>雷<sub>三</sub>雨<sub>三</sub>親<sub>三</sub>經<sub>三</sub>持<sub>三</sub>來<sub>三</sub>宇<sub>三</sub>佐<sub>三</sub>仗<sub>三</sub>議<sub>三</sub>定<sub>三</sub>文<sub>三</sub>呼<sub>三</sub>前<sub>三</sub>仰<sub>三</sub>子<sub>三</sub>  
細<sub>三</sub>先<sub>三</sub>可<sub>三</sub>持<sub>三</sub>向<sub>三</sub>左<sub>三</sub>大<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>許<sub>三</sub>之<sub>三</sub>由<sub>三</sub>仰<sub>三</sub>了<sub>三</sub>條<sub>三</sub>々<sub>三</sub>可<sub>三</sub>被<sub>三</sub>計<sub>三</sub>申<sub>三</sub>  
兼<sub>三</sub>又<sub>三</sub>可<sub>三</sub>召<sub>三</sub>諸<sub>三</sub>道<sub>三</sub>勘<sub>三</sub>文<sub>三</sub>而<sub>三</sub>勘<sub>三</sub>奏<sub>三</sub>之<sub>三</sub>後<sub>三</sub>有<sub>三</sub>議<sub>三</sub>被<sub>三</sub>定<sub>三</sub>者<sub>三</sub>定<sub>三</sub>  
及<sub>三</sub>懈<sub>三</sub>怠<sub>三</sub>歟<sub>三</sub>尤<sub>三</sub>不<sub>三</sub>便<sub>三</sub>且<sub>三</sub>可<sub>三</sub>被<sub>三</sub>勘<sub>三</sub>下<sub>三</sub>假<sub>三</sub>殿<sub>三</sub>日<sub>三</sub>時<sub>三</sub>哉<sub>三</sub>被<sub>三</sub>  
召<sub>三</sub>勘<sub>三</sub>文<sub>三</sub>ばかり<sub>三</sub>にて<sub>三</sub>は<sub>三</sub>其<sub>三</sub>條<sub>三</sub>又<sub>三</sub>無<sub>三</sub>謂<sub>三</sub>仍<sub>三</sub>可<sub>三</sub>忿<sub>三</sub>勘<sub>三</sub>申<sub>三</sub>  
也<sub>三</sub>殊<sub>三</sub>可<sub>三</sub>被<sub>三</sub>下<sub>三</sub>知<sub>三</sub>之<sub>三</sub>由<sub>三</sub>可<sub>三</sub>傳<sub>三</sub>左<sub>三</sub>大<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>旨<sub>三</sub>同<sub>三</sub>含<sub>三</sub>了<sub>三</sub>親<sub>三</sub>  
經<sub>三</sub>向<sub>三</sub>彼<sub>三</sub>大<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>亭<sub>三</sub>令<sub>三</sub>歸<sub>三</sub>來<sub>三</sub>云<sub>三</sub>諸<sub>三</sub>道<sub>三</sub>勘<sub>三</sub>文<sub>三</sub>尤<sub>三</sub>可<sub>三</sub>被<sub>三</sub>召<sub>三</sub>何<sub>三</sub>  
強<sub>三</sub>及<sub>三</sub>遲<sub>三</sub>怠<sub>三</sub>哉<sub>三</sub>召<sub>三</sub>別<sub>三</sub>勘<sub>三</sub>文<sub>三</sub>人<sub>三</sub>々<sub>三</sub>可<sub>三</sub>下<sub>三</sub>知<sub>三</sub>云<sub>三</sub>々<sub>三</sub>予<sub>三</sub>仰<sub>三</sub>  
之<sub>三</sub>  
紀<sub>三</sub>傳<sub>三</sub>兼<sub>三</sub>光<sub>三</sub>卿<sub>三</sub>光<sub>三</sub>範<sub>三</sub>朝<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>  
明<sub>三</sub>經<sub>三</sub>兼<sub>三</sub>樂<sub>三</sub>師<sub>三</sub>尙<sub>三</sub>  
又<sub>三</sub>左<sub>三</sub>大<sub>三</sub>臣<sub>三</sub>云<sub>三</sub>明<sub>三</sub>法<sub>三</sub>今<sub>三</sub>度<sub>三</sub>可<sub>三</sub>被<sub>三</sub>下<sub>三</sub>歟<sub>三</sub>其<sub>三</sub>故<sub>三</sub>可<sub>三</sub>有<sub>三</sub>斷<sub>三</sub>罪<sub>三</sub>  
事<sub>三</sub>之<sub>三</sub>故<sub>三</sub>也<sub>三</sub>者<sub>三</sub>答<sub>三</sub>可<sub>三</sub>然<sub>三</sub>由<sub>三</sub>了<sub>三</sub>此<sub>三</sub>外<sub>三</sub>又<sub>三</sub>條<sub>三</sub>々<sub>三</sub>親<sub>三</sub>經<sub>三</sub>有<sub>三</sub>申<sub>三</sub>事<sub>三</sub>

等、又宗賴朝臣申法成寺修造之間事、奏覺執行、聖顯  
 別當、等參、法成寺修理事、相分兩人可奉行之由仰  
 之、雖無先例、各爲勵其心也、加之、聖顯爲修  
 理別當、前長者之時一切不口入、尤不審、奏覺又前長  
 者之時、奉行此事、隨又頗知故實者也、仍一向難  
 弄之間、仰付兩人、金堂阿彌陀堂、先以可終其功、  
 仍金堂奏覺、無量壽院聖顯、所仰付也、

廿二日、戊晴、小雨、定經條々事來申、此次諸社諸寺  
 修造事、上卿可被定仰經房之由可申旨仰了、又  
 時貞勸賞事、給賴朝卿申狀了、仰可奏之由、又親  
 經申吉上放言事、可奏之由同仰之、又貴布禰社傍  
 大樹、依昨日風顛倒、殆欲打損神殿之由、本社禰  
 宜來觸、仰可付職事之由了、及晚親雅來觸此  
 由、可奏之由仰之、且又仰可勘例、又遣官傳可  
 實檢之由了、又申廿六日奉幣、殿上人使之散狀、  
 又公卿之使之中、定能卿可勸仕八幡使、而申當月  
 粧者之由云々、仰可問例之由、賴業勘申之、仍  
 可奏之由仰之、

廿三日、巳雷雨、定經、親雅來、申條々事、定經傳院  
 宣云、三ヶ條聞食了、時貞事尤可然、旦尋問可令

申云々、仍能保朝臣許違尋了、

廿四日、庚雨下、親經來申條々事、未刻、外記來云、今  
 口、東寺國忌、參議不參、本分配基家卿稱所勞、仍兼  
 催通資卿領狀、只今辭退、仍觸職事等之處、各不  
 申達云々、仍令書御教書、使以外記遣定經之  
 許、各可催之由仰之、入夜申云、各不參、他諸司等  
 參上行之云々、凡此十餘年、一切諸司不參、仍去比  
 余奏事由被仰下、去廿一日隆房卿參入、今日闕如  
 云々、但辨已下諸司、參入行之云々、

廿五日、未晴、昨今物忌也、召龍少將成家朝臣、服暇  
 也、其料又輕、仍今日可被免歟之由、可申之旨仰  
 兼忠朝臣了、此日親經來申條々事、又親雅申奉幣  
 之劔事、

廿六日、壬晴、此日被求寶劔十二社之奉幣也、上卿  
 忠親卿、

伊勢、石清水、加茂、松尾、平野、稻荷、春日、大  
 原野、石上、住吉、廣田、日吉、

此外鹿島、香取、熱田等賜官符、

廿七日、癸晴此日、右少辨親經召具陰陽師大外記  
 大夫史等來、爲宇佐假殿造營之間日時沙汰也、神



殿修造可避王相方哉否、陰陽道申旨不同、事弘中、由、在實中、不、可、足、之、由、子細雖多不具記、今日、山科寺所司爲衆徒使來、三台巡問事也、以親經令尋問之、又仰含了細了、

廿八日、戊、晴、此日、造興福寺長官改任除目也、件、長官、氏院別當所、兼帶也、仍、兼、日、同、例、於、外、記、兼、事、之、由、改、補、次官以下不改之、此次成功之輩、兩三人補之、又有小僧事、東大寺明遍律師被任、小僧都三會第一也、寂勝講次僧事不被任、三會巡一明遍日來寵居、二別當僧正無所望云々、三辨曉去年臨時任少僧都、今年任大僧都過分、如此之間、追可有沙汰之由有評定、而大衆隱訴、仍以明遍被推任也、以親經一條々奏事由、蒙可許行之、上卿左兵衛督、此夜始文殿、以中門南廊爲其所、立黑漆撥足大盤二脚、其左右敷紫端疊六枚、南庇敷同疊一枚、西面格子不懸垂布、南面懸之、置硯筆、着到、有、親、先使陰陽師勘申日時、兼、仰、可、召、國、由、而、親、經、忘、却、仍、仰、主、稅、勘、安、倍、晴、光、親經取行之、依爲別當也、代々例也、入宮覽之、見了返給、次衆等書下書下知之、

從四位下行掃部頭中原朝臣廣季、

正五位下行明經博士中原朝臣師直、不參、  
正五位下行大炊頭兼助教中原朝臣師綱、  
正五位下行算博士三善朝臣行衡、  
散位從五位下中原朝臣俊光、不參、

正六位上行明法博士左衛門少尉中原章貞、  
正六位上行明法博士右衛門少尉中原明基、  
次別當藏人左少辨親經、率衆等着文殿、居、大、殿、一、例、飯、也、獻之後張文着到、次退出、親經爲五位藏人、可着座哉否之由申之、仰云有何事哉、貫首兼家司、奉行家雜事之故也、

廿九日、乙、朝天晴、午後時々雨下、是日於殿上、有字佐宮定、余西刻着直衣參內、暫候朝餉邊、此間親經持來師尚廣房等勘文、親、經、勘、即下直廬改着朝服、召親經返給勘文、小時親經來、告人々皆參之由、即參御所方、於鬼間邊親經持來賴業勘文、見了返給、次余入上戶、着殿上、與、座、御、先是公卿六人在殿上、宗、家、卿、忠、親、卿、通、親、卿、推、長、卿、隆、房、卿、兼、光、卿、廣、所、能、先、殿、上、日、參、參、使、隨、之、殿、也、其、中、寶、家、家、通、兩、卿、稱、病、不、參、此、外、左、兵、衛、督、相、實、雖、相、能、余、召、親、經、令、進、勘、文、余、如、形、稱、未、練、之、由、不、參、余召親經令進勘文、余如形見了授宗家卿、件、卿、在、端、座、第、一、起、座、仰、可、定、申、之、由、宗家卿略見勘文、授忠親卿、已、上、兩、卿、如、形、見、之、通親卿以下、



且下勘文一見之、依余命也、至兼光卿之許、宗家卿仰

可讀申之由、氣色余兼光讀勘文等、先讀了後余仰

曰、被問例事三ヶ條也、其外可被定申一事二ヶ條、

所謂假殿日時可被勅使哉、將且以官使可愈

遣歟、并今度假殿可用黑木否哉事等也、并五ヶ條

可被定申也、宗家卿以此由、傳示左大辨、即兼光

卿發語、次第定申、其路注訖、人々定不得開事等、重

合申之、此同召親經令聞之、注風記爲令奏院也、其後重以談議、予問

人々曰、治安以後代々、多以四位爲使、今度同可

然歟、又可遣辨官歟、仗議時人々定不同、今度勅

使不可被付幣帛神寶者、強不可及官位高下

之沙汰歟如何、人々曰、可被遣辨官也、今度必不

可遣四位、兼光卿曰、可引率史以下也、保延石

清水燒失之時、左少辨雅綱率史以下々々向之例也、人

人同此議、此〔外〕細々事等不遑記錄、取上勘文、

宗家卿示氣色、答可付職事之由、即招親經付

之、次予起座向直廬、召親經〔卿〕仰曰、明日召

具兩明法博士、可來冷泉亭者、即改着直表退出、

于時亥四點也、人々定趣、

一假殿遷宮可被調獻神寶哉事、

宗家以下隆房以上、定申云、必不可被調獻、正遷

宮之時、本宮宰府等、調進神寶、准彼例、若有可

入之神寶者、相計可調進之由、可被仰宰府

歟、兼光卿申云、就本宮注文、要須神寶少々、尤可

被調獻、予云、和氣使以前、被獻神寶如何、兼

光云、如此非常事、雖和氣使以前、有何事哉、若

猶可無便者、和氣使同時可下向歟暫徘徊便宜

所、遷御假殿之後、可獻〔幣〕帛歟、予曰、此議

不甘心、唯任治安之例、載行事所始日時於官符、

御與神寶等、任例可奉調之由、可被仰下、其上

猶自公家可被調獻之由、令申之時、重可及

議定歟、人々服膺、兼光卿又申云、奉結改薦御

驗間、所奉掩之錦綾之類、於京都織之由、有

所見、又傳承之、召用途於都督及管國在京吏、且可

被調獻云々、

一清祓可仰犯人之緣座哉事

一同申云、可仰緣座之人、此中通親卿云、只仰宰

府、仰豐後國可勤仕之由、可被仰、依爲犯

人所在之國也、

忠親卿云、可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>緣座<sub>一</sub>者、只可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>宣<sub>二</sub>下其旨<sub>一</sub>也、  
可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>宰府<sub>一</sub>者、又不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>指<sub>二</sub>一國<sub>一</sub>云々、其條尤可然

一假殿可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>黒木<sub>一</sub>哉否事、

宗家忠親通親等卿申云、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然、雅長隆房兼光等卿、可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>黒木<sub>一</sub>、但兼光申云、若有<sub>二</sub>疑者<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御占<sub>一</sub>歟、

一日時可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>勅使<sub>一</sub>哉否事、

宗家忠親通親等申云、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>之、此中忠親申云、若可<sub>レ</sub>懈怠者、勅使以<sub>二</sub>官使若私使<sub>一</sub>竊先可<sub>二</sub>下道<sub>一</sub>也、

雅長隆房兼光申云、早以<sub>二</sub>別使<sub>一</sub>先可<sub>二</sub>忍遣<sub>一</sub>也、

一廢朝自<sub>二</sub>何日<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>哉事<sub>一</sub>、

一同申云、自<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>勘<sub>二</sub>下假殿日時之日<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰<sub>一</sub>下之、通親申云、發<sub>二</sub>遣勅使之日<sub>一</sub>、又有<sub>二</sub>何事<sub>一</sub>哉、

一勅使可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>誰人<sub>一</sub>哉事、

一同申云、辨官可<sub>レ</sub>宜、兼光申云、可<sub>レ</sub>率<sub>二</sub>史已下<sub>一</sub>歟、  
一黃金事、

一同申云、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>和氣使<sub>一</sub>歟、

子細雖<sub>レ</sub>多大概不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之、

退出之後有<sub>二</sub>六月祓事<sub>一</sub>、余女房姬君在<sub>二</sub>一所<sub>一</sub>、陪膳伊豫

守季長朝臣、役供職事男共等也、依<sub>レ</sub>雨陰陽師在<sub>二</sub>階隱間土<sub>一</sub>、事訖大將中將等方各別有<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>、

右文治二年夏一帙墨付百拾三枚者以予家古本先年松殿右幕下道昭卿被繕寫之畢秘握而不讓他號玉葉爲后昆之儀範末苗可貯深奧者也

慶安二年<sub>丑</sub>季夏仲旬虫拂日陶化翁(花押)記焉

玉葉卷第四十五終

## 玉葉

## 卷第四十六

自文治二年七月  
至同年九月

文治二年

七月〔大〕

一日、于晴、以親經奏去夜定狀於院、每事不知食  
案內、只可計沙汰也云々、其內勅使事、基親朝臣可  
宜、明日假殿遷宮日時可被勅下之由聞食了者、去  
夜定內條々事等、可仰合左府事仰親經了、此日  
兼光卿來、召藤原義字佐宮之間事、假殿遷  
宮之間、神寶者可被調具之由、本宮申上者、定違亂  
出來歟、仍和氣使相具神寶、遷宮期以前下向、若必可  
有京下、神寶者可備彼威儀之由、兼光去夜定申  
之趣、今日猶陳其旨趣、此事猶短慮難覃事歟、今日  
召大外記師尙、陰陽師二人、宣弘明法博士二人、範真  
等、以親經問條々事、  
一清祓事、

問云如格文者、大上中下祓、皆載其過之輕重、  
犯死罪之者不及科祓歟、而本宮仰罪科之輩、

可被行祓之由註申、諸卿定、又同法意之所指、  
如何、

兩儒申云、法家之所存、神官等有過怠之時、清祓  
其身也、所載格卽是也、於可清本社之汚穢、  
之祓者、召用途於諸司、以神祇官被祓者例也、  
以犯科之輩、可令進祓用途之由、全所不存  
也云々、

一御方違行幸日事、

來八日滿廿五日、而彼日爲沒日、七日白川院御忌  
日、雖不置國忌、若可有思慮哉、自明日五  
々日宇佐廢朝也、仍六日以前不可叶、但若自五  
日被行廢朝者、四日行幸如何、而廣瀨龍田祭  
也、廢務日行幸、又以不穩者、七日與五日輕重如  
何之由、問師尙、師尙云、共有例、於七日者、非  
廢務、強不可憚歟、但有他日者何事之有哉、  
一沒日除日數事、

凡人之習、計方違日數之時、除沒日不除例也、公家同可然哉之由、問兩陰陽師、宣憲申云、除沒日者今案也、不可然云々、復問云、計土用之時土用存中者、以二十九日滿之、除沒日事何謂今案哉、加之道之先達會釋如此、今所申太不當、若不辨前後歟、將又公家不用此法歟如何、宣憲卷舌閉口、勿論々々、

季弘申云、除沒日一定例也、不論公家臣家所用來如此云々、先日問之、不可除之由申之、與今申狀相違、兼不案歟

此夜依方違向九條、依爲歸忌日、不向本家宿堂廳、今日以定經、宇佐之間條々事仰帥卿、此日、陰陽師季弘云、一日白鳥出來顯信卿、吉祥也云々、二日、晴、此日被勘下字佐宮假殿日時、上卿中御門大納言宗家卿、本承此事之上卿也、今日彼大納言、送書札於奉行職事親經云、爲大神宮上卿之人、奉行他事不可然之由、有所見、被問例之後可參陣云々、被申旨太無謂、然而問外記以彼申狀可加催、仍仰其由、賴業勘申先例等、仍必可參之由仰遣了、余酉刻許着直衣參內、依未發前聲如恒、先是上卿以下皆參、親經先內々令見日時官符

等草、見了返給、仰早可勘申之由、良久親經持來日時、入爲、可始行事所、依治安例也、并立柱上棟遷宮等日時也、勘文、見了返給、此次親經申云、可作官符之事兩條、日時事、永承元年例載一紙、爲先日時少破修理、與載清祓事可依彼例歟、官申云、同時遣一所事、多載一紙歟、隨其例如此者、師尙申云、彼永承例強不可被追用、無故損折損、頗爲相異歟、別紙宜歟云云、余云可被行事次第、先清祓之後可始假殿事歟、然者須端可載清祓事也、而假殿日時之前、被載清祓事之條似有憚、任永承例、與載祓事、又乘道理、於先例條者、強雖不可憚事、已各別也、次第又可依違、仍別紙可造之者、又良久之後、親經來云、廢朝事請印之後可仰歟如何、余問云、官符造上之歟如何、申云官符覽上卿、左大辨并少納言賴房等參結政了者、余云、於廢朝者諸司政不憚歟、廢務之時、殊繁之、覽官符了者、早可仰下者、件官符治安例、外文也云々、或記內文之由見云、即向陣頭仰廢朝事、依字左云、然而賴業申外文之由也、爲勅使參向彼宮、可實仰藏人了、先是、勘日時、爲勅使參向彼宮、可實檢之由、召仰權右中辨基親了、召內裏所仰也、事訖余退



出、下向之官使也、

使部

兩人、能擇其人、隨差期日、其日

以前可<sub>レ</sub>到着<sub>二</sub>之由、殊可<sub>レ</sub>召仰、又巡路國々及太宰府、

殊可<sub>レ</sub>召仰、兼又基親朝臣可<sub>レ</sub>相伴<sub>一</sub>也、官吏々生官掌

等、能可<sub>レ</sub>撰<sub>二</sub>其器量<sub>一</sub>之由、可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>廣房<sub>一</sub>之旨仰<sub>二</sub>親經<sub>一</sub>

了、於內清祇官符、可<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>犯人<sub>一</sub>之緣坐輸<sub>二</sub>用物<sub>一</sub>之由、

本宮言上、又諸卿定申、然而依<sub>二</sub>保元例<sub>一</sub>并法家申狀、可

使<sub>二</sub>宰府祇清<sub>一</sub>之由行所<sub>レ</sub>賜<sub>二</sub>官符<sub>一</sub>也、日時官符同給<sub>二</sub>

宰府、然而於<sub>二</sub>日時符<sub>一</sub>者所<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>本宮<sub>一</sub>也、此日、密々女

房參<sub>二</sub>吉田祇園等<sub>一</sub>、是年來之例也、北政所之後、雖可<sub>レ</sub>整頓、先例不詳之上、當時又無<sub>レ</sub>便宜、仍爲<sub>レ</sub>密儀、

侍三四人在<sub>レ</sub>共、用<sub>二</sub>人車<sub>一</sub>、定能藤氏職事賴高著<sub>二</sub>衣冠<sub>一</sub>

參會、吉田社司執<sub>レ</sub>幣、又賜<sub>二</sub>祿大掛一<sub>領</sub>、雖<sub>二</sub>密儀<sub>一</sub>

故、行之姬御前所<sub>二</sub>相具<sub>一</sub>也、兼日基親申云、北政所可

有<sub>二</sub>御行始<sub>一</sub>歟如何、檢<sub>二</sub>天仁殿<sub>一</sub>保安<sub>故殿</sub>例<sub>二</sub>之處<sub>一</sub>、無

所<sub>レ</sub>見、仍不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其儀<sub>一</sub>之由仰<sub>レ</sub>之、今日以<sub>二</sub>吉曜

始<sub>二</sub>參詣氏社<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>悅耳、女房云、白鳥去廿八日出來、

其色同<sub>二</sub>白鷺<sub>一</sub>、其足頗赤云々、此日、季弘進<sub>二</sub>勘文<sub>一</sub>、德至

者白鳥到、又肅<sub>二</sub>敬宗廟<sub>一</sub>者白鳥到云々、今宇佐宮事

有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、仍有<sub>二</sub>此瑞祥<sub>一</sub>歟云々、

三日、戌時、入<sub>レ</sub>夜雨下、親雅來申<sub>二</sub>寶劔御所之間事<sub>一</sub>、入

女房冷泉局以

今日於

院有<sub>二</sub>種々評定<sub>一</sub>云々、去比檢非違使公朝、院近臣候爲<sub>二</sub>御使下<sub>一</sub>向關東、此兩三日歸參、奏<sub>二</sub>賴朝卿申狀<sub>一</sub>云、萬事可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>君御意<sub>一</sub>之由云々、其次有<sub>二</sub>攝錄事等<sub>一</sub>其狀云、此事全非<sub>二</sub>彼惡望<sub>一</sub>、又非<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>引級之思<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>身無<sub>一</sub>其益、只衆口之所<sub>レ</sub>寄、其仁在<sub>二</sub>彼人<sub>一</sub>也、指余前攝政一切、不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>萬機<sub>一</sub>之由、世上福哥、仍偏思<sub>二</sub>天下事及君御事<sub>一</sub>之故、所<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>出此事<sub>一</sub>也、隨又有<sub>二</sub>天許<sub>一</sub>、而今被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>旨、其趣不不能<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>、是非只在<sub>二</sub>觀念<sub>一</sub>云々、又私示<sub>二</sub>公朝<sub>一</sub>云、一所家領有數云々、雖<sub>レ</sub>不知<sub>二</sub>案內<sub>一</sub>事、當時殿下一切不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>家領<sub>一</sub>、尤不便、前攝政又併被<sub>二</sub>避<sub>一</sub>所領、尤可有<sub>二</sub>其系惜<sub>一</sub>、然者以<sub>二</sub>高陽院方<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>前攝政領<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>京極殿方<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>當時殿下領<sub>一</sub>、尤可<sub>レ</sub>宜歟如何云々、以<sub>二</sub>此狀<sub>一</sub>同達<sub>二</sub>敕問<sub>一</sub>云々、以<sub>二</sub>此等之趣<sub>一</sub>終日評定、女房升後、并冷泉局、法皇三人同居、又以<sub>二</sub>御書<sub>一</sub>、遣<sub>二</sub>前攝政家<sub>一</sub>、又奉<sub>二</sub>對<sub>一</sub>書往復及<sub>二</sub>兩三反<sub>一</sub>云々、染<sub>二</sub>宸筆<sub>一</sub>書數枚、明曉可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>飛脚<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>其狀<sub>一</sub>者人不知、然而大略所領事、一向可<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>前長者<sub>一</sub>之由歟云々、愚察不<sub>レ</sub>疑、只所<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>春日大明神御計<sub>一</sub>也、非<sub>二</sub>人力之所<sub>一</sub>、耳、中心之所<sub>レ</sub>思、上天定照監歟、

四日、卯天陰雨下、又風烈、親經申<sub>二</sub>宇佐宮使下向之間事<sub>一</sub>、巡路國々供給事也、又定經申<sub>二</sub>御方違行幸之間

事、又申他條々、各在目錄、

五日、晴、親經申三宇佐宮條々事、大夫史廣房參入、

所遣大官司許之書札案經御覽、少々可直之由

仰了、又勅使基親、驛家雜事之間事、并官使下向事等

申之、勅使自海路可下向、且是治安資業例也云

云、又召陰陽師等、季弘、清惠、兼俊等參上、問御方違之間事、定經

奉之、又親雅申寶劔御所之間事、未得、又宗賴申

條々事、又仰講堂行事之由、申承之由、及晚參

九條堂、依故女院御月忌也、大將同車召入車、經家、朝臣、

季經朝臣以下、君達諸大夫等連車、侍兩三人在共、

車懸下簾、密々儀也、入夜歸來、亥刻許藏人辨親經、

又馳來云、肥前國司賜假殿成功、而可行三萬正功

之由、官令申、當時可造營殿舍四字、細殿三字、准七

千正敷、所殘二萬餘正、可割置正殿遷宮用途之

由、有沙汰、而件四字之外、其力不可及之由、再三

固辭、事已違亂、然而様々仰含、所詮可進濟二萬正

之由、所申請也、如何云々者、余仰云、近代管國如

無、隨又事急速也、賜二萬正功、全非公損敷、但可

奏院之由仰之、親經申云、件官使明曉可下向、雖

片時之可、愈下向、期日迫之故也、今夜明日輒難

奏聞、敷、爲之如何、仰云、此事一向可計沙汰之由

有院宣、此條又不可有公損、若狹國給二萬正成功

者、以之思之、殆可謂過分、仍只仰此由、召取證

文、國解也、追可奏聞、於此條者、存神事早速之要、其

過可懸身不爲苦、早可仰下者、親經退出、此

日祇候八條院之少兒來、此日、天文博士業俊申云、

今日寅刻、洛中蝶降、恠異也云々、可問兩大外記之

由、仰定經了、

六日、辛巳天晴、法印被來、

七日、壬午晴、定經持來胡蝶事、外記勘文二通、本朝廷

長之比、雖有可相類之例、吉凶不詳、漢家例可

勘申之由、重仰了、又來九日可行軒廊御占之由、

召仰了、大外記賴業持來今日政始日時、見了返給、廢

朝之後今日政始也、此次外記不奏三月奏之由、尋問

之、官去月奏、五月、申云、去月被仰下之間、去月々奏、今

月可奏敷之由、恐存之、驚令仰、重可催促云々、

申刻着直衣、朝代、相伴大將、同、參院御所、左大臣大炊、

候、上達部座、以定長入見參、仰云、依風氣不

調、若有可申事、截云々、申殊可奏事、依久不

參、令參入之由申之、此次余問定長云、朝觀行

幸并御賀事等、度々奏事由、于今不承分明仰、奉爾有沙汰者不可叶、爲之如何、定長示可取御氣色之由參了、小時歸來云、其不可然之由思食、然而又必可有者、強不及御固辭云々、余申云、於朝覲者必可候、奉爲法皇者今始雖有御讓、強不可爲攘災之計、奉爲主上、惣無此禮之條、似忘至孝之禮、尤不便歟、御賀事期日漸迫、早速可承存之、左右可在、觀念仰云、行幸事聞食了、必可有、早可有也、御賀事天下衰弊、定有煩歟、加之今年御慎年也、如此事強不可、然之由思食、但又可問人々歟云々、申承之由退出、此本不人々然而依仰可問之、參內乘燭歸宅、戌刻、女房始着節供、家司上薦季長朝臣勤仕、陪膳權右中辨平基親朝臣參勤、也、役送北政所家司光綱、長房、不足余方職事等補闕也、折敷高坏十二本、白龜甲織物折敷、南面簀子立燈臺二本、舉燈、無立明、女房着二盃單重、女郎花二重織物表、着蘇芳二唐織物小褂、生紅袴、陪膳女房、京極并取入女房兩人、皆着物具張袴等、他女房少々又刷衣裳祇候、女房御座、帳臺前敷高麗端疊一枚、可敷二枚而依此張二枚一枚也、其上敷龍鬘一枚、其上敷唐錦茵一

也、余御供不着之、陪膳實參朝臣、戌刻、親經持來藏人方吉書、廢朝之後所奏也云々、以人傳覽之、其後申字佐之間事、今晚官使下向了、又成功國司重申文、可進濟二萬正之由也、仰可奏之由了、乞巧奠事、職事良清奉行、子刻疾腹痛、依吉日也、過亥刻之間及深更、八日、癸天陰、藏人辨親經來、申字佐間事、又召藏人次官定經、仰御賀可被行否事可問人々之由、左府、內府、依昨日院宣也、定經申帥卿申、諸社修造忠親、經房、依昨日院宣也、之間條々事、九日、申陰晴不定、是日爲御方違行幸大內、乘燭伴良通良經、余別車、兩人同車、參內、余於殿上見日時、定經、次有召仰事、上卿右大將留守、參議兼光卿、辨基親朝臣、次余參御所、召經家朝臣、令奉仕御總角并御裝束等、定經申事具之由、次渡御南殿、余擇笏取御裾、頭辨兼忠取余裾如恒、宣憲朝臣奉仕反閉、右次將渡左、公卿列立南庭、右大將經階前立、階坤、聞司奏之後、少納言奉仕鈴奏、次寄御輿、宰相中將泰通卿奉仕神璽役、乘御儀如常、御輿出御東門、仍余出自右衛門陣、於冷泉油小路乘車、馳參大



內、於陽明門下車、經化德宣仁等門、昇南殿東階、徘徊御帳西邊、相待臨幸、先是內侍二人儲候、小時乘輿渡御、經御待賢處禮承明等門、公卿入東下御之後、奏通欲取置御宮之間、主上御殿、仍余參上奉駕退歸、通持退御、更參進、取件御宮、授內侍之後、余又參進奉下之、與少納言良久不參、仍召定經問之、答不可、有鈴奏之由、余仰可有之由、責出少納言令奏之、其後名謁、次渡御本殿、經長橋并清涼殿廣廂同額間等、入御如恒、余向宿所、待報鐘之間、召季經々家等朝臣、侍從定家等、密々有連歌興、兩息乍着、束帶一寢、愚父雖解脫不寢、定經告刻限吉成之由、則參御所、經家奉仕御裝束等如恒、次出御南殿、事々存例、但無反閉例也、鈴奏之後寄御輿、乘御之後余降、自東階、於陽明門乘車、又馳參開院、入自西陣、參南殿、即以還幸、下御之後、鈴奏名謁又如例、其後還御本殿、余伴二息還出、于時天漸明之間也、

今日參內公卿、

大納言、右大將瓦通、

中納言、實家、家通、

參議、雅長、泰通、  
隆房、通實、

散三位、中將瓦通、

家通、實宗、雅長、泰通等、不參還御、奇恠、

今日出仕以前、來申御賀之間人々申狀、大略不可有之趣也、內府申狀未到、仰相待彼狀、可奏院之由、

十一日、丙晴、早旦典藥頭定成參上、只今向奈良僧正許、三禁有再發之氣、仍爲令見云々、仍依此事、昨日所召定成也、所差遣兩都也、而進依本所召參向云々、仍使給書狀了、及晚定經進御賀事、內府申狀、取具人々申狀、可奏院之由仰之、又宗賴申條々事、多是御寺造營之間事也、入夜藏人行經、來覽御筵請奏、

十二日、丁午上天晴、未刻以後天陰、雨時々降、午刻、藏人辨親經、持來宇佐宮諸道勘文、兼光所未付、勘文之合九通也、只今左大臣所被送也云々、兼光勘文只今付上卿之由、令申云々、來十七日可有仗議、若所勞有減者、可被出仕、歟之由、可仰左大臣旨仰之、若不被出仕者、內大臣出仕可尋之由、同仰之、此外申初齋宮之間條々事、即向左大臣亭了、此日、前因幡守廣元、爲賴朝卿使上洛、向經房卿亭示條々事云



云、藏人行經持來殿上見參、留之、入夜、藏人基定持來犬頭系解文、此五六年來一切無所濟、而今年始有此事、天下屬豐饒之驗也、

十三日、戊子晴、藏人辨親經來、申字佐宮、并初齋宮之間事、左大臣十七日難出仕之由被申、又仗議、大將殿尤可有御參之由被申云々、年齡未及、非別御定者、難參之由申了、基親朝臣來申下向之間難事、早旦經房卿見送關東書札、條々有申旨、皆是天下之至要也、可隨喜々々々、

十四日、己丑晴、晚頭持來盆供等、故女院、故殿、光明院等也、一具各四合也、然而各昇上一合於中門廊、格勳者、之後、申案內、仍着冠直衣、持念珠、臨其所、預敷高麗爐臺一枚爲余座、其前敷小爐三枚、

藏事三人、國行、信光、經泰、着衣冠、先置長櫃蓋於小庭上、其上取置盆供等、退下、次余拜之各三度、又竊滿光明真言等了、藏事等參上、如本納長櫃之後余歸入、

此日光長朝臣來申條々事、今朝廣元來臨、示條々事等云々、其內去比公朝來關東、爲余吐樣々惡言等、偏戴爾射山振己威、停廢院御領、解官院近習者等、几不能左右、因茲法皇不剃頭、不切手足爪、寢食不通、閉籠御持佛堂中、以所修行業、

可廻向惡道之由、摧肝膽、住惡心、偏忘他事、有御念願、所積爲尊下指和、太無要之中、構辨說稱之、賴朝頗雖驚奇、所示過法、仍還又有不信用之氣色、仍爲糺此異僞、俄所差土廣元也云云、余案之、若寫在頂、全不爲苦、中心奉公之志、佛神定有照鑒歟、

十五日、庚寅晴、長者之後未參御堂、仍今日不參法成寺、保安例也、法成寺孟蘭盆事、自兼日致沙汰、

萬事催具、入夜宗賴朝臣、并奉行藏事仲盛等參來、申不似近例、每事嚴重之由、公卿二人、前源中納言賴光、殿上人五六輩、諸大夫十餘人、自悉紙布等無不具、無餘分云々、糴料又支配御寺庄々、皆悉催出了、

今日依例終日念佛、不聞雜務不謁人、此日、光長參上、申置退出了云々、親雅又同淨妙寺盆供、前攝政沙汰云々、入夜經房卿以經泰有告示事、自關東

申家領可被分之子細、依此事、法皇逆鱗之趣也、十七日、壬辰晴、此日被謝申字佐宮狼藉事於石清水

之事幣也、仍午刻着直衣參內、上卿使未參、各遣人了、則參內、先定日時使等、參議左大臣、親經持來覽之、見了、更不返給、次發遣、自陣、事訖余退出、依神

必不快也、此日經房卿以有經、有示事、昨日召廣  
元於院、被仰條々御返事、家領之問事逆轉之儀、忽  
變只至令乞請給云々、朕今生思量事、只此一事  
也云々、或人云、昨朝先依召廣元參院、女房丹州謁  
之、傳種種勅語、其實法皇居丹後之傍、令教訓其  
詞給云々、其中余不忠之由、粗有其趣等云々、及  
晚前源中納言來臨、余謁之、

十八日、已晴、此日、大將密々展詩筵、宗賴基親朝臣  
以下威上人少々、業實朝臣已下儒士五六輩、都十余人  
會合、各辨官之外皆布衣、大將中將又同、題云秋生  
賢士家、題中、其後有連句并當座詩等、業實出題云々、  
十九日、晴、光長息小男補藏人自余家勾、之後、今日  
拜賀云々、相具來、召小男名宜於前、先是傳奏吉書、  
今日從事云々、光綱親經、定經等相從云々、此日中御  
門大納言被來、余大將共謁之、差瓜氷等、大將習  
儀馬樂、入夜兼雅卿來密々勸等、大將和笛、余輒調  
琵琶、老狂也、外聞有耻云々、此日光長親雅、親經、  
定經來、申數々條事、此夜有小除目、大宰小貳敦綱、  
國司、爲參會宇佐遷宮也、左兵衛尉時貞依召進三行  
家、有綱等之賞也、又補內侍一人、少納言權方入道女、先朝內侍也、然而有沙

決不被  
懷也

廿日、未定能卿來、基親朝臣參上、申御馬御裝束等  
事、入夜靜賢法印來、

廿一日、中雷鳴大雨、即晴了、此日有仗儀并季御讀經  
定等、雨後着直衣參內、先是大將參陣、依季御讀  
經定也、余參內以前、大將着陣定御讀經事、兼光卿  
書之、小時兼忠朝臣來覽日時定文、行事辨也、依私補事、  
不見即返給了定云々、大將歸參御所方、即余大將共  
向直應休息大將退出了、依不可候定座事也、左  
大臣再三被示可參之由云々、然而幼年之者、不  
候大事定、故殿丞相之後猶無御參、身勤上卿者  
別事也、今一兩年不可預大事仗議歟、但於別御  
定者非此限、而無其仰、仍不參也、他人有若亡之  
輩、多參入或懇望云々、是見苦事也、抑宇佐定以前、被  
定佛事、頗有疑、仍尋例之處不可勝計、仍先定  
之、戌刻、公卿參集、仍有陣定、先宇佐宮諸道勘文  
事、次條事定云々、光範朝臣勘文聊有不吉事之由、  
親經申出、仍尋問之間、覽經時刻、依有例不正勘  
文定了、子刻退出、其後經數刻有定云々、此日已  
刻發遣三社奉幣、爲御寺造營無爲令違也、先例棟

上之時、雖有此事、事始之間不必然、有所思、殊所表、謹慎也、早日<sup>日出</sup>文章博士業實朝臣、持來告文、草、有改直事等、相續宗賴朝臣參來、先覽草、次令

清書<sup>文殿大監物有賴、件男通、依二日高、今二通、密々以二</sup>他人<sup>之故、今日刻限通也、</sup>書了宗賴又持來、見了留文

返宮、次出庭上座、次供御贖物、陪席資泰朝臣、役供奉行職事經泰、次陰陽師主稅助安倍晴光參上、次三

社幣列立八足南、西上南面、<sup>以春日、爲先敷、</sup>春日使、文章博士業實朝臣、

大原野<sup>〔使〕</sup>、文章博士光輔朝臣、吉田使、左京權大夫光綱、

已上氏家司也、各持<sup>〔持〕</sup>參幣列立也、

次有祝事了、陪膳取<sup>〔取〕</sup>大藤持來、撫了返給、撤贖物、

陰陽師退出、次先取<sup>〔取〕</sup>春日幣、向南兩段再拜、<sup>今二社、向列立、</sup>次大原野、<sup>向、次吉田、向東、</sup>各兩段再拜、返給幣之次

給告文<sup>〔告文〕</sup>、<sup>先開見給之也、件、告文在國中、也、</sup>幣皆悉出門了、歸昇解脫、參

內退出之後、着衣冠、又降庭、<sup>數、</sup>更遙拜、依有所

廿二日、<sup>丁</sup>少雨、宗賴朝臣來申<sup>〔申〕</sup>條々事、造講堂行事家司、今一人、可仰<sup>〔仰〕</sup>資泰朝臣之由仰了、親雅申<sup>〔申〕</sup>條々事、

廿三日、<sup>戌</sup>晴、光長朝臣來申云、延勝寺御八講始、即近衛院御忌日也、辨不候、催<sup>〔催〕</sup>兼忠之處、稱<sup>〔稱〕</sup>所勞不

參、近代如<sup>〔如〕</sup>然事、不可及<sup>〔及〕</sup>沙汰<sup>〔汰〕</sup>歟如何、仰云、近代例不可<sup>〔可〕</sup>據用、辨官皆有<sup>〔有〕</sup>障、汝早可<sup>〔可〕</sup>參仕<sup>〔仕〕</sup>也者、申

可<sup>〔可〕</sup>參之由、親經申<sup>〔申〕</sup>宇佐使條々事、驛家雜事決定關如歟、上西門院、一切不可<sup>〔可〕</sup>叶之由、被<sup>〔被〕</sup>申返、又院御領

事、花山院大納言返報之旨、甚不當、各重可<sup>〔可〕</sup>仰遣之由、仰含了、前源中納言所<sup>〔所〕</sup>勸進<sup>〔進〕</sup>之經書之根本勸進、

俊經入道也、我深敬<sup>〔敬〕</sup>汝等之一句、以<sup>〔以〕</sup>金泥<sup>〔泥〕</sup>人別所書也、

廿四日、<sup>亥</sup>晴、午刻、光長朝臣、相<sup>〔相〕</sup>具南都興福寺所司三人<sup>〔人〕</sup>參上、<sup>所司候、</sup>余召<sup>〔召〕</sup>光長問之、申<sup>〔申〕</sup>條々訴訟、其

中先日所<sup>〔所〕</sup>返給<sup>〔給〕</sup>之奏狀事、申<sup>〔申〕</sup>兩條子細、<sup>具折、猶可、被</sup>行<sup>〔行〕</sup>斬罪之由也、返々奇恠無極、仍仰<sup>〔仰〕</sup>其子細、但先

日副<sup>〔副〕</sup>起請、載<sup>〔載〕</sup>奏狀<sup>〔狀〕</sup>、奏聞早訖之由令<sup>〔令〕</sup>申、仍今度不

能<sup>〔能〕</sup>返給、只仰<sup>〔仰〕</sup>無道子細了、法皇御<sup>〔御〕</sup>參<sup>〔參〕</sup>籠日吉、相<sup>〔相〕</sup>待還御可<sup>〔可〕</sup>奏聞也、今日午刻地震、入<sup>〔入〕</sup>夜向<sup>〔向〕</sup>九條、



密々、招廣元一謁之、粗陳鎌倉子細、又仰所思了、  
 申刻、親雅來申條々事等、寶劍御祈之間事、參仁和  
 寺宮令申了、先被修他法、遂若無法驗者、重可  
 被行孔雀經法敷之由、被申云々、仰可奏聞之  
 由了、定經又申條々事、造寺行事家司今一人、資泰  
 申難下向之由、仍仰範季申可下向之由、  
 廿五日、庚晴、午刻自九條歸冷泉、定經申明日季  
 御讀經之間事、能保示送云、九郎義行郎徒、伊勢三郎  
 九島首了云々、造興福寺次官仲基、日來申可初參  
 之由、仍殊無專一之者之間、不申申改、而明後  
 日依事始、明日行事官家司等可下向、仲基同可下  
 向之由風聞、而于今不見來、先例不來長者許  
 之人、爲造寺官之例、未曾有、仍儘可止、仲基下  
 向之由、仰光長了、仲基高名白人、也奇恠々々、自  
 本于今不改補、余之失也、是光長推舉之故也、  
 廿六日、辛晴、早旦召橘以政朝臣、補造寺次官、明曉  
 可下向之由仰之、申承了之由、橘氏雖未有補  
 次官之例、非源平兩氏之者、強不止也、所謂高家  
 并海氏等補之故也、加之北圓堂行事家司、以政之曾  
 祖父以綱被仰之、云造寺官云奉行家司撰其

姓之條惟同、仍准以綱之例補以政也、以政領狀  
 之後、以親經奏事之由、有勅許、仍今夜季御讀經  
 之次、所申補也、此日、春季御讀經始也、仍著束帶、  
 未刻參內、相件右大將、衛印上卿也。先是公卿已下多以參集、相續  
 內大臣參入云々、仍以奉行職事定經、可被定申御  
 前僧之旨、仰內大臣、先例不依本奉行、上卿當座  
 上臈定申之故也、余進造馬於主上、叙感殊甚、頻以  
 有御興、小時兼忠朝臣、持來御前僧定文、并闕請文  
 等、各書一紙、無遺紙入宮。余于時在三間、見了返給、兼忠申云、  
 威儀師未參者、仰早可遣召之由、其後良久猶不  
 參、及申終召兼忠問子細、申云、惣在臨經緣、  
 先日申所勞之由、相扶可參之由仰之、其後病非詐  
 僞、猶有資者、可辭所職之由令申、仍可召進他  
 威儀師之由、加下知了、而于今不參、經緣之過怠  
 也、余仰云、可差進他人之由、加下知有請文  
 哉、兼忠云不然、余又云、尋聞交名哉、兼忠云不  
 然、重加勸資云、沙汰之緩怠不可過也、先爲惣  
 在廳之者、強不可申虛病、譴責之法可依人、又  
 可依事也、又許所請、被仰可進代官之由之  
 時、可召其請文、其上可尋聞交名也、一々之事皆





公卿連署之與、年號之與、一字、上天、書、可字、返給、歸參御前、即退出了、

今日參入公卿、

內大臣、

大納言、良通、

中納言、家通、隆忠、定能、布衣、

參議、雅長、兼光、布衣、通資、

此後有小除目、

造寺次官從四位下橘以政、

同主典、

右少史、

上卿定能卿、參議通資卿、

廿七日、壬晴、申刻雷雨即晴、此日、初度上表也、午刻、

大藏卿宗賴朝臣、使陰陽師圖書頭在宣朝臣勘、申日

時、在宣候、藏人入宮持來、余於二棟廊南面見之返

給、未刻、上達部並役人清實等參入、作者未參、堀川

大納言忠親卿殊早參、仍使大將賜之、其座如常、但除余

上、其後余着冠直衣、出居上達部座、其座如常、但除余

又、藏人次家司宗賴朝臣、來申親經參入之由、仰可

召之由、即藏人右少辨親經、取副表草於多入、自

車寄戶、經中門廊西緣、參上候、長押下、隨目膝行  
昇長押、置笏進表草、余取之置前、親經退候、長  
押下、次余見表了、如本卷之目親經、々々參進、余  
給表仰可讀之由、親經乍候、長押上讀之、余示  
人々進寄同可見之由、各頗居寄、親經讀了、返上之、  
即退下、余取之置前、次召人、宗賴朝臣參上、賜草  
仰可消書之由、宗賴取之退下、於北面返、使中  
務權少輔伊經消書之、宗賴歸參申云、御名字或疏書  
之、或註書之、今度如何、余仰保安度々例皆疏書之、  
又案事理不可書註、忠親云、註書例固有之、仍此  
次余仰云、可持參表宮檣紙等、宗賴退下、即檣紙上  
置表宮、如花持來之置、余前退下、余退仰可  
令昇案之由了、次職事國行經泰等昇案、有、又檢二  
篇加之、兩人昇立余座當間簀子敷、南北消書之間經時  
刻、與忠親卿交話、多是字佐(宮)之間事也、此間、  
左大辨兼光卿來、同談此事、申刻暴雨、所昇立簀子  
之案覆悉漏濕、仍召本役人令改立透渡殿、副南  
爲風雨能入、殿中仍良久宗賴朝臣、取副消書表於笏、  
除不濕之所立之、此間宗了與忠親卿、爲令見、餘件  
持來、余取之披見、親經退下、了與忠親卿、爲令見、餘件  
卿見了與右大將、余云、披置其前、可令見左大

辨者、如命披見、兼光(卿)進寄見之、余問、難之有無、兼光示、優美之由、各見了返上、余取之、開硯蓋、摺墨染筆(書)名二字、如本覆蓋了、更自與細卷之、取檀紙、先以一枚、重端一枚、表三枚也、卷之、次乍重二枚、爲禮紙一卷之、次又以一枚、爲禮紙、并四枚也、本所持來、皆卷了置座前、取表宮蓋置傍、之禮紙無餘分也、

取入宮覆蓋、召宗賴朝臣給之、宗賴指笏給之、逆退到表案下、覆之也、如本引覆之、以帶結之、當案下、テ片盛給之也、拔笏退下、次家司已下四人、正五位下助數兼大炊頭中原師綱、正五位下式部少輔兼紀伊守藤原範光、從五位上前馬助國行、數位從五位下藤原經泰等也、(師綱範光家司國行經泰)參上昇案、經中門廊出、自車寄戶、參中務省、路間表入、家司範光車、次召宗賴、仰作者清書等可賜

祿之由、次作者親經、參進中門廊簀子邊、次家司從五位上藤原爲季、故爲親子、取祿掛一領、不加袴、先例作者皆爲五位不給袴也、給之、親經取之、降自中門內方、徒脫於砌內、依雨不、再拜了退出、次清書伊經、同參中門廊西緣、自觀經、職事散位源兼時取祿掛一領、賜之、伊經懷中笏取之、於中門內再拜了退出、次

忠親卿退出、小時宗家卿來臨、覽賜之、余歸入、先是雅長兼光等退出、宗家卿參八條院了、

上表之間來臨公卿、  
忠親卿、良通卿、  
雅長卿、兼光卿、  
宗家卿追來也、

次仰宗賴、設勅使座、其儀、透渡殿敷滿弘筵、東三條對南廣庭殿之、而廣治近斷殿、副南欄、透殿敷之、油、彼例也、頗西方、敷高麗端疊一枚、其上敷龍圖一枚、其上敷東京錦茵、爲勅使座、副北欄、頗寄東方、敷高麗端疊一枚、爲取祿公卿座、被近斷殿、南北對座、敷之、是到東三條儀也、件透南、動使座、座有、今此透渡殿八尺也、仍續敷座者可無其路、仍以今案、副南北欄、頗參差着、天令敷之、於事有、當勅使座前、副北欄、寄西、立燈臺、舉燭、尋常上達部座垂簾、是又東三條、對南、面廣庭之故也、秉燭職事等歸來、申付省了之由、少相伊經、其後省官等參內、其後、頭右中辨兼忠朝臣持參表於法皇御所、以判官代爲賴奏聞、返給歸參云々、此間經數刻、今日依季卿(經)第二日、可有引地參內、引茶役了、亥刻、勅使權中納言定能卿來臨、持表宮進立中門、家司宗賴朝臣相逢申事之由、余着直衣、在尋常上達部座簾中、宗賴進西簀子申之、卽三位中將良經着束帶進出、上達部座北方、經中門廊西緣、降自同南妻、徒、相跪、捧笏取宮、更立右



廻歸昇、經本路、自<sub>二</sub>上達部座北第一間<sub>一</sub>、余雜當、簾下、指同也、指<sub>二</sub>宮拔<sub>一</sub>、宮拔、筭歸入本方了、余取<sub>二</sub>宮見<sub>一</sub>之、加<sub>二</sub>花足<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>檀紙二枚<sub>一</sub>、之、以所加表之、檀紙二枚、如<sub>二</sub>舊記<sub>一</sub>者、不可<sub>二</sub>加<sub>一</sub>花足、之、仍表仍表、檀紙一枚也、次余召<sub>二</sub>宗賴<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>勅使可<sub>一</sub>着座之由、即定能卿着、勅使座、次右大將良通卿出、自<sub>二</sub>上達部座北方<sub>一</sub>、經<sub>二</sub>同簀子<sub>一</sub>、着<sub>二</sub>北方座<sub>一</sub>、次家司伊豫守季長朝臣、取<sub>二</sub>祿樹一重<sub>一</sub>、也、來<sub>二</sub>大將座下<sub>一</sub>、獻<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、大將乍<sub>二</sub>居<sub>一</sub>、將、筭取<sub>二</sub>祿<sub>一</sub>、頗居寄授<sub>二</sub>勅使<sub>一</sub>、々々取<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、大將拔<sub>二</sub>筭退<sub>一</sub>座了、次勅使經<sub>二</sub>中門廊西簀子<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>同南妻<sub>一</sub>、降<sub>二</sub>出砌外<sub>一</sub>、依雨止、庭乾也、再拜退出了、此後有<sub>二</sub>吉書事<sub>一</sub>、官方、藏人方、政所、略<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、次余歸入、其後上<sub>二</sub>上達部座<sub>一</sub>、又撤<sub>二</sub>勅使座<sub>一</sub>、已上役諸司官人、著<sub>二</sub>衣冠<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>役也<sub>一</sub>、奉行職事長俊加<sub>二</sub>檢知<sub>一</sub>、敷<sub>二</sub>之<sub>一</sub>撤<sub>二</sub>之<sub>一</sub>同役人也、是先例也、上達部座與疊<sub>二</sub>帖撤<sub>一</sub>之、又硯宮同撤<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、次余出居<sub>二</sub>上達部座<sub>一</sub>、良通良經等在<sub>二</sub>座次<sub>一</sub>、宗賴朝臣先申<sub>二</sub>官方吉書候之由<sub>一</sub>、次左少辨定長、北、伊豫國年料米解文於<sub>二</sub>杖<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>自<sub>一</sub>車寄戶、同間、深揖、伺<sub>二</sub>氣色<sub>一</sub>、余目<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、定長稱唯、經<sub>二</sub>簀子<sub>一</sub>、參進々々文、余披見返給、結申退出如<sub>二</sub>例<sub>一</sub>、但有<sub>二</sub>度<sub>一</sub>、次藏人方頭右中辨兼忠朝臣、臨時、作法同<sub>二</sub>前<sub>一</sub>、但<sub>二</sub>無<sub>一</sub>兩度、宗賴申<sub>二</sub>次政所宗賴朝臣<sub>一</sub>、加

國御事訖歸入、今日依<sub>二</sub>吉曜<sub>一</sub>、參內、即退出、中辨取、今度表追<sub>二</sub>寬仁保安等例<sub>一</sub>也、兼日作者親經申云、寬仁表被<sub>二</sub>載<sub>一</sub>攝政大臣等、承保、寬治、長治、保安、皆被<sub>二</sub>載<sub>一</sub>攝政隨身等、不<sub>二</sub>載<sub>一</sub>大臣、今度如何、余仰云、攝政大臣隨身可<sub>二</sub>載<sub>一</sub>三ヶ事者、今日親經先申云、如<sub>二</sub>仰載<sub>一</sub>三ヶ事、但<sub>二</sub>傍例一兩度<sub>一</sub>如此、若可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>避哉、仍兩方設<sub>二</sub>草所<sub>一</sub>持參也者、余示<sub>二</sub>合忠親卿<sub>一</sub>、只任<sub>二</sub>近例<sub>一</sub>不可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>載<sub>二</sub>大臣<sub>一</sub>、不可<sub>二</sub>有<sub>一</sub>其難云々、仰可<sub>二</sub>載<sub>一</sub>攝政隨身許<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>了、余元可<sub>二</sub>載<sub>一</sub>大臣之由仰之、故去々々年<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>病也<sub>一</sub>、然而傍例等、專以不快之由、忠親云、在大臣之後、廿餘年了、強不可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>載、且承保以後、不被<sub>二</sub>載<sub>一</sub>即此故也、而依<sub>二</sub>返給表<sub>一</sub>可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>載之由、餘事也云、五位作<sub>二</sub>初度表<sub>一</sub>之例、昭宣公、季家、貞信公、朝綱、此外無<sub>二</sub>近例<sub>一</sub>云々、四位儒士光範朝臣作<sub>二</sub>十二攝政表<sub>一</sub>、業實作<sub>二</sub>前攝政表<sub>一</sub>、是皆初度也、共爲<sub>二</sub>不快<sub>一</sub>、加<sub>二</sub>之當時儒士之中<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>出<sub>一</sub>自<sub>二</sub>親經之右<sub>一</sub>者、仍檢<sub>二</sub>古跡<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>召<sub>一</sub>仰親經也、光輔等嫉妬云々、表、臣兼實言、蒙<sub>二</sub>去年十二月廿八日勅命<sub>一</sub>、官中雜事先觸<sub>二</sub>臣可<sub>一</sub>奉行、今年三月十二日詔書曰、依<sub>二</sub>爲<sub>一</sub>累代元功之胤、新授<sub>二</sub>萬機攝行之任<sub>一</sub>、又同十六日、勅加<sub>二</sub>賜左右近衛府生各一人<sub>一</sub>、以爲<sub>二</sub>隨身兵仗<sub>一</sub>者、前後之資涯湊已



盜、爲龍爲光、歲去歲來、臣實誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、伏惟、聖自貞觀之聖代、逮于我君之明時、攝斯萬機、在臣一門、或帝之外祖親舅也、於天下、不賤、或朝之元老賢才也、爲海內所歸、故能丹青神化、潤色鴻業者也、如臣者無材無藝、非老非親、只以先賢之胤、推當輔佐之任、負風展於明堂之位、驚心惟短、扶龍圖天闕之居、猥既無聊、帝鳩代、堯而行、政之齡、臣猶少十二年、姬公相、周而當朝之德、臣猶遠百萬里、何無繼齊之所、取、繼受負荷之重寄、頑素之甚愧墨而已、若夫慎小人而奸近、貪大名而忘退、則維翰在梁之訓焉、三百五篇之時可聞、亢龍知晉之誠矣、六十四卦之具在、眼、讀通朝端、只守禮之端、罷執政柄、專保德之極、伏願

陛下早停攝錄、隨身兵仗令付本府、上無妄授之、下無諛居之咎、爲君爲臣、不亦可、不任慙懼屏營之至、謹拜表陳乞以聞、臣實誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪謹言、

文治二年七月廿七日 攝政從一位行右大臣(々々)藤原朝臣兼實上

此日、興福寺事始、長官左中辨光長朝臣、次官前攝津守以政朝臣已下々向、家司木工頭範季朝臣、爲講堂南圓堂行事、同以下向、宗賴朝臣雖爲惣行事、依上表事不參、長房又雖加行事、依所勞不下向、仍範季一人所下向也、後聞吉時午酉云々、以政依當日下向願速々、仍酉刻始行云々、別當僧正依所勞不出座、權別當法印覺憲已下僧綱少々、并所司等多參會云々、又今日午刻、法成寺事始也、行事職事兼時參入行之、有御祈等、惣社奉幣、金堂誦經、此外仁王講、觀音經、御讀經、御念誦等也、此日於淨土寺邊堂、法皇爲故業房、有御佛供養、女房丹後同之、有臨幸、公卿等數人爲布施取參入、定能卿依參其座上表之間不來也、

廿八日、此日、季御讀經第三日御論義日也、仍爲聽聞、相伴大將入夜參內、千大將共直衣也、舊記云、近習公卿著直衣、自閑暇參入云々、仍所相具也、參上之後相尋之處、奉行職事未參、仍仰頭辨兼忠、行事先令行朝座、次於弓場殿座、令行番事、權別當覺憲綱所、并頭辨兼忠等在其座、是定例也、以中門南脇爲其所、頭南面番了、兼忠朝臣持來番文、今一通各給番備綱也、

余候<sub>三</sub>殿中見<sub>レ</sub>之、小時覺<sub>三</sub>憲參上、著<sub>三</sub>第一座<sub>一</sub>表白  
其聲如<sub>三</sub>鐘<sub>一</sub>之後、先召<sub>三</sub>一番<sub>一</sub>其詞、增覺大法師答、覺什大  
人入<sub>レ</sub>自<sub>三</sub>第一間<sub>一</sub>著<sub>三</sub>圓座<sub>一</sub>第一間、圓座、二枝、東西  
論義一帖也、其後、東方、圓座、上座、在四、各  
先例、第五番上臈隨喜了起了、其後僧徒退下、次余相<sub>三</sub>伴  
大將<sub>一</sub>退出、今日參內以前、橘氏長者以政朝臣持<sub>三</sub>來宣  
旨<sub>一</sub>去四月宣下、而外記文不須、依家司宗賴朝臣參會、相逢  
受<sub>三</sub>取之<sub>一</sub>、以<sub>三</sub>職事經奏<sub>一</sub>傳奏、先覽<sub>レ</sub>余、次令<sub>レ</sub>見<sub>三</sub>大將<sub>一</sub>、  
返給<sub>三</sub>即給<sub>一</sub>長者、次進<sub>三</sub>功過別當名籍<sub>一</sub>、大將見<sub>レ</sub>了<sub>三</sub>今度余不  
返給、宗賴書<sub>三</sub>下書<sub>一</sub>給<sub>三</sub>以政<sub>一</sub>、次進<sub>三</sub>社司見參<sub>一</sub>二通、  
定<sub>三</sub>是<sub>一</sub>、次宗賴以政等退出云々、宗賴未<sub>レ</sub>補<sub>三</sub>大將家司<sub>一</sub>、  
仍去廿六日光長朝臣給<sub>三</sub>令旨<sub>一</sub>光長元大將家司也、仍書下  
仍不能<sub>三</sub>奉行<sub>一</sub>、今日宗賴拜賀之後、申<sub>三</sub>吉書<sub>一</sub>云々、  
廿九日、甲晴、親雅、親經、定經等來、○來下條々事、此  
次仰<sub>三</sub>定經<sub>一</sub>云、季御讀經初日、威儀師退參之間事、彼  
日間<sub>三</sub>經緣<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>申之由仰<sub>三</sub>兼忠<sub>一</sub>、而于<sub>レ</sub>今無<sub>三</sub>申事<sub>一</sub>之  
間、自<sub>三</sub>仁和寺宮<sub>一</sub>被<sub>三</sub>觸示<sub>一</sub>云、經緣初申<sub>三</sub>所勞<sub>一</sub>、兼忠不  
<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>之、仍申<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>辭<sub>三</sub>所職<sub>一</sub>之由、而猶不<sub>レ</sub>許、其後無  
音、當日俄<sub>三</sub>就<sub>一</sub>隨實、仍令<sub>レ</sub>催<sub>三</sub>進俊紹<sub>一</sub>了、全非<sub>三</sub>經緣<sub>一</sub>之  
通意云々者、如<sub>レ</sub>然者奉行辨過意也、子細何様事哉、

早尋間可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>申者、今日以<sub>三</sub>親經<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>使、問<sub>三</sub>宇佐宮之  
間事於兩府、各行向了、入<sub>レ</sub>夜兼忠來、陳<sub>三</sub>威儀師退參  
之間事<sub>一</sub>、其旨甚無<sub>レ</sub>謂、仍仰<sub>三</sub>含子細<sub>一</sub>、粗加<sub>三</sub>勘發<sub>一</sub>、無  
<sub>レ</sub>所<sub>三</sub>于披陳<sub>一</sub>、太以不便云々、今日基親朝臣之許道<sub>三</sub>裝  
束<sub>一</sub>、依<sub>三</sub>申請<sub>一</sub>也、密々道之、不<sub>レ</sub>到<sub>三</sub>別半臂下襲表袴等也、  
衣<sub>三</sub>裏生<sub>一</sub>也、  
此日御季讀經結願也、余依<sub>三</sub>所勞<sub>一</sub>不快不<sub>三</sub>參內<sub>一</sub>、右大  
將三位中將等令<sub>レ</sub>參、大將爲<sub>三</sub>上首<sub>一</sub>云々、定能卿隆房  
卿在<sub>三</sub>兩殿<sub>一</sub>、大將已下八人候<sub>三</sub>御殿<sub>一</sub>、行香無<sub>三</sub>不足<sub>一</sub>云  
々、御殿御導師、證遍律師云々、晚頭三位中將先歸來、  
乘燭之後大將歸來、  
卅日、已晴、親經來示<sub>三</sub>兩府申狀<sub>一</sub>、又基親參會、余仰<sub>三</sub>親  
經<sub>一</sub>於<sub>三</sub>前令<sub>一</sub>書<sub>三</sub>條々篇目<sub>一</sub>、給<sub>三</sub>基親<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>存<sub>三</sub>沙汰<sub>一</sub>事等  
也、以<sub>三</sub>其草<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>奏<sub>三</sub>院<sub>一</sub>、親經參<sub>三</sub>院<sub>一</sub>、伺<sub>三</sub>花山院大納言  
兼雅卿<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>申入<sub>三</sub>定長依<sub>一</sub>服暇不出仕、仍余歸來云、諸卿  
定不<sub>三</sub>一樣<sub>一</sub>、而如此細々申<sub>三</sub>沙汰<sub>一</sub>、尤神妙也云々、今日  
基親給<sub>三</sub>馬<sub>一</sub>、參上之次密々給<sub>レ</sub>之、依<sub>三</sub>彼申<sub>一</sub>也、又女房  
賴給<sub>三</sub>御扇<sub>一</sub>、又以<sub>レ</sub>入內々仰<sub>三</sub>基親<sub>一</sub>云、此勅使尤大事  
也、願<sub>三</sub>勸人<sub>一</sub>之口、能可<sub>レ</sub>用心、行家朝臣推問之時、願  
乘<sub>三</sub>人口<sub>一</sub>、欺<sub>三</sub>上代<sub>一</sub>猶如此、末代哉、是殊爲<sub>三</sub>奉<sub>一</sub>憑之由

令申之故、所教訓仰一也者、申殊畏申之由、此人頗有非清風之問、仍爲其明日日時、早旦可被勘之由仰親經了、辰刻可參內之由仰了、亥刻、法印以慶俊律師、爲使被示云、今朝能保朝臣參彼法印許、義行在山惡僧〔僧〕許之由有風聞、其間事能可被致沙汰云々、仍愚案之所覃評定、而能保不用其事、力不及云々、勿論事歟、廣元昨日下午向了云々、法皇數十枚之御書、遲々之間懈怠云々、

## 閏七月

一日、丙朝間天晴、午刻雷雨、其後雖微猶降、天又陰、此日被發遣宇佐實檢使權右中辨基親朝臣、左大史國通、并史生二人也、仍辰刻着直衣參內、共無殿上人、依通參不相也、于時勅使大外記大夫史之外、不參內、仍親經之許遣人、又上卿許同遣人、此間於鬼間邊、召寄基親朝臣眼前、粗仰事子細、此間親經參入、于基親參仰早由、無陳方、以件人一時事條々、仰官并陰陽寮、各申云、事始日十月一日之外、無可然之日、九月有憚、八月中假殿遷宮以後無日次云々、余仰云、必八月中可有正殿事始也、棟上縱雖及十月、早速被行

事始、且可造置也、而事始及十月者、年內遷宮不可叶、假殿遷宮者六日十四日也、然者本作始九日十四日可載兩日也、若六日遂假殿遷宮者、九日可有事始、十四日有遷宮者、即同日入夜被行事始、全不可有其難、縱雖無先例、何事之有哉、仍此定可載勘文者、官稱善、覽上卿參入、中御門大納言宗家卿也、相續少納言師廣參入、次親經覽日時勘文、見了返給、次覽內文符、同見了返給、上卿申云、此官符召賦可給歟、將又以使部可給給歟、恒例宇佐使、於陣給宣命、今度無可給之文、爲之如何者、余云、召賦賜官符事、先例不覺悟、雖非宇佐使事、有准據哉者、可被問例者、親經歸來云、官外記共申無例之由者、余仰云、然者何強以新儀召賦可給哉、只以被召仰可足、任例於陣腋邊、密々可渡勅使也者、余依所勞退出、基親又退出云々、內文請印以後、外文又可云々、官符已下文書、可續加之、今日任例書、心經、朝間神齋如例、召定成令見中將、申抱瘡之由也、

二日、丁晴、早旦法印被來、義行在台山邊之由事、被語示、大略能保沙汰、不足言歟、光長朝臣參上、



申條々事、其內衆徒奏狀事、僧正伏理、大衆又後悔云々、光長密語云、今日參院、定長傳密勅云、汝兄光長朝臣者、有學問之聞、又頗得人望、歟、而攝政之邊近習之間、朕事類以蔑爾、就中太上天皇、不可不知食天下之由、爲攝政沙汰、示遣關東、其事光長奉行云々、件事深所怨思食也者、定長申云、此事若內々可尋仰歟、仰云、在意者仍所告示也云々、已上定長詞此事不能左右、已被處朝敵歟、是存內事也、光長粗陳申了云々、中將祈修土公鬼氣祭等也、三日、戊晴、親雅親經等申條々事、又定能卿來臨、入夜招定長、令奏聞條々子細、昨日光長所示之事、倩案之、以此便、專可述思緒也、仍所思之事等、具以達了、所詮此浮說、枉可被糾真偽也、凡此程事、被信思食はかりにて、爭居萬機之任哉、天氣猶無和顏者、安穩休退、專所庶幾也、凡取諸身無一塵之過怠、而隱德已空、殆類謀反之罪、是又先世之宿業也、不能申左右、若此條有天許者、早速承御氣色、欲達關東、私不申遣者、又可依違之故也者、已上奏聞之詞、定長深有信伏之色、但件男前攝政之方人也、縱有黑腹之思、專任白日之誠者也、

四日、酉晴、宗賴朝臣來申條々事、法成寺修理支配事也、金堂事修行泰覺、阿彌陀堂事東北院修行聖顯法成寺修理別當、前長者之時、一向奏覺奉行也、相分奉行之、堂々支配改本沙汰、且爲終其功也、賴業來授左傳於大將、入夜靜賢法印來、

五日、庚天晴、親雅來申祈年穀奉幣之間事、十一日定、十四日發遣之由可宜、十一日進發每事難沙汰具歟之由內々賴業所申也云々、仰可依請、親經來申宇佐使雜事、及初齋宮之間事、又神殿支配事、可恐仰下之旨、仰帥卿之由仰之、又斷罪之間事、只晴被勘罪名、即被配流關東之由、被仰遣賴朝卿之許可宜、早奏事由、可宣下罪名事之由仰之、申云、今日罷向帥卿許、一日仰旨申合之處、申狀如今御定、只今欲申上之間、遮蒙此仰、早奏聞可仰下罪名事者、及晚向九條堂、依故女院御月忌也、秉燭之後歸來、大將所相具也、六日、辛晴、觀性法橋日來加行、今日書寫如法經、仍余精進終日念誦轉經、此如法經事、自殖紙麻之昔、余并法印共與此善、仍法印今日被行向了、余同雖可臨其砌、職重官高、出行不容易、仍爲表信力致



潔務而已、申刻、左少辨定長來、先日示付事、爲示勅報之趣也、余召三藤前一謁之、定長云、昨朝得便宜委細奏達了、無指御返事、只内々被仰云、此事ハ内々ニ、光長事を被仰しか、以外ノ大事二こ有ものをあふなく被仰出にける、尤御後悔也、かくまて被驚申以外大事也、何様ニ可被仰御返事一も、不思食云々、於御氣色者、強不惡歟、於不快者、無左右有逆鱗、一切不聞食也、而閑二委聞食了、大略至極之道理と思食歟云々、又女房丹後一も、此事委語聞了、近日偏彼女房之取也、仍爲後且所令聞置也者、今日向經房卿第令聞此事了、彼卿も令申御之趣、道理極成了、其上にはいかにか、勅答も可有哉、大畧理二つまらせ給歟之由、所申也云云、今日法華經四卷讀了、

七日、壬晴、親經來申條々事、南都訴詔事、書御敎書、直可遣光長朝臣許之由仰了、又安樂寺別當事、同遣帥卿許之御敎書案持來、所存仰聞了、其外事條々事、親雅申祈年穀奉幣之間事、定經申諸社修造之間事、早旦、内大臣送札人々御中云々、被示依病二禁可辭左大將之狀、子刻、頭右中辨兼忠、持來左大將

辭狀、使右中將見了、仰可奏之由返給了、以檀紙四枚、  
公時朝臣、  
如酒佛、  
以帖紙、  
結中片、  
書檀紙、  
端一枚、  
裏紙、  
其上重一枚、  
爲禮紙、  
其上又加一枚、  
如例、  
但件裏紙禮紙等、  
以續飯付之、  
若先例歟、  
又宮體無花足、  
牙象牙彫付タル也、  
入夜宗賴朝臣來示條々事、

九日、甲寅風吹天陰、早旦能保朝臣送使者申義行之間事、次第尾籠無極、招法印示子細、又能保之許示遣了、入夜爲方違向九條、今日職事等來、其中兼忠朝臣、申仁和寺宮被申高野惡僧事、兼忠參彼宮承子細、可申沙汰之由仰了、

十日、乙卯未刻雷雨、已刻許歸冷泉家、親經、親雅、定經等來申條々事、親雅祈年穀奉幣上卿事催大將、申承了之由、兼忠朝臣來云、仁和寺宮被申高野惡僧事、今日參被宮可承子細也云々、及晚歸來云、仁和寺宮注折紙被進也云々、早奏事由任被申請、可沙汰之由仰了、傳聞大將隨身厚次頓滅了云云、

十一日、丙晴此日、祈年穀奉幣定也、未刻、大將參陣、入夜歸來云、雅長卿勅執筆、奉行之辨親經承

宣命事、大內記稱、病不參之故也、藤中納言來、又親經、親雅來申、條々事、此日有軒廊御占、上卿通親卿云々、能保朝臣以使者申云、山惡僧中殿等逃脫了、不能申、左右云々、

十二日、巳晴、法印示送云、無動寺惡僧財修、又以逃脫了云々、凡不能是非事歟、親雅、宗賴等來申、條條事、又親經申、初齋宮之間事、并明後日奉幣々物事等、

十三日、戊午晴、雅賴定能兩卿來、各謁之、又親雅申、奉幣春日使闕如之間事、親經申、幣物催具之由、

十四日、己未未雨、刻雨下、申時以後止、是日、祈年穀奉幣也、異虫如蟻降事、被載廿二社之辭別、先日被行、

御占之由、辰巳未申方角神祟之由、占申之、然而御占之趣殊重、仍不限彼方角、凡所被辭別申也、北野社有靈木顛倒事、仍辭別被副載也、上卿右大將、行事右少辨親經、大內記不參、少內記之中、無文章生之人、仍親經草宣命、又春日使、去元曆元年、自今以後可用四位之由、有勅願、被載宣命、而去年奉幣兩度、依闕如、被用五位、非留遠例、又似欺神、今度地下四位皆稱隙、外記勘去年例、申可被

用五位之由、然而余尊敬神之志、召出文章博士光輔朝臣、令勤仕、彼使儒士之條、雖無近例、依無菅家氏人、儒者奉仕北野使、今又地下藤氏四位、其人已稀、仍准菅家例、用儒者使、可無其難、加之粗案古跡例、云儒者云君達、皆勤仕此役、愚計之至、何背時議後日法皇、但不可爲流例、是闕如之秘計耳、今日自院以頭右中辨兼忠被仰下、曰、義行隱籠山門之間事、本寺不令滅亡、無爲召取惡徒等事、可令計沙汰者、一身難計申、且可被問人々歟、又懸本寺可有沙汰歟之由令申了、入夜花山院大納言來、語世上事、

十五日、庚申天陰雨降、已刻、左少辨定長、爲院御使來仰曰、前攝政、日來閉門戶止出仕、此事不可然之由、賴朝卿令申、雖然猶成恐熱居、加之忽出仕者、人口定不安歟、仍雖猶豫、始終不可默止、於今者密々參仙洞、漸可開門戶之由、欲召仰如何、汝雖不可申是非、以他人之說聞此事者、可無本意、仍殊所被仰合也、余申云、自本閉門之條、愚心之所傾也、然而至于此事者、口入還有恐、仍懷奇送日、今仰尤可然、出仕事早可被仰下也、不

可及異議、殊被仰下一候旨、恐悅相半者、定長又仰曰、先日奏聞之趣、具聞食了、令迷是非之間、即所不被仰返事也、情思食之處、被仰光長之趣、似無御思慮、然而只聞食及事、雖不存、必定自、被仰出許也、依其事殊不可恐申、於攝錄事者、偏春日大明神之御裁也、各定有其運、非人力之所及、忽辭通之條、更不可思寄、仰遣關東事、汝示遺事、共以不可有、此重彼輕之儀、更非叙慮之本意、前攝政度々表忠節、平氏通脫之時、不伴彼留洛陽、井之由、遂以下京等是也、思食知彼殊功之許也、家領事、不意避所職之上、剩不知行所領之條、不便思食之故、不知子細、不辨理非、兩三度雖仰遣關東、是又依各々運有落居之樣、歟、自今以後、散恐爵之思、不可事置心、與前攝政不存異心、通音信之條、叙念之所慕也、汝可否隨人之所言存之、誘之時、奇之、感之時、悅之、今年之豐稔、萬機之叶天意之由、所謳哥世上也、善惡事更無深御意趣、早可存其旨者、余申云、奉勅命之處、神心失度、一悅一恐、喜懼無限、始聞光長語之後、若存若亡、偏忘寢食、今散愁爵之思、丹心猶披雲霧、望青天、

但彼訛言事、枉可被糺定也、生涯深思只在此事、當時雖悅勅語之快、尙恐叙念之底者也、抑與前攝政不可有隔心事、自本存思給之上、重有此御定、更不可存異論者、此次以定長奏曰、山門事可有忿沙汰、召人々於院殿上、可被豫議者、此間、前源納言來、予謁之、相次兼忠朝臣來、以彼人重奏會議事於院、隨御定可催人々之故也、即參院了、而定長退出、御所中間、仍及晚陰、傳勅報、會議事聞食了、相計可催人々者、先仰兼忠遣左內兩府亭問之、又仰可參入之人々、令催之、但今日及夜漏了、仍明旦可有議定之由、同仰舍了、今日定經來申條々事、

十六日、辛晴、是日於院殿上、被定義行迹隱山門之事、上薦不被參列座、無便宜、然而依爲重事、申刻着直衣參入、先是公卿四人、雅賴、實家、家通、通親等入之人五人也、兩面相并宗末、忠親、經房等、依病不參、兼光在日野云々、在殿上、余參入之間、雅賴卿降居庭上、余候上達部座、殿上之障子以西三ヶ間、爲尋常公卿座也、招定長入見參、此間參入、仰云、此間事可計沙汰者、即以定長先問座主、其趣、義行迹隱山門、之由風聞、是原僧兩三人同意之故云々、以下、仍義行及件惡徒等、可糺通之由、以院宣被仰下了、而彼



惡僧等、見住山上、衆徒同心令逃去了、日來隱匿朝敵、各申云、  
露顯之時、早以逃脫、所司怠慢沙汰、懈怠何様事哉、  
此次第無所遁申、凡惡僧之習、令不從實首長吏  
之下知、但於此條者、雖衆徒爭不願朝家之大  
事哉、逐電之條、偏所司等不覺之所致也、各居籠凶  
徒等欲捕取之間、方人少々出來、打破逃了云々、凡  
不能左右云々、以此狀又仰能保云、僧綱等申  
旨如此、此上事何様可有沙汰哉、且隨計申又可  
有御斟酌、武士等可襲攻山門之由、有風聞、於  
此條者專不可然事歟、且又義行所從白狀之趣如  
何、委可令言上者、能保申云、凡如此事全不能  
口入、雖不可知行、此事已爲大事之間、隨承及  
所申出也、而山門衆徒忘朝憲、容隱之條、甚不當、  
如土肥二郎實平之武士等、偏堅坂本、可搜山上  
之由、雖令申、廻様々計略、所加制止也、座主已  
下付使廳、使被責者、盡出來哉云々者、余以頭  
右中辨兼忠朝臣、仰諸卿云、山門凶徒三人、相具義  
行、隱居台嶽之由、退以風聞、仍下院宣、懸徒衆、  
被尋召之間、彼惡僧等逃脫了、所司等懈怠、責而有  
餘、武士等含忿怒、可寄攻之由令議云々、於此  
條者、爲一山滅亡之基、仍一切不可然、山門不滅

亡、凶徒輒召出之計、何様可被行哉、各廻秘計可  
被計奏者、兼忠朝臣向殿上仰諸卿、々々定申之  
間、兼忠在殿上緣聞之、各定申了、兼忠寄雅長之  
座下、問聞之、他人定其同分明、彼獨歸來申諸卿定申  
趣、雖未練大略申、余召定長奏諸卿所議定、僧綱及能  
狀、并三方申狀皆奏之、左內兩府申狀、并被同忠親卿之返札等、同  
奏之、宗家、經房等謂文未到、已上登依、病不全、然而依大事爲  
被尋同也、所良久歸來仰云、每事只能様可計沙汰、  
於襲寄山門之條者、一切不可然、其間事殊可  
被召仰者、余仰座主已下云、一山大事不可遇  
之、武士等之所擲至極之理也、所被召之輩、非例  
之惡僧、偏是朝敵也、依三人之凶徒、忘一山之滅亡  
之條、爲朝、爲宗、爲佛法、爲衆徒、貽萬代之恨、  
無一分之益歟、於武士之結構者、殊可被制止、  
儘限期日可召進彼惡徒、滿山同心者、何不成了  
其功哉、座主早引率門徒僧綱等、不日企登山、具  
仰衆徒殊可最負、若致怠慢、定有後悔歟、抑澄  
雲增退中堂執行、殊致懈怠、須處嚴刑也、然而爲致當  
時之沙汰、豈以寬宥、若恐被害者儘可勵勳功者、  
須以兼忠可仰也、然而未練之人、  
雖盡言趣、仍以定長所仰也、座主已下申云、所被仰  
下、一々不可遁申、如仰召具僧綱等、明曉可登



山、仰旨等可、仰聞衆徒、日數之條、以廿々日之內、所申請也、頗雖似延忘、如當時者、已跡跡逐電、廻種種秘計之間、自可經日數、沙汰殆可及、諸國之末寺等之故也者、同以定長、仰能保云、堅坂本、賣山上之條、一切不可、然、武士等好申此儀、非他、爲叶賴朝卿之意趣也、而此條甚至愚之案也、彼卿更不可、庶幾一宗之滅亡、若依此事、及台領之煙滅者、還行其刑於武士等歟、彼卿志在四海、更不限一身之故也、何況義行及惡僧等、已避山上了、彌何因可有此儀哉、都不可、然事也、先懸僧綱衆徒等、暫可被試也、若滿山同心於朝敵者、不可及異論、只依沙汰之懈怠、爭及一寺之魔滅哉、儘以此趣、可召仰武士者、能保申云、仰旨可、然、可存此旨者、余以定長覆奏兩人所申、此次又奏云、先日座主并無助寺法印、所召進之緣者等、能保不受取、可賜使應歟如何、定長歸來仰云、計仰下之趣尤神妙、協教慮畢、件犯人等事猶可、仰能保者、仍仰之、能保申云、非本體之犯人者、不可給者、仍又奏此由、仰云、早可賜使應者、以兼忠朝臣、仰此之由、又僧綱等可登山之由、

以同人仰之、雖無口狀、爲令、座主已下退出了歟、次諸卿仰可罷出、無可被定之事故也、但別當覽可候之由仰之、爲仰犯人事也、即以兼忠朝臣、件緣者等、儘可渡使應之由、仰座主、又可受取之由、仰能保了、人々退出之後、參八條院御方、小時退出、

#### 諸卿定申狀、

雅賴、一實家、一家通、一通親、一雅長、等申云、武士寄攻山門事、一切不可候、一宗滅亡之基也、懸衆徒有沙汰盡出來哉、此中雅賴申云、座主已下門徒僧綱、皆悉可登山者、一實家申云、指期日可被仰、通親申云、可給宣旨於近江北陸道等者、

仁和寺宮被申、可遣武士於高野、不可登山、上於仁和寺、可被召之由、先日被申事、雅賴卿來示云、候院之師主、自院所被仰下也、在、多田被召遣了、朝臣申云、惟義自仁和寺宮被、今日參上云々、其由可申仁和寺宮之由答了、抑今日定、已是朝大事也、而上臈人々一切不參、尤不便、勅定又不分明、一向奉行旁多恐憚、然而且爲朝家、且爲台嶺、廻無爲之計略、所申沙汰也、

十七日、壬戌、晴、山惡僧事、遣御教書於座主以下、西塔院主、橫川無動寺長吏等許、兼忠書之、父納言見送案文、少々事改直遣之、

十八日、癸亥、傳聞主上有御不例事云々、仍酉刻參內、自此十三日御腹痛氣御云々、然而祈年穀奉幣日、有御拜御湯殿、其後頗御溫氣出來、今日申刻殊令發給云々、依日次不宜、明日可召陰陽師等之由、仰遣定經許、雖遣召稱病不參、他職事等居所遠遠之故也、

十九日、甲子、晴、依風氣不參內、已刻定經來、仰御占御祈之間事、先可有土公鬼氣御祭、自今夜三々夜、又自今日、可被行二間仁王講、又御惱之由、可奏院旨仰了、及晚定經歸來云、行御占了、陰陽師五人、宣憲、季弘、兼俊、泰茂、晴光、即持來御占形、其趣頗重、又昨日朝鼠喰御衣、同被行御占、病事大事云々、見了返給、今日大將參內、此次進扇於內裏、七十本入、繪宮立薄様、頗有御興云々、今日延曆寺所司六人爲大衆使來、大藏卿宗賴申次之、其趣、三人惡僧可搦進一事、爲一山之大事、所尋沙汰也、且始種々祈禱、又廻様計略者也、武士等已欲寄攻山門、而依殿下御一

言、山上安穩坂下無爲、殊所悅申也云々、件事更非私之詞、傳院宣許也、兼又件惡徒事、殊致沙汰尤神妙、彌可最負之由仰之、子細委仰之、不具記之、

廿日、乙丑、晴、未刻參內、申刻令發給、今夜令修泰山府君御祭、并天曹地府御祭等、在宣泰山府君、季弘天曹地府、今日法皇渡御伏見御所、暨可有御經廻云々、

廿一日、丙寅、晴、申刻、座主送使云、中教已搦取了、誠山上下天下之大慶、何事如之哉、即可申院之由答了、又能保申云、中教出來了云々、可忿預云々、余定長許遣御教書、兼親、惡僧中教、能保申可忿預之由、此犯人尤可爲武士之沙汰、歟、加之先日搦進縁者之時、可賜能保之由有仰、仍不可有異議、歟、早可給能保之由、可仰座主歟、且又早可申伏見御所者、返札云、此事座主申伏見殿之處、早申殿下可有沙汰之由、有院宣云々、然者任能保申狀、可有御沙汰歟者、召兼忠、件惡僧可給能保之由、可仰遣座主許、但早可奏院者、此日定經申條々事、

廿二日、丁卯、晴、午刻、兼忠朝臣來申云、今朝參伏見、仰

云、有計御沙汰事、様コソハ有ラメトハ、思食セトモ、公卿會議ナト有事也、猶可賜使廳歟者、余申云、尤可然、但先日搦進同類之時、有可給能保之仰、仍存其旨之上、近如強盜之犯人、猶爲武士之沙汰、何況於此惡僧者、朝政之一黨、謀反之同類也、奉追討使之武士、尤可尋沙汰也、隨又近年之間如此之輩、未承爲使廳之沙汰事、就中此事已大事也、若給件犯人於使廳者、以何武士等可尋搜義行之在所哉、其罪在自身、而於可被處流罪徒罪等之輩者、尤可給使廳、於此犯人者、以其白狀猶可尋義行、仍尤可爲武士之沙汰也、加之可給能保之由、未下知之前、直觸座主乞取了云々、此兼忠所中也、勿論奉歟、此上猶可渡使廳之由、可被仰下歟、然者可給檢非違使哉者、早歸參可奏此趣、兼忠又馳參伏見了、入夜歸來云、猶早召取可給使廳者、仰早可下知能保并大理之由了、此仰未曾有也、傾奇不少、能保等定有所思歟、甚以不便事歟、此日申刻參内、戌刻退出、今日主上不發給、爲悅不少、然而猶可始修御修法、依無用途、法橋經弘進納七千疋、可爲法眼功之由、頻令申、余不甘

心、然而功輩一切不尋出之由、定經令申、仍明日可奏院之由仰之、隨御定可召付也、阿闍梨可召實慶之由仰之、法也、於内程親經申、法家勘申、豐後武士罪名之間事、先日被召問明基申狀等、仰奏聞之後可問人々之由、歸家之後、右大辨行隆來、謁之間東大寺事、廿三日、或晴、親經定經等申條々事、定經申云、今日參院奏聞之處、法眼功早可召付也、尤可有御修法也云々、仍即自今日可始之由仰之、壇所可給禁中者、早旦雅賴卿内々見送能保返札、不可渡使廳、尤爲訴詔之由也、今日早兼忠朝臣、可參奏伏見之由仰了、入夜兼忠朝臣、歸來自伏見云、能保執申者非此限、不可及沙汰者、其旨可仰能保之由仰了、自本御定之旨、不足言事歟、廿四日、已天陰、入夜微雨下、未刻、前源中納言來、謁之、小時向、前攝政許了、大外記賴業來、問内舍人隨身之間事、宇治殿御例、攝政之間、不賜内舍人隨身歟、老後關白之時、治曆年中給之、偏可用彼例之由、所相議也、今日早旦、帥經房示送云、宇佐大宮司公通申狀如此者、披見之處、宇佐宮假殿遷宮、如



被仰下、可致合期之勤、八月六日可有遷宮云云、悅思無疆、向後猶有其憑、正殿造營又以不違亂者也、可悅々々、親經云、今日雖參伏見御所、中間無人于傳奏、萬事不能申達云々、不能左右、不能左右、今日又親雅來申條々事、

廿五日、戊午雨下、召明法博士範貞問云、父母在遠國之人、即不開其死亡、經數月之後聞之、其着服日數如何、申云輕服半減、重服聞爲始全可滿十三ヶ月服限者、仰云、令文云、造送之間經周并、而以聞爲初、著服給暇皆如法云々、此文意終周并之後聞及之儀歟、若龍井月、假令兩三月之間聞之者、只至于忌月可著之歟如何、申云、猶法家之所習只周并之內雖聞、猶可滿十三月云々、昨日明日明基申狀又如、此、入夜頭右中辨兼忠來云、大理所申之先日座主搦進中教緣者等事奏之、仰云中教緣者等早可免、於賊主之從法師者、猶可拷問者、且聞能保、又可仰大理之由仰了、廿六日、辛未雨下、親經來申云、先日宇佐假殿日時官符所遣之使者歸來、公通申條々事、假宮造營所經營也云々、申狀之中有不審不當事等、仍條々可仰遣

之由仰親經、又正宮造營可支配九國之事、都督于今未下知宰府云々、是職事親經并宮等之懈怠也、仰其旨於親經、無所于披陳歟、又申範貞、明基等申罪名之間事、明後日召具可參之仰了、定經又申條事、

廿七日、壬申晴、宗賴來申造講堂之間、○同下疑親雅又申條々事、酉刻參內、主上猶聊不快御、歎思不少、入夜退出、今日都督、宇佐營造支配事、懈怠之由令謝之、職事遲下知之故云々、去十一日仰之云々、其後又經數日、都督非無懈怠歟、行隆朝臣、注送大佛放光給之間事、實可謂奇異、仍續加之、

文治二年七月十六日參詣東大寺拜殿之者多、戊刻許、日暮天陰、山月未出、常聞房叔俊、北面禮勝之處、大佛眉間聊有光明、譬如星芒、若疑燈樓之高懸歟、將又眼睛之眩轉歟、旁依不審不言之處、西院紀伊公、勝惠、同候拜殿、密語而曰、奉見彼光乎云々、其時成奇、少時之後突然不見、餘人少少或以見之、或又不知、閏七月八日、寅時許、同有光明如星芒、至于燈樓下、有其筋而所照也、谷尼公禮之、



同十五日夜、伊賀國住人八郎房覺俊、歸依大佛一信者也、通夜祈請之際、勿時許有光明、尊顏烏瑟、忽以皎然、又同夜八幡宮籠常住巫女、拜殿行道之間、夜漏過半之程、又有光明、其色更赤、依成不審、參進庭前、猶有其光、漸及數刻、忽然而止、一兩人偕同以禮之、巫女不堪悲感涕泣云々、同廿一日夕、一乘房觀乘昇大佛壇之處、兩眼之下眉間之程、聊有光明、是似螢飛番、直童國賴同率見之、然而若是燈樓之火眩耀歟之由、疑殆之間、下壇之後、以堂童子令掩燈樓、猶見其光燦爛如本、其體相同敲石之火、少時之後漸以不見、已上廿四日記伊公勝惠、本覺房蓮覺、常開房觀俊、一乘房觀乘、常住巫女、堂童子國賴等、於拜殿以令申之詞記之、

廿八日、癸酉天陰、親經召具明法博士等來臨、字佐宮濫行之武士罪名勘文條、有不審等、以親經尋之、雖有陳申旨、道理不叶、仍以證文責之、無披陳之方歟、仍即以親經遣左大臣等、問此事、依及晚今日不歸來、入夜大將相具女房渡九條、日來聊有病氣、來月十四日可參春日、其以前爲令平

愈、欲渡邪氣、而此家無便宜、仍所渡九條也、大威德鑄佛奉相具之、驗佛之故也、觀性所志與也、亥刻法印被來、及深更被歸了、定經又來申公家御修法延否事、仰可延引之由、又申云、實慶依公家御祈、可蒙賞之由令申云々、仰可奏之由、

廿九日、甲戌天陰、微雨下、親經來申左相府報旨、斷罪事、法家勘狀尤有失、仰趣專可、然、早可被改勘文、然者又法家博士等、可有罪科云々、余案之猶以宣旨可被問勘文之失、就彼陳申狀、被行仗議之後、可有議也、仍可奏此趣之由、仰親經了、以宮內卿季經朝臣、問仁和寺宮疾、又自彼送使、被稱御修法辭退之由、召親雅、仰此由、改仰俊證法印、定經來云、院宣云、實慶申賞事尤可、然、但又可被相計云々、未曾有、々々々、

## 八月

一日、乙亥雨下、頭右中辨兼忠朝臣來、申放生會上卿已下事、仰可奏之由了、又甲斐守宗隆、可昇殿之由、有院宣云々、可仰下之由仰了、  
二日、丙子天陰、入夜雨下、未刻參院、八條院御所、去夜御幸此亭、定能

卿已下、參候人々降<sub>レ</sub>居庭上、以<sub>二</sub>定長入<sub>一</sub>見參、仰云、有<sub>二</sub>申事<sub>一</sub>歟如何、申云、全無<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>奏事<sub>一</sub>、只所<sub>二</sub>參入<sub>一</sub>也、重仰云、先有<sub>二</sub>指合事等<sub>一</sub>之間、不見參、尤遺憾、今日須<sub>二</sub>見參之處<sub>一</sub>、むけにうちとけたれ、不見參云云、此仰未<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其心<sub>一</sub>、余仰<sub>二</sub>定長云<sub>一</sub>、近日諸國濟物、隨<sub>二</sub>申請<sub>一</sub>有<sub>二</sub>免除<sub>一</sub>、況被<sub>レ</sub>宛<sub>二</sub>諸社修造<sub>一</sub>之國々、各定申請歟、縱雖拘<sub>二</sub>重色<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>免<sub>二</sub>諸司納物之間<sub>一</sub>、年中佛神事已下、諸公事等併欲<sub>二</sub>闕怠<sub>一</sub>、免除之間、能可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>斟酌<sub>一</sub>、凡年中恒例、臨時所<sub>レ</sub>入之用途、仰<sub>二</sub>諸司<sub>一</sub>令<sub>二</sub>注進<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>彼用途之程<sub>一</sub>者、枉可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>拘也、此事被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>然之上卿一人<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>注立歟<sub>一</sub>、其上重可<sub>二</sub>議定也<sub>一</sub>、此旨以<sub>二</sub>事次<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>也、如此之事、不<sub>レ</sub>起<sub>二</sub>自<sub>一</sub>敬慮之由、萬人知<sub>レ</sub>之、私之下知、敢不<sub>レ</sub>叶<sub>二</sub>事之用<sub>一</sub>歟、仍必自<sub>レ</sub>上進而可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>也、定長諾、即退出向<sub>二</sub>九條亭<sub>一</sub>、大將爲<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>物氣<sub>一</sub>、去廿八日所<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>此亭<sub>一</sub>也、爲<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>來也、更以無<sub>二</sub>殊事<sub>一</sub>、物氣能渡云々、及<sub>レ</sub>晚參上、主上御惱又以無<sub>二</sub>別御事<sub>一</sub>云々、小時退出、歸<sub>二</sub>冷泉家<sub>一</sub>、余在<sub>二</sub>九條之間<sub>一</sub>、親雅來示<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、又光長申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、三日、<sub>丑</sub>雨下、親經來申云、今日釋奠、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>宴座<sub>一</sub>哉否之由、上卿隆忠卿所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申也者、余勘<sub>レ</sub>例、或內裏火

災、或園城寺火事等之時、被<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>宴座<sub>一</sub>、今度宇佐宮事、雖<sub>二</sub>經<sub>一</sub>三ヶ年<sub>一</sub>沙汰、在<sub>二</sub>近日<sub>一</sub>有<sub>二</sub>仗議<sub>一</sub>有<sub>二</sub>廢朝<sub>一</sub>、又勅使發向、然者准<sub>二</sub>彼等例<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>宴座<sub>一</sub>哉、廢朝不<sub>二</sub>因違期<sub>一</sub>、此條又可<sub>レ</sub>同歟、將又去年依<sub>二</sub>内々風聞<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>例被<sub>レ</sub>行<sub>一</sub>御占、又有<sub>二</sub>黃金沙汰等<sub>一</sub>、而去二月有<sub>二</sub>宴座<sub>一</sub>、今又依<sub>二</sub>同事<sub>一</sub>更被<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>此儀<sub>一</sub>、其理不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然歟、兩箇間敬慮難<sub>レ</sub>決、仍可<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>左大臣<sub>一</sub>之由、仰<sub>二</sub>親經<sub>一</sub>、即<sub>レ</sub>祇候以<sub>二</sub>書札<sub>一</sub>、密々問<sub>二</sub>遣彼大臣<sub>一</sub>許、即返札到來、全不可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>停止、早可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行云々、仍仰<sub>二</sub>不可<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>宴座<sub>一</sub>之由了、此外初齋宮之間申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、又申刻、定經來申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、宗賴朝臣又申<sub>二</sub>造講堂之間事<sub>一</sub>、上表之間事等、又光長朝臣、以<sub>二</sub>造寺判官仲宗<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>東金堂佛可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>始之間事<sub>一</sub>、來六日九日云々、仰<sub>二</sub>九日可<sub>レ</sub>宜之由<sub>一</sub>、又佛所前長者之時、被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>法成寺之中樂師堂<sub>一</sub>云々、同可<sub>レ</sub>然哉、仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>彼例<sub>一</sub>、又申云、長官光長朝臣、依<sub>レ</sub>疾不能<sub>二</sub>參入<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>之如何、仰云、次官以下可<sub>二</sub>參行<sub>一</sub>、此事不可<sub>二</sub>緩怠之故也<sub>一</sub>、又其間雜事、可<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>諸國歟<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>功者<sub>一</sub>歟、仰<sub>二</sub>諸國<sub>一</sub>、不<sub>二</sub>事行<sub>一</sub>歟、用<sub>二</sub>成功用途<sub>一</sub>有<sub>二</sub>何難<sub>一</sub>哉、<sub>元被<sub>二</sub>召付<sub>一</sub>之功太多、而悉不<sub>レ</sub>充濟<sub>二</sub>所<sub>一</sub>殘猶多云々、</sub>又御衣木加持阿闍梨、可<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>法成寺供僧<sub>一</sub>歟、仰可<sub>レ</sub>然者、定經又來申<sub>二</sub>條々

事、此次連日降雨尤不便、明後日可有止雨奉幣之由仰之、

四日、或晴、親雅來申、條々事、又前源中納言來、余謁之、女房此日密々參廣隆寺、行類寺、六角堂等、侍雨三在、共、借用人車、

五日、已朝問天氣晴、仍今日、奉幣可隨雨體之由仰、定經、而之間及晚天陰雨下、仍明日可遂行之由、仰遣之、明日吉日、明後日以後無日次也、申承了之由、今日未刻參九

條堂、用人車、女房相具、先向堂講演了、向兩家、入夜歸來、今日山階寺別當僧正被示送云、今年維摩會講師貞慶兄光範法師卒去了、仍服暇之者勸仕大會講師之例、忽不覺悟、可忍申沙汰云々、付光長、被中、之

又以消息、先可問例於綱所之由、仰光長了、今日不向九條之以前、親經來申初齋宮之間事、此次傳院宣云、法家勘文失錯事、任法可沙汰云々、余

以親經重仰左大臣云、勘文大旨勘申大不敬之由、仍尋問之處、大略申旨無所據、仍先被仰合、尤可被改勘之由被申、而重被勘文之處、大逆之條、

又勘其文、申可在聖斷之由、然者強不可及、重科哉、又乖寬弘寬治例、勘申可不敬之由條可被薄

問哉、重可被計申者、親經行向了、

六日、庚午、上午雨下、及晡時天晴、此日、止雨奉幣也、

上卿、樞中納言實宗卿、行事辨右少辨親經、職事定經、未刻、親經爲內覽持來日時、見了返給、此次可被問明法博士之宣旨案、持來令覽之、先仰合左大

臣、隨彼申狀、可下之由仰了、相次左內記長守、持來宣命草、丹生、與布爾計、是先例也、見了返給、仰清書不可持來之由、入夜親經又持來宇佐和氣使、可發遣之日時、

上卿中御門大納言、見了返給、小時大納言被來、欲謁之間、稱明日可來之由、被出了云々、此夜、家政所、藏人所、

侍所、并北政所等所充也、初、年領大藏卿宗賴朝臣、奉行兩方政所事、北政所年預基親朝臣、爲勅使、參向宇佐宮、仍宗賴所申沙汰也、職事上臈上野守藤原賴高、爲與奪職事、奉行藏人所事、先

余政所、次北政所、此間、藏人所、次侍所、別當資泰朝臣已今夜加補余家司一人、皇后宮大進家實、散位長親、已上共左大

也、然而先年兼光補余家司了、聊似其恐、其後尋申長親、置人、立補兩北政所家司五人、資泰朝臣、延季朝臣、範余職事一人、對馬守等者也、各其儀了、覽大間書等、新補人申慶及吉書等、資泰朝臣申云、一身兼兩所別當、侍所、所課之間如何、一事欲被免除者、余仰云、所申可



然、但保安例、盛家朝臣兼兩方別當、然而初度事不略一方歟、無所見、於今年者、猶可搆勲、於待所者輕役也、強不可及煩歟者、申承之由、又藏人所々役之中、殿中御簾、職事二人所役也、而保安例、第三第六勤之、以彼例、中殿御時如此、今度如何之由、賴高申上、仰云、第三第六之條、專不可守株、彼兩度可然之人相當歟、但如此事、全不可及上御定、只各可相計也、自上薦勤仕、其理可然歟、但與舊職事先例不充御簾云々、雖不知本說、各所傳知如此云々、後聞第二三充之云々、今日定經參院歸來云、朝親行幸事、今年可指合物語、可期明春云々、又實慶御祈賞事、忽被任僧正之條、頗驚耳目歟、又無其闕、只追可申請之由、可被仰云々、任御定可仰之由仰含了、

七日、辛巳陰晴不定、親雅來申公家御祈之間事、宗賴申上表之間事、法印被來、及深更被歸了、

八日、壬午晴、及晚陰、自關東送札於光長之許云々、無殊定經申明日勅答之間事、表使各稱障、仍右少將忠季朝臣事觸入道關白、可催送之由、被示之、尤爲本意、入夜定經來云、勅答使無進奉之者、明旦

參鳥羽可奏聞云々、及深更又申云、基宗朝臣領狀了云々、

九日、癸未晴、申刻以後天陰、此日、第二度之上表也、依先例不勘日時、第二三度不勘日時例也、但承保三年、保安三年等、第二度表、依超年被勘日時也、作者清書如初度、親經伊經等也、使右少將忠季朝臣、勅答使左少將基宗朝臣等也、申刻、人々來集、屬文、公卿左大辨兼光許也、而雖相待遲參、仍宗家卿來之後、余出賓筵、于時宗家良通、定能、良經等、在座各有動座、皆直衣也、次召人、大藏卿宗賴朝臣參上、問作者清書等參否、申皆參之由、仰作者可參之由、即藏人右少辨親經、取副表於笏參上、余見了返給令讀之、宗家、良通等卿、近寄見之、讀了返上、余取之、親經退下、次余召宗賴朝臣、給表仰可清書之由、此間與人々雜談、又召宗賴仰表宮檀紙等可持參之由、即檀紙八枚、四枚裏紙、紙等、料、四枚裏、宮料、表宮等、不加花足、只宮許也、件宮有、余取之置前、檀紙上置宮持來、牙象也、初度所用之宮也、余取之置前、檀紙上置宮持來、余引寄置硯宮左、但檀紙息、此間、左大辨兼光參上、召着座末、東也、良久宗賴朝臣持來清書、余取之披見之間、宗賴退下了、次余與表於宗家卿、爲令見兼光也、先例不令見清書於人々、然而兼光適爲儒卿、仍令見之也、披置座前、微々讀之、人々同見



之也、見了返上、余忘却不加署名、無左右卷之加裏紙一枚、加一枚、其上一卷禮紙二枚、其上一又卷一枚入宮、余知此之忘却、爲身能不招奇大將、相共裏宮、以檀紙四枚、裝之、二枚つゝ重て、引ちかへて、又紙端當宮右、宮上以右方爲上、又紙端當宮中央、紙上下餘宮事各五寸許也、兼天切調之、且依先例也、次以細帖、紙、天結、中程、師鑑、結之、其鑑左右、宮口、次取合宮上下、下押入、仍ひる、リノするなり、次以宗賴召使、即右近少將忠季朝臣參上、余押遣宮、忠季捧笏取宮、持之、逆退、出中門廊戶之間、余思出不加署之由、更召返之、解緒開宮、取在硯宮之筆、加署名、如本卷之入宮、裝紙やをら押覆て、如本結之給忠季、此同忠季、候前線、忠季取之、余釋示云、勅答事可參、退出、次宗家卿退出、余歸入、定能兼光等退出、依先例不賜作者消書等祿也、余召宗賴、仰勅使之所可裝束之由、未歸登之、諸司官人冠等役之、兼時行之、余歸入、公卿等退出之故、諸司官人役也、此間、大將中將改着朝服、小時大內記長守、持來勅答草、上表之後、未給勅答之間、不可、余見了返給、仰不可持、有內覽、然而先例覽之定事也、來清書之由、上卿大宮中納言實宗卿云々、覽藤中納言定能卿改著束帶來臨、同時勅使左少將基宗朝臣、

來進立中門、家司宗賴朝臣相逢申事之由、余在二棟緣、即右大將良通降、自中門內方、殿第二度表、不若給也、相跪捧笏授、受、取勅答宮、歸昇、經中門廊西緣、透渡殿寢殿東緣等、持來二棟廊南面簾前、余取入披見之、大將退歸、着上達部座、次宗賴朝臣告可着座之由於勅使、今度同承、仰可召之、而、即勅使昇中門廊內方、經同緣并透廊寢殿南簾子等、着椅子、其實不若之、次余隨身等府生以下、着榻冠、立明前庭、此間、右大將降、自中門廊西面階、侍從定家獻、前、近六人并團身等、頗進出庭中、酒外二三、向北、拜舞、拜間勅使、方云々、右廻歸入、昇自本階、歸着公卿座、藤中納言二位中將等、同着此座、次余仰可改座之由、召宗賴、即家職事等六七八人參上、撤椅子地鋪等、數平敷座、各退下、次仰勅使可着座之由、須先、是勅于上方、而猶、所、勅使着西座、東、次右大將起座、仍宗賴尋出仰之、入自寢殿東面簾戶、着東座、西、次家司彈正大弼高階資泰朝臣持來祿、大掛、於大將座後與之、大將捧笏取之、更起至勅使前、賜之、拔笏直歸着公卿座、爲不受勅使拜、故不着本座也、次勅使降南階、進出庭中、更向北再退出了、次余出賓筵、

〔有吉書事〕〔初直衣也〕、聞勅使來 三卿勅座、次宗賴朝

臣申官方吉書候之由、次右少辨親經申伊豫國年料

米解文、次藏人勘解由次官定經申內藏寮臨時公用

文、次宗賴朝臣申加賀國封戶解文、〔政〕次余歸入、

與定能交語、此間有宿申事、隨身等改裝束參

入、其後參內、〔隨身不騎移馬、須引移馬也、然而依宿仕、

於直廬、無有准據之例、不引之、又兼不沙汰之、吉書之儀、勅使所裝束、

寢殿南庇五ヶ間、〔加東庇南一間、件同北柱、敷滿弘

簾、不敷、上庇簾、東面要戸、垂母屋簾、南階之四間之西

〔之〕、副件簾、立亘四尺屏風、同立之、當南階間、敷

龍鬘地鋪二枚、引置敷、其上立倚子、一件倚子在朱簾御倉、

一家秘藏物也、初度用之例也、件倚子體有後衣、一條左大臣殿倚子、

如何、無高欄、敷物用高欄、其真紫相也、無絲、同間東西柱

下、立燈臺舉燭、尋常上達部座如常、〔上下舉〕二棟

廊南緣、〔余在件簾中、〕井中門廊等舉燭、障子上藏人所

又以同前、

勅使退出之後、諸大夫等、〔家職事等也〕六七八人參上、撤地

鋪倚子等、階西間東柱西邊、敷高麗端疊一枚、其上

敷龍鬘一枚、其上敷東京錦茵、爲勅使座、以同

疊一枚、敷階東間西柱東邊、爲右大將座、已上件

座迫南柱敷之、同間副北屏風、立燈臺一本、舉

燭、御簾弘筵等皆如本、

新參右番長清景、今日始所召具也、又右大將番長泰

兼景、〔兼任〕申院有許容、即召了、然而未初參來、十

四日可參之申、令申云々、

十日、申晴、大外記賴業、師尙等、參內裏直廬、〔候諸人所〕昨

日所尋問之放生會忌事、勘例持參也、忌否之間、各

無分明之所見、只彼會以前、八月中於遠所、夜宿之

物詣者、其例多、其外無所見、但各申云、此條無指本

說、只見女子之說也云々、師尙云、故師元申云、此事更

不知不聞事也云々、且此上事用捨延否、可在御意

云々、是事來十四日、大將可參詣春日、而不違放生

會之忌、〔七月晦日以宿城外、謂〕彼會以前及會日、不

可在他所之由、有閭巷說、仍所尋問也、又問

入道關白、答云、十五日夜不候他所、件日內歸洛者、

更不可有憚、又問雅賴經房等、所答皆同、又去治

承二年法皇御參天王寺、同無此沙汰云々、又高松

女院、八月十五日行啓日吉云々、凡此事案道理、專

不可有其憚、大菩薩何有嫉妬之御心哉、就中氏

社事、又可異他、仍且以之爲例、不可忌憚者、

及晚退出、今日親經、定經等申三條々事、法皇明曉可  
有御幸天王寺忌事無沙汰、但四七月晦日、御宿賀茂邊、是又兒女之說也。仍職事  
等、每事爲三申定所參也、今日權辨基親朝臣、自宇  
佐三條々事、

十一日、晴、親雅申三條々事、余仰云、宿曜師珍賀性  
一等、勘申來十六日月蝕時刻相違、仍明旦召具可參  
者、平等院執印事、昨日申院、今日承御返事、左右可  
在汝意者、付女院御方申之、被仰御報也。今日召仁隆律師、申  
大學寺事於仁和寺宮計、一乘院領奈良僧正知行之所  
也、而可爲仁和寺領之由、有其沙汰、不當事也、法  
皇今晚參天王寺了、

十二日、丙天陰、已刻、藏人左衛門權佐親雅、召具陰  
陽道宣憲、清憲等也、在宣依所勞不參入。宿曜師珍賀性一等也。等參入、召問之  
處、宣憲、濟憲、同珍賀申狀、性一退出、申可勘申  
之由、此日密々渡九條亭、藏人所等在此亭、左番長  
泰賴武、損足籠居之後、今日始參上、召前見之、頗  
雖有痛氣、於今者爲例人、尤悅思不少、  
十三日、丁晴、仁隆律師來、申仁和寺宮返報、大學寺  
事、於今者不可口入、通申之由也、尤悅思不少、又  
法印被來、又親雅親經等來申三條々事、八幡神人訴

申友弘罪科事、來覽官問注記其狀不分明、雖須  
復問、明後日放生會事、可闕怠之由、神人等訴申之  
上、此事已爲及傷事、仍可賜使廳拷問之由仰之  
了、神人等申不可闕神事之由云々、友弘雖不  
承伏、事體有所犯之實歟、仍可拷決之由所仰也、  
但退案之、猶宣旨可載究問之由、先內問之後可  
及拷問、無左右拷決之條無其理、仍以此旨仰  
遣親經許了、承由有請文、

十四日、戊天陰、時々雨降、此日、大將密々參詣春日  
御社、辰刻進發、先有祓事、於堂上有此儀、陰陽師座在  
庭、大將着衣冠、陪膳役送布衣、前驅賴高取幣立  
又引立神馬一疋、白毫毛、舍人二人、若被冠引之無他神寶。破了、大將改着  
直衣、乘半部車、不懸前驅十人、殿上人二人、藏人五隨  
身五人、番長兼兼今日初參、下馬四人、已上賜當色、各水干袴  
侍五人、五位一人、有官御府四人、在、下馬隨身後。不具檢非違使、又無武  
士、依無可然之人也、大將幼稚之昔、度々雖參  
詣、元服以後未參、自然之懈怠也、隨又有宿願等、殊  
所參也、先年雖勤仕祭使、依日次不宜、不奉幣  
云々、余竊注意趣於一紙如告文。與大將、於寶前可  
讀申之申仰之、初雖有可用船之儀、猶自陸地



參詣、爲無<sub>二</sub>遲忘<sub>一</sub>也。余送<sub>二</sub>出川原口<sub>一</sub>見之、此日放生會、上卿、藤中納言定能賴、參議、源宰相、相<sub>二</sub>具其息親能<sub>一</sub>、雅賢、行事辨、右少辨、等下

向云々、今日親雅、定經等、申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、

十五日、<sub>丑</sub>雨降、定經來申<sub>二</sub>帥卿申事<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>關東<sub>一</sub>飛脚

到來事也、戊刻大將歸來、參<sub>二</sub>社之間雨止<sub>一</sub>、每事無爲、

今日詣<sub>二</sub>東大寺<sub>一</sub>云々、宿所禪定別院僧正房也、去夜

對<sub>二</sub>面彼僧正<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>來<sub>二</sub>大將方<sub>一</sub>云々、此日補<sub>二</sub>平等院執

印<sub>〇印一作</sub>別當、其儀、入<sub>レ</sub>夜之後、余着<sub>二</sub>冠直衣<sub>一</sub>出<sub>二</sub>客

亭、召<sub>二</sub>家司大藏卿宗賴朝臣<sub>一</sub>仰云、以<sub>二</sub>法印慈圓<sub>一</sub>可

爲<sub>二</sub>平等院執印別當<sub>一</sub>者、宗賴退下、障子上書<sub>二</sub>令旨<sub>一</sub>、

賜<sub>二</sub>上座忠成法橋<sub>一</sub>、藤所召又可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>執印<sub>一</sub>之由、書<sub>二</sub>御

教書<sub>一</sub>賜<sub>二</sub>忠成<sub>一</sub>、先例寺司、雖<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>下令旨<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>執印執

行者<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>御教書<sub>一</sub>仰<sub>二</sub>寺家<sub>一</sub>云々、須<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>執行<sub>一</sub>也、而

件執行偏爲<sub>二</sub>前執印法印之房人<sub>一</sub>、仍只賜<sub>二</sub>忠成<sub>一</sub>者也、

今夜依<sub>二</sub>吉日<sub>一</sub>忠成持<sub>二</sub>向法印之許<sub>一</sub>云々、法印出逢賜<sub>二</sub>

祿物<sub>一</sub>云々、被物一重、美絹三匹、色々布十段、綿百兩

云々、代々例不同事也、抑執印職者代々一家僧達之

中、有<sub>二</sub>智德<sub>一</sub>能<sub>レ</sub>行年勞、長大之人、又親<sub>二</sub>肥長者<sub>一</sub>之

輩、所<sub>二</sub>補來<sub>一</sub>也、全非<sub>二</sub>師跡相承<sub>一</sub>之職、而覺尊法印以<sub>二</sub>

前大僧正覺忠讓<sub>一</sub>補<sub>二</sub>此職<sub>一</sub>了、前長者之時、爲<sub>二</sub>兄弟<sub>一</sub>

之間無<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>、余受<sub>二</sub>取長者之印<sub>一</sub>、須<sub>レ</sub>改<sub>二</sub>補此法印<sub>一</sub>也、

然而彼覺尊又非<sub>二</sub>外人<sub>一</sub>、世間未<sub>二</sub>落居<sub>一</sub>之間、如<sub>レ</sub>然之沙

汰、尤可<sub>レ</sub>用意、仍于<sub>レ</sub>今不<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、而彼人於<sub>二</sub>事

乖<sub>二</sub>本意<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>冥顯<sub>一</sub>遺恨多端、然而於<sub>二</sub>其條<sub>一</sub>者全不<sub>レ</sub>爲

苦、只理運之至在<sub>二</sub>此法印<sub>一</sub>、年菟德行親昵兼<sub>二</sub>備彼一

身<sub>一</sub>之故也、何況年來之志、報<sub>二</sub>謝何時<sub>一</sub>哉、當<sub>二</sub>此時<sub>一</sub>尤

可<sub>レ</sub>顯<sub>二</sub>其志<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>然於<sub>二</sub>無道非據事<sub>一</sub>者、非<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之限、

於<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>者、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>理運<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>也、但末代之

法、向後有<sub>レ</sub>恐、仍去十日密々奏<sub>二</sub>院<sub>一</sub>、仰云、左右只可

在<sub>二</sub>汝意<sub>一</sub>者、蒙<sub>二</sub>天許<sub>一</sub>致<sub>二</sub>此沙汰<sub>一</sub>、何爲<sub>二</sub>非據<sub>一</sub>哉、於<sub>二</sub>

法成寺執印<sub>一</sub>者無<sub>二</sub>改易<sub>一</sub>、倘依<sub>二</sub>一族之陸<sub>一</sub>也、此等子細

又達<sub>二</sub>關東<sub>一</sub>了、

十六日、<sub>寅</sub>雨降、定經來申<sub>二</sub>初齋宮藏人方雜事<sub>一</sub>、

十七日、<sub>卯</sub>晴、入<sub>レ</sub>夜向<sub>二</sub>堂謁<sub>一</sub>法印、深更被<sub>レ</sub>歸了、今日

親經參上、申<sub>二</sub>犬死穢之由<sub>一</sub>、然而初齋宮事、無<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>奉

行<sub>一</sub>之辨、上可<sub>レ</sub>違亂、仍過<sub>二</sub>穢猶可<sub>一</sub>沙汰<sub>一</sub>之由仰了、

十八日、<sub>辰</sub>天晴、自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>七ヶ日、修<sub>二</sub>恒例念佛<sub>一</sub>、已刻

請<sub>二</sub>佛殿聖人<sub>一</sub>受<sub>レ</sub>戒、昨日洗髮、其後自<sub>二</sub>午<sub>一</sub>刻終許<sub>二</sub>始<sub>一</sub>

念佛、今日三萬反、



廿四日十五萬反、廿五日已申刻、藏人次官定經爲院御使、  
來、鎌倉書札等所持來也、雖念誦中、依爲大事、  
所謁也、申狀條々之中、諸國被付功之中、諸寺及大  
內等修造、可被充賴朝知行國事、可被置記錄  
所事、光雅朝臣昇進事等、所申上也、院宣云、件事  
等申攝政殿、可有忿計沙汰云々、仰道經房編許之狀也、余答  
云、先只條々如申狀、可有沙汰、又知行國々所課  
事、申旨殊神妙之由、可被仰遣、歟、院還御之後申  
定、每事可有沙汰也、私不可進止者、又仰定  
經云、記錄所事、且問延久保元例、於官可令申  
者、

廿日、甲天晴、光長朝臣申云、經房卿示送曰、賴朝卿  
進濟兩社行幸召物、可檢納之由、可仰官、有御氣  
色者、余仰云、早可下知官者、親雅雖來、依非  
急事、不聞之、念佛九萬反、

廿一日、乙晴、念佛十一萬反、大夫史廣房參入、申八  
幡宮訴申、犯人友弘之間事云々、念佛之間、即不聞  
之、退出之後聞其返事、以御教書仰遣親經許  
了、相模守惟義恠惜太奇恠、

廿二日、丙天陰、入夜雨下、藏人辨親經來、依念誦之

間、云置兼親退出云々、念佛了聞之、仰詞書御教  
書遣之、條々巨細、念誦之間雖不能成敗、爲公  
事爲神事、存忠勤仰子細了、今日念佛十二萬  
反、講堂之間事一昨日遣使待貞問之、今夜歸來有  
申旨等、所詮瓦太爲大事、期日近々難叶歟云々、

廿三日、丁雨降、早旦親經申友弘之間事、昨日示付經所來、申旨甚無謂、仍仰子細了、今日念佛十二萬反、

廿四日、戊晴、申刻藏人次官定經來云、初齋宮藏人方  
事、用途闕乏、可召付任官功之由、雖被仰下、敢  
無進納之者、期日已近大事欲闕、自關東進兩社  
行幸召物云々、先欲借渡如何者、仰云、件所進物  
本數如何、委相尋可令申、隨其數可計仰也者、

入夜藏人辨親經申云、父俊經入道、自今朝至只  
今、申不寢驚、大略不辨前後、奉行事繁多、爲之  
如何、但隨今夕明旦有樣、重可申一定事者、早  
旦念誦已前、宗賴朝臣申講堂之間事、今日念佛十五  
萬反、今日定經申大夫史廣房注申、記錄所例、延久保元

廿五日、己晴、已刻念佛結願了、今日一萬反、歸南家、今日即  
欲歸上家、而大將所勞猶不快、仍延引了、恐之間念  
佛無爲了、爲悅不少、宿緣不淺、往生有憑者歟、

廿六日、庚天晴、早旦召大夫史廣房、仰云、初齋宮行事辨親經、依父俊經入道所勞危急、籠居西郊云々、其間事且仰行事官、且尋親經殊可致其沙汰、期日近々、奉行違亂之間、神事定闕如歟、尤不便者、又賜字佐宮注進、殿舍等注文、仰云、見合代々覆勘文、可令申者、廣房申云、初齋宮事、只今向仁和寺、尋承子細於親經、且可申沙汰、又宇佐殿舍注文、委見合可言上者、凡近日出仕辨、只親經一人也、光長依所勞、籠居及數月、就中於神事者、依爲違衆忠依病、爲湯治一下、向有間、基親在西海、定長候天王寺、凡又依皇之病近醫、一切不奉行公事云々、仍一切無所、受取初齋宮事之辨、仍親經父雖及危急、猶不能辭退者也、定經來申云、賴朝卿所進、兩社行幸召物、五千五百餘匹也、今所申請三千匹也云々、余云、本數非幾歟、申請三千匹、宜歟者、又以定經、遣字佐殿舍々々注文、於經房卿許、仰合子細了、又宇佐宮事、就基親申狀、可被仰遣之趣注別紙、并可問兩大臣事等、注折紙、遣親經許、以使者遣之、明曉可向西郊云々、自今日女房所勞、此日請佛殿聖人、大將令受戒、又請三口僧、法城寺供僧、限七ヶ日、令修仁

王講、

廿七日、辛晴、此日、親雅來申條々事、遣親經許之使者歸參、申云、先向西郊訪俊經入道之處、所勞平滅了云々、親經去夜出京了云々、仍即行向親經之宅、申只今可參上之由云々、相續親經參入、申條條事等、又定經來申、帥卿返事、返上殿舍注文、返給親經了、此日初齋宮、西河御契前駈定也、上卿實宗卿、依居所遼遠、免內覽、此日請行勝聖人、大將令受戒、女房大將同之、以秦茂內々來、申近日變異等事、以外重變等云々、

廿八日、壬晴、入夜雨下、請本成房、大將女房共受戒、女房祈今曉修泰山府君祭、奈良僧正以覺乘法眼爲使、被示送條々事等、去夜上洛、明曉可歸云云、春日御社去廿三日大風、御山樹多以顛倒、又鹿一斃了云々、可慎可恐歟、

廿九日、癸天陰、親經參入申云、基親朝臣進飛脚、書札二通到來、一通去八月五日、一通同七日、申云、去八月十四日假殿遷宮、如只今者不可叶、肥前國司對捍之故也、猶可被勘下日時云々、凡次第不足言、不能左右、先日一定可遂遷宮、更不可有不審之由言上、爰

如此、素不覺之人云々、果以如此、何爲々々、肥前國司即親經相具參上、責仰子細、無所于披陳、歟、每事院還御之時、可奏之由仰了、宗賴朝臣來、申造講堂之間雜事、并唯識會之間事、來九月廿一日可始也、奉行家司左京權大夫光綱也、布施事爲前攝政之沙汰、彼所役之庄々被知行之故也、入道關白長者之時、白川准后令致沙汰云々、日本國之奇異、只在此事、此日令補平等院執行、教慶直令補上座、凡三補有本願御起請、仍停權都維那延秀補之、其儀無別作法、只以人傳仰宗賴朝臣、即宗賴書令旨覽之、其外又以御教書仰執行事、今旨ハ只載補上座許是例也、元修理別當觀明也、然而依避執行共避之、別雖不書下停任之由、平等院之習、非執行爲修理別當之例無之、仍內々其旨示執筆了、又上座忠成尤當執行之仁、然而忠成辭而不補之、年老身貧、而寺家大事、不堪勤仕之故也云云、可謂賢、今日雖余衰日、先日以吉日補執印了、仍不避日次也、自明日爲神事、仍今日仰之也、此日藏人持來月奏

## 九月

一日、甲晴、親經申送曰、基親先日御返事、且可仰遣之由承仰、昨日仰此由也、仍御教書案書也云々、余披見之處、有可改直事等、注付返給、又清祓事行向帥卿亭、可仰合之由仰遣了、親經初齋宮事等注立、明日可持參之由仰之、仍爲件沙汰、今日不參之由所申也、帥卿以有經申云、安樂寺別當事、猶以全珍可被補之由、賴朝卿所申也、仍即令申天王寺了、兼又自去夜、入熊野精進屋了、來五日可進發也云々、大將數日不減、仍護身如何之由、令占之、今日戌刻思立此事、仍以件時同之、二日、乙晴、占形持來、護身不快云々、仍思止了、三日、丙晴、定經來申云、賴朝卿申知行國々成功事、何樣可奏聞哉、仰云、愚意之所及、大內可宜歟、但帥卿可被仰尊勝寂勝寺事等云々、然者兩方可在御定之由、可奏聞者、又伊勢宮司事等、可奏之由仰了、親經又初齋宮之間條々事、並宇佐之間事、還御寂前、可奏聞之由仰、今日承帥卿參詣日吉之由、不罷向云々、又兩社行幸召物、借渡官藏人方事大略無其殘云々、仍猶可殘置之由、仰親經了、藏人方不幾云々、今日兩人論申、然而見色多爲官



方用途、仍裁斷其旨了、入夜宗賴朝臣、又申造講堂雜事、此日所勞殊無術、大略不辨東西、然而依無止事大事、愁以示子細、定有違失等歟、此日入夜法皇入浴、御六條殿云々、

四日、未晴、今晚汗出、今日心地頗宜、女房母儀鳥羽尼公所勞危急、仍定能卿來、余謂之、召陰陽師晴光主稅、占春日怪異事、鹿鳴、惟所口舌、及長者同可慎口舌云々、壬癸日物忌日也、宗賴朝臣參上、行御占事、

五日、戊申雨降、余及大將、共依病不參御堂、定經、親經等來示條々事、定經云、賴朝卿申成功事、東寺已下可然寺々事可宜云々、親經云、初齋宮只可計沙汰、御風氣之間、不能御成敗云々、重可奏之由仰之、近日事余不及自專者歟、危殆虎尾之故也、

字佐勅使基親申上云、依靈夢奉安置薦御驗於御炊殿了、爲本宮沙汰、件所許行清戒了云々、此上條々可有議歟、已朝家之大事也、

六日、己酉陰晴不定、親經來申云、今日重參院、雖奏聞一切無御成敗、只一向可有計御沙汰云々、余召親經於簾前、明旦猶可參奏子細仰了、例幣事上卿、兩丞相辭退、又行事辨衆忠猶病辭申、仍仰親經

之處、指合野宮事、彼是皆闕如歟之由令申云々、親雅所申送也、依大死穢籠居了云々、仍猶可奉行他辨、一切不候、雖四五方公事、相兼行者例也、儘可奉之由、仰親經云々、領狀了、但字佐事有仗議歟、可被仰他職事之由令申、此條頗有謂歟、然而追可仰之由仰之、入夜宗賴朝臣來、申講堂之間雜事條々、委細不追記錄、親經辭申字佐事、野宮并例幣、旁事繁之故也云々、然而未仰左右大夫史廣房來、辨未定之間、例幣々物催具之由申之、又字佐宮事內々尋仰之、申可勘申之由、

七日、庚戌天晴、未刻藏人辨親經來申初齋宮之間事院御返事、其狀御惱不快之由、具以被仰下、於初齋宮事者、只不可事闕、可有計沙汰云、國々庄早可被致苛責、只可被仰院宣之由也、細々事承及、甚以無術云々、仍即以親經爲使、申御惱事驚承之子細、即歸來又示勅報、其趣詳也爲悅、入夜

以使者示女房許、仰趣丁寧也、御祈事令申如此、申條殊悅思食云々、御修法一壇可宜之由有仰、阿闍梨及其法印之事、問遣定長許、奏定可申由有返事、入夜天文博士業俊來、依召也、問三ヶ日之內降雨

之由、



之變、猶進奏如何之由、陳申子細、昨日於院依此  
事、與資元相論云々、

八日、辛晴、晴早旦召遣兩大外記了、師尙付使參入、  
仰宇佐之間事、所申大略叶愚案、仰可進勘文之  
之由了、但是內々召仰、以職事追可仰之、賴業物  
詣了云々、未刻定經來、余仰宇佐宮事可奉行之由、  
申承了之由、又仰世間病事御祈事、自今夜院御祈  
始不動法、阿闍梨法印送消息於女房許、問御所邊動  
靜、季弘持來密奏、去月廿六日三星合變、同廿八日  
雖雨降、依非大雨、不消變、而資元等申變銷之  
由、仍所進勘文也云々、即副進之留案、如元加封返  
給了、入夜隆職來、

九日、壬晴、已刻親經來門外、依物忌也、春申云、初齋  
宮成功之聲、今夜欲申任、而件用途自關東進濟了、  
其上何樣可候哉之由、今日於院定長所申也、然而  
已進納私物了、遂不可默止、猶被任宜歟如何、仰  
云、此事素御禊以後、可被任之由仰了、而依用途不  
足、成傍輩之勇、爲令進殘成功等、先以可被任  
之由、依申請、慙被許之歟、而彼用途已以進納了者  
殘用途不可有不足、仍無成功之要歟、然御禊以

後、殿前被拜任尤可、宜歟者、親經諾、同時大外記賴  
業參入、仰宇佐之間事、申可進勘文之由、所申又  
同愚案、入夜有節供事、余方式部少輔範光勤之、  
陪膳文章博士業實朝臣、北政所方前馬助國行勤之、  
陪膳大藏卿宗賴朝臣、役送北政所家司、五余職事等  
也、女房就之、此日、以內藏頭經家朝臣問申法皇  
御惱、歸來傳仰云、承了、昨今只同事也云々、以定能  
卿申之、或人云、余御祈事、法皇頻有悅氣、尤可喜  
歟、今日自典樂寮進樂、又自栗原御園獻栗、  
十日、癸晴、定經、親雅等來申條々事、昨今物忌也、仍  
各候門外、定能卿來、依物忌不謁之、入夜祭主  
能隆來、有所思、竊以召前、仰可祈請太神宮之  
趣、能隆有信仰之色、

十一日、甲晴、此日例幣也、余依咳病不參八省、又  
不參內裏、上卿左衛門督實家、左大臣、內大臣、大納  
言六人、皆以所勞、再三雖加催、一人無領狀、仍勘  
例所催中納言也、行事右少辨親經、奉行職事定經  
等也、未刻、大內記持來宣命辭別、本宮恠異、并天變  
事等也、見了返給、依居所遠、雖上卿參以前、親經、定經  
等來申雜事、今日早旦修祓、依聊有不審也、近日

天文博士廣元、主計頭資元、已上申依大膳權大夫季弘、天文博士業俊、已上依小兩等論、申三星合變消否之由、各有申旨等、

十二日、乙晴、依例幣後、齋宮至今日、神齋如常、明日明後日之間、可有仗議之由、先日仰定經、而至昨日、無音、仍去夜尋遣之處、今朝返事到來、依母所勞入大原丁之由所申也、承大事之職事、兼不觸案內遠行之條、太以不當、仍其旨加勘發遣御教書了、於今者明日仗議不可叶、仍可返上文書之由仰遣、又召親經、猶如本仰可奉行之由、申承了之由、入夜定經返上文書、申母所勞猶無術之由、

十三日、壬晴、此日渡冷泉亭、余先參院、依無近習者、不入見參退出、參內參朝餉、歸冷泉、女房大將等先所渡也、自今曉東北院御念佛始也、

十四日、丁晴、雅賴卿來、親經申明日仗儀、申公卿散狀、各仰重可催之由、上卿宗家卿云々、今日大外記賴業來、召前仰雜事、此日、講堂行事侍重永來、條々子細仰含了、於死者、大會以前不可叶、他事不可有懈怠云々、爲悅々々、

十五日、戌陰、此日、宇佐宮假殿事、并同濫行人罪名、法家博士失錯等事、有仗議、左內兩府共以所勞籠居、仍大納言宗家卿爲上卿、先奉行職事親經、申定之間事、召前仰含子細了、秉燭余參內、先是宗家卿示含可被定候朝餉邊、人々參集之後、仗議始云々、參入公卿、大納言宗家、前源中納言雅賴、中納言家通、實宗、通親、參議兼光、賴實、進奉不參云々、大事定公卿僅七人、可謂希代、末世事如此也、先定假殿事了、且上卿以職事申其趣、只以定文、明日可改申此事、院奏之後、可有左右之由仰之、其後有明法博士勘文定云々、余即退出、

十六日、未晴、此日發遣春日若宮祭幣、明日祭也、此事雖先例不詳、依謹信所發遣也、陰陽師宣平、陪膳資泰朝臣、行事經泰、春日神主泰隆、去御八講御社之間、依不過蒙衆勘云々、仍仰依如此少事、輒衆徒行自由之科斷、頗不當、無殊事者可免歟之由、今日免除了之由、僧正所被申也、光長申之、仰可給泰隆之由了、今日奉幣、偏爲祈申興福寺諸堂造畢事、自奉拜之期日、有不可說之夢想云々、僧正所被告送也、可仰々々、十七日、庚晴、此日有軒廊御占、依世間咳疾也、上

卿通親卿、親經、親雅、宗賴等、申條々事、入夜花山院大納言來、及深更被歸、此日於文殿有間注事、大外記師尙、大夫史廣房等同着之、多武峯領川合

寺事也、某十禪師高、山階寺僧侶後陽也。

十八日、辛晴、西晴、親雅持來昨日御占形、自然事之上、巽

坤方神崇云々、余仰云、近日病患頗有其隙歟、然者先召件方角社司等、殊可祈念之由、可被仰歟、病猶不止者、可被行奉幣歟、占申理運之由、定不

及殊事歟、且可奏事由者、親經來仰院宣云、字佐假殿遷宮事、依左大臣并下官申、撤却假殿、自御炊殿直可遷御正宮、勅使依夢想、不奏事由行之、是令然事歟、勅定已上分明、爲悅々々、入

夜左少辨定長來、依召也、條々事奏院、其內可讓大臣於大將事奏之、歲內欲果遂也、

十九日、壬晴、戊晴、此日有軒廊御占、上卿中御門大納言、

兩條事有御占、一者字佐宮假殿材木、被渡用正宮神殿之外舍屋、叶神慮哉否、官寮共申叶神慮之由、中心爲悅、二者同

宮若宮御體、可奉修復哉否、官寮共申不可奉修復之由、入夜親

經持來件卜形、依物忌、明日披見之返遣了、僧正以御寺所司、被示庄々訴事、

廿日、亥晴、昨今物忌也、親經來門外、持參遣基親朝臣之御教書案、爲明日披閱留之、又野宮之間條々事仰了、入夜左大辨定長爲院御使來、雖物忌、

依爲勅使謁之、傳院宣云、今度御惱殊恐思食、而偏依昌雲僧正之靈驗得平愈、尤可被優賞也、

律師法眼之間、欲賜一人如何、申必可有恩賞之由了、又示云、先日所申之丞相事、奏聞之處、仰云無左右事にこそ、さて大納言次第、闕せんするか

と有仰、於今者早可有内々御用意云々、爲悅爲悅、殊畏申之由、可奏之旨仰之、此日、家司左京權大夫光綱、五爲行唯識會事、可向南都、自明日可近

代件行事、偏爲儒者之役、尋常家司一切不勤之、仍爲闕傍輩、宗賴朝臣可下向、豫仰之、隨又領狀、然間此會延引、宗賴有服暇事、細綱太郎景光、四郎兵衛尉忠信、仍差改光綱者也、

傳聞九郎義行郎從二人、細綱太郎景光、四郎兵衛尉忠信、擲取了、忠信自

殺、景光被捕得云々、藤内朝宗擲之云々、

廿一日、甲晴、自今日欲始行唯識會、式日三月

十六日也、而彼月十二日、承攝政詔、仍式日不行

之、保安二年例、延引五月、准故殿五月例、今日所欲行也、供米爲方上庄所役、余沙汰也、布施并南都儲事、先例有



勤仕之庄々、入道關白之時、自白川准后許、役勤送、件雜事云々、仍今度觸、近衛前攝政、有可致沙汰之報、此日被改勘初齋宮入野宮之御禊日時、本今而依川途不具延引又有點地事、上卿實宗卿、及晚藏人辨親經持來日時、依物忌不披見、此次申初齋宮間條條事、又返給、可遣基親朝臣許之書狀案、少々有注加之事等仰可爲忿遣之由、又親雅定經等申條々事、親經云、今日欲行院御驗者賞、昌雲大僧正弟子緣雲可任補律師者而被勘御禊日時、同日如何、余云、佛神事合行、其例太多、勘日時了、被行僧事、全不可有其憚歟、今日大將加灸、法印爲護身被來也、傳聞昨日比木藤內朝宗、賴朝卿耶從、擲取義行郎從等兵衛等云々法皇自今日欲被始熊野御精進、而依穢氣日、延引了云云、

廿二日、丑晴、已刻光長申云、春日神主泰隆申、依武士追捕事、昨日唯識會延引者、午刻、唯識會行事家司光綱歸洛、持來僧正消息、被示同事、光綱申云、昨日卯刻、武士二百騎、打園觀修房得業聖弘房、稱放光房忽以追捕寺家、不知何事、仍僧正遣使者被尋之、申云、九郎判官義行在此家、仍爲捕取也云

云、其上不能是非、然間散々追捕、聖弘逐電了、武士無成事、即歸洛、其後講師聽衆等、併以多以分散、不能求尋、仍今日會難被行之由、僧正有命、仍所歸洛也云々、御社近邊四五房、大略如無云々、惠曉之時、光信入寺中之外、未有如此事、可歎可愁、未刻定經來申雜事、五節公卿、實家受領、越中各一人之外、無領狀、雅長能保等固辭云々、仰可奏之由、又此次付定經奏南都狼藉子細、又尋遣能保朝臣許、即付使來臨、依物忌不謁之、能保使人傳云、義行郎從堀彌太郎景光、爲藤內朝宗被擲取了、即究問之處、白狀旨顯然、而所追捕也、而房主并義行逐電了、其間捕取下僧一人問之、申云、義行隱居之條實說也、只今依京都告、遮以逃去了云々、然者彼是已符合、於今者可被懸寺家、此旨早速可被申僧正御房云々者、又只今自是參院可奏聞者、余云先々如此事、殿前承之、而南京寺僧事、兼不承之、尤有恐、苟身爲長者、置心不被觸示、事奉行太有怖畏、爲之如何、能保大驚陳云、全不存秘藏之儀、朝宗兼不申可追捕寺中之由、只申下向南京之由之間、不申事由也、今仰尤可然



云々、余一旦答仰不當許也、仍答可示僧正之許之由、但早可被奏事由、以勅定成長者宜可遣也者、能保奏院了、入夜定經歸來云、五節事猶可催兩人者、南都事返々驚聞食、末代之事、觸事佛法滅亡之沙汰、尤可悲云々、又親經中野宮之間事、入夜亥刻許、定長送御教書云、義行隱籠南都之由、能保所申也、可被召進之由、可仰別當僧正者、即相副御教書、遣光長朝臣許了、及深更返書到來、早可下知者、今日多武峯御墓守二人、依有犯科、賜政所了、

廿三日、丙晴、拂曉遣有官別當康久於南都、爲實檢追捕房舍、并爲訪僧正也、今日依物忌訖日、職事等、并宗賴朝臣參上、終日各申條々事、寸分無其暇、法皇今日渡御大炊御門御所、暫可有御經廻云々、廿四日、丁傳聞平等院有推異云々、明後日可有御占之由、仰宗賴朝臣了、

廿五日、戊晴、又自平等院申云、今日午刻、阿彌陀堂佛、并鏡汗出、是先蹤不快云々、尤可慎々々、

廿六日、己晴、宗賴朝臣召具陰陽師等參入、其身依丙有平等院恠異占、泰茂晴光等所參入也、一者去

十九日巳刻、烏昨損本堂明障子、二者昨日午刻、御佛汗出、此兩事也、烏恠無咎崇、御佛汗恠、火事驚事、病事等云々、聖弘事、別當僧正返事到來、申云所及可尋、但武士搦失了、其上定不輒歟云々者、

廿七日、庚晴、親經定經等申條々事、入夜定經來仰云、先日所奏之丞相事、聞奏了、聞食了、尤可然、早可讓與云々、爲悅不少、殊畏申之由、可披露之旨仰付了、其次示條々事、御熊野詣御下向以前、可有上表事、兼宣旨事、若無日次者、同御入洛以前にて候なん、兼可申置也、今日以定經奏六十御賀、公家可被修誦之事、延長四年字多又奏神祇副之間事、

廿八日、辛未晴、宗賴朝臣參入、召在宣問可奉渡御佛於講堂之間事、於未供養佛者、殊不忌方角、何況假奉渡全以不憚云々、七日可奉渡之由仰了、宗賴召定經、神祇副事問左大臣、被申被補兩人、定補可宜之由、此日初齋宮禊西河、入野宮之日也、公家及余神齋、先日依藏人來催、獻典侍車牛、東川御禊之時、進齋王御車牛、而於入御野宮御禊者、被用御輿也、仍被召典侍牛一駄、定經云、

今日可御覽前駟哉所難色、如何、仰云、寬治、天仁、天治、皆依降雨、無御覽、嘉應依御物忌、無御覽、今日不雨、又非御物忌、可御覽歟者、又云、牛車如何、余云、被用御與之時、若不覽歟、先例未檢見者也、後聞不覽、牛御覽前駟云々、依兩頭不參、定經候御前云々、能保朝臣重於南都、可被召取之輩注送交名、明日可仰下也、此日、興福寺所司二人來申、衆徒申、依聖弘追捕事、不可被行、法花維摩兩會之狀、仰云、此事無謂、只爲普通事歟、尤可然、此事天下第一之大事也、而忽忿怒止大會、爲寺爲長者、太難堪、武士又不可爲苦歟、殆可謂嗚呼歟、儘可遂行之由仰了、

廿九日、王晴、定經來云、定輔、基親之間事、猶可仰合人々歟、未刻、能保朝臣來、召籙前問義行之間事、申狀如日來、範季賴經等朝臣、頗有知案內之聞云々、尤不便々々、申刻、經房卿來、隔籙謁之、多談世上事、戊剋着直衣參院、以定長入見參、小時歸來告召之由、即參御前、法皇御々持佛堂、開中妻戸、令謁給、屢預勅語、小時退下、招定長條條事可奏之由、示置退出、定長語云、任大臣事、御

熊野詣之間、上表并兼宣旨事聞食了、十七日廿日之間、可被行之由、示付定長了、

卅日、王晴、此日於平等院阿彌陀堂、請十口僧、始大般若讀經於同本堂、又請十口僧、行百座仁王講、今日可結願、仍催送行事家司、及布施取等五六人、入夜各歸來、抑件佛汗事、近例皆不快、然而知足院殿御時、此定被行御祈、無其徵之由所傳聞也、仍修件祈等、御讀經宗賴朝臣沙汰、仁王講季長朝臣沙汰、又自今夕於無動寺不動堂、法印被修、不動護摩、光長朝臣沙汰也、天文博士廣元來告夢想事、仍仰同人自今日三ヶ日行夢祭、又使法橋觀性修愛染王供、仍余今夜小念誦、信心發起深有其憑、今日靜賢并性觀等來、傳聞去比、法皇幸近衛攝政亭、有種種密勅等、今度御熊野詣、偏爲公祈之由有其仰云々、親經須參啓野宮之間事、而昨日無音、仍遣召之處、依所勞昨今不出仕、申相扶明日可參之由、維摩會辨光長依病不可下向、仍可仰親經、無他辨之故也、宗賴朝臣申條々事、南京被渡御佛事七日也、而件日依宇佐使發遣、爲神事不能奉禮佛、仍五日於九條先可奉禮之由所仰也、入夜覺乘法眼來、義行并聖弘之間、

○事  
恐脫委爲示、僧正所召寄也、又南都佛開眼事、問送  
僧正之許之處、永承東金堂佛、別當僧正開眼之由、  
見日記云々、仍其定可沙汰之由、仰宗賴了、

右文治二年秋一帙此墨付百拾八枚者先年松殿右幕  
下道昭卿依爲予三男任懸望被聽繕寫彼卿被臨摸之  
畢抑法性寺忠通公之有職其二男松殿基房公親而授  
而其弟傳于後法性寺兼實公且加日課號玉葉是也自  
爾以來爲后昆之儀則累代不讓他家吾後者祕握而可  
貯深奧者也

于時慶安二年<sub>丑</sub>季夏虫拂日陶化翁(花押)誌焉

# 玉葉卷第四十六終

# 玉葉 卷第四十七

自文治二年十月  
至同 年十二月

文治二年十月冬上 歲次丙午

十月大

一日、戌陰雲四掩、時雨間灑、此日平座也、晚頭藏人左衛門權佐親雅來門外、依物忌也、申平座間事、參入公卿、別當權中納言、左兵衛督、源中納言、源宰相中將等云、近年之間、未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>此人數<sub>二</sub>之例<sub>一</sub>、辨右少辨親經、少納言重綱師廣等參上云々、藏人辨親經來申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、又仰<sub>レ</sub>事、入<sub>レ</sub>夜藏人勘解由次官定經參入、依<sub>レ</sub>召也、可<sub>レ</sub>奏院之條々仰含事、

今日祭主能隆朝臣參神宮、祈<sub>二</sub>申下官祈請旨趣<sub>一</sub>、先日之時、眼前召<sub>二</sub>四季朔日、可<sub>二</sub>參詣<sub>一</sub>之由、所<sub>二</sub>仰含也、仍沐浴解除、降<sub>二</sub>前庭<sub>一</sub>遙拜、着<sub>二</sub>宿衣<sub>一</sub>、陰陽師圖書頭在宣經臣、雖<sub>二</sub>物忌<sub>一</sub>外宿、陰陽師猶參入、依<sub>二</sub>解除有<sub>レ</sub>限也、他外宿人不<sub>二</sub>參入<sub>一</sub>、恒例書<sub>二</sub>寫心經<sub>一</sub>、明日可<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>書寫<sub>一</sub>也、親雅申云、依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>用途<sub>一</sub>、來七日和氣使可<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>云々、仰<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>伺<sub>二</sub>日次<sub>一</sub>之由、畢內々見<sub>レ</sub>曆、二十一日之外無<sub>二</sub>其

日歟、

二日、亥天晴、未刻、圖書頭賀茂在宣參上、申<sub>二</sub>此宅修造之間事<sub>一</sub>、來七日依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>吉日<sub>一</sub>、立門並可<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>修理<sub>一</sub>也、而自<sub>二</sub>明日<sub>一</sub>至<sub>二</sub>七日<sub>一</sub>、大將軍遊<sub>レ</sub>南、自<sub>二</sub>五日<sub>一</sub>至<sub>二</sub>十日<sub>一</sub>、土公遊<sub>レ</sub>東、自<sub>二</sub>十五日<sub>一</sub>至<sub>二</sub>十九日<sub>一</sub>、天一在<sub>レ</sub>子、以<sub>二</sub>此等<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>次第御方違<sub>一</sub>云々、余問云、去六月渡<sub>二</sub>此亭<sub>一</sub>、八月歸<sub>二</sub>九條<sub>一</sub>、仍卅五日余宿<sub>二</sub>此家<sub>一</sub>了、仍立<sub>二</sub>東門<sub>一</sub>事、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其憚<sub>一</sub>、須<sub>レ</sub>宿<sub>二</sub>本所<sub>一</sub>、移<sub>二</sub>其忌<sub>一</sub>之處、以<sub>二</sub>取勝金剛院東山之堂<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>本所<sub>一</sub>、仍自<sub>二</sub>彼所<sub>一</sub>當<sub>二</sub>北方<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>王相方<sub>一</sub>、仍更可<sub>レ</sub>占<sub>二</sub>本所<sub>一</sub>歟、申云、可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>坤艮方<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>然者可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>東方<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>大將軍方<sub>一</sub>、先經<sub>二</sub>一宿<sub>一</sub>之後、更用<sub>二</sub>本所<sub>一</sub>、無便<sub>レ</sub>之由、先達所<sub>二</sub>會釋<sub>一</sub>也云々、晚頭、親雅參上、申<sub>二</sub>兩社行幸之間事<sub>一</sub>、并和氣使延引事等、可<sub>レ</sub>奏<sub>二</sub>院條々仰含事<sub>一</sub>、又申云、問<sub>二</sub>宇佐使日次<sub>一</sub>之處、如<sub>二</sub>先日御定<sub>一</sub>、來二十一日吉之由、所<sub>二</sub>申也<sub>一</sub>々々、

親經來門外、申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、初齋宮之間事、親經頗有<sub>二</sub>逆



鱗之間事云々、其事無殊過怠、余先日仰聞定長了、件事親經殊悅申、殆拭感淚云々、

三日、丙子親雅今日參鳥羽歸來、仰云、行幸舞人等事、

只相計可令沙汰者、又行事官事、任先例可被催上臈、大納言定房卿、參議基家（卿）、左中辨光長

朝臣、大外記賴業真人、大夫史廣房宿禰等、可相催之由仰下了、又舞人等、注交名可申之由仰之、又

傳院宣云、源中納言通親卿息侍從通宗申禁色、相計可有御沙汰（云）者、申云、件通宗內外共爲丞相

之孫、父祖又浴禁色之恩、就中父卿、奉公勝等倫、其身爲才卿、云彼云是尤足優賞、而中納言子息、

聽禁色之例、頗以邂逅歟、但非無蹤跡、其例及三三歟、用捨可有御定、兼又內大臣被舉乎云々、見

任大臣子息、若可異他歟、被許兩人之條、又決時議、當時禁色數及四人云々、子細如此候上、左右

只在聖斷者、定經申條々事、大內日花門弓場殿等顛倒、雖暫爲皇居之條有憚哉否事、被問人々、

實房有憚、忠親無憚云々、又神祇副刺任之事、同被問之、皆悉可被補之由被申、木員三人、近年及六人、仍依齋

宮院修造、被加今一人、更不可爲難、不及異

議云々、又親雅申豐前功事、閑院修造（被損之上、五節仍可及）爲莫大之事、豐前功僅可濟萬恐、以後

不能支、件造作爲之如何云々、先爲院御沙汰（公家及御沙汰）、被取損色之後、可有左右之由仰了、

又功程可進萬五千疋之由、先日令申了、更減之條、不當之由仰了、又今明拜任、可營成功云々、此

等事可奏之由仰事、

四日、丁未天晴、入夜參內宿候、依有可方違事也、先是親經定經等來、明曉法皇令立精進屋給、仍今

旦參上、奏萬事云々、條々事在目録、五日、戊寅天晴、早旦自內裏向九條堂、斯日可奉

禮講堂一菩薩之故也、午刻、宗賴朝臣來臨頻雖加催促、佛師懈怠、及晚頭奉渡、奉昇居堂中、

佛師等役之座光等未出來云々、次召宗賴朝臣、問天罰不審事於佛師、有申旨等、次賜佛師祿被物一重、國

行取之、衣冠佛師參堂南階下、國行取之、取祿降階下給之、次引馬一疋、隨身番長清元引一過之後、佛師院尊受取之來、佛師祿於西廊方

賜之云々、先是行列講如常、亥刻歸冷泉家、女房大將等來臨、同心歸家、入夜親雅來申、昨日參院、令奏條々事、御返事等、通宗禁色事、內府息被仰

下之時、同時可有沙汰云々、行幸舞人、相計可被催云々、

六日、己天晴、親經來申三字佐清祓之間事、仰帥卿申狀等、可仰遺賴朝卿許之間事也、又宗賴朝臣來、明曉相具佛、可下向南都、仰可示僧正之趣了、

親經又(申明日着陣之間事)、

七日、庚天陰不雨、斯日奉渡講堂二菩薩觀音、勢至也、於

南京、行事家司大藏卿宗賴朝臣、佛師法印院尊、御佛

行事侍等、同參向、又差副兵士源義兼進代官並耶從等、自去三

日至今日、大將軍遊南、仍今日不奉居本堂、先

奉安食堂、來十日可奉渡本堂也、爲未供養之

上、假奉渡之條者、不避方忌云々、

今日攝政詔之後、始着陣也、早旦修誦於七ヶ寺、

八幡、賀茂、春日、大原野、吉田、法成寺、六角堂、申刻、奉行家司藏人(右少辨親經、

圖書頭賀茂在宣等參上、於藏人)所令勘申日時、

傳覽之、以近習者、見了留文返給宮、其後公卿已

下、漸々參集、西刻着束帶、時繪唐草、紺地平緒、京極殿御笏、御者御堂御劔也、兩

息同着之、懸待事具、秉燭西初日入、仍猶爲西刻、參陣、

出自二棟廊南面西間、三位中將、經透渡降自公卿

座西面階、待從定家獻香、別當少將兼宗連參之故也、前駐隨身取松明進候、先是中御門

大納言已下、列立中門外前立部外、西上、大將中將降

自中門廊南妻、來居階邊、余取裾至中門垂之、

正笏經上達部列立前、北面中御門大納言相、至門下、過之後、隨身懸、兩息相從、前駐季長朝臣立榻、三位中將

下重於弓、大將中將加立公卿列、經萬里小路二

條等大路、至陣口、待大將乘車也、豫立門代慢、稅駕、待公

卿等下車、自卷簾路間不、上、降自車、定家獻於轅

中懸裾於劔、前駐兼親扶持之、入慢門、南經置

路入自左衛門陣、路間前取松明、二行前行、垂、裾經

床子座前、少納言重綱、師廣、右少辨親經、大外記親榮、師向、大夫史廣房等在座、辨少納言、居座前、外記史平伏、

余對少納言重綱小揖、至宣仁門代邊、陣座東、以隨

身番長賴武問時、歸來申至之由、即着陣與座、大將

將、小時起座、經本路、上官等如初、出敷政門代了、取裾

於左衛門陣、六位外記史左右前行、前、渡前橋、折北一丈餘

許、以笏鳴扇、外記史夾置路平伏、外記更立、頗進

召々使音、召使稱唯、斯間余垂裾、先是外記史平伏之、

經外記史之間、步進之後、取裾懸劔、兼親扶持之、召使六

人前追前、又取松明、須主殿察松也、然而依無其、出陽

明門代慢外、依入、夜無、乘車、三位中將、歸家、於

門外下車、兼宗獻香、宗家卿於內裡留了、自余皆來、豫

仰檢非違使、令掃除路頭、日時勘文書樣、

擇申 御着陣日時、

今月七日庚辰、時酉、

文治二年十月七日 圖書頭賀茂朝臣在宣

扈從公卿、

中御門大納言宗家、

帥中納言經房、

三位中將良經、

殿上人、

左少將兼宗、

前駟、

季長朝臣、伊豫守、

兼親、中務少輔、

國行、前馬助、

長俊、皇后宮少進、

清忠、散位、

經泰、安藝權守、

藤業清、勾當、

已上十四人、

大將前駟四人、

侍從定家、

右大將良通、  
左大辨兼光、

〔以政朝臣前攝津守〕

賴高、上野守、

仲盛、散位、

兼時、散位、

康宗、散位、

泰家、散位、

高階泰俊、勾當、

惟賴、散位、

光茂、散位、

三位中將前駟二人、

信光、散位、

憲實、散位、

定成、散位、

清實、肥前守、

此日依吉日一上門棟、但歸家之後、又本門後上假棟也、明日渡也、九條之後、即可營土木者、寢殿南庇已下、修造之所々甚多、來十七日以前、可畢作事、行事季長朝臣、

八日、辛巳天陰雨下、已刻渡九條、密儀也、大將同渡也、

西刻、藏人右少辨親經參上、左京權大夫光綱東同來、

余賜宣旨聽衆交名、余自筆書一紙、不書年號、月日、加封、但不引、也、八人傳

賜、於障子上書之、相副本進上、余相加維加維摩會

文書等、取之出客亭、冠直衣、以家司光綱、召勅使辨親

經、賜文書、六通卷、籠一禮紙、結申、片起、親經取之退出、明曉可

下向也、

宣旨聽衆書樣、端書當年堅者、是例也、

當年堅者、

勤榮、

宣旨聽衆、

珍思、

教信、

〔範慶〕、

増運、

東大寺、

文治二年十月八日、

余注賜書樣又同、但不書年月日也、

賜親經一文等六通、

十聽衆文、

年分度者、

綱所先奏、

簡定文二通、

宣旨聽衆仰書、

可載右  
之文者

未出逢以前、親經返下不足米文、余又返下親經、  
各人下、兼大臣之長者、自下之先例也、攝政關白、皆

同避大臣之後、他大臣若納言下之也、入夜定經來

申云、今夜欲行小除目、而執筆參議不參、仍來十一

日、軒廊御占之次、欲申行如何、  
親雅賜豐前之  
料除目也

九日、壬天晴、親雅申行幸之間事、日時定十七日、舞

人定十九日云々、此外申條々事等、宗賴朝臣申云、御

佛無爲無事奉渡舍堂了、  
於座光者、直  
渡講堂了、御堂又一事

無懈怠云々、

十日、癸天晴、晚頭、宗賴朝臣、自南都歸洛、召前

問講堂之間事、申云、去七日奉渡御佛了、昨日一

昨日兩日參御堂、一事無違亂懈怠、每事美麗、寺僧

等拭隨喜之淚、成風之功、莫不感歎者、先日示作  
之趣、達僧正云々、被賜云々、寺中追捕之怨、依此  
講堂之事、頗休云々、昨日除中尊脇士等之外、皆悉  
奉渡講堂、今晚寅刻、奉渡中尊二井等、樂人打盞  
鼓、持香爐卅口、每事嚴重云々、卯刻開眼、杲海僧都  
下向、布施一餐、北圓堂例也、即宗賴取之、今日大夫  
史廣房申云、任大臣日、南殿可懸御簾、而破損、爲  
之如何、仰加檢知、殊無大破者、可計用歟、又仰  
云、今年可被行官中公事、可注進者、入夜注申  
之、

十一日、甲天晴、親雅持來大外記賴業勘申可被付

黃金於和氣使之間例、仰明日披見、可仰子細之

由、又申行幸舞人散狀等、大略皆悉辭退、仰重可

催之由、又申、圓宗寺寂勝會、自來十八日可被始

行之由、又法勝寺大乘會、講師覺親依入室師匠能

慶入滅事有障、仍今度不可勤仕、何況雖御定切了、

自然懈怠未宣下之間、此障出來、旁不可叶、但覺

親申云、障以前被宣下之由にて、竊被仰下天被

延引、大乘會者、可參勤云々、仰云、宣下之條、不

打任事歟、還御之後、奏聞可左右、於式日者、可



延引者、入夜定經來申云、今夕除目事、親雅賜豐前國、以其息親房申任之、即夜叙爵斯外無任人、又右兵衛督有範、可遷左之由仰之、依能保朝臣申也、又可被下辭書一兩云々、又申、五節散狀未役、三人奏通、隆慶、兼又房、兼光皆已辭退、先上薦二人、重可令催、兼又基家卿先日申服假之由、而服限僅兩三日云々、昨日行幸行事、追可進請文之由言上云々、早可催彼卿之由同仰之、除目內覽既了、通親卿今夕可來之由示之、答今朝物忌也、明後日可宜之由了、

十二日、酉天晴、親雅參上、賜昨日所進之外記例、仰可問兩府之趣、納物事、可奉出黃金之石清水奉幣之問事、即向兩府亭了、寶劔帶、兩府未被申三大納言、被進請文申狀、皆同明日可持參云々、光長進鹿島神主任人占形、各申第二吉之由、第一實景先神主也、而不吉之初、多被改補之由所申也、第二基良兄、第三仍以基良可範宗弟、件兩人共範其之息、吉例家云々、仰下之由仰遣了、宗賴朝臣參門外、申上表之間事、使兼宗朝臣成家等領狀云々、（昨今物忌也）、十三日、丙天晴、親雅申行幸舞人陪從散狀並寶劔黃金等事、被問人々申狀等、今日光長朝臣、遣研學

堅義、長者宣於別當僧正許、明年可動者、辨別當在京之時、成長者宣、遣御寺別當許、是例也、所勢龍居之、辨別當若爲勅使、下向南都之時、氏家司書件長者宣先例也、故不御之時、行盛、唯信等書之、抑今度堅義者、別當僧正內々有被示旨、仍任彼趣、所成長者宣也、

〔書樣〕、

被長者宣稱、以法師盛息、隆慶等可令簡申、明年維摩會研學堅義之由、宣遣仰者、長者宣如斯、悉之、謹狀、

文治二年十月十三日

左中將在判

進上 興福寺別當權僧正御房

入夜源中納言通親來、余著烏帽直衣、謁之、暫以交語、其息通宗禁色之間事有示旨、先日自院被仰下、余更無抑留之思、只申理之所致、而即時不被仰下、依余申狀、無宣旨之由、令傳聞云々、大略爲示其事、所來歟、然而謁談之次、不示其趣、只陳其望尤切之趣、余粗述子細了、

十四日、丁天晴、家實爲院司、奉行開院修造事、爲申其事、參上、又入夜定經來申五節事、并記錄所

事等、入夜爲三方違、自明日、公遊北、宿冷泉家、密々儀、召光長畢、

十五日、戊子天晴、日出之程歸九條、依例終日念佛、入夜尊忠〔法印來〕、此日定經來申、開院修造之間事、又申五節事、基家卿内々奔走之由令申云々、

十六日、己丑天晴、親雅申八幡奉幣之間事、先日人々申狀、多被申、當日可有奉幣之由、而情案之、和氣使賜宣命幣帛等、參詣八幡、定例也、若然者同日兩度奉幣同社、甚無便宜歟、依兼日可有奉幣歟、將又彼恒例宣命、載黃金奉出之由、可被辭別申歟、斯條重可亦問三亞相、定房、宗家、忠親、之由仰了、左大臣凡可奉幣之由、內大臣在西郊、忽不能見返報、仍所問〔者〕此三人也、此日召樂人利秋、笙、賜鳳笙二管、令調之、法印被來、入夜被歸了、宗賴朝臣來申大擧問雜事等、

十七日、庚寅天晴、此日、攝政第三度表也、已刻與大將同車、直衣、網代車、布衣、前駐兩三人、渡冷泉家、今日終修造之功、殿殿南廂、四足棟門、渡廊等也、先是使兼宗朝臣參候、未刻、奉行家司宗賴朝臣來、其後堀川大納言忠親卿來、依人々未來集、招入出居籠中、謁之、小時歸出、在上達部座、此間帥中納言經

房來、在同座、余入内出居、勸饌、大將同相續兼光卿來、清書伊經、又以早參、而作者親經遲參、再三雖遣使、猶以遲々、及申終參入、先召出居前、親經進維摩會後奏、余取入籠中、々々披見了、得略文、綱所後奏、氏人見參等、已上卷一、紙結中、返給親經、仰可奏下之由、此中於氏人見參者、給外記、付内侍所、可奏之由、同仰之、後於内裡、親經申云、不被下、試文、如何云云、件文先例、下辨別當之由、有御覽、所見依不審、還留之、然而余辭大臣了、下、他上廂可被度、下官、仍給辨別當儀、不可叶之故、返給親經、此此文等、可下、左大臣、親經不結申、退下、次余出上達部座、人々、大將先着其座、次召人、宗賴朝臣參候、仰親經可召之由、即退下仰之、親經取副表於笏、參上、先去三四間、居中門廊西簀子、伺氣色、余目之、親經更起參上、膝行昇長押、進文、余取之披見了返給、親經令讀申之、以文下、此間上達部等近々居寄、相共見之、讀了返上、余取之置前、親經退出、次余召宗賴朝臣、賜表、仰可清書之由、此次仰下表宮檀紙等、可持來之由、宗賴退下之後、更持來表宮檀紙等、置余前、本自親經在前、於脇息者、徹了也、件現當、左方、置也、置於檀紙上、待清書之間移刻、余與人々雜談、聊依有所思、語及世上事、經房兼光等、粗有所申、及晚宗家卿來、加與

座忠親卿上、大將着三座也、未及秉燭之程、宗賴朝臣持來清書、余取之一見之後、開視宮蓋、摺墨染筆、書名字二字、朝臣下、上表上、置筆掩蓋之後、如元卷之加禮紙、先端一枚、重奏、大ハ二枚爲禮紙、其上又入宮掩蓋、以二卷一枚也、并裏紙一枚、懸紙三枚也、檀紙四枚裏之、招寄大將、相共裏之、以細帖紙結中、結出也、裴樣見第二度表記、次以宗賴召使、左少將兼宗朝臣賜表宮、兼宗插笏取之退下、其後召清書可賜祿、然而保安二年第三度表、於便宜所賜祿之由見御記、仍仰其旨、人々退出、余歸入、大將相共羞食、此間裝束勅使所、其儀如第二度表、成終勅使來臨、大將出逢、先是着束帶、余又着直衣、降自中門內方、取宮歸入、置一棟簾中、此所、次勅使左少將成定朝臣、昇自中門內方、着座、經透渡殿着座、此間大將降自公卿座前西面階、侍從定家獻香、前近、隨身取松明、進候、頗進出砌外、拜舞、先是勅使退下障子上方了、拜間、居片角、拜了、退出、拜以前退下障子上方、大將拜舞了歸昇、着公卿座、拜間余隨身等立明、了也、着布衣、上着冠、今夜余可參內之故也、主人、須着袴也、然而各直衣之日、隨身着布衣、非難、仍不改着也、次諸大夫改裝束、爲三平敷、勅使、大將、其座共坐也、但勅、次余召人仰、勅使仰、可着座之由、即以着座、勅使座、在四、次大將着東疊、入自東、次家司彈正大弼資泰朝臣、取祿掛一重、經西裏戶、

南簀子、自大將左方獻之、大將乍居插笏取祿、更立跪勅使座前、賜之、拔笏不復座、直退歸入二棟方了、勅使取祿、經簀子降自中門廊內方、步出砌外、再拜退出、(次吉書事)、次余出資筵、脇息、視之、大將獨在座、次宗賴朝臣參進、官方吉書親經候之由、余目之、宗賴退下、次右少辨親經、取文杖候中門西緣、余目之、親經微唯進來覽之、其儀如常、余見了返給、親經置杖取之退歸、結申退下、次宗賴又申藏人方吉(書)候之由、次藏人左衛門權佐親雅取杖、跪候中門廊南第一間、相違親經候、法是非如何、隨余目進來、覽文如例、結申退下、次政所吉書、大藏卿宗賴朝臣申之、不結申退下、次余歸入、欲參內之間、自光長朝臣許申云、山階寺別當僧正被召進先日所被召之聖弘得業、義行、緣者、而大衆申不可被遣、武士家之由、爲之如何云々、余即以使者、先觸聖弘參上之由、於能保朝臣、明且可遣之由、同仰之、事已重事也、輒於氏院不能決斷、仍無左右、可遣能保朝臣許也、(衆徒申狀、一旦雖可然、其理不相叶、隨又僧正密々被示云、衆徒如此雖令申、所行大略無所遁欺、其上事可計沙汰云々、但無左右、不



可及恥辱之由、所仰遣能保朝臣許也、此後參  
內、牛藤車、大隨身上薦冠也、前駟四人、侍從定宗一人連  
車、此夜欲被定兩社行幸日時、而奉行辨光長、依  
病不出仕、以右少辨親經、先可令勘日時許之  
處、今夜即可下請奏也、然者又下請奏辨同可  
成宣旨、仍親經已可爲行事辨、斯條御物詣之間  
私似定仰、行事辨可甚有其恐、仍還御之後申定、奉  
行辨可行日時定之由仰下了、即上卿已下退出、次  
余歸九條、其後聞能保朝臣返事、尤感悅之由也、  
十八日、辛天晴、山階寺所司二人參來、聖弘召進使也、  
申衆徒申狀、并僧正被示旨等、示返事了、李長朝臣  
申次之  
也、於光長朝臣亭、召問聖弘、雖進申狀、其後相  
具信光、遣聖弘於能保朝臣許、自能保許、遣比木藤  
內朝宗許云々、件朝宗猶抽調  
太耶者也此日親雅親經等申三條々  
事、昨日親經可進之文書內、試經文、可下官文也、  
而日記之中、光房朝  
臣記件文必給別當辨、他辨雖爲勅  
使、給辨別當之由有所見、然而事理不可然之上、  
余已避大臣、仍爲上卿、不可下文書、左大臣爲  
上卿、可被下也、旁不能下辨別當、加之他辨爲  
勅使之時、即下件辨之例、又有所見、仍下親經

了、且又親經所申如斯、依此事不審、昨日不賜親  
經也、遣厩馬一疋於親雅許、爲給和氣使也、無  
寮御馬之故也、又唐錦五尺、袷裏唐綾五尺遣同人  
許、神寶劔袋闕如之故也、

十九日、壬辰晴、宗賴朝臣參上申明日大饗定事、可入  
定文之家司事、大略仰了、其中兼親雖補余家司  
猶大將職事也、仍入侍所行事、退案之、先例只以  
殿下家司職事入定文、全不沙汰新大臣之家司職  
事也、仍兼親入侍所行事、不得心、加之又先日可  
爲大將家司之由、被仰下了云々、

廿日、癸巳天晴、此日、右大將良通承可任大臣之宣  
旨、辰刻、余與大將同車、渡冷泉亭、前驅隨身皆布衣、余  
烏帽直衣、大將又布  
衣、密女房等召入車、密々所渡也、寢殿已下修造、大  
略所終功也、申刻、宗賴朝臣參上申、今夕事等、又書  
進定文士代、兼親入總行事、今朝仰可  
入家司行事之由之故也見訖返給、又召次  
第一見之、少々事仰子細了、酉刻、帥中納言經房、左  
大辨兼光等來、扈從殿上人、侍從定家、高通等參上、前  
駟等同參集云々、仍大將着束帶、先例用三葉手劔、平緒等、  
家不能借請、仍用唐草劔是  
又御堂御物也、笏用大殿御物、召陰陽師在宣、在身堅事、  
依永久例  
無反閉此間、大藏卿宗賴來申云、內豎參上、申可



有御參內之由者、大將申承訖之由、或於客亭申  
理、內々可次大將出二棟廊南面簾、降自二上達部座西  
面階、定家獻香、前座出中門一垂、裾向帥小掛、先  
是兩「中門外」經房深處、於門外一乘車參內、經左衛門陣  
破居、兼光居地上、於門外一乘車參內、經左衛門陣  
着陣與座、不經床子座前、經化儀、他公卿可着陣、而  
不着云々、次藏人勘解由次官定經、御熊野詣以前、承  
職事、來與座仰云、可成給大臣日時擇申也、今朝定經  
也、答子細、當時內大臣不問、仍不仰、其後右大將起座退出、  
先是改上達部座裝束、副北妻戶橫、數高麗疊一枚、其南  
中門廊副東壁、數紫端疊二枚、爲殿上人座、但依無可然之人、不若座、大將未歸來、以前、中  
御門大納言宗家被來、小時大將歸來、先入內出居、  
余相共議座席之間事、永保無所見、廣和主人若與第一座、其  
座、即若主人下也、是爲內覽之臣、之故、他歟、永久三年、如  
夜、數橫座、然而故殿不若、其座、給着北座第一、上端雅俊卿着南  
座也、守被例、隨其座、又大將可着四座之由、衆所存也、而中御  
門大納言云、家記被着橫切座之由、隨所見也云々、因此語、忽不  
審出來、余所持之記、注、令若北座、給之由、即宗忠卿記也、大納言  
若被見誤、歟、但永曆入道關白依大股仰、被着橫座云々、乃旁不  
審多、密々示合、經房卿雖申可然之由、猶加憑案、宗家卿雖爲被  
于孫、只口狀也、如日記、者、更無疑之上、永曆例強不可爲規模、  
又思事理、着橫座一條不、其後余在北妻戶簾中、大將着  
可然、仍猶着第一座也、西座第一座也、次宗家卿已下、次第着座、宗家、雅長、兼光  
端、雅長卿退參、々々內裏退出之時、令應從、次余召人、宗賴朝  
臣來、仰召具陰陽師、可參之由、即相具陰陽師二

人、圖書頭賀茂在宣朝臣、大藏大輔安陪崇茂朝臣等也、須召宣  
萬召之、參進西簾子、北上、大將仰日時、宗賴問之、  
申其日、二十、大將仰可成勘文之由、即書一紙、  
加禮紙、人持參、又寄中門廊燈、宗賴取之獻主人、主  
人欲與余、々々稱爲同事之由、不見見之、仍大將  
置座前、次主人召宗賴朝臣、仰可持參硯之由、  
即宗賴持笏取硯、居折敷、參進西簾子、當北第一  
間東西居、被笏候、次諸大夫持參切燈臺、立宗賴北  
方舉燭、此間余以永久定文、自簾中指出突遣之、  
大將取之披持、宗賴摺墨染筆、大將與之、先度、  
事、無定字、先例不同、今度、宗賴書之、置土代折、  
就永久定文、無此字也、宗賴書之、紙於硯邊、書訖撤  
硯、持笏置定文於折敷上、膝行昇長押、北第一、自  
大將座上方獻之、大將取文返給折敷、宗賴取之、披  
見之、後、起座來膳下也、與余、々々自簾下一取  
之、大將復座、余見了自簾下一突遣之、大將取之  
與宗家卿、々々々見了與經房、次第見下、又取上、大  
將取之卷、籠日時禮紙中、目宗賴、々々參進取之、  
插笏置硯傍、取折敷退下、次召宗賴朝臣、仰  
日次等、可問陰陽師之由、余仰、歸參以詞申之、  
可遣宿申、文杖、梓櫃等、事今日、余問上客料理始日、申  
御祈二十一日、御裝束始二十五日者、

同今日之由、宗賴乍候申之、始忘却不申歟、余仰云、今夜之由令申事等、早可始之者、宗賴退下、次召人仰可居物

之由、依親遇、即左京權大夫光綱、今夜補大將家司也、永保爲房爲五位家司、勳主人陪膳、即殿上人也、參上、爲主人陪膳、兼親、親高、國行、次第居仍點此人、爲主人陪膳、爲主人役送人、

膳、主人已下、皆一本也、兼高杯、兼居飯也、居訖光綱更持參盃、折、大將與三宗家卿、暫讓之、然而遂大將取之、

擬三宗家、次第巡行了、次居汁、居了兼光申上歟、不見次立、箸更食之、次二獻、光綱持多、猶大將取盃、再三雖家固、次居菓子、次居薯蕷粥、已上主人手長、不待居了、

食之、次各拔箸、自上薦一起座退下、次主人取副舊定文於笏一起座歸入、予又歸入了、其後役男共撤餐、

今夜補大將家司二人、彈正大弼高階資泰朝臣、

左京權大夫藤光綱、和泉守藤長房、

永久三人被補例也、今夜始行事等、

文杖事、宗賴朝臣召內匠頭安倍業弘仰之、

簡辛櫃事、

家司大博士中原師直、着政所行之例也、

上客料理事、以隨身所爲其所、要日可移、家司光綱行其所

事、其人兼親、司、經泰事、等者之、有三獻、所司者三人參入、始解魚、其後各々退出云々、

日時書樣、擇申可被行大饗日時、

今月廿九日、時午未、文治二年十月廿日

大藏大輔安倍朝臣泰茂  
圖書頭賀茂朝臣在宣

定文書樣、大饗雜事、

行事、彈正大弼高階資泰朝臣、

伊豫守朝臣、源季長、

宗賴、大藏卿、攝以政、前攝津守朝臣、

文章博士朝臣、藤樂實

掃部頭朝臣、中原廣季

光綱朝臣、左京權大夫

兼親朝臣、中務少輔

爲季朝臣、前近江守

家實朝臣、皇后宮大進

長房朝臣、和泉守兵部少輔

長親朝臣、散位

已上皆家司永久例也

殿上裝束所、

政所、

伊豫守朝臣

文章博士朝臣

爲季朝臣、

長房朝臣、

侍所、

賴高朝臣、上野守

仲資朝臣、散位

〔宗賴〕

光綱朝臣、

家實朝臣、

國行朝臣、前馬助

長俊朝臣、皇后宮少進

兼時朝臣、散位

上客料理所、

政所、

彈正大弼朝臣、

前攝津守朝臣、

兼親朝臣、

侍所、

國行朝臣、

經泰朝臣、

益送、

穩座、

中御門大納言、宗家

酒部所、

行事、

師直朝臣、大博士

史生饗、

賴高朝臣、上野守

史部饗、

渡殿饗、

伊豫守朝臣、

光綱朝臣、

長親朝臣、

兼時朝臣、

泰家朝臣、

藤中納言、定能、

諸大夫饗六十前、

檢非違使饗(二十前)、

召人衙重十前、

行事

宗賴、奉行家司、

長俊朝臣、奉行職事、

掃除、

仲賴朝臣、大夫尉、

章廣、志、

掌燈所、

國行朝臣、

庭燎所、

掃部頭朝臣、廣季、

被物所、

彈正大弼朝臣、

家實朝臣、

祿所、

師直朝臣、

文治(二年十月二十日)、

〔光〕綱〔朝臣〕、

季國、尉、

經泰朝臣、

伊豫守朝臣、

兼時朝臣、

玉葉卷四十七 文治二年十月

廿一日、甲午〔天〕晴、此日被發遣宇佐和氣使、去年被發遣和氣相家與、依路次須轉、兩度歸洛、空不遂前途、仍差改其使、所被發遣也、與樂頭定成朝臣息定康也、先例空歸洛之時、被差替其使、今日雖堅固物忌、依爲有限事、推以參內、綱代車、于時辰四點也、奉行職事親雅外、他人不候、萬事可催具之由仰之、余慙候朝餉方、親雅申云、神寶已持參、宮主又參入、上卿并使內記等未參、各遣人了云々、余即下直廬、改着束帶、隨身同着榻冠等參候、此間、親雅內々持來宣命草案申云、內記只今參入、雖上卿未參、先密々所持參也云々、辭別其狀多、仍據余仰可召見之由也、余披見之處、可改直事三ヶ條、仍具召仰了、其後余參御所、召內藏頭經家朝臣、令奉仕御總角、又召御裝束、經家信清等候之、余仰、親雅先令敷御拜座於東對、御殿南廣庇、先撤日記御厨子四季御屏風等、上南面御格子、不卷、親雅只供廣庇御座、不存可上格子之由、不足言也、仍余仰之、又親雅之所案、供御座於階間、四第二、可立神寶案於東云々、是堀川院西禮之御殿、立神寶案於御座西、准之思之、尤可立東、又自殿上方持參得便宜、模大內又以相叶云々、余云、宇佐宮者西也、御拜可奉向其靈廟方、神寶又可安置同方、而如申者、御拜之時、可乖神寶敷、申



狀似一隅、只執東西之准據、不辨神居之方角、頗有若亡歟、仍余仰此子細、親雅無所陳改直了、又御座可敷西第三間之由同仰之、又元南面供之、同心令改敷西面<sub>羅チ南北行ニ敷テ、中帖ノ縁ヲ西東ニ當テ敷之也</sub>、又庭中敷使宮主等座、余仰令撤之、御馬御覽之後、可敷之故也、未刻、上卿參上、勘日時<sub>殿上使之時、於藏人所勘之歟、和氣使之時、於陣勘之云</sub>、以親雅覽之於鬼間邊、見之返給了、次御覽神寶、其儀行事藏人、取小筵一枚敷御前<sub>西也、即座西</sub>、次五位藏人親雅、侍從定家等、各持參御劔、置件筵上<sub>南北妻、柄北外四各置、御劔蓋、又加置平緒、但不付、御劔也、抑殿上使之時、金銀幣鏡等、同御覽、和氣使之時、只御覽御劔一腰也、而今度爲、藏人使之歸落、被調、加神寶、依先例也、件新加神寶之中、又有御劔、仍件御劔、同經御覽、是今案也、次主上出自第三間<sub>御座</sub>、簾中、余先出廣庇<sub>之問也</sub>、裏御簾<sub>實首候者或裏、今日不候、仍余裏也</sub>、即着御座<sub>自北方使、若御四面、御覽</sub>、神寶了、即入御<sub>只記當時作法也、入御之時又裏、作法、余</sub>、自鬼間方參御在所、抑普通例、先着御引直衣、於石灰壇<sub>先御覽神寶、令歸入之後、改着御束帶御也、而寬治元年御束帶之次、一度可御覽神寶之由、大殿令申行給、其定被行了、今度所用彼例也、主上西第二間簾中敷厚圓座着御之、余同西一間頗寄北、敷例圓座一枚爲余座、次余仰近衛司</sub></sub>

可參之由、左少將成定參上、候御前簀子<sub>北</sub>、次自東中門、引入御馬<sub>近衛官人二、人引之</sub>、三匣引廻之後、如元引出了<sub>是皆余、下知也</sub>、次少將起座、次入御、余同候御前邊、此間親雅內覽宣命草<sub>一字有可改事、仍仰其旨了</sub>、見了返給、此間申使參入之由、仍又出御南面、先是南廣庇西第一間、立机一脚、置御劔二箱<sub>藏人二人、先立机、五位藏人親雅、取御劔、欲令昇立之、余則制止、侍從信清等、取御劔、置之、始令置之、昇出之時、取置昇出、故實也</sub>、次主上出自西第三間御簾、余裏御簾、奉居御座<sub>御座西面也</sub>、親雅進御笏<sub>入宮、自階間、主上取御笏給、親雅取、蓋退下、次供御贖物、陪膳內藏頭經家朝臣、役送五位藏人親雅、大高坏二本、經家取散米高坏、親雅取人形高坏、各經南簀子入階間、居御座西面也<sub>居了</sub>、此間宮司入自東中門、就中門廊南妻獻御麻、經家朝臣於緣南妻取之、持參進自御前、乍令持經家、令懸意氣給、只如形也、經家持返於初所、返給宮主、々々進着南庭中座<sub>宮主并使座敷數之、宮主座在四、頗倚北、使座在東、頗倚南、兩座之間、五六尺許去之</sub>、次使散位從五位下和氣定康<sub>息云々、入自中門、着庭中</sub>、座、宮主祈申了<sub>其聲不聞、又無其程</sub>、退出、使又退出、次御拜兩段再拜、向西拜御之<sub>坤、訖入御、先召親雅返給御笏、余裏御簾一如常、抑宮主退出之後、即入御、余忘却、希有奇惟事也、已昇出御劔机之間、思出更召</sub></sub>

返、出御有<sup>御拜也</sup>、次藏人取<sup>御衣</sup>、出<sup>自</sup>鬼間、降<sup>自</sup>中門廊、西簀子南妻中門內、賜<sup>使</sup>、<sup>牛臂、下翼、</sup>使進<sup>庭中</sup>拜舞、其作法奇異、不可<sup>次入御、脫御裝束、余暫候御前、申刻、</sup>親雅申云、親經自<sup>路頭</sup>歸參、<sup>親經者爲檢、知黃金奉納之</sup>昨日內々、告<sup>遣入幡別當慶清許之處、其返事於途</sup>中到來、申云、件黃金奉<sup>納當宮、是神慮之令然也、專</sup>不可<sup>返本宮者、爲申此事、所歸參也云々、此</sup>申狀自由也、又不當也、但可<sup>被仰合上卿、申云、被</sup>立<sup>字佐使、摺改宣命、於黃金者、追有沙汰、可</sup>被<sup>付後使、歟、將可被行御占、歟、余云、此事不</sup>可<sup>然、初奉納之時、遂可被返納本宮、暫奉納之</sup>由、被<sup>載宣命了、如慶清申狀者、永可被棄</sup>置宇佐<sup>宮</sup>、歟、凡勿論之沙汰也、追經沙汰者、何<sup>樣可被議哉、但法皇幸南山、一身自由之沙汰、可</sup>招<sup>後誘、仍以親雅爲使、遣左大臣并實房卿許、</sup>依<sup>近也</sup>、此事存旨次第如此、然而事爲<sup>神事、又大事也、</sup>仍爲<sup>免自尊之難所聞達也、又實慮之趣如何、即</sup>歸來云、左大臣、皇后宮太夫等、被<sup>申旨、一同共以如</sup>被<sup>仰下、慶清申狀太不當、奇恠之由也、但此上事、猶</sup>可<sup>在御定云々、左大臣被申云、若可被待院還</sup>

御<sup>哉否、恐意難計云々、人々雖有猶豫之氣色、恐案</sup>之所<sup>及、太以不當也、仍猶早可發遣、若有後日之咎</sup>者、只微臣可<sup>罷肩也、早速可進發之由、仰親經</sup>了、又親雅書<sup>御教書、遣慶清之許也、事了秉燭退出、</sup>此夜、大將任大臣祈始不動法、<sup>法性寺座主慈圓、伴僧呂、○</sup>源座主、于<sup>時爲法性寺座主、於御加持者、可遇三箇</sup>動<sup>修此法、自他吉例符合可、</sup>日<sup>之由仰了、家中無可然之所、借近邊人家爲壇</sup>所<sup>修法雜具、職事兼時相具所參向也、又自去十七</sup>日、以<sup>智證阿闍利、所始修大威德供也、又諸社諸</sup>寺、宗賴朝臣、或遣<sup>御教書、或召其人、至于大饗日、</sup>可<sup>祈請、由仰之、</sup>

廿二日、<sup>乙未</sup>天晴、親經申送云、夜半許參<sup>着八幡、合</sup>○<sup>南接含歟、子細於慶清之處、只一旦令申許也、不及</sup>又<sup>或令申歟、</sup>左右<sup>之由令申、無爲奉公黃金了云々、又親雅進</sup>慶清請文、大略前<sup>同、</sup>

廿四日、<sup>酉</sup>天晴、此日入<sup>夜帥經房來、余謁之談世上</sup>事、及<sup>夜半</sup>歸了、

廿五日、<sup>戌</sup>晴陰不定、此日大饗御裝束始也、行事家司<sup>職事等着束帶參候、先敷始弘筵一枚、大略立机屏</sup>風等、見<sup>座體、南庇今一尺仍不足也、狹之間、座後</sup>

不可有<sub>レ</sub>其路、仍參議座机足ヲ懸、龍鬚綠可<sub>レ</sub>立之由仰了、

廿六日、<sub>亥</sub>陰晴不定、午刻參院、去夜自<sub>ニ</sub>熊野<sub>一</sub>、有<sub>ニ</sub>御下向<sub>一</sub>、即御宿八條院御所、今日所<sub>ニ</sub>御<sub>一</sub>渡<sub>ニ</sub>御大炊御門御所<sub>一</sub>也、參院、以<sub>ニ</sub>定長<sub>一</sub>申入、只今欲<sub>レ</sub>下<sub>ニ</sub>湯<sub>一</sub>、仍不<sub>レ</sub>謁之由有<sub>ニ</sub>仰<sub>一</sub>、申、無爲被<sub>レ</sub>遂<sub>ニ</sub>御參詣<sub>一</sub>、殊悅申之由、申入了、又仰云、明日、明後日之間可<sub>レ</sub>參、每事可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰、又可<sub>ニ</sub>聞食<sub>一</sub>云々、條々內々示<sub>ニ</sub>行定長<sub>一</sub>退出、明後日可<sub>レ</sub>參之由、相含了、大饗掃除、御裝束無<sub>ニ</sub>他事<sub>一</sub>、入<sub>ニ</sub>夜<sub>一</sub>、自<sub>ニ</sub>內裏女房<sub>一</sub>示送云、女房陪膳闕如、今日終日、不<sub>レ</sub>供<sub>ニ</sub>御膳<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>之如何、乍<sub>ニ</sub>驚倒<sub>一</sub>衣參內、女房云、只今大納言典侍參入、供<sub>ニ</sub>御膳<sub>一</sub>了、明日明後日可<sub>ニ</sub>闕如<sub>一</sub>云云、仍明日可<sub>レ</sub>進<sub>ニ</sub>三位中將<sub>一</sub>之由、申了退出、殿上人、并院北面藏人五位、可<sub>ニ</sub>催給<sub>一</sub>之由、付<sub>ニ</sub>定長<sub>一</sub>奏<sub>レ</sub>之、

殿上人等、定經承之、北面事、定長奉行被<sub>レ</sub>催之云々、

廿七日、<sub>庚</sub>天晴、今日爲<sub>レ</sub>勤<sub>ニ</sub>女房陪膳<sub>一</sub>、三位中將參內、即今夜可<sub>ニ</sub>宿候<sub>一</sub>也、季經朝臣、并男共兩三人、令<sub>ニ</sub>相具<sub>一</sub>也、此日定能卿來、

廿八日、<sub>辛</sub>天晴、前源中納言來、酉刻欲<sub>ニ</sub>參院<sub>一</sub>之間、先左少辨定長爲<sub>ニ</sub>御使<sub>一</sub>來、木工頭範季朝臣罪科之間

事也、自<sub>ニ</sub>賴朝卿之許<sub>一</sub>、件朝臣有<sub>ニ</sub>同意義行<sub>一</sub>之聞、奇恠之由、示<sub>ニ</sub>送經房卿許<sub>一</sub>、殊雖<sub>ニ</sub>非<sub>一</sub>奏聞之趣、事體難<sub>ニ</sub>默止<sub>一</sub>、仍被<sub>ニ</sub>召問<sub>一</sub>之處、於<sub>ニ</sub>同意義行<sub>一</sub>之條者、爲<sub>ニ</sub>無實<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>堀彌太郎景光<sub>一</sub>者、一兩度謁了云々、實隆無<sub>ニ</sub>其科<sub>一</sub>、乍<sub>ニ</sub>謁<sub>一</sub>景光、不<sub>レ</sub>搦進<sub>ニ</sub>之條<sub>一</sub>、已爲<sub>ニ</sub>過怠<sub>一</sub>、仍聊可<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>行<sub>一</sub>其罪<sub>ニ</sub>哉<sub>一</sub>、將又待<sub>ニ</sub>關東申狀<sub>一</sub>、豈不可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>其沙汰<sub>一</sub>歟如何、兼又義行依<sub>ニ</sub>院宣<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>企<sub>ニ</sub>夜打<sub>一</sub>之由承及、即申<sub>ニ</sub>殿下<sub>一</sub>了之由、範季所<sub>ニ</sub>申<sub>一</sub>也云々、如何云々者、余申云、依<sub>ニ</sub>院宣<sub>一</sub>義行可<sub>レ</sub>企<sub>ニ</sub>夜打<sub>一</sub>之由、範季申狀全不<sub>レ</sub>承及、若奏<sub>ニ</sub>謬言<sub>一</sub>歟、兼又罪科之條、乍<sub>ニ</sub>謁<sub>一</sub>賊徒之緣者、不<sub>レ</sub>搦進其身、又不<sub>レ</sub>經<sub>ニ</sub>奏聞<sub>一</sub>之條、其罪難<sub>レ</sub>遁、何況於<sub>ニ</sub>賴朝之素意<sub>一</sub>哉、仍聊被<sub>レ</sub>行<sub>ニ</sub>其科<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>仰<sub>ニ</sub>遣關東<sub>一</sub>、尤宜歟者、即余參<sub>ニ</sub>院<sub>一</sub>、以<sub>ニ</sub>定長<sub>一</sub>入<sub>ニ</sub>見參<sub>一</sub>、小時歸出、告<sub>ニ</sub>召之由<sub>一</sub>參<sub>ニ</sub>御前<sub>一</sub>、任大臣之次、公卿昇進事被<sub>レ</sub>仰出、先納言所望輩之中、其理在<sub>ニ</sub>誰哉<sub>一</sub>云々、各奏<sub>ニ</sub>申旨<sub>一</sub>、大略兼光當仁之由思食歟、余奏云、先可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>定<sub>ニ</sub>公卿員數<sub>一</sub>也、昔大納言二人、中納言三人也、而中古以來、大納言三人、中納言五人、自<sub>ニ</sub>後冷泉院御時<sub>一</sub>、三條院御時、雖中納言八人例、其後又中絶、以後大納言五人、中納言八人爲<sub>ニ</sub>定數<sub>一</sub>、其後平家押<sub>ニ</sub>領天下<sub>一</sub>之間、大納言及<sub>ニ</sub>七八人<sub>一</sub>、中納言又



有三十人之例、末代之政、被減官員之條、雖有三人愁、中納言之員數、過參議之條、猶不可然歟、但當時戰事、辨官尤爲要須、仍雖被任大中納言、以其數不可爲本數、事依難默止、今度許被任利闕也、自今以後、不可爲例之由、可被仰下、歟、若然者任大臣宣命、必不可被載、公卿昇進、是非正闕之故也、秋除目在近、彼時被行公卿昇進、若爲上計哉、但公卿總口可被增員數者、此次必可有昇進也、兩箇之間在聖斷、兼又今年可有御書始之年也、一條院七歲又代々例、十二月有此事、帝王御略每度十二而侍讀之仁、四位儒士之中、光範之外無其人、月彼行也件光範爲西海王學士、尤足忌憚、其外敦綱在西海、業實已下、世之所推、奈侍讀之仁何、兼光卿逐寬和一條、齊光子時大辨宰相例、尤當仁歟、其身又爲高倉院御侍讀、旁以不可外求歟、若兼光可昇進、御書始後、可被行除目歟、中納言侍讀無其例之故也、他人昇進者、任大臣以後、不經幾程、被行除目、又何事之有哉、此條又在勅定者、仰云、此等之間、猶可相計云々、天氣頗有可然之色歟、然而未有、一決歟、退起之後、以定長重取御氣色、仰云、於今

度者、不可有公卿昇進、追可被仰、每事不思食得之故也云々、即退出、定長注送散狀云、北面藏人五位、只領狀一人也云々、勿論、定經申、殿上人散狀、十餘人參入云々、公卿如法午刻可參之山、可相催之旨仰了、廣房參入、仰前行出立之間事了、廿九日、壬天陰時々小雨、入夜不降、此日有任大臣事、權大納言兼右近衛大將良通任內內辨權大納言宗家卿、大臣、第六大納言超上藤五人宣命使左大辨兼光卿、秉燭有宣制之後、於冷泉萬里小路亭、東行、東底響、申刻余參內、前近衛三人、少納言隨身稱、東仰奉行職事定經、催行懈怠事等、賴房在共、東帶毛車內府參內儀、申刻着束帶、時給螺鈿、緋地平緒於門外乘車參內、入自西洞院西、北行經南殿御後、向余直盧、權中納言定能卿、經房卿、參議左大辨兼光卿等扈從、殿上人、左少將親定家等同扈從、前駐廿人、隨身揭垂袴、能侍從壺胡錄如例、余參內之後、即參內入、自東面北門、經御所北面、直向余直盧、相待節會畢、是例也、扈從公卿等、自北陣門外、直向陣方也、于時公卿一兩人之外未參、中御門大納言、源中納言許也仰定經加催促、仰召仰事、又仰可被奏宣命之由於上卿、小時定經持來宣命、早見



了返給、仰云、候御前之間、即奏聞了、早可被清  
書者、幼主之時、以覽攝政、爲奏聞、或又別奏之  
歟、今日依事可懈怠、直奏了之由、內々示上卿也、  
良久持來清書於鬼間、見了返給、即相具內侍一向  
南殿、無主上渡御之儀、近代名略儀、近將引陣、各隨殿者、相待  
內辨參進之間、頗經時刻、仍遣定經、相尋之處、歸  
來云、爲奏宣命使事、被尋職事、々々在南殿方、  
不聞得之間、經程云々、余云、先例內辨相計、所  
被差定也、自<sub>上</sub>無<sub>被</sub>仰下、早可被計、仰云、  
無異儀、參議之內、可被點其人者、此事奏聞、未知了、知此事、偏經奏聞事、成立ナハ、爲頭之內辨入、自東中門、被進立西軒廊、于時、內侍出、自東面御  
簾北端、副母屋障子、東行、自東底、南行、出自東  
面戶、居東階上簀子、須臾歸入了、戰事定經、扶持之、次內辨昇  
殿、傍北側被昇、未知此說、被降之時、被傍南側、又以不書、凡東階昇降、存兩說、一ハ昇降、共用南側、一ハ昇時副南側、爲先、左足、降時、爲先、右足、以是多爲善、未、經南簀子、自入東第二間、着元子、本自在第二間、四、催開門  
關司之後、召舍人、短歟、大舍人稱唯、次少納言賴  
房進就飯版位、內辨宣刀禰召々、少納言稱唯退下、  
次公卿參列、外辨上卿、別當家通稱、此間及音、仍有立明、須先舉、堂上、燭也、而女嬬進參之間、且舉庭燎也、

公卿參列了、內辨召宣命使、以咳聲被驚之、然而暫依、不聞得、近衛者告、示參進、  
即左大辨兼光參進、昇自東階、立南簀子東第二間  
東邊、爲內內辨乍持笏給宣命、兼光如持笏取  
之、副笏退下、立軒廊東間北邊、南、次內辨下殿  
列南側、于左廻向階揖、右廻向宣命使、又揖出東間、  
經<sub>三</sub>樹等東練步、經列後加列上、其練步之間、次宣命  
使出軒廊東間、經列下北等、就宣命版位、宣制兩  
段如常、此後余示付定經退出、可渡南階事、要錄事、由、各可仰、聞食、先、是、余、各、內、右大將參入、入、自、北門、竊、由、之、旨、仰、聞、也、  
經御所北方、向余直座、前、近、七、人、四位、六位、各、二、人、五位、十六、人也、公卿定能、  
雅長、兼光等相從、殿上人親經朝臣、宗國、定家、高通  
等也、先例東三條儀、以西爲禮、主人自東門出入  
尤有便、此家以東爲禮、西方無門無路、仍只  
出入禮門、太無便宜歟、出家出門之間、公卿列  
立中門之外、如常云々、宣制了之後、付定經奏、可  
渡南階前之由、蒙可許之後、經階前、殿上、八十一人、前、近、國、身、等、不、相、具、於、隨、身、者、參、內、即、改、着、局、相、持、禮、許、自、餘、如、元、撤、劍、交、雜、色、也、番、長、前、近、等、來、會、中、門、邊、下、殿、隨、身、雜、色、等、來、會、左、衛、門、進、弓、場、殿、代、也、東、中、門、付、左、中、將、公、時、朝、臣、奏、事、  
由、拜舞了定經又告召由、即昇自小板敷、先居  
殿上小臺盤下、即起座參朝餉方、少時退下、須出、御、發、仰、

座也、而依無御直、於三板敷邊、付定經、上達部等、  
衣不出御、勿論々々、於三板敷邊、付定經、上達部等、  
襲祿可給之由奏之、定經仰上卿實家卿、內府出  
自左衛門陣、有御前、於三條町辻、代門、乘車退出、  
依入夜無出立、豫依寬仁例、可有前行出立之  
由仰官、外記又觸人々、而各迴參之間、無此禮、尤  
遺恨々々、內府入自冷泉亭東四足并中門、經南庭、  
共殿上人五人、取松明、相於寢殿西面妻戶前庭、付左少  
將親能朝臣、先申余再拜、次付同人申母儀又再拜、  
即昇自件妻戶前、沓脫暫入簾中、殿上人等渡南  
庭、出東中門了、東三條儀、以西爲禮、主人出入東門、有便、  
少時公卿等來集、內府末歸家之前、四五許輩、列立中門  
外、宗賴朝臣告此由、即內府出自西面妻戶、經簾  
子東行、降自南階西邊、立西間柱、去溜一許丈南面  
而立、家司中務少輔源親賴、資、於取下一級着之、獨諸大夫之  
英華、勳此役先例也、兼親先祖未勳此役、然而重代相傳召  
仕、未見他門、良久大納言實家卿進出、經東中門、并幔  
門、列立南庭、主人降立之由、若人不  
告、此未練至也、公卿一列、辨少納言  
一列、外記史一列、大臣列了、生客已下再拜了、內府  
目宗家、此問宗家  
度、歸行階前砌下、三尺立還、又  
目之二度、即進昇西階西邊、着親王座、次宗家卿已  
下、參議已上、昇自同階、自簾子東行、入自東第

一間、着奧座、（端座）參議一人若之、  
泰通一人若奧座、元所儲之座、大納言  
二人、中納言六人、參議五人也、而大納言一人、中納言  
七人來、仍實家卿着紫圓座也、宗家卿着中納言圓  
座末、余自簾中再三示之、仍被進着第一圓座  
也、次立公卿辨少納言等机、上官座立之、須追立也、然  
者之時、公卿已下机立之、尊者外新追立之、大臣爲尊  
大納言爲上首之時、公卿已下机追進先例也、次居肴物、言手  
長、中納言手長、參議  
手長、辨少納言手長、次主人起座、先是卿依要用一起  
座、向兼所方、即歸  
傳之、其相具、瓶子取藏人左衛門權佐親雅、入自南  
西東一間、經奧座後、居宗家卿上勸之、持盃有  
揖拔笏、宗家持盃之後揖起座、經本路、着南階南  
面圓座、主人勸盃了起座、經奧座後末等之程、家司和泉守長房  
取件圓座進西方、數南階間四柱西邊、豫儲候、殿  
邊也、

十一月  
一日、甲辰雨下、親雅來、○中宇  
脫款條々事、入夜、雅賴卿爲  
前攝政使來云、明日內大臣拜賀可被來之由承之、  
而尤可見參之處、其事不可叶、境節無便宜、  
枉不可有渡御、如此承了只同事也云々、今日撤  
大襲裝束、又襲膳等遣勸學院、相具魚鳥  
等云々、以兼親爲

使、返送慢等於仁和寺宮許、早旦藏人辨親經申五  
躰不具穢氣之由、穢中諸社祭等、奏事之由、可催他  
辨之由、仰付定經了、有可申沙汰之報、

二日、乙天陰、時々小雨、此日內大臣拜賀也、先被下

大將還宣旨、上卿藤中納言定能卿、酉刻、大外記賴業持來宣旨、家

司大藏卿宗賴朝臣持參之、大將於內出、留文返給宮、

此間公卿已下來集、官人兼業也、本番長、迴參之間及秉燭、

適參入之後、大將出立、先是著束帶、平比、有文帶如

例、旁大殿御旁也、年來余每拜賀用之家々習有慶賀、即先參

皇后宮、依近隣、隨便宜也、內大臣降自中門內

方、左少將伊輔朝臣持來杏、前、出中門、先是公卿三人

列立中門外、立、前、內府相揖、於門外乘車、余竊

召季經朝臣車、與女房同車、於近邊見物、過了歸

入、亥刻、內府歸來、語云、參皇后宮、申次左中將公時

朝臣、再拜、拜、爲、母后、未、有、之後、依召參殿上、引出物

琵琶一面、入、公時朝臣取之持來、內府起座了、共殿

上人宗國、左兵衛、受取之、授前驅、侍、水參院、

六條四洞、申次內藏頭經家朝臣、舞蹈之後、依召參御

前、被參御馬於中門、取綱一拜、伊輔朝臣受取之、

賜前驅兼親、司、兼親給隨身兼景一如例、次參八條

院、申次宮內卿季經朝臣、依召參、能中、女房持來和  
琴、內府取之、召伊輔朝臣於籠下給之、伊輔取之  
給前驅、其後退出、  
此日相伴輩、

扈從公卿三人、

藤中納言定能、

三位中將良經、

定能經房於八條院留了云々、

前驅殿上人十一人、

宮內卿季經朝臣、

右少將伊輔朝臣、

藏人勘解由次官定經、

侍從定家、

左兵衛權佐宗國、

藏人左衛門尉藤原行經、

同諸大夫廿人、四位四人、

彈正大弼資泰朝臣、

文章博士業實朝臣、

中務少輔兼親、

前馬助國行、

帥中納言經房、

內藏頭經家朝臣、

藏人左衛門權佐親雅、

藏人右少辨親經、

侍從高通、

少納言賴房、

五位十四人、

伊豫守季長朝臣、

前攝津守以政朝臣、

上野守賴高、

散位仲盛、



同散位兼時、

〔同光信〕、

同光茂、

〔同以輔〕、

皇后宮權少進長俊、

散位經泰、

同康宗、

陸奥守成實、

肥前守清實、

散位兼資、

勾當藤業清、

同高階泰俊、

隨身有<sub>二</sub>一員、將監將曹各一人、皆束帶、

官人秦兼景、若束帶、

番長未召、仍召<sub>二</sub>本府領<sub>一</sub>、

<sub>非其家子、假仍不  
賜、染袴例也</sub>

中將前駈四人、

散位宗成、

同惟賴、

同憲實、

同邦兼、

今日早旦結願、日來所修之不動法、於大將前御加持之次、賜<sub>二</sub>布施<sub>一</sub>、三位中將良經取<sub>二</sub>被物<sub>一</sub>、<sub>爲要、歷阿  
團梨也</sub>、經朝臣取<sub>二</sub>布施<sub>一</sub>、番僧八口、布施家司職事等取<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、各一  
康和、仁源所修之不動法、於御前有<sub>二</sub>結願<sub>一</sub>、追彼  
例也、定經來云、春日祭奉行、辨親經觸穢、替須定長  
奉行也、而院仰云、依爲召仕之者奉行、蓮花王院總  
社祭旁可<sub>二</sub>指合<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>催<sub>二</sub>大辨<sub>一</sub>、若少納言者、仍催<sub>二</sub>氏少  
納言重綱<sub>一</sub>如何者、早仰可<sub>二</sub>催<sub>一</sub>之由了、

三日、<sub>午</sub>天晴、親雅云、春日祭內侍闕如了、少納言內侍<sub>惟方入</sub>、爲巡役、而無故對捍、仰<sub>下</sub>慥可<sub>二</sub>催出<sub>一</sub>之由、  
了、<sub>若不勤仕者、可有  
追放之由仰之</sub>猶所<sub>二</sub>溢云<sub>一</sub>、仰可<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>之  
由了、他內侍等之中、雖已役可<sub>二</sub>拂之由<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>誘催<sub>一</sub>  
之旨仰了、

四日、<sub>未</sub>陰晴不定、此日立春日幣如例、依<sub>二</sub>物忌籠<sub>一</sub>  
御幣陪膳行事等、不<sub>レ</sub>籠<sub>二</sub>陰陽師<sub>一</sub>、陪膳季長朝臣、行事  
兼時、陰陽師在宣也、抑近例自<sub>二</sub>春祭<sub>一</sub>、立<sub>二</sub>神馬乘尻<sub>一</sub>之  
由、入道關白被<sub>レ</sub>示、又見<sub>二</sub>保安御記<sub>一</sub>、<sub>京極大  
殿仰云</sub>仍日來不  
致<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、而御堂長德元年冬祭、被<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>神馬十列<sub>一</sub>  
之上、康和爲房記云、兼日自<sub>二</sub>春祭<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>有此儀之由、  
有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、而俄大殿仰云、長德例已存、然而於<sub>レ</sub>今者、  
卒爾之間、不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>十列之沙汰<sub>一</sub>、只可<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>幣使<sub>一</sub>者、仍  
以<sub>二</sub>肥前々司盛房<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>使云々、余今朝見此例、仍俄  
以<sub>二</sub>上野守賴高<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>使所<sub>二</sub>發遣<sub>一</sub>也、件賴高、去春初奉<sub>二</sub>  
幣當社<sub>一</sub>之時爲<sub>レ</sub>使、同人兩度、如<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>、然而事出  
自<sub>二</sub>倉卒<sub>一</sub>、當時祇候仍所<sub>二</sub>點也<sub>一</sub>、抑長德例、元雖<sub>二</sub>見及<sub>一</sub>、  
故殿御記云、大殿乍<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>長德例<sub>一</sub>、猶自<sub>二</sub>春祭<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>立  
之由有<sub>二</sub>其仰<sub>一</sub>、定有<sub>二</sub>由緒<sub>一</sub>歟云々、加之故宇治左大  
臣、自<sub>二</sub>冬祭<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>神馬<sub>一</sub>、仍旁期<sub>二</sub>春祭<sub>一</sub>之處、如<sub>二</sub>康和



記者、大殿御案、無指由緒、歟、隨又今度次第、似彼

康和例、仍任其例、所立使許也、未刻發遣之、相

續內府始奉幣、役人等皆同、永久例四月任大臣、其年冬始被

立之、仍逐彼例也、今日爲內府衰日、然而有所

思令發遣之、余幣於南階前立之、內府幣於上達

部座西面階前立之、家狹無便宜、別方、仍於

同南庭所立也、使右少將範能朝臣、余送舞人半臂

下襲、內府遣陪從裝束、以家職事爲使、

五日、戊申天晴、春日、平野等祭也、平野祭上卿、源中納

言、宣命上卿、左兵衛督、使侍從信清、余雖須參內

聊有所憚不參也、春日祭內侍殆及闕如、句當內

侍無沙汰之所致也、然而少納言內侍所責立也、

又行事辨親經觸穢、須定長下向也、而法皇近臣、

無其暇、仍被返遣少納言重綱也、平野祭、明日梅

宮祭等、師廣賴房行之云々、

六日、己酉天陰小雪降、此日梅宮祭也、余并內府立幣如

例、陪膳資秦朝臣、行事信光、陰陽師晴光、此日蓮華

王院總社祭也、

七日、庚戌天晴、此日、五節臨時祭等定、并內大臣着陣

也、未刻着直衣參內、於直廬定兩事、頭右中辨兼

忠朝臣候之、先有五節定、據兼忠申云、兩事定同時可候歟、

同日有此定、先被定五節事之後、有將又可前後歟、仰云、天治元年

臨時祭定、可追彼例之由仰之、其儀余先出居直廬公

卿座、重母屋簷不立屏風、如次兼忠朝臣盛視筆并例

文續紙等、尋常不置、應忌視筆、居前廣庇、即撤視續紙

等、置例文一通於柳宮、膝行置余前、余取文置

前、兼忠取宮退降候、余披見例文、去年定、此間、兼忠摺

墨染筆、卷返續紙、先可候、氣色歟、余讀云、可獻五節舞

姬一人々、即書之、余次第仰之令書、奉行職事定經未參、

兼忠不存、書了撤視等、先續紙與、入定文於柳宮、又持來

乍柳宮置余前、退候長押下、余披見了、加置例文、

押出柳宮、兼忠參取之退降、如元加入硯已下、起

座退下、小時又持來硯筆例文續文等、先覽例文二

通、一通舞人歌人等、見了置前、次書定文、其儀同五節

定、但定文二書了持來、余見了相加例文返給、使定文之

裝束定文、例文等、兼忠取之退下、次更召兼忠朝臣、仰今

如此、仍爲二通、年公事等、問官外記、又問日次等、可申沙汰者、次

余參御前、及晚退出、先是內府參陣云々、師中納言

經房卿、左大辨兼光卿等扈從、殿上兩三人、侍從定案、高

房也、同相從、前駟十人、五位八人、六位二人、等也、有申文、吉書

無三陽明門出立云々、内府歸來之後、謁三帥卿、良久談語、及三亥刻退出丁、

定文書樣、

可獻三五節舞姬一人々、

殿上、能登守顯家朝臣、  
越中守家隆、

參議藤原朝臣、

參議藤原朝臣、

文治二年十一月七日

兼忠申云、顯家可書本官一歟、將可書受領一歟、余云、雖不知三槌例、理之所致、可書受領官一歟、仍載三能登守了、藤宰相兩人、基家、雅長等也、

賀茂臨時祭、

使、

經家朝臣、

舞人、

歌人、

笛、

筆、

文治二年十一月七日

賀茂臨時祭裝束、

今日卯刻、京極殿燒失、依爲三法成寺近隣、余倒衣參入、烏帽、前驅三人、隨身兩三隨候也、季經朝臣追參、捐三車於無量壽院南四足邊、此間、藏人次官定經參來、夏裘衣、指其上括、此間火焰漸欲滅、御堂全無恙、然而樹等枝餘焰燃付、仍切落件枝等了、此間前攝政使等少々參上彼御堂邊云々、頗以懈怠歟、適所殘堂一字并廊等拂地燃失了、可悲々々、

八日、未天晴、此日行幸大内閑院亭、爲三五節一依可、有修造也、依公家御忌方、件修造爲院廳沙汰、院司判官代家、實奉行、豐前國功萬五千疋、並他任官功少々所被召、戊刻著束帶、細紐、相伴内府一參内、内府任大臣、之後爲初度、供奉、仍馬副十人召具之、先是公卿等少々參入、余於殿上見日時、不勸三賢所渡御日時、問三定經之處、稱三近例之、由、雖不當、急不三能勸舍、又強不三及三違例也、定經覽之、即向陣有行幸、召仰内府行之、此間公卿已下供奉、諸司皆參、主上御總角、并著御々裝束、左兵衛督賴實卿候之、次渡御南殿、余取御裾、頭辨兼忠取余裾一如例、少納言師廣候鈴奏、每事如例、出御東門、仍余出自西四足、於冷泉油小路乘車、駟參大内、於三陽明門下車、昇南殿東階、尋内侍、只今於南殿御後上髮之間也、甚以懈怠、兼忠朝

臣相副催之、即以御與入自承明門、下御之後有鈴奏、宰相中將泰通候御璽後、出御之時渡御清涼殿之後、余內府相共退出、御經廻不可及數日、仍無去畢、

九日、壬天晴、親經申公卿勅使雜事、又今日有流人事、豐後國凶徒三人被處遠流也、仰道志經泰、令召罪名勘文也、博士等依失錯、先日進怠狀了、今日被行此罪科了、即可返給彼怠狀之由仰了、親雅申法成寺御八講事、又仰來十三日吉書奏也、申可勤仕之由、定經申條々事、仰記錄所事、可有急沙汰之由、可奏聞旨了、

十日、癸天晴、天文博士業俊持來密奏、召前問子細、其次申三星合之間事、親經來申御書始之間事等、酉刻、左大辨兼光來、依召也、爲仰官奏事也、先以人仰官奏事、其後余謁之、先例召大辨、被仰下也、良久言談退出了、光長申送云、園城寺長吏公顯僧正進大衆奏狀、平等院執行改定督結之子細也、氏寺事一向長者之寄也、不可及本寺之訴之由仰之、

十一日、甲陰晴不定、親經申御書始之間事、并豐後

國武士配流之間事、定經申條々事、親雅申御堂御八講之間事、又天文博士業俊持參密奏、申三星合之間事、親雅又申官奏日次〔第〕事、十六日可宜之由仰了、廣房申上、申官奏日次第有無事、依寬仁例不可有之由仰之、

十二日、乙天晴、親經申公卿勅使之間事、上卿左兵衛督賴實辭退、可催他人之由有院宣、仍先被催實房、申稱病、定房、宗房、實宗等卿、可催之由仰之、隨各申狀、可奏聞之由仰了、定經來申五節御覽、基家卿固辭之由、仰可奏院之由、件樣申狀太以奇恠々々、

十三日、丙雨降、入夜子刻大風、定經、親經等來門外、依物申條々事、即參院、又歸來、仰條々事等、定經云、基家卿五節御覽事、若猶辭申者、可辭所職之由、可被仰下一云々、可仰其旨之由下知了、如此之仰尤神妙歟、又親經申云、公卿勅使、月事可相計之由、有院宣、十二月無代始例之由、人々傾旨、親經所申也、而余一切不可有其憚之由所仰也、只十二月可被行之由仰了、此夕、院渡御押小路殿、白川金剛院御所、去年地非御移徙之儀、公卿直衣、殿上人衣冠云々、余雖無催、欲參入、而爲堅固物忌、仍



加<sub>二</sub>覆推<sub>一</sub>之處、出行不快云々、仍不<sub>レ</sub>參、其由觸<sub>二</sub>定長<sub>一</sub>了、返事云、事次奏聞之處、如此令<sub>レ</sub>申尤御本意之由、有<sub>二</sub>御氣色<sub>一</sub>、凡不可<sub>レ</sub>破<sub>二</sub>物忌<sub>一</sub>、更不可<sub>レ</sub>參之由、有<sub>レ</sub>仰云々、

十四日、<sub>巳</sub>天晴、親雅來申<sub>二</sub>臨時祭使、經家領狀之由<sub>一</sub>、又申<sub>二</sub>舞人散狀<sub>一</sub>、又申<sub>二</sub>御堂御八講并官奏之間事<sub>一</sub>、親雅又申<sub>二</sub>公卿勅使事、源大納言、日延者可<sub>レ</sub>參之由被<sub>レ</sub>申云々、召<sub>二</sub>陰陽師等<sub>一</sub>、<sub>宣</sub>、問<sub>二</sub>日次<sub>一</sub>召仰、十二月、日發遣、日參著、日、此定可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>實房之由<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>親經了<sub>一</sub>、又仰<sub>二</sub>同人、令<sub>レ</sub>占<sub>二</sub>申春日社恠異事<sub>一</sub>、<sub>出</sub>、占<sub>二</sub>申恠所口舌兵革之由<sub>一</sub>、又問<sub>二</sub>唯識會參賀辨可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>法成寺、平等院等<sub>一</sub>之日次、先日爲<sub>二</sub>宗賴奉行<sub>一</sub>問<sub>レ</sub>之、而猶依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>尋事、重所<sub>一</sub>問也、余無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>法成寺<sub>一</sub>之日、保安例、御八講初日、依<sub>二</sub>吉日<sub>一</sub>有<sub>二</sub>御參<sub>一</sub>、而今度依<sub>二</sub>賀茂臨時祭<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>、<sub>於</sub>神今食齋者先<sub>レ</sub>之有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、長者不<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、又衰日也、仍不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>參、來月一二日不快之上、又於<sub>二</sub>御八講<sub>一</sub>者、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>例事<sub>一</sub>、參堂無<sub>レ</sub>憚、猶於<sub>二</sub>初參<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>諷誦<sub>一</sub>者、齋月有<sub>二</sub>其憚<sub>一</sub>歟、仍猶月內可<sub>レ</sub>擇<sub>二</sub>其日<sub>一</sub>之處、廿五日復<sub>二</sub>日<sub>一</sub>、廿六日九坎、廿七日庚午、廿八日辛未、<sub>已</sub>上兩日、一家之習、不用<sub>二</sub>佛事<sub>一</sub>、廿九日申日、卅日神

事、此中可用<sub>レ</sub>何哉之由、問<sub>二</sub>陰陽師等<sub>一</sub>、各申云、廿八日可<sub>レ</sub>宜、但又申日々例追可<sub>二</sub>檢申<sub>一</sub>云々、親經又云、御書始日次、重問之處、十二月一日甲戌、爲<sub>二</sub>天曆并延久<sub>一</sub>〔白川〕聖主御書始之日之由、所<sub>レ</sub>申也云々、院宣之趣有<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>恣行<sub>一</sub>之由云々、仍件日可<sub>レ</sub>宜之由仰了、又可<sub>二</sub>奏問<sub>一</sub>者、又云、定長申云、朝覲行幸、元三〔之〕日之間可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行歟、二三月之間、可有<sub>二</sub>御物詣<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>御忌<sub>一</sub>月、若有<sub>レ</sub>例哉、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>尋由、內々可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>殿下<sub>一</sub>之旨所<sub>レ</sub>語也、是非<sub>二</sub>御定<sub>一</sub>、只內々伺<sub>二</sub>天氣<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>申也云々、明後日可<sub>二</sub>參入言上<sub>一</sub>之由、荅了、御忌月行幸、是何故哉、無<sub>二</sub>指大事<sub>一</sub>、強有<sub>二</sub>此沙汰<sub>一</sub>、如何云々、此日遣<sub>二</sub>職事兼時<sub>一</sub>於<sub>二</sub>大內直廬<sub>一</sub>、<sub>飛</sub>香、加<sub>二</sub>檢知<sub>一</sub>、又官奏之間事、御裝束、辨可<sub>レ</sub>催<sub>二</sub>雜役職事<sub>一</sub>之由、可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>行事職事兼時<sub>一</sub>之旨、仰<sub>二</sub>親雅了<sub>一</sub>、又日時於<sub>二</sub>直廬<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>檢之由同仰了、官奏日政有無、尋<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>之處、代始必在<sub>レ</sub>之、中間攝政近代之例多有<sub>レ</sub>之、寬仁例無<sub>レ</sub>政之由、有所見之間〔旨〕、廣房所<sub>レ</sub>申也、而寬治爲房記、寬仁例有<sub>レ</sub>政之由注<sub>レ</sub>之、依<sub>二</sub>不審<sub>一</sub>問<sub>二</sub>大外記賴業<sub>一</sub>所<sub>二</sub>注申<sub>一</sub>、又不<sub>二</sub>分明<sub>一</sub>、猶可<sub>レ</sub>檢<sub>二</sub>舊記等<sub>一</sub>、

十五日、<sub>戌</sub>天晴、政有無事、重勘見之處、長和〔例〕御堂



准攝政宣旨之後、初度官奏之日、有政云々、仍任彼例可有政之由、仰外記、又召大外記師尙問之、寬仁依諸卿遲參無政云々、但有長和例之上、理須被行也、彼寬仁例、自本非彼止政之儀、雨降公卿遲參、仍自然不被行歟、然者今度尤可被行云々、又御忌月朝親行幸例勘進之、天永御元服後也十六日、己未雨降、此日於直廬、始可有吉書奏、而陰陽師圖書頭賀茂在宣、參上申云、自明日至廿二日、天一在巽、今夜無御方違者、於開院不可被行、自大內開院當、又廿二日御五節、力節參入之日也、仍申此旨也以外大事也、早今夜可有御方違行幸云々、干時大外記賴業、大夫史廣房等參候、仍今日政、并官奏延引、仰可有御方違行幸之由、但他所行幸有事煩、左近府近爲齋宮御在所、定無殊大破歟、彼所如何之由問之、各稱善、在宣申云、開院自彼府不當一天一方、尤上計也云々、仍仰其旨了、又召遣親雅親經等了、親雅先以參入、仍仰行幸事、忽遣御教書等、催公卿已下、又申院了、先是左少辨定長、爲院御使來、余謁之、定長仰云、賴朝卿申旨如此、被下書札也爲朝之大事、宜樣可計沙汰者、申云、明日召諸卿於院殿上、可被

豫議也、賴朝所申尤理也、力之所及、尤可有御沙汰、又御祈事、殊可有沙汰者、定長云、自是所參仁和寺宮也云々、賴朝申狀云、義行事、南北二京、在々所々、多與力彼男、尤不便、於今者若差進二三萬騎武士、山々寺々、〔今〕可搜求也、但事定及大事歟、仍先爲公家沙汰、可被召取也、隨重仰可差上武士也、兼又仁和寺宮、〔後高野御室遺法〕始終有御芳心之由所承也云々、依此狀、定長參彼宮、即退出了、入夜余相伴內府欲參內之處、聊神心不快、仍余不參、內府參內了、曉天歸來、語云、依甚雨供風與、步、力、行幸多用腰與也、然而依甚雨供之、爲小雨者、猶腰與立三三、其上課二雨皮云々、出自建禮門、日華門、自中御門至壬生、北行自土御門東、入御自左近府北面門、須被用南面八足也、而其幸路、廻北入御、寄御輿於長廊、件屋南北裏、仍不足爲太有煩云々、公卿前行、爲先下臈、各持繪劔、淺履、云々、依內侍遲參、整控御輿、參上之後下御云々、於內裏有鈴、公卿前行、爲先下臈、各持繪劔、淺履、依此府無鈴、公卿前行、爲先下臈、各持繪劔、淺履、然而行幸之禮、若可用深沓者、必可著靴也、仍余所教訓也、出御以前有召仰、被勅日時、文仰、留守、渡、御南殿之間、余及貫首不參、仍五位藏人取御裾云々、晚

頭、親經來申公卿勅使之間事、又義行之間事、參院豫參公卿事可申定之由仰之、即參入了、今日內府欲參內之間、親雅自內裏以書札示送云、季弘申云、延久五年九月廿日、白川院自昭陽舍、幸高倉亭、即天一方也、今夜行有御方違哉如何者、今夜行幸何樣可候哉、余檢土御門右府記、高倉亭依不當正、有行幸之由、有所見、仍猶可有行幸、又季弘以謬事、輒經奏聞、儘可被尋問之由仰了、十七日、庚申陰晴不定、拂曉親經來傳昨日院宣、公卿勅使事、四人之中、相計除一人、可被行御卜、會議公卿、可被催議奏之輩者、任院宣可被催之由仰了、又兩丞相可催、若無左右、被行御卜之後、有固辭之人者、謹責有煩歟、仍先可催此兩人之由、所仰也、即退出了、此日依吉田祭、奉幣如例、內府又同、陰陽師在宣朝臣、陪膳資奏朝臣、行事定成也、今日社頭行事、家司文章博士光輔朝臣、職事上野守賴高、

十八日、酉天晴、此日於院殿上、有會議、晚頭著直衣、參院、光是公卿在殿上、余招左少辨定長入見參、歸來仰云、義行可被召出之間事、細々相計、

可問人々者、余召奉行職事親經、仰諸卿云、義行西走之後、隱籠所々之由風聞、隨聞食及、雖有其沙汰、于今未被尋出、依一人之逃隱、爲萬人之愁歎、廻何奇謀、可被召出其身哉、且又賴朝卿、有申上旨、其狀云々、山門云、南都僧徒同心、吉野多武峰、又以同前、加之可然之人々、多以同心之由、有其聞、公家沙汰嚴肅者、盡被尋出哉、猶徒可經日月者、差進數萬之精兵、任法可搜索之由、可致其沙汰也、然者武士狼藉、彌無止事歟、仍先差遣御使於所々、殊可有御沙汰也、且隨重仰、爲差上武士、各所出立儲也者、已上賴朝卿申狀此條所申至極之理也、又朝家之大事也、自本有御沙汰之上、彌依此申狀、驚思食、各廻意慮、委可定申之、兼又緯已大事也、輒以人力難成其功、猶祈佛神、可顯効驗也、而國衰民疲、恒例事猶以闕如、臨時御祈等、無其力歟、雖然又不可默止、省人費可被始行、其中何樣御祈可被行哉、同可定申者、親經仰宗家卿了退去、余以定長奏仰諸卿之趣了、即加著公卿座上、明座上傳于與枚著之家禮之輩、動座如常、宗家卿更以下被仰下之趣、被仰聞最末人兼光卿、其後各

定申之、自下臈、定申如例、取條々、終不同、或前伊與守源義行、或只稱姓名、余案之、已爲餘名之者、不可加官號歟、

一可被召取義行之間事、

一同定申云、重賜官旨、其狀載就殊功、可有下次之恩賞之由、可被下知諸國七道諸社諸寺等歟、此中實家、實宗兩卿申、可被下院廳御下文之由、

通親卿申云、京中及所々、可被注在家人數、其中若有寄宿之旅客者、儘可注進姓名、可被仰歟、然者凶黨定失所居歟、又申云、猶還本名、可被尋歟、改名之條、無其謂、晉范叔之例、不快云云、經房申云、宣旨狀雖爲彼義行親族郎從、有其功者、可抽賞之由、尤可被載之、又申云、固關々可被搜求京中、又分遣御使、官史生院廳、可被尋求云々、定能申云、雖緣者境界、隨尋出、可擄進、隨其功之輕重、又可恩賞之由、可被仰下之、

### 一御祈事

一同申云、召神社佛寺司等、殊可被仰含、兼又被尋諸宗、隨申狀、可被計行也、

實家申云、近年如此事連々、追討御祈等數度、其中被尋有効驗例、可被行之、通親申云、雖國家衰人疲、只任法被責諸國諸人、雖百千壇之法、可被始行、更不可被顧國土之費歟、經房申云、可被始五壇法、又崇德院御事、有沙汰無其實、殊可被尋行也、兼光申云、先朝御事、殊可沙汰、是第一之御祈也云々、

各定申了、余仰人々曰、此事人々委議定相遞問不審、盡道理、可究事之淵源之由、所被仰下也、抑可被召出義行之間事、給宣旨事、已及三四度、每度被載恩賞之趣、然而敢無顯其功、今所被尋問者、此上廻何籌策、可得彼凶賊哉之由也、各議定之中、可被注寄宿輩事、并可被差遣御使事等、頗可爲事之詮歟、其中被注京畿之在家人數事、去夏比有其沙汰、且依此沙汰等、行家逃洛中之間、所擄取也、然者尤可有其沙汰、例不可求外、已在近曹、於可被差遣御使之條者、五畿七道、在所々、併可被遣歟、事甚廣博也、有取捨者、又除何處、可取何所哉、此條頗不審也、又御使如官史生、縱雖臨其所、定不足搜求之器歟、



此條重尤可有議定也者、經房卿云、於畿外之諸國者、自元可被遣之由不存知、只近邊山寺、若諸社等之類也、〔又〕其御使、手自不可必遂其節、只且爲檢知沙汰之勤否、且爲表給旨之重也、即可被差遣御使之由、賴朝卿令申、且爲叶彼意趣也云々、余云、然者先當時所召置武士許之犯人等、委究問、隨申狀、若有嫌疑之所者、就其趣可被搜求歟、暗難分別其所故也、人々稱善、余又云、被固關々事、尤可然、但此條爲人歟、可限期日歟、經房云、三ヶ日若五ヶ日歟、人々云、甚急速也、更不可叶、論其近不可減十ヶ日歟云々、又余云、抑固關々被索京中事、粗有先蹤跡、然而是知其所在之時事也、於當時者、不知其隱居之所、暗被搜在家者、偏洛中皆可爲追捕歟、此條殆可謂凶瑞如何、人服膺、經房又伏理、只如去夏之沙汰、被仰使廳、各觸廻此子細、若忽諸朝章、於不存其功之輩者、仰武士可追捕之由、可告廻歟、不知在所、大索之條、專不可然之由、一同議定了、如此評定了召親經、議定之固、有仰候殿上前緣聞之、今近所召也、仰云、人々議定之趣、具以可奏聞、此上恐案旨、同

可奏達、

義行可被召取之間事、

諸社諸寺、京中畿外、可給宣旨事、同可被載之趣等、如人々定申、殊以可被仰下、兼又猶被究問所召出之緣者等、若有稱申旨者、去隨其狀、云在所云境界、可被尋沙汰歟、兼又此事、若致怠慢、遂不存殊功者、忽可遣武士之由、各可被仰令、令驚恐、不可過此深歟、

御祈事、

先尤可被行五壇法也、就之可有二議、一者召諸宗知法之輩、於禁裏、若仙洞塗連壇、可被行歟、將又於如台嶺之結界之地、一向被仰其所、丁寧可被始修歟、兩條可在御定、兼又諸社可被立御願歟、凡召寄南北二京之僧綱已下、且尋搜義行及緣者、不日可言上之由可被仰下之、且仰滿寺僧徒、限期日可被祈請之由、普可被仰下歟、親經參御前奏聞、使定長歟、良久歸來、開座上障子仰云、各所申具以聞食了、且隨人々申可被行、

可賜宣旨事、尤可然、院廳仰下文條、尤可然、

重被尋問後、就由緒可有沙汰事、尤可然、



指期日事、不可然、若過其期、日其後之沙汰如何、

居關大索事、此事都不

崇德院事、沙汰如在之條、全不存、今議定無術事也

五壇法事、尤可被行、但於台山、座主修中壇可宜

他御所可被問宗長吏事、尤可

召南北長吏已下僧綱等、被仰事、尤可然、尤可宜

先帝事、尤可、有沙汰、但非、義行可出來之計上

御願事、其趣可御計

大概仰聞人々了、各申云、指期日事、仰旨可然、

但不指期限者、人意緩怠歟、如通親卿定申、各可

注申子細之由、被仰之、件條可被指期日歟、

兼又五壇法事、新嘗祭已前、公家御沙汰條如何、可

爲院御沙汰歟、且可仰問日次、先是官外記、陰陽師等、所召諸也、即

以親經一問御祈日次、申云、來廿三日吉也、於神事

者、雖爲寅日、爲急事、又有先例、新嘗祭已後、廿

七日庚午宜歟云々、廿三日可宜之由、人々議定、此間

兼光申云、猶可有奉幣歟、一同稱善、以此等旨、

重以奏問、被仰下云、自明日、於院御所可被始

五壇法也、且爲玉體、又爲天下也、然者頗延引、何

人々有奇色歟、院中可被行五壇法云々、指期日事、猶不  
何又於他所、可被並行同法哉、勿論也、  
可然、奉幣事、尤可宜者、於今者、人々可退下、  
歟、可取御氣色之由仰了、歸來云、早可退下、兼又  
能保朝臣、明日可被召延曆、園城、醍醐等僧、同明日  
可被召、又親經可參仁和寺宮、又能保朝臣、先召  
汝亭、仰同子細之後、可令參院、申云、雖明日  
盡參哉、猶於御所可被仰也、仰云、猶可召汝  
亭、連日不可然者、  
余仰親經云、  
重可成宣旨事、可載子細、其趣如人々  
可召與福、延曆寺以下、諸寺僧徒事、明日早可被召、仰致祈請外  
由、具可被仰、  
御願事、於外記、例  
重可究問犯人一事、任御定可召仰能保、又於院同可被仰下也  
奉幣事、廿七  
佛寺御祈事、廿七八日  
可被問御祈子細事、明日召僧綱之次、可被問之  
條々仰下了、人々示氣色一起座、暫候上達部座方、  
招定長奏條々事、  
御書始侍讀尙復事、奏各申旨

仰云、光範〔可〕<sub>レ</sub>宜、

朝親行幸事、天永御元服之外、無御忌月例、

仰云、然者二月可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行勿論也、

今明可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行三小除目之次、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>補三成功事、

仰云、可<sub>レ</sub>然、

右府大將辭退事、

仰云、除目時可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰、

禁中雜事可<sub>レ</sub>奉人事、

仰云、被<sub>レ</sub>仰三通親、其上可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰三長經朝臣、

同殿上番事、

殊可<sub>レ</sub>有沙汰、

五節之間、嗽々事風聞、兼可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>誠三侍臣事、

尤可<sub>レ</sub>然、早可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰、

秋除目事、

來月上中旬之間、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行之、

公卿勅使奉行事、親經奉追討事、仍可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰他人歟、

早可<sub>レ</sub>仰三親雅、

人々退下之後、予退出、

十九日、壬戌〔天〕晴、堅固物忌也、然而依<sub>レ</sub>爲三大事、召三

能保朝臣、以人傳仰、去夜議定之間事、申各可<sub>レ</sub>召三

仰武士等二之由、仰可<sub>レ</sub>參院之由、即參上、

及<sub>レ</sub>晚親經來申三去夜定之間事、仰可<sub>レ</sub>向三左右府、并

仁和寺宮三之由、親雅之許公卿勅使可<sub>レ</sub>奉行三之由仰

遣、入夜參來、子細召仰了、兼忠申三五節之間事、

廿日、癸亥〔天〕晴、今日同物忌也、此日、自三<sub>二</sub>大内<sub>一</sub>還三幸

閑院亭、余依三物忌不參、內府參內、亥刻歸三來於閑

院、有吉書云々、

廿一日、甲子陰晴不定、時々小雨、此日、大原野祭也、余

及內府率幣如<sub>レ</sub>例、無別使、陪膳左京權大夫光綱、陰陽師親經書送申道云、今日內侍出車闕如之由所申也、只今參三

社頭了云々、仍驚尋沙汰之處、親雅懈怠不覺也、仍召

寄仰三子細、無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>幸披陳<sub>一</sub>、慥爲三親雅沙汰、可<sub>レ</sub>送由仰

之、忽致沙汰、秉燭之後、內侍參向云々、未曾有事

也、近代職事爲<sub>レ</sub>體皆如此、何爲<sub>レ</sub>之、口兼忠來申三五

節之間事、

廿二日、乙丑〔天〕晴、此日、五節參入也、參議基家雅長兩卿、能登顯家越中家陸、

已刻、兼忠來云、保家基家卿子、望申昇殿、奏院之處、今度

五節次第太奇怪、仍不可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>許歟〔云々〕、又云、源

中納言通親、望申可<sub>レ</sub>候三帳臺并御覽座事、此事少

例、申云、如此事、偏可<sub>レ</sub>依三御定、但依<sub>レ</sub>所座被<sub>レ</sub>召

者、不可有劣人歟、頗似無全、然而於此卿者、可爲寓直禁中之由、別蒙仰云々、先例或又近習之人應召歟、然者雖被召、強不可有難歟、兩方可在御定、歸來云、然者可召者、仰可召之由了、秉燭內府先參院、今日任大臣後著直衣始出仕也、毛車、前近六人衣冠、左少將伊輔一人直衣、扈從隨身上馬、冠布衣蓋腰巾、隨身給裝束、內府出紅打衣、帶劍取笏、自院參內、子刻余伴三位中將參內、始乘鹿車也、前近六人、(中將二人)余出唐物厚衣、裏青、面入自左衛門陣、昇小板敷、欲著座之間似青色、無疊、仍仰藏人令敷之、先參御所方、告敷疊之由、仍著殿上、燭消委不見、已欲居之間、疊未敷、然而居廊上了、頭辨兼忠、在小板敷、余問云、五節所事具歟、申了、由殿上人參上歟、參上了、於今者可向歟、可然云、仍余氣色、人々起座、出上戶見之、殿上一切不見、仍召兼忠問之、殿上人向北陣了、舞姬未參入云々、次第勿論有若亡也、余加勘發、無申方、仰可敷殿上疊之由、參御所方了、良久殿上人等參上、予還著殿上、今度敷疊了、兼忠告殿上人參上之由、仍余已下經上戶、清涼殿、南廣庇、透渡殿、假橋、南殿東簀子、并同北庇、向帳臺、入自南面妻戶、著座、路間殿上人濟々、指脂燭

立左右前後如例、余座與公卿座之間、懸簾垂之、未見之御裝束也、仍召藏人令上之、此大南公卿等仰藏人一令、垂之元上之故也、又公卿座無疊、仍余座疊一帖、令移敷之、先例敷一帖、其上加圓座、今夜敷二帖、加半帖如何、仍一枚給公卿座也、次舞姬等參上、四人參集、各有從女一人、皆參入之後、各翻袖、各可發音歟、舞了退歸了、此間殿上人等亂舞、阿聲如例、亂舞了之後、舞姬退下也、是殿上人扶持之故也、次上達部等出妻戶、次余同出、內府經本路歸著殿上、即起座退出了、兩息相從、

廿三日、丙寅(天)晴、此日御前試也、入夜參內、直衣普通、淺黃指貫、不出半部車、隨身上薦冠、不伴子息、於東對南庇、有此事、了了有殿上人雜遊、

廿四日、丁卯、刻著直衣參內、依御覽也、伴兩息、秉燭御覽、基家卿一人也、其後依皇后宮潤醉、內府參彼宮了、今日、奈良僧正申狀等仰親經了、又義行改名之間事、余所案之名義顯尤宜之由、兼光申也、

廿五日、戊辰、晨節會、內辨內府有出行、一獻之後入御、僧正以圓長爲使、被示義行之間事、今日被下義顯追討事、上卿左大臣、

廿六日、已法印被<sub>レ</sub>來、

廿七日、庚此日、初度官奏也、兼忠候<sub>レ</sub>之、有<sub>レ</sub>政、上卿賴實卿、參議不<sub>レ</sub>參云々、又有<sub>二</sub>臨時除目、實房任<sub>二</sub>大將、定能卿來、

廿八日、辛未親經病之後出仕、雅賴卿來、定經來申<sub>二</sub>奉幣事、

廿九日、壬申物忌、義顯追討奉幣也、上卿宗家卿、親經持<sub>二</sub>來日時、依<sub>二</sub>物忌不<sub>レ</sub>見、大內記<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>持<sub>二</sub>來宣命草、同前、

卅日、癸天陰、此日、賀茂臨時祭也、細雨雖<sub>二</sub>間瀝、不及<sub>二</sub>濕衣、臨<sub>レ</sub>期不<sub>二</sub>雨下、仍庭座用<sub>二</sub>晴儀也、使內藏頭經家朝臣、高倉院御時、一度、奉行職事左衛門權佐親雅、藏人兵衛尉業長等也、<sub>勤仕、當今未<sub>レ</sub>役、</sub>已刻、著<sub>二</sub>直衣、<sub>前<sub>レ</sub>近衣冠、<sub>國身布衣、</sub>參內、即親雅參入、申云、今日四位殿上人、一切不<sub>レ</sub>參、就中於<sub>二</sub>重盃者、多所<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>近衛將也、而隆保之外無<sub>二</sub>領狀、各七八度雖<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>催、敢不<sub>二</sub>承引、事已欲<sub>二</sub>闕如、爲<sub>レ</sub>之如何、余云早馳參<sub>二</sub>院可<sub>レ</sub>奏、於<sub>レ</sub>今者私下<sub>二</sub>知職事、奉書、一切不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶、以<sub>二</sub>別御定、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>苛責、爲<sub>二</sub>自今以後、殊可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御沙汰之由、可<sub>レ</sub>奏之旨同相含了、親雅即參<sub>二</sub>院、<sub>六條</sub>申刻歸參、院仰云、申<sub>二</sub>所勞<sub>二</sub>之</sub>

輩早可<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>實檢使、遂不<sub>レ</sub>參者、儘可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>除籍<sub>二</sub>之由、可<sub>レ</sub>仰云々、任<sub>二</sub>御定可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>沙汰<sub>二</sub>之由仰了、又行事<sub>レ</sub>藏人<sub>レ</sub>業長申云、舞人陪從裝束所課之典侍掌侍等、未<sub>二</sub>調進者、早可<sub>レ</sub>譴責之由仰了、未刻賦<sub>二</sub>遣裝束了云々、申終人々參入、余著<sub>二</sub>束帶、相<sub>二</sub>伴內府三位中將等、參<sub>二</sub>御所、<sub>件兩人著<sub>二</sub>束帶、自<sub>二</sub>冷御總角、<sub>但<sub>レ</sub>繫、每度帝王御齋可<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>此、節會行幸皆同、</sub>次著<sub>二</sub>御々裝束、<sub>御袍、</sub>于<sub>レ</sub>時日已沉<sub>二</sub>西山、親雅申云、所勞之輩、分<sub>二</sub>遣瀧口了、未<sub>二</sub>歸參、送<sub>二</sub>領狀、隆保俄稱<sub>二</sub>五體不具穢、季經朝臣之外、四位惣不<sub>レ</sub>候、但成定朝臣只今所<sub>二</sub>領狀也、此外少將成家<sub>五</sub>位、參候、雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>近衛將、季經可<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>仕重盃、歟、將雖<sub>二</sub>五位、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>次將、成家可<sub>レ</sub>奉仕、歟、兩條欲<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>御定者、余云、非<sub>二</sub>次將<sub>二</sub>之四位勤仕之例、粗所<sub>二</sub>覺悟也、于<sub>二</sub>五位勤仕之例者、未<sub>レ</sub>檢得之、內々可<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>中御門大納言、<sub>于<sub>レ</sub>時、祇<sub>二</sub>親雅問<sub>レ</sub>之、</sub>歸來云、五位勤仕之例、不<sub>二</sub>覺悟云々、仍譴責之輩、遂不<sub>レ</sub>參者、季經朝臣、成定朝臣、可<sub>レ</sub>勤<sub>二</sub>仕重盃<sub>二</sub>之由仰了、又所作陪從未<sub>レ</sub>參云々、懈怠之甚、責而有<sub>レ</sub>餘、儘可<sub>レ</sub>釣出<sub>二</sub>之由仰了、秉燭之程適參入、其後有<sub>二</sub>御禊事、先是奉<sub>二</sub>仕御裝束、其儀御殿<sub>東</sub>對、南面孫廂西第二間、</sub>



同、敷御拜座、席上供半帖、前庭寄、東立案二脚、南北

倚立御幣二棒、如例東面、其西敷宮主圓座、其坤

敷使圓座、自南殿南階西柱、至千池汀、引所司

慢、有機門、堀川院儀、自東方一間面柱、引此慢、今抑、堀川院

儀、賀茂臨時祭御座西面裝之、今爲東面、仍問親

雅之處、近例如此、但准彼例、可改直歟、余案之

彼社自華洛、雖當北、計東西分限、上社小寄、東

歟、況於下社川合社者、當良方、仍西面之儀不叶

理、是以不改、事具了、出御自西第一間、自御座

西著御、東、次御禊如例、不記了御拜、再拜、次入御、

次奏宣命、上奏、次改御袍御下襲等、出御、頭辨兼

忠告公卿、次內大臣已下、著壁下座、次兼忠召使已

下、如例、次使舞人著座、次一獻、頭辨兼次二獻、內大

臣著垣下座、次居衝重、次藏人置螺盃銅盞、插頭花

臺等、於長橋代南妻、此間陪從發歌笛聲、次三獻、大

納言宗家卿勸盃、不著垣次右中將成經朝臣、右少將

成定朝臣、勸舞人重盃、藏人辨親經、勸陪從重盃、

了、使就長橋南頭、次內府跪、同所取插頭花、使

冠復殿上座、次第賜插頭花了、各就殿上座、次入

御、撤庭并御前簀、敷圓座、余著圓座、次內大臣著

座、不被召、仍余問之、內府云、兼忠來告召之由、仍所他卿同

著之、次兼忠朝臣、進年中行事障子下、依余目渡

前庭、今度著香召使已下、次使已下參進、良久舞人出

舞如例、此間內大臣觸可參法成寺之由、退出、事

了舞人已下退下、御覽北陣、余退、廐、及子刻親雅

告舞人等歸參之由、仍著東帶參上、主上不、出御

簾中也、余已下著御前座、還立次第如例、余可記而

即不記、忘却了、仍更不記之、尤遺憾也、

# 十二月〔小〕

一日、戊〔天〕晴、賀茂臨時祭、還立御神樂、御書始、侍

讀左大辨兼光卿、尙復文章博士光輔朝臣、今度依寬

和例、被用公卿侍讀、四位尙復也、件事等急々之

間、余不委記、仰內府令記之、余此夜、初參法成

寺御八講、豎義也、內府相共參也、具旨同在內府記、

二日、亥參御堂、五卷日也、內府同參、

三日、子參御堂、天台豎義也、隆憲法印爲探題、華實

相兼、尤足感歎、五間十條併聽聞了、頗希代之事也、

退出之時、遣職事一人於探題宿房、令示感歎之由、

了、內府同參、一間以後退出了、

四日、丑時、參<sub>二</sub>御堂、內府同<sub>レ</sub>之、此日結願也、此日御書所始、別當兼光卿、女房爲<sub>レ</sub>聽<sub>二</sub>聞懺法<sub>一</sub>、向<sub>二</sub>九條<sub>一</sub>、密々事也、

五日、戌時、故皇嘉門院御忌日也、內府中將等參入、余依<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>參也、

七日、庚申、內大臣著<sub>レ</sub>陣、拜<sub>二</sub>任丞相<sub>一</sub>之後、氏院參賀也、委旨在<sub>二</sub>內府記<sub>一</sub>、

〔八日、辛巳〕

〔已上只目六許也〕、

九日、壬午、此日、不堪荒奏也、去年依<sub>二</sub>大臣不參<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>不堪〔奏〕<sub>一</sub>、荒奏和奏申文定等、皆不<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之、仍先今夜行<sub>二</sub>去季分<sub>一</sub>也、於<sub>二</sub>今年分<sub>一</sub>者、明春可<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之、寬仁例如<sub>レ</sub>此云々、早旦留<sub>二</sub>大夫史廣房<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>使、示<sub>二</sub>遣左大臣許<sub>一</sub>云、不堪奏已下、官中公事、并殿上所宛<sub>當今未<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>等、必一上可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>參行<sub>一</sub>也、而依<sub>二</sub>御所勞<sub>一</sub>、歲內不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>出仕<sub>一</sub>之由、先日兼忠朝臣所<sub>レ</sub>申也、右府又以所勞云云、仍內府可<sub>二</sub>申行<sub>一</sub>歟、若然者依<sub>二</sub>一上讓<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>奉行<sub>一</sub>也、尤可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>觸仰<sub>一</sub>歟、兼又去年不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行事等、同可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>果遂<sub>一</sub>歟、條々爲<sub>二</sub>存知<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>觸達<sub>一</sub>也者、廣房即行向、即歸來傳<sub>二</sub>左大臣報旨<sub>一</sub>由、被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>旨畏承了、所勞</sub>

事返々恐歎不<sub>レ</sub>少、然而今年出仕、更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶、右府同所勞歟、仍內相府御參勤、尤可<sub>レ</sub>然者、早可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御奉行之由<sub>一</sub>、即可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之由、所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>命<sub>二</sub>廣房<sub>一</sub>也云々、豫兩度奏、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>職事<sub>一</sub>等仰含了、注<sub>二</sub>別紙<sub>一</sub>給<sub>レ</sub>之、又召<sub>二</sub>兼忠朝臣<sub>一</sub>同所<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>也、今日被<sub>レ</sub>行事等、所宛申文、加<sub>二</sub>大槓式<sub>一</sub>、不堪申文荒奏、副文、荷前擬侍從等定也、荷前定、式日十三日也、今年十九日立春、十六日公卿勅使可<sub>レ</sub>發遣、其前無<sub>二</sub>日次<sub>一</sub>、仍十三日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>使之故<sub>一</sub>、式日以前可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>定也、其例又多者也、秉燭余著<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>參內、相續內府著<sub>二</sub>束帶<sub>一</sub>參內、余下<sub>二</sub>直廬<sub>一</sub>改<sub>二</sub>著束帶<sub>一</sub>、吉書荒奏著<sub>二</sub>束帶<sub>一</sub>和奏著<sub>二</sub>布袴<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>注<sub>レ</sub>之、然而任<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>御記<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>著<sub>二</sub>束帶<sub>一</sub>也、此間、藏人辨親經、持<sub>二</sub>味荷前擬侍從定文<sub>一</sub>、件等文、日不入<sub>レ</sub>見了返給、荷前日時相<sub>二</sub>副<sub>一</sub>之、中務省解也、是例也、其後良久、奏者辨右中辨兼忠朝臣<sub>藏人</sub>來<sub>二</sub>直廬方<sub>一</sub>、仍余出<sub>二</sub>居賓亭<sub>一</sub>、次奏申家司大藏卿宗賴朝臣<sub>去二日自<sub>二</sub>熊野<sub>一</sub>參進申云、兼忠朝臣奏候不、余仰<sub>所<sub>二</sub>還向<sub>一</sub>也、</sub>可<sub>レ</sub>敷<sub>二</sub>圓座<sub>一</sub>之由、宗賴退下之後、職事前馬助國行持<sub>二</sub>來圓座<sub>一</sub>、敷<sub>二</sub>前廣庇<sub>一</sub>、去長押四五尺、當<sub>二</sub>余座<sub>一</sub>敷<sub>レ</sub>之、次他職事三人持<sub>二</sub>參打敷<sub>一</sub>、燈臺燭等〔立〕<sub>二</sub>奏者圓座異方<sub>一</sub>、打敷帖也、次宗賴朝臣參進、候<sub>二</sub>氣色<sub>一</sub>、余目<sub>レ</sub>之、宗賴退下之後、奏者辨取<sub>二</sub>文杖<sub>一</sub>、經<sub>二</sub>西馬道<sub>一</sub>參<sub>二</sub>進下長押<sub>一</sub>、即跪深揖、頗起揚合<sub>二</sub>眼余<sub>一</sub>、々目<sub>レ</sub>之、兼忠稱唯起、步進自<sub>二</sub>余座西間</sub>

中半、俄屈行、當余座間西程、向異方一跪、膝行昇長  
 押、又膝行指寄杖、余置笏於右、以左右手、拔  
 取文、置前、兼忠取空杖退降、於長押下、又逆退、  
 頗向坤起、南行大輪右廻、著圓座、吉書之奏時、南行及  
 也、是大納言教訓歟、深揖候、辨座定之後、余解結緒、引延  
 余聊所示聞也、余聊所示聞也、深揖候、辨座定之後、余解結緒、引延  
 其上、披禮紙、如押文於右端、先拔取目錄、去年不  
 通、目錄一通結加之、今不解件緒、按取目錄許也、不見  
 不堪文等、是例也、其結緒外、副文有三通、國々不堪文也、口口  
 口口披見其與、寫加共入勘文同披見之、至與、  
 右手、目錄並勘文等、見了置所、持於前、  
 持之、大略如減省歟、見了置所、持於前、  
 卷之加目錄、如本指入結緒中、即可置禮紙左、而次  
 副文二通見之、各卷取開、發解文一定例也、共見之、  
 置之、同可置左端、而文書押遣、中程天卷禮紙、  
 也、以結緒之、片是無下結、前頗指出置之、  
 辨方、吉書奏之時、以文上、爲辨、兼忠直參進、膝行  
 方、今如此、是故殿御記故也、兼忠直參進、膝行  
 取文退降、南行大輪廻、初、著圓座、披文拔取目  
 錄、結申之、余目之、次結申副文等、余每度目之、  
 兼忠每度稱唯、卷文加禮紙結之、無下取加杖揖  
 退下、次余歸入、兼忠於辨座下、史歟、次余改著直  
 衣、參御前、先內府退下、次余退出、今日公事等被行  
 次第、先所宛大願申文、次不堪申參議等皆悉不參、仍右少辨

親經書之、兼忠依爲初齋宮辨、不執筆也、退出之  
 後、內府政所侍等、有所宛事、宗賴朝臣申沙汰之、  
 年預和泉守長房、御服所中務少輔兼親、知家事刑部錄  
 久行等也、參入家司、大藏卿宗賴朝臣、彈正大弼資泰  
 朝臣、左京權大夫光綱、家令民部大夫貞光等也、職事  
 五六人、著侍行之、各宛定之後覽之、余并內府共覽  
 之、此日、平等院執行法印慈圓、爲拜堂參彼寺、前  
 驅馬、并牛、飼等遣之、入夜小雪降、今日親雅、祭  
 主能隆等參入、沙汰勅使之間事、  
 十日、癸天晴、召左少辨定長、有申入法皇事、天下

政可反淳素之趣也、此事實嗚呼第一事也、然而  
 雖身命、可代天下之由、祈申佛神、先了、仍忘  
 逆叙慮、慈達天聽、只奉任太神宮、春日大明神  
 者也、親雅申公卿勅使之間事、來十六日發遣、大略不  
 可叶歟、驛家事每事懈怠、祿物又以不足、仍今日雖  
 可被定日時、召仰之後、延引專不可然、仍委可  
 致沙汰之由、昨日召仰親雅、仍今朝注申子細、事  
 體不可叶、儲日來廿日云々、歸洛廿七日、殘日僅二  
 々日、爲勅使太爲煩歟、仍以親雅爲使遣、右大  
 將許、仰合此子細、被申云、早可被延引也、歸京



及月廻、全不可苦云々、仍以<sub>二</sub>此等旨<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>奏<sub>レ</sub>院之由、仰<sub>二</sub>親雅<sub>一</sub>了、定長同相具參了、〔深〕夜親雅申云、院宣云、可<sub>レ</sub>延引者、來十四日六日之間、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>召仰<sub>一</sub>歟之由仰遣了、入<sub>レ</sub>夜小雪降、

十一日、甲子天晴、白雪雖滿庭不及寸、此日、月次祭神今食等也、上卿源中納言通親卿兼行之、辨、月次兼忠、神今食親經云々、今日召兼忠、賴業等、仰除目之間事、親雅、親經、定經等來、申條々事等、親經申云、定經訴申藏人基定罪科事、猶下官可計沙汰之由、有院宣云々、只申可在御定之由、定經申御誦經之間事、此日余仰云、記錄所被始置一事、明春可宜歟、歲末上下忿忙、慥雖被始三年首、不可有沙汰、心閑正月末、二月上旬之間被行、尤可宜、加之、上卿右大將參伊勢畢、不可叶、旁可延引之由、可奏聞者、

十二日、乙酉雪降及三六七寸、召三隨身等、企三雪山、至三今日神齋、但今日散齋也、

十三日、丙戌陰晴不定、兼忠朝臣來申、除目之間事、公散狀、並人々親雅、定經等各申、除目所望之輩事、注折紙及所望事也、晚蘭城寺僧綱已下諸司等列參、居申中付、宗賴朝臣進、

懈狀、平等院執印事也、條々有<sub>二</sub>申旨、一々示<sub>二</sub>返答、子細不能<sub>レ</sub>悉記、入<sub>レ</sub>夜定長來、先日所<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>施<sub>二</sub>德化<sub>一</sub>之間事、御返事也、其仰大慰懃、所<sub>レ</sub>申皆可<sub>レ</sub>然、攝錄之初、聊有<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>思食<sub>一</sub>御心事、然而漸聞食、聞<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>誠無<sub>二</sub>汝過失<sub>一</sub>、又其後萬機之間無<sub>レ</sub>私、難<sub>レ</sub>有思食、偏<sub>二</sub>天之令<sub>一</sub>然之由、思食者也、加<sub>レ</sub>之殊有<sub>二</sub>奉公之志<sub>一</sub>之由、令<sub>レ</sub>申云々々、尤爲<sub>二</sub>本意<sub>一</sub>、自今以後、一向所<sub>レ</sub>相憑也、如<sub>二</sub>申請<sub>一</sub>召<sub>二</sub>諸卿<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰舍<sub>一</sub>、今年已無<sub>二</sub>殘日<sub>一</sub>、明春三ヶ月以後、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>此沙汰<sub>一</sub>也、朕年來之間、不留<sub>二</sub>心於政途<sub>一</sub>、只委<sub>二</sub>任於近臣<sub>一</sub>、大略可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>有若亡<sub>一</sub>、是世之所<sub>レ</sub>知也、今申<sub>二</sub>行理國之政<sub>一</sub>、尤所<sub>二</sub>庶幾<sub>一</sub>也、太神宮、熊野權現可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>知見<sub>一</sub>、更不<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>心<sub>一</sub>、自今以後、一向所<sub>二</sub>委任<sub>一</sub>也云々者、奉<sub>二</sub>勅命<sub>一</sub>之處、不知<sub>二</sub>措手足<sub>一</sub>、已以仰天、初奏<sub>二</sub>達此事之時<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>期只逆鱗、殆亂刑也、而今仰非<sub>二</sub>直也事<sub>一</sub>歟、是更非<sub>二</sub>他<sub>一</sub>、只社稷之志、答<sub>二</sub>天意神慮<sub>一</sub>者歟、歡喜之淚數行、卽以參院、以<sub>二</sub>定長<sub>一</sub>入<sub>二</sub>見參<sub>一</sub>、又申<sub>二</sub>除目之間事<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>大事者<sub>一</sub>、條々被<sub>二</sub>仰切<sub>一</sub>也、大都善政也、但藏人頭實教、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>未曾有<sub>一</sub>、如此事遂以不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>直立<sub>一</sub>歟、可<sub>レ</sub>悲々々、除目以前、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>披露<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>誠仰<sub>一</sub>旨、尤可<sub>レ</sub>然、



如此沙汰之間、數反往反、及子終退出、明日可候、撰申文之座、兼又可覽殿方申文之由、仰宗賴朝臣了、

十四日、天晴、此日、京官除目始也、本爲一夜儀、而檢先例、代始、并攝政初度、多一ケ夜也、近例兩三度爲一夜之儀、甚以不快、仍奏事由、改爲二夜之儀、而明日爲凶會日、此條重檢例之處、沒日、凶會、坎日皆有其例、寬治四年、復辟初度入眼、凶會日也、永治代始入眼、沒日之由、有其仰也、加之御堂仰於入眼者、雖凶會、坎日、不可不傳云々、見小記、仍期日入眼、不可有其憚、此旨奏聞了、昨今之間、申文多以出來、已刻、奉行頭右中辨兼忠朝臣來、只今可參內於直廬、可覽申文之由仰了、午刻著直衣、相伴內府同著直衣參內、于時兼忠之外、他職事未參、各可催促之由仰、又家司宗賴同遲參、然而、且欲覽申文之間、定經、親經等參入、余出居上達部座、不改直衣其座如尋常、不立屏風、座前置硯不置、大頭辨兼忠朝臣、捧書於挾、經馬道降長押、即跪候、隨氣色進寄奉書、余以左右手拔取之、置前板敷、兼忠座定廣座不敷之後、不解結緒、引援申文一通見之、如本卷之捧緒、出之如此三通見了、必可見三通ハ非ス、只隨便也、頗指出之天置之、以文下兼爲辨方兼

忠置杖參進、取之退降、拔文結申、二通余目之、如也、本捧之取加杖退出、余早仰可撰申文之由、次親雅覽之、作法同前、次定經又同前、但兼忠無懸紙、親雅、定經等有表紙、仍各取拔之、申文等捧懸紙上之也、但於爲家司、仍具且可撰申文之由仰之、即於公卿休所撰之、藏人給結料、基定取目錄云々、及申刻大藏卿宗陳朝臣參上、於上達部座、覽申文之儀同前也、但不結申之、保安實光結之、依爲辨官款、伴申文日來所出來之文等、取集下給也、即宗賴接其座云々、此間有大乘會、并尊勝寺灌頂等定、又被定御誦經使、法皇御料也、職事等、各依爲奉行事、臨陣頭、撰申文之座、常以無人云々、尤不便、如此之間、秉燭之後、撰了僅書始目錄草案云々、此間人々少々參入、經數刻之後、清書目錄、盛硯宮蓋、置余座前、重置身也、先是外記持來關官帳、入乍留置之置硯宮與方、撰申文之間、行事職事兼時、奉仕直廬裝束、其儀、子午廊南殿乾角也、北庇三ケ間、北有廣座、四面懸簾、東南西垂之、副南西南方簾立、廣座、四尺屏風、東妻切簾前不立屏風、依爲余座後也、上薦不參、若有件簾前問也、頗故障之時、在廣中、仍不立屏風、

寄端敷厚圓座一枚去東餘許、爲余座、同間西邊、對余座、敷背圓座一枚與余座相去四五尺許、爲執筆座、東第一間副南簾、敷高麗疊一枚、爲大臣座、同第二三座敷高麗端疊四枚、爲公卿座二行對座、與座與大臣座、公卿座下方立燈臺打敷、不帖、舉燭、燈臺與西屏風之間、上方同可舉燭、而東西僅三ヶ間、其座甚短、仍不能舉兩所、當執筆圓座右手右、與方大臣座前也、不論左立一切燈臺、舉燭打敷、不帖、同廊西庇二ヶ間、敷高麗端疊四枚、紫端疊二枚、二行北、爲公卿休所、此座不懸、座上下舉燭如常、次余着束帶、出居圓座、召五位藏人、仰召仰事之間、先是內府、頭辨兼忠仰親經畢云々、尤不足言也、召兼忠問之、無所子披陳、有若亡々々、攝政之時、必奉命所向也、小時親經歸參、余間不蒙「公家」命、直仰如何之由、依兼忠與奪所仰也、是又不足言也、兼忠雖仰、猶可待命也、即余仰親經云、人々此方に、保安被仰詞、親經向仗座召之、頃之、內府已下經南庭、理須廻二條大路也、然而任近例、着座、先不着休所、直着座、公卿少、內府着與大臣座、中納言實宗、定能、經房、參議兼光等着端座、中納言賴實、通親、參議泰通等着與座、次「頭」右中辨兼忠、左少辨定

長、右少辨親經等置宮文、經西馬道、并殿底等、到東第一忠昇、長押上、膝行置之、定長只懸、膝置、親經乍居長押下、之、以四爲上、兼忠乍長押上、拔、笏也、次第置之間、最末宮治在長押端也、各拔、笏退如例、次余問左大辨在座哉否於內府、申候之由、次余正笏目之、次左大辨兼光卿微唯、不、揖經廣庇、昇自東第一間西邊、膝行自圓座北方着之、須自四方也、然而端座與圓座無深揖引、直下重裾、正笏候、余示氣色、次兼光覽闕官帳、其儀、隨余氣色微唯置笏於左、移一宮文於二宮、留闕官帳二卷、以右手取上闕官宮、以左手引下硯宮、以闕官帳宮置前、披見闕官帳、只見一卷、不見今一卷、定有習歟、次以左手押硯已下於北、末宮與長押平頭ナル程二押、以左手右手取宮膝行、依其程近只如形有、置宮於板敷、引廻、右サマニ指揖寄余座前、余置笏、右、引寄宮、此間兼光等退拔笏候、不敬折、大、余引寄宮了、即見文、各兩三枚也、見了如本卷之、返入宮、小押出、不引兼光挿笏進寄、乍置引廻宮、進之右サマ取出之復座、置前拔笏、左、此後記不書訖、

此日仰下維摩講師、又被始行法勝寺大乘會、尊勝寺灌頂等、(今日退出)、

十五日、戊戌除目入眼、房卿有院御給之沙汰、今夜宿候、今日內大臣不參、宗家卿爲上首、

初夜

召仰、上卿內大臣(殿)、召、定經、

公卿、內大臣殿、參議兼光、中納言、實宗、賴實、定能、○南按中納言、兼忠朝臣、定長、親經、經房等卿、官當注狀

宮文、依、少間數、出入用、執筆、兼光、着圓座、如恒、

先任式民兩省史生、式部播磨目、民部若狹目、

次召院宮御申文、兼忠、朝臣、

次任兵部史生、陰奧、

次奏御申文、次下賜申文、院宮公卿給、

各令下勅、于息二合、不、下勅之、

次下賜臨時內給二通、大和介、攝津介、

大和介當麻宿禰也、下姓之條、聊有其沙汰、但依

有傍例被任之、

申文等遲勘申之間、閱筆祇候、

數刻之後、外記令勘申、

諸國介(以下、次第任之)、二分代內舍人、并內官未給等、明夜可有沙汰、

之由被仰下、

其後封大間成柄成殘等、令進上、

今夜衝重御陪膳、宗親、朝臣、內大臣殿、諸大夫直進之、

無陪膳之條、被各仰下、又無勸盃、依御轉

〔盃〕蓋事歟、

竟夜、

召、親雅、公卿、大納言宗家卿、中納言通親、參議兼忠朝臣、定經、親經、執筆着座、

宮文、依、定經、親經、執筆着座、

先下賜院宮御申文、任人折紙等、

次任文章生、右京進、

次任院宮御給、

皇太后宮御申文、大夫加署姓落尸字、仍執筆

雖申其由、有先例之上、勸許之者不能抑

留、仍被許任之、

此間火櫃、衝重、陪膳宗親、朝臣、勸盃、頭

次又下賜(申文五結、)

諸道舉、(明法、今夜被撰任一人、)

連奏、(陰陽寮不仕者四人、可令解任之由、裁、其狀、仍追可有沙汰之由被仰下、)

左右衛門醫師、以自解申之、雖非道舉、博士貞繁息也、無



左右可被任歟、但共以兄弟也、可抽一人者、以何可爲先哉者、下名時可有沙汰云々、

顯官舉、中御門大納言、并奏通、陸房卿、獨申之、

事了書叙位次第一如恒、

去夜所任之大和介、依下姓可止之由、被仰下、仍止之、

兩日事、仰兼光、令注進之、

十六日、己丑公卿勅使日時、并諸社奉幣使定也、上卿內大臣、

又公卿勅使召仰之、實房卿、頭辨兼忠、入夜余退出、於殿上仰之、

十七日、庚寅降雪、此日發遣荷前使、中門內砌內儲座云々、今日下名也、兼忠朝臣、兩度往反院御所、今日、

神馬一疋遣行事辨許了、此夜院佛名、

定長、公衡等卿拜賀、

十八日、辛卯雪下、此日、御方遠行幸也、余內府三位中將等供奉、先三位中將拜賀、

十九日、壬辰以兼忠朝臣、申宸筆宣命事於院、以御書賜御返事、自今日殊潔齋、〔先洗髮〕、

廿日、癸巳公卿勅使進發、余參神祇官、上卿內大臣、勅使〔定〕實房卿、內府依女房陪膳宿候、

廿一日、甲午此日欲行官奏、而兼忠朝臣、俄稱障不參、仍延引、〔頭中將申吉畢〕、

廿二日、乙未此日又欲行官奏、而依經房卿稱病不參又延引、內大臣雖參陣、只行位祿定、去年分、所宛申文、大糧等申文許、左大辨候、同勤執筆、

廿四日、丁酉此日、公卿勅使參宮日也、仍余殊潔齋、沐浴解除、又著衣冠降庭遙拜、此事雖非先例、依有所思所爲也、

廿五日、戊戌內御佛名、有宿申、繼絕也、不堪定和奏、圓宗寺法花會始、觀音院灌頂等也、

廿六日、己亥新大納言實宗卿爲拜賀來、無答拜引馬、兼光卿又來、光長又拜賀、宗隆申吉書、〔東寺灌頂也〕、

廿七日、庚子公卿勅使歸參、奏通卿拜賀、定經又同、此日法皇御賀、諸寺御誦經度緣使實教朝臣、叡勝寺灌頂、依大阿闍梨不參延引、藏人爲時申吉書、私歲末修法、覺成法印、爲御加持來、又三位入道釋阿來臨、

廿八日、辛丑院御懺法結願云々、

廿九日、壬寅追儼、此次內舍人數人被解却、是或死亡之者、或又郎等外材細工等之類、凡言語不及之輩等



〔類〕、數十人載<sup>イナシ</sup>補任之面、爲<sup>レ</sup>朝有<sup>レ</sup>恥無<sup>レ</sup>益、依<sup>二</sup>大外  
記賴業殊傷申<sup>一</sup>行也、

右文治二年冬一帖墨付百拾枚者先年松殿右幕下道  
昭卿聽繕寫彼卿被臨摹之畢抑法性寺忠通公之有職  
其二男松殿基房公親面授而傳于後法性寺兼實公且  
加目錄號玉海爲后昆之龜鑑其雲抄不讓他家吾後者  
秘握而可貯深奧者也、

于時慶安二年<sup>己丑</sup>季夏虫拂之刻、陶化翁(花押)誌  
焉、

玉葉卷第四十七終

玉葉

卷第四十八

自文治三年正月  
至同年三月

文治三年 〔歲次丁未〕  
正月

一日、卯朝間雪降、僅及寸、午後雪止、天猶陰、此日家拜禮、院拜禮、小朝拜、節會等、皆用晴儀式、如例、未明、拜天地四方、依飛雪、儲座於中門、〔竊思共東四行、四角舉燭、余着束帶、飢勞如着其座、北面、唱屬星名、七遍、本命、再拜、其誦文讀一遍又再拜、次拜天、乾、次拜地、坤、次拜四方、東南西北、各再拜、次大將軍、東、至、今、次王相、良、次天一、此同、天一天上之、次太白、東、定、已上皆再拜也、次考妣陵、共、次太神宮、也、〕次石清水、坤、次賀茂、北、次春日、南、次大原野、西、順、向、坤、次日吉、良、次吉田、東、次梅宮、坤、次祇園、巽、次北野、乾、次惣社、南、已上陵已下兩段再拜〔也〕、次歸昇、次內府有四方拜事、於此所、依、宜、及午刻、雪不晴、仍拜禮事、人々〔持〕疑之間、及晡時、天晴、雖庭濕、敷乾沙、院拜禮有無、問遣定長許、〔宗賴、以御教書、可被用晴儀之由、有、〕

返報、先是已刻許、先手水、其座在客亭、余着直衣、居菅圓座、奧方、引寄南面一居也、陪膳資泰作一通、朝臣、事訖歸入有齒固事、女房陪膳也、讓殿四面副資、鋪端龍盤、其上施唐錦茵、爲姬君座、其北間敷高麗盤一枚、其上施東京錦茵、不敷地鋪、爲女房座、依所狹、余座在南廂打出、餘只敷高麗盤一枚也、對屋鋪客亭之時、讓殿前鋪此座也、其儀、中央間鋪姬君座、但經間敷三枚、其東西鋪女房及余座、皆南面、豫侍男共取居齒堅之具、事訖又侍等撤之、先例也、見故殿御記、申刻着束帶、防劔、紫綾平緒、櫛桐內府、孔雀紫、三位中將、平緒、同着束帶、此間、藤中納言定能卿、帥中納言經房卿、新藤中納言泰通卿等、來臨、中御門大納言宗家、被示可來之由、仍雖相待遲遲、日已及斜陽、仍余出居客亭、菅圓座、如、經房、泰通等卿、本在殿上人座、見余來起座、余示可着公卿座之由、仍定能相共着與錦端圓座、〔各其久不着之、之、故殿御覽叙位勘文之間、公卿即家司大藏卿宗賴朝臣參進、申賴業持參叙位勘文之由、余仰可參之由、宗賴退下召之、頃之、大外記賴業、降自藏人所東妻、昇〕

自中門廊南妻、入車寄戶、自同間出簀子、揖跪候第二間、北依隱梅樹、進第二間、歎、余目之、賴業稱唯、又揖起、經透渡殿寢殿南簀子等、跪余座東間、階上長押下膝行、昇長押、又膝行、揖寄宮、退候東間簀子、余置笏引寄宮、披禮紙於宮中、披勘文、見之、堂與、○堂一作至繆持右手、見了置所繆取、於中卷之、加禮紙、置宮右方、取笏目賴業、賴業參進、指笏、其實、懷中、取空宮退下、經本次余召宗賴、問拜禮事具否、殿上人上言、等參否也申具畢之由、但宗家卿未參云々、陽日已傾、拜禮欲暮、且可被降立之由、示人々、即三卿降、自中門外方、此間、內府、三位中將、同以降立、自中門廊外方、降也、各列立中門外、府立初內、余在寢殿簀中、打出、內府依爲上首、縱大納言雖爲客、不可答拜也、爰家司大藏卿宗賴朝臣進內府前、蒙氣色、昇自中門外方、入自車寄戶、經透渡殿寢殿南簀子等、就南面西第二間、余在伴間、東三條儀、在對東庭、有拜禮時之例也、於寢殿有拜禮之時、在寢中、又例也、件間及四間有打出、申事由退歸、降自中門廊內方簀子、南妻有、氣色內府、出中門、了、次內大臣、權中納言定能卿、經房卿、泰通卿、參議隆房卿、從三位良經卿等、列立南庭、上首當南階東間柱立也、內大臣不練

步、只餘殿上人頭中將實教朝臣以下、列立公卿之後、步也、家司之爲殿上人者、在此列、九五位外記列立殿上人後、六位外記、在司職事可列立而一人不立、尤遠〔皆〕悉立定了、內府已下再拜訖、殿上人之下臈等、並上官、先出中門了、次內大臣已下、經列前、出中門、列立藏人所立部前、內府、三位中將等、留中門邊、次余出自寢殿西面妻戶、立也、降自寢殿南階、頭辨兼忠、出自中門、小向上首、示氣色、過上達部前、定能已下、四卿列立也、於門外乘車、三位中將、內府已下、相引公卿等參院、殿小路、於東面四足下、人々下車之後、降自車、左少將親能、朝臣獻香、入門直進立中門、北此間、公卿降立、內府已下列立余東、北殿上人等、殿上屏前、向公卿南面立、仍余以隨身、仰可列公卿之末之由、即立直了、皆悉立了、余尋申次人、即院司右衛門督賴實卿、大連、列進來余前、蒙余氣色、昇自中門外方、地上脫履、經透渡殿、進寢殿御在所東間、階上、儀前奏事由退下、經中門西緣、降同妻、氣色〔于〕余、余相揖、出中門北方、獨立、南余離列、無揖氣色、去溜七尺許、立留練步、留身、門溜邊、追、前練當南階東間柱而立、次內府已下、次第列立、內府不練、余東去、次殿上人、列立公卿列後、

頭任位、皆悉列立畢、拜舞、如、次上達部下薦、殿上人等、先出中門了、次余揖離列、自列前一練歸、於透波殿前程練留、余過列前之間、內府已下、出中門、昇中門外方、候殿上、近給、多昇、自中門內、而故殿令、昇自中門也、即余參內、將等相從、入、自左衛門陣、昇自小板敷、有、殿上御倚子下、故殿攝錄之初、元日參內之時、著陣兼大臣給、余已進、大臣仍給、余同可、追彼例也、然而、彼者無可著陣之用、是以不著、即參御前、此間主上有御齒固事、依勅定、勤仕陪膳、其後、主上著御々裝束了、御角、次余着殿上、先是、內府已下、公卿多以在座、余示人々云、御裝束了、可有小朝拜、自下薦可被起座者、先々、自上薦起座之間、次人々各起座之後、余降自小板敷、着靴進立中門、先是人々列立、四上、小時、頃中將實教朝臣氣色余、參御所、良久北面、小時、歸出、仰聞食之由、次余已下、列立清涼殿東之問、歸出、仰聞食之由、次余已下、列立清涼殿東對、南庭、練步也、以東爲上、南階以東、甚狹少之故也、下薦等經上薦後也、職事等、他殿上人不見、列公卿後、次拜舞、訖、余揖右廻、練歸、昇自小板敷、着殿上、以實教朝臣、仰內辨於內大臣、次余向南殿、密々見節會儀、南殿懸御簾、依御忌月也、是定例也、事未訖之間、余退出、參入條院、謁女房、即歸

宅、不脫裝束、着朱器飾供、陪膳業實朝臣下箸、即歸入、上達部座、皆圓座前備之也、須南今日、打出紅梅句青單、濃打梅表着、薄菊染唐衣、二日、甲天晴、已刻着直衣、有手水事、陪膳資秦朝臣、其儀如昨日、其後有齒堅事、親信、雅隆等卿來、余不謁之、此日、不出行、今日依日次不宜、無臨時客事、昨日余手水之後、內府有手水事、三日、乙天晴、是日、家臨時客也、早旦有手水事、陪膳以政朝臣、陪膳同前也、未刻、余束帶、梅織物下裳、面白裏、打和、紫懷地水袖、金作飯、件領底、以綠青透浪、形上、以金作魚形、付之、紺地平結、梅、櫻、柳、等、先、是辨備饗饌、政所勅之、先例爲受領之家司、若諸國勅之、近代共以不、以待男共令取居、此間、公卿漸以來集、或着殿上人座、之也、飯兼居之、此間、公卿漸以來集、或在尋常上達部座、簾中、件座、二行敷疊、奉行家司宗賴朝臣、告人々來集之由於右大將家、臣爲客之時、以隨身告之、再三雖遣使、猶以遲々、及申終、右大將來臨、人々降立中門外、是大臣來臨之儀歟、余遣次第一、賜經房臨之後、公卿降立之由、載之、而來臨之時、如大臣之儀、可降立歟、令了見云々、後日聞此由也、不可然事歟、右大將進立中門下、後聞、其作法、如大臣、相揖、此間、余出自二棟廊中間、內大臣、經寢殿東南簀子、降自南階西頭、三位中將良經、持來風、懸指笏、獻香之後、不披、退歸寢殿四面邊、內府立障東布障子內、是例也、溜外



去一許丈、當西間柱、南面而立、隨身發前、左府生忠

列居、東上南面也、各着次右大將入、自中門、練步西進、武尉下、殿殿坤角程

當南階東間柱而立、次新大納言實家、左衛門督家

通、權中納言實宗、別當賴實、藤中納言定能、源中納

言通親、帥中納言經房、新中納言泰通、同兼光、左兵衛

督隆房、新三位雅隆等卿、宰相中將通資朝臣等、列立公

前庭、次頭中將實教朝臣以下、殿上人廿餘人、列立公

卿後、第一人爲第二皆悉立訖、余、右大將以下、一同再

拜、次余目、右大將、右大將辭之、余又目之、大將辭

之、余又目之、大將進出一許丈、余此間、左冠昇階

西頭、余第三目之時、大將辭可辭良經卿進來、乍指爲取

履退西方了、余着階西間端管圓座、乍北面揖、次

右大將未進出了、前內大臣入、自中門廊東北妻戶、

經透渡殿、並寢殿東面妻戶、先跪長押下、隨與座北邊

等、着第一東京錦茵、次右大將實房卿、揖離列、昇

南階東頭、着南階東間管圓座、端座第一也、右少次新大

納言實家卿、同昇南階、其息左少將經簀子、入自南

面東第一間、經與座後、着座、紫緣圓次家通卿以下、昇

自中門廊南妻、經西緣並透渡殿等、與端相分着座、

着與座一人、內大臣、實家卿、實宗卿、定能卿、着端座一人、

右大將實房、家通卿、賴實卿、雅隆卿、隆房卿、通資卿等、也、誠光卿、稱三家人、人不着座、退出了、雅隆又退出、次殿上人

實教朝臣、左中將公時朝臣、公衡朝臣、右少將忠季朝

臣、藏人貞綱等、着殿上人座、南上、次居手前物、折敷、

三本、陪膳正、大納言實家朝臣、役送右馬次居內府前物、折敷、

三本、陪膳正、上野守賴高、前馬助國行、次一獻、資泰朝臣持參盃、

宮少進長俊、散位兼實、經泰、役送皇后次一獻、資泰朝臣持參盃、

居折、數也、余取盃、實泰取折藏人右少辨親經持來瓶子、

常例諸大夫取約獻瓶子、仍持參盃之四位、傳取入酒、孟傳、納言

之時、諸大夫返取瓶子也、而今度、依承保三年例、藏人辨取瓶子、

仍親經、直余氣色實房、入酒飲之、又入酒目實房、

持來也、實房起座、有自庇進來、不降、懷笏取盃、復座擬

內府、每獻如此、元永例、故殿爲大臣、保延宇治左大臣爲內大臣、

家忠卿、保延實行卿也、客之、大納言受、孟擬、主人之子息之丞相也、元永

殿上人座、而資通置盃不傳、仍余其盃可傳殿上人

座之由仰之、仍通資目實教、々々起座進來、取盃

復座、巡流了、次二獻、頭中將實教朝臣勸盃、瓶子藏人左

網、余受盃、實教取、次第巡流如初、今度、公時朝臣受、孟

次居飯、先余、次內府、陪膳役送同、前、居折敷、次大納言

已下、居折敷、持來、移居、各手長、兼奉行家司着定之云

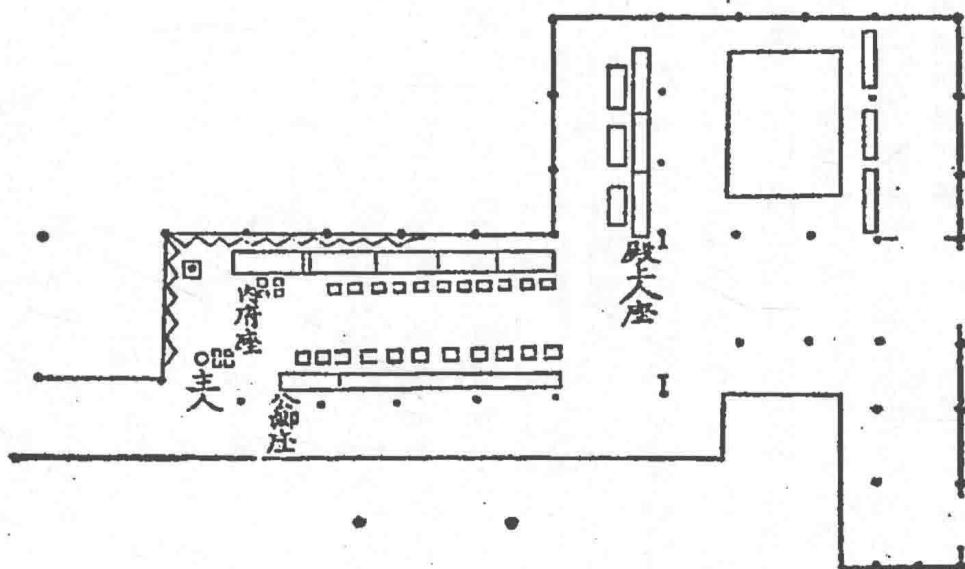
云、殿上人座、飯兼居之、次居汁、陪膳役送等、皆同、殿上

大五位、海雲、零餘子等也、先人別居加飯汁居之、依余命、居飯了

之後、更居汁也、是正法也、然而、或又有此例、共

非失錯也、居訖、通資卿申上之、余以下先下箸、次漬汁食之、也、如形食了、汁器置折敷高坏下也、次三獻、參議隆房卿勸之、於長押上動也、瓶子少納言賴房、巡流如常、隆房卿不待盃之過我座、早速復座、頗失錯也、仍盃欲來我座之間、起座即退出了、次着雉羹、居了申上、下箸如常、次余仰可有催馬樂之由、於定能卿、定能固辭、讓內府、內府又固辭、已經時刻、人々頻勸內府、仍余目內府、內府申未勤公庭役有憚之由、然而、人々稱經程之由、猶以責之、仍內府、愁打笏拍子出哥、取實家卿笏用之、梅枝也、家通、定能等卿助音、一反了、余示猶可有之由、次歌席田一反、次眉止自女、二、此間、通親卿起座、勸四獻、從定家、余示可揚之由、通親、放紐、楊右余已下從之、將放次余催律歌、青柳、一、次更衣、二、此間、居菓子、次朗詠、先令月句、內府出之、人々助音、一反之後、定能卿詠、東岸西岸、不、用、宗忠之詠、依余命出也、內府、家通等助音、次家通卿、又詠同句、次定能卿出新豐酒進句、實家泰通等助音、次五獻、勸盃家通卿、差、細勸之、瓶今度、忠季朝臣受盃、上、薦等早出歟、次差薯蕷粥了、不待居了、

食之、次公卿差紐取笏、自下臈起座退下、大納言等皆自中門退出也、次余起座、經寶子入二棟廊



儀中、內府、定能卿來、謁之、今日無牽出物馬、元永保安、右大將家忠卿爲客、然而、故殿爲大臣、在座、仍無引出物也、上臈大臣、尊者之時、雖爲子息、被引上臈預引出物、寬治之比例也、今日左右兩府依所勞不來也、來會公卿、

內大臣、

大納言、實房、

實家、

中納言、定通、

實宗、

賴實、

定能、

通親、

經房、

泰通、

兼光、

參議、隆房、

通資、

散三位、良經、

雅隆、

今日、右大將、着山吹唐綾下襲也、打出、紫勾紅單衣、紅打衣、裏款冬表着、萌黃唐衣也、奉行家司宗賴朝臣、職事兼時、

四日、丙晴、此日、法成寺阿彌陀堂修正也、着直衣、鹿車、隨身上襪冠、前驅衣冠、先參院、內府同之、余依召參、內府半部車、隨身前驅同、御前、頃之退出、參法成寺、入自西面南門、門內屏額、代引、慢、又御堂南迴廊、經屏代南、公卿經屏、同無、實、礎跡同引、經屏代南、南庭、例也、昇、自、南面、階、經、慢東也、長者入、經、東方、自、餘公卿、經、廊西方、定例也、即着佛前座、

內府同着座、今日他、次召宗賴朝臣、仰事可始之由、即初夜導師參上、參也、自、北方、法用如例、此間居湯漬、余陪膳宮內卿季經朝臣、殿上、內府陪膳以政朝臣、家司、次大導師參上、賜布施、次余退出、今日叙人事大略申定了、此日、藏人方、并家政所申吉書、藏人方、頭辨兼忠申、申之、共、今日、右少將兼良爲拜賀來、

五日、丁天晴、此日叙位也、早旦、余着直衣、伴內府參內、先參御前、次向直廬、次余出居上達部座、先頭辨兼忠朝臣、內、覽申文、其儀、兼忠插申文於杖、件申文百餘通、先候廣庇西方、隨余目進來、跪長押下、膝行指寄杖、余拔取置前、兼忠退候長押下、無揖、不數、余一兩通引拔見之、如本指之、三尺許指出置之、兼忠置杖參進、取文退下、不解結緒、拔取結申之、通、余目之、每度稱唯卷之、插、懸紙上、取、加杖、退下、余仰申文早、可、獨之由、次他職事等覽之、定經、宗、次家司宗賴朝臣、又覽申文、保安、其儀、大略同前、但不結申也、退下之後、於公卿息所撰申文、職事皆悉着其座、家司同候其座也、余歸入之後、改直廬御裝束、職事兼時奉行、之、具在、指圖、如去年秋除目儀、秉燭以後、撰申文了、次內府着束帶、向陣余又着束帶、時給、



出居圓座、西、以五位藏人定經、右衛門先仰召仰事、定經歸來之後、以同人召諸卿、其詞云、雖可出座、有次內府、實家卿、通親卿、經房卿、光長卿等着座、內府、若端座、次辨官置宮文、權右中辨定長、左少辨親雅、藏人辨親經等置之、爲上、次余問右大辨在座哉否於內府、申候之由、次余取笏目之、光長微唯、揖起座、經北廣庇、入自東第一間、膝行着圓座、深揖候、余目之、次光長微唯置笏、左方版移入一宮文書於二宮、留十年勞、置替宮、推硯插笏、取宮進寄置板敷、引廻置余前、小退拔笏候、次余置笏、右引寄宮、披見十年勞、端座三枚也、如本卷之返入、頗推出宮、不取次光長指笏進寄、取宮引廻、退復座、置本所、取笏候氣色、余目之、光長召五位藏人、其詞、定經、定經參進、光長仰云、續紙、定經即持參續紙、執筆取之、不取置座前、取笏候、余又目之、執筆置笏、卷返續紙、間加級員於余、示其數、光長卷返了、置座前、摺墨染筆、先叙式部、其儀如常、省奏入第三宮、次叙民部、同前、次召院宮御申文、先申事、由如常、以親經召之、次叙王氏、次叙藏人、余以詞、此間、持參院宮御申文、執筆指笏覽之、余置笏、取之置前、一々解封、

件符一作使封切、入硯宮披懸紙、次第見之置前、取「蓋」或入十年勞宮也、懸紙、一卷に卷之、入硯宮下方、是又或入十年勞宮也、取申文、披一通、卷籠他申文、各不引返給執筆、執筆執之復座、次叙氏爵、源氏有申文、藤氏、余以詞仰外記史、源氏先叙外記也、而思失先叙氏爵、光長頗有歎息之色、余云、全非失其例甚多、更不可改直者光長有稅次叙院宮給、此間、余撰出可叙之申文、並叙勘文等給、件勘文、元日所覽也、次叙諸司勞、次叙外衛從下、終頭召親雅、召入內一加階勘文、先申事、即持參一加階勘文、入內不候次叙一加階、皆悉叙了、書三年號月日、卷叙位、放餘紙、入第三宮、卷叙位置前、移入十年勞於次宮、加外記勘文、一加階勘文、成殘申文等、插笏推宮、取宮進來、置余前、余取出他具書等、披見、叙位了、返給空宮、執筆取之復座、秘笏調難具退下、不復座直退下也次余以加入文等、入十年勞宮、取笏目入眼上卿、即上卿來座前、余取出叙位賜之、上卿取之退居、於休所披之、次余歸入、辨官撤宮文、其儀、藏人等取之歟十年勞宮、家職事取之、給外記了、硯宮蓋申文、同取入之、余即改着直衣退出、內府同之、此日、參內以前、祇候八條院之小兒有頂戴事、內大臣參勤之、



〔六日、戊申、雨下、藏人辨親經、申三條々事。〕

七日、戊申天晴、此日、白馬節會也、依御忌月、無出御、

內辨內大臣、外辨上卿右大將、余午刻着束帶、欲參

內之間、定長朝臣爲御使來、一兩度往返之間、及

申斜參內、內辨着陣、已行加叙之間、右大將範能

朝臣爲院御使、持來御書、披見之處、範能、親能可

叙四位從上之由也、非據之至、不能左右、然而、

御定趣懇切、不能申左右、仰下了、其旨書御返事、

給範能了、其後節會儀始、參議一人之外、不參之間、

所役繁多、仍有其沙汰、以親經問內辨、申有例

之由、先是內府問外記、外記注進一紙、余云、於例

者有之、勸仕所役之次第如何、一身可勤四ヶ役

歟、將又訥言可勤叙位宣命使歟、粗有其例之由、所

時例如何之由、重問內府、內府申云、長和五年、寬仁二

年、共實成卿勤之、見小記、但只今賴實卿申云、左大

臣、參議之時、一身勤四ヶ役了云々、賴業真人、又同

申此旨、兩方之間、可在御定者、余仰云、通資朝臣

盡參哉、重遣人了、然者、先隆房卿、當時一人可勤叙

位宣命使、通資參會者、指分可勤後々役、若不參

會者、任左大臣例、可勤四ヶ役、爲近例之故也

者、其後儀如常、通資卿參會之間、不闕今日事、又

馬頭代官、元指忠季朝臣、而今日被超親能等了、

事體不便、仍差改他人了、事訖余退出、

八日、戊戌雪降、御齋會始也、內府着束帶、所着臨時客之

所着元三之染裝束、參官廳、自彼參院、可供奉修

正御幸也、余戌刻着直衣、無出衣、牛車、參白川殿、

即以出御、參云々余擡御車簾、乘車候御後、內府已

下、騎馬供奉、於法勝寺西廻廊北面、寄御車、余又

窺御簾、經南壇上、着堂底座、開座東間障子示內府、

令參法成寺、今日依日次不宜、余不參、仍爲代

官、令參也、此日、觸仰定長朝臣了、咒師六手了、

還御、余同供奉、入御之後退出、于時及鷄鳴、

九日、辛亥晴、頭中將實教朝臣來云、院宣云、右京權大夫

隆信朝臣、可被許昇殿者、仰可仰下之由了、

此事非據也、然而、爲院近臣、不能申是非、加之、祖父爲忠爲實

客、又隆信、二條院、並先帝、爲三朝之侍臣、仍有此恩、歟、猶不爲

可、又皇后宮六位進光輔補藏人、是又未曾有也、爲

拜賀人々多來、

十日、壬子晴、今日、賜咒師散樂等裝束、

十一日、癸丑雨下、入夜雨止、奈良僧正被來、余對面、

今夜依日次宜、余伴內府、三位中將等、參法成寺、

入自正面障子、着東間座、初夜導師參上之後、有湯漬事、余陪膳宗賴朝臣、內府陪膳以政朝臣、咒師五手、大導師、已講有辨了余退出、

十二日、寅晴、內府、三位中將等、參御堂、此夜、禁裏女房等參入御堂、見咒師云々、頭中將相具女房參入、他殿上人等少々相具云々、

十三日、卯天晴、此日、余長者之後、氏寺參賀也、須去年行此禮也、而依僧正所勞、延及今日也、其儀、

寢殿南庇五箇間、加東庇敷滿弘筵、庇離東面一間、卷

之、母屋簾、東庇南北頭、打、離、母屋、並六ヶ間、南面

四面、垂之、副簾立直四尺屏風、副北屏風、敷高麗

端盤三枚、紫端盤一枚、爲僧綱已下座、高麗上、西第一

僧正座、大敷、紫端盤一枚、爲僧綱已下座、高麗上、西第一

座、爲僧都座、其次、敷高麗盤四座、爲律師座、紫端盤不加圓座

講座、南階西間、副西屏風、寄長押方、敷菅圓座一

枚、爲余座、障子上二行敷紫端座、爲五師得業座、

夏敷却午刻、興福寺僧徒參集、別當已下即家司也、大藏

卿宗賴朝臣降逢中門、先是列立中門歸昇來寢殿西

面妻戶方、申事由、余出自同妻戶、着菅圓座、東

帶用諸次召宗賴朝臣、仰僧徒可着座之由、次別當

僧正已下昇自中門內方、經中門廊西簀子、并透渡

殿寢殿南簀子等、入自座當間、各着座、皆悉着了、權中納言兼光卿、取織物被物、芳經南簀子、入自階

東間、置僧正前、退下、次季經朝臣已下殿上侍臣、

賜覺憲已下祿、置各前、次自西方引出馬一疋、

余隨身引上馬二人引之、須諸司勞五位、並衛府等引之也、於中門而五位退參、仍以權儀、以隨身令奉之、又非巨難也、

下、僧正從僧受取之、次僧綱等自下薦一起座退出、

寂後、僧正同自取祿退歸、於南簀子、從僧受取之、

次余歸入、頃之、法成寺僧徒來集、如初宗賴相逢、申

事由、余出座召之、供僧上薦權僧都雅緣以下、參上

着座、次季經朝臣以下給祿、次僧徒退下、執印別當法

印覺尊、權別當尊忠等、各不來也、次余又歸入、

此夜、余家女房等、初參法成寺、皆出車也、殿上人車

五兩也、女房、姬君、內府室等、密々乘第一車、是故法

性寺殿御時例也、侍男共各二人、在出車共、內府、三

位中將等相具之、兼宗朝臣、親能朝臣、定案、高通、忠行等車也

今日、女叙位也、晚頭、着束帶參內、直廬裝束如

叙位除目儀、先是、職事等於公卿息所撰申文、

宗賴朝臣加此座、件申文不覽之、外記進空解文、入、寫有懸紙、加封、

勘文、返給宮、次撰申文等了、盛硯宮蓋進置

其旁、又如例、空勘文開封撤禮紙、加申文等置





起座之間、已講圓長受取件祿、先是有引出物馬、諸司勞五位、並衛府一人引之、僧侶即退下了、今日無法成寺參賀、任大臣之時例也、今日、三方節供、陪膳資泰朝臣、此日、余小兒等、有戴餅事、內府爲之、大外記賴業持來政始日時、明見了返給、

十六日、戊午天晴、雅賴卿來、余謁之、定房卿有示事、依御忌月、無蹈歌之宴、定例也、此日、法皇御參八幡、今日政始也、

十七日、己未天晴、此日、小童、始渡山階寺別當僧正

許、內府相具之、半部車、隨身、上臈冠、前驅衣冠八人、少納言賴房連車、乘燭歸來、小童引出物、銀洲濱立同鶴、件鶴口ニ手本一卷ヲ令、昨、件手本、裏薄

樣也、又內府被引馬云々、從僧二人既司兼親受取之也、云々、今日、小童裝束、萌木二重織物、狩襖、裏

濃蘇芳衣、三青單衣、濃紫二重織物指貫、紅張下袴、此日、親經下宣旨於內府、去節會、公卿余有違列等、

爲大膳職之懈怠、仍被下問子細之宣下也、今日欲行官奏、依大辨不參延引、

十八日、庚申雨下、定長來、余示付條々事、今日、蓮花王院修正也、有御幸云々、余及內府、依勞事不參也、

十九日、辛酉天晴、入夜雨下、此日、有盡咒師、北面依無便宜、於南面有此事、殿上人等、在中門廊北緣、諸大夫男共、於閑所見之歟、內府、三位中將、在南簀子、乘燭之後、若直衣參內、於直廬改着束帶、有官奏事、奏申宗賴朝臣、奏者定長朝臣、左大辨行隆、每事如例、定長作法之中有不審事、進奏復座之後、可右廻也、直廬便北面、以東爲上也、而左廻、內サマへ未見不知之說也、若不受口傳一歟、將又有此說一歟、可尋知之事了、改着直衣退出、

廿日、壬戌雨下、入夜參院、申除目任人之間事、又申東大寺院宣之趣、頗有不許之氣、仍乍恐破立奏子細、仍可御沙汰之由有仰、爲悅不少、

廿一日、癸亥天晴、是日、春除目始也、執筆左兵衛督隆房、已刻許、余着直衣參內、相件先參御前、次向直廬、出上達部座、頭辨兼忠朝臣已下職事等內覽申

文、其儀如例、直廬裝束、如去叙位儀、乘燭之後、內府着束帶着陣、余同着束帶、出除目座、皆西面、

先是撰申文、置視宮上、盛蓋余召五位藏人宗隆、仰召仰事、良久不歸參、仍尋召之、仰諸卿可召之由、其詞、人々小時、內府並忠親卿已下來着直廬座、



隆房卿着端座、次辨官等置宮文、合、次余召隆房

卿、先問在座說否於內、隆房卿經廣庇進着圓座、正笏

候、余目之、隆房置笏移一宮文書於次宮、置替宮、

押視已下於北、宮多所換、仍取未、插笏取關官宮、進寄

置余前、小退候、余置笏、引寄宮、關官帳二卷、各披

見、端兩三枚如本卷之、入宮頗指<sub>出之</sub>、不引、隆房

插笏進寄、取宮退復座、拔笏引直宮等候、余又

目之、執筆大間取笏候、余又目之、任內暨兩人、

申事由、召院宮御申文、頭辨兼忠、即兼忠持來、執筆

取之授余、如、余取之置前、堅、一々解封、

入硯宮蓋下方、披禮紙、不引、置前、橫申文置視右

方、皆見了、卷簡申文數通於一通之中、頗指出シテ

置之、參議取之、復座之後、一々卷禮紙、卷簡一

紙之中、入關官宮了、此次第、任可任者等、依

委不覺悟、不具記、事了、卷大間封之、又封成

柄、入一宮、加、插笏押宮參進、置余前、余引

寄宮、執筆關置殘文書等退出次、余歸入、藏人等撤

宮文、辨官可、

今日、書袖書事、任當年給以後歟、以前歟、不覺

悟、以頭辨兼忠、令勘申也、今日、居火櫃衡重如

例、與內府父子之間也、仍無勘孟事、今夜、令任

者等、四所當年給等也、他者不覺悟之、

廿二日、甲、天晴、雅卿來、此日、除目中夜也、着直

衣、參內、執筆同人也、今日內府不參、新大納言已下

也、子細悉忘却、仍不記之、

廿三日、乙、天晴、此日、除目入眼也、秉燭程、着直衣

參內、於直座改着束帶、內府同參內、即着陣、以五

位藏人親經、召公卿、次第又忘却、仍不記之、今日、

兼雅、定能卿等來、入夜定長來、任人沙汰也、兩度往

反、

廿四日、丙、天晴、已刻、除目訖、改着直衣、參御所、即

退出、相、今日、法皇參天王寺給、

廿五日、丁、天晴、左少辨親雅來、申御齋會之間事、

廿六日、戊、天晴、親經來申條々事、宗隆云、祈年殺奉

幣上卿、右大臣申降云々、內府可勤仕、但仰臨期

可催之由了、大佛聖人來、余謁之、今日又宗家卿

來、

廿八日、庚、雨下、此日、下名也、入夜、源中納言通親卿

拜賀來、職事一人衣、出逢、稱他行之由、余不謁之、

廿九日、未雨下、此日、二位中將良經、申拜賀、先拜余及女房、申次、次參所々了、前驅五位八人、共殿上人、侍從定家、少納言賴房、散位忠行、隨身着白狩袴也、

〔卅日壬申天晴〕、

### 二月〔大〕

一日、西天晴、此日、院尊勝陀羅尼供養也、早旦、余、及內府、二位中將等、獻陀羅尼、以隨身、未刻、着直衣、綾淺黃、相伴內府、余座車、內府半部車、各隨身布衣上、冠、參院、殿、中納言定能、經房等卿已下、殿上人等、降居中門外北方、余及內府、昇自中門外方、不入車寄戶、故殿御記曰、主人在寢殿之時、自緣北行、經中門廊北二間、並二棟廊前廣庇、于時、中納言已下候、二東廊、寢殿東南簀子、經公卿前、着正面以西疊座、經正面簀子也、內府着階以等、在此座、其外、座上無所、仍余着、于時、揚御經題名之終頭也、導師前權僧正公顯、請僧三十口、揚御經題畢、最末請僧、持卷數、預法師持、折敷、取僧綱等署、但散位僧綱不署、了復座、次導師說法、也、如形、次導師自出讀、々衆次第誦之、其事訖、供養法、次導師着下座、

禮盤前母屋、次內府已下取布施、導師被物內府取之、布施雅隆敷之也、次從僧等、昇自南階、其間太、撤布施、此間、公卿起座、次導師已下退下之後、余內府等起座直退出、殿上入等運經如例、

二月、春日祭以前神事也、然而、勘例之處、天治元年二月二日、故殿參給院尊勝陀羅尼、仍今日一門豫參也、參入公卿濟々焉、慥不覺悟其人、仍不記、入夜權辨定長爲院御使來曰、義顯之間事、今一度可有議定、申云、於院殿上可候也、其趣又如何、定長云、院會議不可〔叶〕、明日以後至十六日、次第指合、御所不定、一日無休閑之隙、仍於御直應、可有議定之由、被仰下也云々、事爲重事、猶可有其恐歟、重可奏之由〔仰之〕、定長婦參了、

二日、戊陰晴不定、此日、院渡御烏羽南殿、修造之後、始所渡御也、但御幸儀密々也、更非移徒禮、公卿直衣、殿上人衣冠、日沒以後着直衣、相伴內府車、隨身、前驅等、參院、小時出御、余參御簾如例、余皆如昨日、供奉御後、北面取、內府着半靴、帶鈿取笏、但堂上不帶也、其路經六條大宮七條朱雀造路等、入御自南殿西門、余昇自中門外方、經透廊南簀子等、參御

罷、經家朝臣懸打板如例、近代、付御車院、院司伴朝臣一人也、下御之後、又襄階間御

簾、入御畢、退候上達部座邊、小時相具內府退出、今度同車、依夜中遼遠也、內府隨身在車傍、不進不退、是故實歟、伴御所修造、被宛諸國、寢殿已下屋四字、伊豫國所課也、余密々有營々事、諸國閣神社佛寺修造、先營此事、天下之衰弊、只在如此之事歟、今日右少辨親經來云、自院可參之由有仰、是義顯之間事、可尋之、余曰、早參院、可承子細者、即參六條殿了、而不歸來如何、兼忠朝臣〔來〕申條々事等、

三日、亥雨降、兼雅卿示送內府許云、寢殿作事已下、御服御調度等事、花麗無雙之由、再三有敕感云々、季長朝臣來、語鳥羽之間事、此日有御方違行幸、自兩院幸大炊御門御所、明日祈年祭廢務也、還御可有其憚哉、有疑殆、仍先問先例之處、諸社祭廢務、並國忌日等、有行幸例、又伊勢幣發遣之日有行幸例、可被准據之由、賴業、師尙等勘申、以件狀問左大臣、被申無憚之由、仍明曉可有還御之由、仰兼忠了、余相具內大臣、欲參內之處、少納言賴房、乍觸犬產穢、參入着座、今明、公家爲神齋、仍余俄留

了、於內府者、依無人參內、不昇堂上、供奉路頭、是依有例也、大理之外、無他卿云々、尤不便不便、卒爾甚雨之間無參入之人歟、近代事如此、何爲哉、行幸之後、內府來此亭、依爲神中、曉鐘之後參上供、奉還御、賴房雖爲穢身、依庭上役、奉仕鈴奏云々、但還御之時、警蹕、鈴奏、御綱等、皆止之、依爲祈年祭當日也、

四日、丙天晴、親經來傳院宣云、猶於汝直應可定義顯事、可被問人々之趣、申旨可然、早以〔其趣、可尋問者、一昨日、可被問人々之趣、可如、〕〔又可〕應召之人々、可相計、但不可及廣者、余相計、仰親經、但重經奏聞、可隨御定之由仰之、定經來申條々事等、記錄所事等在此中、入夜定經來、傳院宣了、賴朝卿申旨如此、何樣可被仰御返事哉、可計奏者、其狀云、禁中事、云內裏之修造、云禁裏之雜事、無沙汰之由、返々不便候、可被計仰下候也云々、余申云、此申狀、頗有所存歟、能相計可被仰下也者、聊申存、明旦可參奏云々、五日、丁天晴、定經早旦來、只今參鳥羽云々、未刻歸來、傳院宣云、所申可然、以此趣可仰遣者、



定經〔又〕云、記錄所寄人事、可被召合點之輩者、今日又向上卿右大將亭、仰合之處、若依延久例者五人也、賴業、範定無左右、今三人可隨御定之由被申云々、余云、依保元例、被召十二人、何事之有哉、重合點此上、可相計之由、可仰上卿一定之後、可奏聞之由仰了、又云、去叙位之時、入勸文叙爵者之中、兵衛尉俊基、成勸負尉功預惣返抄了、而未申下宣旨、經年月之間、官外記不知之、入勸文叙了、而下名以後、訴申此之由、彼時奉行職事兼光卿也、被尋問之處、事已實也云々、仍雖七日以後、猶可被止位記歟之由、先日有院宣、余申云、下名以後被止位記之事、未曾有事也、近年有此事、永可被停止歟、於俊基者、成功有實者、雖可有哀憐、猶經數日被止位記事、不可然事歟、有恩者、讓子息、可申下宣旨歟、但可在御定之由奏了、而今日仰云、猶只可止位記者、勿論事歟、此日依女院御月忌、內府參九條堂、歸路之次參內、乘燭之後歸來、內藏頭經家朝臣來、申內侍所今月供神物闕如事、先日仰付親經了、而于今不致沙汰、仍尋遣了、

今日、賴業真人參上、云イ下賜大原野、來七春日祭日、來十二等、會參氏人差文、今朝有官別當康人所持來也、今日、釋奠、上卿通親卿、參議不參、辨親經云々、題、政如農功、左傳、伊豫國、鳥羽經營、莫大之由、頻有叙感之由、人々告示云々、六日、成〔天〕晴、藏人次官宗隆來曰、祈年穀奉幣、伊勢幣錦、闕如畢、爲之如何、可召付成功歟、仰曰、下名拜任衛府之中、多有成超越之功、彼中少々可用歟、近代又有自院被奉之例云々、且可尋近例歟、又云、定兼日歟、當日歟、仰云、當日定、專不可然、近代有此例、不可追用、早兼日可尋日次也者、又仰使事能可沙汰之由了、傳聞、一昨日、四日、蘭城寺衆徒僧綱等會合、有様々僉議、所詮不可勸仕殿下御祈云々、然而、僧綱等多猶不一同、未定而退散了云々、來十八九日之間、僧綱等可參院云々、此日、內府欲展詩筵、而人々多依不來、延引來九日了、宗賴朝臣來申條々事、平等院舞裝束內、甲蹈懸等、皆破損了云々、仰可宛祇候之輩之由了、七日、卯〔天〕陰、入夜雨下、大原野祭也、余、內府、奉



幣如常、陪膳資泰朝臣、陰陽師天文博士廣基、行事良清、幣取雅樂助平忠賴、內府皆同前、抑自春日祭一依可立三十烈、今日無其事、子細見故殿保安三年御記、此日、招定長朝臣、中園城寺衆徒事於法皇、又召隆雲、仰延曆寺衆徒不可蜂起之由、宗隆來、申祈年穀奉幣之間事、定經來、申記錄所之間事、

八日、庚辰〔天〕陰雨下、內府女房密々參賀茂吉田祇園

等、侍臣〔在共〕、無出車、密々儀也、兼忠來申行

幸之間事、此日、於直廬被議義顯之間事、申終着

直衣參內、先參御前、聊有御不豫事、自昨日酉刻

許小溫氣御云々、小時向直廬秉燭程、人々皆參之

由親經來告、仍余出居上達部座、其座如例、不立屏風、仍南北對座也、又余座前、不置次以親經仰人々可着

臨息現宮、又座上下等燭、次以親經仰人々可着

座一之山、或在休所、或排次人々着座、右大將實房、堀川大納言忠親、新大納言實家、別當賴實、源中納言通親、帥中納言經房、新中納言兼光、新藤宰相雅長等也、已上皆束帶、是內々之就定也、直衣可宜歟、職事不仰、裝束之間、人々着束帶歟、但、次余召藏人辨親經、仰院宣

初度定也、束帶又有何事哉、趣可示聞人々之由、親經大概仰之、末々人悉不

聞及、仍進寄寂未參議座後、示開了、次人々定中、雅

長發語、次第定申如常、定至右大將、定申了之〔由〕

後、余重出、條々問付其趣、人々評定、更如初定申ニハ、あらす只人々思々ニ

也、詞大略了、召親經、令書例記目錄、大略一同也、

也、詞大略了、召親經、令書例記目錄、大略一同也、

少々相違又注付了、事訖、人々自下薦超座、次余參

御所、御寢已了、即退出、仰親經、令書進目錄一通、

今夜、依法勝寺常行堂修二月、上卿右大將、辨親經

等、假辨也、定長候鳥羽之可被召出義顯間條々事、

一御祈事、

太神宮修理已下事、造宇佐宮事、

諸社修造事、恒例社事不法事、

奉幣事、

造東大寺事、諸宗諸山可祈念事、

諸宗相續限日數、可被修秘法事、

如說仁王會事、懺悔法事、

恒例佛事不法事、

一可被搜索事、

可被催仰諸寺諸山諸國事、

被召出之輩可被究問事、

宇多郡自敏者子細可被尋事、

可仰合沙汰子細二位卿事、新大納言

武士沙汰子細可被仰二位卿事、

此條、先被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>合能保朝臣<sub>一</sub>之後、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>之所、  
在<sub>二</sub>三方角<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御卜事<sub>一</sub>、藤宰相申<sub>レ</sub>之、兼光卿、右  
大將等同<sub>レ</sub>之、他人不<sub>レ</sub>甘心之、子細雖<sub>二</sub>太多<sub>一</sub>、大概不  
<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之也、今日、親經、向<sub>二</sub>左大臣亭<sub>一</sub>仰<sub>レ</sub>之、追可<sub>レ</sub>注  
申<sub>レ</sub>之由、被<sub>レ</sub>申也、明日重可<sub>レ</sub>尋取<sub>レ</sub>之由、仰<sub>レ</sub>了、(明  
後日之後、可向<sub>二</sub>右府亭<sub>一</sub>仰<sub>レ</sub>之、<sub>仁和寺</sub>之由仰<sub>レ</sub>之)、兩人申狀到  
來之後、可<sub>レ</sub>參奏院<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、同以召仰<sub>レ</sub>了、

自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>、公家天變御祈、被<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>北斗法<sub>一</sub>、實慶法印修  
<sub>レ</sub>之、於<sub>二</sub>本房<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>修也、藏人持<sub>二</sub>向御衣<sub>一</sub>云々、御樂事、  
以<sub>二</sub>親經<sub>一</sub>御教書內々仰造了、

九日、<sub>辛卯</sub>陰、已剋以後天晴、早旦、兼忠朝臣來申<sub>二</sub>行  
幸之間事<sub>一</sub>、又仰<sub>二</sub>伊勢宮司之間事<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>人々<sub>一</sub>之由、

此日、內府始有<sub>二</sub>作文事<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>永久例<sub>一</sub>行之、宗賴朝臣  
<sub>余並內府家司也</sub>、兼日承<sub>二</sub>仰催<sub>一</sub>文人等、秉燭人々來臨、通親卿  
來之後內府出座、於<sub>二</sub>尋常上達部座<sub>一</sub>有<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>、副<sub>二</sub>北

妻戶<sub>一</sub>敷<sub>二</sub>高麗端一枚<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>余座<sub>一</sub>、副<sub>二</sub>東障子<sub>一</sub>敷<sub>二</sub>同疊一  
枚、爲<sub>二</sub>內府座<sub>一</sub>、次南敷<sub>二</sub>同疊四枚<sub>一</sub>、<sub>二行對座、依<sub>二</sub>座短<sub>一</sub>、頗引</sub>  
爲<sub>二</sub>上達部座<sub>一</sub>、妻戶南中門廊、<sub>無<sub>二</sub>長押<sub>一</sub>、<sub>重敷<sub>二</sub>之、內府座無<sub>二</sub>對座<sub>一</sub>、</sub></sub>

端疊四枚<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>殿上人座<sub>一</sub>、公卿殿上人、豫着座也、次內  
府召<sub>二</sub>宗賴朝臣<sub>一</sub>、<sub>元在<sub>二</sub>障子上<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>召參上<sub>一</sub>、承<sub>二</sub>仰<sub>一</sub>、<sub>退下之便、若<sub>二</sub>殿上人座<sub>一</sub>也、</sub>仰<sub>二</sub>文臺座圓</sub>

可<sub>レ</sub>置之由、次諸大夫持<sub>二</sub>參切燈臺<sub>一</sub>、立<sub>二</sub>內府座上<sub>一</sub>、<sub>與方</sub>  
也、取<sub>二</sub>本臺座上之燭<sub>一</sub>、移<sub>二</sub>居<sub>一</sub>、次又一人持<sub>二</sub>參文臺<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>內府  
座前<sub>一</sub>、<sub>仰而置<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、次又一人持<sub>二</sub>參圓座<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>文臺西<sub>一</sub>、<sub>去<sub>二</sub>番<sub>一</sub>、<sub>三</sub>  
府座<sub>一</sub>、<sub>置<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、次序者文章博士光輔朝臣<sub>一</sub>、<sub>殿上人、永久、祖父敦光爲<sub>二</sub>內</sub>  
例也、<sub>若<sub>二</sub>持<sub>一</sub>、<sub>參序<sub>二</sub>置<sub>一</sub>、<sub>以<sub>二</sub>文下<sub>一</sub>、<sub>爲<sub>二</sub>退下<sub>一</sub>、<sub>起<sub>二</sub>文人座<sub>一</sub>、<sub>入</sub>  
衣冠也、<sub>持<sub>二</sub>參序<sub>一</sub>置<sub>二</sub>文臺<sub>一</sub>、<sub>內府方<sub>一</sub>、<sub>爲<sub>二</sub>退下<sub>一</sub>、<sub>起<sub>二</sub>文人座<sub>一</sub>、<sub>入</sub>  
戶<sub>一</sub>、<sub>經<sub>二</sub>寶子<sub>一</sub>參上也、<sub>次文人等、自<sub>二</sub>下薦<sub>一</sub>置<sub>二</sub>詩<sub>一</sub>、地下人置</sub>  
了之後、殿上人自<sub>二</sub>六位<sub>一</sub>逆上置<sub>レ</sub>之、次公卿隆房、雅長  
等卿、經<sub>二</sub>座中<sub>一</sub>置<sub>レ</sub>之、<sub>如<sub>二</sub>嘉保江記<sub>一</sub>者、公卿不<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>文臺下<sub>一</sub>、<sub>臨</sub>  
之、<sub>已上<sub>一</sub>、次余出<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>二棟廊簾中<sub>一</sub>、着<sub>二</sub>橫敷座<sub>一</sub>、<sub>內府已下通</sub>  
又如<sub>二</sub>此<sub>一</sub>、次內府示<sub>二</sub>詩置<sub>一</sub>了之由、余答<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>講師<sub>一</sub>之由、內府  
傳<sub>二</sub>人々<sub>一</sub>召<sub>レ</sub>之、次講師皇后宮大進家實、<sub>殿上</sub>持<sub>二</sub>笏參</sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub>

上、<sub>衣冠</sub>此間、依<sub>二</sub>內府氣色<sub>一</sub>、讀師帥中納言經房卿來、  
居<sub>二</sub>文臺傍<sub>一</sub>、<sub>無<sub>二</sub>取<sub>一</sub>、<sub>召<sub>二</sub>藏人勘解由次官宗隆<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>重</sub>  
<sub>之、<sub>豫仰<sub>二</sub>講師進着<sub>一</sub>圓座<sub>一</sub>之間、內府命而令<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>置文</sub>  
<sub>臺於余前<sub>一</sub>、<sub>經房卿取<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、<sub>講師北面居直、此間、殿上人儒者</sub>  
等、上薦少々、仰<sub>二</sub>近可<sub>一</sub>參之由、光範、敦經、業實、在  
茂、光輔等、參<sub>二</sub>候西寶子<sub>一</sub>、又頭辨兼忠朝臣同召<sub>レ</sub>之、<sub>已</sub>  
上、<sub>長押<sub>二</sub>也、<sub>又殿上人上薦兩三人、進<sub>二</sub>候<sub>一</sub>讀師後、<sub>下讀師宗隆、</sub>  
也、<sub>講師講<sub>レ</sub>之、<sub>先出<sub>二</sub>七言<sub>一</sub>、如例、一篇讀畢、讀師讀<sub>二</sub>上之<sub>一</sub>、</sub>  
初一兩句也、其後光範進寄、<sub>追又召<sub>二</sub>親經、光範、敦經等<sub>一</sub>、<sub>同候<sub>二</sub>此所<sub>一</sub>、</sub>  
句也、<sub>不見<sub>二</sub>小字等<sub>一</sub>之故也、</sub>讀<sub>レ</sub>之、又一</sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub>

反讀了、此間可然之句等詠之、經房、兼光等次詠詩、依人數多、侍臣已下皆一反詠也、次第讀取詩一枚、置文臺、下讀師少々之、然而忽不、公卿ハ、皆三反、詠之也、內府授詩於經房卿、即取詩等置座前、披置內府詩一枚於文臺上、講師更自初講之、令賦給ヘルト、講之先三反詠、頌聲之後、二反詠之、其後、講師退下、讀師押卷詩、內府詩置文臺上、退復座、次更置和歌、座中傳先序者藏人右少辨親經、東取副序於笏參上、置文臺退下、文臺在余前也、次自下薦次第置之、皆如詩儀、皆悉置了、隆房、雅長、進寄召講師、即藏人右衛門權佐定經持笏、束帶參上、先是、讀師兼光卿、進寄文臺傍取歌等、召少納言賴房、殿上人令重之、但經座中候、讀師後、如宗座先講序、此間、召季經、經家、隆信等、依召參上、經進講師傍講之、又殿上人、公時、公衡等、進候讀師之後、是依召也、殿上人已下一詠、公卿三度講之、如詩、皆悉講了、置內府歌、講儀同詩、詠字、讀給ヘルト讀之、ナカメタマヘルト可讀次講師退下、次讀師卷之、置文臺傍復座、次余示氣色、內府仰兼光卿、令出朗詠、佳辰、令月句也、須兩三反之後、余示隆房卿、令出德是、又兩三反、通親助音、其後、通親卿起座退下、次余歸入、其後經房、

兼光等卿、暫留候、內府言談之後、內府歸入、兩卿退

出、

詩歌文人、公卿直衣、殿上人已下衣冠、但公卿一人直衣、仁安實家卿例云々、

亭主、內大臣、

上達部、

源中納言通親、

帥中納言經房、詩歌

新中納言兼光、和歌讀師、詩題者

二位中將良經、

新藤宰、雅長、

左兵衛督隆房、

殿上人、

和歌題者、

光範朝臣、今日被仰下之

公時朝臣、

顯家朝臣、

宗賴朝臣、

公衡朝臣、

兼忠朝臣、

忠季朝臣、

光輔朝臣、序者

定長朝臣、

親雅、

光綱、

定經、和歌讀師

親經、和歌序者

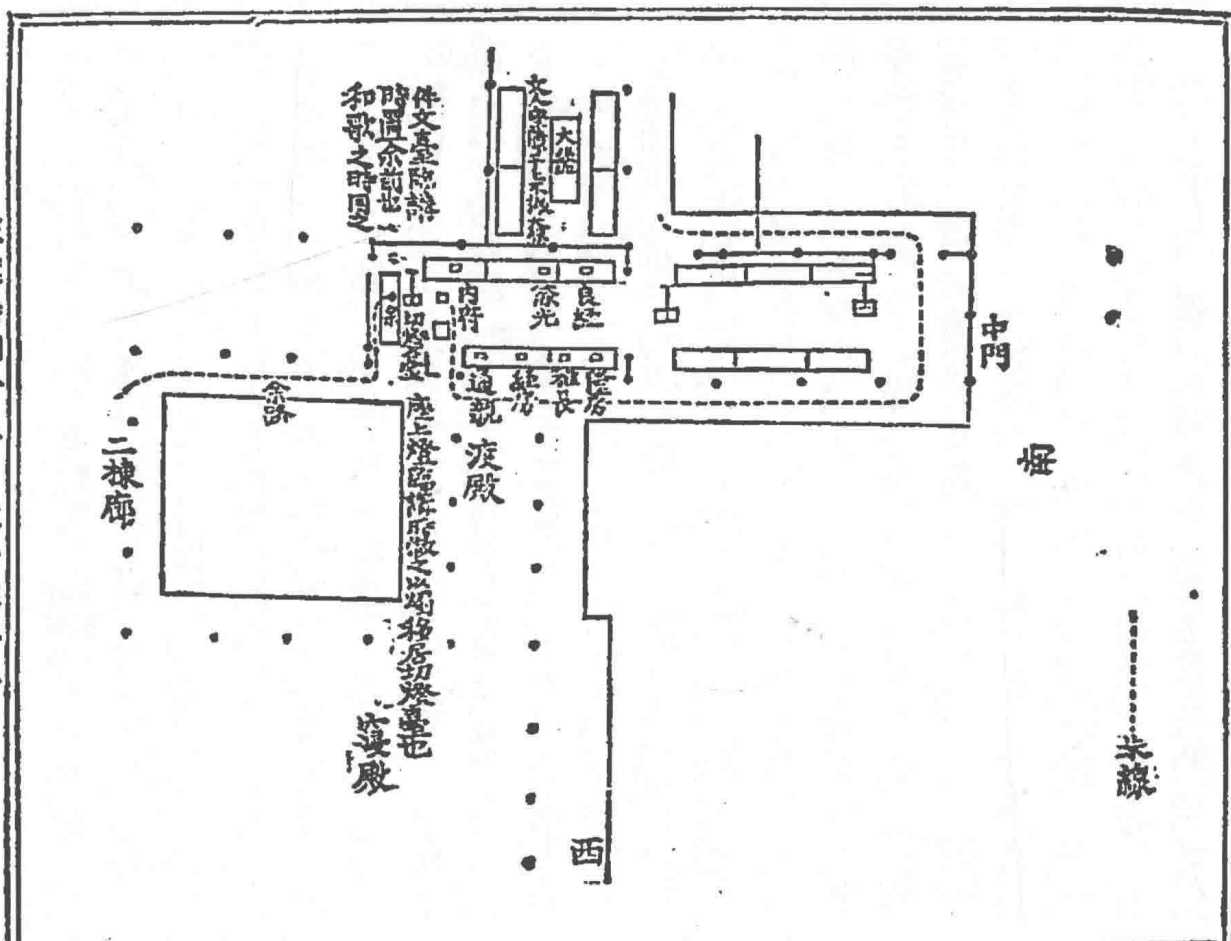
宗隆、詩下讀師

賴房、和歌下讀師

家實、講師

藤原賴定、藏人秀才

儒者、



敦經朝臣、業實朝臣、能成、光章、通業、宗業、文章生、學生、藤原孝範、藤原安成、有家朝臣、為季、已上四十三首、永久三十九首、增三四首也、和歌、內府已下、公卿皆詠之、地下、敦經朝臣、良清、今日、披講以前、定長傳、院宣、余謂、有三條々事等、蘭城



寺樂徒事、不可<sub>レ</sub>調食、備後少領事、我伊豫國造與福寺雜事、支配庄々事、我庶田庄九重塔役事、可<sub>レ</sub>辨之、於京又

仰云、鳥羽事、志之至、尤悅思食云々、又以<sub>二</sub>公友、賴朝卿所<sub>レ</sub>申之事等、折紙三枚令<sub>レ</sub>見之、無<sub>二</sub>殊事<sub>一</sub>歟、今

夜、作文以後、有<sub>二</sub>兩社行幸定、上卿源大納言、參議基家、辨兼忠、大外記賴業、史右大史公尙、雖有<sub>二</sub>上親宗久、父廣房卿服日數

過了、可<sub>レ</sub>奉此奉、仍八幡三月七日、賀茂廿二日云々、

十日、壬天晴、時々雨下、此日遠忌也、催<sub>二</sub>送佛經布施等<sub>一</sub>於光明院、女房姬君始參<sub>二</sub>詣吉田祇園等、密々儀、重

季朝臣乘<sub>レ</sub>車在<sub>レ</sub>共、又侍四人相<sub>二</sub>具<sub>一</sub>之、不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>給<sub>一</sub>社司祿、去年依<sub>二</sub>初度<sub>一</sub>給<sub>レ</sub>之也、

兼忠朝臣來仰<sub>二</sub>條々事、今參朝<sub>一</sub>仁和寺云々、傳聞、故三條宮子宮<sub>性</sub>、入滅、八條院爲<sub>レ</sub>子、生年十八、究竟法

器人云々、自<sub>二</sub>去年病惱、遂以如此、可<sub>レ</sub>惜々々、晚頭、少將公繼爲<sub>二</sub>拜賀來、依<sub>二</sub>遠忌不<sub>レ</sub>謁之、及<sub>二</sub>深更、三位

中將家房來、同稱<sub>二</sub>出行之由、不<sub>レ</sub>謁之、申次家司左京權大夫光綱、前驅五位八人、殿上人二人、公時朝臣、今朝

以<sub>二</sub>職事長俊<sub>一</sub>、彼中將乳母子也、爲<sub>レ</sub>使、送<sub>二</sub>遣表衣一領、如<sub>二</sub>女房衣

衣蓋、牛車、加<sub>二</sub>被褥、牛飼、自<sub>二</sub>是不<sub>レ</sub>給<sub>一</sub>車副一人、同

移馬二疋、置<sub>二</sub>移<sub>一</sub>、同遣之、車被<sub>レ</sub>留之、牛馬返送、皆例

也、此日、祈念殺奉幣定、上卿內大臣、參議雅長執筆云

云、召<sub>二</sub>大內記、仰<sub>一</sub>宣命趣、余免<sub>二</sub>內覽<sub>一</sub>、且是遠忌日、聊

憚存故也、雖<sub>レ</sub>須<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>、定又強非<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>憚事<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>無<sub>一</sub>日

次、令<sub>二</sub>遂行<sub>一</sub>也、右大將、藤中納言等今日着陣云々、

十一日、未<sub>二</sub>天<sub>一</sub>晴、此日、始立<sub>二</sub>春日神馬十列、須<sub>二</sub>去年

冬立<sub>一</sub>也、而近例多自<sub>二</sub>春祭<sub>一</sub>立<sub>レ</sub>之、仍今春立<sub>レ</sub>之、子細

見<sub>二</sub>去年記、依<sub>二</sub>保安三年例<sub>一</sub>行之、神馬使、多勸修寺

輩勸<sub>二</sub>仕之、而爲季、能賴等、稱<sub>二</sub>障不<sub>レ</sub>勸<sub>一</sub>仕之、長房

依<sub>二</sub>爲<sub>一</sub>內府年預、如此散所役不<sub>レ</sub>催<sub>レ</sub>之、其弟宣房未

補<sub>二</sub>家司職事、然而可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>勸之由、曾祖父爲<sub>二</sub>陸卿、未<sub>レ</sub>補<sub>一</sub>家司勸<sub>二</sub>此役<sub>一</sub>也、

仰<sub>二</sub>父卿、稱<sub>二</sub>公卿子息無<sub>レ</sub>勸<sub>一</sub>神馬使之例、辭<sub>二</sub>中之一、

雖<sub>二</sub>不當<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>謹<sub>二</sub>責之、忽依<sub>二</sub>闕如、令<sub>レ</sub>點<sub>二</sub>職事光茂、

長光入<sub>二</sub>行事上野守賴高、去年初度奉幣使、並去冬祭日本幣使等、

遣子、陪膳文章博士光輔朝臣、乘尻十人、左衛門尉宗長、右衛

兵衛尉時宗、右兵衛尉泰基、左馬允重滿、季盛、重房、右馬允遠房、信盛、

房、信遠、五人新乘尻也、一度四五人已上新乘尻被

入事、希代事云々、河原幄行事、下薦家司大炊頭中原

以網、助教也、大外記師尙子也、陰陽師頭宣憲朝臣、早日浴、已刻、乘

尻等參集、此間、御既司長房、持<sub>二</sub>參毛付<sub>一</sub>、見<sub>レ</sub>了、以<sub>二</sub>行

事賴高、賜<sub>二</sub>乘尻、々々等、着<sub>二</sub>政所饗<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>東國身、所爲其所、余着<sub>一</sub>

束帶、時給、懸待、懸待、懸座、行、事訖、午刻、出河原、降自中門內方、於門外乘車、路頭行列、

先御幣、六捧結合之、赤衣仕丁持之、其前有前掃小使、下家司騎馬相副之、

次神馬一疋、御廳舍人二人、若、禰、葵、腰巾引之、

次乘尻十人、爲、先、下、馬、二、行、

次使散位光茂、

次移馬舍人居側、

次前驅十二人、五位十人、六位二人、

次隨身上臈三人、右、左、番長賴武、依病不參、隨身裝束、袂衣垂袴、

次車、車副六人、布衣、

次下臈隨身、並檢非違使、明法博士、中原明基、

次共殿上人、

到河原帷、大炊御門末、件帷五間、子午打之、諸司儲之、行事師綱豫參候、奉仕御裝束、其儀、南、西、北三面、引

〔緋〕緋帳、敷、蒲、中央間、敷高麗端疊三枚、南北、其南

西北、立廻四尺屏風三帖、帷外三方、引廻諸司帳、

於西帳外稅駕、引入帳於帳門內、帳門、余下、車、侍、

定家獻、經、帷後並南等、自帷前着座、東面、須、南面、敷、然、

東面之由、加之、河邊視爲向其流、敷、又乘尻等、次手水陪膳光

經、前、可、渡、南、仍、東面之條、旁、有、其、理、敷、輔朝臣、職事三人、持參椀手洗手拭、紙、夾、其儀了撤

之、次神馬引、立陰陽師座北方、豫立、南、依、保安例、次、

乘尻等、引馬列、立陰陽師座北邊、余命而令、立、直、也、次、

南、余仰令、立、北、次使藤光茂取幣、立陰陽師座南方、是、又、保安例也、

次供御贖物、陪膳光輔朝臣、役供行事、報高、先例、次、

陰陽師宣憲朝臣着座、次奉仕中臣祓、讀了陪膳取

大麻持來、余取志手撫之、懸、意、返給、即撤之、次

使持來幣、余插笏取幣、向〔南〕兩段再拜、手、時、信、

吉慶之祥、淨心而明鏡也、于孫、畢召使賜幣、笏、居、次、御幣、

神馬、共出南方了、次乘尻等、頗進北方騎馬、一々

渡御前、南行、先、下、一町許南去之後、余着查、定家、

經本路、於西帳外、乘車歸家、於門外降自車、

昇自中門內方、入簾中了、及晚參內、改、着、直、衣、前、

束、依此一兩日聊御風氣御也、然而、更無別事、

仍退出了、亥刻、藏人辨親經來云、昨日義顯事參奏

院、仰旨條々所來申也、任御定、可沙汰之由仰

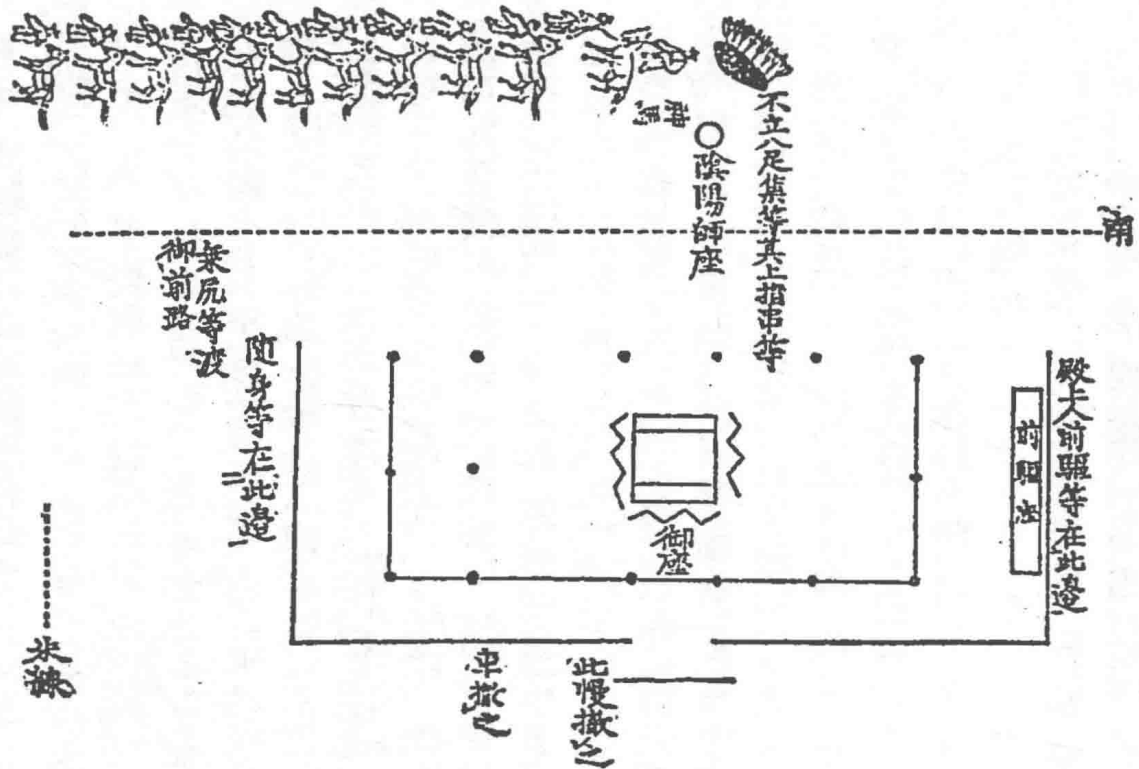
了、

此日、被行行列見、式日被行之例、近年全不見、雅長

卿知行國之間、有此勅定、可謂公人、可感可感、

今日、出行以前、以勾當業清、送舞人裝束於使公

國朝臣許、少將也、仍、大將又遣陪從裝束、使、付、裝、束、雖、



人不可知、辨左少辨親雅云々、

十二日、申〔天〕陰、頭辨兼忠來、申伊勢宮司之間事、

院宣云、偏下官可計沙汰云々、又申云、昨列見、依

史生遲參、秉燭以後儀始云々、早仰一上、件史生可

處勘事之由仰之、此次、近江國司、依料米合期沙

汰、式日被遂行、尤可被感仰下之由、可奏聞旨

仰了、

此日春日祭也、女房始獻幣帛、依昨日衰日、今日所

奉遣也、其儀、於寢殿南面有此事、陰陽師圖書頭

在宣朝臣、陪膳大藏卿宗賴朝臣、女房家司也、行事上野守賴

高、役送、初度必用藤氏也、陰陽師座、當階隱間南

庭敷也、先幣取業清、藤氏取御幣、立八足南面、次陰

陽師着座、此間、供御贖物、女房於簾中取入之、次

讀中臣祓了、宗賴朝臣降南階、跪陰陽師座東邊、

插笏取大麻歸昇、進女房、余取之、令撫女房、

撤之、此間、幣取退了、無別使、只小使下家司許也、是先例也、及晚雨下、春

日使左少將公國朝臣、辨左少辨親雅云々、

十三日、酉雨下、昨日、猶公家不快御云々、仍仰兼忠朝

臣、令行御占、藏人所、明日可有御祭之由仰了、御祈

奉行職事、親經沙汰也、先土公鬼氣御祭可被行之由

仰了、此日、有軒廊御占、神宮恠異云々、

十四日、丙戌〔天〕晴、召宗賴朝臣、仰八幡行幸供奉之

間事可申沙汰之由、即注進雜事注文、據昨日仰遣也、今日持參也、

兼忠朝臣來、申伊勢宮司事、並行幸之間事、又定經

申條々事、宗隆申、祈年殺奉幣使事、並行事辨親雅、

依信範入道事、去十二日入滅、爲服假、可仰何辨哉事、仰

可仰親經之由了、申刻着直衣、綱代車、前驅衣冠、隨身布衣、發出仕也、

參仁和寺、依閑院參嵯峨給之由、先參八條院、

且是爲弔故三條宮息仁和寺宮道性事、去十日入滅、也、今

日、日次不宜、然而、去十日聞及、即以使者申了、仍

更不忌日也、女院御南院、御堂別房、被獻、進后宮之所也、謁女房

申入子細、御悲歎無限云々、秉燭之後、院還御云々、

即以參入、以定長申入、依召參御前、理趣三昧御

聽聞、御壺禰中也、暫候松容、粗奏雜事、々々未終退

出、條々事仰付定長了、歸路之次參內、昨日無爲御

云々、爲悅不少、依多武峯恠異、今日占之、陰陽師

在宣參上、歸家見占形、其趣殊不快、內府其年當、十

六七日物忌也、可慎云々、

十五日、兼忠朝臣來、覽御占形等、仰可奏之由、

又申條々事、即參院、及晚歸來、宮司事、盛家可有

改任哉否、可被行御占云々、賴業參上、授左傳

第廿三卷於內府、宗隆申云、春日使闕如了、辨又親經

申故障云々、仰云、來廿一日可宜、內府十六七日堅

固物忌也、仍旁明日不可叶、但當日可改勘日時

也、於辨者、猶可催親經、申今日父入道佛事之由、

延引者、盡奉行哉者、此日、理趣三昧結願、今夜幸

最勝光院修二月、即可御六條殿、明日可有烏羽殿

御渡云々、

十六日、戊子天陰、入夜雨下、多武峯物忌也、兼忠來門

外云、今日、欲行宮司御卜、而相當日子如何、其

後至廿日、無日次、廿日當殿下御衰日、如何、余云、

子日有憚雖有例、猶不打任事歟、廿日余衰日、全

不可憚者、宗隆來申祈年殺奉幣、春日使事、猶可

譴責之由仰之、親經來申御書所別當事、可相計之

由有院宣云々、余申云、光範所申有其謂、光輔所

申不當歟、上臈敦經爲尙腹、下臈爭補別當哉者、

又云、義顯〔之〕事間、官有申旨云々、又御祈事、於

余家、可召仰諸宗長史之由、有院宣云々、余云、

猶於院可被仰下之由、可奏者、又持來御祈用途

注文、依物忌、明日爲披見仰置之、又定經來申條



條事、此日、二位大納言少將、叙四品之後、爲拜賀來、依物忌、示其由、仍不入門內、歸了、此日、院鳥羽北殿御渡也、余內府等、依多武峯物忌、不參仕也、

十七日、丑天陰、朝間小雨、定經來云、記錄所辨事、延久、保元、共藏人辨爲執權、被仰親經可宜者、早可仰下之由仰之、昨今物忌也、

十八日、寅天晴、召典藥頭定成、示合療治之間事、藏人辨親經來申條々事、申刻許、經房卿來、余着烏帽直衣、出賓筵、謁之、談雜事、移刻、日沒之後

退歸了、宗隆申祈年穀奉幣使事、重季領狀春日使云々、此日、女房內府女房密々參詣廣隆寺、侍等在共、十九日、卯天晴、依遠忌、着烏帽直衣、網代車、前驅衣冠直衣、在車後、內府依神事不參向九條堂、導師慶智僧都先參淨光明

院之間、暫以遲々、申刻、導師參入之後、始講筵、奉行家司右馬權頭兼親、無堂童子、年來、故女院御時、被行儀如此、不改其例也、阿彌陀三尊畫像、法華經十部、請僧十口、加導、說法、

例時共了、引布施、導師被物一重、二位中將取之、絹裏一、季經布施取各衣冠、而家司男共朝臣取之、自余僧各一裏、但僧綱絹裏如例兩三、着布衣、不可然、其後行舍利講、是自御故殿在世、每月不闕事也、故院相續而已行之給、而壽永以

後、諸國路塞、庄園不進年貢、仍此七八年來斷絕、故院殊欲行此事、然而、天下彌逆亂、遂不復舊規、而御遷化、其後至于去年、猶不能興行、今年猶雖不合同期、枉以行之歟、每月所被修之佛事、四々度也、於五日彌勒講者、依爲故院御月忌、自崩御之刻、每月行之於自余三講、十五日阿彌陀講、十九日舍利講、廿日同講、無力于勤行、而今月同皆所始修也、舍利講、有百種供養、是又故院御時例也、問答了、諸師慶智、問者靜嚴律師、余飯治泉、女房同密々所來也、同以飯亭、今日在堂之間、親經來傳院宣云、女房丹後法皇愛妾、故樂房妻、龍無双、不奈、可叙三品之由、所思食也、早可被宣下、且又何樣可候哉者、親經密語云、重不及矣、只早宣下之由、定長所申也云云、申云、早可被宣下、不能左右者、余案之先年、女房高倉是又法皇愛物也、其品人不知、最下劣者歟、叙三品、然者、丹後又以同前歟、但彼物、皇女齋宮卜定之時令叙歟、今無所募、彌以爲勝事歟、莫言々々、今日論義、

一帖、新成正覺佛、可有開跡顯本二哉、一帖、法華以前經、明二乘成佛二哉、

余各口入之、頗有興、但依可及深夜一略之、

今日欲<sub>二</sub>出行<sub>一</sub>之間、頭中將實教朝臣來、申<sub>二</sub>臨時祭使  
舞人散狀、並用途之間事、

廿日、<sub>辰</sub>天陰、時々小雨、親經來云、丹州三品事、昨日  
被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>了、上卿兼光卿、<sub>名字榮子</sub>又申<sub>二</sub>神宮上卿之

間事、<sub>右大將願狀、欲<sub>二</sub>遣文書<sub>一</sub>之處、本上</sub>又宗隆來申<sub>二</sub>祈年穀

奉幣之間事、使王依<sub>二</sub>料田<sub>一</sub>、<sub>近江</sub>訴、申、不可<sub>二</sub>勤仕<sub>一</sub>之

由<sub>二</sub>云々、奉幣每度有<sub>二</sub>此訴、返々奇怪、有<sub>二</sub>訴者兼日可

申也、而寄<sub>二</sub>事於此詔、每度欲<sub>二</sub>闕<sub>一</sub>公事、慥可<sub>二</sub>釣出<sub>一</sub>

之由仰<sub>二</sub>之、但於<sub>二</sub>訴訟<sub>一</sub>者、有<sub>二</sub>理者、可有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之由

仰了、此次、仰<sub>二</sub>下宗隆事<sub>一</sub>三ヶ事、

一者、諸司之中、有<sub>二</sub>納<sub>一</sub>寶物之所々、就<sub>二</sub>中、內藏寮

有<sub>二</sub>應神天皇御禮服<sub>一</sub>云々、近代長官已下如此

事、慥不<sub>二</sub>尋行<sub>一</sub>、或紛失、或朽損、甚不便云々、寮

官、藏人、相共加<sub>二</sub>檢知<sub>一</sub>、注<sub>二</sub>目錄<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>分附<sub>一</sub>歟、

二者、公家御物、在<sub>二</sub>蘭林坊、桂芳坊等<sub>一</sub>、而數代之間、

不<sub>二</sub>注<sub>一</sub>目錄、云<sub>二</sub>御書、云<sub>二</sub>御物<sub>一</sub>、併以紛失、太不

便、早仰<sub>二</sub>納殿藏人出納等<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>令<sub>一</sub>注<sub>二</sub>進御物目

錄、於<sub>二</sub>御書者催<sub>一</sub>御書所衆并儒士等、可<sub>二</sub>令<sub>一</sub>取<sub>二</sub>

目錄、高倉院御時、兼光卿奉行、令<sub>二</sub>注<sub>一</sub>目錄云

云、先尋<sub>二</sub>取彼目錄<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>勘合<sub>一</sub>歟、

三者、御厨子所事、近年、如<sub>二</sub>無云々<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>別當及預  
等<sub>一</sub>、殊可<sub>二</sub>申沙汰<sub>一</sub>、供御所訴事、殊可<sub>二</sub>有<sub>一</sub>成敗、

件三ヶ條、早奏<sub>二</sub>事由<sub>一</sub>、早速可<sub>二</sub>申沙汰<sub>一</sub>、

入<sub>二</sub>夜、頭辨兼忠朝臣、持<sub>二</sub>來宮司卜形<sub>一</sub>、而賊事書樣有

失、仍書改可<sub>二</sub>覆推<sub>一</sub>之由仰<sub>二</sub>之、上卿右大將被<sub>二</sub>申<sub>一</sub>可

然之由、即重<sub>二</sub>卜<sub>一</sub>之持來、不可<sub>二</sub>改任<sub>一</sub>云々、仍當時、

官務權司<sub>去年季蒙<sub>二</sub>權司宣旨<sub>一</sub></sub>、代官歟、將小司歟、重可<sub>二</sub>有<sub>一</sub>御卜

歟、仰<sub>二</sub>合上卿<sub>一</sub>可<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>之由仰了、

廿一日、<sub>巳</sub>自<sub>二</sub>夜甚雨、午刻止、但天猶陰、北風頻扇、此

日、祈年穀奉幣也、辰刻、行事辨親經申<sub>二</sub>幣物事、伊勢

幣催具了、諸社幣二百疋許不足、所<sub>二</sub>召<sub>一</sub>置藏人方之成

功物、少々欲<sub>二</sub>借渡<sub>一</sub>云々、仰云、皆悉被<sub>二</sub>渡<sub>一</sub>行幸用途

之由所<sub>二</sub>聞也、但及<sub>二</sub>闕如<sub>一</sub>者、雖<sub>二</sub>在<sub>一</sub>官行事所、何不

借渡<sub>二</sub>哉、依<sub>二</sub>爲<sub>一</sub>最少事也者、已一點、余及內府、共修

祓、先<sub>二</sub>是浴了<sub>一</sub>、<sub>余雖不可<sub>二</sub>必修<sub>一</sub>祓、昨日、不慮</sub>陰陽師在

宣、陪膳家司不<sub>二</sub>候<sub>一</sub>、仍共殿上人少納言賴房勸<sub>二</sub>仕之<sub>一</sub>、

余先參內、<sub>直衣、前驅衣冠、隨身布衣也、</sub>相續內府<sub>束帶、時繪劔、</sub>參陣、

依<sub>二</sub>陰陽師遲參、暫而勘<sub>一</sub>奏日時、<sub>先所<sub>二</sub>勸中<sub>一</sub>十六日也、而彼</sub>

物忌<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>、今日<sub>依<sub>二</sub>春日使不參<sub>一</sub>、並內府</sub>所<sub>二</sub>改勘<sub>一</sub>也、見了返給了、<sub>行事辨親經</sub>所<sub>二</sub>持來<sub>一</sub>也、

草奏、依<sub>二</sub>余候<sub>一</sub>御前、直進<sub>二</sub>弓場殿<sub>一</sub>、內覽奏聞、所<sub>二</sub>相

兼也、是雖略儀、有便宜之說也、幼主之時、雖不

可有奏聞之儀、於宣命者、猶別可奏之由、有確

執之人々一歟、見了返給、諸社辭別載天變事、其外、伊勢有條辭別、又賀茂載去年來幣上下相違、草清書共宗隆所持來也、

事、良久、奏清書、又見了返給、又不覺功(効力)主、只余獨所見也、抑春日使重季、四位也、而書從五位上、仍仰可改之由、但重不可奏之由(仰之)、伊勢宣命書、緣紙上橫置之、石清水以下直置之、賀茂書、紅

梅紙、皆是例事也、又申使王申御馬之由、仰聞食之

由、即於弓場殿返給上卿、々々直召內記返給、

仰重季位事可直之由一歟、上卿昇自小板敷、經南

殿御後、出自右衛門陣、參神祇官了、余暨可候、

然而、聊依有可見沙汰事、退出了、今日、依御物

忌、於御殿可有御拜、上東對坤角間、南面格子一間、垂御面也、件間東邊、仰實教宗隆等可一行御拜之間事之立御屏風一帖、

由了、御總角御裝束等料、經家朝臣遣召了、今日於

內裏、實教朝臣申臨時舞人事、又以同朝臣、賀茂祭

使已下事、可申沙汰之由、仰宗隆了、

廿二日、甲午天晴、親經來申御書所作文事、文人合點

給也、但代々文人可注進之由仰了、此日、二位中將

若陣、宗賴朝臣覽日時、在宣助之、今日申刻、先覽余、次覽中

將、名簿、刻限參陣、前駟六人、五位殿上、人二人、無申文并吉

書、着陣、即退出例也、大外記賴業、申行幸供奉之文

官散狀、此日、三位中將家房、同以着陣者、此夜、儒士

參御書所、出作文題、親經持來、見了返給、

廿三日、乙未陰晴不定、親經持來代々作文、文人召前

評定給、一定之、合點了、殿上人十三人、此中儒士者二人、儒士

七人、文章生一人、衆三人也、又申條々事、宗隆來申

條々事、

廿四日、丙申天晴、九條堂修二月也、仍秉燭着直衣、先

參院、依召參御前、聽聞長講、數刻、被仰雜事、其

後、向九條、內府、二位中將等、先是參內、即豫參此

堂、相待余也、行事家司文章博士光輔朝臣、職事信

光、內府、中將、在座、余在簾中、深更事了歸冷泉、

此日、親經來申條々事、

廿五日、丁酉天晴、此日、家尊勝陀羅尼也、以凝殿南庇

爲道場、垂母屋簾懸佛、十一面觀音、催家中男女令進

陀羅尼、定例也、行事下野守季廣、五位家司、代々奉行此

點之、先例不論家司職、儲僧前講演以前(着)之、導師

事、隨便點行事也、儲僧前講演以前(着)之、導師

行曉法印、官、又門徒僧等、不可動、仕殿下御所之由、來徒成起

請云々、然而、僧綱等不承引此事、余試請、園城僧徒、隨請告

來、行曉即其內也、此事、全非諸寺、前執印之方大衆等結構云々、

請僧十口、此中、僧綱四口、午刻事始、中納言定能、經房、兼光、



事訖早出、兼光頗遲參、始終祇候、申刻事訖、賜布施、導師被物一重、絹袋一、請僧各裹物一、僧綱絹袋此  
外、紙袋各一、導師已下皆同、藏人所已下、相具陀羅尼、遂、導師  
被物、季經朝臣取之、兼光卿可取也、而行事不覺也、  
存可取之由云々、而物忿寄季經也、殿上人家司  
職事等、取布施、宗隆來申條々事、侍從信清可任  
少將事、泰通卿勅授事、已上院申、申所存了、  
廿六日、戊戌天晴、物忌也、山法師被來、限百日參  
範日吉社、仍今日可被歸山也、又觀性法橋來、談  
如法經之問事、今日、宗隆來仰明日御書所作文々人  
事、爲長、追召親經送孝文本紀一卷、是自院被獻也、  
而親經依穢不出仕、自門外、所進也云々、仍召宗  
隆賜之、明日、光範朝臣可候御讀之故也、  
廿七日、己亥天陰、入夜甚雨、此日、始有御書所作文事、  
余及內府依堅固物忌不參、二位中將參入、密々伺  
詩席云々、始以南殿乾廊南面、欲用其所、去年用輦臺之所也、  
而依甚雨、々脚不止之間、改用南殿良子午廊、件  
所、御所甚近々、雖不可然、高倉院御時、於件所被  
行此儀云々、仍所用也、主上密々渡御、是先例也、  
題云、□□□□□□、光範朝臣出之、件人、依先帝學

士、漏侍讀之選、雖望申尙復、依院宣、被召光輔  
朝臣了、仍頗可有其哀憐、因茲、兼光卿昇納言  
之替、被補御書所別當、先例必以侍讀補之、仍先  
被補侍讀、今日、即奉授孝文本紀也、  
文人、

殿上人、

式部大輔光範朝臣、

左中將公時朝臣、依灸治不參、

大藏卿宗賴朝臣、

左中將公衡朝臣、

頭左中辨兼忠朝臣、

文章博士光輔朝臣、

權右中辨定長朝臣、供奉院日吉御幸、仍不參、

藏人右衛門權佐定經、

藏人右少辨親經、闕五條不具穢、仍不參、

藏人勘解由次官宗隆、

右少將公繼、

皇(太)后宮權大進家實、

藏人藤原基定、秀才、

已上十三人、檢先例、多七八九人、至而多十四



人、大治嘉應十三人、追彼例也、非成業殿上人、

雖清撰無私、依儒士侍臣繁多、侍臣五人、未人數

猶多、此中、定經雖無日新之聞、先例為職事

之人、雖非拔群、必被召之、仍入之、兼宗、忠

季等朝臣、此兩三年、聊雖嗜風月之間、習學日

淺、人不許之、仍不召之、

儒者、

散位敦經朝臣、

大學頭在茂朝臣、不參稱病、其實督(○南按怨歎、在高不、應(恩)喚云々、

文章博士業實朝臣、

(江家)散位維房、

大內記長守、

山城守通業、

散位宗業、

大舍人助官為長、

通業雖無才漢之聞、詩牀勝等倫、又高倉院

御時、數座侍公宴、頗有文章之名譽、仍為

綱、傍輩召之、宗業、以才漢立身、當時

為名譽之士、仍抽召之、維房頗辨黑白、又江

家之餘流只一人也、仍賞其家召之、在高、

在茂賴範、光範各雖致惡望、依年少才不聞、

不召之、

自余儒、不足論是非、

文章生、

藤原孝範、名譽士也、

學生、御書所衆也、

、、、、

、、、、

、、、、

先例、連句不過五韻云々、而天永以往、多有廿

餘韵、余可追舊例之山、豫以仰宗隆、仍連句有

廿韵云々、今度、文人撰定無私、而世間人還誹謗

潔白之清選云々、勿論之世也、每事無益々々、事

訖、二位中將懷詩歸來、語云、講師維房、侍臣儒士、

相分着奧端、是近例云々、

被仰昇殿、左馬頭藤高能、能保兵部權大輔保能等

也、

廿八日、庚子天晴、召定經、仰來月一日直物事可申沙

汰之由、本親經奉行也、而依穢氣改仰之、此日、始

被置記錄所、以閑院亭中門南內侍所南廊為其

所、執權辨定長也、親經依觸、穢不出仕、寄人十二人參入、奉行職事定經也、仰詞二通、先內覽之、

一通、諸司諸國并諸人訴訟、及庄園券契、於記錄所、宜令勘決理非、

一通、年中式日公事用途、宜令記錄所勘申式數、

廿九日、丑天晴、此日、臨時祭定也、酉刻、先參院以定

長入見參、依召參御前、小時退出、參內、於直應、

定臨時祭事、頭中將實教朝臣執筆、件人、一切不知、

漢字、而勤此役如何、兼使人書定文懷中之、臨

期只如書取替之、舞人摺符各一通如常、以去年

例文、副覽之、事訖退出、八幡行幸、猶御物詣之間、於

事無便宜、四月可宜之由奏之、眼前所奏也、猶三月可宜

之由有仰、

卅日、壬寅陰晴不定、早旦、招權辨定長朝臣、奏行幸猶

可被延引之狀、此事、先去年行幸延引之時、依代

代吉例、圓融院始八幡行幸以後、依吉例、七代皆用三月、仍大略如式月、今春三月、可被

遂行之由、被定仰了、其三月可有御熊野詣之由

風聞、彼時奏院云、御物詣之間、行幸頗無其謂、可

被縮二月、歟、可延四月、歟、可從御定者、

仰云、吉例有限、全不可依、朕物詣、猶必可用、

三月者、勅定及再三、仍被勘日時了、而云、

供奉諸司云、諸國召物、全以不叶、奉行催促、大

略事欲闕如、但於此條者、多被召付成功了、又

供奉人之條、強不可及、闕息歟、然而、猶法皇御斗

戴之間、初度晴行幸、聊無其謂之上、法皇定有御見

物之御志歟、又世人、粗法皇依不思食禁中事、

有中間御物詣之由、傾奇云々、仍旁廻思慮、重所

奏請也、天下之謳歌、去年、定長於院所語也、余奏院狀云、依數代之佳

例、并再三之勅定、三月雖可被遂、猶適行幸被撰

用御物詣之間、世人定有所傾歟、隨又以有御見

物、有二人勇、每事定冷然歟、加之、諸司、諸國、彌爲對

桿之基、旁還御之後可宜、檢先例之處、四月初度八

幡行幸、即天仁、嘉應也、共可謂最吉例、不可及

異議歟者、日次事、內々召在宣朝臣、問之、十七日戌、于二十日辛卯、共吉云々、此旨同舍、定長、又召大

外記賴業、師尙等、日次事有沙汰、申剋、定長歸來、仰

云、須被延縮御幸也、依朕物詣、行幸延息之條、甚

無謂、然而、又所奏請非無理致、左右只可隨計

申者、仍可問四月日次之山、仰奉行職事定經了、

兼又賀茂行幸事、天仁、嘉應共、四月八幡、八月賀茂

也、然而、他例多用四月、又爲無人煩、猶四月可被

云、經房歸參畢、

三月

一日、癸〔天〕陰、及晚雨下、入夜殊甚、此日、余及內

府始出御燈、又有直物事、辰始出河原、先有小浴

事、其後着衣冠、入車、駕三毛車、車副布衣六人也、又車不

云、隨身楊衣垂袴如恒、前驅十二人、五位十人布袴、六

四位前、檢非違使右尉中原明基、明法傳着布衣冠、在車

後、無扈從殿上人、又故實也、於大炊御門末修禊、

諸司大藏省也、儲五間幄、三方引廻班、引入車於幄中、

如兼稅駕、幄短車引入、仍下家司出納等參進、差揚幄

柱、撤中央柱、依間引入車、訖、置頸木於榻、東、幄東去

五六丈、儲陰陽師座、東面、其前去七八丈許、據石、先供手

水、陪膳彈正大弼資泰朝臣、先盥手洗於踏板、先拂

次持來椀、資泰傳取、余盥漱、以手洗口、訖拭手、木

夾紙一枚、請大夫持來、陪、贈傳進件紙、入手洗、已上、前驅諸大夫等役之、又資

泰乍立轅外役之、手水了撤手洗、次供御贖物、

一前、同置前踏板、次陰陽師圖書頭賀茂在宣朝臣若座、

也、東面、祓了、余解三々繩、入資泰朝臣進陰陽師座邊、

取大麻持來、余取志手撫了返給、取具贖物撤了、

遂兩社行幸之由有議、仍問日次之處、十七日  
有八幡行幸者、廿日可有賀茂行幸、若廿日有八  
幡者、廿三日、廿五日、共雖爲吉日、廿三日入五月  
節、仍難被用之由、陰陽師等所申也、而朱雀院、始  
行幸賀茂社之例、即四月廿九日、五月節也、彼已我  
朝神社行幸之最初也、又當社例也、加之、彼即報賽  
東西賊亂也、今又平氏并義仲等退散之後、初度行幸  
也、旁叶彼吉例、加之、於社初度行幸、用五九月  
之例其多、仍於賀茂者、八幡爲當今之例、不可  
擇五月節之由、有議定也、今日、未廻、經房卿爲  
院御使來、余謁之、經房云、依召參院、以女房丹後  
局今三位也、被仰云、前攝政依申可出仕之由、被觸  
仰賴朝卿、申可然之由、其後、自然于今未被出  
仕、而申可賜兵仗之由、所被申也、恩許之條如  
何、先可計奏者、經房申云、此事、私不能是非、可  
被仰攝政者、勅定云、〔不〕可然、汝早行向可  
仰聞者、仍所參入也云々、申云、先日出仕沙汰之  
時、以定長被仰合尤可然之由言上了、又今同前  
也、於兵仗〔之〕條者、左右只在御定、全不可  
申、前攝錄天承例也、何事之有哉、早可被仰下云

陰陽師又退下了、先是、隨身番長清景、乘馬渡河東岸、更下馬、禁制雜人、是故、事訖、乘馬歸來也、次發出車、如元立、懸牛羶、直參院、以實教朝臣入見參、以定長被仰云、依念誦之間不謁之、今夜、任人事等、大略申定畢、已刻歸家、先是、內府出河原、依陪膳遲參解息云々、陪膳文章博士衆於二條末一修禊、前近人晚頭、余直內府、共以參內、參也依執筆遲參、亥刻有直物事、先是、有勅書、前攝政賜兵仗一事也、內府行之、先覽草、次覽清書、欲書當日之處、大內記元自書之、余以職事問大內記、申云、近例、勅書皆如此云々、此事如何、但延長、天曆之比、依公式、令無御書之由見舊記、據彼例者、強非巨難、仍隨宜不改直之、大內記若思涉攝政時勅書例、歟、兵仗、左右近府生各一人、近衛各四人、在此中、抑避攝錄、賜兵仗、何年例哉、元承、知足院殿更蒙內覽宣旨、被賜兵仗也、不似今例、歟、定有深故、歟、可恐々々、但後代之有職其思如何、是傾奇、莫言々々、執筆雅長卿參入之後、定經持來直物勘文、直去年秋、今年春等也余見了返給、其後、竊以退出、依風氣不快也、但仰定經云、余如祇候、二天可有也、除

目內覽可用職事也、退出之由、不可披露者、爲省事煩、仰此之於內裏、宗隆云、東寺灌頂、阿闍梨兼由、依夜深風烈也、信、辭退之所、仁和寺宮被舉、申可宣下之由、先日被仰下、自院被仰也今日、便欲宣下、御燈齋以前如何、余云、可問例於官、廣房申云、於陣宣下、先例不覺悟、只以口宣書、被下上卿許、不可有其難歟者、余云、御燈非重齋之由、今日宣下有何事哉、但於陣仰下無例者、如官申、致其沙汰可宣歟者、曉天、內府歸來、今日執筆先禮多端云々、今日、親經來、意見之間事、明日可參奏鳥羽之由、召仰子細了、

二日、辰、甲雨下、入夜宗隆來、申賀茂祭典侍事、又法成寺御念佛事、中御門大納言領狀云々、右大將爲彼寺上卿、而神事之代也亥刻、大原上人房來、數刻談法文事、並後世勝因事、末代難有之上人也、可貴々々、

三日、巳天晴、此日、平等院一切經會也、余未參詣彼寺、仍不向法會席、差遣開封家司左京權大夫光綱、並樂屋行事職事二人、仲盛、宗輔任例令行也、已刻、藏人辨親經來申條々事、又申云、意見之間事、昨日參鳥羽一條々々奏聞云々、余召簾前問之、申云、先御教



書狀尤神妙也、又可被召人々御覽了、公卿外、尤可被召官外記、於諸道者不可然云々、又佛法興隆事、被問諸宗之條尤可然、被仰御祈事之次可被仰下也云々、又遁世人々事、同可被問之、但其人事可相計云々、條々任院宣可致沙汰之由仰了、又今日廢務也、明日各可遣御教書、於大臣亭者、自可向之由仰了、申刻、前源中納言來、余謁之、

此日公家御燈也、余齋也、強不密歟、又上巳之祓如恒、

四日、兩天晴、召宗隆仰祭之間事、又召定經、仰條々事、賴業參入、申臨時際用途事、此日可進意見之由、親經所々遣御教書、其狀如此、此狀、一昨日有不叶時議之詞等、又勿狀甚多、仍進仰宣所、今改正也、此狀尤神妙歟、

被院宣一冊、早雖遁帝位、猶諮詢朝政、天下泰平、靡日不思、而七八年來、干戈屢起、人皆苦軍旅、民都忘農桑、因茲、諸國、諸司、泥課役、神事佛事多闕乏、誠知、諸神鎮國之誓雖不疎、諸佛利生之願雖無邊、祭禮疎而答貺暫遲、施供闕而効驗猶空、衰亂之漸、賊而斯由、何況、連々變異、天譴荐

示、去々年秋、地大震動、每願畏途之區分、彌思政道之克治、去今兩年、四海雖似無事、萬機未遑修德、化俗之道、經國之術、不能獨治、宜憑衆知、堯鼓納諫、舜旌進善、豈其不仰慕哉、我朝弘仁、貞觀之聖代、延喜、天曆之明時、又據羣明久致雍熙、古何爲淳、今何爲薄、只依政教之得失、實有國家之理亂者也、在官奉公之人、盡盡諫諍之情、宜廻嘉謨、具進諫言、兼又當時政務之中、若有不利於國者、同勒條貫、以備聽覽、縱雖可觸犯、勿有所隱、謀國之安、不在茲乎者、院宣如此、仍言上如件

三月四日

右少辨親經奉、

遣遁世人之許、又如此、

被院宣一冊云々、國家之理亂已上無相違夫遁世修道之人、雖不可預時議、佛法者依王法而紹隆、王法依佛法而長久、若歎王法之衰微者、即慕佛法之繁昌也、功德真實不在茲乎、宜以念佛轉經之餘暇、具進有犯無隱之諫言、兼又當時政務之中、若有不利於國者、同勒條貫、以修聽覽者、

院宣如此、仍言上如件、  
被召意見人々、

左大臣、

內大臣、辭而不申之、

中御門大納言、宗家、

新大納言、實家、

按察使、朝方、依院宣入之、奇異々々、

帥中納言、經房、

新藤宰相、雅長、

大外記清原賴業、

大夫史小槻廣房、已上三人、令勅中聖代德政之例、其次可載今案旨趣也、

前相國入道二人、忠雅、師長、

入道納言二人、資長、長方、

入道式部大輔、俊經、

此日、公家御祈、爲神祇權少副大中臣基親沙汰、於太神宮被行臨時祭、先例無神齋之儀云々、余又同修臨時祭、同人沙汰也、依爲別願、自昨日神齋、昨今修祓、今日、降庭遙拜、着衣冠取笏、五日、天晴、內府向九條堂、其歸路之便參內云々、今日、親經向左大臣、右大將、仁和寺宮、花山相國等

亭、仰意見之間事云々、

六日、戊申天晴、此日、於內裏直廡、召諸宗僧侶、被

仰祈之間事、奉行職事親經也、僧侶在公卿休所、

以親經仰子細、其後、召公顯澄憲於前仰子細、

又法文雜談、先余參內以前、全玄澄賢兩僧正來余亭、

各以謁之、參入僧綱等、

天台座主全玄、

三井寺長吏公顯、

醍醐座主勝賢、

法印澄憲、山別被召加也、

此外、東寺長者法務俊證、雖有召、稱病不

被仰事等、

諸宗御祈事、

御修法事、

懺悔法事、

佛法興隆事、

各召仰了、余退出、

定經、宗隆等來、申條々事、又奏院、歸來示御返事

趣、

七日、自夜雨降、靜賢來、今日念誦、內府自今日

又始湯治、五木、

八日、庚戌天晴、余自今日又始湯治、

九日、辛巳別當僧正被示云、東金堂衆等、不觸衆徒僧

綱等、又不申長吏、自由奪取山田寺仁和寺宮領、在大和國、金銅

丈六樂師三尊像、欲奉安件東金堂云々、只今承

及此由、加制止之處、已奉引出途中云々、自由所

行、無申限云々、件堂家直觸申彼宮之由云々者、

可停止之由、早々重可被下知旨、返答了、又可

尋申宮之由仰了、

十日、壬子天晴、以右馬權頭兼親爲使、吊仁和寺法

親王、其第子、故三條宮子、去月逝去、其後連又申山田寺佛

事、

此日、親經來、申諸宗御祈之間事、賜諸宗御教書案、

所持來也、大途神妙、少々可直之由仰了、

十一日、癸丑天晴、頭中將實教來、申臨時祭舞人闕如、

并人長之間事、舞人定家領狀云、

親經來申御祈意見之間事、又申季御讀經上卿事、宗

隆申祭之間事、長經朝臣來申典侍領狀之由、仁和寺

宮、以長退被示山田寺佛事、東金堂衆等所爲、不

可說々々事也、

十二日、甲寅天晴、定經來申條々事、余仰寶劍之間事、

返給先日所進之人々申狀、又加左少辨親雅來、申季御讀

給狀申狀、昨日廣房所進也、經事等、日來依輕服、不出此日、能保朝臣申云、所召取

之義顯縁者等、非可免、又武士等之許、無其期、

非可召置、內舍人朝定來十四日下午向坂東、付彼下

道宜歟如何者、返答云、此條、日來所申也、度々、余示能保也

尤可被遣賴朝卿許也、但當時、法皇不御座、雖

非可有御制止之事、御幸之際、下遣之條如何、

若可待還御被申事由歟、且可被示合帥卿

者、

十三日、乙卯天晴、召右番長秦清景仰、臨時祭人長之

由、○南漢按之勤仕之由了、又賜紅打衣狩袴下袴

等了、依申請也、頭中將實教來、清景可參之由仰

了、定經召具陰陽師等、宣憲、在宣、參來、內々問寶劍

在所占事、先日忠親卿有申旨、仍所尋問也、各申

未習傳之由、但以今案可占申者、蓋占申哉之

由所申也、

十四日、丙辰申刻、雷鳴雹降、定是變異歟、此日、依御方

違、自開院幸大炊御門亭、余及內府、依湯治之間

不參、秉燭之後、頭辨兼忠朝臣來云、御參如何、事具了

者、可申行出御歟如何、答不可參之由了、此

日、又被勘<sub>レ</sub>稻荷社遷宮日時、自<sub>レ</sub>事始<sub>レ</sub>上卿帥中納言經房參<sub>二</sub>仗座<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>勘<sub>二</sub>申之<sub>一</sub>、左少辨親雅爲<sub>二</sub>內覽<sub>一</sub>持來、見了返給、又有<sub>二</sub>位記請印<sub>一</sub>、納言云々、上卿源中內記爲<sub>二</sub>內覽<sub>一</sub>來同見了返給、午刻、藏人辨親經來云、遣<sub>二</sub>諸寺<sub>一</sub>之御教書案如此、又今日依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>吉吉<sub>一</sub>、始可<sub>レ</sub>著<sub>二</sub>記錄所<sub>一</sub>者、又向<sub>二</sub>仁和寺宮<sub>一</sub>、并右府許、昨日令<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>先日仰旨<sub>一</sub>了云云、兩人各有<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>申<sub>一</sub>、余示<sub>二</sub>其返事<sub>一</sub>也今日、雷電之間、以<sub>二</sub>季經朝臣<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>使、令<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>禁中<sub>一</sub>、余依<sub>二</sub>湯治<sub>一</sub>不參、事々不審之由也、即歸來、示<sub>二</sub>勅報<sub>一</sub>、

十五日、丁天晴、頭中將實教來、申<sub>二</sub>臨時祭公卿殿上人散狀<sub>一</sub>、右大將已下、公卿七人云々、二位中將、可<sub>レ</sub>參之由仰了、又重孟、公時、公衡等朝臣、可<sub>レ</sub>勤仕云々、此次余仰云、二位大納言息少將兼良者、故大閤禪門之孫也、功臣之後胤、外家猶以有<sub>二</sub>優恕<sub>一</sub>、況正孫哉、雖<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>彼大納言息<sub>一</sub>、強不可<sub>レ</sub>混<sub>二</sub>凡俗<sub>一</sub>、然而、殊有<sub>二</sub>所思<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>猶子<sub>一</sub>、愛近代之習、殿上人所役等、云<sub>二</sub>四位役<sub>一</sub>、云<sub>二</sub>五位役<sub>一</sub>、各稱<sub>二</sub>華族<sub>一</sub>、一切不可<sub>レ</sub>勤<sub>二</sub>仕之<sub>一</sub>、太以奇恠、爲<sub>レ</sub>勵<sub>二</sub>後輩<sub>一</sub>、殿上人役等、不可<sub>レ</sub>嫌、片手可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>勤仕<sub>一</sub>之由、所<sub>レ</sub>仰合<sub>レ</sub>也、且明日重孟役、可<sub>レ</sub>勤之由雖<sub>レ</sub>存已有<sub>二</sub>領狀<sub>一</sub>者、又不能<sub>二</sub>懇望<sub>一</sub>、自今以後、可<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>者、

定經召<sub>二</sub>具神祇大輔卜部兼友<sub>一</sub>參來、奉<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>寶劔<sub>一</sub>之間御卜事、爲<sub>二</sub>尋問<sub>一</sub>也、六月以前可<sub>レ</sub>出來<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、去年占申了、即所<sub>レ</sub>持<sub>二</sub>參件卜形<sub>一</sub>也、凡此間事、欲<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>合人<sub>一</sub>々、定經可<sub>レ</sub>行向<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、召<sub>二</sub>仰之<sub>一</sub>、然而、重加<sub>二</sub>思慮<sub>一</sub>、院還御之時、奏<sub>二</sub>事由<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>問也、自由事、猶有<sub>レ</sub>恐之故、可<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>還御<sub>一</sub>之由、更召<sub>二</sub>仰之<sub>一</sub>、

十六日、戊天晴、此日、石清水臨時祭也、余及內府依<sub>二</sub>湯治<sub>一</sub>不參、二位中將所<sub>レ</sub>參入也、二位大納言少將今日可<sub>レ</sub>出仕、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>召<sub>一</sub>入女房之中<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>良經<sub>一</sub>示<sub>二</sub>女房<sub>一</sub>了、亥刻、二位中將歸來云、日沒、庭座始、依<sub>レ</sub>使還參也、秉燭之後、庭座事了、舞并渡<sub>二</sub>北陣<sub>一</sub>了、及<sub>二</sub>戌終<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>退出也云々、近代、每度晚頭事始、社頭事及<sub>二</sub>翌日<sub>一</sub>、尤不便事歟、今日未刻、實教朝臣來云、自<sub>二</sub>內藏寮<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>調進<sub>二</sub>御裝束<sub>一</sub>、只青色御袍、櫻御下重一具也、元御裝束、僅雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>黃櫨御袍<sub>一</sub>一領、躑躅御下重<sub>二</sub>々々<sub>一</sub>給<sub>レ</sub>使了、爲<sub>レ</sub>之如何、御禊之時、所<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>御例御裝束<sub>一</sub>也、何樣可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>進退<sub>一</sub>哉者、余答云、櫻御下襲、黃櫨御袍、全不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>苦<sub>一</sub>、粗有<sub>二</sub>先蹤<sub>一</sub>歟、抑御裝束次第、尤無<sub>二</sub>四度解<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>自今以後<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>尋沙汰<sub>一</sub>也者、入<sub>レ</sub>夜、頭辨兼忠、持<sub>二</sub>來行幸日時<sub>一</sub>、見了返給、上卿右大將也、



此日、參入公卿、以二位中將院記之、

右大將實房卿、

中納言實宗卿、

隆忠卿、

通親卿、

經房卿、

泰通卿、

二位中將良經卿、

參議通資卿、

左京大夫清通卿、

三位中將家房卿、

已上十一人云々、

家房、不<sub>レ</sub>齊<sub>二</sub>捧頭花<sub>一</sub>、退出了云々、宗賴申云、別當僧正示云、權別當覺憲、依<sub>二</sub>成範卿所勞<sub>一</sub>、上洛了、唯識會證義者闕如了、爲<sub>レ</sub>之如何、若可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>歟云々、直先可<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>遣覺憲之許<sub>一</sub>之由、仰<sub>二</sub>宗賴<sub>一</sub>畢、親經來申<sub>二</sub>御祈意見之間事<sub>一</sub>、

十七日、<sub>未</sub>天晴、宗賴申云、覺憲下<sub>二</sub>向南京<sub>一</sub>了云々、十九日成範卿無事者、雖<sub>二</sub>初日許<sub>一</sub>可<sub>二</sub>參勤<sub>一</sub>也云々、余送<sub>二</sub>書於僧正之許<sub>一</sub>云、覺憲若障出來者、必可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>出<sub>一</sub>法會也、此會被<sub>二</sub>始行<sub>一</sub>之後未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>無<sub>一</sub>證義者<sub>二</sub>之例<sub>一</sub>云々、縱雖<sub>二</sub>初日一日<sub>一</sub>、必可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>勤也<sub>一</sub>、<sub>初日許參入、後々日不參例、同存之云</sub>者、又仰<sub>二</sub>宗賴<sub>一</sub>云、縱覺憲雖<sub>二</sub>故障出來<sub>一</sub>、更不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>、別當若被<sub>二</sub>參者神妙<sub>一</sub>、不然者、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>請<sub>一</sub>他人

哉、將又雖<sub>二</sub>無<sub>一</sub>證誠、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>行哉否之條<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>合僧正者<sub>一</sub>、又山田寺佛之間事、儘可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>沙汰返<sub>一</sub>之由、委令<sub>二</sub>傳達了<sub>一</sub>、宗賴明曉可<sub>二</sub>下向<sub>一</sub>云々、今日、使舞人歸參之後、解齋、而及<sub>二</sub>晚未<sub>一</sub>參云々、實教朝臣來、陳<sub>二</sub>昨日實明遲參之間事<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>山緒<sub>一</sub>之由仰了、

十八日、<sub>庚</sub>天晴、早旦、家司大藏卿宗賴朝臣、爲<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>唯識會事<sub>一</sub>、下<sub>二</sub>向南都<sub>一</sub>、先例、必執行家司不<sub>二</sub>下向<sub>一</sub>、又不

撰<sub>二</sub>英華人<sub>一</sub>、然而、有<sub>レ</sub>所思、去年欲<sub>二</sub>差<sub>一</sub>遣件宗賴、而依<sub>二</sub>輕服事出來<sub>一</sub>、忽改<sub>二</sub>定光綱<sub>一</sub>、即下向之處<sub>二</sub>依<sub>一</sub>聖弘追捕、<sub>二</sub>法會<sub>一</sub>延引、及<sub>二</sub>十二月<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之、長房領狀之間、依<sub>二</sub>觸穢<sub>一</sub>、卒尔以<sub>二</sub>文章博士業實<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>差下<sub>一</sub>了、頗遣恨、仍今度仰<sub>二</sub>宗賴<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>下向<sub>一</sub>也、凡此役、先々、各以遁避、偏爲<sub>二</sub>窮者之家司所役<sub>一</sub>、仍爲<sub>レ</sub>誠<sub>二</sub>向後<sub>一</sub>、強所撰<sub>二</sub>華族家司<sub>一</sub>也、又式日十六日也、而聊依<sub>二</sub>憚思事<sub>一</sub>、延而及<sub>二</sub>明日<sub>一</sub>也、

僧正返札到來、雖<sub>二</sub>所勞矣治無<sub>一</sub>術、覺憲不<sub>レ</sub>參者、可<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>法會<sub>一</sub>云々者、悅思不少、傳聞、成範入道昨日薨去了云々、

十九日、<sub>辛</sub>天晴、此日、春日御社唯識會初日<sub>二</sub>也<sub>一</sub>、<sub>子細</sub>在<sub>二</sub>昨<sub>一</sub>日、仍早旦洗<sub>二</sub>頭<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>五ヶ日、仰<sub>二</sub>宗賴<sub>一</sub>眞<sub>二</sub>阿<sub>一</sub>闍梨、

實殿弟子、令修不空絹索護摩、是又例事也、其間、長者又有所作等、多所用代官也、即以護摩阿闍梨、用所作之代官例也、然而、殊有所思、余自扶病修之、但於經卷者、自不轉讀也、五々日之間神事、又精進也、但不忌僧尼也、親經來申、御祈之間事、又申意見一人々散狀等、依宗隆輕服事、成範也、辭申祭奉行事、仍仰定經、而申依勤皇后宮使、當日指合之由、仰親經、領狀了、昨日仰、仰有申旨、然而今日領狀了、

此日、季御讀經日時僧名定也、上卿忠親卿、行事左少辨親雅、爲內覽來、見了返給、

廿日、壬戌親經、親雅等來、申條々事、又定經來申云、昨日、呆海僧都入滅事、行幸初齋宮事、共辭申之由、兼忠所申也云々、仰云、行幸事、還御之時、可奏聞、初齋宮事、季御讀經以後、可被仰親雅一歟、

廿一日、癸亥陰晴不定、風吹、入夜小雨、此日、依違夏節、伴女房內府等、向九條、密儀也、親經追來九條、申明日季御讀經公卿已下散狀、

此日、秦茂持來密奏、去十六七日兩日、月色赤如他時、又去十日、日冠降事定、共兵革云々、廿二日、甲子天晴、午後天陰、此日、春季御讀經始也、未

刻、內府、二位中將、相伴參內、余依湯治之後風病不快不參、先是、親經奉行職事、親雅行事等來、申御讀經之間事、余仰御願趣可、仰之由於親經、頭中將實教可仰也、親雅申云、番僧綱別當、依所勞辭退、覺憲、檢別當也、依服暇不參、仍請雅緣大僧都之處、領狀了云々、上藤範玄、又依重典不出仕也、秉燭、內府、中將等歸來、依每事懈怠、事遲始云々、定御前僧之次、先補闕請下辨之後、定御前僧云々、

廿三日、乙丑天晴、及晚雨下、亥刻、藏人辨親經來申云、今日、引茶役、隆信朝臣領狀、而于今不參、在經房卿和歌會之所云々、度々遣人、其使未歸爲之如何、仰云、猶早可遣御教書、雖及曉天、必可被行也、但遂不參者、明日可被行、第三日引茶、依有例也、天元五年三月二十五日、季御讀經始、同二十七日引茶之後、有御讀經之由、見小記、者、親經遣御教書於隆信之許、即歸參內裏了、無程以書申云、只今隆信朝臣參入遂行引茶了云々、此日、家實陳申堂童子進奉不參之間事、所申一々不當、仍仰其由了、親雅來申、季御讀經引物之間事、山田寺佛事、仁和寺宮返事、長退注送、光長所進也、可下寺家之由

仰了、

廿四日、晴、今日、季御讀經御論義也、山階寺別當所

權別當服、共不參、仍雅緣僧都勤仕番、上臈迄玄重服也、此役、必法相伯綱

之所、已刻、雅緣僧都先來、余謁之、仰諸宗御祈事、爲

役也、傳別當權別當等一也、奉行職事親經、雖仰之、又山田寺

佛之間事、雅緣所談語一也、爲別當僧正使、昨日參

仁和寺宮云々、余又示所思了、申刻、頭中將實教朝

臣持來論義結番、折帶見了返給、今日早旦、座主全

玄來、延曆寺分御祈注文所持來也、三部長講百ヶ日

云々、法華、仁王、金光又懺悔法千部經云々、

廿五日、卯陰晴不定、及晚雨降、此日、季御讀經結願

也、內府、二位中將等參內、入夜歸來、依無參入幸

相、問例之處、南殿納言一人例、多以有之、仍且可

初行之由、仰內府并親經了、行香了、親宗參入、仍

陣饗之時、參議祇候云々、今日始開法成寺寶藏、取

出帶箱三合、使家司左京權大夫光綱、伴帶箱、黑塗圓

桶三合、各五具、有上中下、銘書、紙押、蓋上、上桶玉案馬腦、

此中巡方馬腦有二筋、世間所、在馬、中桶犀角巡方、此中、烏犀丸

腦皆丸柄也、此外無巡方云々、柄一筋相突、

下桶犀角九柄、并帶員廿六筋也、此外、第一桶、被加

納目六一卷、紅梅色紙書之、年號與有字治殿御判

署、御名自筆被書之、非御判、八角軸、不標具、不香表

昏委之、御帶目錄云々、以異樣紙一襲之、仍返納之

時、以厚擅紙二枚襲之、余披見畢之由、書付件紙、

雖無例、依有所思也、皆悉見了、付家司光綱、

封返納畢、亥時許、定八幡行幸雜事、執行家司宗賴

朝臣執筆、以天治二年定文爲例文、內府、二位中

將等在座、先例、公卿在座之由不見、然而、各在

中、仍所加座也、依參季御讀經、各着束帶、抑輕

服輩、不載定文、除服之後、雖強不可憚、於有

他人者、尙不可入欺、雖不知先例、付重所除

也、子刻、左少辨親雅持來行幸奉幣、并諸社御讀經

等定文、行幸上卿右大將所定申也、依參議不參、親

雅卿執筆云々、親宗雖參、依有服此日、祇候八條院之

小兒來、

廿六日、辰天陰、內府方密々有蹴鞠事、今日、二位大

納言少將兼良來、余呼入簾中調之、有猶子儀之

故也、

廿七日、巳天晴、入夜、新中納言兼光卿來、內府謁之、

評定百首詩題事云々、人告云、法皇自去廿二日、

有御不豫事、大略如瘧病云々、今日入御洛、昨日、

大事令發給、今日無爲云々、依及夜漏、余不參、獻使者於鳥羽、奉問御惱之實否、少納言相房、當時隨候連之、

廿八日、庚午天晴、午刻、相伴內府、共直衣、同車、參鳥羽北殿、

勝光明院御所是也、入自西面門、候上達部座、先是、公卿等在座、各起座了、右大將一人留座、招定

長入見參、以頭中將實教被仰云、只今已令發給

間、無御對面云々、實教布衣上括、當時貫首頗輕々

歎、相次、定長歸來、語御惱次第、瘧病之條、尙有疑

殆、今日無祈療沙汰云々、又定能卿來、所言同、定

長、令發給之時、御府頗かふれさせ給、施樂院使丹波

賴基奉見之、申云、若御抱瘧歎云々、余云、抱瘧之

習、不出整以前、溫氣無散、又病體不似瘧病、醫

家所申頗有疑殆、召定成、可被見歎、兩人稱善、

則遣召了云々、雖暫可祇候、南風頻扇、神心殊惱、

仍申刻退出、暫休息九條亭、日沒以後、歸冷泉亭、入

夜、定長示送云、自明日、可被始御修法三壇、其

中一壇可令沙汰進者、申承之由了、

廿九日、辛未天晴、親經來申、祭間事、宗隆申平座間

事、定經申平野祭殿上使之間事、宗賴申條々雜事、

今日、右少將信清參入、申請賀茂祭舞人半臂、下襲、

是例事也、件人勒仕使、二位大納言、少將、并慈德寺法印來、各面謁謝遣、

自今夜、院御祈、可被始御修法云々、藥師法事、

余令沙汰進了、然而、今夜不始云々、

右文治三年春此一帙墨付百枚者先年松殿右幕下道昭卿依爲予三男聽繕寫被染眞痕畢抑法性寺忠通公之有職松殿基房公親面授而傳于後法性寺兼實公且加目錄號玉葉爲后昆之儀範代之不容與他吾後者十襲而秘之秘握而可貯深奧者也

慶安二年<sub>丑</sub>季夏蟲拂之節陶化翁(花押)誌焉、

玉葉卷第四十八終



玉葉 卷第四十九

自文治三年四月  
至同年六月

三百四十八

文治三年夏〔四月丁未〕

四月〔大〕

一日、中、壬〔天〕晴、平座、平野、松尾等祭也、已刻、着直衣、參鳥羽北殿、件御所爲勝光明院邸內、御所雖各別、西面門即打額、御堂門也、今日依平野祭、御禊、余神事也、仍扣窓於門外、招出定長、示云、依神事不能入寺中、是定例也、見仍直退出、尤遺恨爲不例、北面門、其路甚無便宜云々如何、定長云、北門頗狼藉、然而拂退雜人、何事之有哉、可在御定者、仍廻轅參入自北面門、候上達部座、以定長申入、歸來傳仰云、只今まで〔ハ〕無其氣者、于時午、正中也、其後數刻祇候、本宗家其房通親經房等在座、余參入之間、宗家其房等、降了、其後經房、余若座之後、宗家復座、通親經房等、向殿上方、退出了、仍一身祇候也、此間、經房卿進來、告御惱子細、又示意見之間事、未刻兼雅卿來云、已令發給了、昌雲自今朝渡御物氣、然而無驗、只今下宿所了云云、又定長來示同趣、定能卿密語云、御邪氣無疑、今

日甚於一昨日云々、又聊御目あしく御覽スル事出來、女房殊恐申云々、先是兼雅卿參御所方、更歸來仰云、只今御馬日吉社令獻むと思食如何、若人聞な無骨也、可有可令計申給者、申云全不可有憚、如此事思食立之時、即可被獻也、早々可被進者、兼雅卿歸參畢、此後招定長申入、退出了、即參內、平野使闕如之間、忽點定在余共之定宗了、每事懈怠、余改着束帶、如例不着白裏天、治元年故殿例也、參上御所、此間公卿參集、先始行平座事、中納言通親、泰通、參議雅長、經房等參入云々、此間經家朝臣、奉仕御總角御裝束等、定經申事具了之由、仍出御御拜座、四面、件御座間、其南廣敷宮主使等座、皆西面、宮主座西立、案二脚、立帶各二拵、余候御座後方、次召御笏、定經不存歟、定經入宮蓋持參之、入自御座西間獻之、主上〔令〕取御笏、定經持返蓋了、次供御贖物、內藏頭經家朝臣勤陪膳、即持參御祓物一本、定經陪膳取今一本相從、入自御座間、居御

座西頭了、退出、次宮主持參大座、於南緣妻、經家朝臣傳取之持參、主上令撫給了、返給宮主、宮主着座、使又着座、取、御、其詞一切、畢宮主退出了、次經家朝臣參上、撤御贖物了、次使進寄案下、跪拜、取、御、其詞一切、笏取幣二本、取南北案、各一本、西面立、次主上御拜、兩段再拜也、次定經持參宮蓋、賜御笏、退下、次入御、次余歸鬼間方、此間定隆持來平座見參、杖、見了返給、三通卷、紙也、次定經持來宣命入宮、余見了返給、上卿奏通卿奏之、於殿上召使、給宣命了云々、次余退直廬、改着直衣退出、今日院御祈等、

一日等身不動尊、余沙汰、以家司光綱爲使、今曉令沙汰進也、一日大般若轉讀、經房彌沙汰、

孔雀經御讀經、仁和寺沙汰、

藥師經御讀經、千手經御讀經、主上御沙汰、○一作已上院沙汰、

御修法等、昨日日次不宜、須自今曉被始也、而依仰不被始之、自今夕可被始云々、此事愚意不甘心、依如此之違亂、令發給欺、

二日、癸雨下、午後天晴、此日梅宮祭、始立神馬十列也、南階前儲拜座如例、其南去二丈許、立八足

敷陰陽師座、帖、未刻、乘尻參集、群居中門已後着御脫、爲其所、此間着東帶、如例、良久之後、行事職事仲盛申了之由、次余出居拜座、南階、即引立神馬於八足南、向南、舍人二人着冠、案下、今片口舍人引之、經八足與神馬之間、神馬西、東上南面引立之、又使藏人所雜色源清房、取幣立八足東南方、次天文博士安陪廣基着半帖、次供御贖物、陪廣基、役供、次陰陽師讀中臣祓、至于高天原、解解繩、如例、祓了資泰持來大座、撫了返給、取具御贖物、傳給行事、退下、次使持來幣、余乍居拜笏、取幣向、社方、兩段再拜了、召使賜幣、幣并神馬、先出中門外、稱警蹕、次余歸昇入離中、陪、次乘尻等於西唐垣邊、騎馬、一々經南庭、出東中門了、乘尻、中有落馬者一人、又未乘、先是使儘可參社頭之由、召仰了、次內府立幣如例、此日以經家朝臣許申法皇今日御動靜、又召親經、明日院御發日也、尤可被行赦令、可問先例之由、仰之、先是兩大外記、內々、三日、戊天晴、欲參鳥羽之間、俄有胸所勞并痢病之氣、仍以侍從定家爲使申此由、早旦親經來申、仍以赦令例、即以親經、可行非常赦之由奏聞、

又可被物之輩事同奏之、觸神社訴之輩、并強盜、及義顯黨類等也、親經馳參鳥羽了、其後追仰<sub>以御教書注</sub>、遣折紙<sub>之</sub>、平氏綠座、同可被物歟、又海賊事可有沙汰之由、被宣下了、同可載詔書<sub>可被物歟之由也</sub>、歟之由了、未刻、親經歸來仰云、赦令尤可被行、可被物之輩事、同聞食了云々、早參陣可宣下之由仰了、上卿賴實卿也、只今可參陣之由所申也云々、相續頭辨兼忠朝臣來仰云、御發心地令落賜了、御驗者大僧正昌雲、可被聽牛車者、早可被仰下者、仰可仰下之由了、余案之只今未刻也、自鳥羽參來、推其時刻、殆午終出鳥羽歟、早速之條足爲奇、果以有後悔歟、一昨日令發給時刻、即午終也、須被過未之一時也、小時定家歸來云、無爲平愈、尤爲悅、汝所勞尤不便聞食、能可相勞者、酉刻親經來云、上卿未參、兼又海賊事、詔強盜之中了、隨又囚人之中無強盜、仍不可被載詔書歟之由、內記所申也、兼又御平滅之由、已以披瀝、若可被止赦令歟之由、外記申之、又縱雖被行、依此事、御平愈之由、若可被載詔書歟如何、余仰云、強盜事、囚人之〔中〕、雖無其犯人、已被下宣旨了、豈漏已發覺、

未發覺之中哉、仍不被載強盜事者、恐似被止被沙汰、仍所仰也、隨又強盜之外、別被載詔書歟、有其例、但如此事、不知案內、內記定存故實歟、又一可被仰上卿者、依御平不被止赦令之條、實雖可然、不覆奏者暗難止之、又欲覆奏者、遼遠之間、於今者不可叶、思事理、御平愈以前、被仰下此事了、其後已得其驗、更停止之條、非無事之憚、加之推叙慮、定在被果遂歟、其程遼遠、并上卿遲參之間、自然懈怠之條、全不可知事也、只早可被遂行、兼又御平愈之由、被載詔書之條、專不可然、若然者、已御平滅之後、似被行赦令歟、後驗如何、又無先蹤、於此條者勿論也者、親經歸參了、依聞及御滅之由、以國行<sub>候院北面內々</sub>遣定長許、賀申之、入夜歸來云、申刻又御更發之由、定長所密語也、但仰御平愈之由、有御返事、尤爲奇疑、被秘御更發之由、歟、親經、親經又來云、強盜事仰合上卿之處、猶不可被載以前宣旨、依此赦令不可被破之由所申也云々、此事未得其心、然而大理內記定有所存歟、仍可從上卿命之由仰了、又云、御書事何樣可候哉、外記內々申云、故



法性寺殿御時、一兩度於里亭、有被加御書之例、可隨彼例歟者、仰云此條極以有恐、然而所勞無術、不能出仕、此外無異議歟者、即歸參了、良久大內記持來詔書草、見了返給了、余倩案之、故殿經二代攝政、其身宿老、仍人以許之、又無天譴、愚臣齡猶不及老、萬機之任、又日淺、於里亭加御晝日之條、深以恐思者也、隨又所勞聊落居、仍忽召集僕從等、欲企參內、仍只令扶病詣闕之由、可觸職事之由、仰大內記了、即相續參內、於鬼問加御晝日、用書即座如畢歸家、雖所勞無術、爲致謹信、爲專臣禮、強所參內也、末代之人、不存此儀歟如何、此日爲余沙汰、百座仁王講、家司宗賴朝臣爲使、所副進也、

四日、亥天晴、以兼親爲使進鳥羽、入夜向九條亭、爲三方遠也、先是職事等來示條々事、兼親歸來傳仰旨、昨日令發給體更非輕云々、尤可恐可恐、

五日、于天晴、相伴內府、同車、無違之間、參鳥羽、未刻、先例式如此、先是大外記賴業來申云、今日自辰刻許、御氣色不快、已令發給之由、人々云了、余促駕參入、今日入

自西面門、依其齋輕也、故殿御記云、雖無灌佛、今年依當大八日以前非神事云々、然而近代神事也、神樂無灌佛仍存此儀、爲從近例也、而御所各別、用其門許之條、非深憚、神事條、雖從近代之儀、猶不知其由緒、仍隨宜用此門而已、候上達部座、先是上卿濟々候此座、余參着之後、人々起座了、右大將許所殘候也、內府同候此座、定能卿來自御所方語云、今日御振甚於去朔日云々、即定長來示同旨、仰可入見參山了、良久歸來云、女房并兼雅卿內々申、又粗有勅定、御所御驗者之間事、可令計申御、其趣何者、此御所有魔所之說、可渡御他處歟、又御惱之濫觴、於熊野令付給、仍以今熊野夏衆數人、可被加持歟、將又可被○南按實證歟如何、余云、可被行御占歟、即歸參了、余此後廻愚案、御參蓮華王院宜歟、於彼御堂、以今熊野夏衆等有加持、旁有其愚歟、然者、只不及卜筮、明後日早旦、可有御參語、明日依御此儀如何之由、示合右大將、甚以稱善、仍更招定長、示此旨、即參上、歸來云、欲被奏之處、只不能開食如此事、但早被行御占了、而京御所等甚不快、此御所無答之由、占申了云



云、然者蓮花王院事、又可無便、然而明日奏聞、可隨御定之由、女房所示也云々、依窮居無病、退却了、于時申刻、親經來申祭除目之間事、

六日、丁雨降、以親經申祭除目事、歸來云、早可被行云々、然而今一兩日可延之由仰了、親雅申行幸之間事、明日參入之時隨御減否體、可申定由仰了、定經來問同事、返答同前、又定經、寶劔之間事、申人申狀、密宗僧一人、并神祇官、陰陽寮各一人、下遣事尤可然之由、各被申云々、左大臣宗家、忠親等也、明日可向右大臣亨、并右大將許云々、明日可行天地災變御祭之由、昨日申院、可然之由有仰、而御使御撫物等、不參籠云々、仍不可叶之由、在宣令申、仍可行他御祈、可隨御定之由、仰遣定長許、而雖及明後日、猶可行天地災變御祭之由有仰、仍其旨仰在宣了、

七日、戊天晴、已刻伴內府各別參鳥羽、實家卿已下候、上達部座、余着座後、人々多起座、雅賴通親等卿留候、今日御驗者實詮法印云々、先々未始令發給、其時已過了、去三日申刻、令發給、又以過了、人々存御平愈之由、申終又令發給了、然而不及大事、自

令轉讀妙經給云々、仍余退出、今日兼雅卿、定能卿、實教朝臣、定長等、各度々來告御有樣、又申子細、

八日、己天陰、申刻以後雨降、早旦定長朝臣告送云、昨日入以後、又令更發給、只如先々云々、仍以兼親奉問之、歸來云、至已刻不令醒給、人々興遠云々、及晚宗賴朝臣來云、鳥羽殿有恠異等、蟻集又釜吹云々、仍被行御占之處、申可令避給之由、大略大炊御門殿不可有恠之由令申云々、或人云、猶可渡御八條院云々、此日被任內藏助、山城介等、其次被任成功之輩十餘人、凡近年作法、每公事被召成功、朝家之耻辱、當時後鑒、只在此事、亂代之證、以之爲驗、可悲々々、

九日、庚午上天晴、申刻以後雨下、依院御發日、相伴內府參院、大炊御門殿、今日自鳥羽渡御被殿也、昨日一昨之由、令占申云々、大炊殿同有恠異、然而節氣相替之上、事以定又非重、隨又御占之趣頗宜、仍俄有晴、今日還御云々、以定能卿申入、又以定長申行幸可延引之狀、被仰可相計之由、及未初又令發給、兼雅卿所來告也、昌雲奉祈云々、實詮雖參入、數刻不應召、適有召心經四五身轉讀之間、即發給云々、今朝有御雙

陸、是物狂事歟、又近日有<sub>三</sub>往生要集談議、澄憲法印已下五人學生預<sub>三</sub>其事云々、法皇年來、曾不<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>法文之行方、況於<sub>三</sub>義理論議哉、而臨此御惱時、忽然而有<sub>三</sub>此議足爲奇、是又物狂歟、自今夜被<sub>レ</sub>始五壇法、前攝政沙汰云々、余申可<sub>レ</sub>始修大法一壇之由、尊星王法之由有<sub>レ</sub>確而仰無<sub>三</sub>可<sub>レ</sub>候之阿闍梨、公顯僧正病惱、真圓又有<sub>三</sub>他御修法、一字金輪此外無<sub>三</sub>可<sub>レ</sub>然之僧云々、仍覽可<sub>三</sub>相待之由有<sub>レ</sub>仰、未刻、余退出、定經來申<sub>三</sub>寶劍之間事、人々申狀、又親雅問<sub>三</sub>行幸有無、仰可<sub>三</sub>延引之狀、申刻以<sub>三</sub>經家朝臣、奉<sub>レ</sub>問<sub>三</sub>院御有樣、歸來云、今日御發、起<sub>三</sub>過先々、御振殊甚、其間殆有<sub>三</sub>物狂事等云云、萬人興達了云々、余重申云、於<sub>三</sub>明後日者、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>召<sub>三</sub>熊野驗者、又崇德院廟殊可<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>祈申者、又歸來云、只今不能<sub>三</sub>奏達、御滅之時可<sub>三</sub>申入之由、女房三品所<sub>三</sub>申也、此事等尤可<sub>レ</sub>然云々、此日出仕以前、宗賴朝臣參上、使<sub>三</sub>陰陽師占<sub>三</sub>申春日恠異、去六日御山鳴動十日、辛巳天晴、藏人辨親經持<sub>三</sub>來流人注文、雖<sub>三</sub>會赦賜<sub>三</sub>官符<sub>三</sub>召<sub>三</sub>其身者、又別恩也、仍殊奏<sub>三</sub>事由、可<sub>レ</sub>隨<sub>三</sub>御定、雖<sub>三</sub>一人成<sub>三</sub>歸都之悅、豈非<sub>三</sub>攘災哉、申刻權辨定長朝臣爲<sub>三</sub>院御使來仰云、御惱逐日有<sub>レ</sub>增、玉躰又庇

弱、倩案<sub>三</sub>由緒、諸社修造事、似<sub>レ</sub>無<sub>三</sub>御沙汰、如<sub>レ</sub>此之漸若爲<sub>三</sub>身微歟、仍此事殊可<sub>三</sub>申沙汰者、奏<sub>三</sub>承了由、此次具陳<sub>三</sub>所思、直難<sub>三</sub>奏達者、可<sub>レ</sub>達<sub>三</sub>仁和寺法親王之由舍<sub>レ</sub>之了、此次維摩講師事示付了、入<sub>レ</sub>夜定長以<sub>レ</sub>告送云、奏<sub>三</sub>聞御返事之次仰云、又申事やありつる云云、次此便宜具以奏聞了、事外有<sub>三</sub>御甘心之氣云々、是更非<sub>レ</sub>他、忠言無私之所<sub>レ</sub>致也、今日又昨日御山鳴動之由、自<sub>三</sub>春日社令<sub>レ</sub>申、仍内々可<sub>レ</sub>問<sub>三</sub>遣陰陽師許<sub>三</sub>旨仰<sub>三</sub>遣宗賴朝臣許<sub>三</sub>了、連日召<sub>三</sub>陰陽事頗有<sub>レ</sub>憚、仍遣問、是又例也、召<sub>三</sub>定經爲<sub>レ</sub>使、諸社修造事仰<sub>三</sub>帥卿、十一日、壬午天晴、早旦召<sub>三</sub>親經、（仰）字佐造營事可<sub>三</sub>恣沙汰之由、午刻以<sub>三</sub>季經朝臣、奉<sub>レ</sub>問<sub>三</sub>法皇御惱、未刻歸來云、已令<sub>レ</sub>發給云々、定能卿告<sub>三</sub>同旨、但頗宜御云云、今日、春日恠異物忌也、仍不出仕、召<sub>三</sub>大外記賴業真人、賜<sub>三</sub>吉田祭氏人差文、是恒例也、今日、被<sub>レ</sub>召<sub>三</sub>返流人、依<sub>三</sub>法皇御惱也、今朝以<sub>三</sub>親經奏聞、昨日大略示<sub>三</sub>定長了、觸<sub>三</sub>神社訴之輩、并平氏義顯等緣者之外、合八人也、上卿源中納言、外記持<sub>三</sub>來官符、依<sub>三</sub>物忌不見<sub>レ</sub>之、

十二日、癸未天晴、昨今物忌也、檢非違使明基許遣<sub>三</sub>裝束

一具、依渡祭所申請也、内々事也、左少辨親雅來申、行幸神寶大略調立了、延引之間、可宿納何所哉、可申定之由、廣房所申也者、仰云、雖何所司可計申、守護武士、不合期者、中重内何事之有哉、大内守護武士、殊可被召仰者、

十三日、申、甲天晴、午刻參院、先是右大將中御門大納言等在座、納言即起向殿上、他卿多在殿上歟、及未終祇候、依不發給退出、於晝間者、無不審、及夕御發難祇候之故也、時刻不定、早日未始、遲日未始、西終人告

云、大略御平復歟、頻有御尋云々、仍宮參、乘燭之程也、以兼雅卿被仰下云、如只今已平復也、欲行驗者

賞如何、又可引馬可行祿、又人々可相送云々、申云、勸賞尤可然、但法橋可宜候也、於律師不可

然候歟、趨頭御馬何事候哉、於人々相送事者、不可然、又申云、今日有饗應、於賞者被追御物氣

之目、可被行也、當時被渡邪氣云々、猶恐心不盡殘之故也、者、兼雅卿又來仰云、可補律師之由、所思食也、又賞事只今日所

仰也、余示大納言云、今明日殊神事日也、猶過今明、被追御物氣之時、可被仰歟、今日只過神

事、可被仰賞と被仰て、其事、今日不可被仰

歟、於律師之條者、可在御意、一旦申所存許也者、兼雅卿歸參了、其後右大將實房應召參御所方、小時歸來示云、自宮御方也、大夫有纏頭、即實房卿取之云々、其後被引御馬、南庭近武教助引之、武安此間兼雅卿候、殿簀子、也、四妻邊歟、雜々人々出、現西廊緣、太見苦、右大將已下、候西中門廊、余如本居障子上也、其後余退出、今日御減、偏熊野權現與行宗之恩行歟、可貴々々、此日賀茂社司持來葵、行腰指如此、今日神事殊密、依國祭也、今夜賜兼次申請風流蝶舞具也、

十四日、乙天晴、此日已刻、藏人辨親經來觸云、今日

使參内之儀如何、昨日申此事、余仰云、先例不、必召御前事也、今度仙院御惱之間、如然之禮無、宜、不召宜者、而昨日御於今者任近例、可有御前召、又

即可參内也者、賜賴武使引裝束并風流、日來雖申請、院御惱之間、事々無便宜、隨又先例不必賜之、

仍仰此旨之處、昨夕來申事如法闕意之由、仍俄調賜之、申初參内、即出御南面、無別御裝束、御直衣余候

御傍、數陪膳召親經仰可召使之由、即藏人數圓座於中門内於緣中程、大内儀數長橋、唯彼者可、數南裏、而依其程、宜、數中央程、

次使右少將藤原信清、入自中門、昇自長橋代南



妻、着四座北面、次六位藏人二人居肴物、次五位藏人家隆勸盃、六位取、瓶子、各出上月、經年中行事障子北也、可尋、次五位藏人親經取紅御袍、出自上戸、經年中行事障子北、進使前行也、舞人進舞之後可賜也、而先賜、仍余雖仰其由、不關仍強不、及置了、雖爲失儀、又非無此例、即保安四年如此、仍強不、次使取祿降庭上、頗進砌外向北拜舞、其作法如、訖左廻退下、次舞人和進舞、隨從發音、舞訖歸入、次御覽使飭馬、々副手振等依、御覽退參殆及一時、且以引馬、御覽仲也、欲令引、而武友(官)還參、然間武友參入、仍自西方引入飭馬、馬副手振、在取、相從、先引向御前、即引廻退本方了、馬副已下相從、但維色不參、次御覽引馬又飭馬、二人牽之、須引馬、御覽一人、官飭馬、御覽一人可引也、其故者番長依爲烏帽之者、不能參御前、因之今片口飭馬、御覽引之、定流例也、仍豫仰此旨、厚助稱無例不承引、再三召仰子細、殆欲加刑罰、仍整領狀之間、今又不令取兼仲、如初與武友取之、是又違例也、仍雖仰其由、猶不承引之間、儘可引歸之由、揚聲仰之、仍更引歸、於今者厚助與兼仲、儘可引之由、下知之處厚助逐電退出(云云)、次第不能左右、仍以親經奏院、依近也、歸來仰云、返々奇怪、儘可參之由可召仰、若遲々者且可

免歎云々、然而日已欲沈西山、待彼者殆及夜漏歟、(加之)御覽引馬、不必然事也、仍不御覽引馬、且以他人令牽、可見苦之故也、即召典侍了、近衛使向列見了、近例御覽車維色云々、引立車於右衛門陣前、是近例云々、先規不必然事歟、召親子等御覽之後賜祿、行事藏人基定取掛賜之、懸典侍車轅也、主上密々於西子午廊、近日爲余直、有御見物、余女房候御傍、內府同交居女房、女房依密々候也、即典侍向列見了、其後余參院、內府同車、以定長入見參、且是爲賀昨日御平愈、重參入也、此次示聞厚助之間事了、今日厚助次第、未得其心、太以奇怪、如此事無嚴刑者、天下事不可落居、此事雖少事、況大事哉、但全無其沙汰歟、爲之如何、十五日、丙天晴、午刻、頭中將實教朝臣來門外、依物也、傳院宣云、厚助事返々奇怪思食、永不召仕之由、被仰天被追却了者、此事全爲身不申、依思公事之陵夷所申也、畏承了之由申之、須賜檢非違使也、沙汰甚輕々々、此次仰實教云、御驗者賞事、過神事可宣下之由承之、早可仰下者、任宗師也、又仰御方違行幸事、此日解陣之次、宣下僧事



云々、上欄波光瀾、職事親經、實教與事了親經申「明日可<sub>レ</sub>奏<sub>レ</sub>院事等、

十六日、丁亥天晴、昨日物忌也、親經條々事奏<sub>レ</sub>院了、來

仰<sub>レ</sub>御返事之趣等、其中維摩講師事、猶可<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>寺家、珍

恩年來所<sub>レ</sub>聞食也云々、又申<sub>レ</sub>住吉社申天王寺濫行

事、自<sub>レ</sub>彼寺<sub>レ</sub>所置、住吉社邊之死人、早可<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>棄境外

之由仰<sub>レ</sub>寺家了、又穢條依<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>路頭、不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>社壇之

穢之由、明法所<sub>レ</sub>勘申也、其旨仰<sub>レ</sub>神主長盛了、依

訴<sub>レ</sub>此事、日來所<sub>レ</sub>在京也、社頭雖<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>穢、掃<sub>レ</sub>棄穢

物之後、更祓清可<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>神事也云々、申旨有<sub>レ</sub>其謂、

仰<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>知天王寺之由了、

十七日、戊子天晴、親經來申<sub>レ</sub>條々事、其中雅緣僧都可

補<sub>レ</sub>藥師寺檢校之由、有<sub>レ</sub>院宣旨所<sub>レ</sub>申也、早任<sub>レ</sub>院

宣可<sub>レ</sub>下知、又先可<sub>レ</sub>告<sub>レ</sub>長者之由仰<sub>レ</sub>之、又宗賴朝臣

來申<sub>レ</sub>條々事、此日立<sub>レ</sub>吉田神馬、雖<sub>レ</sub>乘尻參入、依<sub>レ</sub>御

旣饗遲々、先有<sub>レ</sub>女房奉弊、陪膳彈正大弼資奏朝臣、役

送國行、可<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>東帶也、而衣冠也、然而隨期不改也、誠<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>自今以後了雅樂助忠賴取<sub>レ</sub>幣、

布衣、依<sub>レ</sub>次內府立<sub>レ</sub>幣、陪膳幣取同前、及<sub>レ</sub>申斜<sub>レ</sub>余立<sub>レ</sub>神

馬、先降<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>南階、着<sub>レ</sub>拜坐、座雖<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>南面、而向<sub>レ</sub>東居之次引<sub>レ</sub>立神馬、

頗向<sub>レ</sub>次使<sub>レ</sub>縫殿權助橘以忠取<sub>レ</sub>幣、立<sub>レ</sub>八足東方、頗向<sub>レ</sub>東次

乘尻等、經<sub>レ</sub>八足與<sub>レ</sub>神馬之間東上南面引<sub>レ</sub>立之、

但各願向<sub>レ</sub>次供<sub>レ</sub>祓物、陪膳資奏朝臣、役供行事經<sub>レ</sub>奏朝臣等也次陰陽師大藏大

輔安倍泰茂着<sub>レ</sub>座、八足并陰陽師座東面也次御禊了、陪膳獻<sub>レ</sub>大

麻、撫了返給、即撤<sub>レ</sub>贖物、次使<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>來幣、余向<sub>レ</sub>良方、

兩段再拜、先掃了返<sub>レ</sub>給使、後神馬使等先以出<sub>レ</sub>中門、

警蹕下<sub>レ</sub>門了、余歸昇入<sub>レ</sub>簾中、次乘尻等引<sub>レ</sub>馬、於<sub>レ</sub>

西唐垣邊各乘<sub>レ</sub>之、爲<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>下薦<sub>レ</sub>渡<sub>レ</sub>東出<sub>レ</sub>中門了、此

夜左少將親能娶<sub>レ</sub>故邦綱卿女、女房冷泉局腹也云々此女房遣<sub>レ</sub>濃

袴、依<sub>レ</sub>申請也、故內々遣<sub>レ</sub>之、無<sub>レ</sub>別使、是又依<sub>レ</sub>彼申

也、此日法皇御惱之後、始有<sub>レ</sub>御湯云々、外記持<sub>レ</sub>來吉

田祭見參、見了可<sub>レ</sub>返給、而忘却留<sub>レ</sub>之、(依<sub>レ</sub>外記申

返給、尤恩也、付<sub>レ</sub>內侍邊<sub>レ</sub>奏聞、先例也、

十八日、己丑陰晴不定、此日依<sub>レ</sub>吉日<sub>レ</sub>灸<sub>レ</sub>腹痛、先一兩

所也、不<sub>レ</sub>醫師灸<sub>レ</sub>舊跡也、

十九日、庚寅天晴、親經持<sub>レ</sub>來右大將堀川大納言等意見、

各加<sub>レ</sub>封書余留<sub>レ</sub>之、皆悉進上之後、可<sub>レ</sub>奏聞<sub>レ</sub>之故也、開

封見<sub>レ</sub>之、各法之所<sub>レ</sub>指歟、右大將申狀頗庭弱歟、忠親

(卿)聊有<sub>レ</sub>申旨等、又賴業真人、先密々持<sub>レ</sub>來意見、覽<sub>レ</sub>

內府、內々請<sub>レ</sub>蒙<sub>レ</sub>處分云々、余見<sub>レ</sub>之、和漢之才、實可

謂<sub>レ</sub>博覽者歟、酉刻參<sub>レ</sub>院、以<sub>レ</sub>定能卿入<sub>レ</sub>見參、即退

出歸<sub>レ</sub>家、乘<sub>レ</sub>內府於<sub>レ</sub>車後、向<sub>レ</sub>九條堂、依<sub>レ</sub>舍利講也、

又依<sub>二</sub>方違<sub>一</sub>今夜可<sub>レ</sub>宿<sub>二</sub>九條、女房等入<sub>レ</sub>夜追來、

廿日、辛卯甚雨、此日欲<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>祈雨奉幣、而依<sub>二</sub>雨降<sub>一</sub>

停<sub>二</sub>止之、其旨仰<sub>二</sub>兼忠<sub>一</sub>了、然間宗隆來申<sub>二</sub>延否事、仰<sub>二</sub>

可<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>之由了、又宗賴朝臣來申<sub>二</sub>條々事、及<sub>レ</sub>晚歸<sub>二</sub>

冷泉亭、今日又可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>軒廊御卜、而依<sub>二</sub>寮不參延<sub>一</sub>

引云々、甚奇恠々々、今日雨、民煙之悅、何事如<sub>レ</sub>之哉、

今夜親經進<sub>二</sub>大夫史廣房意見、加<sub>レ</sub>封書<sub>二</sub>名兩字<sub>一</sub>、〔此

日〕仰<sub>二</sub>〔下家〕宣旨、讚岐依<sub>二</sub>重喪過<sub>一</sub>也、宗賴參上、仰<sub>二</sub>

下之下<sub>二</sub>家司、向<sub>二</sub>壺關<sub>一</sub>仰<sub>二</sub>之、給<sub>二</sub>被物云々、是例

也、

廿一日、壬辰天陰時々雨下、親經持<sub>二</sub>來前中納言雅賴并

大外記賴業意見等、依<sub>二</sub>物忌<sub>一</sub>即不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>之、又申<sub>二</sub>條々

事、住吉穢物事、天王寺沙汰甚緩意云々者、仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>奏

之由了、又祭日內藏寮使、助清、兼主番頭清直男醫家人也爲<sub>二</sub>寮下部

於<sub>二</sub>路頭<sub>一</sub>及<sub>二</sub>陵礫<sub>一</sub>之由、先日訴申、召<sub>二</sub>寮下部<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>問

之由仰了、而寮頭經家朝臣參上、申<sub>二</sub>下部不<sub>レ</sub>過之狀、

不<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>進下部<sub>一</sub>、此子細太奇恠、早可<sub>二</sub>召進<sub>一</sub>之由仰<sub>二</sub>之、

此日物忌也、入<sub>レ</sub>夜灸<sub>二</sub>胸兩三所<sub>一</sub>、

廿二日、癸巳陰晴不定、物忌也、頭中將實教朝臣來、申<sub>二</sub>

瀧口所望者事、又定經申<sub>二</sub>條々事、御方違行幸事、其御

所白川押小路殿云々、行隆朝臣於<sub>二</sub>近隣<sub>一</sub>已沒、然而

件事僻說云々、仍被<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>遣祭幣<sub>一</sub>云々、又仰<sub>二</sub>諸社修

造、并寶劔〔之〕間事、今日見<sub>二</sub>去夜親經所<sub>一</sub>進之兩人意

見、賴業書<sub>二</sub>名片字<sub>一</sub>、猶可<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>兩字<sub>一</sub>歟、此日院御祈所

修之樂師法結願、依<sub>二</sub>仰也、沙汰<sub>一</sub>遣被物布施等云々、

廿三日、甲午天晴、親經持<sub>二</sub>來右大臣并師尙等意見、又先

日軒廊御卜不<sub>レ</sub>參之陰陽師等事、奏<sub>二</sub>院之處、返々奇

恠、可<sub>二</sub>計沙汰<sub>一</sub>之由有<sub>レ</sub>仰云々、宣憲、濟憲、宣平等、可<sub>二</sub>

進<sub>二</sub>息狀<sub>一</sub>之由仰了、又去祈年殺奉幣、住吉使倫仲不<sub>レ</sub>

參<sub>二</sub>社頭、仍社司等進<sub>二</sub>御幣<sub>一</sub>之由令<sub>二</sub>言上<sub>一</sub>、於倫仲

者、有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>已可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>召籠<sub>一</sub>、早可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>祝之由、可<sub>二</sub>仰

遣旨下知了、又所<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>住吉社邊<sub>一</sub>之死人、早可<sub>レ</sub>取棄<sub>一</sub>

之由、天王寺承伏申云々、於<sub>二</sub>清祓<sub>一</sub>者、公家行<sub>二</sub>料物<sub>一</sub>

可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行之由、官外記勘申、仍奏<sub>二</sub>事〔之〕由、任<sub>二</sub>勘申<sub>一</sub>

可<sub>レ</sub>行之由仰了、此日被<sub>二</sub>勘下<sub>一</sub>伊勢齋宮三ヶ院造營日

時、行事辨親雅爲<sub>二</sub>內覽<sub>一</sub>持來、見了返給、又被<sub>二</sub>下<sub>一</sub>先

朝諡號勅、延曆例也上卿新大納言實家卿、內記爲<sub>二</sub>內覽<sub>一</sub>持

來、見了返給、仰免<sub>二</sub>清書內覽<sub>一</sub>之由仰了、抑近例勅書

無<sub>二</sub>御晝<sub>一</sub>、然而於<sub>二</sub>大事<sub>一</sub>者、若可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御晝<sub>一</sub>歟、大唐六

典文如<sub>レ</sub>此云々、仍欲<sub>二</sub>參內<sub>一</sub>之處、猶依<sub>二</sub>不審、勘例無<sub>一</sub>

所見、隨又依公式令說、延長天曆等例、無御查之由、  
 有所見、仍不參內、今日法印出自御社被來、又  
 智詮母遭喪、過了後始所來也、宗隆申取蘭林房御  
 書目錄之間、御書所衆不參之由、儘可鈎出、又可  
 尋衆所望者之由了、仰脫歟

廿四日、未、乙陰晴不定、左少辨親雅申齋宮群行之間  
 事、勢多橋於今者不可叶、先例自前年有沙汰  
 猶難叶、況國土凋弊之時、更不可叶、天治例以御  
 船有渡御、今度如何、可渡浮橋歟、仰云、天治例  
 於此條者、強不可被退避歟、但浮橋事無煩、無  
 危者又何事之有哉、又申離宮成功之間事、仰可  
 尋遣祭主能隆朝臣許之由了、親經來仰院宣云、  
 近日天下有病患、又兒女有謠言、尤可有御祈事  
 云々、申云、尤可然候(由)、於謠言者未承及候、  
 病患粗有其聞、御祈尤可候、但用途事難叶、先日可  
 被付功國之由奏聞、此事未無御沙汰、依御定  
 五六箇國、相計雖催仰、敢無領狀之國、以別勅定、  
 可被仰下歟、抑近日可被召意見施德化之  
 由、有其聞、其事無私被行之、祈禱讓災、不可過  
 之者、晚頃權辨定長來、余謁之、有仰聞事等、此次

語曰、賴朝卿上洛料申請地、以親能所申也、指申  
 山科澤殿邊云々、而不許、事次第、凡不能左右云  
 云、具旨難記盡也、今日前中納言雅賴卿來、今夕左  
 大臣意見到來、武士濫行事、委注申之、萬人憚而不  
 申之、元老之臣、猶可謂直者歟、

廿五日、申、丙天晴、以假名書、申宗賴辨官所望事、於  
 院即以御筆、有被仰下一旨、仍以兼親爲使、進  
 御返事、親宗可任大辨、雅賢可兼中將事等也、親  
 宗事何事有哉、雖、光雅有哀憐、可被雅賢羽林、專不可  
 候事歟、不被止如此之非據、難期天下之安全  
 之由申止了、雖憚忤天氣、依存忠也、此日堅固  
 物忌也、然而依爲御書不禁之、

廿六日、酉、丁自今日、仰觀性法橋、令修佛眼供、祈  
 德政事也、此夜依御方違、幸白川押小路殿、余及內  
 府依物忌不參、右大將已下公卿十人供奉、近衛司  
 濟々云々、但還御供奉人催兩三人云々、右大將始供  
 奉歟、而不參還御、可謂不忠、還御路頭天曙云々、  
 今日權辨定長爲院御使來、拾遺抄一部、相具折紙  
 也、下給之、可書進者、本自不堪之道、遂日荒蕪、  
 旁雖不可叶、返上有恐、仍愁留了、然而於子細



者言上了、退可返上、歟、此日藏人次官宗隆來、最勝講僧名、注大概進覽、今日不歸來如何、親經來、藏人叙傳、辨新補者事、可仰下之由、被仰云々、藏人爲說叙時、非藏人親資、又進兼光卿意見、

廿七日、戊陰晴不定、已刻宗隆來、傳昨日院仰云、講師如注申可被請也、聽衆、山三人、寺一人可召新聽衆云々、仍申云、南都一人、尤可被召歟、仰云、尋可然之輩、可被召云々、雖定以前、且先可告講師等之由仰也、

以御教書去夜行幸供奉人、濟々感思食之由、仰定經、

廿八日、亥天晴、法印被來、宗隆來申、最勝講僧等、定以後可催之由、是正法也、然而定若及遲々之時、兼催之爲定例、加之講師、(兼)以對捍爲先、仍內先告催、且是爲無懈怠之計、然而執申之上、不能(強)仰、可依先例之由仰了、頗未練之人歟、父卿又強(々)力不及、自去廿五日、至今日四ケ日、物忌也、法成寺供僧三口、每日參上、行仁王講、今日左少辨親雅來、申初齊宮之間事、

廿九日、庚子天晴、午刻、親經來申、條々事、多是記錄所

申事也、進軒廊御下不參陰陽師等怠狀、上納通親卿所取進也、其狀載不<sub>レ</sub>過之由、凡怠狀之習、依<sub>二</sub>過怠難<sub>一</sub>通、申其怠之儀也、已顯無<sub>二</sub>過失<sub>一</sub>之狀、全非<sub>二</sub>過狀之本意<sub>一</sub>、已是陳狀也、仍仰書改可奏之由返給了、又申復任除目日次、今日並八日云々、復任(之)習、外記定日、仰云、兩日之間、次所申行也、職事非同陰陽師也、仰云、兩日之間、何日可被行哉、又可有<sub>二</sub>加任<sub>一</sub>哉否、早可奏院者、申承了之由、退出了、其後定經來申、祇園御殿修造之間、可有<sub>二</sub>假屋遷宮<sub>一</sub>間事、依<sub>二</sub>申狀<sub>一</sub>猶不審、可召具別當玄理之由、先日仰之、而登山未<sub>レ</sub>下京、仍不能召具、且所<sub>レ</sub>申也云々、猶仰下京之時、召具可參由了、未刻、自院賜御書、被仰辨官事、可被任<sub>二</sub>大辨親宗、兼光<sub>一</sub>之間、可計奏云々、敬慮者可任<sub>二</sub>親宗、歟、申左右可<sub>レ</sub>在御定、被任<sub>二</sub>光雅<sub>一</sub>爲善政、又親宗事殊有<sub>二</sub>御糸惜<sub>一</sub>、不可爲<sub>二</sub>巨難<sub>一</sub>之由申了、爲<sub>レ</sub>叶<sub>二</sub>御意<sub>一</sub>也、雖似<sub>二</sub>媚諂<sub>一</sub>、又不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>殊大事<sub>一</sub>之故也、又仰云雅賢中將兼任事、先日余申<sub>二</sub>非據子細<sub>一</sub>、仍不可有<sub>二</sub>勅許<sub>一</sub>云々、此條被容<sub>二</sub>恐諫<sub>一</sub>、恐申之由令<sub>レ</sub>申了、仰使兼親、其後復任除目事無音、仍尋<sub>二</sub>遣親經許<sub>一</sub>之處、以<sub>二</sub>同人<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>頓病<sub>一</sub>直退出、不<sub>レ</sub>參院云々、申狀勿論尤奇恠、仍重遣<sub>二</sub>勘發狀<sub>一</sub>了、其後入<sub>レ</sub>夜外記持<sub>二</sub>來復任勘文<sub>一</sub>、驚奇



不少、問子細之處、奉行職事不參、只依彙日催上卿通親(卿)參陣所行也者、須今日延引也、然而已及內覽勘文、忽停止、於事無便、宜加任(之)條、不可必限此次、加之、復任事再行之、非無事之憚、仍愁仰可下之由了、依參議不參、不行外國、依可書除目也、於重官者、只下勘文、不載新除目、故實云々、今日親經次第不當之由、以使者仰遣定長許、不奏事由、行復仕有其恐之故也、及深更親經參上、仰條々不當子細、定不能被陳卷舌閉口、實不足言也、凡近代職事辨官、皆狎蔑公事之所致也、返々奇怪、重加勘發、成恐退出云々、

卅日、丑天晴、巳刻、定長爲院御使來、仰云、修理大夫親信、申可讓男定輔之由、可懸辭少將辨通親卿息侍從通宗、可被聽禁色之旨、兩條如何、申云、修理大夫(事)、何事之有哉、其子雖壯年、或申可被留中納言之由、或又申可被少將之由、是各爲未會有例、仍至此條者、非巨難也、通宗禁色、又雖淺位、非無例、左右可在御定、但望五位藏人之<sub>之聲也</sub>、兩條、可有御計、歟者、又仰云、除目事近日相尋日次、可被行者、即定長歸參了、召遣定經、仰可問日次之由、

即注申來月四日乙巳、仰可奏之由了、今日親經參上、依奇怪粗仰其旨、仍逐電退出云々、親雅參上、申齋宮勅別當事、大夫史廣房、重春見參、又六位史、并藏人持來月奏、

## 五月

一日、寅(天)晴、及晚陰、午上神事如例、早旦着衣冠、遙拜太神宮及春日、依有所思也、又書寫心經、補月々闕分、內府聊有病氣、親雅申、齋宮勅別當、無還補例之由、官外記又申所望之輩本官權舉之人三人云々、宗隆來申、策勝講用途闕乏、諸國雖濟成功、未尋付之由、此次付別當僧正、被申維摩會講師事、被問僧綱之請文等、多申彌恩有理之由、歟、此事親經奉行也、然而件人依復任除目事、頗加勘發、加之宗隆奉行衰勝講事、依有便宜所付也、宗隆又申云、證義者事、澄憲固辭、非雷限今年一度、惣可隱遁也、於今者永可被免公請云々、澄憲當時北京之法澄也、自由籠居全無謂、尋常各僧、各皆任此、思顯真、道顯等、各以如此、極不便事也、佛法之滅相、偏如此之事也、枉不可被免籠居之

由、可<sub>レ</sub>奏聞<sub>一</sub>之旨仰<sub>レ</sub>之、自<sub>二</sub>今夜<sub>一</sub>始<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>愛染王護  
〔摩〕、山法印於<sub>二</sub>白川房<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>始行<sub>一</sub>也、聊依<sub>二</sub>靈告<sub>一</sub>始  
之、奉<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>余本尊并衣等<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>國行<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>使、余今夜同  
念誦、此日物忌也、

二日、<sub>卯</sub>終日天陰、雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>雨氣<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>降、親雅宗隆等來  
申云、各雖<sub>二</sub>參院<sub>一</sub>、定長不<sub>レ</sub>候、又田樂御覽之間、御所中  
間每事不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>奏達<sub>一</sub>云々、明日早日可<sub>レ</sub>參之由仰了、晚  
頭定經參入申云、今日向<sub>二</sub>仁和寺宮<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>寶劔御祈僧  
事<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>相計可<sub>レ</sub>申之由<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>奏之由了<sub>一</sub>、昨今物  
忌也、

三日、<sub>辰</sub>天晴、巳刻、權辨定長爲<sub>二</sub>院御使<sub>一</sub>來云、天下魔  
緣競起之由、顯然之上、又有<sub>二</sub>夢告<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>世之謳歌<sub>一</sub>、何様  
可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>、每家可<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>安<sub>一</sub>置不動尊之  
由、有<sub>二</sub>申人<sub>一</sub>、如何云々者、申云、當時被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>諸宗<sub>一</sub>有<sub>二</sub>  
御祈<sub>一</sub>、即爲<sub>レ</sub>拂<sub>二</sub>如此<sub>一</sub>〔等〕之事也、其上諸卿被<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>意  
見<sub>一</sub>、隨<sub>二</sub>彼趣<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>施<sub>二</sub>德化<sub>一</sub>者、善神可<sub>レ</sub>擁護之不<sub>レ</sub>空者、  
又魔緣不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>競、然則禦<sub>二</sub>邪鬼<sub>一</sub>之計、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>德政<sub>一</sub>、  
抑每家安<sub>二</sub>置不動事<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>安鎮法儀軌中之由<sub>一</sub>、側所承  
置也、被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>、尤可<sub>レ</sub>宜歟、但先可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>  
於申上人<sub>一</sub>歟、就<sub>二</sub>其趣<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>宣下<sub>一</sub>也者、此次明日除

目任人、兼可<sub>レ</sub>申定<sub>二</sub>之由仰<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、即歸參了、頭藏人次官  
宗隆來、申<sub>二</sub>寂勝講僧名之間事<sub>一</sub>、即參<sub>二</sub>院了歸來仰云<sub>一</sub>、  
每人家可<sub>レ</sub>安<sub>二</sub>置不動事云々<sub>一</sub>年有<sub>二</sub>沙汰云々<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>相  
尋、又爲<sub>レ</sub>防<sub>二</sub>魔界<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>四角四堺祭<sub>一</sub>歟云々、申<sub>二</sub>  
可<sub>レ</sub>尋沙汰之由了<sub>一</sub>、即不動尊事可<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>申以前沙汰<sub>一</sub>  
趣、召<sub>二</sub>仰宗隆了<sub>一</sub>、藏人辨親經依<sub>二</sub>復任除目事<sub>一</sub>、余加<sub>二</sub>  
勘資<sub>一</sub>、仍此兩三日籠居、然而明後日圓宗寺御八講御念  
佛等始也、親經爲<sub>二</sub>彼寺辨<sub>一</sub>、兼日尤可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>沙汰也<sub>一</sub>、仍  
今朝遣<sub>二</sub>召之處<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>使參上<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>條々事等<sub>一</sub>、又召仰了、  
此日、左近府騎射荒手結也、少將知光一人差行也云  
云、今朝鞍腰胡錄等、損亡之分、五六具許調具、召<sub>二</sub>本  
府廳頭久直<sub>一</sub>下<sub>二</sub>給之<sub>一</sub>、初任之時皆悉調<sub>レ</sub>之、召<sub>二</sub>射手  
等<sub>一</sub>給<sub>レ</sub>之、初任<sub>二</sub>右大將之時如此<sub>一</sub>、今轉任之寂初、先  
例不必之由、久直所<sub>レ</sub>申也、又舊記〔之〕中無<sub>二</sub>所見<sub>一</sub>、仍  
召<sub>二</sub>府沙汰者<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>賜也、今日不<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>大將家司職事於<sub>二</sub>  
馬場<sub>一</sub>、眞手結日所<sub>レ</sub>遣也、騎射雜具事、大將年預長房已  
來奉行、依<sub>二</sub>所勞<sub>一</sub>今日不<sub>レ</sub>參、與<sub>二</sub>奪職事經泰云々<sub>一</sub>、入  
夜本府持<sub>二</sub>來手結<sub>一</sub>、先大將見<sub>レ</sub>之、次令<sub>レ</sub>覽<sub>二</sub>余<sub>一</sub>、見了返  
給、大將加<sub>レ</sub>封返<sub>二</sub>給之<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>例云々、  
四日、<sub>乙</sub>雨降、此日寂勝講定并臨時小除目等也、申刻、





賴朝臣來申、成賴入道返事、先日伴朝臣、參天王寺之次、向高野、謁彼入道也、付件便、余所音信也、子細不具記、

七日、戊戌天陰細雨下、此日物忌也、親經來云、天王寺與住吉社、論申安倍野領事、天王寺濫申對問、是殺害無疑之故也云々、可計沙汰之由、有院仰、申可在御定、由了、此事尤不便、縱雖所犯顯然、本社爭申、一旦經沙汰之後、可有科斷歟、此日物忌也、宗隆來申、寂勝講僧名散狀、并今日依天下病事、可滿尊勝陀羅尼之由、可被宣下之由、有院宣旨、日數遍數事可申定之由仰了、

八日、己酉雨下、宗隆來申云、今朝參仁和寺、宮申尊勝陀羅尼事、被申可隨御定之由云々、勿論不足言也、此事近日仁和寺病患發起、而滿寺滿此咒文之間、病事忽止之由風聞、仍此沙汰出來、件宣下之間事、云日數、又可被仰下之趣、委可被計申、兼又此外、鎮魔緣止病患計略、付佛教可被計申之由、所被仰合也、而今被申旨問答、御使職事、尤申被勅定旨、可奏聞被申之旨也、有若亡有若亡、召仰此旨之處、卷舌不答、余仰可重問申之

由了、此日法印被來、宗隆昨日所進之賀茂社鳴助占形返給、仰可有奉幣之由了、

九日、庚戌午上天晴、入夜雨下、此日、今日吉競馬也、

有御幸云々、余隨身三人、被入乘尻、左府生忠武、合長清、合兼直、了、近衛兼行、廣合、國方、勝了、忠武被入乘尻、頗不甘心、仍內雖示遣定能卿許之處、不沙汰歟、及晚行廣來、

以季經給纏頭、衣、頭辨兼忠朝臣來云、二間遣犬矢、可卜筮哉否事、問女房之處、近年之例、雖有如此事、不及沙汰、查御座有此事之時、有御卜云々、仰云、然者不可及卜筮歟、依小恠小異、不可召神祇、陰陽之由、〔見〕寬平遺誠之故也

〔者〕、全玄僧正弟子什玄爲夜居來、十日、辛亥朝間天晴、午後雨降、入夜月明、親經來申、天王寺申、住吉社司殺害彼寺領住人之間事、仰奏之由了、宗隆來申、寂勝講僧名、并用途之間事、證義者并講師、可請覺憲之由仰之、公雅顯忠等三井寺辭退之替可請隆延、三井寺已講、若辭申者可請貞敏、東大寺之由仰之、又申外記勘申尊勝陀羅尼、并不動尊安置之間事、余具奏子細了、晚頭々辨兼忠、自內女房使來云、藏人親資放言、女房等并通親卿等各所訴申也



云々、事跡不穩便、早可奏聞之由仰之、今日定能卿來、自今日院供花也、

十一日、壬子頭辨兼忠來仰、院宣云、親資事尤奇恠、可有尋沙汰者、仰先可問親資之由了、即參內、歸來云、問親資之處、大略無通申、歟、雖稱不遇之由、醫師、陰陽師共娘等放言、藏人大見苦事也トハ、逢女房申了云々、大略承伏歟云々、仍奏云、事次第可謂未曾有、召問之處、申狀如此、科斷何様可候哉、若除籍歟如何、即奏、院歸來云聞食了、實除籍こそは候はめ云々、仰云、今一度奏、一定可除籍歟之由、早參內可削籍者、又歸參了、及晚歸來申、除籍畢之由、持來內御書、始有此事可有御手習、可進本之由也、書請文、假名也、然而與書月日判署等招寄兼忠於簾前、自賜之、雖物忌已及、度々、強不察之上、初度之手詔也、了爲致敬信、破物忌、自謁付請文也、君雖幼稚、爭疎人臣之禮哉、宗隆來申云、澄憲弟子眞雲夭亡了、仍證誠闕如、依先日仰、請覺憲了、聽衆又闕如、聖覺彼眞覺弟于其替事奏聞之處、可召雅圓之由、也仍不可參、有院宣云々者、雖不可然、御定有限故仰、可請之由了、又申云、講師隆延領狀云々、

十二日、癸丑巳刻、權辨定長爲院御使來云、

余破物忌

延曆寺惡僧於坂下一殺害日吉神人了、事次第未曾有、濫行也、早可尋沙汰、即被副下日吉禰宜成仲書札、密々告座主狀也并折紙等、定長云、中堂執行增運弟子所爲之由座主所申也云々、余申云、早仰職事、可召進張本之由、可仰座主候、如承者且可召進增運之由、可被仰座主御返事也云々者、定長又仰云、昨日有大事變之由、司天等所申也、可有御祈等歟云々、即定長歸參了、小時資元來云、昨日月犯心大星、尤重變也、過三ヶ日、雖可奏聞、依爲大事、且內々言上、是例也云々、爲仰日吉社訴事、召定經兼忠等之處、各稱病不參、十三日、寅甲早旦廣基來、申一昨日變事、未刻許大雨、暫而晴了、宗隆云、延曆寺講師今一口、各辭退云々、可請圓輔源實等之由仰之、必雖不限人數、山講師只淨嚴一人也、仍今一口闕如之所、猶可請延曆寺之由所仰也、此夜內府渡居西方、移邪氣又始祈、不効供回團契快成、成和入道子也余又居東面、廣元資基等來云、昨日雨降、變消了云々、件變天子御愼、又院御愼也、而此變忽消、可悅々々、依重召、入夜兼忠來、給昨日

自院所給之成仲狀等、仰可仰座主之趣、仰含子細、令書御教書案、余乞見之、少々改直了、明日參院奏聞如此、此可仰歟之由、其後早々可下知之由仰了、此夜、權中納言隆忠卿以宗雅爲使、被示藏人親資事、白治息也、答子細了、

十四日、卯天晴、花山院大納言來、余謁之、又二位大納言少將兼良來、去十一日來、依物忌不謁也、今日謁之、大夫史廣房來、申條々事、此次仰記錄所之間事、又賴業真人來、內府召前、談史書事者、內府遣漢家帝王系圖、令見賴業、々々感嘆云々、天王寺宮僧正送使云、天王寺衆徒猶對捍問注、只兩方共可書起請也、社可被仰此旨、社若書者、以之可爲勝乎、可見其失云々、又問注進をも可遂云々、十五日、丙天晴、晚頭小雨、親經來申住吉天王寺之間事、余仰云昨日天王寺宮被申旨如此、但定有訛言歟、直召兼覺法橋彼宮後見、昨日使也、尋聞子細、以彼申狀可奏聞者、齋宮群行之間事條々、親雅來申之、用途事可仰遣關東之由、先日有院宣也、又勅別當事、猶以未定、重可奏之由仰之、甲斐守長兼來、余始召前、且爲見其器量也、長方入道二男、去春殊所令、初參內府方也、

此父入道不進意見、頗鬱念之趣示了、

十六日、巳天晴、親經來申云、天王寺申旨、奏院之處、仰云、祭文起請、公家雖不被用事、此條無爲之沙汰也、以此旨可仰住吉社者、早任御定、召神主可下知之由仰之、定長依所勞、以兼雅卿奏之云々、此日法印被來、季長來申吉夢事、伊豫目代法親經又申云、祈年穀奉幣事、住吉使友仲依不參社頭、自去比被召籠陣、依日數多積、可被免歟、仰早可免之由、

十七日、戊陰晴不定、物忌也、召在宣內々問三昧供養日次、六月十二日、廿日、七月三日云々、又冬之間春日詣、并山階寺金堂、南圓堂棟上等事、密々問日次、十月五日春日詣、六日棟上、但非八神日、有例云云、八神日一本作社日、十一月二日春日詣、三日棟上、最上吉日云々、爲用意所問也、宗隆持來不動尊勝陀羅尼等宣旨案、依不盡理仰子細了、又寂勝講々師一口之闕、圓輔半領狀云云、重可問之由仰了、親雅來、群行用途、可被仰關東之間事、又申勅別當事、依定長所勞、不能奏聞之由、仰云付兼雅、定能卿、及實教朝臣等可奏者、此日物忌也、

十八日、己未天晴、物忌也、右大將實房以使者皇后宮少進長俊

觸內府云、番長兼澄遣母喪、仍欲尋當府假番長

之處、一切不候、若左近可然之者候、被召渡哉、

中臣武恒右大臣爲大將之時番長無指障云々者、答尋應頭

可申左右之由了云々、

十九日、庚申天晴、親經來申字佐香椎宮崎等造宮事、又

親雅來云、初齋宮事等、欲奏院、無奏者之間、不

能達云々、宗隆申云、寂勝講圓輔領狀了云々、又云

成功事、寂玄進納五千疋、申增分不力及之由、然

者仰今度僧事不可被任之由了、午刻法印被來、

法成寺庄々之間事、修造事等、致沙汰、申刻、舍利講、

日來於九條堂行之、爲論義聽聞、自今以後、付

在所可勤行也、今日講、有辨已講、問者範源已講、

共山僧也、二重評定之時、淨嚴律師吐才學、又義理

明々、可貴者歟、中間定能卿來、前緣敷疊着之、但

不取布施、依內々事也、今日頭辨兼忠來云、山惡

僧濫行事、座主申云、付中堂執行增退、并彼岸所別當

慶算等、令尋之處、注申張本等了、而其身各逐電了

云々、仰可奏之由、此次儘指期日可召出之由、

殊可被仰、若過其日者、可被召召件兩人之由可

奏者、歸來云不能奏達云々、

廿日、辛酉天晴、親雅、親經、宗隆等來、申條々事、各雖

參院、依定長未出仕雖尋定能、兼雅等卿、各不

參云々、今日復任除目事、不可期後日、仍余齋消

息、遣兼雅卿之許、返事云、條々奏聞了、職事等歸參

之時、可仰下者、宗隆可參之由仰了、即歸來云、

親雅、親經等先退出、復任除目、早可被行、無可加

任之者、又長門雖未被下重任宣旨、猶可復任

者、仰任御定可行之由了、上卿泰通卿、辨親經云

云、申刻、經房來云、隔簾謁之、依所勞不快也、談

世上事等、多意見事也、又定能卿來、入夜外記持來

復任勘文三通、一通文官、一通武官、一通外國見了返給、仰云、猶外國

者、定有除目歟、早可免內覽者、

廿一日、壬戌天晴、酉刻小雨、親經參上申云、初齋宮、上

卿新大納言領狀之由、奏聞了、又四角四堀祭用途闕如

了、平等院執行嚴敷、慶申、可進納五千疋之由、

奏聞之處、可召付之由有仰云々、余云、法成寺三綱

寂玄、當時進納寂勝講用途云々、兩寺所司同時浴

恩者、定有朝野之謗歟、尋付他功宜歟、又申云、

野宮蛇恠異事、問例於官之處、群行以後者、每度有



軒廊御卜、於諸司野宮等恠異者、一向本宮之沙汰也云々者、仰云此事不審、雖諸司野宮、於大事者、爭無軒廊御卜哉、雖齋宮、於少事者不可必然歟、但此事非大事者、強不可有軒廊御卜歟者、又申云、今日記錄所評定也、只今所參也云々、

廿二日、亥天晴、昨今物忌也、然而強不堅、親雅來、先日兼雅卿所仰之事等仰之、又兼忠來、余奏山惡僧事、又仰可有祈雨奉幣之由、歸來云、山惡僧事、如令申可致沙汰者、未刻、右大辨光長參來、去春以後依病不出仕、〔今日〕始所出仕也、依物忌不密、召前座、仰雜事、入夜親經來申御祈功之間事、此日宗隆來申、寂勝請公卿已下散狀、今日定經來申寶劔之間事、每事懈怠尤不便歟、

廿三日、子天晴、頭中將實教來申云、泰通卿申可被免勅授之由如何、仰可奏之由、先例殊被惜事也、此一兩年、大略翌日被免、折中可有沙汰歟、此旨可加奏之由仰之、又仰殿上人仕之間事、頭辨兼忠朝臣申山惡僧之間事、仰可奏之由、猶可召增退慶算等之由有仰、仰其旨可下知旨了、又申明日祈雨奉幣事、宗隆來申寂勝請之間事、以三件

人奏可有僧事哉否事、可被行之由有仰、撰調申文等、相副目錄、可奏之由仰了、今日以藏人辨親經奏意見十七通、一結公卿十四通、光長卿之外皆僧也、一結兩大外記、并大夫史并三通、紙仍以同紙爲禮紙、結中片餘也、也以例紙爲禮紙、結中同前、奏云、古昔被召封事、於仗座有定、中古永延以後、天仁以往、有意見封事、天永元年白川院被召堀川左大臣并匡房卿等、即就狀有沙汰、其後永久之比以後、意見重有強行事等歟、其後保延以後至永萬、兩三度意見、一切無其沙汰、於今度者、爲被興行天下事、豫有議所被召也、然者殊可有其沙汰、其議定之趣如何、依院宣被召之、仍不可及仗議及殿上定、須於仙洞有評定也、將又職事丞相已下、上臈上達部等之許可持向歟、可隨御定者、良久歸來傳仰云、此意見等凡不能見被、又不及子細取目錄、其中可有沙汰事、又暨不可被行之事等、委細注文可奏覽、少々事、可申也、朕身雖無才、故法性寺入道被示事、并通憲法師申事等、粗留耳底、盡補萬一哉云々者、御定之趣事、似染叙慮、爲悅不少々々〔也〕、又被仰下云、東大寺事、行事官可被補、又寺綱事、殊申請云々、早可致沙汰者、申云件兩條欲



奏之間也、今仰爲恐、先行事官事、定長當其仁、等  
網事、去年行隆奉行之時、下宣旨於諸國、被召之由  
所承也、親經早尋問官、可注申散狀、隨其趣、可  
被催促也者、意見持歸覽留之、明日可給親經、  
爲令取目錄也、此日、山階寺三綱東三堂衆、盜取  
山田寺佛之張本二人、相具將參之、返給氏院了、  
罪科未定之間也、

廿四日、丑終日天陰不雨下、此日、寂勝講初日也、講  
演以前、被行祈雨奉幣、上卿新大納言、辨親經、已  
刻、權辨定長來、依遣召也、仰法成寺執印○印一作  
行下同

事、可取御氣色之由、覺尊固辭之間、可補慈圓  
之間事也、〔又〕平等院執印事、園城寺奏狀下給、仰  
云、此事先日委聞食了、然而若就此狀、可仰之趣な  
とやあるとて被仰也、非可有御沙汰云々、申云、  
先度委細言上了、縱雖有可申旨、被仰子細、還  
有後煩一歟、只上一切不可知食一事也、百千度も可  
示長者之由、可被仰下也、猶定奏聞及再三  
歟、遂以不及上之御成敗、可爲悅也者、即參上了、  
此外有示事等、未刻着束帶先參院、右少將兼良  
相、相伴、件人余殊爲子、仍如此之時、可相具之

由、父亞相所被示也、藏人五位二  
人在車後余前駈八人、殿上人  
兩三人在共、於院以定長入見參、仰云、所勞餘  
氣、猶不快之間不見參、過今兩三日可參、面有可  
被仰事等云々、又仰云、法成寺事、左右只在意、全  
是等是非可聞事云々、則參內入自左衛門陣、昇  
自小板敷、有着御倚子下、下方先是隆忠、基家、雅  
長等卿在座、雅長家禮之人也、而不降座動座、可  
謂不足言、召宗隆行事職  
事也問、僧參否、申不知之  
由、仰可尋之由、奉行職事兼可尋知也、可謂未  
練一歟、歸來證議之外、申皆參之由、仰重可催之由、  
居長押上申之、仍仰可居小  
板敷之由、即降居小板敷又實家卿可參云々、而未  
見此座、仍尋、申未參之由、仰可遣人之由、又  
仰兼忠云、殿上人車、多在陣中、慥仰其人、又差遣  
如吉上、可立陣外者、余即參御所、實教朝臣云、  
泰通卿帶劔事、可然之由、有御氣色云々、余云御定  
分明者、無左右所存、昨日申了者、余又仰御願趣  
可仰之子細、天下太平五穀  
豐饒之由也召兼忠問、祈雨奉幣發遣  
了否、申只今發遣了之由、又宗隆申事具之由、仍余  
飯着殿上、而實家卿不見座、仍仰實教尋之、依  
公事在陣、先可參歟云々、余仰云、奉幣發遣了、詔

書覆奏可被行者、講演了可被行也、日脚已斜、先可被參之由可仰者、即實家卿參着、余召實教、問事具否、歸來申具了之由、仰可奏之由、歸仰聞食之由、便仰可召辨之由、頭辨來候三板敷、仰鐘、乍居三板敷、召藏人仰之、藏人出無名門外、仰圖寮寮、即槌鐘、次出居次將五人公時朝臣已下、經小庭青環門等着座、次余已下着御前座、第一敷、次催僧、即從僧等、置草座香爐宮、皆悉置了、證義者從僧五人、又持參之、次僧參上、次威儀師惣在座、着座、次講請師着禮盤、威儀師稱惣禮、即三禮、次登高座、其後次第如例、表白之間、實教朝臣出自殿上（々）戶、着講師高座西邊、仰御願趣說法論義、問者國城新問題許也、（從憲乍居）了經緣着定、覺憲乍在高座、仰鐘也、咒願三禮、於南廣庇西第一柱下、召覺憲從僧、二音、其詞云從憲法印次從僧參上、數禮盤上、次咒願三禮着禮盤、次經緣進就行香机下、次余已下、進寄其南、先是行香如例、經御後次歸着行香机下、返還輪復座、如本帶劍、相賀、通親如此、他次僧徒退下、次公卿起座、余歸着殿上、召兼忠奏事由、歸來仰可始之由、便仰鐘、次出居着、次參上着座、次僧昇、

次說法論義了、有禮也、僧退下、次公卿退下、次有詔書覆奏、於鬼間加可字、宗隆傳覽之、上用盡御座硯、如例、即返給、次余退下、今日參入公卿、

大納言實家、

中納言隆忠、賴實、通賴、經房、

參議基家、雅長、

堂童子、

左方、御所方也、定經、定忠、

右方、信清、起山居座動之、公賴、

此日出仕以前、宗賴朝臣召具陰陽師業俊、宣平等參上、問春日佐異佐所、其長者病事口舌之由、丙丁日可慎之云々、退出之後、親經來申條々事、

廿五日、丙天陰、及晚雨下、終夜不止、但其雨微而猶

乏農業之要、余依物忌不參內、

今朝座慶智僧都、問者東大寺增運、夕座辨曉僧都、問者興福寺實教、

堂童子、

左方、爲賴、能季、

右方、忠行、基定、

公卿、

中納言定能、兼光、

參議隆房、親宗、

散三位雅隆、家房、

入夜親經來、申住吉天王寺論申殺害之間事、并四角四堺祭用途之間事、亥刻、北方有火、法成寺近邊雖有疑、遣男共令見、隔五六町、北方也、又火勢已滅了、仍不參、此夜法印被來、此日、春日恠異物忌也、

廿六日、丁申刻天晴、宗隆來申僧事所望申文等、在目折紙、仰可奏之由、又內裏修理掃除、超例年尋常之由、或仰之、

今日朝座靜嚴律師、問者與福寺範慶、

夕座信宣律師、問者延曆寺仁快、

堂童子、

左方、親經、高通、

右方、顯兼、公賴、

公卿、

賴實、通親、泰通、已上中納言、

隆房、通資、已上參議、

顯信、家房、散三位、

入夜右中辨基親朝臣來、只今所入洛也云々、依深

更不及子細、

廿七日、戌天晴、此日、寂勝講第四日也、昨日一昨日、依堅固物忌不參也、午刻着束帶、先欲參院之

間定長爲御使來、僧事之間事也、任人卅人、非據非

一、所存條々申了、定長卿歸參、余相續參院、僧事之間事、一兩度有御問答、雖被停少々任人、猶以

驚耳目、歟、未刻參內、少時右大辨實房參入、余於殿

上、付頭中將實教朝臣奏事由、召右少辨親經、實教、教、

仰鐘、次々如例、朝座中間、實房卿依賑給

定事、着陣、親宗同、余相續起座參御所、依大納言

已上不候座、頗輕々之故也、朝座了親經覽賑給定

文、見了返給、次夕座被始、泰通卿已下着御前座、

余猶在簾中、事訖下直廬、

朝座講師圓輔法服、問者與福寺範圓、

夕座講師成寶律師、問者園城寺四家、

參入公卿、

右大將、實房、

中納言、泰通、兼光、

參議、雅長、親宗、

散三位、顯信、雅隆、

堂童子、

左方、親國、家實、

右方、高通、忠行、

此日依<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>僧事<sub>一</sub>、上卿泰通卿、辨親經被<sub>レ</sub>行事等、一々非據、就<sub>レ</sub>中實慶任<sub>二</sub>僧正<sub>一</sub>、未曾有之非據也、去年兩度有<sub>二</sub>此沙汰<sub>一</sub>、余乍<sub>レ</sub>恐申<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>、仍無<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、而遂以如此、天下之政、聖化可<sub>レ</sub>期<sub>二</sub>來世<sub>一</sub>歟、可<sub>レ</sub>悲々々、三會一、山階寺別當僧正無<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>申事<sub>一</sub>、第二辨曉此兩三年前前任<sub>二</sub>律師<sub>一</sub>、熊野御經供養所去々年任<sub>二</sub>僧都<sub>一</sub>、大佛開眼所齡未<sub>レ</sub>及宿老、連年昇進、頗爲<sub>二</sub>過分<sub>一</sub>之上、今日轉<sub>二</sub>大僧都<sub>一</sub>云云、雅緣明日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>居下、依<sub>二</sub>薦次下薦<sub>一</sub>也、件人身爲<sub>二</sub>丞相子<sub>一</sub>、才又越<sub>二</sub>等倫<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>公請<sub>一</sub>無<sub>二</sub>比肩之人<sub>一</sub>、當時爲<sub>二</sub>〔公〕平講師之第一、隨又所<sub>レ</sub>望<sub>二</sub>法印<sub>一</sub>、而其事無<sub>二</sub>許容<sub>一</sub>、忽被<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>當座之耻<sub>一</sub>之條、專可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>不便<sub>一</sub>、仍勝詮雖爲<sub>二</sub>第三<sub>一</sub>、齡餘<sub>二</sub>七旬<sub>一</sub>、才又爲<sub>二</sub>法相之棟梁<sub>一</sub>、仍被<sub>二</sub>抽<sub>一</sub>任權少僧都也、上薦可<sub>レ</sub>超<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>然之人<sub>一</sub>之時、以<sub>二</sub>下薦<sub>一</sub>之無<sub>二</sub>超越之愁<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>登用<sub>二</sub>定例也<sub>一</sub>、仍所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行歟、但被<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>雅緣法印<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>辨曉<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>轉<sub>二</sub>大僧都<sub>一</sub>、不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其難<sub>一</sub>歟、世之所<sub>レ</sub>推、猶以<sub>二</sub>辨曉之大僧都<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>過分<sub>一</sub>歟云云、今夜宿<sub>二</sub>候內裏<sub>一</sub>、親經申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、意見給親經了

廿八日、巳天晴、此日最勝講之結願也、未刻着<sub>二</sub>束帶<sub>一</sub>

參<sub>二</sub>御所<sub>一</sub>、今日大納言不<sub>レ</sub>參、仍余不<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>殿上并御前座<sub>一</sub>、權中納言隆忠卿已下着<sub>レ</sub>之、每事如<sub>レ</sub>例、及<sub>レ</sub>昏事訖、隆忠已下取<sub>レ</sub>祿、此間余退出、雖<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>院<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>近習者<sub>一</sub>、空退出、

朝座已講降延、問者與福寺圓綱、問者延曆寺公圓

夕座已講信憲、問者延曆寺公圓

公卿、

中納言、隆忠、親實、定能、通親、

口口、經房、泰通、兼光、

散三位、家房、

堂童子、

左方、棟範、定家、

右方、宗隆、五位藏人、顯兼、

廿九日、庚午天晴、此日被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>造東大寺司除目<sub>一</sub>、長官權右中辨定長朝臣也、行隆代也、外記爲<sub>二</sub>內覽<sub>一</sub>持來、見了返給、宮城使、防河使等同欲<sub>レ</sub>任、而院御<sub>二</sub>幸嵯峨<sub>一</sub>、仍不能<sub>二</sub>奏達<sub>一</sub>之間、今日不<sub>レ</sub>行也、此日被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>四角四堺御祭<sub>一</sub>、先兼光卿參<sub>二</sub>陣<sub>一</sub>、勘<sub>二</sub>申日時<sub>一</sub>云々、



六月〔小〕

一日、辛小雨、申時許參內、自今日至來四日、可禪候禁裏也、內府渡邪氣之間、神今食齋有憚之故也、參內以前、藤中納言定能、前源中納言雅賴等卿來、各謁之、於內裏定經來申條々事、多是寶劍之間事也、

二日、壬天陰、酉刻大雨即止、入夜又下、終夜滂沱、近日頗愁旱魃之處、今雨、實是善龍之所化也、萬民散愁、一天愷樂者歟、親雅來申初齋宮之間事、

三日、癸天晴、依去夜雨、鴨河雖增水勢、田畝不及流損、自今朝主上聊有御不豫事、欲行御占之處、依日次不宜延引、御惱之弊、偏御腹痛之所爲也、召典藥頭定成、問御療治事、又以職事御教書、可奉祈念之由、仰御持僧等、召宗隆仰御厨子所訴、可申沙汰之由、又親經申右中辨基親朝臣、歸洛條々申狀等、仰可奏聞之由、其後條々有可被召問事等、就先日被仰下之旨、注篇目可申上之由仰之、

四日、甲天陰、親經申行幸之間事、來十二日滿卅五日、可有御方違、又十四日、依御靈會可有行

幸他所、仍自十三日至于十四日、可御押小路殿、而賢所不出御京外、事已難治、爲之如何、仰可奏之由、院宣云、自七日可御參籠、今熊野、仍件間、大炊御門御所不可指合、早可有臨幸彼御所者、尤神妙、親雅申群行之間事、其中有前使判官事、中臣氏之中、撰堪事之輩或二人或三人、所被仰下也、今度可仰下三人之由下知了、此日有請印政并軒廊御卜、上卿共兼光卿云々、酉刻自內裏參院、以定長入見參、依召參御前、奏意見之間事、并諸國可被直立之子細等、暫而退下、殿上邊以定長條々有申入事、其中閑院修造事、可有忍沙汰、可被尋功國之由奏之、仰云有賜下野國、可勸仕彼修理之由、申人哉否、早可相尋、又自御所、可被尋云々、即退出冷泉家、今日、余退出以前、兼雅卿來臨內府方云々、今晚〔內府〕追邪氣、驗者給單重并牛等、

五日、乙雨下、寢殿北面造營作泉、今日終作事了、宮內大輔盛房密語云、相少納言入道宗綱內々申云、殿下明年爲御重厄、殆及命之危、又內大臣殿、今年可有御慶賀云々、各不見其容貌、暗有此申狀、難

取信事歟、然而爲後注<sub>二</sub>證之、又云、法皇不可<sub>レ</sub>過給今年云々、故女院御月忌、於九條<sub>一</sub>行之如例、六日、丙天晴、午刻定經來、申寶劔之間事、并新三位光雅昇殿事等、近代公卿昇殿、無異議歟、早可<sub>レ</sub>仰下之由仰之、宗隆以消息申云、父入道去夜絕入、適雖蘇生、更無其偶、仍所承之事等、忽不能<sub>レ</sub>申沙汰云々、尤聞歎之由仰遣了、親經注<sub>二</sub>申可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>問字佐使基親之間條々事、依先日召仰也、兼忠申祇蘭御靈會馬長散狀、仰可<sub>レ</sub>奏之由了、〔此日物忌也〕、七日、丁天晴、頭辨兼忠來、傳院宣云、馬長領狀、其數非幾、事已神事也、儘可<sub>レ</sub>令騎進之由、殊可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>隨責、若猶致對捍者、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>除殿上籍者、早任院宣、可<sub>レ</sub>加催之由仰下了、及晚定經來、仰院宣云、來廿四日、皇后宮職、可<sub>レ</sub>有院號、藏人方奉行、即定經也、本宮事親雅奉行云々、申尤可<sub>レ</sub>然之由、又仰可<sub>レ</sub>宣下之由了、又云、寶劔御祈僧事、可<sub>レ</sub>仰權律師覺尋者、仰可<sub>レ</sub>申仁和寺宮之由了、入夜、新三位光雅來、申拜賀、余依申請給車具并半臂下襲等、雖<sub>レ</sub>申請帶、有所思不賜之、拜賀申次職事經泰、八日、戌天晴、申刻、小雨小雷、親經召具右中辨基親

朝臣參上、宇佐宮之間條々事尋問之、申注子細退可<sub>レ</sub>言上之由、大夫史廣房申官申文書之間事、又大外記賴業申穀倉院之間事、此日澄雲法印來、申山惡僧之間事、及三昧院供養事等、

九日、卯天晴、及晚小雨、親經申神祇官申依諸國紀伊、阿波、土佐三國所分也、不進龜甲、不能<sub>レ</sub>行御體御卜之由事、仰可<sub>レ</sub>奏之由了、有國々召頭兼忠朝臣、仰山惡僧之間事可<sub>レ</sub>奏院之由、以定經奏兩社行幸事、

十日、辰天晴、親經申月次、神今食、諸國難濟子細、并依諸國不濟龜甲、今日御體御卜奏可<sub>レ</sub>延引事、仰可<sub>レ</sub>奏之由、即歸來仰云、月次祭用途事、猶可<sub>レ</sub>資國國、御卜延引事、聞食了云々、諸國申狀、奇怪多端、然而一言無被<sub>レ</sub>答仰下之旨、自今以後、公事之陵遲只在如此事歟、賞罰之二柄者、理政之大綱也、御體御卜、無故延引、元曆之外無例云々、早問日次、可<sub>レ</sub>申上之由仰了、入夜廣房參上申云、明日神今食辨闕如了、仰云可<sub>レ</sub>資基親者、此夜隆職來、申官申文書之間事、

十一日、辛巳天晴、申刻、大雨雷鳴即止了、早旦、天文博士廣基來申云、去夜太白犯東井、大將慎也云々、而今

日依大雨消了、去〔夜〕比月犯心大星、爲重變、翌日雨降銷了、今又如此可悅々々、此日、月次神今食祭也、上卿新中納言云々、兼忠申山惡僧之間事、座主申狀有候々々仰可仰座主使應之旨、并可奏聞之子細等了、親經申明日行幸之事、定經來傳院宣云、行幸行事辨、相計可仰者、又云資劔求御祈僧事、仁和寺宮直可被請定之由、被申之、余仰云、以院宣猶彼宮可被請定歟、職事奉行、不可事行之故也、又行幸行事辨、〔事〕兼忠〔本〕奉行也、而依服假辭退、今彼日數過了者、可被仰兼忠歟者、亥刻、自〔内〕裏女房送札云、聊有御不豫事者、仰頭辨兼忠云、早參内尋聞御有様、御卜以下事、可申沙汰者、夜半兼忠來、示殊事不御之由、

十二日、壬午天晴、此日、御方違行幸也、法皇御參籠今熊野之間、大炊御門亭、無指合事、仍有行幸〔于〕彼亭、明後日十四依御靈會、可避閑院給、實所同可、有渡御、仍白川押小路殿、爲京外之間、内侍所不御、京外例也無臨幸者也、秉燭之後參内、先是公卿次將少々參入、奉行五位藏人親經覽日時、行幸并内侍所、見了於御所、返給、出御載東陣、自夜御殿、當太白方哉否、可尋

之由仰之、親經申云、宣憲申云、不當正方、當乙方也云々、余計合東行南行之處、南行十四五丈、東行僅權九丈余也、仍可謂丙方、不可謂乙方、宣憲自本尾籠〔之〕人也、但雖有陰陽師之言失、〔於〕不當正方之條者、惟同、仍所被用東門之由仰之、小時右大將參入之後、出御如例、余自閑路參會、入自大炊殿東面北門、蹕而臨幸下御之後、鈴奏名謁了入御、其後賢所入御、次余出自南面西門退出、依爲陣中、不用車步行也、

此日、供奉公卿、

右大將、實房、泰通、

中納言、通親、經房、兼光、

參議、通資、

散三位、雅隆、光雅、

今日行幸以前、兼忠來申山惡僧之間事、座主使應等申狀、仰可奏〔之〕由了、又賴業來申三昧院供養堂、童子諸大夫、并執蓋等役人事、又親經申條々事、今日内侍所供奉、少將信清、五位藏人宗隆依内侍所渡御、今日無留守、但女房少々留候、仍仰藏人瀧口并大番武士等、令守護之、



十三日、未天晴、山法印被<sub>レ</sub>來、今日依<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>際也、親經來申<sub>二</sub>參河國申兩條宣旨事<sub>一</sub>、一出舉利加增事、仰云先可宣下出舉利事、於錢事者、猶仰外記、召勘文、經沙汰、可有停否之左右、於今錢者、不可及、議定、早可停止、但宣下仰詞、分別可載也者、又申高原宮造營事、勘先例之處、三ヶ度不同、或本宮國司、筑前國云々相共修造、或社司修造云々、余云、天下豐饒之昔、猶有<sub>二</sub>本社修造之例<sub>一</sub>、況天下已弊哉、況宇佐造營指合哉、早任<sub>二</sub>本營宮修造例<sub>一</sub>、可宣下者、又基親朝臣參上、宇佐清祓之間事條々問<sub>レ</sub>之、大略無<sub>二</sub>通申方<sub>一</sub>歟、及<sub>レ</sub>晚參內、依<sub>二</sub>非旅所之議<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>整固<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>賢所<sub>一</sub>、殿上陣座、盡御座等<sub>二</sub>之故也<sub>一</sub>、小時依<sub>レ</sub>召參<sub>二</sub>宮御方<sub>一</sub>、女房謁<sub>レ</sub>之、次參<sub>二</sub>八條院<sub>一</sub>、深夜歸<sub>レ</sub>家、十四日、甲此日祇蘭御靈會也、仍<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>神齋<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜還<sub>二</sub>幸於閑院<sub>一</sub>、戊刻參內、行、小時出御、御反閑如<sub>レ</sub>例、今日右大將不<sub>レ</sub>參、新任之人、略<sub>二</sub>還御之供奉<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>不忠<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>閑路<sub>一</sub>參會如<sub>レ</sub>例、下御之後、鈴奏名謁、其後還<sub>二</sub>御本殿<sub>一</sub>、余取<sub>二</sub>御裾<sub>一</sub>、貫首五位藏人等、不<sub>レ</sub>候之間、無<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>余裾<sub>一</sub>之人、仍只引<sub>レ</sub>之也、實教、重綱、兼忠不<sub>レ</sub>參、奇親經供<sub>二</sub>奉賢所<sub>一</sub>、宗隆父入道、萬死一生、定經

先度行幸之時、與<sub>二</sub>大理<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>事、其後怨<sub>二</sub>彼事<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>奉行幸<sub>一</sub>云々、一昨日同不<sub>二</sub>供奉<sub>一</sub>、次第太不當、返々奇恠、末代事觸<sub>レ</sub>類如此、上無<sub>二</sub>糾斷<sub>一</sub>之所、致也、卽以退出、

參入公卿、

中納言、通親、泰通、兼光、

參議、通資、隆房、

三位、光雅、

內侍所、少將成家、五位藏人親經、

十五日、乙天晴、此日、祇蘭臨時祭也、余不<sub>二</sub>參內<sub>一</sub>、宣命上卿、西口口口口使、口口口口口口又立<sub>二</sub>祇蘭神馬<sub>一</sub>十烈<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>常、但今度當社初度也、幣帛一串也、陪膳彈正大弼資泰朝臣、奉行仲盛、使散位藤<sub>一</sub>原<sub>一</sub>基清、非職也、藏人五陰陽師天文博士廣基、其儀如<sub>二</sub>他社例<sub>一</sub>、使必可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>社頭<sub>一</sub>之由、以<sub>二</sub>行事<sub>一</sub>仰<sub>レ</sub>之、兩三町騎馬相從、其後以<sub>二</sub>車參<sub>一</sub>社頭<sub>一</sub>云々、經他小路今日親經、申<sub>二</sub>宇佐之間事<sub>一</sub>、仰<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>基親<sub>一</sub>之由、親雅申<sub>二</sub>初齋宮之間事<sub>一</sub>、定經來、余仰<sub>二</sub>寶劔之間事<sub>一</sub>、凡每事如<sub>レ</sub>泥、力不<sub>レ</sub>及、今日雅賴卿來、奉幣之後謁<sub>レ</sub>之、十六日、丙天晴、今日遣<sub>二</sub>宗賴朝臣<sub>一</sub>、兼時等、於<sub>二</sub>法成



寺、令沙汰修理之間事、即歸來申子細、大畧金堂廻廊、可宛長吏分<sub>二</sub>之由也、召大夫史廣房、仰<sub>二</sub>條々事、官奏今月可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行、兼忠朝臣申<sub>二</sub>山惡僧事、<sub>座主有<sub>二</sub>申旨、</sub>依<sub>二</sub>所勞<sub>二</sub>不出仕云々、事大事也、早相<sub>二</sub>扶所旁<sub>一</sub>身、今夕明旦之間、可<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>之由仰<sub>レ</sub>之、

十七日、<sub>天晴、以<sub>二</sub>親經<sub>一</sub>奏、裝束使御祈願<sub>一</sub>奏、<sub>已上<sub>二</sub>朝臣、</sub>率分勾當辨、<sub>定長朝臣、先例多爲<sub>二</sub>正中辨之職、仍兼忠臣仁臣、</sub>也、<sub>右中辨基親下<sub>二</sub>向字佐<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>一事、於<sub>二</sub>事、</sub>口口事等、又奏<sub>二</sub>無沙汰<sub>一</sub>之由、世上<sub>二</sub>區區、忽難<sub>一</sub>應<sub>二</sub>清<sub>一</sub>、<sub>口口事等、</sub>又奏<sub>二</sub>他事等<sub>一</sub>、歸來云、裝束司御祈願事聞食了、早可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>兼忠朝臣、</sub>率分事定長辭申、此上可<sub>二</sub>相計<sub>一</sub>云々、<sub>以<sub>二</sub>盛隆<sub>一</sub>被<sub>二</sub>同<sub>一</sub>定</sub>

長々々申<sub>二</sub>午<sub>一</sub>、<sub>上<sub>二</sub>廣房、</sub>又尊勝寺辨之間、依<sub>二</sub>親經尾籠<sub>一</sub>、頗有<sub>二</sub>逆鱗之事<sub>一</sub>云々、即以<sub>二</sub>親經<sub>一</sub>申<sub>二</sub>仔細<sub>一</sub>、聞食披云々、凡雅賴、兼忠父子共、殊天氣不快云々、雅經來云、院號事、如<sub>二</sub>余申<sub>一</sub>廿八日可<sub>レ</sub>宜之由有<sub>レ</sub>仰者、以<sub>二</sub>定經<sub>一</sub>奏<sub>二</sub>寶釧之間事條々事<sub>一</sub>、此事不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>法皇御心<sub>一</sub>、又天下之人嘲哂云々、一身奔營、甚異樣也、又不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶事也、仍若不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>此沙汰<sub>一</sub>歟之由奏之、兼忠來仰<sub>二</sub>院宣<sub>一</sub>、<sub>山惡僧<sub>二</sub>事也、</sub>以<sub>二</sub>御定<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>座主<sub>一</sub>之由仰<sub>レ</sub>之、此次仰<sub>二</sub>職事番<sub>一</sub>、并藏人方公事見參事、此日以<sub>二</sub>廣房<sub>一</sub>遣<sub>二</sub>左府亭<sub>一</sub>仰云、去年不被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>不堪奏<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>寬仁例<sub>一</sub>、去年行<sub>二</sub>去々年分<sub>一</sub>、

今年又可<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>去々兩年分<sub>一</sub>、而今年分、多及<sub>二</sub>歲暮<sub>一</sub>、不可<sub>レ</sub>然、任<sub>二</sub>例九月中<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>行之由存思給、去年分可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>彼以前<sub>一</sub>、仍今月可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行、且又施米事、式月被<sub>レ</sub>行、爲<sub>二</sub>上計<sub>一</sub>歟、兼又七月依<sub>二</sub>吉例<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>殿上所宛<sub>一</sub>也、兩條共、一上必可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>參事也、出仕之有無如何、又官奏事一上之寂也、且任<sub>二</sub>彼命<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>意文書<sub>一</sub>之由仰<sub>レ</sub>之、即歸來云、畏承了、雖<sub>二</sub>所勞無術<sub>一</sub>、殿上所宛必可<sub>レ</sub>參也、官奏今月中、猶難<sub>二</sub>出仕<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>他上卿<sub>一</sub>歟、若又延引者可<sub>レ</sub>參云々、仰云一上可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>出仕<sub>一</sub>者、可<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>彼也<sub>一</sub>、官奏不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>指<sub>二</sub>月之故也者<sub>一</sub>、廣房申<sub>二</sub>神祇官注申清祓之間事<sub>一</sub>、

十九日、<sub>天晴、依<sub>二</sub>主上御髮令<sub>一</sub>鍛給、內府參內、日來所勞、近日聊有<sub>二</sub>少減<sub>一</sub>也、先參<sub>二</sub>院以<sub>一</sub>定長<sub>一</sub>申入云々、入<sub>二</sub>夜歸來<sub>一</sub>、此日、每月恒例舍利講也、講師公雅已講、問者仁快、山法印來被<sub>二</sub>聽聞<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>夜定能卿來<sub>一</sub>、</sub>

廿日、<sub>廣未申刻許雨下、即止了、酉刻參<sub>二</sub>院、依<sub>一</sub>召參<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>、良久候<sub>二</sub>招容<sub>一</sub>、參內、亥刻退出、</sub>

廿一日、<sub>天晴、昨日內府所勞又增、爲<sub>二</sub>歎不少<sub>一</sub>、請<sub>二</sub>佛殿聖人<sub>一</sub>令<sub>二</sub>見<sub>一</sub>之、</sub>

廿二日、<sub>壬召<sub>二</sub>定長<sub>一</sub>奏<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、三昧院阿闍梨事、并寶</sub>

劔事等也、歸來云、件阿梨關事尤可然、但五口過分也、先可被宣下三口者、余自本五口之由、雖令申、三口又可定、但五口又不可及、難、即惠心院、并青蓮院等例也、何況今所申請、又有由緒、以三口永可付三塔常行堂云々、旁不可及、難之由奏之、然而不許、又不能強申、此旨示法印之許了、入夜內府所勞殊更發、

廿三日、癸巳天晴、召親經（賜）意見目錄、先日賜意見等、仰可取目錄之由、而忿忙之間、其功難終云、仍取目錄給之、仰可部類（之）由也、招定長奏、三昧院阿闍梨、今一口被加哉之由、猶以不許、仍三口可宣下之由、仰定經了、明日始行法、又可（有）佛開眼云々、（此主登山、勤之）仁和寺宮以使被示云、寶劔御祈僧靜雅領狀了云々、以人數任文、可被付奉行職事之由答了、花山院大納言爲訪內府病來臨、余謁之、

廿四日、甲午內府自今夜又渡邪氣、智詮祈之、雖重服、古昔不相憚之上、佛法之習、全不可憚、仍召之、僧密々整令除凶服云々、雖不然全不可憚之事也、

廿五日、乙未入夜、藤中納言定能來、內府訪也、此日祈雨奉幣也、上卿兼光卿、職事定經、辨基親也、

廿六日、丙申法皇詣日吉給、明後日可有御下向云云、入夜、式部丞光資（藏）持來省試詩判、見了返給、仰可付職事之由、先例少輔持來之、而範光館居之間丞持來也、省官先內覽、其後付職事、々々又內覽、是先例也、定經申云、親雅依所勞、辭申初齋宮事如何、仰云可、仰基親、尊勝寂勝寺等事、仰親經者、

廿七日、丁酉天晴、式部大輔光範來申云、詩判內覽事、近例省官內覽之後、無職事內覽之儀、而光資、少輔重可內覽之由稱有仰返給、爲之如何、仰云光資認言也、省官先內覽返給、付職事、々々又內覽、其後奏聞下省、是定例也、而近代無職事內覽（之）條、尤違例也、但光輔爲藏人之間、若便奏聞了者、於今度者、不可及沙汰、若未奏聞返下者、早可付職事也者、光範云奏聞了返給云々、仰云然者於今度者、不可沙汰、於自今以後者、可存此旨者、

廿八日、戊戌天晴、此日有院號事、停皇后宮職、（法皇第一女、有今國母之儀、爲殷富門院、申刻着束帶參內、先是公御名亮子）

卿等多參入云々、仍以定經、仰可定申之旨、其詞皇可有院執事、何機可申、此間余候、朝餉方、良久定經來、哉、可令定申者了、又般富門、宜秋門、東二條院等、相加云々、其人申其號、云事、職事不分明之間、儘不聞及、大略只如此也、余重仰云、宣陽門者、內裏之中門也、無例如何、又二條者、彼宮御領歟如何、歸來云宣陽門事、人々多定申、且又陽明門院、陽文字吉例也云々、中門之條、定經不當時御所頗寄、東、仍隨、宜所、申出、也、大途只宣陽門也云々、即以定經、奏、法皇、御門、其狀云、人々申旨如此、愚案宣陽門不甘心、先院號者用御所號也、待賢門之時、始被用、無故之門號、然而猶是被准、上東門陽明門等之儀也、建春門、建禮門、被用、內裏、是偏新儀也、建春門院雖吉例、建禮門不吉也、何況於中門者已無例、仍被用、般富門、何難有哉、西面已有上西門例、其字文無難、若猶可被用、內裏門者、宜秋門宜歟、秋字頗雖非吉、於后宮者、得長秋之號、仍女院之號、強不可憚歟、但猶是不甘心、事也、可被用門者、宮城門可然也、二條若又爲御領者、東二條尤可然、非御領者、頗以無

所據歟、所存如此、此上可在勅定者、暫而歸來云、如此事一切不知、案內、只左右相計可被仰云、雖須重取御氣色、已及夜漏、又猶不可分明之成敗、仍任愚案、仰云停、皇后宮職、可爲般富門院、停進屬、可爲判官代、主典代、年爵、年官、御季御服、御封雜物、如舊奉、宛於內膳御飯者、宜從停止者、是每度例狀也、定經向陣仰、右大臣、余即參、大炊御門亭、法皇新女院同居、着女院御方殿上、以二樓廊南面爲其所、右大將已下公卿等着之、對座余在、與、暫而右大臣參着端座、可補院司、之、人々之外、他公卿等皆悉退出了、其後經數刻、余持病更發動、雖不可堪忍、寬治天治例、執政臣仰下院司、今度被逐、天治例云々、仍強以祗候、良久之後、左中將公衡朝臣權亮、參候寢殿、寶子敷、賜院司、交名折紙、來受余、須依、重召、參進中央間、可給也、而御所在、東第一間、歟、可余一見了返給、仰可仰下之由、即起座退出、依神心不快也、今日參定公卿、

右大臣、

大納言、實房、

實家、已上三人宣陽門院、

中納言、隆忠、股富、賴實、宣陽、定能、股富、宣陽、

通親、殷富、經房、  
宣陽、兼光、同、

參議、雅長、安喜、東親宗、  
宣陽、立秋、

通資、殷富、

此外泰通卿、雖參入依遲參、不定申云々、

院司、

公卿、

右大將實房、新大納言實家、從三位光雅、

四位別當、

公衡朝臣、定長朝臣、

判官代、

定經、家實、光重、

主典代、

景宗、

今日、業俊持<sub>三</sub>來<sub>二</sub>天文密奏、又史持<sub>三</sub>來月奏、此日被

勘<sub>三</sub>清瀨龍穴等御讀經日時、上卿兼光卿、

廿九日、<sub>乙</sub>陰晴不定、親經定經等來、申<sub>三</sub>條々事、六月

祓如<sub>レ</sub>例、陪膳家司、文章博士光輔朝臣、余女房姫君

在<sub>三</sub>一所<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>常、內府又此後修<sub>レ</sub>之、陰陽師、兩方共天

文博士廣元也、

右文治三年夏此一帙墨付八拾六枚者先年松殿右幕  
下道昭卿依爲予三男任懇望聽之仍彼卿被繕寫之畢  
抑法性寺忠通公之有職其二男松殿基房公親面授而  
傳于後法性寺兼實公且加日錄號玉葉爲后昆之龜鑑  
自爾以來雲抄無讓他家吾後者守此旨秘握而可貯深  
奧者也

慶安二年<sub>己丑</sub>季夏虫拂之節陶化翁(花押)誌焉

玉葉卷第四十九終



玉葉 卷第五十

自文治三年七月  
至同年九月

文治三年秋〔丁未〕  
七月

一日、庚子天晴、入夜大風、每四季之朔、有祈請神宮事、是例事也、仍解除遙拜、着衣冠已刻〔許〕着直衣、參內、內府渡邪氣、仍參內、終日祀候、入夜退出、於內裏基親申初齋宮事等、伊勢國司申狀、并前使判官等事也、定經申寶劍事等、親經來云、鴨川合社祝可補賴明之由、有院宣、早可下知之由仰下了、又云、明日鳥羽院御忌日、仍可免物、近年定例也、須明日奏聞、而今夕有御幸鳥羽、仍只今參院奏之、御點廿人云々、先々於院被合爪點、而今度被合墨點了云々、大外記賴業持來錢勘文、先內々所持參云々、  
二日、辛丑自夜甚雨、已刻以後天晴、此日、最勝寺御八講結願也、法皇、八條院、去夜渡御鳥羽安樂壽院、今日又祈雨幣也以藏人爲使、及晚內宣日時宣命等、宗隆來申、條々事、日來瘧病、不出仕云々、親經來申、龍穴御讀

經之間事、先例與福寺別當必勤之、有障之時權別當又勤之、自餘僧綱以下勤仕之例、問官之處、治曆寬治兩度有此例云々、仍何人當其仁哉之由、內々遣問別當之許了、

三日、壬寅天晴、此〔日〕、法勝寺御八講始也、去年於常行堂行之、無御幸、今年有議、於講堂被修之、依可有御幸、已刻着東帶參院、白川押小前駟十二人、移馬舍人居間等仰即殿令副之、於居間者給給裝束了云々、伴二位中將、內府依所勞不參也、相續右大將參入、以定能卿入見參、暫與右大將交語、小時定長爲御使來云、聞食所勞之由、強以參入尤不便思食者、申畏承了之由、頃之定能卿來、告御裝束了之由、即出御、余以下廟以起座、人々降立庭上之間、法皇懸佇立中門、給、余候御前人々下立之後、申事由、即遣御車於中門北廊車寄妻戶、余褰御簾、即乘車給、余着沓降庭上、立中門邊、人々騎馬之後、遣出御車了、余乘車供奉御後、

北面男共御幸入法勝寺西門一給、余參自北門、件門未立、只  
 也、御車寄御堂東面、北、堂余襄御座、下御之後、經  
 北西北上、廻西着南面廣庇座、乍着、舍過、南壇上、先  
 是解劍也、右大將以下、經南壇下一廻西、同以着  
 座、朝夕兩座如常、朝座講師、法印覺意、證義者兼行之、仍無  
重難、定例也、夕座講師、僧都第三、第二推  
 結願也、朝座有行香、右大將云、大乘會有御幸之時、  
 北方壇上作輪云々、余案之不可然、只不作輪直  
 廻、何難之有哉、壇上徒跣之列立、頗無便宜之故  
 也、凡行香之習、兩所作輪是例也、而法成寺御八講、  
 有先輪、無後輪、是隨所便、今畧先輪有後輪、  
 是又隨便宜也、但下薦人々爲上首之時、壇上輪又  
 何事之有哉、如此事依人依事、隨時隨地、何必守  
 株而已、事訖還御之時、余襄御座、自南壇上、引出御  
 車之後、余帶劍於北門乘車、欲參押小路殿之  
 處、心神不快、直退出、還御之次、御覽九重塔云々、  
 件塔地震之時、殊以傾危、其後于今無沙汰、今曉爲  
 寺家之沙汰、以奈良工令直、無爲令終其功了云  
 云、  
 四日、癸天晴、圓長已講、爲奈良僧正使來、山田寺佛  
 之間事也、余召簾前聞之、又示仔細了、

五日、甲辰晴、早旦雅緣僧都來、不謁之、申刻、權別當  
 覺憲來、以人仰云、龍穴御讀經、別當僧正被辭申、他  
 僧綱等依御八講在京、仍明日延引了、來八日可被  
 行也、先例別當有障之時、權別當勤之、又必淨行之  
 人勤此御願、下向之時、早可被勤仕一歟者、覺憲申  
 云、去年勤此御願、有効驗、無勸賞、而於其事者  
 不可申、卒爾之間、每事無計畧、又以下僧綱之中、  
 勝詮在其仁、而可勤最勝光院御八講、仍在京及數  
 日一歟、別當有障之時、以代官勤仕、先規已多、不  
 可及、關如一歟者、入夜親經參上、別當僧正被申  
 云、勝詮當其仁、其外濫行、僧綱弱年已講、其不堪  
 勤仕、擬講以下雖有其器量、先規不分明、若令信  
 圓代官勤仕如何、可隨重御定者、代官之條、覺憲  
 申狀、已以符合、仍可用其儀之由、可仰遣別當僧  
 正許之旨、仰親經了、  
 六日、乙天晴、基親來申、初齋宮之間事、宗賴申、南大  
 門棟上之間事、親經來八日申、神泉御讀經之間事、又  
 俊經入道所勞、萬死一生、仍明曉可馳向、西郊僧徒之  
 間事、明日不能奏達云々、仍明旦可馳參之由、  
 仰遣宗隆許了、

七日、兩天晴、未刻、宗隆來、遇發奇性、如泥、未練之人歟、余奏曰、祈雨御祈、雖三片時、可被<sub>レ</sub>忿之處、依<sub>レ</sub>僧徒對捍、于<sub>レ</sub>今不被<sub>レ</sub>遂行、去二日以後、有沙汰、兩長、者、對捍自然懈怠、希有事也、於<sub>レ</sub>俊證法務者、勤<sub>レ</sub>修護康、祇候院中、可<sub>レ</sub>催除之由有<sub>レ</sub>御定、不能<sub>レ</sub>左右、仁證法印雖<sub>レ</sub>數度相催、尙以固辭、以<sub>レ</sub>別御定、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>譴責、歟、於<sub>レ</sub>今者、私力難<sub>レ</sub>及者、宗隆則參<sub>レ</sub>押小路殿、今朝御幸法勝寺、還歸來曰、可<sub>レ</sub>催<sub>レ</sub>仁證、依<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>御定、則遣<sub>レ</sub>御教書之處尙以辭退者、余仰云、身爲<sub>レ</sub>宗長者、當時祇候院中、炎旱、天下之愁也、縑素爭不<sub>レ</sub>歎哉、而強所<sub>レ</sub>澁之條、爲<sub>レ</sub>法爲<sub>レ</sub>世可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>不忠、尙儘可<sub>レ</sub>參勤者、則返事到來、對捍如<sub>レ</sub>前、仍重奏云、此上雖可<sub>レ</sub>催<sub>レ</sub>俊證、依<sub>レ</sub>御定、免除、仍不能<sub>レ</sub>私進止、抑勝賢僧正、尤可<sub>レ</sub>補<sub>レ</sub>長者一人也、而俊證位在<sub>レ</sub>法印、爲<sub>レ</sub>一長者之間、次第違亂、不能<sub>レ</sub>補<sub>レ</sub>勝賢、俊證已任<sub>レ</sub>僧正、勝賢尤可<sub>レ</sub>補<sub>レ</sub>第二長者也、此時尤被<sub>レ</sub>仰下、可<sub>レ</sub>勸<sub>レ</sub>御願、歟者、宗隆重參院了、今日不<sub>レ</sub>歸來、此日、三方節供如<sub>レ</sub>常、左京權大夫光綱五位上、舊四位、皆故障之故也、兼<sub>レ</sub>行三方陪膳、余節供、攝津守、女房、右中辨、內府、朝臣、八日、丁天晴、宗隆來曰、依<sub>レ</sub>院宣、催<sub>レ</sub>俊證之處、又以辭退、仍覆奏、院宣曰、被<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>上臈長者、如何之由、

可<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>仁證者、則仰遣之處、初以領狀、奏聞之後、可<sub>レ</sub>告<sub>レ</sub>親經之由仰了、余竊案<sub>レ</sub>之、被<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>仁證之條、專不可<sub>レ</sub>然、勝賢於<sub>レ</sub>今者、可<sub>レ</sub>斷<sub>レ</sub>長者之思、歟如何、入夜、親經參上申云、自余僧等、各以對捍、一口無<sub>レ</sub>領狀之人云々、仁證可<sub>レ</sub>率<sub>レ</sub>弟子、其外可<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>仁和寺宮之由仰了、法印被<sub>レ</sub>來、九日、戊天晴、已刻、大夫史廣房參上、依<sub>レ</sub>昨日召<sub>レ</sub>也、余仰云、今月可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>殿上所宛、左府可<sub>レ</sub>參之由、先日被<sub>レ</sub>申、出仕之期何比哉、官奏參否又如何、內々相窺可<sub>レ</sub>申、又記錄所事、每事懈怠、尤不便、又實劔事、職事沙汰泥々、自<sub>レ</sub>去春<sub>レ</sub>至今秋、一事無<sub>レ</sub>成、未來又同前歟、汝偏相替、可<sub>レ</sub>申沙汰者、則馳<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>左府亭、歸參云、今月下旬可<sub>レ</sub>出仕、於<sub>レ</sub>官奏者無<sub>レ</sub>治術、可<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>次上云々、可<sub>レ</sub>觸<sub>レ</sub>右府之由仰了、基親參上、申<sub>レ</sub>群行之「事」間條々事、宗賴參上、令<sub>レ</sub>陰陽頭宣憲勘<sub>レ</sub>申興福寺南大門棟上日時、今月十三日壬子時午、依<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>太白方、十二日夜可<sub>レ</sub>違方、鳥羽邊可<sub>レ</sub>宜云々、宣憲、在憲等所<sub>レ</sub>申也、兼又十三日若延引者、十六日爲<sub>レ</sub>吉日、雖不<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>立門日、依<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>立屋日、古來所<sub>レ</sub>用來也、法勝寺、最勝寺、宮城諸門等皆立<sub>レ</sub>之、其例不可<sub>レ</sub>勝計云々、



夜入親經來申云、明日欲行神泉御讀經之處、坎日之條如何、仰云至祈雨止雨、雖不忌日次、明後日無難者、今一日延引、何難之有哉、且又可問例、

十日、己〔天〕晴、基親來申群行之間雜事、昨日雖參院、新近習盛隆、爲賴等通傳奏之間、空以退出、今日以定長奏聞云々、條々仰等、不違具錄、定經來申寶劔之間事、僧徒官寮等來十七日可進發、奉幣同十七日之由仰了、又申山惡僧之間事、親經來申神宮上卿、右大將辭退事、仰可奏聞之由了、

十一日、戊〔天〕晴、定經來申寶劔事、親經持來神泉御讀經日時僧名、自今日所被始行也、第二長者仁證法印所勤修也、伴侶廿口、又申他事等、

十二日、辛〔天〕晴、宗隆來申孟蘭盆諸寺上卿散狀、今夜爲三方違向鳥羽、依無可然之所、內々以宗賴朝臣、申請八條院、被取開安樂壽院御所云々、明日與福寺南大門棟上、當太白方、今日違方忌也、康和二年、爲陰陽頭道言奉行、被打丈尺之處、自鳥羽南樓、至子興福寺、南行二百八十六町、廿五丈四尺八寸、東行六十四町九丈、仍不當太白正方、於王相太將軍者、尙爲忌限內也、依件棟上事、造興福寺

次官以政朝臣以下、長官光長、依所勢不向并家司宗賴朝臣等、是房依所勢不向、承爲房一人所下向也今朝下向南都了、

十三日、壬風雨甚烈、此日、興福寺南大門棟上也、造寺長官光長、仍病不下向、次官以政朝臣、并家司宗賴朝臣等、昨日所下向也、寺家搆假屋云々、余以御教書、仰遣親經許云、今日雨、御讀經驗也、先々一旦雖顯法驗、或普難信國土、令殊疑信力、彌可致祈念之由、可仰仁證者、入夜親經來申云、仁證雖申可結願之由、仰可延引之由了云々、又申八幡神人訴事、可仰關東之由有仰云々、余云、宗長事、能保殊有申旨、先被仰彼朝臣〔々々〕可有左右歟之由可奏者、仰管國訴訟之間、親經遣不當御教書於宰吏等之間事、大略無通申方歟、不足言々々々、

十四日、癸今日猶雨下、入夜殊甚、余拜三所盆、且送法性寺了、其議如去年、今夜次官親能來申、明日下向關東之由、余仰條々事了、以國行、去夜廣元入洛云々、親經申云、自去夜赤痢更發、殆難存命、仍明日諸堂孟蘭盆、不能奉行云々、仰宗隆奏事由、仰定長、



十五日、寅〔天〕陰不雨、諸寺孟蘭盆如例、申刻須臾上行此講也、然而僧徒先參法勝寺已下、着直衣參法成寺、前御願之後、參御堂、仍憐念也、了、着直衣參法成寺、車、前近衣冠、隨身布、二位中將所相伴也、直衣、先是經房、兼衣、上禮冠如恒、

光、雅長等卿參入、降居庭中、余着佛前座之後、召行事家司光綱、問事具否、申具之由、仰可始之由、其後講讀師、各銑色裝束、着甲製裝、登高座、講師雅緣、其後依唄師相論、數刻遲々、遂凡僧除已講之外也、上薦勸之、

先例可散花、無意行道之後、說法如常、其後例講始、講師度智其後例時、此間兼智法印着禮盤、供養法與例時、同時終之、其後引紙帷懸白木、等四位家司已下役之、次僧等退下、次余退出、

十六日、卯今曉內府追邪氣、定經來申云、明日寶劔御祈、僧徒官寮等下向、并同御祈奉幣等、爲閣下御衰日、如何之由、外記所傾申也、儲日廿日也、彼日可被行歟如何、余仰云、私衰日何強憚之、但儲日已近、延引何事之有哉、路次雜事、順路國々、每海人糧米等、各已催調了云々、

十七日、丙〔天〕晴、大外記賴業來、內府方授左傳第廿九焉云々、

十八日、巳晴、定經來申云、右府辭退明後日奉幣上

卿、是彼日左大臣始可來之故云々、右大將同可被相伴、仍不可被催云々、被延引奉幣者、可參云云者、不足言申狀歟、余仰云、嚴重御祈也、丞相尤可勤仕上卿、仍內府雖所勞不快、相扶可參上二也者、

定經又云、院仰曰、來廿八日可詣天王寺、八月廿二日可受灌頂、其間巨細事、一事已上可計沙汰者、參上奏可承之由了、此外申他事等、

十九日、戊陰晴不定、舍利講於九條堂行之、明日依奉幣前齋也、大夫史廣房持來八月所宛例、依先日召仰也、本儀今月可被行殿上所宛、延喜等例也、而例文頭辨必入之、而兼忠朝臣遺母喪、未過穢限之間、忽不能復任、不復仕者、又不可入定文、彼穢可及來月上旬、中陰以後、穢必以後、中陰之內雖有例、尚不打任之由、賴行復任除目之後、可被行所宛、仍可注申八月例之由、先日所仰廣房也、今所注申一條院、白河院、高倉院等例也、皆是吉例也、仍來月可被行、於定日者、隨復任遲速、追可仰之由下知了、

此次仰云、寶劔御祈、爲希代之重事、去年奉幣之時、依病不參神祇官、中心愁之、今度遣僧徒官寮等、其沙汰已嚴重、仍扶重病可參、神祇官可致用意、

其沙汰已嚴重、仍扶重病可參、神祇官可致用意、

其沙汰已嚴重、仍扶重病可參、神祇官可致用意、

其沙汰已嚴重、仍扶重病可參、神祇官可致用意、

其沙汰已嚴重、仍扶重病可參、神祇官可致用意、

其沙汰已嚴重、仍扶重病可參、神祇官可致用意、

其沙汰已嚴重、仍扶重病可參、神祇官可致用意、

者、廣房退出了、又仰<sub>二</sub>遣職事定經、大外記賴業等許<sub>一</sub>了、以<sub>二</sub>宗隆<sub>一</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>云、御讀經賞、以<sub>二</sub>仁證<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>僧正<sub>一</sub>者、驚奇不<sub>レ</sub>少、但粗奏<sub>二</sub>仔細<sub>一</sub>了、

廿日、已時々雨降、是日、寶劔御祈、七社奉幣也、伊勢、水、賀茂、松尾、平野、春日、石上、已一點、相<sub>二</sub>具內府參內、先有沐浴解除、奉陰陽師奏茂、行職事末參、然而且可<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>陣事<sub>一</sub>之由、仰<sub>二</sub>內府<sub>一</sub>、仍則

以着<sub>二</sub>陣、相次定經參入、先是奉行辨基親朝臣、并官外記參候、又左大辨親宗、同以參入、小時定經持<sub>二</sub>來日

時定文、當日見訖返給、良久持<sub>二</sub>來宣命草狀<sub>一</sub>云、遣<sub>二</sub>密宗僧都<sub>一</sub>祈<sub>二</sub>請佛法<sub>一</sub>云々、余問<sub>二</sub>大內記<sub>一</sub>云、先例神宮宣命、不<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>佛法之文字<sub>一</sub>之由、粗有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>歟、今載

之若有<sub>レ</sub>例哉、申<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>覺悟<sub>一</sub>之由、仍問<sub>二</sub>兩大外記、并兼光卿等<sub>一</sub>、各申云、於<sub>二</sub>槌例<sub>一</sub>者不<sub>レ</sub>覺申、但不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>不

載<sub>二</sub>其字<sub>一</sub>、只可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>致<sub>一</sub>內外之所請<sub>二</sub>之由歟、是雖不<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>彼字等<sub>一</sub>、更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>事之妨<sub>一</sub>之故也云々、余

案同<sub>レ</sub>之、仍仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>改直<sub>一</sub>之由、但今度內覽草之、彌可<sub>レ</sub>給<sub>二</sub>時刻、仍直可<sub>レ</sub>奏<sub>二</sub>諸書<sub>一</sub>之由仰<sub>レ</sub>之、暫而持<sub>二</sub>來清

書<sub>一</sub>、見了返給、即經<sub>二</sub>右衛門陣<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>神祇官、內大臣、權中納言定能卿、兼光卿等相伴、兼光爲<sub>二</sub>奉幣使<sub>一</sub>、便所從也、入<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>都

芳門<sub>一</sub>、經<sub>二</sub>神祇官北門<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>正廳北戶<sub>一</sub>着座、內侍同

時參入、其後委<sub>二</sub>伊勢幣<sub>一</sub>之間、頗經<sub>二</sub>時刻<sub>一</sub>、余問<sub>二</sub>事具

否於辨、申<sub>二</sub>具了之由<sub>一</sub>、次手水陪膳宗雅朝臣、役定經定家等也、五位藏人役<sub>レ</sub>之先例也、先是、次着<sub>二</sub>拜座<sub>一</sub>、兩段

再拜、隨分凝<sub>二</sub>信心<sub>一</sub>、次中臣以下參列、依<sub>二</sub>王氏所記<sub>一</sub>、數刻不參、領<sub>二</sub>衆<sub>一</sub>、繼之後參入、甚奇次忌部等捧<sub>二</sub>御幣<sub>一</sub>退<sub>レ</sub>列如<sub>レ</sub>常、次召<sub>二</sub>中臣<sub>一</sub>、其間中臣マウ、中臣參上、余仰云、寶劔可<sub>レ</sub>出來給<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、殊可<sub>レ</sub>祈

申<sub>二</sub>者、次中臣等退出、次伊勢幣出<sub>一</sub>東門<sub>一</sub>之後復座、次尋<sub>二</sub>諸社幣立了哉否<sub>一</sub>、皆悉立了之後、余退出、北門外、基親朝臣以下、大外記大夫史等列居、余垂<sub>レ</sub>裾過<sub>レ</sub>之、

內府、定能卿等相從、余直歸<sub>レ</sub>家、神祇官使、  
大祐卜部兼衡、  
大藏少輔安倍泰茂、  
陰陽師、  
阿闍梨練性、仁和寺、

勅使、景弘先日下向了、今朝以<sub>二</sub>書狀<sub>一</sub>、定長之許奏<sub>二</sub>仁證<sub>一</sub>僧正不當之子細、可<sub>レ</sub>申達<sub>二</sub>之由有<sub>一</sub>返札、

廿一日、庚晴、仁和寺宮、以<sub>二</sub>覺朝律師<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>示云、練性有<sub>二</sub>愁申事<sub>一</sub>、仁證雨賞以<sub>二</sub>末弟祐尊<sub>一</sub>舉<sub>二</sub>申律師<sub>一</sub>、練性爲<sub>二</sub>上足<sub>一</sub>、師弟之間、已以違背了、依<sub>二</sub>此怨<sub>一</sub>、難<sub>レ</sub>勸<sub>二</sub>御

願<sub>一</sub>、此時以<sub>二</sub>師讓<sub>一</sub>、惡仁僧都同可<sub>レ</sub>補云々、申狀頗不當歟、

依師匠之遺恨、闕如御願、於理不可、然、早可、被召仰其旨、但奏聞之後、可申左右者、即召遺定經、仰可奏聞之由了、

廿二日、辛雨下、定經來仰云、練性申狀太無謂、儘可下向之由可仰者、重可申仁和寺宮之由、仰定經了、定長示送云、所申可然、不可被任僧正、隨舉申可被許律師者、以宗隆被仰云、俊證以去年御讀經賞、舉申律師、同可被許容哉如何、余申云、去年雨僅雖有法驗、更不及潤國土、仍無賞、今依仁證之効驗、被賞去年之微雨如何、左右可在勅定者、

廿三日、壬雨降、宗隆早旦申送云、長方入道所勞、忽以獲麟、仍不能出仕、抑俊證雨賞、猶可被行之由、有院宣者、余案之可謂未曾有、自今以後、祈雨之法、誰人有其勇哉、召在宣問御方違行幸之間事、定經申條々事、親經病後始出仕、字佐事意見等、懈怠之由、頗加勘發了、無違申方歟、

廿四日、癸雨降、今日可有御方違行幸、而依甚雨延引、親經來申條々事、宗隆依父入道病危急、辭申行幸奉行、仍仰定經之間、宗隆參入、申父病聊落居

之由、花山院大納言來、余謁之、高佐加級之時、避所帶哉否事、問宗隆、并賴業等、各申去所職之由、宗隆云、儘以定長、所被仰下也云々、高佐余惡之取官之由、天下風聞云々、仍所問也、

廿五日、甲天晴、此日、小童渡住山法印房、去々年始行向、其後連々指合、今日永所入室也、二位中將車牛童遣之、布衣前駟六人、衛府長忠武在共、殿上人三四人許、同着布衣連車、小童裝束蘇芳三重、縫重狩衣、地物、ミエダス、キ、文杏葉背薄浪、二藍二重織物指貫、地龜甲、文丸文、女郎花綾單衣等也、不結髮、辛櫃二合、在櫃、新調、納宿衣水干裝束等類、又長櫃一合、納手箱硯宮他物等遣之、今日內大臣參籠日野藥師堂、先年下官參籠依有効驗、所追彼吉例也、渡物氣之後、雖當時無爲、連々之病惱、始終不便、仍以公事之際、所參籠也、用人車、共人六七人許共、又五六人女房、車相具、其室最密々、令參云々、最密之儀也、供一壇御讀經、十二念誦、又有加持等、皆余參籠之例也、

入夜有御方違行幸、大炊秉燭之後、着束帶參內、於殿上一見日時、宗隆、召仰上卿通親卿、留守兼光卿、辨親經、余歸參御前、經家朝臣候御忿角御裝束等、



如例、次出御、余候御裾余下襲、五位藏人宗隆取、依之、依藏人頭不候也、依少納言不參、少將信清候鈴奏、兩將不參左大將參、日故不、出御東門、余參會、自閑路下御之後、有鈴奏名謁、入御之後、余歸家、依爲陣中也、報鐘之後參御所、依經家遲參、密々女房奉結御怨角、通親卿奉仕御裝束、還御之後歸冷泉、

今日行幸以前、有小僧事、俊證去年、仁證今年、等雨寅、并律師一人也、俊證雨寅細素傾之、

廿六日、丑天晴、此日、殷富門院々號之後、始有御入內事、日來依無催、不出立之間、可參入之由、有御氣色之由、內々有聞及旨、仍奉行家實之許問遣之、參入可宜之由有返札、仍忽出立、先參院六條殿、召御前、參今日御幸之由、頗有御感、暫而退下殿上邊、以定長奏條々事、御灌頂之間、可參天王寺之由、同奏之、勅答之趣、又叶御意歟、即參女院、先是大將已下公卿濟々焉、小時蓋御車、公卿列居庭中、余候御車寄、召院司令懸打板也、乘御之後、余降中門、余自閑路參會御所邊、兩三町ハ、供奉出車之後、然而依御車寄可遲參、自閑路忍參也、御車入自右衛門陣余直置公卿休所也、西

面妻戶、余候之、下御之後、參內御方、他公卿等候女院御方、殿上西子午廊北三ヶ間爲其座、南北行頃之還御、候兩所御車寄如初、其後余退出、供奉上下皆束帶、余同之、今日有院司賞、天治又如、此、今日供奉公卿、右大將以下十餘人、殿上人廿人許歟、院唐御車、々副布衣八人、白張、遠引陪支

抑、今日參、不知案內之人、定致疑難歟、待賢門院、美福門院、建春門院等、疎遠之上、其品皆卑、仍一族之輩、殊不供奉也、二條大宮細河院御女、鳥羽院養母、行啓之時、知足院殿常以御供奉、彼者白川院御孫、是法皇之御嫡女、貴重殊甚、彼國母也、是國母也、仍量時儀參入、隨又有御感、故殿仰云、姫宮ハ慶時ナト必可參云々、今八條院也、是故院殊奉貴重之故也、不可比近代卑賤幸女之例者也耳、

廿七日、丙天晴、自女院以家實爲御使、被悅仰去夜參、申畏承了之由、以右馬權頭兼親申院云、今日參上、猶可承天王寺之間事之處、昨日御幸供奉之後、所勞更發、不參入爲恐者、

此日定經來申、長奉送使泰通卿猶固辭、可辭申所帶之由、猶可奏聞之由仰之、今夜奏事、於今者不



可叶、只以消息、可付定長之由仰之、

廿八日、丁天晴、此日、法皇御參四天王寺、自明日、可有灌頂御加行之故也、公卿侍臣從行粧之者、不及廣云々、職事等來申條々事、其中親經申八幡神人訴申宗長罪科之間、能保朝臣申狀等、

此日、女房密々參日野、依內府參籠也、男共四五人在共、盛房駕車相從、一宿也、

廿九日、戊雨下、親經申宗長罪名之間事、以調度文書、可下勘法家之由仰之、依院宣、先日問左右兩府、爲避一身之過也、各申可被問法家之由也、能保朝臣雖拘申神社之訴、不可默止、仍仰聞子細、所下勘也、及晚女房歸來、今日典藥頭定成來、見二位中將腫物、申頗增氣之由、明日日蝕、陰陽道申云、虧初酉一刻、日入同三刻、仍可正現、竿官宿曜道等申云、虧初酉三刻、或戌一刻、仍不可正現云々、然而爲用意、公家可被行御讀經之由仰之、

## 八月

一日、已陰晴不定、午後雨降、藏人辨親經來申條々

事、宗長罪名、昨日下午法家了、而只今能保朝臣重進宗長申狀、申可被副下法家之由、件文全無詮、隨又下宣旨之後、更追可被下文書之例、頗不審、仍可問官外記之由仰之、宗賴申字治、并天王寺詣之間事、今日親經持來意見目錄、可被問人之目錄也爲加一見所召也、今日朝間神齋、又寫心經如例、此日本命日、泰山府君祭也、

二日、庚自曉天大雨、及申刻天晴、又入夜雨、今日召定經、宗隆等、仰條々事、目錄在別、齋宮寮官除目、并同御禊、前驅、日時等定、今月上旬、可被行其事、職事未存款、仍驚仰之、凡近代如此事、下一切不存知、每度自上仰下之、前例全不然者也、未代每人如泥可悲々々、

三日、辛雨下、二位中將腫物、今日加針、侍醫和氣時成、候之、賜牛一頭、入夜參內、主上自昨(日)聊有御不豫事云々、能保朝臣候候、余謁之、頃之參八條院、亥刻歸家、親經申云、頂上有三禁、加灸了、暫不可出仕云々、大夫史廣房參上、左大臣被申、五日官奏難參入之由云々、仍十七日可被行之由仰了、又止雨奉幣可申沙汰之由、仰宗隆了、

四日、壬<sub>申</sub>(天)晴、此日、北野奉幣十列如常、陪膳資泰朝臣、陰陽師縫殿頭賀茂宣平、行事職事信光、使雅樂助忠賴、但件男有輕服事、雖除服猶爲暇日數之內、而北野社、服假之人、不憚參入云々、仍使闕如之間、釣<sub>二</sub>出件男<sub>一</sub>之處、服假有實證、猶依不審、問遣在茂<sub>長者</sub>之處、申云、假日數過了者除服了、輕服之人、供奉神事、當社例也、仍以奉行職事、令取幣、使只相具乘尻、令行列許也、社頭又有憚、大略無其用之使也、然而都闕如不便之間、依無他人、隨宜所行耳、又北野(社)當西北方、然而神馬十烈行列、猶以東爲上、但頗向西、陰陽師座又如此、拜時余向本社方、竟自餘事如例、晚頭宗隆參上、申條條事、祈年穀奉幣十七日之由仰了、御書所(ノ)作文、可待院還御、當時主上聊有御不豫之聞、仍豈不可及沙汰之由仰了、季御讀經事、今月不可被行之由、同仰了、天治群行年、八月被行、季御讀經、寬治十一月被行、仍就吉例、今月不行也、十一月可有兩社行幸、仍十月可宜之由所仰也、

七日、乙<sub>亥</sub>天晴、入夜參內、即向九條、自明日可修恒例念佛之故也、女房同之、今日法印相具小童被

來、

八日、丙<sub>子</sub>天晴、午刻向<sub>二</sub>堂<sub>一</sub>、請佛殿聖人受戒、未刻始念佛、

十一日、己<sub>卯</sub>(天)晴、今夜爲御方違行幸大內、賢所留御閑院、明夕可渡御大炊殿也、行幸之還御、明曉可御大炊殿之故也、此日、內府自日野退出、

十二日、庚<sub>辰</sub>天晴、今晚遷幸大炊殿、依閑院亭可有修造也、仍豈可爲皇居云々、仍有吉書、上卿通親卿云々、此日、齋宮群行日時定也、依居所遠遠、免內覽、上卿實家卿、辨親雅、

十三日、辛<sub>巳</sub>天晴、宗隆申八幡神人訴之間事、親雅申初齋宮之間事、

十四日、壬<sub>午</sub>(天)晴、宗隆申慶清申神人之間事、余相計仰宗隆、書遣御教書、其趣、宗長任法家勘狀、可被行<sub>二</sub>罪科<sub>一</sub>之由也、定經來申長奉送使之間事、入夜結願念佛、即歸冷泉亭、女房同之、恒例十五日結願、今度依神事、今日所結願也、

十五日、癸<sub>未</sub>(天)晴、此日、放生會也、上卿賴實卿、辨基親、出居左少將公國、右少將信清、右衛門權佐定經、右兵衛佐顯兼、左衛門、左兵衛、左右馬等代官也、依神

人訴訟、刻限雖遠期、無為被遂行云々、依昨日御教書、不關神事云々、未刻發遣神馬十列、依陣中於門外乘尻等騎馬、是先例也、陪膳業實朝臣、使邦兼職人五位非職也行事兼時、

十六日、甲天晴、雖當三月蝕、不被停止駒牽事、上卿通親、率分次將顯家、成家等朝臣云々、深更顯家、將來引分馬、職事國行者衣冠、給祿掛、今夜、月蝕御祈、藥師經御讀經、上卿通親卿、奉行定經日來依犬產穢籠居、其後下向放生會、仍兼日事、宗隆奉行、而依大神寶行事為神事、仍當時事定經奉行之、其間定經宗隆卿口論云々、御讀經行事辦、駒牽辨基親朝臣兼行之云々、

十七日、乙天晴、此日有官奏、以東于午應為直廣、甚無偏立、仍後日可改卯酉、去年分不堪荒奏也、先有不堪申文、內大臣參陣、左右府申陣之故也、左大辨親宗、右中辨基親朝臣等候之、官所宛位錄定、已上今年也、公卿分配等、同付行之、其後基親作法無殊失、但越中國用訓詞如何、可尋之、此日、天文博士業俊持來密奏、

十八日、丙天晴、地震、十九日、丁天晴、此日、群行前駟、并次第司定、上卿實

家卿、辨親雅、執筆參議雅長卿、泰茂持來密奏、

廿日、戊雨降、此日、殿上所宛也、乘燭相、伴內府參

內、一上必可候也、仍兼日以大夫史廣房相觸之、

被申、可參入之由、而昨日依脚氣不快、不參天

王寺、仍不能參陣之由、被申、右大臣又稱除、檢

例之處、長曆、天仁已次大臣候之、仍內府所催也、

直廬裝束、如叙位除目議、但副母屋簾、可立四尺

屏風、而依院御灌頂、被借召了、仍只垂簾不立

屏風、不可為例、余并執筆共圓座也、余座前置硯

宮、如例、不置先余着圓座、先是內府向陣召定經仰云、

內、大、此方、定經向陣召之、次內大臣若與座、

次左大辨親宗卿、參着端座末、余目之、親宗經實

子、着圓座、深揖候、余仰文書可召之由、親宗召定

經、召其名仰云、所宛文書、定經退下、即持參之、

參龍例文、並關否勘文、於一體紙、置柳宮、例文紙、廣紙也、或說入覽宮云々、此次定經自國中取出今度宛文、授筆了、親宗

揮笏持參之、余取之置前、親宗復座、次余披見

之、各端頗見之、如本弓之、返置柳宮、揖出之云

云、親宗揮笏取之、復座拔笏候、余仰硯紙可召

之由、親宗又召定經仰之、即持參之、硯筆並續紙二親宗乍柳宮取之置前、本柳宮返給、例文、加盛柳宮、勘文置硯宮下方、須候氣色、



也、而不候〔懸〕之、即摺墨寫返續紙、余乞取宛文讀之、令書兩三行、書之後竊返給宛文、是爲早速也、而書一行、更見之間、彌爲遲々之甚、仍余密々取出所持懷中之宛文、始終讀揚令書之、須臾書了、書年號月日、卷之撤雜具、盛定文一寫於柳筥、挿笏膝行覽之、余取之、披見堂了置前、同親宗調置雜具退、取笏目內府、々々起座進來、余置下、還著本座、笏授定文、內府取之、復座一見了、取笏目親宗、々々經座前、進來內府前賜文、結申退下、不復退、次余召定經仰云、左〔官〕大臣可補殿上別當者、定經退下、以出納告之、天仁左大臣不參、以出納告之、由見爲隆記、還彼例也、次內府起座、次余起座、即退出、改裝束、向九條亭、堂廊女房內府同之、明日可向字縣之故也、今日書所宛定文之間、御書所載、文章博士光輔、仍以定經問廣房、申失錯之由、仍令書式部大輔光範了、本被仰光範了、而載光輔仍所問也、又諸寺之所、除興福寺、仍問之、申云、雖入辨官之所、除、公卿之所、是先例也云云、大辨召文書、事多用殿上辨、而召定經如何、職事若不召儲辨歟、違例也、親宗早速書定文、頗足感歎、仍粗仰其旨、有悅喜

之色、此夜、宗賴來九條、申明日事等、廿一日、丑〔天〕晴、依昨日雨、仰法印覺成、阿闍梨宗嚴等、令祈申之、而今日得晴、可謂法驗揭焉者歟、此日長者以後、始可參平等院、先例多雖當日歸洛、明日依可參天王寺、所一宿也、且又保元故殿有御宿之故也、未明前駟等來、辰刻集、即着冠直衣、白平絹、生衣重帷、淺黃綾指貫也、保元故殿着衣冠、乘唐及兩度之間、被用〔思〕相伴內府、同冠直衣、淺黃綾指貫、仍逐康和例、相伴內府、指貫、清生衣、降自堂西廊西妻、於門外一乘車、庇不懸下簾、遠境定例、內府車、牛都同不懸下、余前駟廿餘人、殿上人、地下君達、諸大夫、慶車、副四人、布衣袴袴、指トカリ矢、股貫烏帽、下臈五人、隨身上臈四人、騎移馬、各不給當色、私結構也、一人岡布衣、布衣上檢非違使一人、明基、染立烏帽子、內府前結帶經着蓋查、駟八人、五位六人、隨身二人、裝束同下臈六人、裝束同侍十人、七人余共、相具中將、三人內府共、相具中將、○南按二中將當作中持懸路頭行列、

先余方居飼舍人、次前駟、爲先下臈、次隨身、次車、次下臈隨身步行、但於河原口騎馬、在檢非違使之後、



次檢非違使騎馬、

次內大臣居飼舍人、

次同前駐、

次御車、

次下臈隨身、

次侍等、

先余中持侍七人、

次內府中持侍三人、

巳四點、到宇治川東岸、稅駕、暫立榻、待內府來、下車乘船、內府同近習人々少々可候、御船、而衆人乘之、少々追下了、然而早出船之間、多在御船、尤不可然、奉行人不覺也、寄船於釣殿下、自船經釣殿、并經本堂東廣庇北緣、并東念佛堂東緣等、入自北廊西面遺戶、內府相具之小時着饌、內府目余陪膳季經朝臣、內府陪膳宗雅朝臣、事了殿上人、諸大夫各着饌、御膳已下、皆寺家儲之、次參本堂、經念佛堂東緣、並經本堂四座等、着正面四座內府同着西第一間疊、與余座隔一間也、件疊本間敷二疊一枚、件疊本敷、召男爲長吏座、然而不被參着二敷、近習殿上人等、候西念佛堂南廣庇邊、次供僧上臈着法服、着佛前禮盤、表白散花、三度如何、事了

給布施被物一重、季長朝臣布施一襲、國行取乍禮盤給之、取之自身取被物、從取布施退下、次余進佛前禮佛之後、參阿彌陀堂、余降自本堂南面東階、內入自北面妻戶、內無其路之故也、柱、候正面、內府在其北禮佛之後、出自南妻戶、參五大堂、昇自正面階、候同間、次參經藏中門內、他人不入、季經宗雅等朝臣、爲取余及內府參入、於壇下一脫、查、壇上徒跣也、是故實也、即退候中同邊、於壇下、脫、查、壇上徒跣也、是故實也、寺家豫敷筵道、依無先例撤之、開封、家司宗賴朝臣着衣冠、勤仕之、長吏法印慈圓、豫被候經藏、余候正面南間疊、內府在其南、長吏被坐正面北間、開正面間犬禦、藏司二人、山、寺各并供僧增覺等、各着法服平袈裟、候犬禦內、知故實、供僧召、次先召、鑓宮、件宮、目錄等被納之由、見舊記之故也、而更以不見、仍尋目錄在所之處、在長角黑漆厨子中之由、藏司申之、仍返給鑓、令取出之、即取出持來、件宮、先見御起請文、土御門右大臣筆、白色紙、折堺有與在御判、本願御、次見目錄四卷、一切經目錄二局、無銘、次披樓御厨子、余內府共入犬禦內、進厨子下、奉禮之、即歸出、今度候正面間、先奉出佛舍利、法印被披之、被納金小宮四口、假立經机、件机犬禦外其北壁際、

上奉<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>之、是非定禮、隨<sub>レ</sub>便也、鑑真和尚五十粒、弘法大師九粒、慈覺大師三粒、智證大師六粒也、而弘法大師一粒、慈覺三粒、其數已加、實可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>神變<sub>一</sub>、若先代相加者、爭其旨不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>注置<sub>一</sub>哉、而敢無<sub>二</sub>其證據<sub>一</sub>、爰知<sub>二</sub>今日增給<sub>一</sub>歟、可<sub>レ</sub>悅可<sub>レ</sub>信、即如<sub>レ</sub>本奉<sub>二</sub>納之<sub>一</sub>、余前<sub>レ</sub>撰<sub>二</sub>真言<sub>一</sub>、等祈<sub>二</sub>申之<sub>一</sub>、次奉<sub>レ</sub>禮<sub>二</sub>弘法大師御本尊愛染王<sub>一</sub>、此外被<sub>レ</sub>納<sub>二</sub>件厨子<sub>一</sub>、木像御佛等、皆奉<sub>レ</sub>禮<sub>レ</sub>之、依<sub>二</sub>日景傾<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>禮<sub>二</sub>其外物<sub>一</sub>、件厨子內、後方<sub>レ</sub>納<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>置<sub>一</sub>手箱數合也、次隨<sub>二</sub>目錄<sub>一</sub>、披<sub>二</sub>要須物等<sub>一</sub>、次余施<sub>二</sub>入道風筆金光明經四卷<sub>一</sub>、加<sub>二</sub>紙<sub>一</sub>、其上以<sub>二</sub>檀紙二枚<sub>一</sub>卷<sub>レ</sub>之、件檀紙聊注<sub>二</sub>付施入之由<sub>一</sub>了、是先例也、故殿保元度、被<sub>レ</sub>納<sub>二</sub>道風香爐峯本<sub>一</sub>、入道關白仁安、又被<sub>レ</sub>納<sub>二</sub>手本一<sub>一</sub>、各有<sub>二</sub>施入狀<sub>一</sub>也、模<sub>二</sub>件兩度書樣<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>書也、件經臨期召<sub>二</sub>取之<sub>一</sub>、宗賴朝臣持<sub>二</sub>奏之<sub>一</sub>、

文治三年八月廿一日、初參<sub>二</sub>平等院<sub>一</sub>、開<sub>二</sub>經藏<sub>一</sub>之次、施<sub>二</sub>入<sub>一</sub>〔小〕野道風筆金光明經一部四卷了、

攝政、在<sub>二</sub>御列<sub>一</sub>、

件經加納被<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>如<sub>一</sub>此之經等之手箱、件手宮在<sub>二</sub>〔西〕中厨子<sub>一</sub>也、札云御堂御筆、然而他筆經等多入<sub>レ</sub>之、其後見<sub>二</sub>琵琶并琴等<sub>一</sub>、要樞之物等少々見了、依<sub>二</sub>日景傾<sub>一</sub>、皆悉如<sub>レ</sub>本奉<sub>二</sub>納每物<sub>一</sub>、余付<sub>レ</sub>封、次出<sub>二</sub>經藏<sub>一</sub>歸<sub>二</sub>宿所<sub>一</sub>、于<sub>レ</sub>時日沒以後也、經藏并

鑑宮<sub>是經藏也</sub>、等封、長吏及家司等付<sub>レ</sub>之、不<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>長者封<sub>一</sub>先例也、凡寶物檢知之間事、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>委錄<sub>一</sub>、余先公之末子、愚昧之暗質也、只以<sub>二</sub>積善之餘慶<sub>一</sub>、忝蹈<sub>二</sub>列祖之遺蹤<sub>一</sub>、今詣<sub>二</sub>此靈祠<sub>一</sub>、拜<sub>二</sub>被重寶等<sub>一</sub>、一者可<sub>レ</sub>悅、一ハ可<sub>レ</sub>恐、願<sub>二</sub>宿運之貴<sub>一</sub>、來世又有<sub>レ</sub>憑者歟、抑先例召<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>然之人<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>其座<sub>一</sub>云々、今度無<sub>二</sub>其人<sub>一</sub>、仍不<sub>レ</sub>召也、又召<sub>二</sub>近習并可<sub>一</sub>然輩、令<sub>二</sub>雜役<sub>一</sub>云々、仍雖<sub>二</sub>召<sub>一</sub>季經、宗賴等、依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>雜役之可<sub>一</sub>勤、即令<sub>二</sub>退下<sub>一</sub>了、長吏法印、及內府等、手自役之故也、

歸<sub>二</sub>宿所<sub>一</sub>又差<sub>二</sub>膳<sub>一</sub>、其後法印被<sub>レ</sub>來、覽以交<sub>レ</sub>語、亥終就<sub>レ</sub>寢、余在<sub>二</sub>北面<sub>一</sub>、內府在<sub>二</sub>東面<sub>一</sub>、今日前駟交名、今日無<sub>レ</sub>後騎、先例不<sub>レ</sub>見之故也、

殿上人、

宮內卿季經朝臣、大藏卿宗賴朝臣、

刑部卿宗雅朝臣、侍從定家、

兵部大輔能季、中務大輔忠行、

左京權大夫光綱、

地下君達、

前治部大輔季信、前讃岐守重季、

皇太后宮亮有經、宮內大輔盛房、

前少納言有家朝臣、散位保季、

諸大夫、家司職事、非職六位、

伊豫守季長朝臣、

右馬權頭兼親、

前馬助國行、

散位仲資、

大宮太皇經光、

對馬守親光、

散位兼時、

和泉守長房、

刑部少輔長親、

勾當高階泰俊、進士、

同藤原業清、

已上廿四人、

內大臣殿御方、

前大夫進仲盛、

散位清忠、

散位經泰、

散位康宗、

散位光茂、

散位國基、

所雜色忠光、

雅樂助忠賴、

廿二日、庚寅〔天〕晴、此日自三宇治參天王寺、依太

法皇受灌頂於權僧正公顯給也、早旦小浴、可奉

禮舍利之故也、內府同着直衣、烏帽、內府着狩衣直

衣、先參本堂、小念誦之後、於釣殿修禱、陰陽師在

殿、是依春日社恠異、今明堅固物忌也、而事有限、不

〔知〕可不參、仍今日於所々神社、修三種々祈、殊恐

慎之餘、修此禱、內府同之、事了撤贖物、前一也、次召

在宣有身堅事、內府同即乘船、近習之輩五六人候

御船、內府雖有別船、所同船也、宗賴朝臣進破

子、終日泛遊河上、視聽之所觸莫不催感心、秉燭

着窪津、渡路也、豫儲車、余網代車也、余、內府改狩衣直

衣、同車、殿上人已下騎馬、前駟如昨日、但人數多減、

諸大夫十人許、殿上人兩三人也、於西鳥居外下車、

即向宿所、西門北腋、余佛所余宿所也、是故以宗賴朝臣、申

參入之由、院仰云、今夜不可參、明日可參入

者、隨又只今已御幸灌頂堂、公卿已下降立庭上云

云、仍余不能改裝束、今夜不參入、內府同不參、且

是兼雅卿、定長朝臣等、示此旨也、仍余休息之間、兼

雅定能兩卿來、東余調之、大納言議明日儀式、小時

各歸了、次余竊參金堂、先於西門內洗手、川龜井

進金堂前庭、又三度禮之、今度內府即昇自南階、入

自正面間、居同間、內府在其西、西門依雜人亂入

度勤仕之、本寺退下之間、於後戶邊、給被物布施

等、次奉出佛舍利、三粒、白二、無停滯出給、爲悅不



少、余奉<sub>禮丁</sub>、<sub>內府同之、共人之中、結如</sub>本奉<sub>納之、布</sub>施金五兩、<sub>三兩余分、二兩府分、</sub>次歸<sub>宿所</sub>、一寢、御塔聖靈院共獻燈明、又有<sub>誦經事、御共輩近邊召宿所</sub>、

今夜御灌頂儀不見及、以<sub>兼雅卿、次第可切入也</sub>、此日、法皇母女院御國忌也、然而、猶被<sub>遂行此事</sub>了、

廿三日、<sub>卯(天)晴、</sub>此日賜<sub>布施於大阿闍梨、并被仰</sub>賞、刻限已時云々、余參<sub>院御所、雖可候御共、行</sub>列之間、可<sub>無便宜、仍已終着束帶、不帶銀、相伴內</sub>府、經<sub>西門、中門、金堂前等、參灌頂堂、內府同不帶</sub>隨身、<sub>西門內隨身不發前聲、昇堂上之時、賜笏於僕從、但不徹笏、只知例也、</sub>內府即經<sub>迴廊良角北</sub>、小門、參<sub>法皇御所</sub>了、小時宮法印<sub>院御</sub>、先被<sub>參、即被入南廊簾中了、此間、</sub>權辨定長爲<sub>院御使</sub>來云、今日勸賞、大阿闍梨公顯、<sub>前權僧</sub>可<sub>任大僧正法務等之由、所思食也、</sub>畢云、又當時別當<sub>前僧正尤可蒙賞、而以行昭</sub>信朝臣子、<sub>馬橋頭實清之兄、可叙法眼、又當寺執行法橋兼覺、</sub>同可<sub>叙法眼之由、所被申請也、</sub>兩人頗雖<sub>過分、</sub>所<sub>申請難默止、爲之如何、</sub>余申云、大阿闍梨賞、不能<sub>左右、近代人々昇進皆以過分、至于御灌頂賞</sub>

者、緯已希代、人以不可<sub>間然歟、別當之賞、兩人頗過分、左右可在御定、若猶可被抽賞者、以行昭可爲別當之賞、以兼覺可被用寺司賞歟如何者、定長歸參了、此間大阿闍梨前權僧正公顯、入自中門、經<sub>金堂前、參着灌頂堂座、西</sub>豫讃衆四五口參入、臨<sub>大</sub>阿闍梨參入之時、降<sub>立庭中、自余讃衆相</sub>從於阿闍梨、各以着座、不<sub>經幾程、法皇波御、經迴廊西北、入自中門、經金堂前、令立北暢門下、給、</sub>其行列、先<sub>殿上人爲先下、前行列立金堂長庭、東上南面、次公卿同前行、爲先下、前行列立灌頂堂西暢外、南上西面、次公卿上西面、次法皇、次從僧等、其公卿列立之間、余降立暢外、持笏、即後宮僧正被參也、</sub>法皇令進<sub>立暢門下、給、余已下跪地、次從僧一人敷座具於圓座上、一人敷草座於其西、法皇於暢門下、取三衣、從僧入自北暢門、令着御座、給、即從僧取<sub>銀香爐、入透袋、獻法皇、々々取之三拜之後、小步</sub>寄賜<sub>僧正、々々同步進、賜之復座、其座實圓、次僧正起座、先昇堂上、着本座、次法皇同昇堂上、着御々座、南、次余已下着公卿座、南上對座、余、人々着座了、余召<sub>頭中將實教朝臣、奏賞事於法皇、即奉院宣、仰公顯僧正并別當僧正了、</sub>歸來、告<sub>此由、次余仰右大臣、在端</sub>大臣問云、可<sub>仰定長歟、余云可然、即</sub></sub></sub></sub>



召定長被仰之、定長〔直〕仰綱所云々、次賜大  
阿闍梨布施、余已下起座進廣庇、余獨立長押上、右大院臣以下立長押下、  
別當右中將實明朝臣持來被物、內大臣進出取之  
傳余、々取之入戸間、其北間有便所、然而依爲法置大皇御座間、入自戸間也、件一同、自  
阿闍梨前、左廻退下、廻入御座北間簾中、本座、廢也、  
本座布施之間、頗狼藉之故也、皆悉置布施了、先撤  
大阿闍梨布施、覆衆下、舊等撤之、引大阿闍梨布施了之間、於西門外、賜御馬、井車等、近武原助爲儀、  
次撤讚衆布施、此間余復本座、撤布施了、大阿  
闍梨先起座退下、次殿上人等降立、次公卿等降立、  
各以前行、次法皇起座給、余〔同〕降居庭中、初、法  
皇經本路、出給中門之後余漸出、自良小戸、參會  
御祈、昇自南階、即依召參御前、小時退下之路、內  
府來逢、余覽龜井、此次洗手、內府同、次見關伽井、次  
參金堂、又奉出舍利、今日又無、今日布施砂金三兩、今日又無、今日又無、  
也、今日內府奉燈明、修諷誦、昨日可行之、而次參御忘却之故也、  
塔、入自北戸、出自南戸、經廻廊異戸、參聖靈  
院、入自西門、先奉禮太子、御影堂預給、致祈請、天  
政所、次廻西南、參繪堂、令說之、頗經時刻、  
申終說了、給布五段、於所給之也、經廻廊外、出自西門、歸宿  
所、即招定長、奏群行之間事於法皇、然間法皇出

自西門、詣念佛堂給、卒爾之間、余不能正衣  
服、隱開所了、秉燭以後、前驅隨身、改着、等來集、仍  
着烏帽直衣、內府同、先參念佛堂、依召參御前、小  
時退下之間、以兼雅卿、被悅仰參入之由、申畏  
承了之由、退下、於鳥居外乘車、至于渡邊乘船、  
待月出〔解〕緩、昨今物忌也、惟異、然而事不、歇止、  
仍致三種々祈禱、所出仕也、  
今日參入公卿、

余、

右大臣、

內大臣、

大納言、房、實、

前大納言、雅、

中納言、朝方、通親、

隆忠、經房、親雅、定能、

參議、親信、通資、

隆房、雅賢、

散三位、顯信、雅隆、

季範、

法皇御從僧、

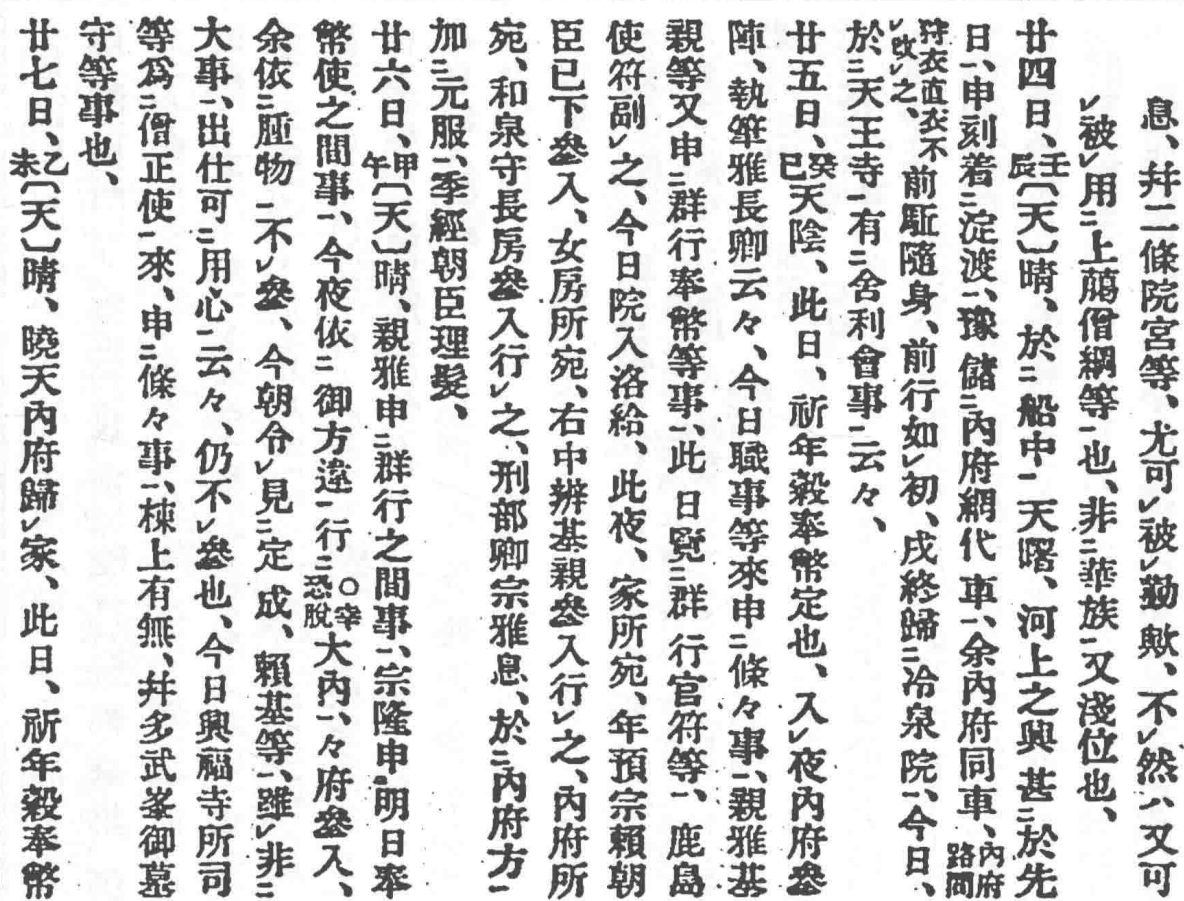
律師瑯慶

已講公雅、

覺親、

阿闍梨圓玄、

件從僧甚異樣也、今度遣恨在此事、歟、法皇御子



〔也〕、午刻、內府參陣、奏宣命草、大內記持來、見了返給、免清書內覽了、未刻參神祇官、即發遣了云々、行事辨基親也、親雅來申群行雜事、今朝奏院了、勅定趣也、自昨日余神齋也、

廿八日、丙申〔天〕晴、今日女房見最吉夢、今日猶爲後齋、定經來申條々事、

廿九日、丁酉雨下、此日欲行不堪定、并和奏〔之〕等、而晚頭、大夫史廣房來申云、左大辨親宗、依五躰不具穢、不能參陣之由相觸云々、仍仰可延引之由了、此次持來官廳指圖、違延久例事等、三箇條申之、

一幣裘所事、

延久造曹司也、而當時無其屋、仍准小安殿例、於後房可裘敷云々、

仰可然、

一入御門事、

延久西門也、而無其門、仍可入御自東門、敷云云、

仰可然、

一主上御休息所事、

延久朝所也、而當今御即位之時、以後房爲御所、今度於後房可裘敷幣、仍任延久例、〔猶可用朝所敷〕、

仰可用朝所、

宗隆申大神寶之間事、基親申率分功國對捍之間事、親雅申群行雜事、

〔卅日、戊戌天晴、別當僧正、被告送南都大衆蜂起之由、依御墓守事云々、晚頭參內院八條院等、亥刻歸來、入夜覺乘法眼、以件人爲使、僧正許示遣仔細了〕、

九月

一日、己巳〔天〕晴、定經來申條々事、宗隆申大神寶之間事、親雅申群行之間事、宗賴申春日詣之間事、此日沐浴解除、依有所思也、召在宣問京都南之間當太方正方、哉否事、申九條亭不當正方之由、以季長朝臣爲使、仰遣棟上之間事於通親卿、因國知人也、自今日神事也、故依群行無御燈先例也、二日、庚子雨降、朝間天晴、親雅來申云、伊勢國鈴鹿驛齋王御所、已闕如丁、爲申件事所上洛也云々、

是群司對捍之故云々、件事能保朝臣有<sub>二</sub>申旨<sub>一</sub>、仍可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>彼朝臣<sub>一</sub>之由仰了、此日、群行點地也、史已下向<sub>レ</sub>之、辨親雅可<sub>レ</sub>向之由仰<sub>レ</sub>之、而史已下已參<sub>二</sub>野宮了<sub>一</sub>之上、召<sub>二</sub>遣伊勢國司爲季<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>驛家事也<sub>一</sub>、又能保朝臣、欲<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>、仍無<sub>二</sub>其隙<sub>一</sub>之間、檢<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>之處、多以辨不<sub>レ</sub>向、近則永曆例如此云々、

三日、<sub>丑</sub>大風大雨、及<sub>レ</sub>晚少休、未刻親雅來<sub>二</sub>向能保朝臣亭<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>伊勢國關驛家齋王御所南郡司對捍之間事<sub>一</sub>〔云々〕、申<sub>レ</sub>慥可<sub>二</sub>勤仕<sub>一</sub>之由、可<sub>二</sub>召仰<sub>一</sub>之狀云々、伊勢守爲季參上、申<sub>二</sub>一切不<sub>レ</sub>叶之由<sub>一</sub>、條々子細、慥申<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>搦試<sub>一</sub>之由、慥仰<sub>二</sub>明日可<sub>二</sub>下向<sub>一</sub>之由了、定經來申<sub>二</sub>群行藏人方成功、并行幸之間事<sub>一</sub>、又條々召仰了、此日可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>行<sub>一</sub>察官除目、而上卿實家卿稱<sub>レ</sub>際、明後日可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>行云々<sub>一</sub>、親雅覽<sub>二</sub>點地勘文<sub>一</sub>、見〔了〕返給了、昨日入<sub>レ</sub>夜行之、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>持參<sub>一</sub>云々、傳聞伊豫國興福寺柱等、引<sub>二</sub>着川尻了<sub>一</sub>云々、爲<sub>レ</sub>悅不<sub>レ</sub>少、

四日、<sub>壬</sub>陰晴不定、召<sub>二</sub>宗賴<sub>一</sub>仰<sub>二</sub>春日詣一定之由<sub>一</sub>、明日定不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>之由、同仰<sub>レ</sub>之、以<sub>二</sub>使者示<sub>二</sub>春日詣之間事於經房卿<sub>一</sub>、返事云、人定不<sub>二</sub>甘心歟<sub>一</sub>、能可<sub>二</sub>相計<sub>一</sub>云々、所<sub>レ</sub>示皆理也、恐意所案如此、但猶可<sub>二</sub>果遂<sub>一</sub>

之由、中心存<sub>レ</sub>之、是又有<sub>二</sub>所存<sub>一</sub>也、其旨重示遣了、一昨日、昨日、內大臣參內、

五日、<sub>卯</sub>雨降、今日法皇自<sub>二</sub>日吉<sub>一</sub>返御、親經所勞之後、始出仕申<sub>二</sub>吉事<sub>一</sub>、<sub>以<sub>二</sub>親經兼時<sub>一</sub>傳中<sub>一</sub>、官<sub>レ</sub>定經、親雅等申<sub>二</sub>初齋宮群行事<sub>一</sub>、及<sub>レ</sub>晚定長來、爲<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>春日詣事<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>召寄<sub>一</sub>也、而國柱猶未<sub>二</sub>到之由<sub>一</sub>、今日未刻聞<sub>レ</sub>之、仍其事猶豫、以<sub>二</sub>母屋柱九本<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>棟上<sub>一</sub>之條、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其難<sub>一</sub>之由、別當僧正被<sub>二</sub>示送<sub>一</sub>、然而猶希代勝事、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>略儀<sub>一</sub>之上、群行事八日不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶延引者、又棟上不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶之由、通親卿申<sub>レ</sub>之、仍旁不定之間、不<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>付春日詣事<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>群行驛家雜事闕如不便之由<sub>一</sub>、條々有<sub>二</sub>子細等<sub>一</sub>、定長殊以歎息者也、親雅、定長先<sub>レ</sub>是參院、依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>傳奏<sub>一</sub>之人歸來、即相<sub>二</sub>具定長<sub>一</sub>參院了、入<sub>レ</sub>夜兩人歸來云、群行可<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>、近江驛家事驚聞食、殊可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御沙汰<sub>一</sub>、近衛前攝政、并山宮<sub>院御</sub>子也、等領、各雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>宛<sub>二</sub>所領等<sub>一</sub>、只存<sub>二</sub>別之忠勤<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>勤<sub>一</sub>一事之由、各可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰也<sub>一</sub>云々、山門領事、又一切不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>免云々<sub>一</sub>、又定經申<sub>二</sub>任人事等<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>子細了<sub>一</sub>、此夜被<sub>二</sub>行<sub>一</sub>察官除目也、今日欲<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>春日詣定<sub>一</sub>、而依<sub>二</sub>群行事不定之間<sub>一</sub>延引了、自今日<sub>一</sub>殊禊、神今食例幣等定例也、二位中將足、所勞之後不<sub>二</sub></sub>



踏立、昨今加灸、定灸後即時如例起揚云々、珍重珍重、

六日、甲天晴、今日今比叙九月會云々、法皇早旦渡

御、不能奏事云々、以定經、問群行日次於左右

兩府、十四日、歸忌日、不出日、十八日、道十九、廿、廿一日、重復日等

此等間可被用何日哉、歸忌、仁和例不快、重復

日、又殊可憐之上、有嘉應不吉之近例、十八日雖道

虛、有准據之吉例等、於群行無例、可被計奏者、兩府共

被申云、可被用十八日者、定經云、十八日辰日

也、閣下御衰日如何者、理須被忌避也、然而於

無他日者、強不可有憚歟、道虛之條、猶可被

豫議、明日召具兩大外記、陰陽寮等、可參之由仰

之、群行依去夜院宣延引、早可仰兩府之由、下

知親雅了、春日詣又延引之由、示遣僧正許了、依

群行供奉、因幡國所課不可叶之由、通親卿申之、

院宣云、群行、指用事也、棟上不可限期、仍可延

引云々、然而日來猶用意之間、群行已延引、彌以指合

歟、加之伊豫國柱等未到、只以母屋柱九本可上

棟之由、僧正及寺僧等雖申之、長者下向可付其

綱、專不可用略儀、待國柱之處、于今不到來、

加之今月群行、十一月可有八幡賀茂朝親等行幸、天

下大事重疊、人煩民費不可勝計、就中群行大神事

也、棟上大伽藍之事也、並身致沙汰之條、非無神

慮之恐、仍旁以延引了、雖有其恐、又非無其故者

也、就中內大臣任丞相之後、最前可勤祭上卿、而

今年余參宮者、依可付父忌、家故實猶聊成疑慮

者也、而延引者、明春二月五日、神參宮六日、當黑木

屋、并祭六日、棟上吉日、可有金堂棟上、此儀又無先規、

然而參宮、棟上上卿父子之間、三ヶ之大事、一時計會、

尤可謂上計、省後煩之故也、事又珍重歟、仍此條

若叶神慮歟、今度延引之次第、雖爲遺憾、安此

子細、休其怨者也、明日以長者宣可下知、先內々

所觸僧正也、追察之、忌月有憚、明年二月之儀、

不可叶歟、

七日、乙雨降、春日詣延引事、昨日告僧正許了、其上

宗賴以長者宣可仰旨下知了、今日又雖有豫儀、

猶以延引了、此日召陰陽師三人、頭宣憲、大膳權大夫安倍季弘、圖書頭賀茂在

宣、問群行日次、陰陽之所撰十四日、十九、廿、廿一

日等也、各有隙、而余十八日可宜之由存之、仍昨日

以定經、問兩府、各申可然之由、猶依不審、問本

道、各申云尤可也、隨則有<sub>立子女王、天皇七年九月六日群行、其後</sub>道虛之例、<sub>無不</sub>又攝政衰日群行例、近代吉例、多以如此、殆可求此例一歟、仍一定可爲<sub>十八日</sub>之由仰了、晚頭、親雅來申<sub>條々事</sub>、群行驛家雜事、可<sub>然之所々</sub>止<sub>度々各別之支配一定別所課、被宛本所云々、雖爲新儀、爲成大事也、</sub>

八日、<sub>丙午</sub>天晴、親雅申<sub>近江國權門領驛家雜減定所課、</sub>各被<sub>申本所之請文等、各猶有對捍歟、仰可奏之</sub>由了、親經申<sub>條々事、宗隆申字佐使各辭退、而讚岐</sub>守隆保勳<sub>件使節由昇殿事、能保推舉之、院有勅</sub>許云々、八十餘人侍臣、不被<sub>催出一人、依此事</sub>新昇殿出來、尤不便事也、然而權門之推舉、上有<sub>許容、愚身之抑留、豈叶事之要哉、仍只以目而已、此</sub>日定能卿來、自<sub>今日可服</sub>赫云々、山階寺所司等來、衆徒使也、粗仰<sub>仔細、但明日可令參、以宗賴</sub>可<sub>仰子細之由仰了、</sub>

九日、<sub>未</sub>雨降、山階寺所司來、數刻之後、宗賴朝臣來、呼<sub>前仰條々事等了、御幕守員數、并所役事也、</sub>

定經來依<sub>召也、仰兩社行幸日次、并還御閑院日次</sub>等可<sub>問之由仰了、又今年可被行公事等、問官外</sub>

記可<sub>注申之由、同仰了、又召實教朝臣、仰五節</sub>事、申<sub>依服暇與奪親經之由、臨期可奉行兼</sub>又殿上人公事勤否、并上日等可<sub>注申之由同仰了、是院宣也、</sub>及<sub>晚親雅申群行驛家雜事闕如之間事、又申檢非違</sub>使公友領狀云々、又裝束司基親朝臣參上、余間<sub>官廳</sub>御裝束之間事、大略所<sub>申似不存知、不足言歟、然</sub>間廣房參上、<sub>先取御氣色、仰早可參之由、即廣房先日所也、是依先日仰加勸發也、</sub>進覽之指圖失誤多、仍條々仰<sub>可改直之仔細了、</sub>又申<sub>行幸入御門、并齋王出入其所也、</sub>門等事、余仰云、行幸可用<sub>東門、齋王入北門、可出南門一歟、</sub>但退可<sub>仰一定者、基親、廣房等申云、延久行幸用</sub>西門、今度無<sub>門、打門代幄、可備幸路者、余云、彼</sub>時皇居內裏也、仍被<sub>用西門、有其謂、今度自里內</sub>可<sub>幸、何必可被用無實之門哉、所申可謂守株</sub>歟、東門已全有<sub>便宜、不可及異議歟、兩人伏理</sub>無<sub>所申、各依平座參陣了、此夜有三方女、</sub>節供、資泰朝臣兼行<sub>陪膳、余方右少辨親經、女房資泰</sub>朝臣、內府方宗賴朝臣云々、

十日、<sub>戊申</sub>雨降、親經申<sub>例幣諸國散狀、入夜定經依</sub>所勞、明日例幣難<sub>奉行之由、仰可相扶之由了、</sub>

又宗隆之許、仰遺可早參旨了、又定經申云、大內記稱大產積之由云々、仍親經可用意宣命旨、可仰之由、仰定經之許了、其上又直以御教書、仰遺親經許了、辭別可載寶劍事之由同仰了、

十一日、配天晴、此日例幣也、早旦、宗隆返事到來、又稱病、近日職事尤奇怪、余存可參神祇官之由、而職事一人不參、不可叶、仍止出仕了、未刻、行事

辨親經參入尤懈怠也、幣料滿足了、

不足分、伊豫國濟之雖被免濟物、臨時如三

謂如、依不假仰可只今所參陣也云々、相次宗隆參入、

元自可參者、分明可申其旨也、次第甚不當、勘發

其旨了、大略無披陳之方云々、又定經參上、是又次

第不相應、但可相搆之由、其夜仰遺、仍出仕歟、然者

今日可申可出仕之由也、兩人出仕之職事、先以

稱疾、仍於下官出仕者止了、然而試催僕從等、暨

雖相待不見來、仍遂以不參、內府申刻參陣、即外

記持來宣命草、內記不候、儒辨草之時、以外記內

覽例也、

候內裏之時、見了返給、許也、仰不可持來

消書之由也、入夜內府歸來云、宣命消書遲々、又

於神祇官、忌部使相論之間、經數刻、日沒之程發遣

云々、其後參內、只今歸來也、於陣開ト申云々、亥

刻、基親來申官廳御裝束之間事、親雅申群行驛家雜事闕乏事等、條々巨細也、

十二日、庚朝間天陰、已刻以後天晴、宗隆申大神寶之

間事、廣房持來官廳指圖、申群行御裝束之間事、親

雅群行用途、并驛家雜事、近江國權門領減省之宛文、

所々猶不承引、院逆鱗給云々、神妙也、今晚、或人見

吉夢、姬御前可入內之嘉瑞也、經房卿以有經、見

送賴朝書狀、泰經、賴經、範季等事猶斟申歟、

十三日、辛天晴、宗隆來申大神寶成功之間事、親經

申五節事、注未役之人、奏聞之處、有御點四人、公

卿實家、受領常陸、如此云々通親卿營與福寺、勤長

奉送使、其身以奉公爲事、而殊被點、因幡未得

其心如何、但馬、丹波尤其仁也、依近臣有免歟、末

代之沙汰、大少之事皆此法也、親經又申云、宮城使、防

河使等除目日次、十四、十五、十七日等云々、仰云、寮

官除目在近、連日之除書不穩便、下旬及來月上旬之

間可宜歟、又申云、所存如此、而定經群行料、有可

被任之者、仍可忿申沙汰之由、所仰下也、仍所

問日次云々、余云、件任人事未聞及、可遣尋者、

即以御教書遣問、返事云、兵部丞可任云々、先日



定經申云、兵部領狀了云々、而〔定〕申狀如此、若然者又重可觸示一歟、次第不足言、凡近日之職事、每人不覺希有、當此時一掌萬機、實恩賢之不祥也、但必可任者、十五日可宜之由仰之、主計頭資元來申云、去十一日太白犯太微右執法、果尤重變也云々、

十四日、壬〔天〕晴、此日有官奏、未刻着直衣一參院、以定長入見參、群行之間、有可申入事、即以實教有之由、內々示定長了、即召參、御前、供花御所也、神事之間、頗雖憚思、如此之公所、強不可憚之上、不能申子細、余奉問群行之間、主上御作法、先召舍人事、只如內辨云々、出音令呼給、實不違內辨作法、面承聖訓、恐悅難謝、又仰中臣之詞、有不審等、同雖尋申、不令逢群行之間、被仰不分明之由、延久後三條院御記、天治故殿雖注預給、猶有疑事等、雖有一見之志、不能申出里亭、仍內裏歟院御所歟之間、被取出哉之由、乍恐申之、仰云、召出可進、內裏參上可一見云々、恐悅之思甚切、小時起御前、於公卿座邊、招定長仰付條々事了、此間公顯大僧正、慶賀之後始參入、參御所了、次余參內、秉燭之後、內府參入、先有施米定、其後兼光〔卿〕可參

入、被行不堪定、其後余於直廬、改着布袴、出居座、此間內府自陣方一來、次奏者辨來直廬、次家司宗賴朝臣奏申、基親朝臣奏候者、余仰圓座可敷之由、即敷圓座、舉常燈、藏人五位次宗賴來、仰可召辨之由、次右中辨基親朝臣捧文杖參上、奏儀如例、仍不具記、余見文儀、又如去年事了、基親退下、於辨座下史口此間余改着直衣、參御所、相伴大將退出、步行、基親、親經、宗隆等相從、各申條々事等、

今日基親作法之中、有小失等、然而無殊大事歟、今日不堪定、內大臣、新中納言、左大辨基親朝臣等也、

十五日、癸〔天〕晴、及深更小雨、此日被改勘齋宮

群行日時、十八日、御出門、御申時、外記內覽之、見了返給、又被

行軒廊御卜、神宮殿舍爲、風雨倒事、入夜被行宮城使、防河使

除目、此次有加任等、親經亥刻許歸來、自院大略仰

含了、子刻許有除目云々、已上上卿、權大納言實家、親經云、

五節事、先日御點人々加催之處、實家領狀、隆房辭退、

常陸同辭退、因幡通親卿申狀有謂、可催替阿波之

由有仰云々、尤神妙〔也〕、自今夜、於九條堂始修

懺法、保延以來、每年不闕之勤也、而治承天下亂逆以

後、廢而不被行、故御前歎思食此事、仍今年萬事



雖指合、被相續行之、但二月十二月等同可行、仍縮三七ヶ日、爲一七ヶ日也、每事略定也、女房、內府共行向、余依神事、不臨其筵、女房七ヶ日可經廻也、內府即歸來、定長告送云、後三條院御記、明日可持參禁裏云々、已刻可參內之由答了、

十六日、甲〔天〕晴、依若宮祭奉幣、此奉幣先例強不見、然而去年有所思奉之

爲例事陪膳式部大輔光範朝臣、無神馬十烈、只幣帛

許也、陰陽師天文博士廣基也、件廣基持來密奏、太白

犯大微右執法星云々、申刻奉幣了、定長來云、御記

所持參也云々、只今可參內、早可參箇之由仰了、

相續余改着直衣、相伴內府參內、定長持來蒔給小

手宮一合、余於鬼間披之、合目錄持參御前、引

見群行之間事、當時事許書取了、如本調入、召定長

返給、定長云、去夜院御所、竊盜罷入、此御記雖開蓋

不取納物、不可說事也云々、仍更又披令見、定長

返入之後、余付封、定長歸參了、件御記草子〔廿〕帖、

書寫本也、目錄一寫、被相副範兼筆也、余所不審

之仰、中臣之詞、御記假名不被付之間、不能散

衆、然而他不審等、多以決了、爲悅不少、其由奏聞了、即余退出、親雅申群行雜事、大略沙汰具了云々、

但近江驛家事、猶有對捍所々、重仰遣了云々、定經申云、中臣知雅、俄輕服出來、爲定觸穢、此外無中臣官人、并五位云々、爲定穢有疑、可尋之由仰了、

十七日、乙〔天〕晴、入夜陰、雨小降、裝束使辨基親、大

夫史廣房等參上、申正廳御裝束之間事、條々付後三

條院御記決事等定仰了云々、又行幸入御門、東門歟、

齊王同、南門歟、無例、又煩歟、兩方之間如何、於齊王同道之

條者、待賢門被用兩方御路之例、即寬治、康治也、

可憚者、宮城門盡憚哉、准彼者、東門有便如何、可

被計申之由、以基親問左大臣、歸來云、猶可被

憚歟、延久有其沙汰之機、所覺悟也、仍被用南

門、有何難哉、尤宜歟云々、仰南門之由了、定經來

申中臣使事、爲定參門外委問之、如申狀者無

穢歟、仍仰可勤仕之由了、但猶可問法家之

由、召仰了、入夜長奉送使通親卿、以待左衛門尉信弘爲使、并行事

辨親雅等之許遣馬、通親卿以其息侍從通宗、令受

取之云々、又給單衣云々、戌刻、親雅來申群行事、

皆悉沙汰具了之由、仰尤神妙之由了、定經之許、刻

限可忍之由、并有雨氣、猶可仰丹生賣布禰社司等之由、亥刻仰遣了、雨氣出來之故也、

十八日、丙辰天晴、入夜月明、此日潔子內親王高倉院皇女、當今之御姉妹也、御、茂野河、即參太神宮之日也、於官廳被行此儀、仍御裝束已下事、被追延久三年佳例也、上卿權大納言實家卿、辨左少辨親雅、長奉送使權中納言通親卿、奉行職事藏人右衛門權佐定經等也、早旦小浴、不洗髮、欲參內之時、有祓事、內府同時有酉刻着束帶、有文帶、螺鈿、自里第有行李之故也、御大內相伴內之時、諸給銀也、御即位之時、川螺鈿者、別儀也、府參內、官外記新三位光雅卿之外、一切無人、職事未參、尤懈怠也、參御前、內侍又遲參、每事泥々、暫定經參上、行幸事早々可催具之由仰之、又問、遣野宮之小舍人未歸參、歟如何、定經更有不存之色、仍仰聞子細、此時始覺悟、忽差遣了云々、手時乘燭待彼歸參者、殆及深更、歟、可謂奇異、歟、其後人人猶以遲參、然而命內府令着陣、余着殿上御倚子下、召定經仰召仰事、其詞可有、行幸太政官、召仰請大炊御門、東洞院、中御門等大路、可入御待候門、并宮南門、兼又留守參議光長朝臣、權右中辨定長朝臣者、定經向陣仰內府、仰依代々例、不勘日時、是依勘群行日時、更不勘行幸日時也、依彼有此行幸也、天永勘之云々、頗失儀歟、又大治御記、依先例不分明、不仰路、留守等事、雖有其人、不仰上卿云々、之由、見御記、此條

中心不審之處、康治御記被仰之、仍就有道理、用康治例也、他年々惣不記此事也、小時內府付定經奏宣命草、延引之由載之、但非辭別、延久又如此、年在大治(家忠)進弓場、余猶在殿上、見之返給、仰清書之由、故不離給之、余猶在殿上、見之返給、仰清書之由、良久持來清書、猶乍召陣奏之、是攝政之時、不必進弓場也、定經之使、已申御馬者、余見了返給、仰云、使已申御馬事、聞食、定經取之退下、後日內府云、之後、外記申、使已申御馬事、其後持來清書、欲奏之間、申下中候之由、仍思事理、清書之後、撤下中候之條、次第可違亂之故、實不奏、清書、開下中候之後、所奏也云々、內府之所爲、可謂存禮、者歟、寬治、天永、大臣於陣開之如今日、承保、康治、廣宮上卿披之、今度外記、存寬、此間公卿次將等少々參入、余起座參御前、而御總角役人賴實卿、經家朝臣、共兼日加備、有領狀云々、未參、再三雖遣人、敢以不參、已及戌終、仍先示女房分御髮、且奉結下、此間賴實卿參入、即御總角御裝束等了、御袍如例、御大內之時、若御常御裝束也、內侍今一人又以遲參、此間內府自陣座歸參御前、語云、右大將密語云、幣物在正廳、幸路用南門、可無便歟云々、此事所云一旦可然、如此之事、後日之難、在一身歟、仍以定經、仰合件卿、其詞云、昨日以裝束司辨基親朝臣、入御門事、仰合左大臣、而被申、可被用南門之由、仍下知其旨了、而今被傾申旨、尤可然、但被用東門者、

可同齋王之道、此條如何者、實房卿申云、一旦所存  
申計也、左大臣被申旨、不能左右、只可在御定、  
此間親經檢申正家記云、延久、承保共與齋宮不  
可同道之由、所見也云々、尤有與、傳家奉公之者、  
其要在乎如此之事、歟、仍旁不及改南門之儀、正  
應與南門、其程太遠、雖可經東廻廊外、可御朝  
所、強不可爲巨難歟、北門同可爲齋王路、西門  
又無實、南門之外、無幸路之故也、掌侍參入之後即  
出御、于時多須被待、遣野宮之使歸參也、然而乘  
燭之後遣之、仍欲待者、可及深更、仍且以出御、是  
先新儀之其一也、奉行未練懈怠之間、違例多端、尤不  
便々々、出御之間儀如例、次御反閑、陰陽頭宣憲朝  
臣給祿如例、次列陣次將渡、右波次公卿列立、大將  
左右如次寄御輿、忿花、神事行幸之時定例也、無鈴奏、但供奉行大刀  
契共候之、御大內之時、不作大刀、次主上乘御、頭中將實  
動御重役、件人輕服日數之內也、然而先例、神無鈴奏、止、  
事之役、不傳他役、禁八書之奏、不、禁內裏、給奏等、  
是神事之次乘輿出御自左衛門陣、不仰御綱、是又  
依神事也、余乘御之後、出自東面北門、乘車  
自開路參會、入自郁芳門、并官東門、參朝所、中  
央間廣庇東西柱下、迫長舉燈、小安殿儀、大床于前舉之、而  
押、舉燈、朝所之儀不立、庇布障子、只

懸御座、仍廣中懸、燈之同、廣庇  
丁由、裝束司基親朝臣申、有其前、  
人、伊豫辨此中辨掌侍兼、候、母屋中央間左右柱外、他女房  
四五人、候、東北庇邊一也、西間母屋儲大床子、中間  
儲平鋪御座、々々東西北三方立大宋御屏風、南庇西  
間副端東西行敷、兩面端疊、爲余座、除東三ヶ間、  
母屋二間、東、之外、以西三ヶ間、庇不懸簾、母屋懸  
簾、之、南庇第三間西面、余座四同懸簾、之、上、東庇東面  
同懸簾、之、前庭東南兩面引、所司暢、中央有暢門、  
具在、指圖、余待御與之間、向正廳見御裝束、母  
屋高御座東間儲御座、屏風、其北母屋際疊、兩面疊  
一枚、爲余座、其東間、第二間北邊、母屋御齋王、御座後  
立屏風、余座與齋王座、其間三尺許、共南面也、同間  
二、南方迫柱內立小机、安內外宮御幣、（件）小机坤長  
也、宮幣、良方、齋王御座後屏風外、南北二行敷、疊二枚、爲  
安內宮幣、齋王陪從女房座、其西副北壁、敷疊一枚、爲內侍  
座、南庇東面柱內、敷荒薦、立屏風一帖、南北、件同  
座、屏風外、左右敷草圓座二枚、爲圍司座、  
延久例也、件屏風外、左右敷草圓座二枚、爲圍司座、  
南庇東第二間（北）邊迫西柱、舉一燈、由、廣房申之云  
云、高御座北東方又舉一燈、東二三間鋪滿荒薦、東  
第一間不敷之、土壇也、登廊敷打板、其上敷筵



道、延上加兩及御座邊不敷後房具〔旨〕在三指圖、南門雖三程遠、幣物顯見之條、頗非三事之憚、仍仰三基親、假隱立屏風一帖、入御之後、即可取之由仰了、即歸參朝所、小時有臨幸、入自南門、於北門外、不獻大麻、延久、承保獻之、失也、於門內、大將立替、人々東延廊以東、入御暢門、兩大將立暢內、御與昇居地上、豫敷、寬仁以來、於壇下、々御也、廣治有儀寄壇上、是幣物在、大極殿之上、皇居同與、仍被寄壇上、而今正廳其壇太下、仍猶無、便立之上、余豫排徊後房前砌邊、昇居御與之時、近參跪候、兩大將同跪候也、他公卿列、即左中將公時朝臣當座上、上、頭中將依、參上、經余開三燈戶、取三神璽、授內侍退去、余參御輿下、奉下之、無躍、即立御平敷御座前、余候、二庇座邊緣、退御輿之後、兩大將即退下、公卿各若北廊小戶以東座、次余仰職事、令垂庇御簾、五位六位藏人役之、即脫御々裝束、不撤御總角、被奉待齋王之間、暫以御休息、供臍御膳、女房中納言、典侍陪膳、此間余以定經問事具否於當座上卿、歸來申幣物使等具了之由、其後經數刻、仰定經、置使者藻壁門之邊、令見之、又走向路頭、可見之由仰之、及子終前陣少々參來、又松明多見之由告申、行事辨親雅近參云々、仍召賴實卿、着御帛

裝束、以白生絹調之、內藏寮遣料物、於縫殿寮、令裁縫之、見資房記之由、定經所中、也、置御衣宮蓋、御帶、件帶自院所被、也、無文玉帶、可用、延方之由、見日記、然而院無、延方、玉帶仍被、延丸柄也、又相具白御草鞋、余仰定經、御笏或宮御櫛宮并生御簪等、生絹未見物也、是也、〔合〕儲候、六位藏人三人持候之、又仰殿上人持脂燭、可候之由、此間、行事左少辨親雅付藏人右衛門權佐定經、令奏齋王參入之由、其詞云、齋王可者、此事未聞事也、參入之時、只奏其旨、又其門無不查、退出之時、外郭門、先例不定、仍奏事由者例也、而參入之時、申入御門之例、未見及、辨失、仰北門無異議之由、即出御自南庇西面、御慶裏之先指、內侍伊一人扈從、五位藏人親、留大床子、辨掌侍守護之、侍臣指脂燭前行、五位藏人定經取余下襲、藏人三人持候三物、即經後房南庇、不敷延道、依屋內、并昇廊打板等、入自正應中戶、自御座北邊、着御、余奉扶、次召御笏獻之、定經取藏人所持之御笏、授余、々取御笏、次催中臣可持參麻之由、此間余仰園司、令披北而東第一戶、園司入、御代屏風北邊、其後中臣遲參、大略職事不召儲敷、每事如泥、可謂有若亡歟、數度催足之後、僅以參入、內侍進北戶下、親經扶、取大麻、經余座與齋王座之間、進主上御座前、一撫一吻之後返



給、經本路、於初戶下返給、中臣復座、次聞司進開

戶、又復座、次主上正、笏御拜、兩段再拜、是被次攝政仰

藏人辨親經、召齋王、天延藏人辨親、延久藏人辨親、實治

長和、康治六位召之、當時無藏人少將、親經出北門、仰察頭、

仍任天延、延久例召藏人辨親也、親經申齋王已參入之由、

良久無音、仍一兩度催之、親經申齋王已參入之由、

仍仰聞司、令開北面戶、取入大廳、次齋王參入、經登

廊南第三間、件同豫切、暫昇立北面壇下、此同陪從女房二

入、先是行事辨申云、自何方可參哉、余仰云、北門定無便宜、歟、

任、永承以後例、可參自東門也、彼永承、天治等、用昭訓門、准、彼

也、女房三人、此中一人御乳母、取几帳三本、又賴實卿候、

御輿邊、即昇居王與於壇上、齋王下御、經東一間西

邊、屏風東、着御座給、女房三人、各取几帳、指、障東南西、次圍

司更進、經、東聖際、閉戶復座、王與持退畢、第二間、歟、

次主上召舍人、二音、余近候、堂上職事告召成之由、大

舍人稱唯、次少納言參入、就第二版跪候、件版、豫當、

置之、延久當第一間、歟、次勅曰、中臣、忌部召之、堂上人、少

納言稱唯退出召之、次中臣、忌部、後取、惣三人着進

版位、中臣給第一版、忌部着、勅曰、忌部參來、職事等傳、此間

聞司開東扉代屏風東枚、大極殿之時有戶、其內聞司居、其

也、次忌部稱唯、經東軒廊南砌、并應南庇東面

跪机下、指笏拍手、度、先取外宮幣、南方、捧目上

經本路退下、於東壇授後取、件後取從忌部、更歸參

取內宮幣退下、兩人相共復本列、次勅曰、中臣參

來、職事告之、中臣稱唯參上、其路同、小机東頭敬屈跪候、

勅曰、

能久申天奉禮、是幣事也、

被加例幣之時、仰詞曰、常奉九月、神嘗ノ

幣帛ヲ、汝中臣如常ク能ク申天奉レ、今度依爲

臨時幣、省如常等之文字也、

中臣稱唯猶候、猶退起、余仰、

又勅曰、

令奉進齋內親王ハ、此依恒例一天、三箇年間ハ、齋

清天、天照大明神乃御杖代爾定天奉進、內親王、中

臣宜ク吉ク申旗奉進禮、

十一日以前有群行之時、神嘗祭幣、例幣、被付

群行勅使、仍兩段仰之、先幣事、次例幣以後有群

行之時、依爲臨時幣、不仰奉幣事、仍無兩

段之儀、即是爲貞元、天喜例之由、見延久三年

後三條院御記、天治又依彼例之由、見故殿御

記、今度須依彼兩度例也、而寬治同雖爲二例

幣以後、依天曆御記說、猶兩段被仰之、彼度延久御記、雖其沙汰出來、猶兩段被仰之由、見爲房記、是即白川院、京極大殿、有御沙汰云々、此子細又具見、故殿天治御記、就之案之、延久雖吉例、天治頗不快、於天曆、寬治者、共爲最吉例之上、案事理、雖臨時幣爭不被仰其由、哉、加之故殿御記之意道理、猶在兩段、仍今度所用寬治例也、

中臣又稱唯退下、復本列、即三人相引退出、先是上卿、少納言參入內大臣着、小戶內西腋座、辨已下着、同東腋、歟、令中臣退出之後、召使に賜宣命了、復本座歟、

次余召定經、仰額櫛可持參之由、六位藏人持之、候高御座西邊、本候北邊、而依齋王御座近々、余仰令候西邊也、定經取之、受、內侍、內侍取之、置主上御座前、疊上帖外也、天治如此、故殿御記被離之、康治蓋、蓋上、今度可追被例之處、當時便宜、疊上有便、仍如此令置也、頗左方也、余仰令開蓋、蓋在北、身在南、又令披內袋紙、即內侍欲退起之時、余仰云、參齋王御座下、可申、近可參給之由者、即內侍進西几帳下、申此之由、復座、參退共經、余座與齋王御座之間也、如殿次齋王被欲參進之間、自几帳之隙

〔側〕、望見之、未被上髮、余驚而問齋王之仕女、答云、於葎屋雖被上御髮、即撤之、末額等髮上、讀岐申給了、今於官廳可被上御髮之由、一切不承不存云々、次第不足言、仍以定經問親雅、々々申云、於葎屋被撤御髮上之由、全以不知給、隨又申子細於女房了云々、仍忽欲上之處、無其具、仍召出髮上讀岐、召其物具、末額於本御座几帳中、陪從女奉上之之後、參進御座前給、上、女房指几帳如前々、主上取額櫛奉差加齋王御額給、本櫛ヨリハ典ニ奉指加給也、雖無所見、爲不令王御額給、落失、余申行也、主上如形奉給、余副手能ク奉差也、余仰從女云、至于勢多之離宮、可被納御櫛於宮、路間勢多までは、不可被撤御櫛、又令向御與下給之間、不可令願而給者、次齋王復本座、此間齋王與可歸參東面之由、余仰之、親經來申云、軒廊小戸太短狹也、仍御與不能通也、爲之如何、余仰云、廻廊之東、廻天、可持參者、即持參南庇東面壇下、齋王欲起座、此間余召定經、賜御笏、即主上還御、登廊打掃如本數、還道、余御笏候御座、定經取、余召五位藏人親經付、內侍、藏人二人候御共、皆如、即脫御裝束給、余仰定經、遣人令見齋王、遠去之程、歸參申、齋王遙去不見之由、次主上如

元着ヨ御黄櫨御裝束、帷屏候之、内侍二人進候ニ左右、余

仰<sub>二</sub>定經<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>告<sub>二</sub>出御<sub>一</sub>之由於人々、先<sub>レ</sub>是內府參<sub>二</sub>御所<sub>一</sub>、

卽退下、兩大將進<sub>二</sub>帳外左右、余仰<sub>二</sub>職事、令<sub>レ</sub>卷<sub>二</sub>底簾

是次持<sub>二</sub>參御輿、今度構<sub>二</sub>御輿<sub>一</sub>寄<sub>二</sub>〔蓋〕堂上<sub>一</sub>也。

左中將公時取御所安<sub>二</sub>蓋中<sub>一</sub>次乘御<sub>四</sub>余率<sub>二</sub>扶持<sub>一</sub>

如例、即余自後房前綫着杳懸停立、御輿進三南門

方之間余出自東門并柳芳門乘車自冷泉東

行、入自大炊殿南面門、參會御所、良久還宮、於左

衙門陣代外、神祇官獻<sub>二</sub>御麻、余豫仰<sub>二</sub>定經<sub>一</sub>也、下御之

時無警蹕、其後無鈴奏、名謁、是代々例也、天延有

名謁、是失也、延久御記被疑之也、卽入御所、持退

御輿、公卿退出、次余退出、于<sub>レ</sub>時報三曉鐘、及三鷄鳴、

今日行幸供奉公卿、

內大臣、左大將、

大納言寶房、右大將、  
中納言賴實卿、別當、

參議隆房卿、散三位光雅卿、

已上五人太少也、見任公卿無、故稱、病、或服

藥、實宗、定能是也、或湯治、經房是也、各自由之

賊、天鑒如何、此外或見病、或齋王前駟、敕使仍

無人耳、

齊王西河前駟、

大納言實家卿、上冠兼行、天  
治例也云々

中納言兼光、

參議、親信、

雅長

親信依<sub>二</sub>奉行職事尾籠、不<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>奉西河、參<sub>二</sub>東河、

仍雅賢、親信兩人、供<sub>二</sub>奉東河、西河參議一人也、

希代勝事、只在ニ此事、非ニ其器ニ奉ヨ行公事、如レ此

之遠亂出來、爲世尤爲耻、爲之如何、

殿上人四位、

侍從盛定朝臣、

右少將伊輔朝臣、

前少納言師廣朝臣、

丹後守長經朝臣、

此中於<sub>二</sub>伊輔<sub>一</sub>者、又同依<sub>二</sub>奉行職事<sub>一</sub>有若亡、先

可參行幸、其後可參西河之由、加催之問、

參大炊殿、余聞<sub>二</sub>付之、令<sub>三</sub>追參<sub>二</sub>野宮、然而不<sub>三</sub>參

會、參三祿所云々、

東河敕使、

中納言兼光、

依無他人兼行、  
延久、康治例也、

參議雅賢、

親信(雅)不供奉  
仍二人云々

殿上、

季經朝臣、

實明朝臣、

地下四位、

以政朝臣、

重季朝臣、

中臣、

神祇權少副大中臣爲定、

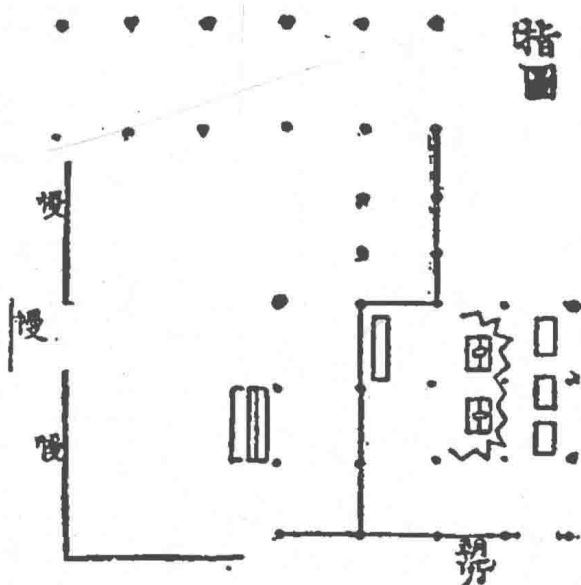
忌部、

後取、

使王、

親綱朝臣、

定家朝臣、



長奉送使、

權中納言通親卿、

右大史 宗久、

左少辨親雅、

中務丞卜部基貞、

十九日、丁天晴、及晚權右中辨定長爲院御使來、

余謁之、賴朝卿所申上之群盜(之)間事、可計沙

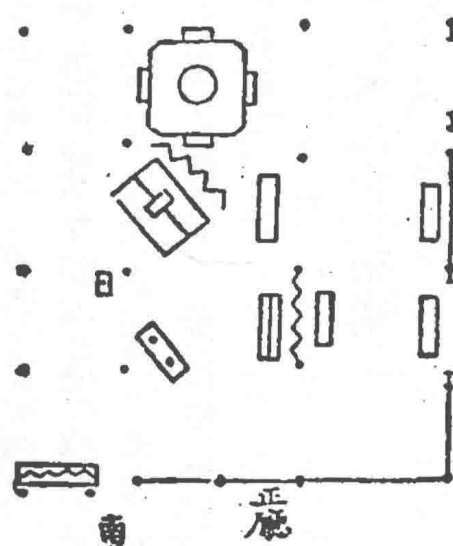
汰云々、此事自院被仰遣之御返事也、子細不能

記錄、此次定長云、今朝有種々仰等、御氣色殊能御座

云々、爲悅不少、子細同不能記、

廿日、戊親經來仰云、賴實卿辭大理狀如此、可計

申者、申可在御定之由、又他事等條々申之、不





追記、定經參上、依犬死穢、不昇堂上、役夫工之間事、定經先日忘却、不申沙汰（今稱穢、仍、仰親經了、御更衣事、實教先日與奪、定經辭退、依穢余不可依穢、猶可奉行之由、召仰了、親經又云、意見持向左大臣、近衛前攝政等亭、被申云、如此事依所勞、不能計申者、左大臣云、追可注申者、

廿一日、己親經、定經等來申條々事、今夜內府相具女房向九條堂、依明日懺法結願也、余女房日來宿堂、廿二日、庚天晴、早旦參內、依女房陪膳闕如也、申刻退出、此日、懺法結願也、余依神事不向、入夜內府歸來、女房同之、傳聞山大衆蜂起云々、

廿三日、辛天陰、未刻參院、以爲賴入見參、依召參御前、諸國吏對捍濟物事、并衛府諸司三分等、可被減員數之由事等、具以奏聞、叙慮有甘心之氣、爲悅不少、退候上達部座邊、以定長奏條々事、朝覲行幸、猶可被行之子細、并先例等同奏之、仰云、然者可被行者、又明春二月春日詣事、取御氣色、仰云承了、雖何事有可沙汰事者可承云々、申長承之由、此外條々奏聞了、退出之次、參八條院、聊有御不豫事云々、女房謁云、來月十三日、小童眞

菜、汝必可參者、申承之由、次參內、次歸家、

廿四日、壬時々雨下、親經申條々事、役夫工上卿、可催源大納言之由、有院宣、仍相催之處、辭退云々、仰可奏之由、又問山口祭日次之處、申十月十五日、廿七日之由云々、仰云、沙汰已懈怠了、十五日定難叶歟、廿七日可宜者、又意見事仰入道關白之處、如此事久斷世務、不辨是非、猶可被豫議如何歟、輒不能申子細云々、入夜兼光卿來、隔簾謁之、爲仰合春日詣之間事、所相招也、兼光云、參宮上卿、同時之條尤可、舞人猶可有兩方歟云云、所存如此也、今日資元持密奏、

廿五日、癸天晴、兼雅卿示送云、可有朝覲行幸之由、被仰下、定來月十七日也云々、入夜雅長卿來、余不調、以人申云、山大衆蜂起訴申近江國司之間事、國司全不誤歟、群行不參西河前駐事、有奉行職事證文、慥被催東河之由、請文又申其旨了、早召出可經御覽也云々、

廿六日、甲天晴、早旦召親經、條々事令申院、定經稱病、仍行幸事、仰親經之間、未刻、定經參上、仍如本可奉行之由仰之、又宗隆參上、各申條々事、

入夜親經來、仰御返事等、此中有字佐造宮事、大宮司公通給一國被逐、此事尤可宜之由奏聞、而只慕受傾功、可營造之由、有院宣、此事愚意不甘心、造宮懈怠之濫觴也、

廿七日、乙(天晴)、隆房卿來、內府謁之、大理事勅許、爲賀其事也、未刻、定經來申寶劔使之中、神祇官兼衡歸來申旨等、副進卜形等、

神祇官、

卜 寶劔御在所事、

推之令御坐木鄉內分歟、殊被奉索搜者、卜曰、以後五十箇日之內、及來九月十二月、明年六月節中庚辛日、可出來給乎、

文治三年八月廿五日

神祇大祐卜部兼衡、

陰陽寮、

寶劔未歸王府給問、猶入海人一雖索搜之、更不見、若納龍宮歟、將亦流給他州歟如何、占今日癸巳時加午、時、大吉、臨卯爲用、將勾陣中、微明天空、終從魁大裳、卦遇聯茹、

推之不納龍宮、不移他州歟、奉投海底、從在處五町內、被覓之者、必定可出來給歟、

期今日以後卅五日內、及來十一月、十二月、明年二月節中、直庚辛日也、

文治三年八月廿五日大藏少輔安倍泰茂、

勅使景弘申狀云、次第御祈等、各始行了云々、又於事者、有其偶之體所申也、尤爲悅、神靈不弃國者、寶劔蓋出來給哉、仰可奏聞之由了、

今日被宣下檢非違使別當、參議左兵衛督隆房卿、上卿隆忠卿、職

事親經、此日召集職事等、頭中將實教、藏人右衛門權佐定經、藏人右少辨親經、藏人大官宗隆

并官外記、大外記師尙、大夫史廣房也、賴業稱病不參、陰陽師、仍召博士在宣、評

定年內、及明年正月公事等、近代貫首如無、頭辨兼

光出仕之時、猶非人數、如一件人、況籠居哉、實教又不

知漢字、勿論、五位職事等、各以懈怠爲先、不覺希

有也、仍恒例臨時之公事、自忘却事、偏以闕如、爲身

實難堪也、仍先、今冬明春等公事、皆悉可分分配職事

等之由仰之、各候障子上邊、相議分配、以目録

令覽之、據仰定經、召可被行之公事、目録於官外記、而今

事等、召實教朝臣、日定經、爲奏、雜事參院、選參之同、且賜一件例於他職

於慶前給之也、又問、次第日次於在宣、周令注進一

紙、臨深更、各分散了、此日、長奉送使通親卿并親雅

等歸參、申齋王平安着寮之由、定經來告此旨、又親

雅參來申同旨也、

廿八日、丙寅雨下、午刻定經參上、下給昨日目錄、注加其目了

令奏院、他事等同奏之、入夜歸來云、天下事偏委附申之、本意、只在如此、此事、御沙汰次第、殊以悅申、能々可申之由、再三有勅定云々、他條々在目錄、宗隆申三條々事、宗賴來申三條々事、多武峰別當玄理僧都、召具峯沙汰者參上、仰御墓守之間事、三百六十人之中、雖半分、三分二、可點四卿之內輩之由也、子細雖多、不能具記、且示合無勅寺檢校法印、可仰峯之由仰之、八幡行幸、休幕難事、來月十五日可定之由、在宣所申也、仍仰宗賴了、又明年二月、可參春日之由內議了、而追案之爲忌月、仍仰大外記賴業、令勘先例已不祥、仍正月可遂也、十一日參宮、十三日棟上也、此旨內々、先仰宗賴以下十一字了也、一本爲注

廿九日、丁卯天晴、可下向維摩會之由、催親雅之處稱病、仍仰可催親經之由、定經奉申刻、權辨并定長爲院御使來、余梳髮暨不調、取髮之後、召簾前謁之、定長仰云賴朝卿申旨如此、何樣可有沙汰哉、可計奏者、件申狀遣御使於奥州、可召東大寺大佛滅金料砂金於秀衡法師之由也、此事

去四月賴朝卿申云、前山城守基兼、元法皇近臣、北面在秀衡許、先年平相國入道、誠院近臣等之內、基兼爲其隨一、而秀衡許、被配流奥州了、其後屬秀衡子、今經越彼國也、而雖有上洛之者、秀衡召禁之間、不遂素意之由、所歎申也、元爲被召仕之者、而依平氏之亂逆遭殃、尤可被召上也、兼又陸奥貢金、追年減少、大佛滅金巨多罷入歟、三萬兩計可令進之由、可被召仰也、件兩條賜別御教書、欲仰遣秀衡之許者、仍經房卿任申請書御教書、基兼事、砂金事、并度功事也、遣彼卿許、以件御教書、賴朝書、副書狀、以使者難色澤方、遣秀衡許、即進請文、事也、以件請文、相具件使者澤方處、付經房卿也、昨日到來云々、賴朝申狀趣、秀衡不重院宣殊無恐色、又被仰下兩條共以無承諾、頗在奇怪歟、且又子細、可召問使男、於今者遣別御使、可被召貢金等歟云云、秀衡申狀趣、於基兼事者、殊加憐愍、全無召誠、依不申可京上之由、忽不令上洛、更非拘留之儀云々、進之由也、貢金事三萬兩之召、太爲過分、先例廣定不過千金、就中近年商人多入境內、賣買砂金、仍大略掘盡了、仍旁雖不可叶、隨求得可進上云々、兩條大略如此、次第大略如此、余申云、被

遺御使之條、不可有異儀、賴朝御返事之趣、所  
申尤有其謂、尤可被遺御使、先例多遺公人、爲公家  
實金沙汰、遺小舍人、自院  
爲御馬使、御殿舍人等是也、可遺彼跡、歟、將又可遺如  
應官、歟、可計申之由、可被仰遺、歟、不然者又只  
無左右、定其仁如計申、可被遺御使之由、可被  
仰遺、歟、兩條之間、且可有御計、又廣元在京、如  
經房卿、召寄內々可仰合、歟者、定長此次語云、昨日  
職事〔等〕、公事分配事、殊有敬感云々、良久談語歸  
參了、余案之、禍亂之源、只在如此之事者歟、可  
悲々々、

抑、群行年九月齋、異說太多、余檢先例、如式文者、  
非二月齋、然而近例一月齋之由、見故殿天治御記、  
仍公家及余至今日爲齋、爲後代記之、乖式文、  
愚意雖傾奇、難背近例之故、愁隨之耳、

右文治三年秋此一帙墨付九十枚者先年松殿右幕下道  
昭卿依爲予三男任懇望聽終寫仍彼卿被染真痕畢抑法  
性寺〔忠〕通公之有職其二男松殿基房公親面授而傳于  
後法性寺兼實公且加目錄號玉葉爲後之龜鑑自爾以來

其雲抄無讓他家吾後者守此法度而秘握而可貯深奧者  
也

于時慶安二年己丑季夏虫拂之節陶化翁〔花押〕誌焉

玉葉卷第五十終



## 玉葉

## 卷第五十一

文治三年十月

文治三年

十月

一日、戊晴、晚頭小雨、此日平座也、參入公卿、權中納言隆忠卿、兼光卿、參議親宗卿、通資卿、申刻、余著直衣、參內、入夜退出、召親經宗隆等於前、仰條々事、親經字佐道、營宮之間事、八十島祭事、兩條可、奏聞之由仰之、并御目録、可被定職事一人、即仰親經了、宗隆大神寶事、事仰之、余候內裏之間、定經傳內侍、覽見參祿法、見了返給、

二日、已朝間小雨、早旦向九條堂、見師景文書等、撰取要書等、此間南都衆徒使參來、宗賴申之、先日所遣多武峯之宗賴失錯之御教書被召返者、可賜之由、大衆所申也云々、余令見此、召返長者宣、至于賜大衆之條不可然、爲衆徒甚無其要者故也、使所司書寫下向云々、此次仰付宿院訴了、神教通行事也、藏人辨親經來云、今日參院奏兩條事、宇佐造宮事所申可然、只以造宮早出來可爲先也、

但又被問人々之條尤可然、早可被問也云々、可問左大臣、右大臣、大納言實房、宗家、忠親等之由仰了、件事先日經房卿申云、此造營忽不可叶、只賜一州於大宮司公通、可被造營云々、余以此狀奏聞、仰云、只今不可賜國、只募受領功可造進之由可仰者、而余重奏云、件公通先年進二萬疋功、可成給對島之由蒙仰、其事默止已經三年序了、其上暗成功之條、定有所申歟、緯擁怠之基也、御定者理之所致也、然而公通不可受、勅定、仍只可賜一州可宜歟、此事雖非先規、以造宮早成可爲先之故也、抑極案此儀、人定致難歟、先大宮司兼任受領、希代例也、平相國始申行此事、已非吉例、加之、公通罪科未決間浴此恩、定有傍人之嘲歟、仍以此子細所奏聞也、又八十島事、今年明年之間、只隨能保朝臣申狀、可被計云々、定經來、閑院指圖之事條々仰了、入夜歸冷泉三日、庚天晴、此日、當年不堪荒奏也、先有不堪申、(田イ)文、晚頭、

大夫史廣房來、申、今夕官奏并官散狀、左大辨親宗、右大辨  
此次仰、可注進今度群行、官廳指圖、并宣下事難事  
注文之由、又行幸事期日漸近、成功進末、神寶不足事  
等、委可注申之由仰之、各申承了之由、乘燭、余  
直、內府東、相具參內、隨身共榻冠、前近東帶、依  
勢遷宮日時上卿、可仰誰人哉、延久左大臣宣下、但  
神祇大司大、中臣公宣也、今夜欲宣下如何、先例多大臣上卿、不  
必限一上之由、官所申也云々、內府可催不堪申  
文、其次早可宣下之由仰之、左大辨并基親朝臣等  
〔末〕參、重遣人了、此間、余召親經問宇佐之間事、  
申云、人々申狀只今到來云々、左大臣、右大臣、右大  
將、堀川大納言等、申、大宮司募受領功造進、可無  
其難之由、中御門大納言、猶可有猶豫、可有御卜  
欺云々、仰可奏之由了、小時親宗卿基親朝臣等參  
上、內府著陣了、良久歸參御前、其後余向直廬、改  
著布袴、著下圓、表衣等無文、帶野飯頃之、聞基親參上之  
由、出居賀筵、小時基親來立北面庭、宗賴朝臣相逢  
歸參、申基親朝臣參候之由、余仰可敷圓座之由、

宗賴退出之後、職事四人來、敷圓座、圓、舉掌燈、如  
常、次宗賴朝臣又進來、余示氣色、宗賴退下、告召  
之由於奏者辨、次基親朝臣持奏狀、進跪南簀子東頭、  
深揖候氣色、蒙家目高唯、進來指寄文杖、長押上下、膝  
余置笏、座上方取文置前、基親退復座、一間許東行  
後、余刷衣裳、解結緒、引延披禮紙、押文於右、文  
通、拔取黃勘文、終端加目至千與繆見之、目終終  
置所繆持於前、卷之、如本指加結緒、不見、當  
禮紙左、次見副文二通、各先下二重、ル開發解文ヲ見て、次  
置當年不堪左、卷禮紙結之、片結無三下三尺許指出  
天置之、不取過、只文上基親置杖、座右ニ、スチカヘテ置  
進取之、爲辨方也、基親置杖、座右ニ、スチカヘテ置  
申之、余每度目之、基親每度稱唯、當年不堪結中目終、小  
時退出、內府同之退出、卷結退下、次余歸入、改著直  
衣、參御前、小時退出、內府同之、退出之後、宗隆來  
申大神宮之間事、今日早日、東大寺大佛聖人來、  
余謁之、東大寺之間申條々事、去夜付定長奏院  
了、能樣可口入云々、上人語云、去今兩年之間、柱百  
卅余本切顯杣山了、而津出之間、夫功之煩不可勝  
計、且爲奏此事、所上洛也、當時大物少々所相

其也云々、上人申事等、

一人夫事、

算計國中庄々之在家、若ハ五家別ニ一人、若十家別ニ一人、可被宛召、當時之沙汰田卒<sup>田</sup>天被宛之間其數非幾、其役甚小、其故ハ在家之員數、不<sup>レ</sup>必依田數之多少、雖在家多田數少、雖田數多在家少、因茲或一身勤數返之役<sup>役</sup>者も有り、或一年空<sup>空</sup>通此役之者も有り、此條且ハ永榮也、又無公益、仍所計申也云々、

一麻苧事、

柱一本別ニ二筋付之、以<sup>一</sup>尺五寸爲<sup>レ</sup>繩、七十把打<sup>一</sup>總一筋也、然則一本料百四十把也、引<sup>一</sup>大物之間其綱不堪、第一之要物也、且宛諸國<sup>一</sup>慥加<sup>一</sup>精好、私不法可<sup>一</sup>召賜也云々、

一可被付成功事、

大佛殿造營之一大事、只在<sup>一</sup>杣<sup>一</sup>山<sup>一</sup>出<sup>一</sup>巖石嶮岨之路、山谷相交、高下不平也、以<sup>一</sup>人力不可<sup>一</sup>叶、小之人勢不可<sup>一</sup>動、柱一本、普通之沙汰にては、柱一本夫千余人、若<sup>一</sup>三三千人歟、而重源以<sup>一</sup>意巧<sup>一</sup>構<sup>一</sup>口<sup>一</sup>口<sup>一</sup>口<sup>一</sup>天引之間、一本別<sup>一</sup>不<sup>一</sup>過<sup>一</sup>六七十人云

云、然而九十余本之柱、其外如<sup>一</sup>虹梁折之大物千万、仍中内之夫功更不可<sup>一</sup>及<sup>一</sup>十分一、因<sup>一</sup>之可<sup>一</sup>被<sup>一</sup>付成功<sup>一</sup>之由、度々受領之功官之功只可<sup>一</sup>隨<sup>一</sup>在也云云、

一當時隨身材木事、

母屋柱三本、長六丈五尺、口徑五尺二寸、

庇柱二本、長七丈五尺、口徑四尺八寸、

虹梁二支、一支長五丈、口徑五尺、

棟木一支、長十三丈、口徑四尺八寸、

垂木八支、長五丈二尺、口徑方二尺二寸、

一備前國荒野開發、偏宛大佛用途、而有<sup>一</sup>致<sup>一</sup>妨人、可<sup>一</sup>被<sup>一</sup>停止事、

此外雖<sup>一</sup>子細多、不<sup>一</sup>追<sup>一</sup>具錄、又語云、御身減金料、惣

不可<sup>一</sup>及<sup>一</sup>三千兩云々、爲<sup>一</sup>悅不<sup>一</sup>少云々、

四日、<sup>幸</sup>天晴、已刻定長爲<sup>一</sup>院御使<sup>一</sup>來云、去比竊盜入<sup>一</sup>

御所、盜<sup>一</sup>犯種々御物了、其中有<sup>一</sup>御護劔、日來被<sup>一</sup>尋

沙汰之間、去夜擲<sup>一</sup>取犯人了、<sup>大夫尉信盛</sup>盛捕之、仰<sup>一</sup>付<sup>一</sup>神聖律

師<sup>三井</sup>理範已<sup>講</sup>講<sup>寺</sup>等、令<sup>一</sup>修<sup>一</sup>聖天供、又被<sup>一</sup>行<sup>一</sup>御占<sup>一</sup>

之處、資元所<sup>一</sup>占<sup>一</sup>申<sup>一</sup>等指<sup>一</sup>掌、仍此輩尤可<sup>一</sup>有<sup>一</sup>恩賞、其

間事何様可<sup>一</sup>有<sup>一</sup>沙汰哉、可<sup>一</sup>令<sup>一</sup>計申<sup>一</sup>者云、余申

云、如此之事、只任<sub>レ</sub>叙慮、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行也、但或加<sub>二</sub>叙感<sub>一</sub>、或及<sub>二</sub>緇頭<sub>一</sub>、是例也、至于<sub>レ</sub>授<sub>二</sub>官位<sub>一</sub>者、頗可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>過分<sub>一</sub>歟、何況於<sub>二</sub>非分事<sub>一</sub>歟、人定傾奇歟、此上事可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>〔幸〕御定<sub>一</sub>者、此次仰<sub>二</sub>付東大寺<sub>一</sub>之<sub>二</sub>聖人<sub>一</sub>申條々了、即定長歸參了、親經來<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、

五日、<sub>壬</sub>天晴、申刻著<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>、相<sub>二</sub>伴內府<sub>一</sub>參內、即參院、<sub>內府同</sub>依<sub>レ</sub>召余參<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>、暨候<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>、小々事等執奏了退下、謁<sub>二</sub>兼雅卿<sub>一</sub>、評<sub>二</sub>定行幸等之間事<sub>一</sub>、重日初度朝覲、寬治爲房記有<sub>二</sub>所見<sub>一</sub>、然而先例已多、仍可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用也、而若有<sub>二</sub>傍人之難<sub>一</sub>歟、兼尤可<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>之由仰<sub>二</sub>定長了<sub>一</sub>、晚頭向<sub>二</sub>九條<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>故女院御月忌<sub>一</sub>也、夜深歸<sub>二</sub>冷泉亭了<sub>一</sub>、六日、<sub>癸</sub>天陰、圓長已講來、僧正許條々示送、子細不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>記、又召<sub>二</sub>慶俊律師<sub>一</sub>、條々示<sub>二</sub>遣法印許<sub>一</sub>、右中辨基親來申<sub>二</sub>行幸之間事<sub>一</sub>、藏人辨親經申<sub>二</sub>今日最勝會<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>諸國難<sub>一</sub>濟延引事、仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>奏之由<sub>一</sub>、又大乘會已前、必可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行之由仰<sub>レ</sub>之、<sub>十三日</sub><sub>吉日也</sub>又宇佐宮若宮殿可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>造替<sub>一</sub>哉否、并清祓用物本宮申狀、與<sub>二</sub>格文<sub>一</sub>相違事、及群盜事等、被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>左右兩府<sub>一</sub>、各有<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>計<sub>一</sub>〔申〕旨等、

若宮殿事、

左大臣申云、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御占<sub>一</sub>、右府同<sub>レ</sub>之、

清祓事、

左大臣申云、件兩種物<sub>ヲ</sub>、<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>格文<sub>一</sub>、神宮無<sub>二</sub>此儀<sub>一</sub>、但本宮例又難<sub>二</sub>進退<sub>一</sub>、且重可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>尋歟、又以<sub>二</sub>代物<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行歟、以<sub>二</sub>兼見之准法<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>定下<sub>一</sub>歟云々、右大臣申云、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>神祇官<sub>一</sub>者、群盜事、

左大臣右大臣共申云、仰<sub>二</sub>使廳并武士等<sub>一</sub>分<sub>二</sub>保<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>守護、且又可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>賴朝卿<sub>一</sub>云々、但左大臣申云、捕<sub>二</sub>實犯<sub>一</sub>之者、可有<sub>二</sub>賞之由<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰云、

各可<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>之由仰了、但若宮殿事、可<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御占清祓<sub>一</sub>事、重可<sub>レ</sub>持<sub>二</sub>來文書<sub>一</sub>、群盜事、大理出仕之時、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰合<sub>二</sub>之由仰了<sub>一</sub>、

宗賴朝臣來申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>朝覲行幸御前物事<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>申沙汰<sub>二</sub>之由了<sub>一</sub>、

今朝兼雅卿示送云、依<sub>二</sub>昨日仰<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>天永二年定文<sub>一</sub>、兼又彼例爲房參議執<sub>二</sub>筆<sub>一</sub>之、然而有<sub>二</sub>御參<sub>一</sub>者可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>納言<sub>一</sub>歟、又御裝束行事院司、彼例四位十一人、判官代五人、合十六人也、而當時四位別當八人也、其不足爲<sub>二</sub>之如何<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>五位別當<sub>一</sub>歟、將又必不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>滿<sub>二</sub>彼員數<sub>一</sub>、



歟云々、余答云、天永定文尤可然、執筆納言無異議、院司與奪猶納言勸之、況執政臣出仕之日哉、彼例與奪大納言也、仍不叶今度之儀、御裝束行事院司事、只可隨見吉也、不可必守株歟、加之代々例、四位多、五位少、若以五位補闕、共八人也、未見同員之例、但五位別當先例入定文哉否、且尋例、且取御氣色、可被進止者、

七日、戊陰晴不定、及晚時雨間瀟、此日於院殿上、六條被定朝現行幸雜事、又被行小除目、叙位僧事等也、乘燭著束帶、時給伴內府、東參院、先是公卿五六人候殿上、余先居尋常上達部座、召定長問事具否、申皆具畢之由、即入自殿上之布障子、長開放、著與座臺盤上程、內府着端座、切臺盤此間、經房定能兼光等卿、加着此座、與座、余、實家、定能、通親、親信等卿、宗等次余示例文硯可被、召之由於兼雅卿、件人依爲行此事、件卿召男共、藏人參入、仰例文硯可持參之人也、院司上騰奉行之時、自召藏人、仰之、余爲即藏人持參、置由、上不混、常例、命兼雅卿、令召之也、權中納言兼光卿前、此役、歟之由、余路之、又持參切燈臺、立大盤下方、兼光座右取本所舉大盤上之常燈、移居件切燈臺、次依兼雅卿氣色、兼光卿進例文、自座逆

上取上也、各不相見之、內府並座前、與、余、自大盤上取之也、取笏氣色兼光卿、兼光卿置笏摺墨取續紙、例白紙也、有二、頗自座下卷返之、並座前、取笏、若取副笏歟、不候氣色、余目之、兼光置笏染筆、余披持例文讀上云、定行幸雜事、兼光書之、余又讀云、一御前ノ物、兼光又書之、此後余不讀之、此時兼雅卿以今度行事宛文、注、折密傳、兼光、自座被披置座前書之、此間余不取笏、理須始終讀令書也、而依書訖放、略儀不讀之、仍書定文之間、不取笏、餘與紙、與座下可卷定文、今度比授折紙、更自與細卷之、放之、取副笏氣色親信、々々取之小披見、逆上取上之、與座相傳、任座內府見了授余、余取之、自大盤上委披見了置座前、方也、取笏合眼、兼雅卿示藏人宮可持參之由、兼雅可傳仰之、即別當定長朝臣持覽宮、先進座前長押下、依余目昇長押進宮、余引寄宮、入定文一通、不入、引廻宮押遣云、可被奏者、定長取之參御所、此間或返下例文、近例如然而依字治左大臣記、不返與之、加定文直可下院司之故也、小時定長〔朝臣〕歸來、乍宮下之、余引寄宮、加盛例文押遣、如、定長取之下、主典代歟、此間兼雅示氣色、兼光有不審之色、仍余仰可撤硯之由、藏

人參入、先置<sub>如本</sub>掌燈<sub>臺上</sub>、撤<sub>筆硯</sub>了、次余起座爲<sub>三</sub>退出、向<sub>中門</sub>之間、定長朝臣傳仰云、盜<sub>御物</sub>犯人已出來條云、僧云<sub>陰陽</sub>頭<sub>猶切々</sub>申之、又實事之嚴重、尤可<sub>被</sub>感仰也、仍僧事加階除目等可有<sub>之</sub>、且又如何、余申云、兩度申<sub>所存了</sub>、此上只可有<sub>在御</sub>定、但僧陰陽師等蒙<sub>賞者</sub>、擲取檢非違使、尤不可<sub>漏</sub>此撰也、仍奏<sub>聞</sub>此由、其後移刻歸來、授<sub>任</sub>人折紙、定長又云、殷富門院、朝覲行幸之時、可有<sub>入</sub>御哉如何者、余兩方共無<sub>難敷</sub>、但理須<sub>有同居</sub>也、法皇御女也、當今有<sub>母儀</sub>之禮、旁尤可有<sub>渡御</sub>歟者、即余退出之次、親經、賴業、廣房許召遣了、歸<sub>冷</sub>泉之後、今日上卿必可<sub>被</sub>勸之由示<sub>經房卿</sub>、此間遣<sub>親經</sub>之許了、舍人歸來云、親經依<sub>齒病</sub>、類籠居、敢不能<sub>相扶</sub>之、仍仰<sub>定經</sub>奉<sub>行之</sub>、官外記參入、又上卿著<sub>陣云々</sub>、即參<sub>內裏了</sub>、<sub>余注折紙</sub>及<sub>晚天</sub>持<sub>來除目叙位等</sub>、見了返給、如<sub>元加</sub>封也、今日兼光書了、不見<sub>親宗</sub>、見<sub>親經</sub>如何、

八日、<sub>乙</sub>天晴、未刻、親經申<sub>神宮役夫工等上卿事</sub>、仰<sub>可</sub>奏之由了、<sub>源大納言有</sub>及<sub>晚宗隆申</sub>大神宮之間事<sub>了</sub>、入<sub>夜</sub>親經歸來、又宗賴朝臣參上、余書<sub>宣旨</sub>聽

衆<sub>例紙一枚、手自書</sub>、以<sub>人傳</sub>給之、宗賴於<sub>障子</sub>上書<sub>之</sub>云々、<sub>是又一紙也、但與香年</sub>返上、余加<sub>先奏等</sub>、<sub>加折紙</sub>召<sub>親經</sub>於<sub>簾前</sub>、賜<sub>之</sub>、親經明曉可<sub>下</sub>向<sub>南</sub>都也、

賜<sub>親經</sub>文、

綱所先奏一通、<sub>大僧正已下、僧綱等多以載之、正員僧綱又以逆書、</sub>

十聽衆文一通、<sub>獨是十人載之、</sub>

年分度者文一通、<sub>五人載之、</sub>

簡定文二通、<sub>去年所賜、錄之堅者二人、今年可<sub>遂</sub>衆之人簡定、所<sub>上</sub>狀也、</sub>

宣旨聽衆文一通、<sub>今日宗賴所<sub>書</sub>也、氏<sub>賴</sub>家司書之定例也、</sub>

宣旨聽衆書樣、

當年堅者、

盛恩、

圓兼、

宣旨聽衆、

範慶、

範圓、

已上東寺、

增運、

東大寺、

文治三年十月八日

宗賴申<sub>御前物</sub>之間事、銀器先例請<sub>度</sub>大寺會御調度

御器用之、仍相尋之處、主基用銅器云々、未曾有事也、悠記事未尋得、大略納裝束使歟云々、可尋基親之由仰了、

女房三位今日戌時男子平産、尤爲悦、

九日、丙天晴、未刻、大膳權大夫季弘來申天變事、定經來申條々事、又頭中將實教申臨時祭五節等用途事、入夜基親內覽離宮院可被幸日時勘文、見了返給、其後良久又持來兩社行幸日時、同見了返給、大夫史廣房申行幸用途之間事、內府參内、入夜歸來、

十日、丁陰晴不定、未刻許自院女房告送云、自去

夜御頭小腫物御座、醫師奉付大黃云々、又定能卿告示同趣、仍俄以營參、于時申斜也、以定能卿入

見參、仰云、當時所付藥也、増減未分明云々、件卿

語云、定成、賴基、貞繁等奉見、各申無殊事之由、

然而君御事、以重瘡治可奉仕也、仍奉付大黃

云々、而頗冷之由有仰、若是熱氣不熾盛歟云々、

又定長來、余仰付條々事等、閑院修造莫大之功也、若

可有勸賞哉如何、又群行用途合期進納、若知行國

等之中、一兩國などの、重任功可被用歟、件兩條經房所計

也、又新勝院事、賴朝朝所示也、同可取御氣色之由示了、日

沒以後退出、參内、亥刻歸家、此日維摩會初日也、勅使右小辨親經昨朝下向了、講堂瓦金物並損亡事等、皆悉終功之由、宗賴朝臣令申、行事侍重永所申上也云々、感悦不少、

十一日、寅天晴、巳刻、右中辨基親朝臣參上、申行幸用途不足之間事、及四万疋云々、仰云、不足分頗過分歟、慥勘定可申之由重仰了、定經申取勝會事、仰十八日之由了、宗隆申大神寶之間事、入夜宗賴來

申條々事、朝現行幸御前物銀器、先例諸渡大嘗御調度康治壽永等例、被調之、而尋納殿之處、一切無之云

云、事已闕如、内尋女院御倉邊之處、有銀器一具

云々、宗賴相具所來也、余答云、此事極以有恐、爭可

致所望哉、輒不能留置之由仰了、今朝以書札、

奉尋法皇御惱之處、無爲之由、醫師等令申云々、

十二日、卯天晴、今日巳刻大地震、雖不及去年七月

震、其外、第一之大動也、天變頻至、其上有此震、恐

而猶可恐、司天輩廣基泰茂等來臨、各以恐々、宗隆

申大神寶事、余仰付白山訴事、座主所入也、夜定長爲

御使來、閑院修造、賴朝卿賞事、并知行國重任事等

也、其不詳歟、仰云、每事所存事、分明申者也、定



有存旨ハ令申歟、さかしく不可被仰<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>之勿論也云々、新勝院事一切無御覺悟云々、余此次、大動可恐思食、口口政事枉可有沙汰之由、可奏聞旨仰聞了、觀性法橋來、今日辨別當光長、仰遣研學暨義事於寺家、覺良、永祥、

十三日、庚雨下、自院法勝寺學生堯延可給<sub>二</sub>研學若准業請<sub>一</sub>之由有仰、仍可賜<sub>二</sub>准業請<sub>一</sub>之由令申了、於<sub>二</sub>准業<sub>一</sub>請者、以他寺探題之舉狀仰下之、然而院宜有限、不能左右也、定經進上閑院指圖、

十四日、辛天晴、靜賢來、召前仰<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、定能卿來、謁之、定經來、即令持指圖遣<sub>二</sub>忠親卿許<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、宗隆申<sub>二</sub>大神寶事<sub>一</sub>、宗賴朝臣申<sub>二</sub>御前物<sub>一</sub>、明日八幡行幸休幕雜事定之間事、今日忿々殊甚、

十五日、壬天晴、定經宗隆等來申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、花山院大納言被<sub>レ</sub>來、入<sub>レ</sub>夜定<sub>二</sub>石清水行幸休幕雜事<sub>一</sub>、余及內府著<sub>二</sub>冠直衣<sub>一</sub>、出<sub>二</sub>上達部座<sub>一</sub>、先例必不召<sub>二</sub>公卿<sub>一</sub>、仍不招之、然而內府同宿也、不臨<sub>二</sub>此座<sub>一</sub>、無謂、仍余仰<sub>二</sub>可候之由<sub>一</sub>、仍即著<sub>二</sub>座也<sub>一</sub>、宗賴朝臣執<sub>二</sub>定文章<sub>一</sub>、〔草〕、以<sub>二</sub>天治<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>例文<sub>一</sub>、兩日擬等先例宛<sub>二</sub>家領莊々<sub>一</sub>、而當時家領爲<sub>二</sub>今<sub>一</sub>他人沙汰、又攝州河州邊無<sub>二</sub>可然之所領<sub>一</sub>、

仍不裁<sub>二</sub>莊<sub>一</sub>家、只菟可宛<sub>二</sub>楠葉<sub>一</sub>也、今日院渡<sub>二</sub>御伏見<sub>一</sub>、兩三日可有<sub>二</sub>御經廻<sub>一</sub>云々、

十六日、癸天晴、入<sub>レ</sub>夜陰、此日、大神寶日時定也、秉燭之後著<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>參內、〔內府相伴〕、先是上卿新大納言實家卿、參

議宰相中將通資卿等、著<sub>二</sub>仗座<sub>一</sub>、定<sub>二</sub>日時使等<sub>一</sub>、余著<sub>二</sub>殿上<sub>一</sub>、宗隆持<sub>二</sub>來日時定文等<sub>一</sub>、〔發遣并大祓日時、共十一月三日也、各加禮紙、又近國四使之定文一懸紙、〕余見了返給、次余向<sub>二</sub>直廬<sub>一</sub>、定<sub>二</sub>殿上使<sub>一</sub>、頭中將

實教朝臣書<sub>二</sub>定文<sub>一</sub>、〔此事猶奇異事也、雖一字不書之、其儀如例、先是職事等立、實教先覽<sub>二</sub>例文<sub>一</sub>、余讀<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、書定文自<sub>二</sub>國中取出<sub>一</sub>、持來覽<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、〕余見了卷<sub>二</sub>加例文<sub>一</sub>、

返<sub>二</sub>給<sub>一</sub>之、實教加<sub>二</sub>置硯折敷上<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>之退下<sub>一</sub>、次余參<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>、此後實教於<sub>二</sub>殿上小板敷<sub>一</sub>、定<sub>二</sub>七道使<sub>一</sub>、藏人基定書<sub>二</sub>之、〔頭及藏人共居、〕書<sub>二</sub>了實教持來令<sub>一</sub>見<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、先例不<sub>二</sub>必覽<sub>一</sub>歟、然而見<sub>二</sub>之返<sub>一</sub>給<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>所衆<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>使也<sub>一</sub>、事了余

及內府退出、今日定經、宗隆等、來申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、

十七日、甲天晴、藏人辨親經自<sub>二</sub>南都<sub>一</sub>去夜歸洛、今日

參入、後奏之中、綱所奏懈怠、仍今日不進云々、又大衆有<sub>二</sub>種々訴訟<sub>一</sub>、條々目錄注<sub>二</sub>折紙<sub>一</sub>、子細難<sub>二</sub>盡<sub>一</sub>筆端、

十八日、乙天晴、此日被<sub>レ</sub>勘<sub>二</sub>伊勢遷宮<sub>一</sub>、山口祭日時、上卿源大納言定房卿、辨右中辨基親朝臣、入<sub>レ</sub>夜基親持<sub>二</sub>



來日時請奏等、見了返給、今日申刻右大辨親宗、持<sub>三</sub>來延曆寺戒狀、余欲<sub>三</sub>相逢受取<sub>二</sub>之處、適以<sub>三</sub>人進<sub>レ</sub>之、仰<sub>三</sub>可<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>返給、須<sub>三</sub>自受<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>之也、然而依<sub>三</sub>先進<sub>二</sub>便返給<sub>一</sub>了、其後更所<sub>レ</sub>謁也、余著<sub>三</sub>冠直衣<sub>二</sub>、維摩會行事辨親經、持<sub>三</sub>來維摩後奏<sub>二</sub>、以<sub>レ</sub>人召<sub>レ</sub>前、親經插<sub>三</sub>文杖<sub>二</sub>持來也、余見了留<sub>三</sub>注記<sub>二</sub>二卷<sub>一</sub>、返<sub>三</sub>給自余<sub>二</sub>親經不<sub>三</sub>結申<sub>二</sub>、退下之後親經申云、細殿舉相加下給如何、余思失給之、爲<sub>レ</sub>耻不<sub>レ</sub>少、又氏人見參、召<sub>三</sub>外記<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>給之由<sub>一</sub>仰<sub>レ</sub>之、先是親宗退出了、此夜修<sub>三</sub>天地災變祭<sub>二</sub>、陰陽師大福大、輔安倍泰茂、有<sub>三</sub>祭文<sub>二</sub>、右少辨親經參會、卒爾仰<sub>レ</sub>之、使職事經泰(信光)、<sub>三</sub>三<sub>二</sub>日<sub>一</sub>深<sub>レ</sub>余爲<sub>三</sub>謹慎<sub>二</sub>、著<sub>三</sub>衣冠<sub>二</sub>降<sub>レ</sub>庭訴<sub>三</sub>請天道<sub>一</sub>、<sub>三</sub>齊云々<sub>二</sub>、十九日、天明、此日兩社行奉幣、并御讀經等定也、上卿右大將申刻參陣云々、酉刻許、行事右中辨基親朝臣持<sub>三</sub>來日時定文等<sub>二</sub>、見了返給、其後有<sub>三</sub>宸勝會大乘會等日時僧名定<sub>二</sub>、上卿新中納言兼光卿、辨親經持<sub>三</sub>來日時定文等<sub>二</sub>、見了返給、

今日召<sub>三</sub>陰陽師等<sub>二</sub>、宣憲、季、問<sub>三</sub>春日(詣)社棟上等日次<sub>二</sub>、元所<sub>レ</sub>定正月十三日也、而自<sub>三</sub>明年<sub>二</sub>三ヶ年大將軍可<sub>レ</sub>在<sub>三</sub>南<sub>二</sub>、長者縱雖<sub>レ</sub>違<sub>三</sub>方忌<sub>二</sub>、公家爭不<sub>三</sub>令<sub>二</sub>避給<sub>一</sub>哉、被<sub>レ</sub>補<sub>三</sub>造寺官<sub>二</sub>之故也、加<sub>レ</sub>之永德例夏間依<sub>レ</sub>爲<sub>三</sub>王相

方、春日被<sub>レ</sub>行<sub>三</sub>棟上<sub>二</sub>了、仍今年猶擇<sub>三</sub>日次<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>遂行<sub>一</sub>之處、又爲<sub>三</sub>公家御遊年方<sub>二</sub>、仍被<sub>レ</sub>避<sub>三</sub>此方忌等<sub>二</sub>者、自今年四ヶ年之間、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>止<sub>三</sub>興福寺之造營<sub>二</sub>歟、此條尤不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然、仍猶長者違<sub>三</sub>方禁<sub>二</sub>之條、奉<sub>三</sub>爲公家<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>三</sub>其忌<sub>二</sub>哉否、問<sub>三</sub>陰陽師等<sub>二</sub>各申<sub>三</sub>旨<sub>二</sub>(不<sub>レ</sub>同)、問<sub>三</sub>大外記賴業<sub>二</sub>、先<sub>レ</sub>是參候申云、於<sub>三</sub>先例<sub>二</sub>者明日可<sub>レ</sub>勘申、案<sub>三</sub>事理<sub>二</sub>、公家縱雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>任<sub>三</sub>造寺長官<sub>二</sub>、於<sub>三</sub>方忌<sub>二</sub>者、讓<sub>三</sub>長者<sub>二</sub>令<sub>レ</sub>違無<sub>三</sub>殊難<sub>二</sub>歟、三四ヶ年之間、忌<sub>三</sub>土木之營<sub>二</sub>之條、天下之恨也云々、若爲<sub>三</sub>此儀<sub>二</sub>者、今冬明春之間可<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>之、而正月十三日爲<sub>三</sub>公家御衰日<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>憚歟、十二月爲<sub>三</sub>忌月<sub>二</sub>、三四及六月無<sub>三</sub>日次<sub>二</sub>云々、今年十一月廿七日之外、更無<sub>三</sub>棟上之日<sub>二</sub>、而廿五六兩日共不<sub>レ</sub>(快)、廿三日出門、廿六日下向、廿七日早旦參社、其後行<sub>三</sub>棟上<sub>二</sub>如何之由問<sub>レ</sub>之、各申云、廿五日御參宮有<sub>三</sub>何事<sub>二</sub>哉、大入道公御春日詣寅日也、今被<sub>レ</sub>用<sub>三</sub>戌日<sub>二</sub>、蓋被<sub>レ</sub>准據<sub>三</sub>哉<sub>二</sub>、廿七日又爲<sub>三</sub>厭日<sub>二</sub>、其忌惟同之故也云々、召<sub>三</sub>兼光卿<sub>二</sub>問<sub>三</sub>此間事<sub>二</sub>、所<sub>レ</sub>申同<sub>三</sub>賴業<sub>二</sub>、參陣以<sub>レ</sub>前來也、良久談<sub>三</sub>雜事<sub>二</sub>參陣了、此日定長朝臣爲<sub>三</sub>院御使<sub>二</sub>來云、日來御<sub>レ</sub>伏見、昨日白地出京、今日又可<sub>レ</sub>歸<sub>三</sub>入伏見<sub>二</sub>也、暫可<sub>レ</sub>有<sub>三</sub>御經廻<sub>二</sub>兼又朝覲行幸賞、經房卿申<sub>三</sub>從二位<sub>二</sub>、參議親信

愁超越、二位宰相有先例、被許如何、可計申者、申云、經房二位被許何事之有哉、親信二位頗希代歟、尤可有御猶豫歟者、此次來月廿七日〔余〕春日詣事、可〔被〕取御氣色之由仰了、宗賴季長等朝臣參上、仰此事等、此日、恒例舍利講也、依非神事之隙、於此亭修之、

廿日、天晴、以藏人辨親經遣左大臣右大臣等家、仰合興福寺棟上事等、相副陰陽師季弘注文、并外記師尙勘文等也、其趣今年公家御遊年在南、自明年三ヶ年、大將軍可在南、興福寺事、長者雖可違方忌、已被任造寺官了、爭不被避禁忌方哉、加之承德當寺棟上事、夏依爲王相方有沙汰、春中被遂棟上了、公家被避方忌之條、云道理云先蹤、子細如此、若因茲可憚土木者、三四ヶ年之間、停止興福寺造營、爲朝爲君爲寺爲氏、可謂殊勝之大事、仍重檢先例之處、承平供養東大寺講堂、新佛也、案置新佛、其忌同造作、仍足爲例、若可被用彼例哉、將又長者相代違方忌者、承別院宣、一向可爲長者之儀哉、就此等趣、加斟酌可被計申者、未奏問、先所尋問也、其由同示之、又此次內々尋問云、若方忌無憚者、內々同日次之處、明年正月十三日、雖爲吉日、公家御哀日

也、二月七日爲下吉日之上、長者忌月也、仍不可舉音樂、今年十一月二十七日最上吉日也、而兩社行幸同月之內、又春日詣重疊之事、定有勝禮歟、未代之、親經即歸來云、先方忌事、左大臣被申云、承平例雖分明、猶於如此禁忌、古今事異、猶難被追用歟、爲長者御沙汰尤宜歟、自院殊可被仰下歟者、右大臣被申云、攝政者代天子攝行萬機、被任造寺官、即攝政之儀也、今代君而違方忌之條、更不可乖物議、奉爲公家何謂被犯諱忌、已勿論也云々、此狀尤得其理、大外記賴業同申此之由也、次日次事、左府申云、息月音樂尤可有憚、指合行幸之條、全不可有憚、來月被遂行、更無異議者、右府申云、無所據事、猶被用吉例之時、不願天下之費者、近古以來例也、何況造寺之條、一天之大事也、爭恐謗人之口、忌造寺之營哉、明春之吉日、縱雖無指障、若曜宿支干劣於年歲之日時者、猶可爲先近日、不可被拘行幸同月之難、而如承者明春兩日、正月十三日御哀日、二月爲長者忌月、共有指憚、彌不及左右歟、論其實雖似指合、不可有三人之費歟、殊從儉約、必可被悉遂也者、兩條兩府申狀已叶愚案、爲退謗家之謬難、起此問者也、又以季長朝臣示合忠親卿、其趣大畧同前、但若爲廿七日者、其前兩三日

皆以不宜、仍以吉日出門、廿六日雖爲惡日、六日下向南都、廿七日朝參宮、其後行棟上如何、忠親答云、方忌事一向爲長者御沙汰、何事之有哉、一日之內被行三事、全不可有其難者、人々返答已一同、仍可仰南京之由、仰宗賴朝臣了、又春日詣定日、可問陰陽師之由仰之、即在宣朝臣參入問之申云、廿三日廿七日共吉也云々、廿三日之由仰之、

廿一日、戊天陰、雨下、入夜殊甚、早旦以使者經問參宮棟上等事於經房卿、子細同昨日記、返答云、此條

條凡不可及異議、早速可被遂行也、一月之內事重疊、實傍人之口必以難等歟、然而更非可被憚大之事、就中天下事不定、雖片時可被急遂也云々、此日有內文、伊勢遷宮判官主典等官符請印也、

上卿通親卿、入夜外記持來內覽、見了返給、此日以使者信遣通親卿許、來月廿七日可被行棟上、因幡所課不可懈怠之由仰之、入夜基親定經等、申行幸之間條々事、

廿二日、丑天晴、入夜小雨、參宮事昨日示遣僧正許、今日未刻返札到來、寺家沙汰一切不可叶、都可思止之由被答、仍余重示遣云、去十月延引、今度僅廿

餘日、猶有可被遂行之儀、今度三十餘日也、後十月者法華維摩兩大會、寺家經營指合、今度無加此之難、何因不可叶哉、是非強申之儀一旦之不審也、卒爾之間萬事難叶之條、下向之出立、萬陪寺家之營一、然而偏依崇重御寺之志、破石所出立也、然而寺家之被存之旨、殆可勝長者之思、仍不能是非、可延引歟之由示送了、花山院大納言來、謁之、又基親申云、行幸召物對捍之國々、院宣可被付使廳之由、相催之處、多以領狀云々、定長傳仰院宣云、春日詣事寺家折節雖指合、如聞食者、每事不可就止、條々任申請可致其沙汰之由、有御氣色者、申殊畏申旨云々、但寺家申狀如此、重遣了、仍暫不可相催公卿以下之由、同示之了、以消息示之同入奉書、入夜兼雅卿來、基親來申、諸國可付使之由、有院宣、先遣御教書、大畧領狀云々、

廿三日、寅天晴、重所遣僧正許之返札到來、猶一切不可叶云々、不能左右、早旦、範玄僧都來、依爲寺僧余謁、語棟上之間事、範玄大歎息、是則爲寺家之耻辱也、可悲、滿寺定驚歎而已、余仰聞衆徒蜂起不當之子細、範玄有伏理之色、伴僧昔爲大



衆張本、當時又於寺有勢之者也、仍且爲披露寺中、粗示聞所存之大概了、

親經召<sub>二</sub>具外記<sub>一</sub>參上、依<sub>レ</sub>昨日仰也、仰<sub>二</sub>慙可<sub>レ</sub>候之由<sub>一</sub>、又傳<sub>二</sub>仰條々院宣<sub>一</sub>、先日內覽事等也、又宗隆來申<sub>二</sub>大神寶來月三日難叶之由<sub>一</sub>、定經申行<sub>二</sub>幸神馬之間事<sub>一</sub>、申終、余着<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>、出<sub>二</sub>居上達部座<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>人召<sub>二</sub>親經<sub>一</sub>、親經來居<sub>二</sub>前簀子<sub>一</sub>、余仰云、以<sub>二</sub>東大寺大法師教觀<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>明年維摩會講師<sub>一</sub>者、親經微唯退下、仰<sub>二</sub>外記忠業<sub>一</sub>了云々、其後余參<sub>二</sub>八條院<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>小兒具菜事<sub>一</sub>也、依<sub>二</sub>密<sub>一</sub>儀、不<sub>レ</sub>引<sub>二</sub>移馬<sub>一</sub>、網代車也、前驅七八人許、共人右少將伊輔朝臣、侍從定家等也、于<sub>レ</sub>時秉燭之程也、先候<sub>二</sub>上達部座<sub>一</sub>、召<sub>二</sub>宗賴朝臣<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>事具否<sub>一</sub>、申云、陪膳欲<sub>レ</sub>點<sub>二</sub>成家朝臣<sub>一</sub>之處、伊輔候<sub>二</sub>御共<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>上薦<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>勤仕<sub>一</sub>歟、隨又役人一人不足者、仰云、上薦勤<sub>二</sub>仕陪膳<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>、事歟、伊輔、自本不備、如何、然間女房襄<sub>レ</sub>簾、余參<sub>二</sub>簾中<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>二棟廊<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>、南面三ヶ間垂<sub>二</sub>母屋簾<sub>一</sub>、立<sub>二</sub>互四尺屏風<sub>一</sub>、中間副<sub>二</sub>北屏<sub>一</sub>、敷<sub>二</sub>纒綱疊<sub>一</sub>二枚、其上敷<sub>二</sub>東京錦茵<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>若君座<sub>一</sub>、座東頭南北行、立<sub>二</sub>四尺屏風<sub>一</sub>、其西間敷<sub>二</sub>大文高麗疊<sub>一</sub>二枚、同加<sub>二</sub>東京錦茵<sub>一</sub>一枚、爲<sub>二</sub>余座<sub>一</sub>、女房六人着<sub>二</sub>打衣表<sub>一</sub>、着<sub>二</sub>裳唐衣<sub>一</sub>、祗候、其中二人居<sub>二</sub>中間左右<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>入前物<sub>一</sub>、

也、此外小兒乳母四條局、宗親朝臣妻、惟方入道娘也、着二物具二居二其座  
東方、小時陪膳右少將伊輔朝臣東、取二打敷裏濃蘇芳龜甲織物參  
上、女房取二入之、陪膳取二之敷二小兒座前、次臺二本盤  
二枚、小兒居二茵上、女房抱之、件四條殿可抱之、而面嫌之間欲不離乳母、仍件女房相副、其名大夫、六人女房之、余三箸含二之每箸加含、了、余退居二其座、女房  
內也、取二贈物二出來、手本裏錦付、銀打敷、以玉緒連之、召二伊輔二令取二之、余  
退出後聞、隨身給二腰絹二、六丈上絹各一疋云々、今日余須引二移馬二  
也、而存二密儀之由、又非二他人事、仍殊不及刷之由  
存之間、本所之儲已過二禮、余參之體太異樣、其恐後  
日以二宗親朝臣二且謝二之且畏二申之、始以二內府二欲二令  
合、而下官必可參之由有女院仰、仍所參入也、歸  
家之後、定二法成寺御八講僧名、左少辨親雅書二定文、  
以二去年定文二爲二例文、余冠直衣如二例、  
廿四日、卯、天晴、奈良僧正被二來、示二合棟上之間事、寺  
家之營、大略不可叶云々、仍及二明年秋冬二之條、第  
一之遺恨也、仍猶召二遣陰陽師二、在、委問二日次等、一年內  
一切無二其日、正月廿九乙丑不入三吉、又非二八神上  
吉、俱次吉也、玄武氏、有二其例、永久金堂棟上、井廣平法成寺日云々、被二用何難之有哉、但兩一兩日無二參宮  
之日、廿八日八龍日、廿七日不入神吉、又重日也云々、



然而法成寺入道殿、初度長德二年復日御參詣、重複其忌惟同、又不入神吉日例、大入道殿初度寅日例也云云、仍廿九日癸亥參宮、廿七日乙丑棟上之由相定了、僧正悅喜無極、宗賴朝臣參上仰此旨了、但明日猶召他陰陽師等、可問之由仰了、親經申條々事、又定長朝臣來、仰明日明後日之間可來之由了、

廿五日、壬辰天晴、職事皆悉來申條々事、終日無寸分之隙、不能委記、入夜參內、直衣、於直廬定五節臨時祭等事、頭中將實教執筆、其儀如例、先定五節事也、事了退出、

此日〔召〕陰陽師等、問參宮棟上次第日次、宣憲、季弘、在宣、季弘申旨同去夜在宣申狀、宣憲申猶可憚之由、然而季弘、在宣爲當時名士、仍可用人申狀歟、以使者仰合經房卿、申無憚之由、

廿六日、癸巳天晴、兼光卿來仰合棟上日次之間事、廿七日參宮事、重日不可被憚云々、廿九日棟上、法成寺金堂、并平等院經藏等例、尤可被據用云々、仰公家御衰日、一切不可被避之由所存也、若被避之條、方忌被讓仰長者之條、首尾相違了歟云々、此外談雜事等、小時退出了、今日春日社神主已下神官等參

上、申條々事、一々被仰了、定經申條々事、宗隆申大神寶日次事十一月廿二日、并宣命辭別之間事、廿七日、甲午天晴、此日、兩社行幸御祈奉幣也、上卿右大將、未刻奉行職事定經來云、奉幣以後延引之時、重有奉幣使、宣命被載延引之由也、而今度未被行奉幣以前延引了、仍今日之宣命可載其旨也云々、余云尤可然、但延引之由、只可載八幡賀茂宣命歟、自餘五社不可必載歟、可依先例者、小時大內記長守持來宣命草、申云、嘉應度奉幣以前延引、即七社皆載此之由云々、仰可依彼例之由了、又仰清書不可持來之由了、同時右中辨基親持來被勘賀茂行幸之日時、并改勘造離宮院之日時等、各見了返給、賀茂行幸元廿二日也、而兩社程遠、猶可爲三十四日之由其議出來、仍所改勘也、離宮院日時事、先日上卿實家卿被下件日時於內記云々、未曾有事歟、仍自官尋取之間、自然懈怠云々、仍所被勘下之日時空過了、更所及晚頭、定長朝臣來、依召也、條々可奏院之由仰了、入夜參內、定兩社行幸舞人陪從、尋實教朝臣之處、定經卿明日之由、仍例文以下不用意云々、一昨日臨時祭定之時、余仰定經云、今日

日次旁不<sub>レ</sub>宜、仍明後日也、可<sub>レ</sub>定申、但伊勢幣廢〔務〕日也、如<sub>レ</sub>此事被<sub>レ</sub>行哉可<sub>レ</sub>相尋、若有<sub>レ</sub>憚者廿八日官奏次可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行、但奉幣已行幸御祈也、舞人定又同神事也、全不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有其憚、歟、件條且相尋可<sub>レ</sub>言上者、其後定經無<sub>レ</sub>申事、余引<sub>レ</sub>見先例、一切無<sub>レ</sub>其憚、九月九日有<sub>レ</sub>伊勢幣、即奏<sub>レ</sub>平座見參、如<sub>レ</sub>此之例不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝計、仍仰<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>憚了、而今存<sub>レ</sub>明日之由、不<sub>レ</sub>致<sub>レ</sub>沙汰云云、不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>言也、所詮〔除〕奉行五位職事全不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>入例、天仁若仁并今度舞人陪從交名、可<sub>レ</sub>尋儲<sub>レ</sub>之由仰<sub>レ</sub>實教朝臣、良久各尋取之由申<sub>レ</sub>之、仍向<sub>レ</sub>直廬定<sub>レ</sub>之、其儀如<sub>レ</sub>例、但無<sub>レ</sub>摺袴宛文、依<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>行事所沙汰也、只舞人陪從定文許也、例文仁安定文也、天仁例文余仰云、調樂兩三度必可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行歟、明日吉日也、可<sub>レ</sub>始<sub>レ</sub>調樂之由可<sub>レ</sub>下知者、實教下<sub>レ</sub>知藏人業長了也、事了歸參來<sub>レ</sub>御前、依<sub>レ</sub>女房陪從闕如、內府候<sub>レ</sub>之、其後余退出、此日、小童相<sub>レ</sub>具僧正、下<sub>レ</sub>向南都、明後日可<sub>レ</sub>歸京、先日於<sub>レ</sub>重又以<sub>レ</sub>吉日所<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>南都也、今度宿初歸京之其儀、內府及女房相具、日出以前向<sub>レ</sub>九條堂、爲<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>出立也、余依<sub>レ</sub>今日伊勢幣不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>堂并其後僧正被<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>件堂、大將於<sub>レ</sub>堂壺禰邊、小童相共謁<sub>レ</sub>僧正、其後僧正相<sub>レ</sub>伴小童、下<sub>レ</sub>向南都、後聞、小童乘前

僧正乘<sub>レ</sub>僧正前驅八人、侍僧二人、在<sub>レ</sub>車其外覺辨律師一人乘<sub>レ</sub>車在<sub>レ</sub>共云々、其後引下<sub>レ</sub>小童共人四人、宮內卿臣、前和泉守行輪、伊豫守季長朝臣、右馬權頭兼親〔云々〕各乘<sub>レ</sub>車從<sub>レ</sub>之、又衣櫃二合衣仕<sub>レ</sub>荷侍三人、五位忠廣、左兵衛尉重經、所乘乘親相<sub>レ</sub>副之、是皆僧正時之例也、此日觀音院灌頂、大阿闍梨仁和寺宮被<sub>レ</sub>參勤、是其姊妹般富門院有<sub>レ</sub>御幸、被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>結緣灌頂云々、萬人不<sub>レ</sub>甘心、頗天下有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>云歟、莫<sub>レ</sub>言々々、廿八日、未<sub>レ</sub>天晴此日、兩社行幸調樂云々、又有<sub>レ</sub>不堪定并和奏、未<sub>レ</sub>刻計、大夫史廣房參來申云、左大辨可<sub>レ</sub>參之由令<sub>レ</sub>申奏、并基親朝臣申<sub>レ</sub>所勞之由、定長院中公事指合云々、親雅又所勞云々、親經被<sub>レ</sub>催奏申家司領狀了、兩方之間可<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>仰云々、余仰云、基親無<sub>レ</sub>殊事者、可<sub>レ</sub>參歟、猶申<sub>レ</sub>際者早可<sub>レ</sub>催<sub>レ</sub>親經、於<sub>レ</sub>奏申家司者全不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>事闕者、又仰<sub>レ</sub>行幸之間事并異損國中御使之間事、條々有<sub>レ</sub>申旨、不<sub>レ</sub>遑<sub>レ</sub>委記、晚頭親經申云、病者<sub>レ</sub>日來其<sub>レ</sub>之、危急不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>見放、仍今夜奏申不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>參內者、仍忽催<sub>レ</sub>他家司等、資奏朝臣領狀云々、仍秉燭之後、相<sub>レ</sub>伴內府、余直衣、內府東御、參內、即內府著<sub>レ</sub>陣、先是派光、親先有<sub>レ</sub>大根申文、官奏者九月公事也歟、大根者十月公事也、仍理申文、是<sub>レ</sub>次不堪定、親宗書<sub>レ</sub>之、其事了、內府參<sub>レ</sub>御所、其後

余向直廬、改著表衣、著下重又指帶、著野服、出居上達

部座、其裝束如例、雖母屋簷、此座不立屏風、余座前次奏

者辨史直廬方家彈正弼資泰朝臣相逢參上、申基親朝

臣奏候之由、以政朝臣同依率爾、參入、然而依爲上、屬川余

仰圓座可敷之由、資泰退下之後、職事等先敷圓座、

國、次立切燈臺、信光經泰加圓座、依次舉燭、經泰、已上皆

次資泰朝臣更參進、余仰可召之由、資泰退召之、次

奏者右中辨基親朝臣持奏杖、跪南緣東頭、深揖合

眼余、余目之、基親高唯起、揚起參上、屈行膝行如

例、跪長押上、下同膝行、招寄杖、余置笏、右上方以

左右手、振取文、置前板敷、縱基親遼巡退降一間許、

東行右廻、外廻也、歸著圓座、深揖候、乍持杖余刷衣

裳、解結緒、引延披禮紙、引(展)左右引寄當年不堪

一結、於禮紙之中程、天、不解結緒、引振黃勘文、

披見定文許、(折)不見、如本卷之、持(天卷)見之、

之、編一枚許、成テ、左手插本結緒、置禮紙左、不見、當年

也、上引懸天卷之、如例、插本結緒、置禮紙左、不見、當年

次見副文一通、足張越中等各先見開發解文、其二卷重

次見不堪文也、各每見了、置當年不堪左也、卷三禮

紙結之也、片結無、三二尺許指出、天置、基親置杖、右方ニ

天、東四行ニ置之、島口方ハ、頗ル北方ニ直膝行昇長押、及

天取文、持文中退降、東行右廻復座、不、結申如例、

越中ヲハ、コシノミチ余每度目之、基親稱唯、加禮紙結

之、片、取加杖、深揖退下、次余歸入、加元著直衣、

此間基親於辨座下、史如例云々、余參御所、即相

伴內府退出、內府語云、於陣兼光親宗云、今年歲末

公事大略被遂行了、於今者十二月式日公事之外、

不可有歲末之奔營、第一之上計也、二三十年來未

見此事云々、

今日候八條院之小兒、去廿三日食、來、今日凡無面嫌、

與輩類以賞瓶、入夜歸參了、

今日參內以前、大理隆房卿來、申使廳之間條々事、余

謁之、付職事、可被申之由答了、是先內々所來

觸云々、所示之事等尤可然、

廿九日、丙天晴、召廐馬等見之、長房相具參上、隨身

等引之、各令騎、長房已下、撰仰行幸移馬等了、皆

悉牽出了、其後召可用、乘替之馬、密々令騎之、

閉中門已下、不兩三廻打廻之後下馬了、今日親經申、左

右兩府意見之間、被申狀各無指事、仍余且可被仰

下之文、五六條仰親經了、且奏事之由、且尋先

例、可申沙汰之由仰之、入夜定經來仰院宣云、



除目行幸以前可被行歟、將又行幸以後歟、可計申者、又行幸以前過差之新制尤可被下也、早可下知、此事余先日申請、仍所被仰歟、又意見之間事、召人々於直廡、豫議可奏聞者、明日可來之由仰定經了、爲申御返事也、今夜申不可歸參之由也、

此夜內府方、密々有管絃之興、兼雅定能等卿已下人五六人來、於內府內出居有此事、

定經又云凌礫外記史申、陣吉上等之衛府、右兵衛尉成經定俊等云也、

先停止見任、其上召出其身、隨狀可處罪科者、解任事早可下勘文、早々可召出其身之由仰了、

卅日、丁天晴、親經來申、美作紀伊等國濟物免除之事等、院宣趣分明云々、定經來、余申去夜御返事、除目

事只可在勅定、新制事無仰以前仰親經了、重早可召仰者、意見事只今參上可言上者、申刻著

直衣參院、依御風氣無御對面之由被仰、以定長兩條有被仰下事、一者家通卿萬死一生、辭

中納言左衛門督、以子息時通、可申任少將之由令

申如何、幼少者云々、然而家通無殊誤、頗携絲竹、

久任公庭、聊有哀憐、歟如何、可計奏者、二者兼雅卿、可還任大納言、歟如何、可計奏者、余申云、

家通息羽林事、父以所職舉申之時、不必依位次、歟、但幼少之條可在勅定、兼雅卿事、自元天下之所序也、抑大納言本員五人、當時六人也、被加七人之條、不可有憚者、還任尤宜歟者、又余申條々事、一類勅勘實事、先日雖奏聞、無勅許、猶奏覽而已、有勅許、尤神妙、一公通管國之間事、先爲遣使字佐、可行管國之由被仰了、而朝卿有申旨如何、仰云、先此旨可仰公通者、一意見評定猶於院可有沙汰歟者、仰云、如此事不知于綱、猶於直廡可沙汰者、一除目期事、仰迫可仰者、參八條院、小兒出來謁見了、次參內、申御拜事、即退出、此夜有行幸調樂二音、陪從等相論、第一信綱城外、仍第二範宣可奉仕一無、第二仲俊望申之、第三有賴申云、重代堪能之者、超上薦承二音、先例已有、賴高爲範基息、仲俊非重代也、又非堪能者、仲俊申云、先例多任次被仰也、此藝所傳近久者、陪從等申云、無二音被調樂、先例也云々、余仰云、今夜許不可有二音、兼又可問妨方、近久等之由仰了、今夜調樂第二度也、

玉葉卷第五十一終



# 玉葉 卷第五十二

自文治三年十一月  
至同 年十二月

〔文治三年 丁未 廿九〕

十一月〔大〕

一日、戊〔天〕晴、此日御曆奏、上卿實宗卿云々、帥卿以有經、以院司賞、可叙從二位之由存之、沙汰之時、可然之由、可口入之由示送、答子細了、法皇不可超親信卿之由、有御氣色云々、又通親卿以信光、此旨即經房所示送也、其上余力不及歟、觸引送可任衛府督之由、家還卿已、有次者可奏聞之由答之、

此日召集陰陽師等、問興福寺棟上日次之間事、先日在宣擇申廿九日之由、而宣憲季弘等、申丑日有一有、本文不快之上、近例又不吉、院七條殿御所丑日立之、其後無程有、如、追捕、同正月廿三日雖爲青龍脇日、吉例太多、興福寺北圓堂、并嚴勝寺、金堂、內、一、條院等例、此外猶以多云々、八專日之條、供養猶有例、仁和寺、況棟上哉、且又爲密日、強弘不可憚、加之參宮日廿七日、六甲之窮日謂癸亥也、尤不快、不入神吉重日也、而廿三日有棟上者、廿一日〔廿二日〕共吉

日也、仍旁可被用廿三日云々、濟憲在宣申云、丑日可忌之由雖有本文、先達一切不沙汰事也、仍法勝寺阿彌陀堂、被立之時、道言等猥申乙丑了、季弘申云、雖擇申不被川延引了、又平等院經藏、同乙丑被不能動申云々、其理可然歟、立了、惣當道之所習、全不憚丑日也、青龍脇日雖有例、已禁忌四ヶ日之内也、又八專也、旁不可比廿九日云々、余問宣憲等云、家榮者末代之名士也、而所擇之雜書、奏聞白川院、天下之所用也、而載諸禁忌之内、全不載丑日、爰知彼此之輩不憚之〔歟〕、於本文者、雖種々無盡之禁忌、不用來之事、強不及其沙汰歟、於青龍脇日者、已重禁之内也、於例者有吉有凶、只當道之所忌避丑日之忌不及青龍脇日也、如何、宣憲季弘等申云、載家榮難事一事、未必皆悉用之、即賀家之先祖光榮勘文、天元比也、可忌丑日之由勘申了、爭受彼末流、申不可避之由哉、即勘勘文、共於有禁忌者、可依例之吉

凶、而丑日之例、康平六年七月廿七日乙丑之由、在宣勘申、而件廿七日丙寅也、已無<sub>レ</sub>慥說<sub>レ</sub>歟、此外更無<sub>レ</sub>例、不足<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>用云々、余問<sub>レ</sub>在宣等<sub>レ</sub>云、所<sub>レ</sub>注申<sub>レ</sub>兩度例、於<sub>レ</sub>法勝寺阿彌陀堂<sub>レ</sub>者、雖<sub>レ</sub>成勘文、已不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用、載<sub>レ</sub>例之條勿論、平等院經藏之例、可<sub>レ</sub>規模<sub>レ</sub>之處、如<sub>レ</sub>季弘勘申<sub>レ</sub>者、支干相違如何、又光榮勘文明白、何因棄<sub>レ</sub>彼說<sub>レ</sub>哉者、濟憲在宣等申云、先祖之中如<sub>レ</sub>此之勘文、萬事皆有<sub>レ</sub>之、然而其後及<sub>レ</sub>子孫之時、猶定<sub>レ</sub>用捨<sub>レ</sub>決<sub>レ</sub>是非、不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>舊勘、草<sub>レ</sub>之事不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝計<sub>レ</sub>、是則其內也、中古以來全無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>忌<sub>レ</sub>丑日<sub>レ</sub>之沙汰、且家榮存<sub>レ</sub>此儀、不<sub>レ</sub>載<sub>レ</sub>雜書<sub>レ</sub>也、於<sub>レ</sub>平等院經藏例<sub>レ</sub>者、廿六日之由注進了、而廿七日之由被<sub>レ</sub>仰、注與宗親之例、載廿七日之由也、而今日常事之由也、若書失歟、罷出引<sub>レ</sub>檢例文<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>言上<sub>レ</sub>者、相論之趣雖<sub>レ</sub>事繁、一決已迷、仍尋<sub>レ</sub>訪<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然之人々、可<sub>レ</sub>左右<sub>レ</sub>也、仍令<sub>レ</sub>退<sub>レ</sub>出陰陽師等<sub>レ</sub>了、入<sub>レ</sub>夜基親朝臣申<sub>レ</sub>行幸之用途之間事、諸國可<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>使應使之由有<sub>レ</sub>院宣、但可<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>今夜、明日猶懈怠者、明日慥可<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>使云々、其後召<sub>レ</sub>基親於簾前、問<sub>レ</sub>字佐之間事、所<sub>レ</sub>申太多、不<sub>レ</sub>遑<sub>レ</sub>具錄、此日內府、爲<sub>レ</sub>練<sub>レ</sub>習催馬樂<sub>レ</sub>并<sub>レ</sub>習<sub>レ</sub>唱歌、以入車、向<sub>レ</sub>宗家卿家、件卿、月來病憊、猶未<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>尋常、仍內々所<sub>レ</sub>向也、習<sub>レ</sub>唱歌等<sub>レ</sub>了、及<sub>レ</sub>子刻<sub>レ</sub>

歸來、件卿親昵之上、行而學者禮也、仍令<sub>レ</sub>向者也、今日習<sub>レ</sub>殿上其駒之一說<sub>レ</sub>了云々、

二日、<sub>己</sub>(天)晴、去比依<sub>レ</sub>凌<sub>レ</sub>轅馬部吉上等<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>解官<sub>レ</sub>之左兵衛尉定俊、取<sub>レ</sub>雅賴入道并能保臣等消息<sub>レ</sub>來、申<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>打<sub>レ</sub>吉上<sub>レ</sub>之由、仰<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>觸<sub>レ</sub>奉行職事<sub>レ</sub>之由了、晚頭定經來申<sub>レ</sub>同旨、仰云、先日定經申云、召<sub>レ</sub>對兩人<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>之處、定俊無<sub>レ</sub>避申方<sub>レ</sub>云々、隨又依<sub>レ</sub>院宣<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>解官<sub>レ</sub>了、其上不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>私進上<sub>レ</sub>、早可<sub>レ</sub>奏<sub>レ</sub>事由<sub>レ</sub>者、親經來申云、意見事、行幸以前不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>其沙汰、先過差之制、行幸以前可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰歟、仍注<sub>レ</sub>仰詞草案<sub>レ</sub>、所<sub>レ</sub>持參<sub>レ</sub>也云云、披見之處無<sub>レ</sub>殊難、但准<sub>レ</sub>五節相撲之例、兩社行幸之間、舞人已下當色不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>改著<sub>レ</sub>之由、尤可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>載歟、但此事無<sub>レ</sub>先例、仍先可<sub>レ</sub>奏<sub>レ</sub>事由<sub>レ</sub>者、親經申云、先被<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>合左大臣<sub>レ</sub>如何、余云、大可<sub>レ</sub>然、先仰合、一度可<sub>レ</sub>奏聞<sub>レ</sub>也者、基親申<sub>レ</sub>行幸召物諸國散狀、三日、<sub>庚</sub>(天)晴、召<sub>レ</sub>親經、進<sub>レ</sub>左大臣第間兩條事、一者可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>新制<sub>レ</sub>之間事也、一者陰陽師論<sub>レ</sub>申與福寺棟上日次<sub>レ</sub>事也、即歸來示<sub>レ</sub>大臣返答、

新制事、

問云、意見之中、過差事、且可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>忍仰下、但先行幸

以前、衛府所從可被減事、并兩社行幸供奉之輩、所從不可著裝束事、尤可被忿仰下也、而於相撲、五節者載舊符、是依爲例事歟、於兩社行幸者、末見先符如何、

被申云、爲人尤要須也、但供奉之輩中、或著染裝束之人、若守制者、兩日可著歟、此條不可然、仍似無詮者、

此申狀如何、素可被下事、所從常色之類也、非自身裝束歟、隨又不可改著之意爲制花籠也、改綾羅錦繡、著例裝束、何謂破制符哉、此答頗勿論也、

### 棟上日事、

問云、造作之忌、丑日與青龍脇日、其輕重如何、陰陽論申趣如此、子細見去可被計申者、

被申云、雖不知子細、丑日有論者、青龍脇日禁忌之中頗輕之由所承置也、可被用廿三日歟者、余仰親經云、行幸兩日裝束事、被申旨問答相違也、但親經所書之宣旨趣、不載所從字、仍大臣申狀非無謂、余素所仰者、供奉之輩從類常色事也、仍改宣旨之狀、且以此等子細可奏聞、不日可宣

下之由仰了、

四日、辛天晴、親經來云、新制事、余所申可然、早可下者、仰可宣下之由了、親經又仰云、前大納言兼雅、可還任大納言、今日可被行除目者、此事先日被仰合、申所存了、其後無音、仍一昨日余招定長、奏他事之次、內々示云、件還任事、大納言員數本體五人也、今已六人、永不可過此員者、兼雅之還任、縱雖爲要須、被待闕、何強有怨哉、件條者若不思食定、雖後日可被任者、行幸以前被任宜歟、且是以前官之身、奉行初度朝親行幸之難事、有禁忌之由、識者等傾奇云々、大外記賴業珠御奇云有憚歟、顯祖卿奉行康治之初親行幸已吉例、然而今又此沙汰出來之上、又不加被還歟、加之、今還任已似無其次、仍此以此事爲便被還補、頗似有、此條論實雖不及重禁、遂可有恩許者、以此次被任宜歟、兩方可有御計之由、可奏歟者、若依此申狀、俄被行歟、朝方卿可任之由風聞、仍近日之事無定法、被仰兼雅卿、他人拜任者、彌可爲非據、仍加思慮、奏此旨也、又仰云、家通所帶之官等、秋除目之次被任宜歟云々、余申云、兼雅卿事、先日申子細了、還任何事之有哉、中納言左衛門督等事、實秋除目被任之條、尤可然候者、即催



上卿、可<sub>レ</sub>忿行<sub>二</sub>之由仰了、入<sub>レ</sub>夜被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>除目、親經歸<sub>二</sub>來自<sub>レ</sub>院、持<sub>二</sub>來任人注文任狀、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>任之由仰了、外記爲<sub>二</sub>內覽<sub>一</sub>持來、見了如<sub>二</sub>本加<sub>レ</sub>封返給了、

五日、壬寅雨下、入<sub>レ</sub>夜兼雅卿爲<sub>二</sub>拜賀<sub>一</sub>來、申次家司宗

賴朝臣、余謁<sub>レ</sub>之、布引馬、隨身引兼雅取<sub>二</sub>綱末<sub>一</sub>一拜、

依雨於中門拜之、子細同<sub>二</sub>去年實家卿來臨之儀、但彼卿者取<sub>二</sub>馬綱<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>拜也、忠雅卿參<sub>二</sub>松殿<sub>一</sub>、又不<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>馬綱<sub>一</sub>而有<sub>二</sub>

此拜、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>深禮<sub>一</sub>也、中御門右府被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>故殿<sub>一</sub>、有此

拜者也、定經來申<sub>二</sub>行幸之間雜事、余日來仰<sub>二</sub>付兩條<sub>一</sub>

事、可<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>片舞<sub>一</sub>之公卿、并兩社司勸賞等事也、片舞

付之後及廿日、宣而一切不<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>左右、仍今日問<sub>レ</sub>之、申旨

事、餘三十日了、仍明日早參<sub>二</sub>鳥羽<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>申定<sub>二</sub>之由仰<sub>レ</sub>之、頗

有<sub>二</sub>所<sub>レ</sub>澁之氣、仍仰云然者、兩條共職事可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>計仰<sub>一</sub>

也、非<sub>二</sub>下官之輩者、仍驚申<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>參奏<sub>一</sub>之由、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>有

若<sub>二</sub>亡歟<sub>一</sub>、此間事、子細雖<sub>レ</sub>多不<sub>レ</sub>追<sub>二</sub>記錄<sub>一</sub>、今晚新制宣

旨狀中、依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>改直<sub>一</sub>之事、其旨仰<sub>二</sub>親經<sub>一</sub>了、即書

改持<sub>二</sub>來之<sub>一</sub>、奏聞之後、可<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>之由仰了、今日舞人馬御

覽、余不<sub>レ</sub>參也、

六日、癸卯天晴、定經傳<sub>二</sub>院宣<sub>一</sub>云、片舞中納言可<sub>レ</sub>立

者、實家卿取<sub>二</sub>拍子<sub>一</sub>、定能、通親等可<sub>レ</sub>立歟、賞事、八幡

別當、并權別當二人、玄清命清成清等也、玄清不可<sub>レ</sub>關賞之由、慶清雖<sub>二</sub>訴中<sub>一</sub>、猶可<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>其中<sub>一</sub>之由、有<sub>二</sub>院

實、皆極位也、仍追可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰之由、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>、慶清申

僧正事不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然者、入<sub>レ</sub>夜定能卿云、片舞事、先日定經

申<sub>二</sub>奏定之由<sub>一</sub>、而今又違亂如何云々、此事余申<sub>二</sub>所存<sub>一</sub>

指申人五人也、仍隨<sub>レ</sub>仰可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>除<sub>二</sub>一人<sub>一</sub>之由仰、而昨

日申<sub>二</sub>未<sub>レ</sub>奏聞<sub>一</sub>之由、仍仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>奏之由<sub>一</sub>之處、其實奏聞

了歟、次第未<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其心<sub>一</sub>、今日、行幸供奉物裝束等、皆

悉分賜了、內府二位中將等同前、余沙汰也、

今日、行幸召仰、宣命草奏、已上代始多兼神寶御覽寬治

天仁常等、今日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>之由召仰了、而右大將稱<sub>二</sub>頓

病不<sub>レ</sub>參、仍催<sub>二</sub>他上卿<sub>一</sub>之處、諸司等皆退出了云々、仍

今日不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>召仰等事<sub>一</sub>、神寶御覽事、又依<sub>二</sub>神寶未<sub>一</sub>

出來、又以不能<sub>二</sub>御覽<sub>一</sub>、近代事每事如此、尤不便々々、

此日行幸巡檢也、辨基親來云、代始必上卿已下所<sub>レ</sub>向

也、而右大將頓病云々、爲<sub>レ</sub>之如何、先例非<sub>二</sub>代始<sub>一</sub>之

時、辨已下向、未<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>參議已下勤<sub>一</sub>巡見之例云々、余

云、參議者勸<sub>二</sub>納言之替<sub>一</sub>之職也、況爲<sub>二</sub>行事<sub>一</sub>之參議

哉、縱雖<sub>二</sub>無例全以不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>毀亂<sub>一</sub>、仍早參議已下可<sub>レ</sub>巡

檢也者、基親稱<sub>二</sub>善<sub>一</sub>、即基家卿以下向<sub>二</sub>巡檢<sub>一</sub>云々、

七日、甲辰天晴、此日、今上最前石清水行幸也、余及



內府二位中將皆以供奉、仍各修諷誦、又今明兩日、多武峯恠異初度物忌也、行樣々祈等、已刻著束帶、色日如例、（註）時給螺、相伴內府紅、下重、面黃、裏紅也、龜甲浮文織、細銀、紫綾染平緒也、物也、同半臂、但裏滿款冬也、（註）沈地螺、銀、二位中將、（註）打下製也、明日可等、參內、依爲陣中、新地不緒、（註）若染裝束也、入自南面門、直參御所方、頭中將實教朝臣之外、一有情未參、懈怠之甚、言而有餘、仰實教、且令取居神寶等、此間召經家朝臣、令奉仕御總角、其後著御々裝束、先例可然之公卿奉仕之、仍召源中納言經家朝臣、相共所奉仕也、此間定經參上、責仰遲參之由、無所於披陳、上卿右大將之許、可進人之由仰之、御裝束了、御覽神寶、其儀如例、（註）御床面邊、余實教朝臣、令開御覽了、殿上五位以下撤之、（註）右少將知光一位役、（註）御覽了、殿上五位以下撤之、（註）右少將知光一位役、此間入御、其後右大將猶未參、先例上卿遲參之時、且參入之上臈、有奏宣命之例、而召仰未被行、隨又右大將、只今參入之由、使者令申、暫相待之間、已及未始、仍余著殿上、以他上卿欲令奉行之間、右大將參入、即以定經仰召仰事、（註）路召辨同仰宗、（註）左少辨、次被奏宣命草、見了返給、此間定經申云、舞人馬一疋未將參、事已闕如了、仍余召乘替馬獻之、（註）件乘替馬向七條朱雀了、仍前近馬之中、擲尋常馬獻之、次余參御前、即出御、先

內侍出立御張前、定經向陣方、仍仰親經、令催出御事、先出立御々帳西間、次御反閉、（註）除陽顯宣靈朝臣、次主上立御帳前、（註）坤注與御帳之間、其袂無其、次右將渡左、次內府以下公卿列立、（註）右大將、經前、次寄御輿、（註）無鈴奏行幸之例也、此間昇出大刀契、（註）依通々、御輿昇居御輿寄之後、二位中將良經參上、開釐戶、取重宮置之、次主上乘御御輿、余奉扶持、即余經簪子、於東中門廊外著靴、（註）先是其經閉、此間、兩大將前行騎馬、（註）他公卿先是次御輿持出、（註）不仰御輿、余立中門外、御輿過給之時不居、只敬屈也、是行幸例也、次御輿出門了、於同門左衛門、外騎馬、供奉腰輿後、殿上人前也、陣中隨身二陣代也、前行、爲先下臈、（註）馬副張口、殿上人陪從等、少々在余前、於陣口、頭上臈隨身騎馬、下臈、其後調度懸也、余不具雜色、或兩三人召具也、然而今經大炊御門、東洞院、六條、大宮、七條、朱雀等路、余於七條坊城邊、乘車在後陣、（註）陣頭身、乘々替（聲）馬、到鳥羽北門下、更乘馬、（註）上臈乘騎馬、馬副下臈隨身、上下各更乘晴馬之間、御輿暫扣之、余乘車之間、在車前之殿上人諸陣輩等於北門內、更在余後也、渡御棧敷前、（註）先例可然之公卿、（註）御著衣冠、祇候云々、今日朝方卿布衣烏、余舍人遣下手方、以

下臈隨身二人、令付馬口、馬馴服也、立走舍人馬口、是雖不審、近代之例也、今渡於鳥羽南門外、尋車等、御棧數之時、這馬西(南)方了、於鳥羽南門外、尋車等、未出來、於桂川東頭、先乘替馬出來、依車遲々、騎乘替馬、參上之間、御與留、歇餉所、仍下馬參上、兩犬將、源中納言、二位中將等祇候、頭中將又以候、御膳供了、々々即起御、此所將來車、仍余乘車候、後陣、件歇餉之所、桂川西頭五六町之程也、戌終著御宿院、依入夜余不騎馬、於鳥居外、於一段許下車、經中門并東轡門、入自、部屋異角簾、此間御與持去、下御已了、須被待余也、而早以下御、大將失禮也、太奇恠々々、女房密語云、御裝束頗有狼藉事、御小親卿、而早以退下、仍召經家朝臣、令改著御裝束、給、先供小膳、陪膳中納言典侍也、此間召定經、催行了御禊事、而之間以實教、令申云、頓病更發不快、相扶云々、仍召親經、仰御禊事、先掃部寮敷長筵、當御所中央敷之、仍余仰當東一二間可敷之由、是定例也、近代諸司不足、次立案寄懸御幣、又神祇官置神寶於案上、又敷宮主使等圓座、件、使座、可在宮主東北方面、而敷西方、仍余仰令改之、次著御裝束之後、召御手水、陪膳、次著御々拜座、元、御御手水等之時、御輕履西御座、今御拜座、件、御裝束也、小蓮二枚、之上敷、高麗端半帖一枚也、南面著御也、

余候輕履南邊、次召頭中將、召御笏、即持參之、入自東邊、主上令取御笏、給、實教持了、次供御贖物、次實教朝臣持參御麻、於部屋東頭、宮主付之、一撫一吻了返給、實教取之給宮主、々々著庭中座、南、次上卿右大將、入自東轡門、著座、先是起東部座、併、次御禊、此間令入形給、余了宮主退出、大撤御贖物、實教役教申也、案下一跪指笏、實、取三所幣各一捧、合三、立同案下、次主上御拜、再拜訖余以咳聲告示之、上卿置幣取笏復座、帥中納言經房取、插頭花、經上卿座北、插冠、右廻退下、次上卿退下、次召實教返給御笏、次起御拜座、令歸西御座、給御解脫、次召定經、仰賞事於上卿、抑北部屋、先例無端部妻戶等、只簾許也、仍召轡引之、其內可立屏風之由、仰置親經退出、經北中門、并高、房東南門也、內府藤中納言等、相伴於宿所、不解裝束、勸酒饌、其後定能卿退出了、二位中將先以退出、依所勞不接此座也、是非公卿座事、只內々事也、且是先例粗存之故也、及深更親經來云、別當慶清申云、宮寺僧官不被仰賞之事、古今未會有、僧正事不被仰下、初度行幸被貽希代之例、不能左右云々者、余仰云、於僧正事者院宣切了、更

不及私進止、僧官賞之中無見任人之條、各爲極位之故也、但以<sub>レ</sub>其讓<sub>レ</sub>舉申者、盡無勅許哉、今夜縱雖不被<sub>レ</sub>仰、早經奏聞、雖明日被<sub>レ</sub>仰、只同事也、早可<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>他事者、重申云、他事一切無可<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>事云々、余情案<sub>レ</sub>之、代始行幸、當時不被<sub>レ</sub>行、仰<sub>レ</sub>僧官之賞之條、實非無<sub>レ</sub>其恐、若申<sub>レ</sub>他事者、今夜經奏聞、明日可<sub>レ</sub>仰下、若<sub>レ</sub>又其事不爲<sub>レ</sub>非據者、於社頭且仰下、追雖經奏聞、強不可<sub>レ</sub>乖<sub>レ</sub>敕慮、歟、而全無<sub>レ</sub>申事云々、仍非力之所及、權別當成清、申可<sub>レ</sub>讓<sub>レ</sub>弟子之由云々、若被<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>件事者、又院宣不分明之上、爲<sub>レ</sub>慶清頗不足言歟、仍不能<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>其賞、神慮<sub>レ</sub>之恐、後日之難、共以難遁、仍以此等子細、仰<sub>レ</sub>合上卿<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>在山親經登山仰<sub>レ</sub>之、歸來云、此事仰<sub>レ</sub>合官外記之處、實代始行幸、不被<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>見任賞之條、已以無<sub>レ</sub>其例、然而先<sub>レ</sub>日例、皆極位之人者申<sub>レ</sub>讓、而權官者多爲<sub>レ</sub>淺位、仍自身蒙<sub>レ</sub>賞也、未有<sub>レ</sub>如今度<sub>レ</sub>慶<sub>レ</sub>、皆悉爲<sub>レ</sub>法印之例、隨又別當不<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>他事、仍各追可<sub>レ</sub>申請之由被<sub>レ</sub>仰下、豈謂不被<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>賞哉、然者何強及<sub>レ</sub>神慮之恐哉、被<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>成清讓之條、爲<sub>レ</sub>別當不足<sub>レ</sub>言也、此上事不可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>異議、官外記申旨如

此、恐案又同云々者、余仰<sub>レ</sub>親經云、俗官皆浴<sub>レ</sub>加級之恩、僧官又被<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>追可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰之由、僧俗之中、一人無漏此賞之者、上古未<sub>レ</sub>必然、於<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>見任之條者、皆悉極<sub>レ</sub>法印之綱位之故也、慶清又濫望之外、不<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>他事、豈可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>公家之被<sub>レ</sub>抑可<sub>レ</sub>行之賞哉、所<sub>レ</sub>怨申<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>謂、早存<sub>レ</sub>此理、勿<sub>レ</sub>懷<sub>レ</sub>訴鬱者、即上卿歸參、被<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>御願平安遂了之由云々、依<sub>レ</sub>此沙汰、及<sub>レ</sub>曉天付<sub>レ</sub>寢、

宮寺賞、

別當、權別當三人、已上追可<sub>レ</sub>申請、俗別當、同前、已下七人、各一階、

八日、<sub>レ</sub>天陰不雨、此日還幸之次、於<sub>レ</sub>鳥羽南殿、有<sub>レ</sub>朝觀之禮、蓋天仁二年之舊慣也、辰一點著<sub>レ</sub>束帶、相<sub>レ</sub>伴兩息、參<sub>レ</sub>都屋、余自<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>鳴<sub>レ</sub>出立、先以<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>脇<sub>レ</sub>隨身、遣<sub>レ</sub>親經之<sub>レ</sub>經家朝<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>御所、日可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>御總角之由仰也、又使<sub>レ</sub>沙汰之時、每事懈怠、仍爲<sub>レ</sub>事加<sub>レ</sub>巨細之下知、不<sub>レ</sub>願<sub>レ</sub>客<sub>レ</sub>嘲、只在<sub>レ</sub>公平、而已片舞之公卿等、遲參之間、時刻推移、各加<sub>レ</sub>催促了、御總角了供<sub>レ</sub>御膳、其後奉<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>御裝束、通<sub>レ</sub>親經、經家<sub>レ</sub>水等了、御<sub>レ</sub>輕<sub>レ</sub>帷<sub>レ</sub>前御座、<sub>レ</sub>兩面此間人々漸參集、內府以下著<sub>レ</sub>東廊座、先<sub>レ</sub>是前庭敷<sub>レ</sub>公卿座、<sub>レ</sub>座未<sub>レ</sub>追<sub>レ</sub>南<sub>レ</sub>暢<sub>レ</sub>已無<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>代々例、井當時便<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>余仰<sub>レ</sub>可用<sub>レ</sub>東<sub>レ</sub>暢<sub>レ</sub>門之由也、余仰<sub>レ</sub>



親經召公卿、此間余居諸屋、即內大臣已下參著、入自東座後、著之、次居衝重、人別二前、殿上五位(六位)役之、余像北上四面、無可役之五位(因)爲之如何、余仰云、近衛次將之中有三五位者、盡勤仕哉、早可召也者、其後兩三人出來云々、自東暢門、經座末居之也、居了、已下只居三前、若不敷、內藏頭經家朝臣勸盃、內府上勸之、瓶子六位藏人巡行了、次余召藏人辨親經、先例以頭仰之、而仰陪從并片舞公卿於內府、依當座也、其詞云、權中納言源朝臣、左近中將藤原朝臣、同源朝臣、同藤原朝臣、(左近中將藤原朝臣、同源朝臣、同藤原朝臣)等、可立加舞、權中納言藤原朝臣可候、拍子、參議藤原朝臣、可立加陪從一者、元所被定、拍子實宗卿、實教朝臣也、而實家一人、先例無能人、人立加事、是召、其人之也、而無其人、仍依天仁重實例、被仰、基家卿也、其非英華、其藝隔、絃歌、然而依、爾如所被仰也、他人又無其人之故也、先雖(被)仰、右大將因辭、不能重仰之上、所申又非、無罰歟、親經就內府座上仰之、(內府)次第告示所役之輩、各起座出、東暢門、(小時陪從等入、自南暢門、余仰云、公卿陪從、入暢門、)立暢際、他所作陪從等在暢外、是例也、今公卿陪從不入以前參入、如何、親經傳仰、各申云、近例如此云々、雖不當已參入、又強不及毀禮、仍不能追却、次定能基家等(卿)、進立所作陪從之前、定能立東、基家立西、即發哥笛聲、是又遠例也、如各立暢門四方也、故殿御記者、自

暢門外打拍子、次舞人公卿三人、元參入、自南暢門東方、可參入云々、次舞人舞人六人、元參入、自南暢門東方、可參入云々、進舞、家房細退參、依基家卿例、不待一人之退參、且左第一通親、右第一良經、左第二通資、如此立也、舞了各經列外、自上薦退出了、此後陪從等留立、歌大緒、其後陪從退下了、次公卿起座(了)、內府著廊座、見參、歟、不經幾程、親經持來見參、扶、余自籠中取之、(一)見了返給、內持可傳進也、然、而依便宜直取之、次給公卿已下祿、基親朝臣持來余祿、余仰可持返之由、仍持來給隨身、是例也、行事辨、若藏人頭、取執柄條、先例、而頭不候、仍強行事辨取之歟、次內府以下公卿列立、也、右大將立西、如、次寄御輿、中央間數進、公卿起座之後、數之也、次二位中將參上、卷御簾、其上昇居之、子時已終也、取二瓶御筥、安輿中、退候、次乘御、大將稱、餘奉扶持、次良經閉、二、退下、余於巽角庭著靴、御輿出、南暢門、於所從前行也、經暢東、到中門、大將於此門、仰御綱云々、御輿出鳥居之後、余漸進行、於鳥居外騎馬、七八町進行之後、乘車候、後陣、前近相具隨身、下薦兩三步行相從、各相管可、騎馬之由、召仰也、馬副又騎馬在其後、到駄餉所、下車、去七、參上、此間供御菓子、即發進、余自此所騎晴馬、隨身晴馬、諸鳥羽南門云々、仍各騎乘也、余、騎乘、一替、然而其程不幾、其煩惟多、仍直騎晴馬、上、綱、也、於鳥羽南門邊、隨身騎晴馬、々副下薦隨身等、下馬從



馬後、又張差繩一如例、去鳥羽南殿南面四足一許  
町、上臈隨身下馬、下臈等在馬前、如陣中、進門  
邊、余下馬垂裾、靴猶著之、進立御輿前、此間雅樂發樂、神祇大席余參之、前  
進說否不氣色兼雅卿、件細已下列立中門外、東上南兼雅  
見及也、進立庭中、相揖之後、入自暢門北進前庭、申  
事之由、歸出、示樂屋敷、即發亂聲、先令撤暢門、如初進立、向  
余相揖復列、次余先到中門下、隨身爲先、下臈前行、余垂裾也、改著  
淺履、候中門北腋邊、進道西邊也、次左右大將同前行、候中  
門內庭、兩大將共候、南方各北面也、次御輿昇居中門、元日敷蓮、其上昇居也、前陣方在  
也、次二位中將、自御輿西方參進、弓給隨身、開戶取裾、  
跪候、御輿北東方、次下御、余指笏取御裾、良經前  
行、進道、入御自西對代南面妻戶、余置御裾、褰御  
簾、其經先就件腰下、與置於內侍退下、件內侍參候也、余同候御休所、召通親經  
家等、令改著御裝束、路問者古物、今著御新御衣、又供御湯漬等、  
內府可勤三衣宮役之由、兼雅卿所仰也云々、主  
上御裝束了後、依兼雅卿示、內府經透渡殿、參上、  
先是余仰職事拂南庭、雜人閉中門、隨身等非此限、褰南庇東中隔御簾、法皇出御  
著御座、此間內府指笏取三衣宮、經御座前、母也、  
置御座右邊、拔笏退下、候南階以東簀子邊、次余  
敷帛拾其儀、內府退下簀子之後、余起自御休所

南面簾、主上入御殿之月也、經透渡殿、入自寢殿南庇西南妻戶、  
向透渡殿戶也、經西庇到屏風下、跪、北面、指笏取帛裕、  
西第一枝也、同屏風下置鎮子四、不取件鎮子也、右廻經西南庇、跪御座西邊、  
 置帛裕於御座上、引展之、先西端疊下押入、南北狹  
 クテ不足疊一寸許也、仍不能押入、中程まで及  
 て引展天更起、經御座南、庇一丈間也、御座又廣クテ其路甚狹、然而依右小隙、猶經此路、更立簀子、依無便宜也、跪御座東頭、引展帛裕、又押入、東妻如  
 初敷了、乍指笏經本路、跪屏風下、取鎮子、  
二枚左手、二枚右手、各了て、みに持之、雖持左右手、頓又手、不使人顯見也、如初跪御座西頭、  
 先置乾角、次置坤角、已上向正東、入疊端一寸許也、次經御座南、  
 跪東頭、先置巽角、次置艮角、已上向正面、入疊端同前、次頗向  
 北拔笏、左廻經本路、出自初戶、到主上御休  
 所西南戸下、褰御簾、即主上出御、經透渡殿、到  
 西面戸下、召御笏、頭中將實教朝臣持參之、余像近也、主上取御笏、入自同戸、自南庇東進、余候也、  
子御座西問也、自御座東頭昇敷物上、北面立御揖之後、  
 二拜置御笏、立右左右、臥テ又右左右、主上御舞踏、右左右定例也、  
 更取御笏一拜而立、又二拜了、一揖左廻歸御、  
御作法神妙也、余自簀子參進於初戸下、返給御笏、還御  
 休所、次法皇入御、內府褰衣、入御之後、指笏取三衣篋、次指入御在所簾中、經南簀子退下、

改御裝束、兼殿上五位等役之、撤御拜敷物、垂母屋簾、底自元上敷菅圓座於南簀子、并透渡殿、件等儀沙汰、而五位藏人三人、皆以未練、或敷法皇御座於主上御座東間、是院出御之時儀也、專不可然、仍余仰之破却、或母屋西南座不垂座、余仰之可下之由、又欲下座、余制止之、或厚座等欲敷、未座、凡如此之違亂、不可勝計、一々教訓、已忘、義々之禮、欲招輕之嘲、次近將陣胡床余催之也、次主上重以渡御、其何爲哉、初、其輕取御座前行、依無御劍也、須於初戶下召御笏、而早速入御之間、實教追參、着御之後進之、頗違例也、余又入自同戶、奉著御座之後、自御座西間、直降簀子、可著座也、而自簀子參上、頗雖遠、先規、又是非、指失儀、欺、御座定之後、余候法皇御氣色、召頭中將、候遠廊南邊、余目之也、即實教朝臣參候寢殿坤簀子邊、余目之、實教退下之後、頗經程、仍微音尋之、兼雅卿在對代邊、傳仰之、良久之後、右大臣以下公卿著座、定能卿已下在透渡殿座、著座了、余又候法皇氣色、法皇頗衰、儀令目給、余正笏召公衛朝臣實明朝臣了、顧目之、兩人進立欄下、公衛立階間、余又正笏仰云、樂行事者、仰了又告、顧目之、依爲左近仰了、先例也、各奉仰、經我方胡床之後、向樂屋了、次亂聲、次振棒、先左則親近、次右忠、次左右奏舞、左萬歲樂、賀殿龍王、右振棒之間、居公卿衝重、地久長保樂、納蘇利、

次有勸盃、頭中將、瓶子五位藏人定經、次右大將起床、依爲主上陪膳也、參議散三位等、同爲益供一起、座上二棟廊南面西一間簾、爲役送之路、暫而右大將取打敷、撒弓筋、不撒經二棟廊南簀子并寢殿西南簀子等、跪經指笏也、御座間長押下、敷打敷於御座前庭上、御座寄南之間、其難相並、敷、然參議親信以下益送如例、依人數不足、而相構居之也、上膳二人鼻返役之、通資卿持御酒盞參入、依余目自東簀子持返了、次右大將拔笏指退下、此後不直趨東方、爲取禮物、敷供御膳之間、舞人居間也、供了舞、此間頭中將實教來仰云、左舞人則近、右舞人忠節、樂人笙師利秋等、各可給一階者、余仰右大臣、先則近當事之同被、即大臣起座、於坤欄邊、以陣官召則近仰之、則近出庭中再拜、歸入樂屋了、一々舞入、遂一節於簀事、同仰之、太不受也、其程不覺情也、每度右大臣目也、右大臣復座、次長保樂之間、余候天氣、可入御、有可許、仍召二位中將、令取三樂宮、指入中間、余參上裏御簾、主上入御之後復座、女房密語云、御笏如何、答云、多次納蘇利、終頭五位殿上人置御遊具、先定經取前當蓋、令置座長押上、使以同人、琵琶於實宗前、置余仰殿上人可罷寄之由、左少將親和琴於實宗前、能朝臣一人參候、召五位殿上人、分給筆筆築於隆房

親能等、又令敷地下召人座、召人即着座、次糸竹合

奏、先雙調々了、內大臣出穴貴用、傍人、次鳥破、笛吹、

自第二句、次席田、次鳥急、次吹返平調、伊勢海、萬歲

樂、更衣之間、右大臣已下三人取贈物、自東方進來、

右大臣御遊始之間、經御前、迴東方、余起座、相跪御座間、此路頗不審、但有例之由被稱之也、

簀子、插笏受取御贈物、御本款、付、於透渡殿、召寶

教朝臣一贈之、相跪授之、復座、右大將右衛門督等、次第

取贈物、經御座、同於透渡殿授職事、次引牽出

物御馬六疋、各置平文、移鞍也、三匠之後引出中門、雜人亂入

於中門內、受取之、尤違例也、次給院司祿、次賜例

祿、頭中將持來余祿、依目歸給、隨身、次自下臈退下、余參御休所、招

定長朝臣、申賞之間事、注一帝下給、余聊有申旨、

歸來云、女房可叙、良經可叙正二位、兩事御忘却了

者、申云、三ヶ事家司益相加者兩事也、其外中將雖爲院司、傍人口如何、過分也、於中

將加級者、不可然、追可有沙汰者、猶被仰可

叙之由、然而猶申不可然之由、即召定經問外

記云、御乳母可加級、而元非五位之人、直叙三

品哉如何、外記云、先例必叙爵之後叙三位也、自

六位令叙例不候云々、仍奏事之由、仰、可依外記

申狀者、次仰定經令敷座、御休所南面妻戸前也、

余座南面、內府座東面、已上厚圓、執筆座北面、又舉獨、

切燈、次仰定經、召內府及執筆等、右大臣先是退、各着

座、隆房不撤弓箭也、取弓候氣色、余仰可召

硯續帛之由、隆房召男共、定經參入、仰云、硯續帛、

定經持參之、續紙一卷、加蓋、盛硯之櫛篋也、隆房置弓取之置前、卷

返續紙候氣色、余目之、隆房摺墨、余仰聞叙人

令書、隆房自上臈書之、如何々々、叙人注文爲、余仰

聞、男女之間、可爲先何哉、示合內府、々々云、可

爲先男叙位、所謂可然、仍先書男叙位了、放

其與書、女階各奏了、押硯於左、內府起座、持來叙位

也、可置柳篋、余見了置前、召職事定經奏法皇返

給、召藤中納言定能卿、給叙位、給之、次執筆內府共

起座、次余起座參御所、主上御寢殿北面也、御總

角御裝束等了、召通親、余招定長、畏申余給等恐悅之

由、此次今度、穩便之、主上御裝束了、此間通親云、女房申

云、被懸御服於御衣荷、納御辛櫃、可有還御歟

云々、如何、余云、專不可然、甚見苦事也、後日自院

可被獻也、通親云、所存如此、仍所申事之由也、

即出御寢殿、先是徹座、御座、庇左右柱下、先內侍出立如

例、次將渡東、次公卿列立、右大將、次少納言鈴奏、



先罷關司奏、乍申諸候之由、次寄御輿、良經置、次乘全不見、仍直有鈴奏也、御、余奉持、次良經閉戶退下、次昇出御輿、乘御之後西對代方退候、御輿出門了之後、乘車候後陣、到三七條朱雀、直東折、自萬里小路北行、參入自大炊殿北門、小時臨幸內侍出居公卿列立、寄御輿、下御如例、但御寢之間、余參上奉慰之間良久、次鈴奏名謁了入御、次余退下、

此日自院有御送物、

直衣御裝束一具、

絹七十疋、綿七百兩、

作大鼓納之云々、

九日、午、自內給引出物御馬、此中可撰取三疋云云、余見了給三疋返上四疋了、人々供奉之間、每事神妙之由告送、爲悅不少、入夜親經來申條々新制之間事等也、事、明日可下向春日祭云々、

十日、丁未、定經來申行幸行事官賞之間事、仰可奏聞之山、召宗隆、十三日行幸、可奉行之由仰了、〔又申大神宮之間祭之事〕基親廣房申賀茂行幸用途之間事、此日立春日神馬、〔戊申〕天陰、定經來申行幸行事官之中、外記史

等申狀、仰可奏聞之由了、

此日春日祭也、入道中納言來云、前攝政被示云、忠良可舉中納言、可然之樣可申沙汰云々、可存此旨之由答了、

〔基親參上、申御劔袋錦不候之由、此日春日祭也、入道中納言雅賴來云、前攝政被示云、忠良可舉中納言、可然之樣可申沙汰者、可存此旨之由答了、〕

內府依所勞、自川原立幣也、女房依月障有、由祓不立幣也、先例不審、依不尋得、准他彼時例不立幣也、

十二日、己酉、立梅宮幣、陪膳光輔朝臣、使雅樂助忠賴、乘尻多闕如、仍侍所司二人、并右衛門尉眞時等、俄召仰令乘也、其外內舍人二人也、此日、花山大納言來申條々事、

十三日、戊戌、閑院遷幸也、余爲奏行幸賞并他事等、先參六條殿、而院於前攝政第二亂遊之間、今夜不可還御云々、仍空以退出、直參內、先是以定經、大略可奏聞之由仰付之、其上余參上也、參內尋定經、定經又雖參院、不經奏達退出、只今重參了云々、



然間院御裝束行事、院司經家朝臣參上、申御裝束了之由、仍即行幸、其儀如例、兩大將稱病不參、余乘車自閑路參入、下御之後暫不解御裝束、給內侍所入御之時、令下御並庭上給御裝束、即歸昇給了、次余於直廡有吉書、上卿通親卿、官方基親、朝臣藏人方宗隆、次定經歸來仰院宣、任其趣仰下造宮賞了、也、朝臣可叙正二位之由、係有沙汰、然而依申不可有賞之由、不、被、仰下也、此次宮宣行用送料被仰、相模國重任了、廣元閑院修造、可爲兩國重任之由雖令、次余退出、中、無、天、許、也、修造之體雖莫大、頗有多被仰下旨事等、又鋪設不法殊太云々、

抑行幸行事賞之間事、以定經被仰下旨猶不慥、仍以書狀明日可尋申、今夜事書消息、明日以隨身可進院也、

十四日、亥、天陰不雨、此日、加茂行幸也、當今早旦、小浴、辰刻着束帶、色目如例、薛給螺、欲參內之處、僕從遲來之間、暫以懈怠、已刻先有祓事、陰陽師天文其後、相伴二位中將、色目如常、紫檀、參閑院、去夜所還內、地、耕、地、平、結、府此兩三日、有目病、風痺、猶以不快、仍今日不供奉、尤可謂遺憾、上卿右大將先以參入云々、其外奉行職事定經已下一有情不參、仰藏人召遣定經、又仰舞人行事業長、催舞人等、參御所方尋女房之

處、只今始有御湯殿事、每事懈怠不能左右、暫而定經參入、責仰遲參之由、無陳申方、次余著殿上、右大將進弓場、被奏宣命、定經傳、余見了返給、先是余候御前之間、藏人業清持來宣命、若是內覽歟、執柄候御前之時、以職事內覽是例也、而以內記被付藏人云々、如何々々、即仰定經令取置神寶、又召經家朝臣、賴實卿不參、件兩人之外、令奉仕御總角、御出立遲々之間、人々少々參入云々、御裝束了、召、源、通親經房、相、共奉之、先有神寶御覽事、主上著御座、蓋御座數大、床于厚圓座、余候大床子南方、也、母屋、召實教朝臣、開鏡宮并金銀幣等筥蓋、三社、備叙覽了、召五位六位令撤之、依無人數、仰定經同令役之、次入御、此後欲出御之處、于時、院未渡御々棧敷云々、仍遣人了、申未渡御之由、仍暫被相待、已及未刻、然間實教朝臣僕從之說、已渡御了云々、然而不知定說、余又差下膳隨身遣見了、下人之中、又有申渡御之由者、余以定經問人々、各申云、若可有御見物者、爭至于今、無渡御哉、漸有出御何事之有哉者、仍即出御南殿、其儀如例、余指笏候御裾、內侍候前後、頭中將實教付前、行、內侍、右中將實明朝臣

付御後內侍、余據定經取之、於御帳西間、御反問之間、使者歸來云、未渡御云々、若於途中經數刻者尤可無便宜、又反問以後、更不出御違期、仍以定經問右大將、申云、如以前諸卿議定、理又可然、仍主上立給御帳前、次將渡、次公卿列立、右大將立、左大將立、次開司奏、次鈴奏、少納言次寄御與、花、二位中將取御璽、入御與中、次奉乘主上於御與之後、自東庇直進、此間良經開、於東階下著靴、隨身等令、御出、御、左衛門陣之後、於同門下余騎馬、陣中路頭行列、具維、色也、於路頭御與之逗留、一町四五所也、仍遣隨身從者、令催促前陣、院不渡御棧敷云々、勿論不足言也、暫而所遣見之使者歸來云、只今已法皇渡棧敷云々、仍雖催促前陣、可被渡御前之間、經數刻於途中、及申斜、古來未曾有事也、院御棧敷、一條南室町東也、余渡御前之間、付口之舍人等、遣馬下手方、以隨身上薦兩人、令付馬口、但正渡御前之時放口、過了如本令付也、八幡行幸之時、乍令付口渡了、猶頗無禮也、仍今度令放口也、但雖付口又是非失儀也、申終到下御社、御路洞院、二條大宮、土御門、又西洞、於堤外上下々馬、余隨身、院、一條、出雲路河原等也、

玉葉卷五十二 文治三年十一月

余入堤內、於暢門下々馬、是先例也、御與經御在所暢南東等、入御自東南暢門、昇居御與於階隱前御與寄上、前陣方向、先是、公卿等列立御所東庭南頭、西上、余入自御在所北暢門、昇自御所北緣、經同緣并東面簀子候階隱北間、此間二位中將、自御與北方、當北方也、凡御與後次將、不論左右、昇自後陣方也、多分後陣當右、此社宮儀、後陣方當左、是御與前陣方、依不向北方之故也、昇御與寄、先開御與戶、次卷御所階隱間簾、須先卷簾之後、開御與戶、使、更進、御隨身取御璽宮、授右方內侍、候軒轅南北也、退候御與左方、次余參進、主上下御、奉扶持、令立給輕幄前、次良經開御與戶、又垂御簾退下、次御與持退、余此間自御所北邊、參入簾中、即御平敷御座、輕繩南頭間也、次供飯御膳御菓子等、不令解御、公卿著袈座、此間仰定經令置神寶御幣等、其儀、先掃部寮令敷葉薦於御所東庭、南北行東西相並、當北第一二間敷之也、先日廣房將、來指圖、當中央敷之、仍余如今日可敷之由仰之、次神祇官昇立案一脚於西薦上、南北相並、次內藏寮倚立御幣四捧、南北二捧、次神祇官、先盛絹笠、御鏡宮、金銀御幣等辛櫃蓋、置黑漆机上、倚立帶机也、每机蓋置也、次東薦上立白木長床子一脚、其上盛神寶於櫃蓋、櫃蓋之、四未置、終神寶等之間、上卿進南暢門下、付頭中將實教朝臣、

四百四十五

奏宣命清書、入宮、余候御所南第一間兩面端坐、余座也、

於三件一間東面、取入簾中、見了返給、此間供御手

水、女房大納言典侍陪膳、先例或近習公卿爲陪膳、或又藏人頭勤之、男陪膳之時、五位藏人勤役送也、次著御

御拜座、東面輕便北邊也、余候輕便前邊、次實教

朝臣獻御笏、出入自御所東面北第一間北裏、次供贖物二

前、陪膳頭中將實教朝臣、役送五位藏人定經、次宮主就北緣下、獻新御麻、實

教朝臣傳取供之、一撫一吻了返給、宮主取之着案

下、東面、次上卿右大將入自南暢門、經前庭、着

座、當宮主座坤置、試、長面、次引立御馬一疋、入自東暢門、將監引

之、暫以御退、次引立走馬三疋、舞人引之、但相論之間、仍引之、

行、行事藏人等引之、有四位舞之時、四位五位第一、并行事藏人

退出、御禊之間解々繩、撫入人形給如例、余教、次引

出神馬走馬等、余行、次撤御贖物、此間陪從於暢

〔門〕外、發歌笛、〔撤〕、次上卿起座、引出神馬等、進

案下、跪指笏、依不指得、取合御幣上捧、取南北案向

良而立、主上兩段再拜、余教、御拜了余以咳聲

告之、次上卿置幣跪、復座、次權中納

言兼光取插頭花、經前庭、自上卿西方進其前、插

冠、拔、笏右廻、經本路退下、〔件〕插頭花又以還、次上

卿起座、出自東暢門、參社頭、此間撤御笏、又召

定經、仰社司賞事、先是給上卿插花之後、殿上人

等給舞人已下插花云々、不見、次撤神寶等、次余退

下休幕、降自南緣、出同暢門、入自休幕、先例招公卿

有三獻、近例不然云々、只招定能朝臣二位中將、

〔相〕共密々有酒饌事、天治伊通卿一人參上之例也、

依內々之〔事〕二位中將著上、先取盃也、依爲

密儀、垂公卿〔座〕簾也、次定能卿退出了、其後數刻

余不解裝束、更著用有煩之故也、及亥刻終、社頭

事漸欲畢云々、知神樂道之故也、仍相伴二位中將

參御所、先是着御々裝束、即上卿歸參、以定經申

御願平安遂了之由、仰聞食之由、此間撤御在所東

巽良三方暢、敷公卿座、一行北上東面、自御所南第一

實教朝臣召公卿、次右大將已下著座、自座後、主殿

寮立明在馬場東頭、次舞人上御馬於南、先是竊皆上

兩三人、自余如形馳之、此中侍從兼保馬前乘燭、

〔前〕左右口付舍人、其外兩三人在馬邊、其身平臥馬

上、見者莫不咲也、次公卿起座、次如元引暢、又

撤公卿座、次公卿列立東庭、北面上、不給祿、於上



社可給也、此間內侍候輕幄左右、主上立其中央、給、次寄御輿、余候參上卷御簾、候其北簀子、良經參上安御輿、次乘御、次閉戶、此間余於御所北邊、着、御輿經南暢外、出御西鳥居、人々於鳥居內、騎馬、狼藉殊甚、雖加禁遏、更以無答、次余於鳥居外、乘車候後陣、今夜法皇爲御方違御上社邊、幸路可過其前、給、仍余自閑路、大田中路云々、參會、於南一鳥居外下車、先以參入、經御在所北暢門、昇自同北邊、小時御輿入御自西暢門、昇居北第三間御輿寄上、右大將立北方、公卿列立南方、東上北面、此御所板敷太下、キナリ、公卿可居地也、隨又先例如此、而近代列立云々、尤不、余參上西簀子邊、次良經奏、○南漢按卷之議歟、御輿寄御簾、仍拜自後方也、取御輿宮、授內侍、退候北方、次下御、余奉扶立輕幄前、給、次良經閉登戶、退下、次持退御輿、余參簾中、入自西面南第一、公卿經南暢外、着、公卿帷、在所主上御平敷御座、件御座在輕幄前、凡此御所北面也、西面如側方也、第三間構輕幄、第二、次余仰定間敷平敷御座、第一間供御拜座、三重之也、、次余仰定經、令昇置神寶等、先御所良庭敷、北相並也、、次立案倚立御幣所、置神寶、々々進軾於下社也、下社加河合社分、仍二社、次主上御手水、女房陪膳、了御御拜座、也、上ハ只一社也、、次主上御手水、如初、、了御御拜座、次獻御笏、次供御贖物、次供御麻、陪膳役送、必同前、、次宮主

取御麻着座、次上卿經西庭着座、在宮主座前方、次引立神馬一疋、走馬三疋等、今度無論、余豫仰北、、取幣立、次御拜、次上卿置御幣、不復座直出自北暢門、參上社頭、於下御社給、神頭花、仍於上社、不給也、故不復座、其理可然、、余召定經、仰社司賞事、次撤御笏、又撤神寶、如例、次余退下休幕、北鳥居外東脇也、余步、行也、、即解脫休息、於此不蓋膳、及已終、又遣隨身令尋之、歸來申云、御神樂韓神之間也云々、仍余著束帶、伴良經參御在所、此間上卿以定經申云、貴布禰々宜有忠服假也、以代官申賞如何、余云、服假之人不蒙賞歟、代官條先例如何、又被申云、問例之處、天仁度、或被賞、代官、或被仰、追可申請之由云々、余云、追可申請之由可被仰也、猶服假之人、以代官被行賞、無其謂者、其後暫而上卿歸參、經暢西、於南暢門方付定經、申御願平安遂之由、仰聞食之由、如例、次撤御所西良坤暢、敷公卿座於西面南腋、北面上、、次以頭中將、欲召着公卿之間、右大將已下進以着座、先例入便之時、不必召着、御馬於南次馳北、社方、之、或又推參、是又例也、、次公卿起座、次立暢撤座、次右大將付定經、奏見參、經御所西緣持來、持、、余於北第一間簾中取



之、〔一〕見了返給、定經取之、〔取之〕退下了、次給

公卿祿、暫以遲々、余頻催之、次頭中將持來余祿、余

示可持還之由、仍退下給余隨身、次殿上人可給

公卿祿、而史生已用祿物逐電、雖尋召不候、仍不

給祿、公卿列立御所南腋、東上、右大將立北如例、

次寄御與、主上立北第三間、輕輦西、余卷御簾候、簾中

〔北方〕、次良經取御帳、安釐中、次乘御、余奉扶持、

自簀子北行着沓、此間長經閉、次御與出御西暢門、

了、其後於鳥居外乘車、余豫仰定經、人々馬皆悉令引、出鳥居外了、仍無狼藉也、

候、後陣、自閑路〔參會〕、行幸以前參閑院、小時御

與入御、內侍參候、余候西間、如例、次良經參上、取

御帳如例、下御立御帳前給、次持退御與、次鈴奏、

次名謁、次還御本殿、余持笏取御次以定經仰行幸

行事賞、次余退下、

社司賞、

神主重保、追可申請、

自余上下社司任社家、注進交名、皆一階也、

行事賞、

從二位藤基家、參議、

正五位下藤公房、上卿息、

從五位上清原仲隆、外記賴業息、

從五位下小槻公尙、史廣房息、

大江公朝、檢非違使

行事辨基親、追可申請、

十五日、壬〔天〕晴、此日立大原野神馬、陪膳闕如、仍

以宮內卿季經朝臣用之、又使闕如、仍俄以家司

勾當業家令勤仕、先例此使、有勤社雜事云々、然而俄參

旨豫仰乘、女房月〔水〕障過了、仍奉幣、但聊依有憚

事、自〔川〕〔原〕立之、行事家司國行相具陰陽師向

川原、內府自拜之、雖疾〔病後〕和扶也、

十六日、癸五節參入也、子刻相伴二位中將參內、余淺

文織物指貫、かれいの厚衣出之、候、殿上、右大將已下公卿兩三

面店物、裏背、中將出瀧打衣、候、殿上、人在座、中將加其

末、上人向五節所了云々、其後良久經程、仍余參

御前、數刻之後及丑刻、頭中將來觸事〔具之〕由、殿

上人等指〔脂〕燭〔群〕參上、余不歸着殿上直進行、

出也、以實教告、在殿上之公卿、即右大將已下相

從之、經清涼殿南廣庇、長橋南殿東簀子同北庇等、入

自帳臺南面妻戶、件戶懸簾、着蠶繭座、中垂簾、仍召藏

右大將居屏風外、依所狹、他人皆在障子外板也、

次舞姬等參入、入自西妻戶、各居床上半帖、東上北

面、人別敷半帳、件床〔取色〕立燈臺四本、舉燭苗  
童列居北、西方也、件燭苗後、人別其師列居也、次殿上人、江聲髮多々良、  
萬歲樂、亂舞如例、此間舞姬立舞〔大哥〕可發音而  
無音、余尋之、舞師等云、如形發了云々、殿上人亂  
舞了、舞姬等退下了、殿上人廻初戸方、次公卿等出  
妻戸、列立、次余出件妻戸、經本路入鬼間、參御  
所、次出自北門退出、中將相伴也、

公卿、實家、隆房、

受領、常陸、阿波、

今日扈從公卿、

右大將、隆忠、賴實、通親、

良經、出渡打衣、家房出渡打衣、他人皆不出衣、

此日出仕以前、親經來申弓場始之間事、基親申女房  
位記之間事、親雅申法成寺御八講之間事、

十七日、寅此日御前試也、又公卿殿上人、參般富門

院、有淵醉云々、此事先日頭中將以院宣問、余申、

院號之後淵醉、先例殊不見歟、但如此事只可依常

時御定、不可有定法事歟、仍有此事、法皇頗有

御興、仍所被行也、

十八日、卯晴、此日童御覽也、余昨日今日多武峰〔物忌

也〕、仍不出仕、內府薄色浮文織物指貫、黃二位中將半色浮  
實、紅打出、〔等〕參內、入夜歸來云、欲舉燈之間、有  
御覽儀、只新大納言一所也、公衡朝臣一人付童女云

云、參入公卿、內大臣、權中納言隆忠、源中納言通親、二  
位中將良經、三位中將家房等也、此日、親經兩度來申

御書所作文事、定經申條々事、〔寄宮寮納米事、御宮院事、  
余仰廣元、代官、賴朝卿訴申出納久近弘言之間事、亥刻、實

教朝臣申新嘗祭上卿闕如之由、兼光卿雖加灸治、  
隨重仰可參云々、仰不可憚之由了、

十九日、丙辰〔雨降、子刻大雷鳴〕、此日、豐明宴會也、乘  
燭之後、伴兩息參內、參御前、賴實卿遲參之間、暫

以不召御裝束、彼卿參入、其後有御總角御裝束事、  
此間內府着陣、以實教朝臣仰內辨、頃之奏外任

奏、見了返給、此次以權中納言源朝臣可爲大哥別  
當代官之由奏聞、仰聞食之由、次出御南殿、御覽、內

余候御前、他內侍并女房八人相從如常、藏人可持候式簀而  
候、仍忽尋召之令候、〔御覽、東〕式簀〔西〕等於東西候了、其

候中、此間引陣、依雨儀、在次內辨就元子、次內儀  
出、實教引導次內辨於元子南謝座、參上着座、次開

門、次關司着、次內辨召舍人、次少納言參上、依雨儀  
次內辨仰刀禰召、少納言退下、次外辨公卿隆忠以下

參列、依<sub>二</sub>兩儀<sub>一</sub>、次內辨仰<sub>二</sub>侍座、次外辨謝座謝酒了、昇殿着座、立中門北、小忌、兼光通、次陪膳采女參上、此間公卿向<sub>二</sub>五節所、次供<sub>二</sub>御膳御飯已下、暫抑之、次公卿歸着、次居<sub>二</sub>臣下紛熱、居訖申上如<sub>二</sub>例、余告<sub>二</sub>御箸下之由、臣下々々、次入御、內侍取<sub>二</sub>御果、次余歸<sub>二</sub>南殿、於<sub>二</sub>御帳後見<sub>二</sub>次々次第<sub>一</sub>如<sub>二</sub>例、御酒勅使宣命使、々々、召<sub>二</sub>大歌別當并祿所親宗卿<sub>一</sub>三獻、舞姬進舞、二獻之間、殿上人於<sub>二</sub>西庇<sub>一</sub>亂舞、事了余退出、兩息爲<sub>二</sub>見<sub>二</sub>殿上人等亂舞<sub>一</sub>留候、退出之後、雷電暴雨尤烈、仍殿上人御前召不<sub>二</sub>可<sub>一</sub>候之間、以<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>欲<sub>二</sub>令<sub>二</sub>申之由、事了兩息歸來、廿一日、晴、此日御書所作文也、野南漢按仰字、常在光範之上款、已下儒士等參入、出題仙洞勝遊久、情、廊者江維房豫申、定文人等、秉燭之後余參內、依<sub>二</sub>御寢<sub>一</sub>無<sub>二</sub>出御、以<sub>二</sub>南殿乾角外丙屋<sub>一</sub>暫爲<sub>二</sub>使場、以<sub>二</sub>東作合間<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>御所、西面懸、余相<sub>二</sub>伴女房等<sub>一</sub>候<sub>二</sub>御簾中、內府同密中、次殿上人已下着座、南座、殿上人公衛朝臣已下、次立<sub>二</sub>切燈臺、次置<sub>二</sub>文臺、用<sub>二</sub>數<sub>一</sub>、御書、次置<sub>二</sub>圓座、次置詩、次講師着座、是、次讀師進寄、教綱、次第講<sub>レ</sub>之訖、朗詠公衛朝臣、土令月上時土德是隆周等句、次連句未<sub>レ</sub>訖、余依<sub>二</sub>風病更發<sub>一</sub>退出、

廿二日、己(天晴)、此日、一代一度大神寶也、已刻着<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>、永保大殿御宿袍、見細川左大貳記、寬治、同前御直衣、天仁、天治又同然、而余案<sub>二</sub>奉理<sub>一</sub>、猶宿袍可<sub>レ</sub>宜敷、隨又公卿勅使、神寶御<sub>レ</sub>之時、故殿着<sub>二</sub>宿袍<sub>一</sub>(衣)、參內神寶未<sub>レ</sub>持參、使未<sub>レ</sub>參、仰<sub>二</sub>奉行職事宗隆<sub>一</sub>、各加催促、頃之上卿新大納言實家卿參入、先以行事辨基親奏<sub>二</sub>聞日時<sub>一</sub>、發遣大板各一通、共去三日之由(了)、而依<sub>二</sub>每事不<sub>一</sub>具、余候<sub>二</sub>朝餉<sub>一</sub>、見了即返給、所<sub>レ</sub>延引也、今日時末二點云々、余候<sub>二</sub>朝餉<sub>一</sub>、見了即返給、小時被<sub>二</sub>奏<sub>二</sub>宣命草<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>職事宗隆<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>奏之、大神宮一通、字佐一載<sub>二</sub>辭別<sub>一</sub>、先日宗隆問<sub>二</sub>辭別<sub>一</sub>有無、余仰云、諸社宣命、可<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>天變地寶等事<sub>一</sub>、字佐宣命、可<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>修造運忘事<sub>一</sub>、但先例大納言宣命、被<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>如此事<sub>一</sub>(故)、可<sub>レ</sub>仍<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>者、今日依<sub>二</sub>不書<sub>一</sub>(重)問<sub>二</sub>宗隆<sub>一</sub>之處、任<sub>二</sub>先日御定<sub>一</sub>宣下上卿了云々、而今無<sub>二</sub>辭別<sub>一</sub>、仍問<sub>二</sub>宗隆<sub>一</sub>、申云、儘仰<sub>二</sub>上卿了云々、余(仰云、然者可<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>上卿<sub>一</sub>、宗隆(仰)問之、歸米云、上卿被<sub>レ</sub>申、不<sub>レ</sub>覺悟之由、勿論也、儘可<sub>レ</sub>下知、之由、其詞文云々、余(仰(仰)云、直不<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>內記<sub>一</sub>、故如何、宗隆云、不然者、是又有若亡也、但日已及<sub>二</sub>斜陽<sub>一</sub>、忽書<sub>二</sub>改五十三通宣命<sub>一</sub>者、更不可<sub>レ</sub>叶、今日之事、隨又先例多<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>辭別<sub>一</sub>、仍就<sub>二</sub>宣命<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>載<sub>一</sub>之由、但職事之無<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、上卿之不<sub>レ</sub>覺、言而有餘也、余見了返給、仰<sub>二</sub>清書之由、次以<sub>二</sub>六位藏人<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>奏<sub>二</sub>官符<sub>一</sub>、使<sub>二</sub>官符內官<sub>一</sub>見了返給、仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>清書之由、此間主上御湯殿了、是又太懈忘、此、更無<sub>二</sub>治<sub>一</sub>、神寶僅以持參、數十度遣<sub>二</sub>使<sub>一</sub>、即先可<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>置伊勢<sub>一</sub>神寶之由、主上着<sub>二</sub>御々直衣<sub>一</sub>、御引直衣也、無<sub>二</sub>御總角<sub>一</sub>、實置伊勢神寶了、主上出<sub>二</sub>御神寶御覽之御座<sub>一</sub>、先是撤<sub>二</sub>數<sub>一</sub>大床于原圓座、數<sub>二</sub>大床于原圓座、余候<sub>二</sub>南庇東方<sub>一</sub>、母屋方也、以<sub>二</sub>治<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>西庇南一二間<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>置<sub>二</sub>神寶<sub>一</sub>之所、南北行與端相並、置<sub>二</sub>敷<sub>一</sub>、南端四五尺不及<sub>二</sub>其<sub>一</sub>上置<sub>二</sub>神寶<sub>一</sub>、內宮置<sub>二</sub>奧外宮置<sub>一</sub>、敷<sub>二</sub>庭<sub>一</sub>、南端四五尺不及<sub>二</sub>其<sub>一</sub>上置<sub>二</sub>神寶<sub>一</sub>、內宮置<sub>二</sub>奧外宮置<sub>一</sub>、



殿上人五位六位役之、出、入南一、間出御以前、置伊勢神寶許了也、出御之後、召頭中將實教、先開金銀幣筥蓋、近持參備、叙覽、次開御劔箱蓋、如初、外宮同前了殿上人五位六位撤了之、次置宇佐、香椎、大多羅志姬宮等神寶、宇左、香椎、各大一備、大多羅志小一備、宇佐御裝束四具、僧俗各一具、女林二具也、奧置宇佐、端置香椎也、次實教開蓋備叙覽、如例、但宇佐已下、只覽一次役人等運出之、次石清水、小二備、叙覽如初、即運出、次賀茂、上下各大、御覽了運出之、次日前國懸、各大一備、御覽了運出之、次京邊五社、松尾、平野、稻荷、大原野、關神等例之由、見天治故殿御記也、又稻荷三社也、松尾、平野、大原野、各小一備、稻荷小三備、所備叙覽并七具也、謂小一備者二蓋也、謂大備一度取置覽了、即運出了、次幾內三社、大和春日、攝津住吉、是又各小一備也、此外國中社一度御覽運出了、次七道各一社覽之、是又各小一備也、但南海道不覽之、日前國懸先之神寶一也、覽之故也、七道之中雖其社多、各御覽叙覽初社是例也、一度御覽了、皆運出了、次入御、御覽神寶之間、奏聞宣命清書、宗隆自見間方持來之、余見少々了返給、此次申使王申御馬之由、仰聞食了之由、次撤筵等了、次仰藏人等、上南面御格子、垂西面御簾、南面簾中當階間、敷大床子厚圓座、爲御座、其東間敷陪膳圓座、爲余座、次主上出御件御座、御直、余候東間、次頭中將實教朝臣、參候南簀子、次奉神馬

四正、伊勢內宮二正、外宮一正、宇佐一正也、三通之後引出了、不令、府者二人奉之、御馬乘隨身不事也、次入御、令脫御裝束給、經家朝臣奉候御總角、此間余向直廬、改着束帶、藤原朝、即歸參、主上着御々裝束之間也、御殿南廣庇、只雖敷御拜座、未立立神寶案、仍仰宗隆令立馬庭中立此案、余問之、宗隆云、御幣案也云々、此事勿論也、大神寶之時全無官幣、只神寶金銀幣許也、仍庭中使宮主座之外、全不可有他物、堂上立案一脚、可置御劔等也、仍仰此旨令改直、又御拜座可敷西第三間、而敷二間、仍同令直也、次召殿上五位六位、令置神寶、件案立南廣庇西第一間、中央南北並立之、下敷小筵一枚、件案置南端置御劔兩蓋、敷袋其上置御劔、御覽之時無相違、其北端各餘案外、北端置御劔一合也、當御拜座間、寄西敷宮主座、其良方敷使座、各執其後數刻宇佐使不參、先是能保朝臣申云、存入夜可參之由云々、勿論不足言也、尋宗隆之時、慥卯刻可參之由、返々召仰了之由所申也、重可遣責之由仰宗隆、又仰能保朝臣了、件使隆保、能保相親人也、仍仰之、日已欲入之間使參入、即主上着御々拜座、御自御拜座間也、御座四面也、余候御座後北方、次仰實教朝臣、令進御笏、次供御贖物、陪膳實教朝臣、役送宗隆、次宮主獻御麻、實教朝臣於中門廊南妻、



御馬五疋牽之、御馬乘隨身各一人引之、但今一人不足之間、先引四足、御馬乘渡而可引歟之由、藏人申之、余問(仰力)云、右乘尻餘五人、不被召渡、何事之有哉、爲滿員也、若無餘分ハ當雖召渡、引右御馬之時又如何、仍實四疋了、更一人退下、可引今一疋御馬也、忠季同、兩三匝引廻之後、忠季仰申被召渡之條、不打任之由也、云、乘り、頗引音仰之、即各乘也、兩三匝打廻之後、又仰云、下り、初、次牽出御馬了、最末一人更引出一疋、即乘之打廻之後引出了、今度無引音仰之條、次右寮御馬五疋引之、忠季召男共、仰之如初、漸及昏黑、仍余一匝之後、仰可令乘之由、忠季即仰之、各騎之一兩廻之後下了、忠季初、次牽出御馬之間、忠季又退下、次余退下直廬、改着直衣一直退出了、抑大神寶ハ、伊勢有奉幣有神馬、又宇佐勅使發遣、理須有兩方御拜也、而代々例無伊勢御拜、只宇佐御拜許也、天治故殿御記如此、其後代々記、全無件御拜、只江次第載件御拜、但頗非無事疑、其故、先於石灰壇奉拜太神宮、事了發遣之後、又於南殿、有同御拜之由仰之、件條頗不審也、依此等(之)疑問、禪門被答云、數代之例難被乖歟、任故殿記可有沙汰歟、大神寶爲宗宇佐事、因茲不服魚味給歟云々、隨又保元有沙汰、猶依無代々例、無御拜之由、見後經記旨、親經申也、彼時故殿

定有御〔沙汰〕歟、仍今日又無件御拜、猶思心所傾思也、於內裏親經云、院宣云、天變御祈事尤可有沙汰、猶可召付成功云々、又除目事早可有沙汰、奉行職事只可被計仰云々、

又定經云、出納久近事、依廣元訴訟、早可有被止出納之職之由、可被仰下一旨、有院宣云々、此事先日依廣元申狀、余奏聞事也、極以雖不便、近代之事、力不及次第歟、今日大神寶之日、件事奉行出納也、明日可被仰下之由下知了、

〔今日殿上使、

石清水、刑部卿宗雅朝臣、

賀茂、右少將顯家朝臣〕、

亥刻、賀茂使右少將顯家朝臣馳來云、下御社神寶先被奉二一備、今有一備、加之、辛櫃銘被書國懸、仍旁不能奉納之由、稱宜季平所申也云々、余答云、石清水、賀茂、日前國懸、各皆二備也、行幸神寶、下社二備、上一備也、若慣彼例所申歟、大神寶之時、上下各一備、是爲流例、更無異端、兼又辛櫃銘相違事、全不爲苦、賀茂與國懸、神寶色目一應無相違、早可奉納之由仰了、顯家卿歸參奉納了云々、即召奉行

出納久近職事宗隆在八條以南仍不召、即來、召問神寶違亂事、申云、

日前國懸神寶紛失之由承之、今如承者持參賀茂歟、然者賀茂神寶失了歟、馳向使々許可尋問云

〔云〕、丑刻歸來〔申〕云、日前國懸神寶相加、河內國神

寶等沙汰出付南海道使了、書札之間國懸二書て

押賀茂了云々、仍無相違云々、尤神妙々々、

廿三日、庚〔天〕晴、此日、吉田祭也、依御院經遲々、晚

頭立神馬、陪膳以政朝臣、神馬使雅樂助忠賴、行事職

事良清、社頭行事家司家實、職事爲說、女房同奉幣、陪

膳季長朝臣、幣取忠賴、先有女房奉幣之故例也、內府同立之、陪

膳以政朝臣、行事良清、兼行取幣而立、忠賴神馬使

發遣了之故也、

宗隆來申云、七道使所衆等、稱不賜國司廳宣、于

今不進發、雖受取宣命、神寶猶宿納神祇官、今

朝寶取、國司廳宣等雖下給、稱可給院廳御下文、

猶不發遣、爲之如何、余仰云、儘付寄法使可追立、

去夜不進發之條尤違例也、兼日不召給廳宣之

條、可謂懈怠、應御下文之條無先例、專不可

然事也者、又申云、諸國不進人夫、近江丹波、檢非

違使左右衛門府等、相并八十餘人、其外百餘人、宗隆

所尋集也、又驚羽、殿上人進僅九十餘枚、其不足又宗隆可尋進也、云々、仰可奏聞之由了、又每事有勤神妙之由同仰之、親經來申條々事、除目事院宣被仰可計之由、仍親經可奉行之由仰之、而情案之猶依院宣可仰之、定經爲上臈、可有其爵之故也、如此事更無定法、只隨便宜也、然而近代事、太無由之故也、仍暫不可問日次之由仰道了、承了之由有返報、實教朝臣來申明日舞人一人不足事、院宣可催定家云々、第一勤厚之者、每度謹責尤不便歟、

廿四日、辛晴、此日、賀茂臨時祭也、已刻著直衣參內、一府生未參、藏人業長行事人云、舞人陪從只今賜裝束了、自身一切不參、皆進所從云々、近代例也、尤奇恠々々、實教朝臣可告下官參內之由、又使舞人等許可遣人、每事可催具之由仰了、御浴殿未給云々、尋女房之處、釜殿爲武士被陵轢、不參入云々、無御浴者不可有御拜、如此之事藏人之官也、于今無沙汰、不能左右召藏人仰含了、雖不及執柄之沙汰、近日之事每事如此、何爲何爲、午刻向直座解脫休息、于時實教朝臣參上云々、

公卿猶未參、未刻、內府二位中將相具參入、來直座、此間人々少々參入、仍余著束帶、件兩息參御所、御總角了、欲召御裝束之間也、經家朝臣奉仕御總角、源中納言相共奉仕御裝束實教朝臣參上、余問內記召儲哉否、答云、不存宣命可奏之由云々、勿論也、仍仰可尋儲之由、小時實教持來宣命、見了返給、多御禊以後所奏也、頭中將依申不存旨、仰可用意之由之處、忽仰上卿令奏、頗早速也、未練之職事於事如此、但御禊以前奏宣命爲定例也、余著殿上、御椅子下方也此間上卿內府、召使欲給宣命、懈怠之條爲奇、仍余問之、內府云、使雖召全不參云々、然間藏人業清出來云、使凡申不可參之由云々、事不被信受、爲賜宣命有召之由、儘可仰聞之由仰之、即使參上、內府召小板敷、取出宣命、披見給之、使隆信朝臣取之退下、此間、實教朝臣告御裝束了之由、余起座參御前、即出御々拜座、出自當間給、余著御次頭中將獻御笏、入宮持參、上令取御笏、次供御贖物、陪膳實教朝臣、役先例自御座西間供之、今日自當間供之次宮主取御麻、就中門廊南妻獻之、實教朝臣取之、於四條南妻取之持參、主上乍令持實教撫之給、了返給實教、實教返給宮主、々々取之



着座、西面、次余催、使可、著座、之由、即使隆信朝臣入  
自、東中門、參上着座、西面、付魚袋、持、旁如例、次舞人三人牽御  
馬、第一少將信清、第四兵衛、佐頭兼、行事藏人榮長、入、自、西暢門、引立、幣案四、四次、而北上、  
御楔、此同主上攝、形、容如常、訖宮主退出、次牽、出御馬、如本引、次、出暢外、  
撤御贖物、次使起、座就、案下、跪指、旁、依、不、指、得、中、也、  
取、御幣而立、取、北案中幣、南案北端等、次主上御拜、頓向、乾給、兩段再拜、如、恒、雖、可、向、正、  
北給、御幣當御、後、仍向、乾給也、次使置、幣、拔、旁退下、次實教朝臣持、參  
御笏宮蓋、給、御笏、退下、次主上入御、余、雲、御、簾、余同參、御  
所、仰、頭中將、撤、御拜座庭中案等、令、敷、庭座、此間  
主上改、着、麤麤御袍、給、御、禡、之時、黃、檀、庭、座、之時、背、色、定、例、也、敷、庭座、立、  
御倚子了、主上出御、今、度、出、自、西、間、着、御々倚子、自、西、方、着、  
給有、御、承足、余奉、扶持、着御了、經、御前簀子、候、鬼間妻戶  
內、次內府已下公卿入、自、中門、着、壁下座、頭中將告、出御之由、  
前後座共自、後着也、次實教朝臣參、進年中行事障子  
下、余目、實教、降、自、中門、廊南妻、經、後座後末并前  
座、輕、庭、座、前、也、出、西暢門、召、之歸入、經、庭座後、出、中門、  
了、次使已下舞人陪從等、參、着庭中座、人、長、着、陪、從、座、末、前、方、座、東、面、  
次一獻內藏頭經家朝臣、所、雜、色、取、瓶、于、陪從座五位藏人定  
任、子、瓶、使座上無、所、仍更仰、掃部寮、敷、小疊一枚、  
自、中門、之後勤、一獻、也、次二獻內大臣、一獻、勸、盃、之、人、出、中門、之間、揖、起、

座、經座之間、出中門、指筭取盃、僮具瓶于取、并陪從座勸盃人等、過使座上後方、揖着座上、又揖與陪從勸盃、同時入酒勸之、如常、傾取盃之後、取筭又揖、乍居右、齊起、座後揖、經座上自垣下座之後、着座、四面、齊在後、瓶子取陪從定家、陪從座勸盃右少將雅行朝臣、次三獻、權大納言兼雅卿、作法同內府、但不着垣下座、不可及四五獻之故也、又着使座上之時着片寄也、是一祝也、瓶子兵部太輔能季、陪從座勸盃少將成家、次藏人立插頭花臺、并置螺盃銅盞、有二三獻之時須二獻置也、而依懈怠、余揚聲遙之、適雖持參、及三獻以後也、次置重盃圓座、舞人前二所、經舞座下、陪從座次勸盃重盃、舞人座右少將成定朝臣、左少將隆保朝臣、經舞人陪從座間也、陪從座五位藏人親經、下各勸了退歸、親經直進跪插頭花臺下、次內府揖起座右廻、進寄親經南方、跪指筭取使插頭花、左廻進使座前一插之、依不放筭、拔筭右廻、直出中門着殿上、次兼雅卿起座經座末前等進親經前、指筭取插頭花、左廻進舞人前一插之、拔筭右廻出中門了、已下作法大略同前、二位中將良經、自本著壁下座、守次第取插頭花、退下之後、基家卿進寄取之、遲參之間不着壁下座、仍良經不知基家參入之由也、舞人插花了、參入公卿十二人、三位中將家房之外、皆取之、殿上人寄陪從一插頭、懈怠殊甚殆、移刻、仍余揚音催之、于時乘燭、皆悉給了親經退

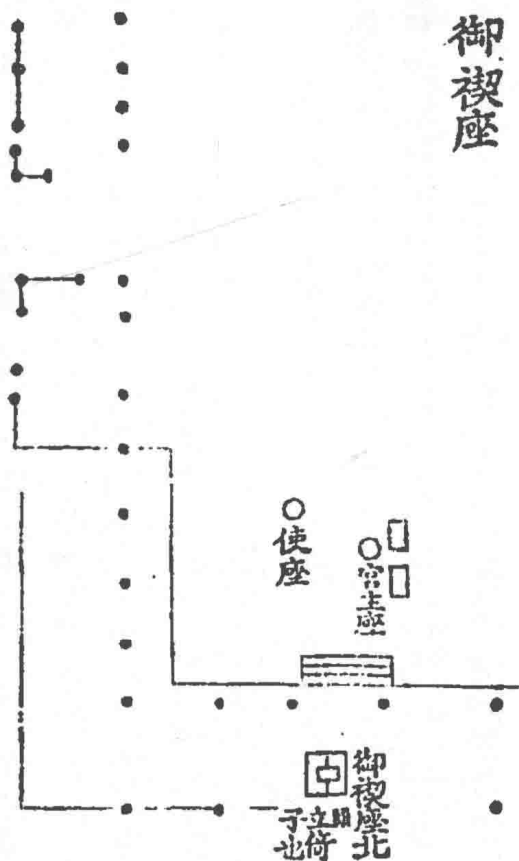


下、次途出<sub>二</sub>鬼間妻戶、經<sub>二</sub>御前簀子、渡<sub>二</sub>西一間御簾、奉<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>主上<sub>二</sub>、經<sub>二</sub>本路、歸<sub>二</sub>入鬼間方、此間、使已下退下了、使已下退下之後、可入御也、然而依<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>夜、隨<sub>二</sub>宜所、令<sub>二</sub>入御也、余仰<sub>二</sub>實教朝臣、撤<sub>二</sub>庭座、令<sub>レ</sub>敷<sub>二</sub>圓座、又令<sub>レ</sub>舉<sub>二</sub>掌燈、奉行藏人不存之間、每事如<sub>レ</sub>泥、然而適舉<sub>レ</sub>之、御座當間東西、柱北頭長押上也、以上有<sub>二</sub>打敷、又前明、余參<sub>二</sub>御所、申<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>出御哉否之由、仰云、不可<sub>二</sub>出御者、但御<sub>二</sub>座簾中<sub>二</sub>也、余即出<sub>レ</sub>、自<sub>二</sub>鬼間、經<sub>二</sub>簀子、着<sub>二</sub>御床東間簀子圓座、次以<sub>二</sub>頭中將<sub>二</sub>、候年中行事降子下、余目也、召<sub>二</sub>公卿、內大臣、花山大納言、大宮中納言、右衛門督源中納言等着座、二位中將良經、別當隆房、右宰相中將通資等、着<sub>二</sub>長橋代座、近代着<sub>二</sub>此座、爲<sub>二</sub>無<sub>二</sub>面目、爲<sub>二</sub>花族之人、多以不<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>之、(始<sub>レ</sub>之)返々奇恠、仍殊有所存、所<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>良經<sub>二</sub>也、次實教朝臣參進、余云、先殿上人可<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>壁下座、其後可<sub>レ</sub>參也者、實教退下、次殿上人着座、次余召<sub>二</sub>實教、以<sub>二</sub>咳、實教參<sub>二</sub>候年中行事障子北方、余目<sub>レ</sub>之(也)、實教渡<sub>二</sub>前庭、出<sub>二</sub>西暢門、召<sub>二</sub>使已下、今度可<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>香、而猶徒然如何々々、次使陪從等、入<sub>二</sub>暢門、進<sub>二</sub>參御殿、立<sub>二</sub>下、今度可<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>香、而猶徒然如何々々、余仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>東方<sub>二</sub>、其所、仍一哥了出<sub>二</sub>二哥之間、舞人進舞、上稿立<sub>二</sub>四二作<sub>二</sub>輪舞了、髮阿(○)兩接可<sub>レ</sub>行如恒、作<sub>二</sub>駿河舞也、祖<sub>レ</sub>肩又進舞、東西立交如<sub>レ</sub>恒了歸入、不奇大錯也、次公卿自<sub>二</sub>下臈<sub>二</sub>起

座、余自<sub>二</sub>鬼間、參<sub>二</sub>御所、即伴<sub>二</sub>兩息、向<sub>二</sub>直廬、內侍所也、解脫、內府改<sub>二</sub>着直衣、參<sub>二</sub>御所了、此間、余隨身左番長賴武與<sub>二</sub>瀧口、於<sub>二</sub>北陣方、有<sub>二</sub>關諍事云々、頭中將來、申<sub>二</sub>問大番之輩<sub>二</sub>之處、如<sub>二</sub>申狀<sub>二</sub>者隨身無<sub>二</sub>過怠、瀧口所行一々不當、然而私不能<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>刑、早可<sub>レ</sub>奏聞事由、於<sub>二</sub>隨身者早召具可<sub>レ</sub>參院、任<sub>レ</sub>法可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>罪科之由可<sub>レ</sub>奏旨仰了、丑刻使歸參了、余着<sub>二</sub>束帶伴<sub>二</sub>兩息、同束帶也、參<sub>二</sub>御所等、御寢之間無<sub>二</sub>出御、仍余着<sub>二</sub>圓座、內府良經共着<sub>二</sub>簀子座、無<sub>二</sub>人數之時、參議散三位等召<sub>二</sub>着簀子座、先例也、親宗、隆房、光雅等、着<sub>二</sub>長橋代座、次實教參進、余目<sub>レ</sub>之(也)、實教渡<sub>二</sub>前庭、出<sub>二</sub>南暢門、可<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>之、而只在<sub>二</sub>弓場殿邊、尤不可<sub>レ</sub>然、此間、殿上人着<sub>二</sub>南暢下座、西上北面、次使已下分着<sub>二</sub>東西座、使西舞分着、次陪從分<sub>二</sub>着其後座、次勸盃兩行、李經朝臣、成定朝臣等也、自<sub>二</sub>本南階前燃<sub>二</sub>庭火、主殿官人役之、次人長兼平進<sub>二</sub>立庭火南、先是若西座末也、此間使以下暫起<sub>二</sub>座、出<sub>二</sub>南暢門外了、北朔立<sub>二</sub>庭火西方、此間置<sub>二</sub>掃部寮、置<sub>二</sub>軾於庭火右、次人長進立<sub>二</sub>軾南、召<sub>二</sub>所作輩<sub>二</sub>先召<sub>二</sub>笛、立西、即陪從信方入<sub>二</sub>自<sub>二</sub>南暢門、進着<sub>二</sub>軾、指<sub>二</sub>笏拔<sub>二</sub>出笛、先音取、次吹<sub>二</sub>庭火了、人長乍<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>本所、聊步出也、仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>座之由、信方候<sub>二</sub>本方、

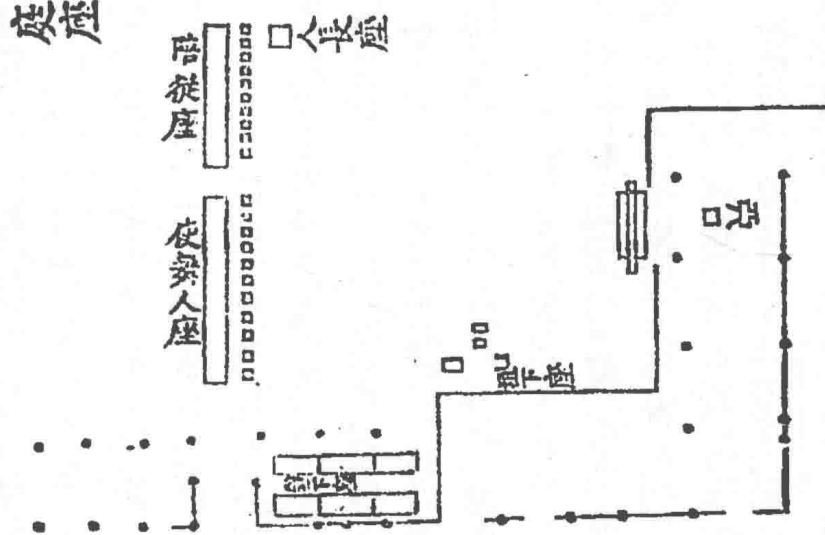
次人長又進出<sub>二</sub>軾南<sub>一</sub>、召<sub>二</sub>近久<sub>一</sub>渡<sub>二</sub>東方<sub>一</sub>、次仲俊參上奏<sub>レ</sub>之候<sub>二</sub>末方<sub>一</sub>、次和琴、本、次人長又進、次笛筆築合<sub>レ</sub>音、次式信哥、可<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>本方<sub>一</sub>而<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>末方<sub>一</sub>如何、次有賴哥<sub>二</sub>夜火<sub>一</sub>、人長隨<sub>二</sub>本末<sub>一</sub>、立<sub>二</sub>替東西<sub>一</sub>皆着了、人長又着<sub>レ</sub>座、次神宴、本信方在<sub>二</sub>西<sub>一</sub>、末近久在<sub>二</sub>東<sub>一</sub>、取橘柳韓神之間、先有<sub>二</sub>勸盃<sub>一</sub>、人長進舞了、召<sub>二</sub>公卿已下<sub>一</sub>、先通親卿、次使一舞、次行事、次陪從等也、行事已上於<sub>二</sub>舞人座末<sub>一</sub>跪、即歸<sub>レ</sub>座、通親卿不及<sub>二</sub>舞人座末<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>神內<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>形跪也、陪從等亂舞、頗不似<sub>二</sub>去年<sub>一</sub>、然而又勝<sub>二</sub>近年<sub>一</sub>人<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、次前帳、就枕也、次千歲、次早哥、次朝倉、本方有賴、末方式信、此事頗不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>止、利先參上式信、而着<sub>二</sub>末方<sub>一</sub>仍有賴着<sub>二</sub>本方<sub>一</sub>之間朝倉、依<sub>二</sub>其座方<sub>一</sub>亂<sub>二</sub>次第<sub>一</sub>也、次揚<sub>二</sub>拍子<sub>一</sub>之後、人長立

御襖座

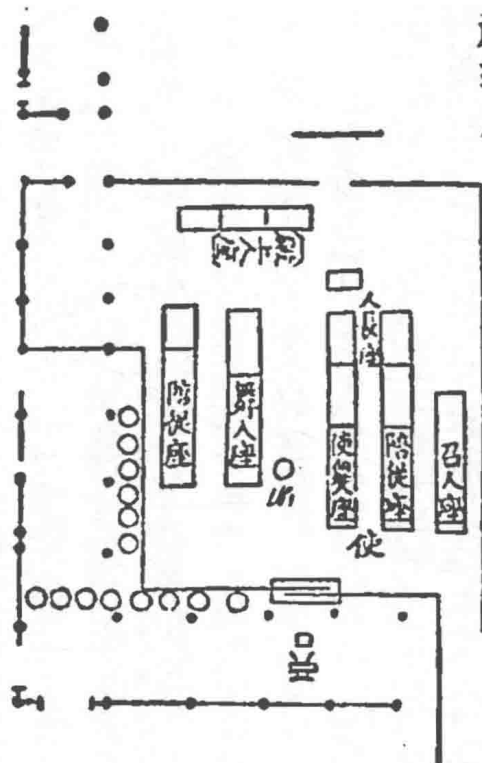


舞、即直退出了、次給<sub>レ</sub>祿、殿上四位已下取<sub>レ</sub>之、六位給<sub>二</sub>陪從祿<sub>一</sub>、此間、公卿自<sub>二</sub>下臈<sub>一</sub>起<sub>レ</sub>座、又使已下起了、余起<sub>レ</sub>座參<sub>二</sub>御所方<sub>一</sub>、即住<sub>二</sub>休所<sub>一</sub>、改着直衣退出、于<sub>二</sub>時寅刻天未<sub>一</sub>曙、今日納言依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>人數<sub>一</sub>、二位中將召<sub>二</sub>着納言座<sub>一</sub>、親宗已下在<sub>二</sub>長橋座<sub>一</sub>、

庭座



神樂座



廿五日、壬〔天〕晴、〔法印彼〕來、入夜頭中將實教朝臣來云、去夜瀧口關證事、相具御隨身賴武、參院奏聞子細了、仰云、如聞食者、殊驚思食、尤可被誠沙汰事也、罪科輕重只可有計御沙汰者、實教〔定俊〕覆奏云、至于此事者、敢被待上仰候歟、被計仰下尤宜候歟者、猶仰云、只非被仰事、如此申つれハ、何にも有御沙汰、全不可及是非事也、只可申其旨云々、余仰云、瀧口所行罪科不輕、然而任恩意非可計申、只可在御定、但左右不事切之條、頗不便事也、瀧口之中尋張本、可被除目奏歟、

四百五十八

是内々示所存也、奏聞之後可被下知、又隨身於院無御沙汰返給了、其實雖科依不可默止、可加勘責也、於瀧口等事者、前々狼藉、此次能々可被加炳誠也、禁中濫吹只在此事、殊可有禁遏也者、此日、源中納言入道來、余謁之、良久談雜事、入夜退歸了、

〔亥刻或人來、天下安全之謀、粗以仰聞了、〕

廿六日、癸雨降、早旦定長來、依相招也、除目意見之間事、條々奏聞了、此次定長云、東北院領野勢庄、勸學院領伊勢石内庄等下文、先日奏聞了、各任被仰下無左右成進、尤神妙、但家輔事申旨可然、須返給下文〔也〕、然而如此令進之上返給、又還無本意歟、仍給了於彼、不當者殊被加勘責了云々、野勢庄事可修造本寺之由、殊可被仰合云々、又定長云、中納言事、先日令申御之趣、具以奏聞了、仰云、實可然事也、凡爲厄年之間、如此事、殊不可知食之由所思食也云々、大略無分明之仰云々、午刻、實教朝臣來云、張本之輩、各不指申、爲之如何云々、〔余云、〕下臈事行信廣殊張本也、一勞三勞又現奇恠云々、仍信廣可被除目奏、一勞三勞上臈事行等





說「以之爲善、次着御々直衣、重邊蘇芳掛三領、青單漫打御衣、其上

如尋常欲令着御指貫、余申云、非別御定二者、

不着指貫給、君臣着袴之禮、未聞着指貫之例、

仍撤去之、即着御々直衣、是又自本引出御ハコ

ヘ、專不可然、仍可入ハコヘ之由、教訓女房、此

事等專非腰結之所知、然而着御之間事、示合下官、

可沙汰之由有仰旨、豫定長所示也、仍有此和說

等也、元女房一人奉仕、依無便宜、余召加今一人

也、皆着御丁、如本南面御座、即余出自初妻戶、

歸到公卿座、招定長示御指貫撤却之間事、此間女

房動簾、定長參入歸、告有御贈物之由於二位中

將、々々々即參進余出入之妻戶下、而更參進南面

簾下、後語云、女房仰可參南面之由云々、此事不可然、自余退出之妻戶、可被指出也、每事不有沙汰限、實不領也、於簾下一指、笏取贈物、是也、歸來於透渡殿

東間、授余共殿上人〔右少將〕伊輔朝臣、伊輔取之出

自中門廊妻戶、賜前駟云々、即余中將受取贈物之同、居本公卿座也、

出中門廊妻戶退出、不見此後事、可供御前物

云々、陪膳實宗卿可勤仕之由、昨日定長所語也、

〔然而不見其儀、追可尋記之〕

今日贈物之儀太懈怠、余欲退出之間、女房可持來

也、而良久經程之條、專不可然々々々、又待贈物

非可祇候、仍御裝束著御了、所退下也、理須奉

結御袴腰了、即可退下、然而着御々裝束之間

事、女房太未練、仍爲教訓暫祇候、其間何不賜贈

物哉、凡今日儀一々不甘心、着袴之人已若宮也、陪

膳又公卿也、而出几帳惟、女房祇候、太無謂、公卿

爲陪膳、主人頗成人之時、女房傳供未聞其例、理又

不可然歟、依爲女院御沙汰、出几帳歟、愚案猶

不可然、御沙汰雖女院之寂、其人已若宮也、其所

裝束猶可付男方歟、又御前物打敷高坏云々、其

禮縱雖略、其〔儀〕何卑哉、先例御臺六本也、未聞

此例、又無公卿之儀、并御遊等之條如何、攝政已奉

結御腰、何無公卿盃酌之儀哉、每事首尾相違、此

間儀、偏右大臣議定云々、自本如此〔之〕事、深不存

知之人也、可謂不足言歟而已、

廿八日、丑天晴、入夜向九條堂、自今日所始行

儀法也、故女院御料也、內府二位中將乘余車後、前駟兩三

人、殿上人宗雅一人、女房等各召人車、侍男共在

車後、又季經朝臣已下、生君達大夫兩三人許、乘

車在共、即始儀法、自今日至晦日可經廻

也、

廿九日、寅〔天〕晴、懺法三時如例、常祇候男共結番令、勤〔花宮役〕也、〔定經〕來申、條々事、雅親來申、御堂御八講之間事、親經來申、新制之間事、別當隆房卿申、群盜之間事、余無假隙、不謁之、逢親經可被示聞之由示之、大外記賴業來申、叙位勘文之間事、又頭辯兼忠來、余示云、至子宇佐使參着之日、禁中事也、定被存歟、於攝錄者、非神事、皆從佛事、然而可忌重服之人之由、見故殿御記、其旨可被存者、兼忠云、禁中神事所存也、殿中事同可存此旨者、〔即退出云々〕

此日、山禪師受戒登壇也、今晚、法印相具登山、執蓋役人、藏人五位家職等、余催送之、事了入夜下京云々、後聞受戒之間無違亂、衆徒感禪師云々、悅思不少、此日候八條院小童來、

卅日、丁〔天〕晴、朝雨、○南接二時行了、申刻歸冷泉、伴兩息女、昨日余女房留堂、結願以後可歸來也、大將女房、以密儀、同歸來、如一日昨日、親經參會、依昨日仰也、昨日隆房卿所示付之條々令申、每事要須尤神妙、又新制之間事議定、此日、法成寺御八講初日也、行事家司左少辨親雅、職

事國行〔等〕也、秉燭著束帶、不具、伴兩息、各別、法成寺、先是雅長卿參候、余經門內屏、當時無實、其南、入廻廊戶、當時無實、仍其跡引、昇自南面階、先着饗座、內府已下不入廻廊戶、自西方同昇階着座、豫居饗、次召行事親雅〔卿〕、問事具否、申云、僧少參入、但講師覺辨末參云々、重仰可遣人之由、又此座依傳蓋無便宜、內府參候、不可有盃酌之由、仰也、即余已下相引着佛前座、余着長者座如例、先是僧等在座、公卿着座之後各起座了、爲引列也、余重召親雅、白座前參進也、問講師參否、申已參之由、即衆僧自北方引列參上、昇自正面東階着座、經發于南行、入自、次講師着禮盤、次惣禮、三度、南問着座也、次登高座、次唄、次散花、當發于左右、次勸請說法如恒、但勸請以前說經、其後、次論義二帖、問者、僧部、今日參上、勸請、次第頗違亂歟、次打磬、次咒願、辨、三禮着禮盤、次所司進就行香机下、次余已下進就行香机下、內府密々云、不隔人之時、先々相憚歟、去年依此儀不令立給〔如何〕、余不覺悟〔歟〕、更起經簀子、入休息所了、忘却之條不可說也、內府已下公卿四人殿上人八人立行香、次第如常了、各復座〔之後〕

余歸着座、次召親雅、仰夕座可始之由、僧等不起座、仍仰可有列之由、僧起座即歸著、今度不降庭、只自後月方歸也、次講讀師着禮盤、禮佛之後、今度無禮盤也、登高座、次第法用如朝座、次論義、問者貞覺律師、二帖如常、了打磬、衆僧退下、余已下退出歸宅、今日參入公卿、

余、內大臣、二位中將、藤宰相雅長、三位中將家房、行香不足、參入殿上人、

季經朝臣、顯家朝臣、宗雅朝臣、親雅、

親雅依神今食奉行、自明日可爲神事、仍催家實之處、稱觸穢不參、仍仰親經、公卿其人頗無便宜、仍至于來四日、可相轉神事之由仰之、而親經申云、分配神事、入月爲齋、而相轉頗有恐歎如何、所申可然、仍親經可奉行御八講事之由、所申請也、

今日僧參十八口、甚爲少、其由仰泰覺了、

# 十二月小

一日、辰、天晴、此日、法成寺南京堅義也、乘燭之後着衣冠、毛車、前、同衣冠、參御堂、初後、毛車、之外

無事、直着佛前座、召奉行家司親經、藏人右少辨雖職、事、先例不仰也、右少辨親雅神問事具否、申具了之由、仰可始之由、次梯鐘、次衆僧起座、自後戶方更着座、無起列、初後之外如略儀也、朝夕兩座其儀如常、夕座訖、講師退下之後、預等出來、撤散花行香机等、立黑漆机一脚於佛前、此、是南北、次探題山階寺權別當法印覺憲、仕丁、中綱、從僧、前近前如、自北方庭參進、昇正面東階、入自同間、北行、直着第一之座西邊、持短冊之者、在其前、次問者五人、一問則長、着第四座、北面上、次注記與福寺隆曉着第五座西頭、其前立切燈臺、舉燭、次堅者、東大寺、入自東庇南面戶、豫開件戶也、堅者參入、自庇北進就案東頭、三度禮佛之後、乍立取短冊、次第能見定之後讀、之、預法師持、脂燭、訖着、南高座、不請益探題、次表白歟、之、立案北頭、慥不聞、此間預法師取短冊、先覽探題、隨命分賜問者了、次一問與福寺圓長已講出兩條疑問、神土一竿、安養界、報佛之土歟、凡夫具出之土也、問者俱出之土歟、又因明一年等也、堅者答之、非報佛之土也、問者引音難之、三、其後探題仰注記、令讀、舉之、次探題又取帖難之、二、此間、問答甚有興、五重了判得略、ハ得、次第二問論義、余此間依所勞更發退出、須在休所、堅義訖退出也、然而依所



勞直退出也、此後至五問、各二帖疑之也、定及曉天、歟、今日親經、申字佐宮臨時造宮事、先日被仰造大宮司公通許之請文、帥卿同申之、大略可造進云々、但不日之功難叶云々、仰云、依今年々限、造宮之山積之年、猶可有臨時之遷宮哉否、被問諸道、於今者隨彼左右、可有成敗、且又先日賴朝卿有申旨、公通可有即仍子細被仰遣彼卿許了、隨件返事可有是非事也、但以公通請文、早可奏此子細者、定經申日前國懸社訴、申栗栖庄下司濫行事、件庄有大臣知行也、爲同注召件下同、數月不被召進、社司在京殊訴申也、指期日可被召之、過件期日者、直可被處罪科之由、可被仰下歟、早可奏此旨者、此外各申條々事、不能具錄、

二日、己天晴、此日、法成寺御八講五卷日也、申刻先參院、東帶、毛車、依召參御前、數刻預勅語、又奏聞巨細、咫尺龍顏、天氣殊快然、退下之後、以定長朝臣奏條々事、一々勅報分明、爲悅不少、召親經、參、仰、新制之間事等、七、即親經先參法成寺了、依奉行也、余題祇候重承勅定等、亥刻直參御堂、於車中、徹、先着南庇座、豫居、初後五、內府中將等、

自冷泉亭相伴同以着座、先是藤中納言定能參候、余參上之間、依內府在座、無勸盃、余召奉行家司親經一問、事具否、申具了之由、即余已下着堂中座、相次別當隆房卿着座、殿上人着座末、次衆僧起座、更自後戶方參上着座、法用論義如常、次召親經、仰夕座可始之由、即僧侶起座、自庭引列參上着座、初日朝座結願、夕座并五、散花行道之後、散花師立禮盤前出讚、即出自正面問、經簀子南行、余起座從僧後、余出自座、上問也、自余公卿各降立座後簀子、任次第二廂行也、先散花師衆僧、次新持等衛府三人、次余已下公卿、次殿上人、去年依宇治左府記、衆僧前令列新持等、後日見故殿御記、衆僧在先例、今日從此殿、余於南庇中戶取袈裟、宮內卿季經朝、內府於同戶下又取袈裟、四位家司以政、朝臣傳授之、他公卿等於同戶下取之、諸大夫等傳授之二位中、以南北第一間西庇東簀子等爲路、三匝了復座、次自座下、次各不傳授人取余已下公卿袈裟、經座前一置佛前、殿上人已下自置之、各行香机、東頭也、次法用論義如例、事訖余已下退出、三日、庚天晴、此日、天台暨義日也、余依勞事不參、內府二位大納言等參入、大納言申刻許被來、余謂之、秉燭被參御堂了、其後內府參上事始云々、兩



人共豎義一間之間退出云々、內府衣冠宅車、此日以定

經、申、除目任人事於院、歸來仰、條々事等、

四日、幸天晴、此日、京官除目一夜儀也、執筆參議左大

辨親宗卿清書、上卿中納言定能、參議雅長卿、奉行職事藏人右衛門權佐

定經、頭中將不執文書、頭辨重長依神令食、早旦着直衣、

參內、及、午刻、定經參內、遲參不可說也、余於直

廡見、除目申文、開白之時、於里亭見申文、其例已多、攝政之

其儀如例、大束不、加、禮紙也、給申三通也、今日

無家司覽申文之儀、是不必爲、每度事之故也、今

日定經之外、他職事一切不參、尤奇怪不可思議事也、

申文內覽之後、於公卿休所撰申文、殿上家司右中

辨基親朝臣加候其座、次余退出、申刻權右中辨定長

朝臣爲院御使來、以宸筆被注下任人、雜任等

余注一紙付同朝臣、依先日仰也、此間定經撰申文了、

持來目錄、余見了返給、即定長定經相具參院了、乘

燭之後着束帶、入車、相、伴內府參法成寺、雅長光

雅等卿豫參候、降立南庭、余過前之間兩人居地、

余參、先着南庇座、居、召奉行家司親經問事具

否、申了之由、即余着佛前座、內府已下同之、次

上着座、法用論義了、召親經仰夕座可始之由、次

槌鐘、次衆僧起座、自北庭引列參上、昇自正面

階、經簀子南行、次第着座、次講讀師着禮盤、衆僧

相共惣禮三度、次各登高座、次唄、次散花、堂童子四

次預法師分經、爲揚題名也、今日依本願御遠忌、奉

也、次表白、說經、勸請、論義、次第皆存例、次咒願三

禮進就禮盤、次御寺所司進就行香机下、次余已下

經座前列、居其南、仍立、內府不立行香、與余不隔人之故也、

分輪了、經同机東北行、列北第三間南柱下、南上東面、

火地取相從、次自同庇南行、次第行香、咒願三禮立禮

進立母屋柱頭、余已下經机與禮盤之間也、經、僧座與公卿座之間、南行、

自南第一間降簀子更北行、如初列居机下、返

置輪了、次第復座、策雅已下經簀子、次內府復座、次例

時、此間衆雅卿退出、次引布施、四位家司已下諸講師布施、行香

以前於北座賜了、被物一重、布退出、皆悉賜布

施了、衆僧退下、次余進佛奉禮之後、是非作法、依有

退出、於車中、相、伴內府參內、先是定經歸參、余即

向直廡謁定經、返給雜任注文、此定可行云々、

又有被仰事等、余歸入書折紙了、此間內府赴陣

間、中同一丈二尺也、仍立小柱、四面懸簾、北東垂之、副  
爲二間、加之者四間也、但西妻戶閉之、西第一間迫西、  
立四尺屏風、西面卷之、余座後也、西第一間迫西、  
去妻戶三、敷厚圓座一枚、爲余座、其前與東方置一硯、其  
尺許也、北置一硯、盛一盞、中文、其  
官宮、當余座、去三四尺許、敷菅圓座一枚、爲三執  
筆座、第二間北頭敷高麗坐一枚、爲大臣座、無對  
頗絕、席二行對座敷、同疊四枚、二枚也、座下舉燭、  
布打敷、去東屏風五許尺、爲大臣座東頭立一切燈臺、  
如例、  
舉燭、依所狹、撤座上燈也、東、北、小渡殿三ヶ間、  
不懸簾、高麗端坐四枚、紫端坐二枚、西上對座敷之、  
爲公卿休所、上下舉燭、有打敷、元直廣南殿乾座也、而件屋  
宜、仍今度修造之時、賜別指圖、殊加修補、又立副藏人所屋、占此  
所爲宿願也、此屋、高倉院御時、爲入道關白之休座、事始頗思之  
上、地實之、後傾危殊甚、不能容身、仍去、次余更着三束帶、  
年不用之、今已加修造所、移住也、出客亭、經西妻戶、入、自、着厚圓座、東、次召三定經、仰、  
召仰事、暫而歸來、以同人召諸卿、此方人、即定經  
向陣召之、次內大臣已下出左衛門陣、經西洞院押  
小路等、入、自、南面北門、直着座、先不着休所、  
與、已下相分着座、執筆者、端座、次辨官置宮文、  
親朝臣、左少辨親筆、右少辨親經、  
件親經着無文之裝束云々、各入、自、第一間、置之、次  
余間、左大辨在座哉否於內府、正笏目、親宗、々々微  
唯楫經、廣底、入、自、西第二間、着圓座、跪、西面、

楫正、笏候、余目之、親宗小揖、是唯、  
置、笏、  
左側座、移、第  
二宮文書於次宮、留、置、正權關官帳二卷、  
移、入、他、文、書、等、  
後、披、見、關、官、  
帳、留、置、之、定、例、也、而、今、夜、親、宗、未、移、入、他、文、之、前、  
先、披、見、兩、卷、移、文、書、之、後、又、見、之、頗、似、無、所、據、  
以、左、手、  
取、一、宮、以、右、手、引、下、硯、宮、以、一、宮、置、其、跡、又  
見、關、官、帳、押、宮、插、笏、取、關、官、宮、  
正、權、二、卷、子、宮、  
左、右、  
大、指、一、手、抑、文、下、持、之、  
膝、行、置、宮、於、板、敷、引、廻、指、寄、余  
未、見、作、法、也、頗、以、見、苦、歟、  
前、余、置、笏、引、寄、宮、親、宗、小、退、拔、笏、候、  
大、略、圓、座、  
余、兩  
卷、共、見、之、  
先、見、正、宮、以、大、卷、知、之、  
返、入、宮、小、押、出、之、  
取、笏、親、宗、指、笏、進、寄、引、廻、宮、持、之、退、復、座、置  
宮、拔、笏、與、硯、宮、如、本、引、替、引、直、次、々、宮、取、笏  
候、余、目、之、親、宗、小、揖、置、笏、取、出、大、間、置、硯、上、  
座、右、與、撤、禮、紙、入、硯、宮、移、置、大、間、  
其、最、僅、一、尺、許、也、凡、  
座、方、也、  
傳、不、口、傳、實、以、見、苦、如、之、經、程、者、也、又、座、邊、東、西、要、頗、斜、  
傳、之、者、例、也、而、南、北、妻、座、前、移、置、之、仍、硯、上、無、所、如、何、  
取、笏  
候、余、目、之、即、摺、墨、染、筆、  
取、三、省、奏、移、置、關、官  
宮、  
但、儘、不、  
免、也、  
先、取、式、部、省、卷、讀、申、  
式、部、官、サ、ト、讀、之、又、珍、事、也、  
任、之、讀、大、間、懸、勾、於、勞、張、入、第三、宮、如、例、次  
任、民、部、省、史、生、了、取、笏、申、院、宮、御、申、文、可、取、遣、之  
由、余、目、之、次、親、宗、召、基、親、兩、三、聲、雖、召、之、無、音、  
仍、召、男、共、藏、人、參、入、仰、親、雅、可、召、之、由、  
先、問、辨、官、見  
親、不、候、之、由、其、時、可、召、他、辨、也、而、不、同、  
基、親、之、在、無、直、召、他、辨、似、無、用、心、如、何、  
次、左、少、辨、親、雅、參、上、

候長押下、親宗仰<sub>二</sub>院宮御申文事、次任<sub>二</sub>兵部史生<sub>一</sub>了、此間余撰<sub>レ</sub>出可<sub>二</sub>袖書<sub>一</sub>之申文等、賜<sub>レ</sub>之、親宗押<sub>レ</sub>宮欲<sub>二</sub>參進<sub>一</sub>是例也、然而余存<sub>二</sub>略儀<sub>一</sub>、直押<sub>二</sub>遣之<sub>一</sub>、仍親宗及而取<sub>レ</sub>之、并<sub>二</sub>置硯宮右<sub>一</sub>、此事未知、此作法也、此間、親雅持<sub>二</sub>參院宮御申文<sub>一</sub>、親宗申<sub>二</sub>公卿給等<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>座下方<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>院宮御文<sub>一</sub>、橫置<sub>二</sub>座前<sub>一</sub>、押<sub>レ</sub>宮<sub>二</sub>依<sub>二</sub>所執<sub>二</sub>第三宮欲<sub>一</sub>落<sub>二</sub>廣座<sub>一</sub>、余指示云、以<sub>二</sub>仍有<sub>二</sub>便立<sub>一</sub>有<sub>二</sub>通路<sub>一</sub>、第二宮、四方へ押上天、以<sub>二</sub>殘<sub>二</sub>二宮<sub>一</sub>押南、頗有<sub>二</sub>悅氣<sub>一</sub>歟、挿<sub>レ</sub>笏取<sub>二</sub>御申文<sub>一</sub>、進寄、余取<sub>二</sub>申文<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>但<sub>一</sub>、置<sub>レ</sub>前、候、親宗復座、且書<sub>二</sub>袖書<sub>一</sub>、其間作法、又以奇惟希有也、皆解<sub>二</sub>短冊<sub>一</sub>、並<sub>二</sub>置硯上<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>曾有<sub>二</sub>事歟<sub>一</sub>、余見<sub>二</sub>院宮御申文<sub>一</sub>、其儀先取<sub>二</sub>一通<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>爪披<sub>レ</sub>封、入<sub>二</sub>硯宮蓋<sub>一</sub>、引<sub>二</sub>禮紙<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>座前頗奧方<sub>一</sub>、硯宮下披<sub>二</sub>見申文<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>引<sub>二</sub>蓋紙<sub>一</sub>、卷<sub>レ</sub>之置<sub>二</sub>硯南頭<sub>一</sub>、與<sub>二</sub>未<sub>レ</sub>見申文<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>濕、次又如此皆悉置<sub>レ</sub>了、立<sub>二</sub>次第<sub>一</sub>非<sub>二</sub>並<sub>一</sub>、合<sub>二</sub>也<sub>一</sub>、是<sub>二</sub>も<sub>二</sub>置硯<sub>一</sub>也、卷<sub>レ</sub>之、一々卷<sub>二</sub>加他禮紙等<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>其上天一卷<sub>一</sub>に卷重て、入<sub>二</sub>闕官宮<sub>一</sub>了、披<sub>二</sub>申文一通<sub>一</sub>、卷<sub>二</sub>籠他申文<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>座前<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>引<sub>二</sub>親宗更押<sub>一</sub>、宮參進、取<sub>二</sub>申文<sub>一</sub>、復<sub>レ</sub>座、置<sub>二</sub>座前<sub>一</sub>、袖書了召<sub>二</sub>親雅<sub>一</sub>、又以無<sub>レ</sub>音、仍召<sub>二</sub>藏人<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>辯官候否<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>親經候之由<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>召之由<sub>一</sub>、次親經參進執筆、給<sub>レ</sub>文仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>勘申<sub>一</sub>之由、親經取<sub>レ</sub>文退下、次任<sub>二</sub>院宮當年給<sub>一</sub>、此間余給<sub>二</sub>任人注文<sub>一</sub>、密々皆遣也、親宗及而取<sub>レ</sub>之、披<sub>二</sub>置申文傍<sub>一</sub>、一々任<sub>レ</sub>之、次擇<sub>二</sub>出可<sub>レ</sub>任之申文等<sub>一</sub>、又給<sub>レ</sub>之、

親宗取<sub>レ</sub>之、次第分<sub>二</sub>置之<sub>一</sub>、成文及<sub>二</sub>三通<sub>一</sub>之時、取<sub>二</sub>申文裏紙<sub>一</sub>、成<sub>二</sub>紙捻<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>第三宮<sub>一</sub>、是又未曾有例也、除目之習、雖<sub>二</sub>異說多<sub>一</sub>、至于成文置<sub>二</sub>闕官宮<sub>一</sub>之條は、大臣大辨一同之作法也、加<sub>レ</sub>之今夜件第三宮、依<sub>二</sub>所狹<sub>一</sub>、指出西方<sub>一</sub>、置<sub>レ</sub>之、仍自<sub>二</sub>第一宮上<sub>一</sub>、及而置<sub>レ</sub>之、旁無<sub>二</sub>便宜<sub>一</sub>者也、小時持<sub>二</sub>參下勘文等<sub>一</sub>、取<sub>レ</sub>之次第任<sub>レ</sub>之、不任申文等入<sub>二</sub>第三宮<sub>一</sub>、難任等大略任了之後、取<sub>二</sub>文章生略名<sub>一</sub>任<sub>レ</sub>之、是又太懈怠也、任<sub>二</sub>院宮<sub>一</sub>之後、寂前任<sub>二</sub>課試文章生<sub>一</sub>者故實也、不<sub>レ</sub>傳<sub>二</sub>口傳<sub>一</sub>之人、萬事如此歟、任<sub>二</sub>民部丞<sub>一</sub>之時、召<sub>二</sub>轉任勘文<sub>一</sub>、親經、五位以上公卿等官皆任了、今夜任人多無<sub>二</sub>申文<sub>一</sub>、仍召<sub>二</sub>奉行職事<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>書進申文等、有<sub>二</sub>舉<sub>二</sub>三分<sub>一</sub>之諸司奏等、近代雖<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>流例<sub>一</sub>、猶不<sub>二</sub>甘心<sub>一</sub>、仍問<sub>二</sub>外記<sub>一</sub>之處、二寮之外猶不當之由申<sub>レ</sub>之、仍有<sub>二</sub>敕許<sub>一</sub>之輩、召<sub>二</sub>名簿<sub>一</sub>書<sub>二</sub>申文<sub>一</sub>、注<sub>二</sub>臨時內給之尻付<sub>一</sub>也、皆具了卷<sub>二</sub>大間<sub>一</sub>、先入<sub>二</sub>日<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>硯上<sub>一</sub>、次取<sub>レ</sub>笏候<sub>二</sub>氣色<sub>一</sub>、余仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>叙位<sub>一</sub>之由、召<sub>二</sub>定經<sub>一</sub>、召<sub>二</sub>續紙<sub>一</sub>、書<sub>二</sub>叙位<sub>一</sub>、位被<sub>二</sub>書<sub>一</sub>叙人<sub>一</sub>例也、而位下<sub>二</sub>古米未<sub>レ</sub>見<sub>一</sub>此例<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>奇<sub>一</sub>、次取<sub>二</sub>成文<sub>一</sub>、封<sub>レ</sub>之、其儀又希異殊勝也、乍<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>本束<sub>一</sub>、更自<sub>二</sub>懷中<sub>一</sub>取<sub>レ</sub>出紙捻<sub>一</sub>、別始<sub>レ</sub>束、自<sub>二</sub>本束之中<sub>一</sub>、兩三通、若<sub>二</sub>八四五通許<sub>一</sub>、次第拔<sub>二</sub>取之<sub>一</sub>、指<sub>二</sub>入今紙捻<sub>一</sub>、皆悉指<sub>二</sub>加之<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>硯



方<sub>下</sub>封<sub>之</sub>引<sub>墨</sub>如<sub>常</sub>、次置<sub>替</sub>宮、加<sub>入</sub>大間成文叙位  
成殘等、押<sub>宮</sub>、挿<sub>笏</sub>進寄押<sub>寄</sub>宮、余引<sub>寄</sub>宮、親宗復  
座、不<sub>引</sub>直宮、欲<sub>退</sub>下、余指示、仍引<sub>直</sub>宮、退下、  
余見<sub>大間</sub><sub>形</sub>叙位等、取<sub>成</sub>殘申文、加<sub>置</sub>大束、取<sub>笏</sub>  
目<sub>清書</sub>上卿定能卿經<sub>廣</sub>底、來<sub>余</sub>座南端、余押<sub>遣</sub>  
大間宮、定能挿<sub>笏</sub>中、取<sub>宮</sub>、退下於休所、披<sub>大間</sub>、  
次余歸入、中間有<sub>顯</sub>官舉、人々退出之間、所<sub>殘</sub>候、不  
幾、內大臣、藤中納言、源中納言、新相公許也、傳<sub>內</sub>  
府<sub>下</sub>申文、<sub>見<sub>之</sub>歟</sub>、撰上了、<sub>除<sub>目</sub>之例<sub>也</sub></sub>、內府持來、取<sub>之</sub>  
加<sub>大束</sub>了、今夜被<sub>加</sub>任外記一人、自<sub>今</sub>以後、  
以<sub>外</sub>記六人可<sub>爲</sub>員數<sub>之</sub>由、仰<sub>清書</sub>上卿以<sub>定</sub>  
經<sub>仰</sub>之也、又仰<sub>檢</sub>非違使并五位藏人等、<sub>左衛門權</sub>  
任<sub>三省</sub>史生<sub>之間</sub>、置<sub>火</sub>櫃衝重等、依<sub>內</sub>府在<sub>座</sub>、  
無<sub>勸</sub>益、<sub>余陪膳殿上家司基親朝臣、內</sub>  
府陪膳四位家司以政朝臣、  
今日參入公卿、

內大臣、花山院大納言、大宮中納言、  
右衛門督、藤中納言、清書、源中納言、  
藤相公、清書、左大辯、執筆、

天曙之後儀訖、余着<sub>小膳</sub>、翌日辰刻退出、內府早出、  
明日爲<sub>向</sub>九條<sub>一</sub>也、

五日、<sub>中<sub>壬</sub></sub>天晴、此日、九條懺法結願、并故女院御忌日  
也、女房日來在<sub>九</sub>條堂、內府相<sub>具</sub>女房、今朝所<sub>向</sub>  
也、余依<sub>神</sub>事不<sub>參</sub>向<sub>也</sub>、召<sub>定</sub>經<sub>仰</sub>下名日可<sub>問</sub>  
之由、未刻、外記持<sub>來</sub>大間、<sub>不<sub>如</sub>成文取<sub>了</sub>云々</sub>、入<sub>夜</sub>  
持<sub>來</sub>成文、召<sub>定</sub>經<sub>仰</sub>下名日次可<sub>問</sub>之由、申云、明  
日以後至<sub>八</sub>日皆吉也云々、明日可<sub>宜</sub>之由仰<sub>之</sub>、九  
條懺法了、女房大將歸來、

六日、<sub>西<sub>癸</sub></sub>天晴、以<sub>定</sub>經<sub>申</sub>下名任人事於院、歸來  
云、大略聞食了、雜任可<sub>計</sub>申<sub>云々</sub>、又下名來八日可<sub>宜</sub>  
者、<sub>依<sub>今日</sub>上卿</sub>明日可<sub>入</sub>給熊野精進屋、仍可<sub>物</sub>  
忌<sub>也</sub>、此日、院御佛名也、內府參入、深更歸來云、右大  
臣已下公卿濟々、人々參入之後、經<sub>二</sub>時許<sub>一</sub>被<sub>始</sub>  
行、是於<sub>御</sub>所壺、召<sub>巫</sub>女等、有<sub>里</sub>神樂事、又有<sub>陽</sub>劍  
之遊云々、此事知<sub>物</sub>情<sub>之人</sub>、曾不<sub>聞</sub>名字<sub>事</sub>也、  
今日始聞<sub>此事</sub>、而於<sub>法</sub>皇之宮<sub>有</sub>此事、可<sub>謂</sub>物  
恠<sub>歟</sub>、可<sub>悲</sub>々々、今日欲<sub>被</sub>行<sub>弓</sub>場始、而依<sub>院</sub>御  
佛名<sub>指</sub>合延引、明後日可<sub>被</sub>行云々、仍<sub>射</sub>手等不  
足、猶定難<sub>叶</sub>歟、

七日、<sub>戌<sub>甲</sub></sub>天晴、此日、法皇令<sub>入</sub>熊野御精進屋<sub>給</sub>、  
夜幸<sub>烏</sub>羽御精進屋<sub>給</sub>、此日棟範申<sub>吉</sub>書、余於<sub>客</sub>



亭見之、作法如常、弓場始可奉行之由仰之、親經奉行事等、皆悉可受取之由仰之、昨日定經所申也、

八日、乙〔天〕晴、此日、下名也、以定經一條々奏院、可任之者注折紙、加封進上之、又昨日所被仰合之衛府督之間事、查副總札付定經、依秘事也、乘燭歸來、任御定、更注折紙下給定經、於前、即定經參陣了、除目內覽可免之由仰之、上卿源中納言云、故基輔息少男、行申任兵衛佐了、過分之朝恩也、但此事不可爲非據之由存之由、生年十四歲頗雖早速、重家任武衛、經家十二歲任金吾、云職云年、其例不外求、祖父賴輔入道無三品之運、早以遁世、親父基輔、不任諸衛佐、空以歸泉、彼兩人於家率公超等倫、當此時舉任少男、施父祖之面目、勵傍輩之忠節者也、抑宗國任少將、即申任其闕之條、頗憚人口、仍明春可被任武衛之由申法皇、勅報之趣、本懷已足、今度拜任不可有其難、置闕相待明春者、自障難出來歟云々、仍今夜任了、今日欲被行弓場始、而依射手闕如、又延引、來十三日可被行、但荷前定日也、仍問例之處、荷前定日被

行他事例太多、弓場始之條、重可問之、

九日、丙〔天〕晴、此日、內侍所御神樂也、內府二位中將等、爲聽聞參入、下官依風病不參、先頭中將實教來云、今夜可仰師歌歟、公國朝臣雖爲末拍子已重代也、仍欲仰末歌如何者、余云、庭火師哥者、希代之勝事也、非每年恒例事、今度非別御定者、難定仰、如此之珍事、聊事役しめてこそ可有けれ、聊尔有沙汰之條、爲道還無念者歟、遂以不仰之云々、後聞實家卿爲之令哥、公國內々語實教朝臣云々、秉燭之後、藏人業清爲御使云、典侍不祇候御神樂庭否如何、每月供神物、掌侍勤陪膳、於御所勤仕也云々、但(實)所歸洛之時、三ヶ夜有報賽之神宴、彼時一ヶ夜掌侍勤仕之云々、申云、掌侍四人盡被催出哉、又祇候近隣之上蒲女房等在之、早可召遣歟、不限日事也、於無例又各不參者、延引有何事哉、但案事理、此條強不可及巨難歟、博士女官等之中、古老之者定存例歟、重可被尋問者、後聞大納言局參入云々、本按于基宗朝臣、末拍子公國朝臣、各初參云々、先例重代之輩定役也、而近來人別學此藝、每年致懇望、又隨申有許容、仍大略每度新所作人也、末代之事偏忌古昔之風、雖非大

事、時俗相變、只有如、此事者歟、先者中門南廊敷、假板敷、懸、簾爲、女房見物之所、兩人竊於、件所、見之云々、今日以、棟範一條々事多群也、奏、院、入、夜歸來、仰、院宣趣、任、御定、可、宣下、之由仰、之、

十日、丁、天、晴、以、定經一條々事申、院、晚頭余參內、其後定經歸來、仰、勅報之趣、追催之次、加任并叙位之間事等也、今夜、權中納言忠良、左衛門督隆忠等拜賀也、余於、內裏、謁、之、御所也、兩人共欲、來、余亭、聞、候、禁中、之由、先相、觸、之、爲、同事、更不、可、被、來、里亭、之旨答、之、忠良前驅六人、殿上人三人、云々、避、中將、未、蒙、勅授、仍不、帶、劔、隆忠前驅四人、無、共殿上人云々、此夜有、御體御卜奏、右衛門督賴實爲、上卿、余、候、御前、之間、女房持來入、板宮、留、文返、給宮、如、例、

十一日、戊、天、晴、此晚、法皇御進發了、此日、神今食月次祭等也、月次祭上卿、神今食上卿實家卿、辨左少辨親經、其妻今初產了、然而夫不可有穢、仍猶所、勤仕也、棟範來、申、弓場始之間事等、射手猶闕如、云々、又云、御裝束直衣之由、親經注渡、或有、御束帶例一如何、余云、幼主御束帶何等例哉、可、爲、御直衣、之由、余所、仰下、也、仍親經所、注渡、歟、更不、可、及、異議、

者、十二日、己、棟範猶申、射手闕如之由、又申、他條々事等、余仰云、字佐使參着以前、御着物干物可用、精進也、兼可、加、下、知、者、先例有所見、仍仰、之、

十三日、戊、天、晴、此日、當今初度弓場始也、此禮絕而十餘年、衆人有、蒙、爵之氣、奉行職事棟範、左衛門、所掌定經、藏人右衛門等也、已刻棟範來、申、射堂御裝束之間事、依、先日余命、所、進、差圖、也、余依、寬治堀川院例、見時範記、仰、井江記等、開子細、棟範服膺參內了、酉刻着束帶、各袴給劔、又相、具、弓矢、也、參內、定能卿先以來、同所、相伴、也、于、時奉、仕射堂御裝束、之間也、戌終、諸卿射手出居等參集之由、棟範令、申、仍幼主着、御々直衣、御引直衣、無、御、紅打御、衣、同張御袴、着、御々草鞋、此間、內府已下着、仗座、次主上渡、御射堂、其儀出、御自、額間、

於長押上、頭中將實、頭中將獻、御草鞋了、更入、自、御座、數朝臣獻、御草鞋、間、取、查御座御劔、前行、御路豫敷、御殿四、寶子、南、廣庭、中門、庭道、北廊、經、御殿西南、并中門廊等、立、御北門屏風外、殿上人等指、脂燭、祗候、余候、御共、棟範取、出居、公時朝臣着座之後、自、御倚子東方、着、御、先實、朝臣、置、御劔於、四置物机、今日不、持、候、

式御也、御座南面、是堀川院例也、公時稱警敷、不聞

及、余候屏風內長角菅圓座、南面、件座或乾角、大內之儀、乾

執柄座在、良、仍今次出居公時朝臣召將監、陣座在左、仍

日追彼例也、仰的可懸之虫、依功主御時、即懸之、次余咳驚、即公

時朝臣出暢門并中門南小戶、向仗座召諸卿、此間

他次將等入中門北小戶、無名門、着出居座、成經朝臣、公

朝臣、成定朝臣、志等朝臣等也、東上北面、次公時復座、次內大臣已下公卿等、入

自中門南小戶、經暢門并中門內平榻等、着座、自

前着之北上四面、着中門以南座之內大臣右大將實房、權

中納言實宗、右衛門督賴實、手、藤中納言定能、手、權中

納言泰通、手、二位中將良經等也、親宗隆房等卿、依無

座直出無名門了、公卿皆持弓矢、其持樣如次矢取內暨

十人、渡堀前、着座、堀前池也、仍其座雖在北、次召實

教朝臣於屏風下、余仰能射人々、右衛門督藤原朝臣、權中

等實教入無名門代、就上卿座上頭、仰之、內府取

弓奉仰、各告其人、實教歸次能射人三人、一々射

之、賴實定能兩端、於座發之、近例無此事、先右衛門督射

了、次藤中納言射之、各復座、次公時朝臣起出居座、

出無名門一裝了、參上射之、三人皆不次上卿內府召

所掌、見遺無名小時所掌藏人右衛門權佐定經取簡硯

於弓、入自無名門、就上卿座前、此間余召頭中將、

如初召、仰度數射手募物等、度數以三度爲限、射手其人

實教如初入無名門、就內府座上仰之、所掌同聞

即歸入了、內府仰所掌一歟、所掌書簡、委作法、次弓

場始事追可書入之、

十四日、辛巳入夜棟範參上、申明奉奉幣之間事辨未

定、依親雅穢氣也、幣物不具、大略難被遂行一歟

云々、

十五日、壬午親經參上、棟範參會、奉幣奉行事仰之、今

日內府有辛爾之詩會、親經候其座云々、今日宇佐

使參着日也、仍余潔齋精進也、公家同之、余修祓遙

拜三字佐宮、依有所思也、

十六日、癸未宗賴、長房等申條々事、又棟範申條々事、

今日大神宮御祭也、余修祓遙拜、臨時之儀也、有所

思也、

十八日、乙酉此日、公家荷前擬侍從等定也、上卿右大臣、

又私荷前也、使以政朝臣、仲盛於南庭、有拜、發遣如

例、此日早旦、奉告文使於多武峯、使文章博士光輔朝臣、

即件朝臣草進告文、卯刻小浴、同刻光輔持參告文章、

以奉行祓事、見了返給、仰可加入之事等、天變事、政可

行傳覽之、



與福寺樓上如、小時、宗賴朝臣參入、次光輔覽改直之趣、  
返給、使有賴清書之、其後發遣如例、前庭後座也

十九日、戊戌恒例舍利講也、論義有興、及深更一事了、

廿日、己亥公家御佛名也、相伴內府參內、先於直廡

定御導師、頭中將實教朝臣執筆、以去年定文爲例文、次第必如

他事定、先是奉行職事棟範覽日時、披見之處載時、

戊戌時、此事如何、凡依爲式日之公事、不勘日時、延

引之時、或勘之、或不勘之、今度余依寬治例、令

勘之也、縱雖勘日、不可勘時、依有定時刻、

不勘之、先例也、而載戊戌時之由未曾有、陰陽頭素

不覺之人也、職事又不見答、不足言歟、以此旨

仰棟範、無申方、大略不知案內歟、次余參御所、

人々參入之後、亥始余着殿上、以實教奏事之由、

仰同人令槌鐘、次仰御導師、藏人仰次出居參上、

次余已下參着御前座、次僧參上、次第存例、初夜導

師作法之間、余依所勞起座、候御所籠中休息、事

了退出、

廿二日、己丑此日、圓宗寺法花會、上卿實宗卿、辨基親朝

臣、今日參內并八條院、今日行輔拜賀、依申請遣

牛、以禮身爲使、自今日余始歲末修法、阿闍梨覺成法印

也、不動伴僧四口、有謹加持、又公家歲末御修法同始之、座

主全玄也、於本房修之、又今日寂勝寺灌頂也、上

卿源中納言、辨親雅、

廿三日、庚寅奈良僧正以所司爲使、參宮之間條々事

被示送、一々返答了、宗賴朝臣申之、又申他事等、

棟範申條々事、

廿四日、辛卯天晴、此日、七社奉幣也、伊勢、八幡、賀茂、松吉、是當御占、上卿內大臣、昨日蒙催、其後深齋、已刻參

陣、當日定使雖不可然、歲末忿忙之上、上卿又違

亂、仍隨宜行之、申刻發遣、大內記內覽宣命草、今

度奉幣、依冬雷被行御占、當方角之神社、所被

奉遣幣也、而只載占趣、不註變異之由、仍偏

似被處恠異、不可然、因之司天所奏、其慎不

輕之由、可加載旨仰之、消書內覽免之、奉幣發遣

之後、內府歸參內裏、入夜歸來、此夜定春日詣雜

事、上達部來集、內大臣、藤中納言定能、藤宰相雅長等也、次余出居上達部

座、徹觀也、次召人宗賴朝臣參來、余仰云、陰陽師參

哉、申參入之由、仰可勘申日時之由、宗賴退下、

插日時於杖參上、余見了位前、二通卷第一禮紙一通參社日時、一通神寶始日時、

也、宗賴取空杖退下、次持參硯、加盛例文、候余座當問贊



子、撤<sub>レ</sub>硯盛<sub>二</sub>例文於折敷<sub>一</sub>覽<sub>レ</sub>之、余取<sub>レ</sub>之置<sub>レ</sub>前、宗賴歸<sub>二</sub>居簀子<sub>一</sub>也、無<sub>レ</sub>座、此間、諸大夫三人舉<sub>二</sub>掌燈<sub>一</sub>、切燈臺、打<sub>二</sub>數、燭等也、

余見<sub>二</sub>例文<sub>一</sub>置<sub>レ</sub>前、宗賴取<sub>二</sub>笏候<sub>一</sub>氣色、余目<sub>レ</sub>之、宗賴摺<sub>二</sub>墨染<sub>一</sub>筆、卷<sub>二</sub>返續紙<sub>一</sub>、取<sub>レ</sub>笏又候<sub>二</sub>氣色<sub>一</sub>、余目<sub>レ</sub>之、宗賴置<sub>二</sub>笏更染<sub>一</sub>筆、余披<sub>二</sub>持例文<sub>一</sub>、讀<sub>レ</sub>之令<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>之、端一兩行許讀<sub>レ</sub>之、假令、神馬十列東遊、其後宗賴以<sub>二</sub>直代<sub>一</sub>書<sub>レ</sub>之、書<sub>レ</sub>了又撤<sub>レ</sub>硯、盛<sub>二</sub>定文<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>持、持來、余乍<sub>二</sub>折敷<sub>一</sub>留<sub>レ</sub>之、披<sub>二</sub>見定文<sub>一</sub>了、卷<sub>二</sub>籠日時禮紙<sub>一</sub>中給<sub>二</sub>內府<sub>一</sub>、內府見<sub>レ</sub>了授<sub>二</sub>定能卿<sub>一</sub>、家能卿與<sub>二</sub>雅長<sub>一</sub>各見<sub>レ</sub>了返上、內府取<sub>レ</sub>之與<sub>レ</sub>余、々日時二通<sub>一</sub>ハ、如<sub>レ</sub>本卷籠<sub>二</sub>一禮紙<sub>一</sub>、定文之中卷<sub>二</sub>加例文<sub>一</sub>、并置<sub>二</sub>折敷上<sub>一</sub>、頗指出置<sub>レ</sub>之、宗賴參進、

挿<sub>二</sub>笏取<sub>レ</sub>之加<sub>二</sub>盛硯<sub>一</sub>、持<sub>レ</sub>之退下、次諸大夫撤<sub>二</sub>切燈臺<sub>一</sub>等、此後覽與<sub>二</sub>人々<sub>一</sub>言談、此間、大宮權大夫光雅卿來、召着<sub>二</sub>座末<sub>一</sub>、今日松尾使也、自<sub>二</sub>彼社<sub>一</sub>來云々、小時余歸入、今夜始<sub>二</sub>神寶<sub>一</sub>、行事所以<sub>二</sub>西隣人屋<sub>一</sub>、平門家<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>行事家司着<sub>一</sub>、行其所<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、陰陽師召<sub>二</sub>在宣泰茂兩人<sub>一</sub>也、今日、宗隆所勞之後始出仕、申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、其中申<sub>二</sub>大神寶攝津國使棄<sub>一</sub>置<sub>二</sub>神寶<sub>一</sub>歸洛事、早速可<sub>二</sub>追下<sub>一</sub>之由仰<sub>レ</sub>之、

廿五日、壬棟範申<sub>二</sub>條々事等<sub>一</sub>、明後日欲<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>南圓堂<sub>一</sub>

御佛、而衣木脚非<sub>二</sub>如法之儀<sub>一</sub>、仍以<sub>二</sub>御寺杣木殘<sub>一</sub>、致<sub>二</sub>潔齋<sub>一</sub>可<sub>二</sub>採用<sub>一</sub>之由、殊依<sub>二</sub>有<sub>一</sub>存旨<sub>一</sub>延引了、正月十三日、其旨仰<sub>二</sub>行事長房<sub>一</sub>了、

廿六日、癸巳早旦佛嚴聖人來、又法印被<sub>レ</sub>來、定經申<sub>二</sub>春日詣殿上人散狀<sub>一</sub>、當時卅餘人領狀云々、仰<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>之由、

廿七日、甲午基親朝臣、廣房等參上、申<sub>二</sub>御齋會并元日節會御裝束用途等之間事<sub>一</sub>、此日於<sub>二</sub>家勘<sub>一</sub>興福寺上棟日時、先例於<sub>二</sub>陣所<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>勘也、而今度南當<sub>二</sub>大將軍方<sub>一</sub>之上、爲<sub>二</sub>公家御遊年方<sub>一</sub>、兩方御方遠不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶、仍偏爲<sub>二</sub>長者進止<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之由、自<sub>二</sub>院被<sub>一</sub>仰下、是以勘<sub>レ</sub>之、陰陽師三人、頭宣慈、助濟慈、內府相共出<sub>二</sub>客亭<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>宗賴<sub>一</sub>令<sub>二</sub>勘<sub>一</sub>申日時、杖、見<sub>二</sub>文<sub>一</sub>了、定<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>書了、勘<sub>二</sub>加日時<sub>一</sub>返給了、

廿八日、乙未  
廿九日、丙申

右安元二年丙冬此一冊墨付七拾七枚者以三緣院道

教公異痕松殿右幕下道昭卿被書寫之者也

慶安二年<sub>己丑</sub>正月仲旬、陶化翁(花押)記之

玉葉卷第五十二終

玉葉

卷第五十三

自文治四年正月  
至同年三月

四百七十四

文治四年

正月

一日、晴、及晚細雨間灑、但不及事妨、寅刻自方違所歸來、即改着束帶、有四方拜事、昨日浴後無不寢殿南階前儲其座、四隅舉燈如例、先向北跪唱、屬星名七遍、本名星當年、次再拜、次咒星云々、次又再拜、次拜天、乾、次拜地、坤、次拜四方、東南西北、次拜大將軍、今年、次拜王相、東、次天一、當時天上之問、次太白、東王相太白、每事無相違、次父母陵、共向西方、次諸社、伊石、賀春、原日、梅田、次惣社、南、已上自天至太白、祇北、已上各向其方、再拜、自陵至惣社、兩段再拜、次還昇解脫、一寢、節會小朝拜等盡可被行之由、〔宣卿被行之由〕舊年仰實教朝臣令告、廻諸卿、已刻、宗賴朝臣來申、今日拜禮參入公卿殿上人等散狀、同刻先有手水事、余着冠直衣、出資筵座上、菅圓座引寄與方居之、南、次元三行事職事爲說取脇息、置余前、次陪膳家

司大藏卿宗賴朝臣本領狀季長朝臣遇參、仍點宗賴、取打敷參上、次第如常、撤手洗之後陪膳起座、〔其後〕行事取脇息退下、〔有〕是例也、次宗賴朝臣參南簀子申云、大外記賴業持參叙位勘文者、仰可召之由、宗賴退下之後頗經程、大外記賴業真人持勘文〔之〕宮、經藏人所緣并車寄廊東緣等、東裏、經藏人所車寄廊東緣、今作入、自車寄廊南妻戶、東面、自同間、法若宛後儀、歟、出西簀子、北面跪候、深揖候氣色、余目之、賴業稱唯又揖、是上宮經同簀子并透廊寢殿南簀子等、昇自余座東間、宛後作法、歟、膝行指寄宮於余前、余引寄宮、賴業拔笏退降、候南階東間簀子、余披禮紙於宮中、不加封、仍無披見勘文、至、如本加禮紙、置宮右方、頗押出宮、賴業參進、插笏、依不、探得取空宮、經本路退下候藏人所、爲立拜禮、不、次余歸入、此間、殿上人等漸以來在、公卿未來、仍仰宗賴、告送可來之由、公卿等許、未刻着束帶、膳飯、結地平緒、魚帶、如



例先<sub>長光雅等也</sub>是內府二位中將各着裝束了、及未斜<sub>長光雅等也</sub>公卿出來、<sub>西上北面如河</sub>即有拜禮事、先內府已下降立中門外、<sub>內府立祠內</sub>殿上人上官等同降立云々、<sub>其立據不</sub>付家司宗賴朝臣<sub>及見</sub>申事由、余在<sub>打出同也</sub>簾中、<sub>進局</sub>宗賴子中<sub>南實</sub>、即退下、降自中門內方、示氣色、直出中門了、次內府已下列立南庭、<sub>內府當南階東開</sub>柱而立、<sub>樞中納言梶房</sub>經、參議雅長、三位顯信、光雅、<sub>泰通、二位中將其</sub>等也、定能降房等卿遲參、次頭中將實教朝臣已下、殿上人十餘人列立其後、<sub>不論位次、實</sub>其末六位藏人定經列之、次家司伊豫守季長朝臣、大外記賴業、師尙、大夫史廣房、甲斐守長兼、六位上官等、列立其後、<sub>近代家</sub>列立、尤不當、仍余殊仰舍令列也、就中爲五位外記史位階等下薦之、<sub>鹽所無面目</sub>故不列其下、而長兼不痛之列立、且是父入道納言<sub>言諷諫云々</sub>、尤次內府已下再拜了、內府揖經列前、到足感歎者歟、中門下、<sub>進退共不</sub>陳川略儀、且是爲念內裏事也、次公卿各經列前、出中門、列立其北腋、<sub>內府二位中將、留中門</sub>來會、次余出自寢殿西面妻戶、<sub>女房裏</sub>經南簀子降也、<sub>拜禮以前、隨身等渡南庭候</sub>西左近少將伊輔朝臣持來沓、余着之降自寢殿南階、<sub>此間內府二位中將</sub>他共殿上人<sub>不</sub>前駢等可進來、而不來、在內北腋邊、<sub>頗不密也</sub>、但下人狼藉之間、不能參入、<sub>出中門、垂</sub>據過公卿列立前、<sub>此間定能參會、仍爲第一</sub>於門外乘車、<sub>內府裏車廬四位前駢</sub>相引內府已下參內、已下略季長朝臣獻摺也、

之、入自左衛門陣、昇小板敷于時殿上無人、出上戸、  
 經鬼間、直參御所、召實教朝臣、問人々參否、申云  
 一人未參云々、右府已下早可遣人之由仰之、相次  
 公卿漸參集、而御服所未獻御裝束云々、勿論不足  
 言也、召內藏頭經家朝臣尋之、皆悉奉調出了、  
 申置可忿進之由罷出了、重遣人只今可資出之  
 由仰之、此間、右大臣已下公卿多參入云々、其後數刻  
 不持參、仍內々尋女房云、若有舊御裝束哉、答  
 云、無之、僅一具所在、甚見苦之上、御下襲鼠喰了云  
 云、勿論也、元正雖非可若御舊衣、遂不持參如何、仍及酉  
為用意問之、而所答如此、不能左右、  
 刻御服到來、通親卿奉仕御裝束、余就殿上、御侍子下  
方如例、  
 先是右大臣內大臣已下公卿濟々左坐、余示人々  
 云、御裝束了、自下臈可被起座者、皆悉起了、余  
 降自小板敷、若淺出無名門代着靴、右府靴遲持來  
 之間、暫不被列立、着靴之後、被來余立所、示可  
 被加列之由、即立內府○上字、被來余前事、次余立  
 加右府上、中門內邊也、公卿  
列西上北面也、次頭中實教朝臣氣色余參  
 上了、改御裝束、上南庇廡、立殿上侍子、  
泉掌燈也、藏人等役之、出御自母屋  
 西間、實教舊御座  
奉出之、自御倚子西方着御之後、實教經  
 御座之後、出自西一間可經實子敷、  
但定間先達敷、可尋之、歸出、直降中門廊南  
妻也、元自帶

也、仰聞食之由、余揖之、次余氣色右大臣、進立前庭、余於中門內平橋頭、欲練前、右大臣進立、余四上驚奇無、練步進立於御前之間、右大臣留立件所云々、可謂未曾有、右大臣已下列其西、依庭短以東爲、此內裏例也、次頭中將已下列其後、六位又立殿上人後、次余已下拜舞了、余揖右廻練退、無程練上、向後於御所、數刻練步、依無個宜早練止也、出中門、昇自小板敷、於上戶邊見之、諸卿漸歸出中門之間、余參御前、先是主上入御了也、余於鬼間可仰內辨於右大臣之由、仰實教朝臣、其後經數刻、實教朝臣持來外任奏、余於鬼間見之返給、實教申云、諸司奏可付內侍所云々、仰聞食之由了、余向南殿、爲見節會儀也、而堂上堂下暗然無極、職事一人不見、驚奇無極、以藏人尋求職事等、再三之後、棟範參入、責仰解怠之子細、無所於披陳、始以致沙汰之間、每事泥々、後聞、頭中將不與事之間、五位職事三人、皆在陣方、各相讓、不致沙汰云々、良久之後、僅以立明、堂上猶暗然、頻蒙催之後舉之、又仰職事、此間定經宗、家等參來、令催儲內侍、辨掌侍上、變伺候也、返下外任奏之後、不經規程、內辨可着元子、而已及半時、不知何事、此間令引陣、余仰職事、內辨遲々依不審、以宗隆密々令見、歸來云、猶在陣後云々、小時內辨着元子、即內侍出自母屋簾北

端、經奧座之後并東庇、降自南庇東面戶、居東檻下、須曳歸入、五位藏人定、經引導也、次內辨謝座如例、直向乾提、再入、仰拜之時、以手觸上衣前、跪、尤見苦事也、又練樓不優、歟、昇東階、着第一元子、次開門、次聞司着、次召舍人、其音聲之體似、故、雅通細音引、次少納言重綱就版位、內辨宣、大夫君達召文、少納言唯出、次內大臣已下列立標下、末兩三人未練訖、內辨仰侍座、次外辨謝座再拜、次造酒正持來空盞、其間作法如例、無、次諸卿着堂上座、此間余退出、仍不見、其後儀、余參般富門院、謁女房、退出歸宅、今日小朝拜以前、密々見廼南殿御裝束之處、西面元子與端各立一脚、此事甚不得心、大臣二人參入之時、端可立二脚也、與者親王座也、仍改、立一脚可然、又東庇大略全分闕之、仍余召裴束司辨基親朝臣、仰云、南座西面元子可立今一脚、又東庇臺盤床子等之餘、雖不幾、全不可爲事妨、僅置內侍進路者、可足歟、自本間數縮御殿、彌如此歟、座者、不可有座人數歟、雖不可知事、依見及所仰也者、基親召廣房、相共改直歟、余仰置參御所方之間、不見及其後、又向南殿臨見之處、西面元子與立二脚、端猶一脚也、事甚奇怪、仍召基親、令移立端座、又臺盤床子等迫

東長押、更無<sub>二</sub>內侍之通路、仍仰<sub>三</sub>職事、此同基親在外竊  
仰<sub>三</sub>掃部寮、聊令<sub>レ</sub>引<sub>二</sub>上臺盤等、令<sub>レ</sub>通<sub>三</sub>內侍路、近代裝

束司等不<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>故實、太奇恠也、今日余出仕行列如

例、先居飼舍人各八人、次一員、次前驅十三人、四位二

位九人、六次隨身四人、左番長賴次余車、毛車、車副六人次下

臚隨身等、次內府、行列同前次二位中將、前驅二人、不次殿

上人三人、伊輔、能季、忠行等也次定能卿已下公卿四人車相從、禮

須<sub>二</sub>二位中將列<sub>三</sub>座次也、而定能卿已下敢不<sub>レ</sub>進之間、

余共來也、定能已下雖<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>後猶相伴也、今日家藏人所

擬、對馬(鳴却)

今日參入公卿、

右大臣、內大臣、

大納言、實房、實家、實宗、中納言、定能、

參議、基家、雅良、散位、二位中將良經、治部卿顯信、

歸<sub>レ</sub>家之後、齒堅知<sub>レ</sub>例、子細在又就<sub>二</sub>節供、資泰朝臣奉仕、

女房節供、季長朝臣奉仕、依新制、打敷內府手水節供等、陪

膳以政朝臣、不<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>織物、陪膳基親朝臣

二日、戊戌晴、午刻手水、陪膳季長朝臣、其儀如<sub>レ</sub>例、其後

公卿少々來、余謁<sub>三</sub>實宗通親等、謝<sub>二</sub>遣之、內府手水陪

膳同人、今日內府參<sub>三</sub>兩女院并內等、入<sub>レ</sub>夜歸來、此日、

上官列<sub>三</sub>參內府方、重見參云々、今日饗、長門國領狀、  
臨<sub>二</sub>期闕如、尤不當也、

三日、己亥天陰、早旦手水、陪膳以政朝臣、內府同<sub>レ</sub>之、午

刻、能保朝臣來、召<sub>三</sub>熊前<sub>二</sub>緣也、二棟謁<sub>レ</sub>之、小時退出、相續

泰通光雅等卿來、依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>取亂事等不<sub>レ</sub>謁、泰通退出之

後、光雅入<sub>三</sub>內府方、見參、仍內府謁<sub>レ</sub>之云々、內府語

云、昨日於<sub>三</sub>內裏謁<sub>二</sub>賴實卿、元日內辨事、實家卿得<sub>二</sub>

右大臣讓<sub>レ</sub>行之、有不審等云々、

一國栖仰<sub>二</sub>外記可<sub>レ</sub>催也、直以<sub>三</sub>陣官催<sub>レ</sub>之事、

一不<sub>レ</sub>乞<sub>二</sub>請內辨笏、又不<sub>レ</sub>押<sub>二</sub>笏紙事、

一座中雜事一切不<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>參議、細々事皆仰<sub>三</sub>內豎、直催

行事、

夜、定經、棟範等申<sub>二</sub>吉書、余依<sub>二</sub>假塞、以<sub>レ</sub>人傳覽返給

了、

四日、庚戌晴、此日、阿彌陀堂修正也、依着<sub>二</sub>冠直衣、此車、

上<sub>二</sub>冠、于晴秉燭之程、先參<sub>二</sub>八條院、依<sub>二</sub>御定、此次小兒有<sub>二</sub>

戴<sub>二</sub>餅事、其事<sub>二</sub>參<sub>二</sub>御堂、內府二位中將等、自<sub>二</sub>冷泉

亭<sub>二</sub>相具、門外扣車所入<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>無量壽院南門、直着<sub>二</sub>佛前

座、同息欲<sub>二</sub>始行<sub>二</sub>之所、見參僧僅六七人也、仍令<sub>二</sub>相

催、又輪燈甚乏少、堂中已暗然、相尋之處、出納不<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>



土器、忽難尋出云々、猶早可加燈之由下知之、小時持油器等舉之、然而猶非如本法、僧徒進案太本十二口、今度十口許云々、仍且仰可始之由召宗賴、次神分導師出自北、次初夜導師從被引之、次居僧湯漬諸司官人役之、次余已下湯漬居之余陪膳季長朝臣、內府以政朝臣、二位中將五位上臈兼時、次大導師已講有辨法用三十二相、以政朝臣取之、次余已下退出、此夜、杖之間、賜大導師大褂以政朝臣取之、又申春日詣之由條々事等、

五日、辛晴、此日依<sub>二</sub>日次不<sub>レ</sub>宜<sub>一</sub>、漢日、無<sub>二</sub>叙位議<sub>一</sub>、明日雖  
爲<sub>二</sub>余衰日<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>例可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之、世人之所共曉、〔叙位之儀、式日依  
無<sub>二</sub>沒日例<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御衰日例<sub>一</sub>、取行事、〕棟範來申<sub>二</sub>條  
條事等、實敎申<sub>二</sub>節會事等、

六日、壬此日、叙位議也、雖爲三公卿御衰日、昨日又沒日也、檢先例、沒日無例、御衰日有例、仍所行也、已列着直衣參內、奉行職事定經可早參之由仰之處、未斜參內、尤懈怠也、其後余向直廡、於上達部座、裝束如例、未、有申文內覽事、先藏人左衛門權佐棟範覽、申文、六通、依申文員少、余披禮紙見之、三、如元卷結返給、棟範結申退出、次定經覽之、申文廿通許、余

四百七十一

拔取三通一見了如本指之返給、定經取猶解緒結、  
申之一通、退出、次政所方申文、家司宗賴朝臣覽之、  
指杖、不結申是例也、次於公卿休所撰申文、及  
晚宗隆參入、所持申文只二通也、仍不能內覽云  
云、只以人傳覽之、加三始吉書一通、他人者三日、見了返  
給、秉燭撰申文了、其後以目錄、相細別委、令持定  
經、經院奏、先是御下向了云々、自熊野今日有良久、御入洛也、  
亥二點、歸來云、每事只可計沙汰云々、又持來御書付、  
件狀有可令申旨等、仍書御返事、以隨身令進  
了、暨雖相待、漸及子刻、此間公卿多以參入云々、仍  
子終出資筵、先是奉行家職事經奏奉仕叙位裝束、懸簾立屏、  
此直廬裝束、又見去年記、此直廬召定經〔卿〕仰召仰事、  
裝束、又見去年〔七〕年秋除日記、  
小時歸來召諸卿、次內大臣已下經西洞院押小路等、  
入自南面門來直廬、即以着座、不着休所、次辨官  
右中辨基親朝臣、藏人左衛門權左權衛、右少辨親經、置宮文、次余召親宗、參詣左大辨也、先問在座、  
座設否、於內府、親宗參着圓座、候氣色、余目之、覽本勞、如  
例、見之返給正笏候、余目之、次召定經名、定經  
參上、仰續紙可進之由、即持參之、二通盛、親宗取紙  
置前、取笏候氣色、余目之、親見宗合取勝、今一局、  
三宮、卷返之、繆座前一卷返之、此事有二、一者自端內



サ、ニ卷、自、與外サ、ニ寫返也、二者向ニ座下方、繆置  
 之後寫返也、而今作法離ニ兩說、頗不付見、○南按一者  
以下註歟  
 不候ニ氣色、摺墨染筆、取式部省奏ニ叙之、次親宗取  
 勞申ニ民部省奏不候之由、仍召ニ定經間ニ外記此間、  
 親宗正勞空祇候、頗經程、仍取ニ在束之申文、竊差給  
 之、仰云、且以之可叙也、若雖不進省奏、不可  
 默止、爲可叙之者之故也、不叙、載省奏之者叙、他人之  
例並雖無省奏、以自解叙給、  
 共存、又若追進省奏者、其時可懸勾、全不可及  
 違亂、數刻不可待、早可叙者、親宗披申文ニ叙之、  
 次召ニ院宮御申文、先申、初召ニ親經而未參之間、基親  
 爲余陪膳、來居ニ街重、此次使仰ニ件基親也、然間親  
 經雖參上、不仰之、次以余命先叙藏人、次叙氏  
 爵等、此間定經歸來、申無省奏之由、次基親持來  
 院宮御申文、親宗取之可持來也、而欲叙氏爵、  
 披申文之間也、仍先叙、即先可覽院宮御申文  
 也、而猶不覽、欲叙他者、仍余先可覽院宮御申  
 文歟者、仍親宗驚持勞持來之、余取之置前、披  
 封入硯宮蓋之後、放禮紙置前、不引、取禮紙次  
 第卷重、入三十年勞宮了、取文一通之中卷籠、殘申文  
 等指置座前、親宗進來取之復座、次第叙之、仰院  
宮御

申文之後、小退取勞候可被返給也、而不蒙命直復座、依無可  
 叙之者、空在座甚異也、若直有可叙之者之時、依攝政命且復  
 座叙之時、是猶非正作法、況無可叙之者、此間、余撰可叙之  
 者之申文等、相加叙位勘文折紙等、指遣之、執筆取之  
 不候勞候、進置前、次第叙之、從下叙了、欲叙從  
 寄及而取之、  
 上、余仰云、入內一加階勘文如何、親宗驚而召之、即  
 定經持參一加階勘文、入內無其人、即叙之、次叙一加階  
 披折紙見合勘文叙之、皆叙了書年號月日放  
 紙餘、叙位入三十年勞宮、勞候入、加盛叙位勘文、持  
 勞持來之、余取叙位并申文等、返給空宮、親宗取  
 之復座、余取勘文等置硯宮、申文披見、叙位了置  
 前、此間親宗引置宮等起座着公卿末、次余尋入  
 眼上卿之處、新中納言兼光未參云々、仍就當時祇  
 候、召新大納言實家、給叙位了歸入、內府同之、今  
 夜侍宿執筆作法、不審事甚多、然而悉以忘却、仍不記  
 之、院宮御申文隨叙放裏紙、是若一說歟、然而所  
 傳習於叙位者不引裏紙、以之爲異、除目又大  
 藏丞不書所司之列、隨書二省之位如何、又續紙卷  
 返樣不普通歟、又覽院宮御申文、指無可叙者了  
 不蒙命復座如何、  
 七日、癸晴、此日、白馬節會也、加叙事爲奏聞、可早

參之由、召仰定經之處、申刻參入、雖加勘發、無益、末代之人以如泥爲先、萬事只有催促之煩、更無合期之事、慙以定經奏聞、此次定經內、覽通親卿消息狀云、下臚亂階有愁辭、所職可被許正二位云々、是訴良經之加階歟、余以定經奏之、通親卿申狀不足言、雖不能是非、末世之人積習此例者、天下之亂不可絕、爲向後可被仰知子細歟、返返奇恠候、彼卿叙從二位事、偏愚臣之唇吻也、人而不知恩、何異禽獸哉、無如此之誠者、濫望濫訴常驚天聽歟、爲身不足論、爲世所申也者、戊刻歸來云、御所中間之間、每事不能奏達、僅以奏聞通親卿事、仰云、殊聞食驚、大略物狂條々所加勘發也、返々奇恠思食之、加叙之間事、今朝余以消息令申之狀、尤神妙、早其定可仰下者、仍余雖一紙賜定經了、先是申刻內府着陣、即以頭中將實教朝臣、仰內辨陣事等、了奏外任奏、此次申馬頭代官事、上依公卿幼穉、差改成了、其後待定經之間、經數刻、隨歸參、仰加叙返上下名之後、內侍持下名、進東階下、出自御慶北邊、棟範引內辨參進、賜下名、着宜陽殿代元子、賜二省丞了、歸入中間方、此

「間」余仰職事、令催可引陣之由、即左右次將陣胡床、依無出御、直次內辨着元子、內侍召之、召內侍別也、是次辨謝座參上着座、仰開門并聞司着座之後、奏叙位宣命、復座之後、賜位記、有上階、如例、其後召舍人、外辨參列、右大將爲謝酒之後着座、次第存例無違例、右大將執白馬奏之後、退出了、今日良經立叙列拜舞了、不昇堂上、直退出、參院、八條院、殷富門院等、申慶節會儀了、余相伴內府退出之後、中將來申慶於余并女房、申大前驅六人無一員、先例節會日立加叙、直有所々、今日加叙、參議基家書之云々、今日所役、叙位宣命使中納言泰通卿、御酒勅使宰相中將通親、例宣命使參議隆房、祿所通資、加叙、正四位下能保、從四位上忠季、基親、(行幸賞)定長、八日、御齋會始、申刻內府參官廳、戊刻余着直衣、無出衣、半華車、國參院、六條院、豫內大臣、自官廳參身上着冠如例、已下公卿濟々參候、小時出御、余襄御車前、御乘車供奉御後、自二條東折先以參入、御車過大炊御門入御之後、又以候、御簾下御之後着座如例、咒師一手之間、相具內府、參法成寺、先召定長、女房相具、二位中將先以參入、咒師六手了、余女房等皆退出、今日女房車

三兩、

九日、已余又參御堂、咒師二手、二位大納言來、余謁之、其後參御堂、咒師二手畢退出、

或人云、去年九十月之比、義顯在奥州、秀衡隱而置之、即十月廿九日秀衡死去之刻、爲兄弟和融、兄他取之嫡男也、弟當胸太郎云々、以他腹嫡男令娶當時之妻云々、各不可有異心之由、令書祭文了、又義顯同令書祭文、以義顯爲主君、兩人可給仕之由有遺言、仍三人一味、廻可變賴朝之壽榮云々、今日余參御堂、候佛前之間、信心忽發起、祈請天下太平家門安全事、定有感應歟、可悅々々、

十日、丙余依明日方違、不參御堂、令參內府、十一日、丁天晴、午刻赴攝州宿始本所、宗賴朝臣領安大之室爲本所、彼朝臣所經營也、每事丁寧也、車輿隨便使用之、至七條朱雀邊、共人等乘車、其以前皆騎馬也、相并十人許也、此外侍兩三人、不具隨身、兩息又不伴、有煩之故也、

午正、出京、日沒到着、此日中將參御堂、十二日、戊天晴、日出首途、午正歸宅、今日大將參御堂、十三日、己大陰、時々雨雪、此日、春日詣祈三社奉幣

也、告文作者式部大輔光範朝臣、使三人、春日光範朝臣、大原野高、吉田爲時、已上氏家司職事等也、告文清書民部大夫貞親也、依光範家司、殘兩人職事也、光範迴參、午刻有拜、著東帶、降南庭、陰陽師在宣朝臣、陪光範迴參、以政朝臣、執禮之間三使列立兩廂、拜了返給幣之次給告文也、幣出之後歸昇、告文有辭別、御寺上棟無爲可遂之由也、此日依神事不參御堂、內府中將等參入、

十四日、庚天晴、御齋會竟也、兼雅卿上卿云々、戌刻參院之間、御幸早成了云々、仍直參法勝寺、雖待候還御、依風病更發、參御堂、內府、御幸取勝寺之後、參御堂也、事了受牛王、內府一位中將同前、大導師印之也、內府取件牛王入二庫中、仰女房返給大導師了、次各歸宅、今日依院宣無僧事、十五日、辛時、三方節供、余師直、女房國行、內府陪膳秀長朝臣、此日酉刻參院、以定能卿入見參、依召參御前、小時退出、明曉法皇御參日吉社祠云々、

十六日、壬自今曉法皇參籠日吉社祠、十九日、卯時、此日立二幕使、多武峰家司業實朝臣、氏也、式部大輔光範朝臣持來椎岡職事對馬守觀光也、告文章、度々有改直事等、仰貞親令清書、宗賴朝臣參上覽、其座如拜之、清書、余着束帶於庭中、先奉拜、各日依有所思也、次乍在庭中座、召使々、次拜、多武峰、次拜、椎岡也、



賜告文、或昇臺上之時給之、各進發了、

廿一日、丁巳此日、除目始也、奉行職事棟範也、執筆左大

辨親宗卿、右大將已下公卿八人參上、子細依念々不

記之、今夜有勸盃、頭中將實教朝臣、朝覽中文、如

例、

廿二日、戊午此日、除目中日也、依上薦不參、余在簾

中、仍其座南面也、執筆同人、先終置大間於座下、更

置座上、未曾有之失也、只大間ハ座右終置事ト知リ

タリケル、不可説々々々事也、今夜有勸盃、實教朝臣、取コ入

盃於簾中、召上首給ハ盃、不居余衡重、是例

也、執筆不示合余、任意任兼國如何、

廿三日、己未此日除目入限也、執筆同人、余在簾中、今

日有顯官舉、昨日依參議不參、無此事、入限日顯官

舉、其例太多、召經房卿於簾下、給申文、獻舉冊之

後、又賜信仲季宗等申文、兩人爭中、藏人迎也、仰可定申之

由、又少納言重綱申叙留可被許否事、同仰可定

申之由、各任議奏旨一任了、重綱叙留藏人、題任季宗了、各任公卿

議奏可任之由院宣切了、於重綱者有勸許、然而

可被問人々之由余申行、問之、申可被許容之由也、

廿四日、庚申辰刻除目了、清書實家卿也、兼光遲參之間

給實家、而兼光參會、實家讓退出云々、余及晚退

出、此夜被行下名也、有任乎、

廿五日、辛酉此日始家裝束、行事職事經泰、先懸簾一

間、又敷始廣筵也、先行家司仰光綱了、本仰親

經、然而改定光綱了、少納言賴房本病未尋常、可

及御前闕如者、可及大事、仍爲用意止親經也、

廿六日、壬戌晴、此日自院賜御牛二頭御馬廿疋、御使

定長朝臣、召南簀子一調之、先令引御馬於南庭、

隨身引之、見了召定長申畏賜領之由、又賜女房衣一

頭、修理大夫定保朝臣、爲白河院御使給御馬於知

降、自中門內方、一拜退出、秉燭之後見神寶、以東廂殿

其所、望殿上人座、副北屏風數、原座爲余座、先余出座、次內府、二位中將、

等同着座、南座四寄敷、圓座二枚、次家司職事等運置神

寶、行事相高先敷小蓮、其上午寶、置幸櫃裝持米寶等也、皆置了、余披幣宮蓋見了、

次第運出了余歸入、次舞人陪從參集之後又出座、此

度余座雖敷、殿東面妻戶內、先尋常公卿座引

網、前白打交懸舞人陪從裝束、南面妻戶、北東南三方懸之、以北爲上、宗賴

朝臣候中門廊行事、先左近將監近武參上、職事



衣冠也。取裝束於切櫛之所賜之、乍居上、已下皆悉參給之也。上賜之、舞人皆參上了、陪從好方已下同參上給之、事了歸入、明曉舞人等不可遲參之由、殊召仰之、廿七日、亥天晴、此日、余氏長者之後、始參詣春日御社、

去年十二月廿四日、勘日時定難時、宗賴朝臣又始神

寶、同廿二日於家勘山階寺棟上日時、先例於神助

於家勘之時、即渡行事所、今年正月十三日立三社

奉幣使、同十九日立三墓告文使、是樓上事也、殊有去

廿五日始家裝束、昨日覽神寶、賜舞人陪從裝束、

同日家司右京權大夫光綱、主計助中原師茂等、下

向南都、行佐保殿并社頭裝束事定文、右少辨親經

入社頭裝束行事、仍先仰件人、隨又領狀、而重廻

思慮、辨官員少、若有故障者、御前可闕如、加之、

少納言賴房、內府御前也、猶本病不快云々、仍旁爲用意

改定光綱、先例多奉行家司所前行也、今度宗

賴朝臣可勤後騎、仍差遣他人也、昨日又自院

給御馬廿疋御牛二頭、定長朝臣爲御使、

未明浴湯、卯刻着衣冠、淺黃堅文織物指貫、出紅打衣、(但不

所賜也、先例必用小狐、當時入給帶海浦野郎件御自故殿

內府出紅梅浮文織物(不入綿)、浮文織物指貫、御野郎、御持、中將出、浮文織物指貫、御野郎、辰刻、公卿已下漸參集、通親類最前來、實家兼房等御相續來、其後他親類等來、舞人等大略參集云々、先院渡御々棧敷哉否令見之、已一刻渡御了云々、即余出自寢殿西面妻戶、經南簀子、居與高麗疊、南面、先是內府已下公卿十人許在座、內大臣、權大納言、新大納言、藤中納言、源中納言、帥二位宰相、二位中將、別當、大宮權大夫等也、右大將參會社頭、兼光、通實、光長等自路頭供奉也、

寢殿南東底敷弘筵、西第三間階西、副與屏風、

敷高麗端疊一枚、爲余座、其東間副端長押、敷

同疊一枚、爲大臣座、其以東二行對座敷同疊、爲

上達部座、(東底)敷紫端疊二枚、爲殿上人座、

但不凡件座不敷地鋪茵等也、先例或敷之、然

而天承不敷之、又思事理、公卿已下着衣冠、專

不可敷地鋪者也、

次余召人、宗賴朝臣參上、問舞人參否、申皆參之

由、仰早可渡西之由、又且可敷圓座之由仰之、

宗賴云、舞人渡西之後、可敷之敷、余云、宗賴退下、舞人等漸

可憐意、且可敷也、是又先規而已、進中門邊之間、兼親已下諸大夫等、敷菅圓座於南

簀子、余料敷階四間、內府料敷階東間、仍依其座可

短、引山階間、今敷之、以東次第敷連之、次舞人九

人渡南庭於西、邊武又還參、先人到西竹臺、近衛舍人之中、



先先掃二人、相並、次幣持二人、相並、次神寶長櫃四合、相並、次

祓外居、和琴、相並、次神馬一疋、中央、次出納二人、相並、次下

家司二人、相並、次舞人馬居伺十人、左右各五、次同舍人十

人、左右各五、良家子舞人之時、舍人居伺副馬不前行、

次舞人十人、一行騎馬、爲先下馬、曾指

舊例攝政關白參詣之時、良家子衛尉勸之、近代依

無其人、以近衛舍人用之、

次移馬居伺十四人、左右各七、次同舍人十四人、萌木裏形木

尾長島丸濃款冬衣、依新制、不用絹裏單衣、次一員已下隨身

十四人、騎馬相並爲先下馬、左右近衛監已下賜衣、市比屋巾、袴

袴、仰攝政者內舍人二人、近衛二人相加、而予有所思、不賜內舍

人隨身、仍今日不召具、件四人非踐祚之時、中間家攝政隨之人、只

幕年、宇治行幸之時賜之、予逐彼例也、

行列次第理須如此、而今日殿上人等、多自路頭

打出、遙以前陣、隨身等主人乘車之後、更難進

彼前、仍除一員之外、府生以下十人在殿上之後、

御前之前、專可謂遠例、但應保、仁安、元曆、皆以

如此云々、

次召使四人、左右、騎馬、爲次官掌二人、在左、騎馬、次前驅、

先六位、衣、次諸大夫、布、次地下公達、衣、次殿上人、衣、

爲先下膳、前驅諸將佐隨身布衣帶劔、或負狩胡錄、

今日殿上人之中、着束帶之輩相交云々、甚違例也、

抑雖家司職事、爲內院殿上人之輩、皆着衣冠、雖

非家司職事、於諸大夫者、非內院殿上人之輩、

皆着布袴、蓋先例也、即院者謂上院、次外記史、外記在

在左、布、次少納言、在右、布袴、細辨、在左、布

今日少納言重綱、大外記賴業、稱老嫗、着束帶、雖

似違例、非無先規、

次余車、申、請院唐御車、下儀有轎、車副六人、冠、老懸、蘇芳袴

蘇芳袴、半童持、標近候、其裝束、細葛衣、白襦袴、自余同、車副、近例、次

家司大藏卿宗賴朝臣、衣、冠、騎、鹿毛

後騎有無、先例不定、承保以後初度春日詣無之、

雖須依先例、寬治初度、備中守隆光朝臣、宗賴朝臣

候、後騎、予自攝政初、多用彼例、其儀相似之故

也、仍今日又追其例也、其外於非初度者後騎亦

度々也、所謂承曆、嘉承、天永等也、所詮依其人在

無歟、今宗賴朝臣尤當後騎之仁而已、

次檢非違使二人、左五位尉知親、布袴、

次雜色廿人許、管笠深沓如例、

次陪從十二人、發哥笛聲、

次琴持二人、近衛官奉人仕之、冠、半臂、下裳、青末濃袴、琴持、同

〔次〕良家子舞人之時、五位諸大夫以下十二人、奉仕陪從、

次內府移馬居飼十四人、相並、次同舍人十四人、相並、寄布

繫香囊、形木蒔木柏、守制符、同舍人、府生以下八人、着、藤芳持袴、仰件隨員在、前驅之後、同舍儀、前驅員少、隨身何不、前行、設、然而、且依、近例、且守、予儀、尚在、前驅之後、御前之、馬寮一員、允、屬、府生、長上等也、次召使前云々、

二人、左右、相並、次官掌二人、左右、相並、次前驅十人、五位八人、六

四年例、如此、次左近衛少將宗國、左馬助成實、相並、次外記、

大外記、史、有大史成、次少納言賴房、左少辨親雅、相並、已師向、史、定、相並、次少納言賴房、左少辨親雅、相並、已布、次內府車、持、携近候、前木上下、濃敷冬衣、守制同前、

次檢非違使左府信定、布衣冠、次雜色十人許、菅笠深沓如例、

次諸卿車、

權大納言兼房、前驅六人、〔此內三人余儀、送之〕

新大納言實家、前驅六人、

藤中納言定能、

源中納言通親、

帥中納言經房、

坊門中納言泰通、

新藤中納言兼光、

二位宰相基家、

已上無前驅、

二位中將良經、前驅四人、

別當 隆房、

源宰相中將通資、

大宮權大夫光雅、

右大辨光長、

已上內府已下十四人、

此外右大將實房參會社頭、向黑木屋之時扈從、代勘春日詣記、公卿員數未曾有如此例、以不肖之身、越先賢之跡、可恐可謹努々、未斜到宇治、乘船渡河、內府以下依遲々不相待、余於西岸、乘車之間、內府、權大納言、二位中將等於東岸、下駕、余恐日景之傾、促、駕不緩、仍人々多遲參、到八幡伏拜、下車取笏一拜、宇治殿仰云、騎馬之時可下馬、乘車之時必不可、然、只放牛可引過云々、然而中古以來皆以下車、仍從近例耳、到法花寺烏居下、洗車輪、可整行行列、而依及夜漏無此儀、是又先例也、亥刻着佐保殿、於南面木柴垣外、下車、殿上人等或先陣早向宿所、或遲參通隔數丁、仍以御前辨基親朝臣、令取沓、雖不知先例、隨當時便、余先着前



庭座、取、笏向、北再拜、則是奉、拜、淡海公居、先例件拜或三弘之上數高、脫、查着、此座、也、拜了更着、查昇、堂上、先着、客亭座、二年記、須臾起、座入、休所、解脫、養、食、其後浴湯、湯殿守賜、祿、司取、之、此間宗賴朝臣參上、件朝自、九條口、前來、車在、公卿後、云、不、堵、長途之騎馬、之故也、余仰、可、給、長裝束、之由、即給、之、公卿舞人以下早可、沙汰具、之由、頻雖、加、催促、人々遲參之間頗經、程、此間藤中納言定能、大宮權大夫光雅等來、即余着、裝束、出、賓筵、被、整、諸卿一者、彌可、及、深更、加、之、此座公卿、先例不、過、兩三輩者也、次勸、一獻、四位家司以政朝臣持、參盃、巡行如、恒、次賜、舞人陪從捧頭、諸大夫取、之、於、東廊、給、之、當時參上舞人纔四五輩也、其殘於、社頭、可、給、之由、仰、宗賴朝臣了、

件座棟分戶以西三ヶ間、母屋廂敷、滿弘筵、南西簾卷、之、東北簾垂、之、副、件座立、亘四尺屏風、副、母屋東屏風、敷、予座南北妻、橫敷、也、其西二行敷、高麗端坐、爲、上達部座、對、南廂敷、紫端坐、爲、殿上人座、各備、饗饌、主人料折敷高坏六本、大臣四本、納言以下三本、殿上人懸盤、東上北面、舊記云、西鹿、殿上人座、南上東面、其家子舞人之時、殿上人座在南上云々、而今見、此座座、四、參、社頭、御前辨無、此若是元曆違覺、違簡、失、歟、可、尋、之、

玉葉卷五十三 文治四年正月

史雖、參、少納言外記遲參、雖、然不、能、相待、予降、南階、宗賴朝臣獻、查、於、(柴)垣下、乘、車、路頭行列經、御寺西北東等、參、社頭、於、二鳥居外、被、殿、下車、宗賴獻、查、爰少納言外記猶以遲參、暫雖、相待、依、可、經、時刻、早以下、車也、廣房宿禰稱、行、御前、無、例之由、不、前行、余入、自、轅門、經、祓殿帷前、自、庇前、着、座、余座諸、輕、其內敷座、其西一行敷、上達部座、東上北面、殿上人同經後、此間、內府參入、々々、自、座末、經、後着、座、凡他公卿後着、次供、手水、陪膳以政朝臣、五位三人、役送自、座前、供手水之儀、之、有、手洗、檮等、折敷置、紙、一枚、爲、手巾、如、元三、此間內府起、座、於、帷後、有、手水事、依、四位足、五位上、高兼親勸、即復、座、次可、居、祓物、而遲々、頻加、催促、此間昇、立神寶長櫃、四合、南北妻立、之、次其西引、立神馬一疋、向、北、次引、立舞人馬十疋於、其西、次五位大夫六人取、白妙幣、列、位八足北神寶長櫃南、東上、北面、

紀伊守爲季、  
上野守賴高、  
宮內少輔成經、  
散位良清、  
散位爲親、  
散位親輔、  
賴範雖、參上、不、執、幣、尤不當也、是行事之如泥歟、

此後居<sup>二</sup>戒物<sup>一</sup>尤懈怠也、余陪膳以政朝臣、余料<sup>二</sup>本也、此間

余料二  
本也、此間

陰陽師圖書頭在宣着座、次修禊、余解繩撫三人形、

如例、內府云、他公卿作法不見及被了、以政取三大麻持來、令一吻

一撫了返給、内府已下次第引<sub>二</sub>諸卿<sub>一</sub>了、更歸<sub>三</sub>來余

前、撤<sub>二</sub>祓物<sub>一</sub>役五位來取之、退下、次諸大夫撤<sub>二</sub>他公卿祓物<sub>一</sub>

了、先是陰陽師起座了、次神寶已下前行、此同。若宮御  
川等幣各參。

其起座、經三着到殿南、入自南門、先御幣、次

馬、次十列、次余  
隨身的立相具、  
御幣列ニ立直會  
殿東砌ニ上、北、  
神寶昇ニ立同

屋、神馬引<sub>コ</sub>立舞殿南、余仰令<sub>レ</sub>引<sub>コ</sub>立舞殿東方、是先例

也、次余昇<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>幣殿南面東第二間<sub>一</sub>、直北進立<sub>二</sub>余座北

頭一揖着座、四面齊在座北邊、次公卿等自座後着座、東上、此

後事不及記錄、

廿八日、于甲天晴、及乘燭、雨降風烈、卯刻神宴了、于細

退下。着到殿、日已出東嶺、仍更不能就寢、社頭

事遲々之間、今日事定及三懈怠一歟、仍仰三奉行之輩、再

三加催促、已刻、公卿少々來、午刻、大略參集、舞人等

遲參云々、仍頻加催〔促〕、未刻右大將實房來、入自

南棚門、昇二南階一着座、若可レ昇二白一卽舞人皆參云々、

依<sub>二</sub>內府遲來、再三雖遣<sub>三</sub>使者、猶以遲々、最末所遣

之使者歸來云、已令出途中一給、定有御參會一歟云

四百八十八

云、卽重遣使云、於春日林邊相待可連車者、卽余

出三賓筵、先是余及二位中將着束帶、余裝束色目如例、

結綳即云使所用物也中將要款冬下重紅打相白浮文表後薛綸  
餽地不緒等也隨身裝束共如出京日余染分菜歷市中將垂綳隨

次余示人々、先令立座、自下薦起座、右大將

已下皆悉降<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>西階<sub>一</sub>、權大納言獨用<sub>二</sub>南階<sub>一</sub>、是又不可

然、不被<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>案内<sub>一</sub>歟、公卿列<sub>二</sub>立<sub>レ</sub>西暢外<sub>一</sub>、東上南山、次余

起座、降<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>南階<sub>一</sub>、二位中將  
持<sub>二</sub>來<sub>一</sub>赤<sub>二</sub>出<sub>二</sub>轅門<sub>一</sub>西行、向<sub>二</sub>右大將<sub>一</sub>

相揖也。引強經三公卿列前。家禮人々跪地過畢、隨身懸二下襲裾。

於弓、於鳥居外一乘車、二位中將（此後事不記之）

廿九日、乙、天晴、朝間雖陰、無雨雪、此日、興福寺

金堂南圓堂等棟上也、  
去治承四年十二月化三灰燼之後、八ヨケ  
 早于法、雖破寸力因、更以無其少

汰、余受取辰者、以後、再三奏、事由、  
兩國也、伊集六之間、因、三、去、年、始、所、被、付、伊、豫、因、

年十月欲至此事之處、因幅吏係謫言通親鄉、被追下宮、昨行及

也十一月廿七日又欲遂之依寺中不可叶之由又以延引

次依今日鹽上占同答陰陽等依卯刻着束帶打下湯

大宮灌大夫光雅卿等

來。左保殿前。趾隨身已下。僕從等。遲參。然而御前等。參入。

之後、不待調三人依當時不可出行、降自佐保殿南

派房、良輕、光雅等燭先以降立、於南柴垣外乘車、然間

車副所來只一人、仍待具今一人、參御寺、經房轉達途中。

車、內府會于四御門大路、他公卿次第來會于路次、右大將先以參、御寺無舞人隨身、裝束又以如昨日一昨日兩日、內府同自佐保殿前大路東行、到興福寺西御門、即稅駕、僧綱迎謁之後下車、路夫人多、煩藉殊甚、仍強不待諸卿下、車、少々下車之後、下自車也。宗賴朝臣獻香、殿上人等先降不於門外一解、是又先見車透也。御撤笏、寺中不可帶劍笏之故也。例也、又懸裾於帶上手也、地濕不能引裾之故。御前等前行入自門東行、先是別當僧正已下僧綱已講五師得業等列立路南頭、北面上余向僧正等揖、不持笏只叉手也。僧正以下答揖、即過其列前、猶東行、自假屋西邊、南折入假屋、自乾暢門經西北昇北妻、宗賴取入自北第二間着座、南面、橫座之同第一間休所內也。先是右大將降立假屋東庭南邊、余着座之後、依次着座也、次內府升自假屋西面、入當門、着西座、東面、件座無對座。次右大將座、已下、次第相分着東面座、着東座之人、或經座中、右大將同經座中、作假屋其緣太狹少之故歟、然而猶可經東緣、殿上人等不着座、次余召行事左少辨親雅、品官左大辨光親雅依所勞俄不下向、仍去年卒附仰親雅依爲三辨上薦也、偏行事也。親雅進候、東緣、余先問事具否、申具畢之由、次問勅使參否、申參人之由、余仰圓座可敷之由、敷座了、即可召之由仰之。次藏人五位一人、國行、取圓座一枚、敷北第三間、余座次間也、若可敷其南間歟。東邊、次勅使左中將公時朝臣無劍經東緣參進、先候長押下一

依余目進着圓座示氣色、余又目之、即公時朝臣  
起座退下永承、總共無緣、雖無其  
限到否、親雅退下、歸參申云、吉時漸到候者、仍示人  
人令起座、自下前起座列立南帳外北上也、次余  
降自假屋東面宗廟、經前庭、南行、出自翼帳  
門、經公卿列前、對右大將小揖內府居南門、南行、西  
廻廊跡、開其路、南中門方大衆雜人群集、仍令  
拂却御寺西南等門懸、依其路有程也、先於  
于中門跡爲門代、垂裾令懸隨身弓、入自東方  
暢門、經東筵東庭、於筵下揖、脫沓即着座禮須如  
妄念忽起、經庭中着座、仍其綱在後、事無便宜之故、召行畢親  
雅、捧寄其綱、引道座前了、不超其綱之故也、內府同從余  
經庭中、也、抑今日自假屋移着此座之間、聊有遮眼之物、若是寬  
之境界歟、神心頓靜、歎念佛神無事云々、失錯猶彼餘歟、可奇、  
可奇、次內府右大將此已下經已下次第着座了北上也、  
之後、座猶殘人未着、仍余氏殿上人可着座之由仰  
之、人々傳仰之、殿上人等着之不限人數、只隨座  
程也、此間余着座之後、他公別當僧正已下僧綱已講等  
進自西方着座、東面皆悉着了之後、行事左少辨親  
雅經庭中、取綱與余榻麻柱下打杭結之、付親雅即解下  
其太近、仍爲可通余已下取之、次左近將監式親打鼓、  
便令親雅解也、  
即余已下僧俗皆立座引綱此同工等揭音引之、立了打堅  
柱根三度、舊例略邊引立柱、以



吉日正立廳上也、而中古以來依事有煩、兼皆悉立柱云々、而余折中仰下云、編所載勅文也、四本綱可引、通鑑今日付綱之時、正可引立、雖止也、仍雖從此命、只聊依引、立柱之間、頗無立所、成儀、似無念可謂遺恨、異水承例、可存記者也、  
柱了縹素居座、次殘三本皆立了、此時俗俗不立也、先是右大將云、起之由、不見日記云々、余云、引綱之時、爭乍居引哉、其方太可弱、猶可立也、仍人々從之皆立了、余已下起座、今度經座東也、必此座自上廟可起之由存之、仍余先起也、經座後此同家禮人々居向(群)居、直欲向南圓堂、而彼堂不儲弘筵、欲渡金堂筵云々、仍其間佇立假屋邊、今度不懸、稱令敷筵了縹素着座、余已下於南座、僧綱由、仍所若也、而後日追案之、金堂左爲僧座、南圓堂右爲俗座、不可相替事歟、委不沙汰、守次郎着之、失儀歟、次行事辨經座中、取綱與余、今度大官以政解下其綱也、所司又取其綱授僧正、金堂同如親雅云、於南圓堂者不、打鼓之由、此也、寺家所申也云々、理不可然、無體例者可打之由仰之、然而程遠不聞、然間已立柱、仍余已下起座引綱也、如初立了、如本居殘柱等、皆立了之後、余已下起座、經座後末等、還着假屋座、以次着、此間親雅問棟上吉時、歸來申到之由、仰可上之由、次諸大夫持來疊一帖、敷端座上、仰棟上之間敷之、此間上南也、是爲大臣座也、堂棟頃、之上了之由、親雅來申之、即內大臣已下移着端座、各經束錄也、一行着之、次余召親雅、仰別當已下可着

座之由、即親雅退下召之、次別當僧正已下來着西座、先數子座、次已講着西座、閑度例不着、次二位中將良經起座、於南緣邊取織物掛、給別當僧正、即次殿上人四位已下、給權別當已下祿、已講同預祿、殿次各持祿起座、僧正同持祿於西座、其後暫而相待、僧正被之程、已此問於國司、給工、余示人々令起座、次余起已下祿、南圓堂方又同給之、內府右大將已下相從也、座向別當房、今度不懸、稱令持綱身也、入自南四足、經前庭、昇彩殿南階東邊、直入着座、四面、依便立直入、次內府同昇自南階、左少將伊輪經也、二位中將取香、南西廣庇、入自西面北一間、經座與着座、南面、無對座、次右大將、南、權大納言、北、新大納言、南、各昇南階、着座、次中納言定能卿已下、昇自東廊西面階、南北相分着座、次殿上人等着座、在東、次余召宗賴朝臣、傳示別當僧正可被參着座之由、此間一獻、已講孟(居)折敷、如余擬、右大將了擬、內府、巡行如例、次二獻、其儀同前、次居汁、居了可申上、而參議不候座、仍直下箸、此間別當僧正出自東廊西面北一間、經廣庇、着南庇座、次三獻、余擬別當僧正、僧正起座、就余座南頭、余與孟、僧正取之歸座飲之、更入酒擬、內府、依其座程遠、已講取孟傳、內



府、內府擬右大將、已下巡流如例、次居菓子、次居署預粥、余已下不待居了食之、次引龍蹄一疋、隨身二人一兩匝之後、引廻於東廊南邊、別當僧正從僧受取之、次僧正起座歸入丁、次余目人々令起座、各經本路退下、新大納言已上至內府、降自寢殿西妻廣庇南〔面〕階、右大將已下經前庭、加立公卿列上、件列東廊南側、西上南〔北〕面也、內府留立南階西邊也、次余起座直降自南階、內府居西邊相從余也、二位中將獻香、南行經公卿列前、其程庭從頤宜、仍令垂裙、對右大將相揖、而過公卿列東方、別當僧正被降立、余於平橋邊目之、而猶被送之、仍余於四足門下一立歸謝道之、僧正被留平橋下也、〔次〕出件門西行、僧綱等路南邊列立、余過其前、於西御門外乘車、歸佐保殿、于時已終也、內府直向禪定院、改裝束可來之由仰之、定經、經房等卿、從余來佐保殿、次給御前祿、於東廊給之、四位已下諸大夫取之、余於佐保殿差食、改裝束、衣冠、綾淺黃指貫、白唐綾出掛也、此間經房卿徒然伺候、雖早示可歸之由、日來不參佐保殿、稱有恐猶祇候、定能卿改着衣冠、小時權大納言被來、衣冠、余出座召人、季長朝臣參上、宗賴白地爲改裝束、退下之問也、仰可引馬之由、即衛府

一人隨身一人引之、隨身二人可引之、一匝之後引退了、次內府來、衣冠出紅打衣、着座、次余歸入、此間宗賴參入、余居南庇東第二間簾中召人、宗賴參上、余仰院御隨身等可召之由、即近武已下六人參候東廊邊、此間內府已下起座、移居南庇殿上人座、先召近武、宗賴候、東面、行、參上跪庭、余押出紅打衣於簾下、內府進寄取之、給近武、近武進寄階間、次召厚助、如初參候、少將伊輔朝臣自西方、持來紅梅織物掛與內府、內府取之進出給之、如、厚助肩祿一拜退出、次武安、權大納言起座於西緣、取白綾掛、進南緣給之、如、切、拜之同、次召兼平、定能卿起座取之、白綾、進南緣給之、如、值大納言、兼平取之退下、不拜、次召武友、二位中將口織物掛取、兵部大輔能〔繼〕、給之、次召兼仲、同中將取裏款冬綾掛給之、一人不足、仍中將剛度給之也、隨身六人之中、兼平兼仲着舞人之裝束如何、殘四人水干袴着冠并毛沓也、又厚助、武安之外不拜之、先是右大將、新大納言等宿所、各遣馬一疋、右大將職、事小、行國新大納言、各有畏給之報、次余降自佐保殿南階、宗賴參上、於柴垣外乘車、大納言降立、經房卿降居、內府、定能卿、二位中將等處從、行列如例、御前改着衣冠可前驅、而各早〔以〕上洛云々、于

時申一點也、戊刻着字治、於八幡伏見、下乘船之後、車拜之如先暫不出船、待內府、二位中將等、無程各來着、三人同船着東岸、更乘車從駕、亥刻終到九條、賜隨身腰指、又共檢非違使二人各給馬一疋、各自院被催遣之故也、蓋先例也、御案主引之、於中次內府共檢非違使同引馬召前給之、仍隨身下臈引之云々、浴湯之後一寢、

卅日、丙寅、陰晴不定、時々小雨、午刻相伴內府、歸冷泉亭、密々議也、入夜參院、以盛隆申入春日詣之間御沙汰、每事丁寧已超過先例、殊恐畏申之由了、仰云、行法之間不能御對面者、即退出了、權大納言以書札示、今度殊被竭懇志之悅、又於九條以掛一領、給智詮阿闍梨、示雨祈有法驗之故也、又以牛一頭、欲遣覺成法印之許、行御修法之故也、而今日不將來、仍明日遣之、以侍兵衛尉重經爲使也、恐悅之由有返報、

## 二月

一日、丁卯、此日大原野祭也、依乘尻等懈怠、及晚發遣、陪膳文章博士光輔朝臣、陰陽師縫殿頭宜平、行事職事

光茂、神馬使所雜色忠光、內府同發遣之、陪膳已下女房依月障、自川原立也、先日只行由殿不立帶、而今日今日釋奠也、上卿派光朝、參議雅良、親宗、通親、等卿、序次文章生親綱、諸師爲長午刻許自內裏女房送書云、日來玉體聊有御恙、而昨今御增、就中御咳逆反吐、殊只以煩御云々、欲馳參之處風氣不快、仍且召遣職事棟範之間、即以參入、御樂事傳女房語、其趣同女札、余仰云、先早召陰陽師、於藏人所可被行御占、隨其趣、問日次、可被行御祭等並二間仁王講等、又參院可奏此由者、棟範歸來傳院宣、又持來御占形、其趣非重敷、但御祭等明日可行之由仰之、依今日御衰日也、又入夜檢非違使清重院近臣爲御使來、余依所勞不快、依爲御使召籙前謁之仰云、內裏御不豫聞食慾、御祈已下事殊可申沙汰也者、又御有樣委可令申者、申子細了如此下臈雖爲御使、不可必謁、然而白川鳥羽院御時、以北面下臈爲御使、被遣知足院殿法性寺殿等御許、每度被召御前、思彼例所謁也、及深更余疾彌重、終夜惱亂、

二日、戊辰、雨降、所惱猶無減、是非他去冬今春不治、相積之所致也、進書札於內裏女房許、國爲報云、

昨今同前云々、今日內府參內、入夜歸來語御惱恨、當時他事殊事不御、只咳疾殊重御云々、

棟範來申、條々事、御祈等今夜始了、御祭五、泰山府君、鬼神、招魂、

土公、兄、又仁王講等也、此日、天文博士業俊、大藏大輔泰茂等、持來密奏、各留案返給奏料了、

三日、巳、陰晴不定、此日、院尊勝陀羅尼也、余依所勞不參、又祈年祭前齋也、雖無病可有惛歎、於陀羅尼者當致齋之時、不進之也、內府、二位中將等進陀羅尼了、午刻內府參院了、棟範來云只今院宣云、右兵衛敷成樂師千升州三品殿、實教朝臣編子也、可被聽昇殿、今日可申拜賀、只今云々、可被仰下、追可申殿下者盛隆奉早可仰下之由仰了、依天變被始數壇御祈、而又有如此之非據、只被略御祈、頗執思食、政道之可叶天意者歟、莫言々々、

四日、戊午、陰晴不定、此日、祈年祭也、上卿兼房卿云々、昨日致齋如常、棟範來申公家御樂之間事、雖有種種御療治、未有御驗、欲始御修法、無用途云々、可奏聞之由仰之、即歸來云、院宣云、可仰能保朝臣者、實元持來天文密奏、留案返給奏料了、此夕使泰茂修災惑星祭、仰右少辨親經令草進祭

文、即賜撰紙令清、仰祈祈年殺奉幣可忍申沙汰、御樂事可被載辭別之由了、

五日、辛未、晴、故院御月忌如例、余不臨其所、此日立春日祭神馬、陪膳以政朝臣、奉行經奏、雖除服、依爲輕、服日數內、有御役、

這、以使良清、今使家職事散位良清、藤氏也、於神馬使、ハ必シ、兼行役送也、陰陽師圖書頭在宣朝臣也、余風病未快、之中無領狀人、然而依存謹慎、枉以奉拜、又女房同奉幣、以政非

女房家司、仍以宮內卿季經朝臣爲陪膳、內府同發遣奉幣、役人同前、但國行勤役送、

御樂事以書問女房、返札云、自昨日有御增、御溫氣相加、殊六借御云々、棟範來示仰趣、即以同人奏

院、仰云、開食驚不少御祈事可仰能保朝臣者、棟範即仰之、能保申今夜不可叶之由、仍御修法八日

可始之由仰之、明日明後日依日次不宜也、此夕以職事國基、遣舞人半臂下襲於使、實保朝臣祇候、

此夜群盜入少將信清家云々、

六日、壬申、晴、問御樂事於女房、只同前云々、今晚或人有夢想事、公家御樂爲余沙汰、修御祭者可御減云々、仍變御修法之沙汰、自今夜五ヶ夜、可修如法泰山府君御祭之由仰棟範、又示女房之



許、召仰業俊了、又兼光卿來、可草進都狀之由同仰之、此日春日祭、使右少將實保朝臣、辨右少辨親經、

此日被行軒廊御占、神宮惟興、大隅國正入替宮、自設者少、御座等也。上卿泰通

也、宗隆來、季御讀經日次事仰來廿七日可宜之由、此

日、公家御祈被行、四角鬼氣御祭云々、藏人所、入夜藏

人忠國持來御都狀草、余見了、以同藏人遣陰陽師

許、頃之持來清書、黃紙、手書、余正衣冠、以朱奉書入御

諱字、極雖其恐多、蓋幼主御時之例也、御都狀三ヶ所、枚

十二枚、各一所也、即以藏人遣川合瀬了、其後余降庭、北向

兩段再拜、奉祈玉體安全、并又奉拜春日大明神、

依御祭一也、

七日、國晴、早旦天文博士業俊朝臣申云、去夜天晴雲

歛、祭庭安閑、御祭嚴重、藏人可檢知也、祭物每事丁

寧云々、定經來、造宮使并離宮院修造事等奏所存、歸

來云、造宮使神祇少副爲定、是當時所認者之中、官位第一也、又先年奉行無爲云々、一身兩

例已多、又離宮院之中未被付成功之所々合四ヶ

院也、而爲季修造二ヶ院、可任少副、有本爲定又

造二ヶ院、可洛一階恩、有本親廣造四ヶ院、可

任副官、無本三人申旨如此、爲季、爲定等雖有

本功、造二ヶ院、任副官、叙一階之條、共以成功不足也、只造四ヶ院、可爲一人功之由、可被仰下、歛之由奏聞之處、仰云、爲季爲院中奉公之者、雖功程不足、只可被仰下、爲定又以同前云々、御定旨已似忘神事如何、然而早可宣下之由仰了、今日內府參內、此夕私修火災祭、陰陽師泰茂朝臣、自今日三ヶ日、神祇大副卜部兼友參籠本宮、祈申御不豫事、

八日、戊晴、二位大納言送書札云、所遣出羽國之

法師昌尊申狀如此、即被送件狀、雖委細不能具

錄、只義顯在奥州、即件昌尊出自出羽國之間、與

彼軍兵合戰、希有逃命來着鎌倉、以此子細觸賴

朝之處、早申國司可經院奏之由也、子細猶有

疑、仍召件脚力、大納言副使、者送之、問子細、申狀同昌尊書

狀、爲奏聞召定長、依所勞不來、又觸經房卿、

同稱病、然間及深更、仍明日付盛隆可奏也、自

今朝內府病惱、頃之落居、召智詮加護身、自今

日於御殿被行大般若御讀經三ヶ日、此日二位

中將着陣、正二位後也、前驅六人隨身白狩袴、共殿上人

刑部卿宗雅朝臣、申刻參陣即歸來、

今日又權中納言忠良卿可着陣云々、此日依御樂被行不見御祓、御祓、

九日、亥晴、召盛隆朝臣、奏昨日權大納言所示送之義顯之間事、入夜歸來、仰云、此事爭無御信用、

哉、但御返事只自其直可被仰也云々、余申云、此事已大事也、爭私申返事哉、猶於院有議定、可被

遣別御使、歟、被成宣旨院宣等宜歟者、

十日、丙晴、此日、先母遠忌也、仍佛經布施取等送光

明院、如例、又自今日至來十九日、十ヶ日修懺法、恒例自十九日始、是故殿御料也、而今年始自十日終于十九日、是夜關白於此日宛、結願於父忌日也、○有誤字歟、仍及、仍女房相供、內府病後未出仕、二位中將又明向、

九條始初夜時了、余同讀懺法、又讀妙經、唱念

佛、是爲父母也、今夜宿御堂、今日宣下造宮使、爲上卿實房卿、公家泰山府君御祭、今夜滿五ヶ夜、初後仰、親經親長、

余正衣冠、取笏降庭奉拜府君、依守謹慎也、

爲奉祈我君也、五ヶ日每日御都狀書御諱、每日祓人持來也、

十一日、丑晴、及晚雨下、懺法後夜日中雨時行了、未

刻許歸冷泉亭、須十ヶ日之間經廻此堂也、然而依主上御不豫、不逗留城南、所忿歸亭也、酉刻

着直衣、參內、自去朔日依風病不出、奉拜龍顏之處、御惱已平愈、爲悅不少、即參院、于時秉燭、

隆入見參、被仰出義顯之間事、申子細了、即有

召、仍參御前、申主上御風氣無爲之由、并義顯與

州之間事、奉勅定歸出殿上、與兼雅經房等卿粗

議定此間事、即召盛隆、可向左大臣、右大臣、右大

將、堀川大納言等亭之由仰之、是問人々之由、元所宣旨、非取慮之由、可被

一可被成宣旨事、被之下、此條經房所申出也、

已上官史生之兼院廳官之輩、爲御使持兩

通、可向關東云々、

一如此有沙汰之由、且可被仰關東事、

件等趣如何、又此外有可被行事哉之由、各所被

尋問也、盛隆覆奏可問之由仰了、即參御所、依中

間今夜不能奏聞云々、仍余退出了、

此日、隨并韓神祭、參議基家、左少辨親雅等行事云々、

此日可爲神齋而忘却、不可說、々々々

十二日、戌晴、及晚小雨、泰茂來申云、昨日一昨日等所示之變等、依昨日雨銷了云々、爲悅不少、未刻、內女房告云、主上又發給、自日來六借御座云々、

仍乍驚倒衣裳、參、依御物忌、不能參御前、候二間方招女房、問御動靜、日來雖有御更發之時、敢無御寢、今日終日有御寢云々、余召棟範、女房告之時、余釜內之前、所以今日辰時御時、可御行御占、遺召也、即付使參入、又護身吉凶等可占申之、由同仰之、小時持參御占形、披見之處、占又不重、護身所宜也云々、小時退出了、自明後日可始御修法干手實慶之由仰棟範了、及深更、自院被問仰內裏御惱事、此日有位記請印事、上御相實

十三日、卯晴、午刻、盛隆朝臣爲御使來云、追討宣旨事、人々一同計申、依彼趣可被仰下、歟、但能保朝臣去夜有申旨、刑部承成經上洛、賴朝卿申送云、義顯在奥州一事已實也、但賴朝爲亡母、造營五重塔婆、今年依重厄禁斷殺生了、仍雖承追討使、雖可遂私宿意、於今年者一切不可及、此沙汰、若彼輩於來襲者非此限、其條又忽非、可思寄事、隨又安平也云々、仍自公家直仰秀平法師子息於秀平十九日逝、可被召進彼義顯也、且是彼子息等與義顯等、同意之由風聞、爲顯其真偽也、但此條賴朝故不能奏達、只內々能保可相計云々者、已上賴朝詞、能

保申旨如此、然者宣旨之狀可載此趣、歟者、余申云、所申尤可、然、不可及異議可被載、此由也、抑、御使之條女房无沙汰、官史生之兼院廳官之者可差遣云々、縱雖向奥州、其仁不可變易、歟、若又能保朝臣有申旨、哉、重可奏者、盛隆歸參了、申刻許召棟範仰宣旨事、先可注進仰詞之由仰之、此次申奉幣之間事、元被催右大臣、而爲當日定者、可參之由被申云々、而新中納言忠良可奉行之由所望云々、仍職事內々此旨觸右府、歟、然之間忠良俄辭退云々、仍重告右大臣之由棟範所申也、家習初度神熊所勤、祈年祭、若吉田祭也、而奉幣奉行之條、雖不及難、不似家例、然而彼邊事專不能口入、而今忽辭退、若有教訓人、歟、晚頭能保朝臣來、召簾前謁談、所語同盛隆申狀、賴朝不申院、不示此邊、推其意趣、今度宣旨爲表、起自敎襟之由歟云々、此外雖多申旨、不具記、入夜棟範持來宣旨草、理致分明、仍仰其由、明日可奏聞之由仰之、又可被副院顯御下文云々、其間事并可引載出羽國司解狀、哉否事、同可仰合經房卿之由仰之、

十四日、辰晴、巳刻、棟範來、召簾前謁之、棟範云、追



討宣旨持參院、早可下之由有仰、又云、經房卿申云、宣旨使院使一人可宜之由雖存、被遣奧州者、兩人可宜之由所存也云々、余云、早向左大臣亭、可下宣旨、又院使別被遣之事只可在院、申沙汰、非職事之策者、又國解事被仰國司、未書進、事可懈怠之上、強非要欺、仍只以口宣所下也、其狀如此、

文治四年二月十四日 宣旨、

源義顯者、文治元年比、忽圖逆節、猥乖憲條、然間神明戮力、賊徒敗奔、仍仰五畿七道諸國、可索捕其身之由、宣下先了、爰如風聞者、彼義顯偷赴奧州、聲先日之毀符、稱當時之勅命、相語邊民、欲企野戰云々、件符者緯不出從、欲標自由之結構、武威之所推也、因茲可毀破之由、重下鳳詔、畢、何備龜鏡哉、奸心之至、資而有餘、宜令前鎮守府將軍秀衡子息等、追討彼義顯并同意輩、若背綸言、不存勳功者、須與同罪、遣官軍令征伐、

藏人左衛門權佐平棟範奉、

及晚參內、女房云、今日如形發給云々、如例有難

遊等、玉體更無不豫之氣、爲悅不少、自今夜令實慶僧正修千手法、近邊取壇所、所令居住也、入夜向九條、逢懺法時之後、歸冷泉亭、家僕云盛隆朝臣爲院御使參、申公家御祈之間事、然而聞御出之由、歸參了云々、今夜依及深更、明旦可來之由、仰遣盛隆之許了、於內裏棟範云、向左大臣亭下宣旨了、官使史生之中撰器量、不日可被追下之由、同仰左大臣了云々、此旨所召仰也、棟範又申云、奉幣上卿右大將領狀云々、

十五日、辛巳天晴、入夜雨下、二位大納言被來、謁談良久被歸了、棟範來申條々事等、持來明日奉幣宣命辭別、見了返給、又八幡別當成清舉狀二通同持來、仰可奏之由了、聖別當進修理別當等也、家隆申諸寺辨上卿等事、頭辨兼忠朝臣來門外、依神事也、申云、重服人奉行圓宗寺寂勝會、無憚之由、大外記賴業所勘申先例也、又式日今日十月九日可被行歟如何云々、仰云早可奉行、又式日可被行也者、早旦盛隆來仰云、欲行公家御修法之處、無可然之僧、可計申者、申云、院中被召仕之外、可然之人不覺悟、兼行修之何事之有哉、就中於如物供者、不可有其妨歟如何者、盛

隆云、兼家法印不勤、院御祈、可召件人之由有御氣色、如何云々、余云尤其仁也、早可被仰者、

十六日、壬午陰、此日、祈年穀奉幣也、當日被行定雖

不當、有近例、又子細見先日記、上卿右大將、辨右大

辨基親朝臣、奉行職事棟範也、午刻、基親持來日時定

文、相續內記持來宣命草、乘車出門外之間持來、即參於車中見之返給、

內、依御物忌候二間方、謁女房、問御惱安否、

昨日四ヶ度令發給、今日兩度云々、不發給之時、只

如例、御膳又無違例、令發給之時、有小溫氣、又

御眼精乖例云々、事體雖不及大事、令經日數

給之條、爲歎不少、未刻、棟範持來宣命清書、於二

間、見之返給、申云使王申御馬、仰聞食之由、即上

卿參神祇官了、出自左衛門陣、經一條堀川、乘車云々、暨余退出、於內

裏、宗隆云、季御續經廿一日廿四日之由勘申云々、仰

廿四日之由了、入夜定經來申賀茂神部大布施杣之

間事、

今日宣命辭別事、

伊勢已下諸社宣命辭別、被申天變并御不豫事等、

石〔清〕水一社被加申大隅正八幡宮自殺者事、

十七日、癸未雨降、午刻、盛隆朝臣來傳院宣云、賴朝卿

申狀如此、即被下消息二通、一通字佐造宮〔使〕、被仰大義顯可召進之由、可被仰秀衡法師于各任申請可被行

歟者、申云、宇佐事賴朝申狀尤神妙候、抑臨時遷宮可

被略哉否、先日被下勘諸道、未進勘文召取後勘

奏、被行群議之後、可有沙汰歟、義顯之間事、改

名之條不可及異議、早可被摺改宣旨歟、仰可

使秀衡法師子息等追討義顯之由、被下宣旨之

條、若乘賴朝意趣哉否、聊可有思慮、其故〔ハ〕如

今申狀者、件泰衡季衡也與義顯同意、已爲謀叛者之

由言上、而無左右追討使之由、被載宣旨如何、若

可有議定哉、但已被下之宣旨被召返之條、又於

理不可然、尤可有豫議歟如何、即盛隆歸來云、

以謀叛者被載追討〔使〕之條、寔不可然、如賴

朝卿申狀、先載臨御下文、可被下遣也者、余又申

云、此事猶可被仰合能保朝臣也、已被下宣旨、

被召返之條、事涉禁忌、又在京之武士〔等〕定令申

歟、可被改宣旨狀哉、猶只可被下御下文許

歟、此條能可有計御沙汰也者、召棟範仰件宣旨

暫不可成官符之由了、傳聞、兼光卿二男長親出

家入道云々、有情之人歟、可感可憐、密々召陰陽師

等、問山階寺釜鳴事、占申云、口舌火事云々、但非重云々、自寺家不申上、内々僧正被示也、仍殊不仰家司内々所問也、

十八日、甲晴、辰晴、早旦着直衣參院、近習人々未參、以隆信朝臣申入、女房丹三出逢、義顯之間事非女房之可奏事、仍暫相待盛隆參入、小時參入、余奏云、猶被召返宣旨事可有思慮、只可被直宣下之趣也、宣旨院宣兩方被下、尤可宜歎、可被直之趣、今日尤可有議定、兼雅、經房、兼光卿等、尤可豫議者、即奏聞、歸來云、所申可然、其趣人々可議申者、兼雅卿依着淨衣候御所邊、不出公卿座、奉行職事未參、只經房、兼光等卿祇候、粗議定了、又奏聞了、奉行職事未參、仍重遣召、及午刻棟範參上、仰宣旨之趣了、余歸家、與中將同車參内、暫而向九條、爲今夜聽聞廿五三昧并逢明遠忌也、入夜内府相伴女房來、所勞此兩三日復例、仍所來也、戌刻、法印率弟子等被來、終夜聽聞、曉更法印被歸了、此夜宿此堂、十九日、乙晴、此日、圓宗寺軍勝會始也、權中納言實宗卿先定申僧名、依式日不被勸日、頭左中辨兼忠朝臣書定文、重服人也、即向寺家行事、今日、故殿御忌日也、導師慶智僧都早日懺法結願、忌日以後例舍利講

論義如例、内府并尊忠法印等同在簾中、聽聞、戌刻、女房相共歸冷泉亭、余内府同車、路間念誦法華經比丘偈自我偈等、内府閑聞之、歸冷泉下車、内府爲寄女房車、走向北車寄方、即女房下車來、此方、内府相具來、數刻在前、談雜事、取出意見、相共評定要事等、亥刻、大原上人本成房來、仍余謁之、此間内府猶在女房前、及子刻歸我方云云、及深更上人歸了、余又就寢了、小時、内府方女房卿、周章走來、告大臣殿絕入之由、余劇速而行向見之、身冷氣絕、一塵ノ無馮、余誦尊勝陀羅尼在傍、事已一定雖不能扶救、志之所之、所々修誦經、寶物廐馬等獻諸社、又如祭祝如雲霞修之、又奉始佛教體、即大原野上人來、依在近邊所招也、此間女房暫退障子外、爲招入上人也、然而依事急已不能秘計、只唱神咒在傍、先是雖召遣智詮阿闍利、依在九條遲來、如此間天漸曙了、終焉之體非罪業人一歎、面貌端正仰而臥之、是善人々相云々、佛殿來云、生天上歎云々、廿日、丙晴、及卯刻智詮來雖加持、更有何益哉、閑暇之後經二時所來也、大凡爲邪氣絕入之



人、依佛法之威驗、蘇生、其例雖多、今之有樣非絕入之儀、如法之開眼也、於今者百千萬總計不所及、余及女房此後神心迷亂、萬事不覺、此間爲訪公卿已下濟々來云々、又山法印來、此後事故以不覺悟、及辰刻、聊鼻氣令通云々、仍重以雖加持、即其氣止了、上人等云、是非實意氣、多有如此、猶數刻加持之、遍身皆冷此、人等事等、故非可憑云々、了、仍已刻披露事一定之由、人々降立、余此間以伊豫守季長朝臣爲使、申院可觸穢之由也、此事定能、經房、山法印等致訓云々、余更前後不覺也、歸來云、於今者雖遭喪無益、淨可候云々、然而猶觸穢了、重奏、一身雖淨不可及出仕、更以無益之由了、今度被仰可然之由、尤神妙、又以盛隆朝臣爲御使、被訪仰、只申畏承了之由、今夜出家事、戒師傳嚴上人也、并廿二日入棺、同夜可盜出嵯峨邊堂、經光法師所領也、太有、事等、僅以沙汰旨了、家司光綱、職事經泰等、可奉行喪事之由仰之、余女房等今夜向九條亭、內府女房猶留此亭、來廿二日同可向九條也、以九條堂可爲喪家也、陰陽師仰頭宣忠朝臣、令着進門生一人、余掌行喪事之條、身居重寄、旁可無便之由、人々示之、仍只爲後家沙汰、示合兼雅卿、可致沙汰之

由、仰光綱了、未刻、直御座供掌燈云々、見事一定之後、余更前後不覺經數月、後五月上中旬之比、且問人々、且側思出、記今日以後事等也、二月廿日以後到五月九日、斷記錄筆了、經數月之後僅以記之、定有謬事等歟、

仰、內大臣正二位兼行左近衛大將藤原良通、僕之家督也、余十九女房年始自出胎內以來、其性稟柔和、志在至孝、一事一言不逆父母之命、逐年逐日無忘晨昏之禮、何況奉公之節、當時俸少、生年十七而始勤白馬節會內辨、無遺失、揚名譽、自今南漢按、以降非有見病、一度不逆其催、年中臨時之公事無不經歷、昔京極太閤少而有奉公之聞、然而難及此相府之忠勤歟、爲攝錄之家嫡之者、未必有如此之例、天○南按、謂之社稷之臣、又自幼年志學、和淡之典籍無不涉獵、見任卿相之中、其才無及半之人、歟、文章是得天骨、詩句多在人口、加之、從宗家卿傳歌曲道之奧旨、不殘纖芥、又就樂人宗賢、屢〔々〕習龍笛骨法稟體、漸欲達宮商之道、近日又學和語、所詠之歌、總雖不過兩三、風情入幽玄、政理者是天性之所得也、深思政道之古風、絕歎舊禮

之廢絕、和漢之間所抄寫之書、卷軸有數、殆及數合、年齡僅廿二、雖云儒士、勤學難及者歟、國家之棟梁、末代之重臣也、頗不相應亂世哉、粗思列祖之蹤、心操、才漢、政理、藝能、忠勤、至孝、兼此六之者、曾少比類、恐父出仕、偏被扶相府、今遭此喪、誠是家之盡也、運之拙也、惜而猶可、惜、悲而猶可、悲、非言語之所及、非筆端之可記、於今者永絕一生之希望、偏期九品之託生、僅自幼齡之昔、深奉信神明三寶、永忌奸邪、只存忠貞、付冥付顯、仰擁護、憑加彼、而今有此恨、朝野之士庶見此事之者、詎專貞潔至誠之思哉、可任貧焚驕逸之志者歟、昨抽白華之禮、今赴黃泉之道、生所何方、其奈何行方士之術、冥土可恐、只欲祈圓頓之教、別離之悲、戀慕之思、更非可堪忍、父之哭子、古今多例、我家寬德通房、康和二條殿、皆是雖爲希代之悲歎、比今之哀憐、曾不足爲類、有何罪過、天與此災哉、情案由緒、充滿之令然也、竊祖貞信公兩息居左右丞相、實雖爲異代之例、猶老年之後也、父猶在壯齡、子兼台階警衛之任、寬治永久之外、更無例、後已爲珍事、遂又非無遺恨、今思身之爲體、無一德、無

片善、無才漢、無智慮、只以謂積善之餘慶、悠居攝錄之重寄、至于子息之居、高位相并而趨朝闕者、過分之榮望、餘身之重載也、天譴鬼瞰有謂有理、但其譴可在父、其殃何及子哉、是則短壽之運、宿業早剋之故也、恐父苟悟短命之相、祈佛祈神、不倦不怠、而遂失其驗、是非冥慮之應、只恨信力之不及也、抑、身雖不肖、志在社稷、雖一事之無爲、猶乖魔緣之本意、惡而與此罰、神明已不垂應、爰知天下之治政時運未至歟、非當喪於孝子、剩悲隔於聖化者也、但萬端之由緒、論而無益、一時之悲泣、言而有餘、仰天伏地、屠肝摧魂、何世謝此恨、何時休此歎、只以命可報者歟、後聞亥刻佛殿聖人來、出家受戒、經圓開梨剎之云々、法名增道云々、廿一日、丁晴、被下義經追討之宣旨云々、去十八日於院被定仰其趣、同十九日棟範持來九條堂令見之、余粗有令改直事、今日重持來、即宣下左大臣云々、神心未安塔、宗賴光綱等參入、申內府葬禮之間事、廿二日、戊晴、此夜、內府渡嵯峨邊小堂、只同平生之出行、綱代車、車副二人、共人各騎馬、侍等步行、先是申刻

有入棺事、佛殿上人書「野草衣梵字」云々、入夜余移居南家、內府女房替居堂廊、

廿三日、已最勝會終停音樂云々、

廿六日、壬辰有政云々、上卿兼光卿、追討官符請印云

云、此日、被成同廳御下文云々、此日、入道大納言資賢入滅、年七十

廿八日、甲午雨降入夜止、此日、內府葬送也、堂與葬

場、其間可謂咫尺、仍每事有便宜云々、用火葬之儀、內府平生之時常曰、火葬有功德、土葬不甘心云

云、余又存比旨、仍用火儀也、不用薪用藥也、是近代之意巧、第一之上計云々、子細可尋記、此夜先

於此堂修初日分佛事、歸來後又修之、後聞今日被勘鴨川合社遷宮、賀茂片岡社假殿遷宮等日時、上卿

泰通卿云々、簡僧名、權律師覺玄、法橋性憲、已歸公雅、阿闍梨伊覺、行家、昌國、

自今日始修護摩二壇、一壇阿彌陀、於冷泉修之、晴通、一壇光明真言、於嵯峨修之、經四、

廿九日、未昨日可修佛事、人々遲歸之間、及今日修之、每日初七日等佛寺○南按、本款、也、後聞、葬禮事了慈

德寺法印以下拾其骨、納二瓶、其一、渡淨妙寺、右馬權頭兼親懸之、經圓行家兩閣梨、經泰等相具也、後

日兼親語云、路間兩度有異香、狩衣胸被其香薰、疑

彼骨香歟云々、是有先蹤一事也、善人、其骨芳云々、卅日、丙申例講如例云々、

### 三月

一日、丁酉雖觸穢、御燈齋如例、是先例也、但今日許也、公家御燈雖在二三日、私齋今日一日也、但御燈祓

及三三日之時、到後日爲齋也、例講之次給布裝束各一具、相具小袖各一領、亡者小袖也、今日前攝政

近衛堂供養云々、導師法印眞圓、二日、戊戌法皇自今日令參籠今熊野給云々、

三日、己亥公家御燈云々、二七日佛事、阿闍梨、三尊也、今日平等院一切經會也、付寺家行之、家司長兼爲開封下向、

無舞樂、仍不遣樂行事職事、四日、庚戌後聞有政云々、上卿實宗卿、造宮使官符〔御〕

印云々、內印同行、之云々、此日、余及女房着內府服、其鼠色也、是康和例也、先於別棟屋着冠無文、直衣等、其後降

庭上着麻帶、是例也、女房只着衣服、不着帶也、先宗賴、基親等朝臣參上、各令勘申日時、用喪事之陰陽勘、師是又例也、

文〔留〕御所了、此夕依爲吉日、女房相共向堂、即歸來、又爲方違、向雲林院、法印同車、曉鐘之後歸



來、余今日依<sub>レ</sub>爲吉日、始修誦經、家司宗賴加着、

五日、<sub>丑</sub>彌勤請於此亭<sub>ニ</sub>行<sub>レ</sub>之、

六日、<sub>寅</sub>因幡堂燒失之後修<sub>ニ</sub>造<sub>ニ</sub>之、今日供養導師祐範律師云々、

七日、<sub>卯</sub>今日女房修誦經、家司基親朝臣加着、

九日、<sub>巳</sub>今日、二位中將夢中、故內府呈<sub>ニ</sub>六韻之詩<sub>ニ</sub>、示<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>和之由<sub>ニ</sub>云々、而一句僅覺<sub>レ</sub>之、其句云、

春月ハ羽林ニ悲<sub>ニ</sub>自<sub>ニ</sub>秋<sub>ニ</sub>、

其文體似平生之作骨、其心又相<sub>ニ</sub>叶<sub>ニ</sub>實哀、而有餘事也、尤彼詩昔所<sub>レ</sub>好也、而作<sub>ニ</sub>秋字<sub>ニ</sub>、彌添<sub>ニ</sub>悲歎<sub>ニ</sub>、可<sub>レ</sub>謂希代希代、

代希代、

十日、<sub>丙</sub>後聞今日有<sub>レ</sub>政云々、上卿兼光卿云々、三七日

佛事、<sub>不空</sub>導師伊覺、今日余始修<sub>ニ</sub>佛事<sub>ニ</sub>、導師覺玄律師也、

也、

迎攝阿彌陀三尊一鋪、大文字經一部、導師被物一

重、布施一裘、題名僧布施一裘也、是策略儀故始修

之、

十三日、<sub>己</sub>今日爲<sub>ニ</sub>方達<sub>ニ</sub>向<sub>ニ</sub>普成佛院<sub>ニ</sub>、曉鐘之後歸來、

十五日、<sub>辛</sub>辛亥、阿彌陀請於此亭<sub>ニ</sub>修<sub>レ</sub>之、

十六日、<sub>壬</sub>二位中將始修<sub>ニ</sub>誦誦<sub>ニ</sub>、自<sub>ニ</sub>此日<sub>ニ</sub>、賴輔入道妻、

於<sub>ニ</sub>嵯峨始修<sub>ニ</sub>佛事<sub>ニ</sub>云々、射禮也、奏通、隆房等卿着行

云々、今日被<sub>レ</sub>勘<sub>ニ</sub>稻荷遷宮日時<sub>ニ</sub>、次被<sub>レ</sub>定<sub>ニ</sub>延曆寺千僧

御讀經<sub>ニ</sub>、<sub>廿日</sub>已上公卿實家卿、又每門戶可<sub>レ</sub>安<sub>ニ</sub>置<sub>ニ</sub>供<sub>ニ</sub>

養四天王像并仁王經等<sub>ニ</sub>之由<sub>ニ</sub>、被<sub>レ</sub>下<sub>ニ</sub>宣旨<sub>ニ</sub>、<sub>依<sub>ニ</sub>夢<sub>ニ</sub>告<sub>ニ</sub>也</sub>、

十七日、<sub>丑</sub>國忌也、四七日佛事、彌勤、導師昌圓、

十八日、<sub>寅</sub>入<sub>レ</sub>夜大風、昨日依<sub>ニ</sub>國忌<sub>ニ</sub>射遣延引、今日行

之、通資卿可<sub>レ</sub>着<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>之、

十九日、<sub>卯</sub>女房三位殿於<sub>ニ</sub>嵯峨<sub>ニ</sub>始<sub>ニ</sub>供養<sub>ニ</sub>、阿彌陀經一

卷、自<sub>ニ</sub>今日<sub>ニ</sub>始<sub>ニ</sub>一晝夜念佛<sub>ニ</sub>、依<sub>ニ</sub>夢告<sub>ニ</sub>法印被<sub>レ</sub>始<sub>ニ</sub>之、

舍利講於<sub>ニ</sub>此亭<sub>ニ</sub>修<sub>レ</sub>之、有<sub>ニ</sub>論義<sub>ニ</sub>、物忌如昨、但於僧不

禁<sub>レ</sub>之、晚頭重永來云、所<sub>レ</sub>置<sub>ニ</sub>南都<sub>ニ</sub>之下人馳來申云、

去夜爲<sub>ニ</sub>大風<sub>ニ</sub>、南圓堂黑木屋顛倒者、相次僧正告<sub>ニ</sub>示<sub>ニ</sub>同

事<sub>ニ</sub>、光長、宗賴等、申云、尋<sub>ニ</sub>先例<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>御沙汰<sub>ニ</sub>、又余

不<sub>ニ</sub>方達<sub>ニ</sub>之間、方忌在南、又土用也、旁有<sub>ニ</sub>其忌<sub>ニ</sub>、可<sub>レ</sub>被

訪<sub>ニ</sub>陰陽<sub>ニ</sub>者、余案<sub>レ</sub>之、前年余家之門爲<sub>レ</sub>風顛倒之時、

故陰陽頭在<sub>ニ</sub>憲朝臣<sub>ニ</sub>申云、如此卒爾非常之大事、土用

方忌更無<sub>ニ</sub>其沙汰<sub>ニ</sub>、即時修復、先達許<sub>レ</sub>之、但莫<sub>レ</sub>訪<sub>ニ</sub>陰

陽<sub>ニ</sub>、若預<sub>レ</sub>問者可<sub>レ</sub>犯<sub>ニ</sub>禁忌<sub>ニ</sub>之由、難申之故也、喻彼如<sub>レ</sub>

近邊有<sub>ニ</sub>炎上<sub>ニ</sub>之時、雖<sub>レ</sub>當<sub>ニ</sub>禁方<sub>ニ</sub>、爲<sub>レ</sub>免<sub>ニ</sub>餘炎<sub>ニ</sub>、破<sub>レ</sub>却其

方舍屋、火消修復也、更無<sub>ニ</sub>其懼<sub>ニ</sub>、暴風之破損又如<sub>レ</sub>此

者、今思此舊事、何必訪例避忌、仍即時下向、如本  
 可取建南圓堂之由、原本不仰行事重永了、人々  
 中心傾奇、頻以爵陶云々、此條甚愚也、縱雖不聞先  
 達會釋、隨時立法、非常之斷任人主、何強守株、過  
 土用方忌、更勘日時、再企上棟、於儀有妨、人口如  
 何、今之所行、冥衆定感之、神祇定許之、抑卒爾大事  
 無力於經營、仍仰宿院佐保殿近邊庄々等令支  
 雜事、又僧正許送札、可被合力之由示之、參宮之  
 後不經幾程、喪成人之長嫡、相次有此微計也、  
 有神明不說欺、況乎誘人之辱、暗以可察、下官有  
 何罪過、招如此之不祥哉、成人觸貞潔、曾不狎  
 慢鬼神、所憑只在冥衆之靈應、何與神罰、以之思  
 之、皆是雖爲理運之殃、當時傷之悲歎之、腸千萬  
 迴、一想一恐、中丹無聊者也、但以內心無過、彌猶  
 仰大明神之加護而已、

廿日、丙辰入夜結願念佛、延曆寺千僧御讀經供料闕如  
 了、延引云々、今日行事重永下、向南都了、召圖書頭  
 在宣朝臣、南圓堂顛倒事令下、十八日戌時、病事太重云々、  
 又顛倒修復之間事、以余所行之趣、仰在宣、甚有不  
 說之色、余責以父會釋、猶以霍執、是非破父之儀、

依遠近可有差別云々者、即時沙汰、遠近可同、  
 所申無謂、重仰此旨、殊無所陳、若伏理欺、此日  
 有舍利講、無論義、

廿一日、丁巳國忌也、僧正南圓堂沙汰、寂神妙之由被悅  
 示、

廿二日、戊午被行臨時除目、上卿通親卿、參議親宗書  
 之、頭中將實教奉行之、祭除目也、實教爲御使來、  
 兩三度往還、今度除目一向可在御定、未能雜事成  
 敗之由奏之、今日、石清水臨時祭定延引、依余着  
 服觸穢并內府薨逝等也、先被問人々、左府、右大  
 將等申云、依大治例、故殿遺子喪於朝餉書之、覽  
 般富門院、大治覽可下云々、右大臣申云、內大臣薨逝  
 天下之歎也、何況覽女院、又爲希代之例、猶可被  
 延引云々、余申、不可有延引之狀、然而猶依右  
 大臣申狀、可延引、有院宣也、是尤理也、

廿三日、未己女房三位局修佛事、二尺五寸普賢木像、導  
 師性憲、布施十口、此中題名僧三、有被女房結緣經  
 供養事、導師公雅、願文通業草之、伊經清查、自今  
 日女房各轉讀之、一井之間可滿千卷也、

廿四日、庚寅當五七日、地獄受今日依代々例、不修別

佛事、今日物忌堅固、

廿五日、辛酉內府女房始供養阿彌陀經一卷、法性寺座

主始修誦誦、此日、經房卿調送非時六具碗飯也、美

麗云々、分給御前僧了、今日故內府侍等、於墓所

書寫供養一日經、導師智詮云々、

廿六日、壬戌圓阿修佛事、三尺阿彌陀佛一體、導師伊覺、

布施、非時干合加進之、

次內府女房修臨時佛事、導師昌圓、布施、畫像阿彌陀

三尊、二幅、

廿七日、癸亥此日、余女房修臨時佛事、導師覺玄、布施

佛一尺六寸地藏菩薩像、塗白泥奉几帳也、經七

部、有自筆神力品一卷、次有男方一品經供養事、

導師性憲、一鋪半普賢像、經皆金泥也、

願文盛經草之、伊經清書、公卿以下結緣也、

廿八日、甲子此夜於普成佛院遠遊斗斗正斗方、

廿九日、乙丑權大納言兼雅卿着政云々、改補太神宮判

官主典之符云々、辨不參云々、散位藤資定候院北面一

被勘罪名、左大臣仰大外記師尚云々、以三上盛數

近江國、稱任左兵衛尉、偽書入聞書、是爲貪其任

料云々、此事度々自院被仰合可被勘罪名之

由、余計奏也、

卅日、丙寅今日有、一日經書寫供養事、自前夜召書手

僧卅口、法性寺座主自今晚先修懺法、有六根其後所

書始也、余女房等同書之、破亡者手跡爲料紙、導

師伊覺、次有百種供養事、以亡者鏡奉顯阿彌陀

像、以護宮用其帳、以極樂依老經卅七卷同供養

之、所引往生要集之經等也、其外加寶篋印陀羅

尼經、此事未有其例、然而余深奉信極樂、仍以今

案所奉書寫供養也、人々進百種捧物等、導師昌

圓說法珍重、仍給纏頭、純色衣傳聞、今日行召返流

人、官符事、上卿實家卿、前權大僧都良弘依平氏緣座

者元曆二年配流阿波國

玉葉卷第五十三終



# 玉葉 卷第五十四

自文治四年四月  
至同年十二月

文治四年夏秋冬戊申

四月〔小〕

一日、丁棟範來申、條々事、此中檢非違使右大志職

景與左少志章親、座次相論事、明法博〔士〕顯基勘申

子細、其理在職景、仍余申、可奏其旨之由了、此

外條々在目録、此日、平座如例云々、上卿通親、奏通卿、參議親宗、通資等卿

參入、今日、六七日也、不動明王、導師性憲、

二日、戊辰、此日、法性寺座主爲內府、被供養佛經、一

尺六寸阿彌陀三尊、木像、以內府反古裏、被書妙經

一部、此中、四聖品、導師布施十五、每物美麗、題名僧各

三、導師公雅、次余有臨時佛事、導師澄憲法印、

佛、一尺七寸尺迦三尊、中尊座中、奉藏、

經、（籠）亡者遺髮、佛像美麗奉遣之、

白色紙經一部、是內府平生之時、所抄寫之反古有數、其

仰三番臣（〇三）字

自筆金泥阿彌陀經一寫、同料帶也、但標染也、

素紙摺寫經六部、

布施、導師廿一、題名僧各五、

願文、在茂草之、定、余加自署、此條、兼問人々、各申

無憚之由、是久定故殿中陰佛事有御署、攝政若可

憚、追善願文之署、不可依父子、又寬德宇治

殿通房追善願文有自之御署、以兩度之例、准之、不

可憚之由、人々所示也、又非時千合分給之、

四日、庚午、今日、女房左衛門佐於墓所、修佛事、導師

性憲云々、又長房於此堂、修佛事、導師覺玄、此曉、

女房見最吉夢、祈請春日大明神一事、事已上有納

受之由也、日來、示付僧正、祈念世間事、自來七

日、可被參御社、且可轉讀不空絹〔索〕經之由、

示付之、日來所被祈請也、而有此夢、可謂嚴

重、此日依廣瀬龍田祭、爲神事、着服之間、強雖不

齋、依有憚不向堂、

五日、辛未、甚雨、今日、女房三位局於嵯峨墓所、修小

佛事、阿字、井自筆、導師公雅、

兼親同於三嘉所修佛事、導師昌圓、

又女房輔局同修之、以六道僧爲、導師云々、此日、通親卿仰賴

業云、今月諸社祭、依內裏五體不具穢延引、各後

支干可行之云々、棟下宣旨也、自去二日、有穢氣也、

昨今物忌也、今日、權辨定長來門外、傳院宣云、造

東大寺事、遮可被支度配諸國、哉如何者、申云、役

夫工之間、不可然歟、雖有造寺之例、此大事、忽

不可成、而又可爲役夫工之妨之故也、加之、忽

上人所忿申者、所引置之太柱、可被引出海濱

事也、件條者、仰便宜國々大名、隨堪否、定本數、可

被宛、其外、又爲院御沙汰、不論貴賤、可被勸

進歟者、此日、被行流人事、上癩泰通病、式部大夫資

六日、壬申今日、雖當松尾平野等祭、依延引、無神

事、自今日、法皇御參今熊野、內裏穢有混合之疑、

而御參籠如何、傳聞、今日、貴布禰社邊、雪降隱地云

云、實否可尋問之、

此日經泰密々修佛事、導師公雅云々、又季長朝臣同

修之、依未神拜、以兼親爲名、導師行家、眞言供養也、三

七日、癸酉天晴、此日法事也、七僧十二僧、代々吉例也、

導師山階寺權別當法印覺兼也、願文、致經草之、左大辨、

文杖、寄立行香机、金泥經一部、大文字經六十部、等

身阿彌陀三尊、也、可爲三疊帳堂本尊也、佛師院尙行

祿、被物一重、今日事、女房營之、須爲余沙汰也、

然而、今日當社祭、余爲神事、今日之外、又無日次、

仍爲女房沙汰、而依內裏穢、今日諸社祭延引、仍余

沙汰不可憚、然而每事女房沙汰之、定致沙汰了、

更改易、似有事憚、仍不注之、公卿定能卿、泰通

卿、雅長卿等所來也、可來之人々、多所勞云々、有

大堂供濫僧供等、

布施目錄在別、已上者裝束、調法服給導師、但導

師高座、具方豫置之、居事丁、引布施了、預法師

取之給從僧、是皆先例也、次入夜、二位中將修佛

事、導師昌圓、件願文中將自筆也、自書之消書、共以優

美之由、人々感歎、此事、雖不必可然、中將被催

戀慕之思、懇切不能制止、述思緒歟、實可謂有

與○南按當其仁一者也、

八日、戊戌此日正日也、此日、於延曆寺、被行千僧御

讀經、右中辨基親朝臣登山行之、今日先被改勘日

時、辨不候之間、直上卿給大夫史房云々、希代例

也、又有三僧事、法橋二八、公家御驗者其慶僧正、有、今日又

有免物六十三人云々、依別當所勞、藏人左衛門權

佐棟範召檢非違使左衛門尉明基仰之、嘉保之間

有此例云々此日、灌佛也、依內裏穢中、依先例被

行之、今日、正日之儀、曼陀羅供也、導師法務大僧正

公顯也、讚衆十口、加龍僧六口一定、兩界曼陀羅、梵字、金泥

經一都、素紙經十部、願文業實朝臣草之、光雅卿清

書之、是內府後室沙汰也、父大納言營之云々、參入

公卿、經房、光雅等也、先是、有一卷經供養事、

佛、普賢繪像一鋪、件佛、女房先年自、

經、其料紙、內府侍(詩力)清書、數多相續、以、

第一卷、余白、

第二卷、僧正營、

第三卷、二位大納、

第四卷、將自筆、

第五卷、慈德寺法、

第六卷、法性寺座、

第七卷、後室私、

第八卷、母儀、

具經等、祖母姨母、或三位殿、花山院、大納言等營之、

願文、長守草之、導師澄意、說法了、經房卿取被物給之、

次余自伊經清書、簾中、指出銀作劔、入袋、經房取之、置導

師前也、今日、本布施之上、有三人々捧物、色目在別、

正日以後、有七分佛事、每日、分以前、此大、有例時結

願、導師公雅、護摩二壇、今日結願了、六道僧御讀經

同之、但猶歲內可讀滿千部之由仰之、又御前僧

之中三口、覺立、公雅、留候、一井之間、可讀例時懺法、

又每日奉供養新寫經一品、依日次宜、自、中陰卅九日、

每事無爲馳過了、日月如流水、日來、佛事營之、今夜

以後、更增哀憐、更非可堪忍、慙生及今日、實是不

異禽獸者也、

九日、亥自、今日、從消永日、悲淚無乾、今日、師尙廣

房等參入、又親經參上、申條々之事、

此日、被行軒廊御卜、伊勢事也、今晚、余見最吉夢、

三五日之中、法皇御心可歸聖化、天下政可及淳

素、又大明神祈請事、每事可成就之由也、僧正參籠

之間、有此夢、可感可悅、不能左右云々三日五日

之中條々、今三月五月之內也、

十二日、寅此日、右少辨親經來、申役夫工之間條々事

等、

十三日、卯平旦、院御所六條北、西、忽有燒亡、院御參

籠今熊野之間也、內裏穢人々成疑、而今有此事、

神事可恐歟、已刻、檢非違使明基以下來、列立中門

外、各布衣、百胡麻、職事信光着衣冠謁之、降立謁之、



檢非違使明基申燒亡子細、信光來申云、又棟範同參

上、不列檢非違使也。

申云、幼主御時、無內裏奏、歟如何、仰

不可有之由也、今日、稻荷祭延引、必可在松尾祭

之後、先例如此云々、但依先例、不被下宣旨、今

日、宗賴朝臣申條々事、其中、吉田祭依服暇、可付

所司之由、仰本社事、但用途可給之由申、然而、檢

先例、應德二度不給用途、仍不可給之由仰之、多武

峯有<sup>初イ</sup>惟異事之、可占之由仰之、今日、以能季進

今熊野、申燒亡事了、今日、月忌始也<sup>其儀、如每七日、也、導師覺之、</sup>

十六日、<sup>壬午</sup>列見也、上卿通親卿、依院御所炎上、并內

府事、猶且被止宴穩兩座了云々、

十七日、<sup>癸未</sup>被行營固事、上卿泰通卿云々、自今日、

神事頗密例也、棟範來申條々事、檢非違使廣次論事、

如余申、大志可爲上薦之、可仰下旨召仰了、親

經申役夫工之間事、

十八日、<sup>甲中</sup>平野祭也、宣命上卿泰通卿、參議親宗行祭

事、又有軒廊御卜、伊勢事云々、賀茂社司持參葵葉

衣冠、職事取之、任例懸翠簾、着服之間、有憚哉否

不檢得、先例非重喪、非興宴、不可憚之由、人々

示之、仍懸之、猶可尋先例、

十九日、<sup>酉</sup>此日、賀茂祭也、山城介滑原季光、左馬助源

仲國、內藏助清科重宗、近衛使左近中將源通宗等供

奉、今年、依新制、近衛使車轡、并廷尉下部等、不用

金銀錦繡之風流云々、上皇有御見物、此日、又梅宮

祭也、通資行之、余隨身兼次、候院之間、直承仰勸

近衛使引馬轡云々、主人着服之間、隨身勸此役、未

曾有之例歟、然而、別御定歟、力不及云々、

廿日、<sup>丙戌</sup>自今日、解齋、此日有解陣事、上卿兼光卿、

典樂頭和氣定成今日卒去、當世之名醫也、可足惜、

祖父成貞遭一條殿御事以降、和氏頗衰微、等無其

人、貞輔<sup>定成</sup>父、兼輔<sup>定成</sup>兄、等、雖爲良醫、不遇之士也、定

成開運逢<sup>境</sup>、獨步當道、而今忽然而終命、是諸道陵

夷之基也、<sup>生年十六、</sup>

廿二日、<sup>戊子</sup>政、上卿泰通卿、少納言信隆初任之後申行

云々、

此日、吉田祭也、上卿經房卿、辨定長云々、余障之間、

付諸司行之、今日、臨時祭定、實教朝臣<sup>○一本此下有於朝餽事也五</sup>

字於御前一書定文、持來覽之、見了返給、是大治故

殿御籠居之時例也、兼日、棟範所申沙汰者、密々二

位中將始讀論語於大外記賴業真人、伴人爲內府

〔之〕師匠、戀其遺位、所庶幾此事也、余又敢不忌之、只可悅逢名士而已、

廿三日、己丑宗賴朝臣申一條々事、宗隆又來申一條々事、

廿八日、甲午天晴、此日、石清水臨時祭也、去月延引、子細在彼日記、

棟範注申云、

御禊出御、棟範候御座五位在之右例也、又御筵、

陪膳經家朝臣、役、棟範、

庭座、棟範召公卿、召使已下又同、

一獻、定經、經家朝臣、二獻、右大將、

三獻、經中納言、成定朝臣、重杯、雅行等朝臣、宗隆、

賦插花、隆、

參入公卿、右大將、藤中納言、源中納言、坊門中納言、

新藤中納言、藤三位、治部卿、大宮權大夫、

舞之時召公卿、棟範、舞了入御、渡北陣、使中將成經朝

臣、御禊以前右大將奏宣命、有辭別、式日延引事、抱

瘡事等也、

今日、臨時祭、法皇於鳥羽御見物云々、

廿九日、乙未入夜、八條院御所邊、有火事、仍獻使者、

然而、即消了、長經朝臣倉云々、

### 五月

一日、丙申天晴、五位藏人兩人定經、宗隆、來、申一條々事、兼光

卿來申熊野詣暇事、仰字佐仗議以後參詣可宜之

由、

二日、丁酉天晴、時々雨下、實教朝臣爲內女房使來、申

少納言內侍訴事、澄憲法印來、余呼前隔、謁之、藏

人左衛門權佐棟範來、申最勝講僧名之間事、又申宇

佐仗議、明日可被行之由、上卿右大臣云々、入夜、

棟範以消息、申明日定公卿散狀、仰重可催使之

由、此夜、私家行四角鬼氣祭、陰陽師四人紫俊、在定、廣元、宣平、等

也、

三日、戊戌晴、此日、被行仗議、宇佐宮臨時遷宮、可被

遂行、哉否事也、右大臣已下公卿八人云々、宗隆來申

一條々事、伊都岐島神寶早可奉納一事、成給宣旨、可

差副衛仕之由申了、仰可然之由、去大神寶之時、

神主有爵旨、不受取云々、衆更下向、有煩無聞、

仍只衛仕許也、是且又院宣而已、

四日、己亥天陰、少將公繼叙四品之後、申拜賀、余不

謁、依爲除服以前也、賴業來、今日、莚昌蒲一如

例、但堂不<sub>レ</sub>葺<sub>レ</sub>之、依<sub>二</sub>喪家所<sub>一</sub>也、是例也、能保朝臣招<sub>二</sub>寄信光<sub>一</sub>、聊有<sub>二</sub>示事<sub>一</sub>云々、

五日、<sub>庚</sub>雨降、物忌也、依<sub>二</sub>夢告<sub>一</sub>、請<sub>二</sub>法性寺座主<sub>一</sub>、今夕可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>宿也、此日、余及女房不<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>節供<sub>一</sub>、着服之身有<sub>レ</sub>憚之故也、但先例重服憚<sub>レ</sub>之、輕服不<sub>レ</sub>憚云々、然而如<sub>レ</sub>此事、偏依<sub>二</sub>歎之淺深<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>忌之差別<sub>一</sub>、隨所<sub>レ</sub>着之服、非<sub>二</sub>常輕服<sub>一</sub>、其色頗濃、又悲歎之腸、超<sub>二</sub>百千之重喪<sub>一</sub>、仍止<sub>レ</sub>之、信光申<sub>二</sub>昨日能保所<sub>一</sub>示之事、

六日、<sub>辛</sub>天陰、物忌也、勸性法橋來、法印相共讀<sub>二</sub>法文<sub>一</sub>事、以<sub>二</sub>信光<sub>一</sub>仰<sub>二</sub>能保返事<sub>一</sub>、法印、今夕被<sub>レ</sub>歸了、衆徒事、重成<sub>二</sub>長者宣<sub>一</sub>遺<sub>レ</sub>之、僧綱會議、太奇恠之故也、

七日、<sub>壬</sub>宗賴朝臣來、申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、又定經同申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、

範慶維摩講事、聞食了之由有<sub>レ</sub>仰、東太寺增運死去、之替、與福寺也、覺此三

會講師可<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>之由同召仰、又申<sub>二</sub>神泉功事<sub>一</sub>、親經來申<sub>二</sub>役夫工之間事<sub>一</sub>、條々巨細也、余又有<sub>二</sub>申旨<sub>一</sub>、

九日、<sub>甲</sub>物忌也、此日、今比寂小五月有<sub>二</sub>競馬<sub>一</sub>、恒例也、余隨身兩人入<sub>二</sub>乘尻<sub>一</sub>之、友俊勝、賴久行、次厚澄持云云、

十一日、<sub>丙</sub>傳聞、前攝政、并其母堂無煩<sub>二</sub>痘瘡<sub>一</sub>云々、此日、定長朝臣召<sub>二</sub>具大外記賴業<sub>一</sub>、參上、以<sub>レ</sub>人仰<sub>二</sub>維摩

講師、其名於一紙、是例也、或又、只以<sub>レ</sub>詞仰<sub>レ</sub>之、以<sub>二</sub>氏辨<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>外記<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>先例式<sub>一</sub>、又以<sub>二</sub>氏家司<sub>一</sub>仰<sub>レ</sub>之、其後、召<sub>二</sub>定長<sub>一</sub>、前<sub>二</sub>仰<sub>一</sub>雜事、大衆事、僧正有<sub>二</sub>被<sub>一</sub>示旨、重或遣<sub>二</sub>長者宣<sub>一</sub>了、十二日、<sub>丁</sub>自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>、院有<sub>二</sub>恒例供花<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>白川押小路<sub>一</sub>殿有<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>、

十三日、<sub>戊</sub>南堂、此夜於<sub>二</sub>普成佛院門<sub>一</sub>、遊<sub>二</sub>遊年方<sub>一</sub>、正方、

十四日、<sub>己</sub>雨下、出<sub>二</sub>河原<sub>一</sub>、除服、女房同<sub>レ</sub>之、先余出<sub>二</sub>河

原、川入葉車、但布衣前近四人、陪膳資泰朝臣、若<sub>二</sub>東帶<sub>一</sub>、陰陽師相共先向<sub>二</sub>川原<sub>一</sub>、解除切<sub>二</sub>麻帶<sub>一</sub>、流<sub>二</sub>河

如<sub>レ</sub>例、又余服<sub>二</sub>直衣指貫<sub>一</sub>、鼠色、去替所<sub>レ</sub>着、事訖歸<sub>レ</sub>家、其

後、女房又出<sub>二</sub>川原<sub>一</sub>、前近同前、但隨身之中、陪膳、陰陽師同

人也、女房<sub>二</sub>鈍色衣一重<sub>一</sub>、其外鼠色服單衣一領、相

加給<sub>レ</sub>之也、同去替所<sub>レ</sub>着、之練衣也、先是、姬君、二位中將等、於<sub>二</sub>家

中便宜所<sub>一</sub>、除服、刑部卿宗雅爲<sub>二</sub>陪膳<sub>一</sub>、陰陽師同人也、

去夜、大藏大輔安陪泰茂卒去云々、稽古者也、道之陵

夷可<sub>レ</sub>歎可<sub>レ</sub>惜、爲<sub>二</sub>大衆使<sub>一</sub>與福寺所司二人後範、來、

申<sub>二</sub>惡職治罰大衆止<sub>一</sub>發向<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、又義嚴若<sub>二</sub>秋<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>大衆

被<sub>レ</sub>拂<sub>二</sub>御寺<sub>一</sub>事、能保朝臣爵申之間事、衆徒申<sub>二</sub>條々子

細<sub>一</sub>、兩條共仰<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>了、

十五日、<sub>庚</sub>天晴、召<sub>二</sub>定經<sub>一</sub>、廣房等、宇仁遷宮間條々事

等、今日被<sub>レ</sub>勘下日時也、上欄右大將、辨定長、又自<sub>二</sub>關東<sub>一</sub>、召<sub>二</sub>



進知家所從、此事、去年被備京中役行之時、件知家下人以圖其功、檢非違使擬取之、而知家遣使事取、以外還歸東所召進也。仍仰爲仰遣大理卿、召道檢非違使明基了、稱病、仍召遣道憲經康了、入夜親經來、今日被行軒廊御卜了云々、胞瘡御卜也、今日、物忌也、

十六日、亥天晴、宗隆來、申昨日御卜事、依物忌、書寫宿紙見之、官寮共申理運之上、誦祇崇之由、各差申其方角、又公家可慎給、御祭卅五日之内、六七月節中丙丁日云々、余仰云、奉幣事、早可申沙汰、上卿可申上薦辨、定長當仁歟、來廿一日可宜之由仰了、廿一日、廿四日、撰申之又方角神社六社、其外加之由、六社十二社可宜之由仰了、各可奏事由云、實教朝臣來云、吉八九日、陪膳闕如、雅行、長經等朝臣云々、依院宣被尋問、無被陳之方云々、早奏事由、可有其沙汰之由仰了、又此次、殿上人仕事、可申沙汰之由、同仰了、子刻、中將兼良爲拜賀來云々、雖物忌、依乙日開門、中將於中門、付家司和泉守長房申事由、再拜即退出了云々、余就寢之後也、共諸大夫依不足、催遣職事良清也、又內裏申次事仰宗隆、去春任中將、其後、內府事出來了、仍拜賀延引歟、

自今夜、姬御前新使座主全玄修普賢延命供、晚頭、經康參上、知家所奪取之犯人、自二位卿許、所被召進也、可給使廳者、早可被請取云々、

十七日、壬天晴、午刻許、大夫史廣房來、申宇佐宮之間事、余奉室、件堂爲喪家所、仍歸南宅聞之、一昨日、所被勘之日時來、又清祓之間事、可撰文之由、一昨日召仰、付其趣所遣大宮司公通許之御教書案所持來也、加一見返給、少將定經來申一條事、最勝講々師闕如、重可被催之輩召仰了、又堂童子多辭退、合點下給了、又宇佐宮之間條々事、可奏聞之由仰了、清祓事、紛失神寶事、遷宮神寶事、公通改成功、可爲所課之由事、依關東有申旨也又定經云、先日所奏聞之記錄所寄人懈怠事、院宣云、此事實不便事也、殊可尋沙汰、於不可用輩者、可被放歟、且可計奏者、申云、如散狀者、業實、宗業、殊不仕也、可被放歟、然者、被召怠狀宜歟、如何、隨御定者、又仰云、來廿日、寄人等、皆悉召集記錄所、可仰條々、注一紙賜之、不參評定事、過還勘文事、勘文遇々事、勘文不與理事、勘文之間不引本

已上五ヶ條也、

又關東搦進犯人之間事、可奏聞之由仰之、此日、檢非違使經康來、示大理返報云、自關東所召進之犯人、如家早召行、可加勘勾、被召進之條、尤神妙、即經康可請取之由仰了、

十八日、癸丑天晴、向堂、其間、定長朝臣來兩家云々、是申奉幣之間事云々、又宗隆來申條々事、是又多神事也、仍余歸宅之後聞之、余無言轉經、一時之間、不聞定長申狀、只推量天奏事由、可催諸國之由仰了、入夜、定經來、余仰條々事、宇佐宮事、并寂勝講事也、能保朝臣訴申南都衆徒張本事、僧正請文到來、可奏聞之由、付定長了、光長付之也

十九日、甲寅朝間天陰、午後雲晴、恒例舍利講、於此亭行之、其後向堂、又勤一時轉經了、入夜二位大納言來、於堂謁之、醍醐宗嚴阿闍梨來、申本寺訴之間事、八條院御祈願所之間、有誼譁事云々、尤不便、

廿日、乙卯雨下、定經來申宇佐宮、并寂勝講之間事、院宣云、宇佐事、如注申可計沙汰者、余仰云、北辰殿、并香爐宮事、可被問兩府者、寂勝講事、講師聽衆催滿了云々、余仰云、寂勝講定明日由、先日仰了、而

相當奉幣可有憚、明後日又後齋也、然而、問例之處太多、仍明後日可有定、可存旨者、宗賴朝臣申云、明日始有御出仕者、於御直廬可有吉書哉如何者、仰云、雖先例不覺悟、思事理尤可有、早可觸官藏人方者、官基親藏人又宗賴朝臣傳八條女院仰云、醍醐座主證憲與壽海阿闍梨、有相論事、彼寺末寺兩所、大智院、通智院共爲女院御祈願所事及誼譁、若有聞及事者、可存知云々者、雖子細多不追記又基親朝臣來、申役夫工之間事、兼雅卿依備中國事亂事云云、實是小人也可彈指々々々、及晚、宗隆申明日奉幣之間事、大略沙汰了、又申大仁王會事、此日、內府月忌也、余依神事不向堂、女房行向、

廿一日、丙辰陰晴不定、晝間暴雨下、此日、齋御祈、十二社奉幣也、伊勢、松尾、稻荷、春日、日吉、祇園、(已上六社、御卜外、依要須加之、)石清水、賀茂、平野、大原野、貴布禰、北野、(已上六)上卿右大將實房卿、辨權右中辨定長朝臣、奉行職事宗隆等也、依率爾被仰、當日有定之由、早旦、大內記長守持來宣命草、見了返給、仰清書內覽免之由、又日時定文等、免內覽之由、昨日仰宗隆畢、是雖不當、遼遠之間、依可懈怠也、比日、依日次宜殆出仕、先日、因在宣朝臣、殊無勘文也戌刻、着直衣也、吉服

參院、前延七八人許、衣冠也、以定能卿入見參、依召

綱代車、殿上人兩三人也、

參御前、頃之、退出參內、參御前、女房等見參、有不

耐悲哀之色、余又不禁落淚、依無便、以袖抑

之、小時退宿廬、官藏人方申吉書、官右中辨基親朝臣、藏人方左衛門佐定

經、明日早旦可有寂勝講定之由、仰定經、

元儀今日欲行件定、余依無日來不出仕、仍不能定中、先例、攝錄有故不出仕之時、追

期日有如此之、而依伊勢幣、當日延引、明日後齋、依

不審問例之處太多、仍明日可有定之由、豫仰定

經也、件人奉頭中將實教朝臣可仰執筆云々、余今

日宿仕、且依吉日、且又明日又參入、有事煩、仍便

所宿候也、出仕之間、觸類催悲歎、更非所耐、愁

生趨朝庭、實不異禽獸、可悲々々、今日、余神事

也、然而、故殿伊勢幣當日參給白川院、仍今日參院

也、押小路殿、雖爲金剛勝院、御所淨地、爲各別之所、先々來齋人不懷者也、

廿二日、丁天晴、已刻、實教朝臣參入、即於直廬定

寂勝講僧名、其儀如例也、以去年定文爲例文也、

定經不參不當也、即參御前、小時退出、歸九條亭、午

刻、能保朝臣來、余召簾前談雜事、其中有衆徒事

等、依善教事、召張本、事不可然之趣仰之、能保伏

理、只以令歸住、善教可爲寂、於召張本之條上

者、不可然云々、返々爲悅、余偏依思御寺御社事

等、不願萬事、仰含子細者也、此事、日來再三雖仰聞、敢不承引、申院度々被

仰下、實無治術事也、而今日仰又南都衆徒使來、申同事、

披手細、固又承諸、爲悅不少、所詮衆徒、只可隨長者御命、更不可存異案云

云、大略悔前非歟、凡近日、衆徒沙汰、難治第一也、

仰子細了、申刻、醍醐寺僧綱、有職、所司等、數十人

來、依神事在門外、以職事兼時申訴訟次第、大

智院、遍智院等事也、與壽海相論事也、條々仰子

細了、同時定經爲院御使、持來件問文書、仰云、可

下記錄所者、返下同人了、件文書之中、有本寺解狀、無壽海中文、召兩方解狀、

可下之由仰了、又寺家解狀之中雖輪命、不可用之由較之、改又

直件狀、可被下記錄所歟之由、同仰了、但兩方可奏由仰之、又

申他事等、宗隆來申神宮解狀、惟異等事、并大仁王會之間

事、又昨日奉幣、無違亂事等、

廿三日、戊雨降、向堂聽聞、公雅講、誦六品、仁和寺宮以祐賢法

橋、被示僧事之間事、有不審事等、今日、余讀妙

經、書率都波、又念佛供花、及申刻歸宅、基親朝臣

申條々事、役夫工之間事也、又宗隆申大仁王會之間

事、入夜、廣房來、余仰條々事等、大仁王會延否之間

事仰之、六月晦日、盡被行哉、用途非幾云々、仍其

旨可觸宗隆之由仰事了、八條院以宗賴朝臣、被



仰大智院遍智院等事、即所副證文等、披見之處、實女院仰至極之道理也、勝賢所行、可謂不當歟、

昨日、大衆之間事示僧正、返事今日到來、

廿四日、已終日甚雨、此日、寂勝講初日也、白晝出仕、

憚思之上、聊有所勞、不參內、右大臣已下參入云々、

未刻許、定長朝臣申去廿一日奉幣之間事、并東大寺

之間事、先以人申仰子細之後、召簾前仰雜事、又

棟範來申條々事、入夜、右少辨親經持大仁王會日

時定文、并賑給定文等、仁王會六月晦日、上卿右大臣、見了返給、戌刻、

參八條院、烏帽直衣、心裏服也、謁女房退出、明日以後、連々不

能參入、仍今日參入也、龍居之後、始參也、

廿五日、庚申天晴、物忌也、宗隆來門外、申條々事、此

日、法印被來、

廿六日、辛酉雨下、二位中將參寂勝講、除輕服之後、

今日、始所出仕也、公事之日、內府相共必參仕、今

關其人、悲淚難禁者歟、入夜歸來、賴實公已下公

卿六人、自內參院、入見參、退出云々、今日、棟範來

門外、申條々事、

廿七日、壬戌雨下、僧正送使、被示南圓堂御佛御衣木

玉葉卷五十四 文治四年五月

廿八日、癸亥天晴、此日、寂勝講結願也、辰刻、着直衣

參內、入自油小路西門、左衛門方、依時也、參御前、細索末參、仍下直

廬休息、南直處、其路無便宜、仍假川本直處也、未刻、定經持來僧事注文、

每事奇、此間、人々漸參集、仍參御所方、未斜、事始、藤

中納言爲上卿、仰鐘云々、朝座終頭隆忠參入、夕座

事、此人奉行云々、夕座了行香、隆忠已下公卿八人、

其後賜祿、隆忠取證義者、事了後、有僧事、上卿通

親卿云々、公事之日、內府必爲上卿、見今日之儀、其

禮不變、其人已欠、觸事之傷、經世々不可忘、朝

座講師貞敏、問者顯尊、夕座講師覺親、問者公圓、此

日、棟範、定實經等、於內裏申條々事、晚頭退出、

猶用右衛門陣、依憚稱人、也、中將相伴、

廿九日、甲子天晴、頭辨兼忠來、申尊勝寺、寂勝寺辦事、

本基親奉行也、依神事改定、仰可仰親經之由、

了、今日、向堂、女房、三位修小善、以亡者之遺髮、

縫阿彌陀之種字、公雅敬白、法性寺座主持來大率都

波一本、明日可立內府之墓所云々、仰二位中將、

令書其銘、件率都波之中、日來所奉供養之阿彌

陀五佛、并種字真言等、奉籠之云々、法印相具、明旦

五百十五

等來、仰返事了、能保思返子細也、

## 六月

一日、丑晴、未刻、右中辨基親來申、役夫工間條々事、持來庄々御點、大略不依證文、任意有免否、尤不便、仍重可驚奏之由仰了、造宮司非法、能々可尋沙汰之由仰了、一倍之外、實取雜事用使九人外、相次宗隆來、

相訓數十(三)人、事等也、

申大仁王會之間事、檢校權大納言辭退、奏事由、可催新大納言由仰了、明日、可奏咒願云々、此間、

神祇官人卜部兼基參上、申云、神祇官西院有穢物、小兒、已卅日穢也、御體御卜、月次神今食、皆以不可

叶、今日爲御卜參官之間、官人等觸穢之故也、此事宗隆所傳申也、仍且奏由、且可尋例之由、便仰

宗隆了、申刻、棟範參上、申齋宮寮納米之間事、國司與本寮相論事也、予仰云、雜掌與寮司、於官底可

遂對決、兼又沙汰之間、寮納米不可闕如之由、奏事由、可仰國司者、余又仰云、先日、所進記錄

所勘狀三通之中、主殿寮訴事、奏事由、任勘狀可宣下、新三味堂事、可進具事等、吉祥院領事勘狀之

趣、似不盡理、仰寄人等、可辨申子細者、棟範

又申、字佐累代神寶之間事、可仰遺源二位卿許事、仰云、奏事由、可仰帥卿者、此事自去年秋有此沙汰、而奉行職事等面々遲怠、希異事也、相次定經來、申條々事、源二位卿所召進之犯人前右衛門尉知家即從申詞、并檢非違使職景申狀等、大理注進之、此事、去年冬比、夜行番闕者、檢非違使職景所召籠犯人、知家遣郎徒奪取了、依使廳之擲、仰遣關東之處、二位卿驚恐所召進也、

二日、丙雨降、時々日景見、定長朝臣來、申東大寺鎮守八幡宮御體問事、大外記師尙勘文、和榮、廣房未勘申、待具兩

人勘文、可被問人々之由仰了、御體有無、并其體文簿不詳云々、大略、可被用如在之儀事歟、又申

東大寺柱引之間事、余又仰條々事、今度、僧事殊驚耳目、率爾有沙汰之間、每度如此、自今以後、兼日

可尋聞食子細之事歟、此旨、當時奏聞甚有恐、有如此之次之時、可洩披露之由、仰含了、右少

辨親經內覽仁王會請奏、見了返給、此次、記錄所之間、仰條々事、外記內覽內文、仁王會官符也、見了返

給、上卿經房卿云々、今日即有政云々、晚頭、宗隆來、申云、神今食事、奏聞之處、任先例、可計沙汰之由、

有<sub>二</sub>院宣<sub>一</sub>者、予此次、御靈會之時、行<sub>二</sub>幸大內<sub>一</sub>之間事、可<sub>二</sub>奉行<sub>一</sub>之由仰<sub>レ</sub>之、入<sub>レ</sub>夜進<sub>二</sub>外記勘申<sub>一</sub>、月次神今食七月被<sub>レ</sub>行之例、仰云、延引之由、早可<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>者、今日、自<sub>二</sub>八條院<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>宗賴朝臣<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>齋海訴事<sub>一</sub>、通知予存旨具申了、是依<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>忠也、

三日、卯晴、及<sub>レ</sub>晚天陰、入<sub>レ</sub>夜微雨降、靜嚴僧都來、呼<sub>レ</sub>前談<sub>二</sub>法文<sub>一</sub>、此間、定經來云、二位卿所<sub>二</sub>召進<sub>一</sub>、前右衛門尉知家郎從事、經<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>之處、重可<sub>レ</sub>問之由被<sub>レ</sub>仰云、如<sub>二</sub>大理申狀者<sub>一</sub>、此上不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>復問<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>決者、不可<sub>二</sub>承申<sub>一</sub>之故也、於<sub>二</sub>奪取條顯然<sub>一</sub>、科斷之條、只可<sub>二</sub>奉<sub>一</sub>聖斷者、予仰云、以此趣<sub>二</sub>重可<sub>一</sub>奏聞者、此次仰云、月次神今食延引了、宗隆宣下了、本官付宗隆中間、仰仰宗隆也、然而此後事、爲<sub>二</sub>本分配<sub>一</sub>、早可<sub>二</sub>申沙汰<sub>一</sub>者、申<sub>二</sub>奉了<sub>一</sub>之由、四日、辰晴、棟範來申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、記錄所勘狀之中、主殿寮訴事、任<sub>二</sub>勘狀<sub>一</sub>可<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>之由、有<sub>二</sub>院宣<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>早可<sub>一</sub>宣下之由、新三味堂事、持<sub>二</sub>來法家勘文<sub>一</sub>、披見之處、無<sub>二</sub>指詮<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>勘狀<sub>一</sub>、定親頗得<sub>レ</sub>理歟、而春覺賜<sub>二</sub>院廳御下文<sub>一</sub>云々、可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>御定<sub>一</sub>之旨、可<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>之由仰<sub>レ</sub>之、菅家領事、返<sub>二</sub>下記錄所<sub>一</sub>云々、又宇佐宮北辰殿御體、香爐宮等事、可<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>兩府<sub>一</sub>之旨仰<sub>レ</sub>之、先日、定經來之、而稱恐々未問不足、官事

也、又申<sub>二</sub>齋宮寮條々事<sub>一</sub>、射殺狐事、并寮納米事等也、予細甚多、不<sub>レ</sub>追具記、依<sub>二</sub>今朝之召<sub>一</sub>、定經來、知家郎從事、重可<sub>レ</sub>問之由、有<sub>二</sub>院宣<sub>一</sub>、若是可<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>官人連署問注記<sub>一</sub>之由思食歟、盜船雖爲小事、沙汰已及大事、而以折紙言上、頗輕々之故也、但度々及復問之條、還似無一定歟、殊無可被問之事者、強不可及問注歟、兩條可<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>御定<sub>一</sub>之由、可<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>之旨仰<sub>レ</sub>之、今朝、明基來、件犯人之間事、大理有<sub>二</sub>申旨<sub>一</sub>、又仰<sub>二</sub>子細了<sub>一</sub>、官人等中、恐<sub>二</sub>鎌倉之威<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>吐<sub>一</sub>嬌飾之詞<sub>一</sub>之輩等云々、可<sub>二</sub>憚指<sub>一</sub>々々、宗隆申云、以消息自<sub>二</sub>今朝<sub>一</sub>煩<sub>二</sub>瘧病<sub>一</sub>、奉行事等、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>者、仰云、瘧病者、以<sub>二</sub>兩度<sub>一</sub>知<sub>レ</sub>之、見<sub>二</sub>明後日之體<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>一定者<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜、定經注<sub>二</sub>進院宣之趣<sub>一</sub>、此上、無<sub>二</sub>御不審<sub>一</sub>、不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>問注<sub>一</sub>、別當可<sub>二</sub>計行<sub>一</sub>云々、又關東被<sub>レ</sub>感仰<sub>二</sub>之旨<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>御教書<sub>一</sub>、五日、已陰晴不定、午刻、法印被<sub>レ</sub>來、只今向<sub>二</sub>宇治<sub>一</sub>、暫可<sub>二</sub>經廻<sub>一</sub>云々、大理以<sub>二</sub>明基<sub>一</sub>申云、知家郎從事、院宣云、罪科事、使應可<sub>二</sub>計行<sub>一</sub>者、若<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>檢<sub>二</sub>罪名<sub>一</sub>歟、答云、者已卑賤也、隨<sub>二</sub>院宣<sub>一</sub>無<sub>二</sub>其旨<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>計行<sub>一</sub>歟者、此日、彌勒講於<sub>二</sub>堂行<sub>一</sub>之、入<sub>レ</sub>夜、別當隆房卿來、余依<sub>二</sub>風疾<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>謁、以<sub>二</sub>人<sub>一</sub>傳<sub>二</sub>示條々事<sub>一</sub>、前右衛門尉知家



郎從事、今日、以明基雖令申、事爲大事之故、猶所參啓也、罪名之條如何、又罪科之趣、可相存云云、余云、於罪名者、不可被勘歟、其故、造意已在知家、是即郎從也、加之、卑賤者也、只可被計行歟、不可及禁獄流罪歟、大理云、令候獄政所如何、余云、尤可然、但可被奏聞也、又云、京中郡盜事條、雖被宣下、全不施行、爲之如何、余云、注子細、早可被奏聞也、雖子細多、此日、頭中將來、示召範殿上人兩人、推行朝臣、長經朝臣、依陪被免除之、由、此夜、本命泰山府君祭、使前漏刻博士憲成修之、

泰茂通去聲也

六日、庚午陰晴不定、朝間雨降、今日、二位中將參內、及晚歸來、此日、定經來、申大仁王會咒願草奏問事、仰朝日可奏之由、又中云、又棟範申齋宮寮米條々事等、今日、有、小僧事、三人云々、又持來宣旨目錄等、又右少辨親經來、申記錄所寄人、被加勘發之間事、先日、不參之輩等也、又大外記賴業、入夜、大夫史隆職來、此日、奉宣參上、問方違之間事、今年之內、猶可違南正方、遊年方也七日、辛未陰晴不定、基親朝臣來、申役夫工之間事、庄免否、御點散々、尤不便、更不依證文、只任法有

免否、必有後亂歟、先日關東所申之條々、今日仰遣返事、知家郎從事在此中、一昨日給光長、而今日遣使者云々、今日、範玄雅緣兩法印來、余不謁、以人仰大衆之間事、候時

此日、大仁王會、檢校權中納言實宗卿奏咒願草、文章博士業實朝臣草、十五行終者、定例也、權大納言實家卿稱故不參、仍被點中納言檢校云々、

八日、壬申甚雨、申刻以後晴、申刻、棟範來申條々事、大理申使廳問事也、仰子細了、宗賴朝臣又申條々事、兵衛尉時貞申搦取強盜之間事、

九日、癸酉陰晴不定、時々雨降、右中辨基親朝臣來、申役夫工之間事、條々巨細不能具記、及晚向堂、入夜歸來、

十日、甲戌天氣如昨、棟範來申條々事、輕服之間、宇佐奉行可有憚之由、親範入道、兼光卿等所申也、何樣可存哉者、余仰云、不知先例、先達示其旨者、可交替文書於定經歟、又申云、齋宮事、奉行同可憚歟、余云不可似神社事歟、但猶可問人々、又申云、爲避御靈會路、行幸於他所之時、賢所同渡御哉否、問例之處、舊例雖有行幸、賢所留御、近例每

度所<sub>二</sub>渡御<sub>一</sub>也云々、可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>近例<sub>一</sub>之由仰<sub>レ</sub>之、棟範申云、高倉院御時、實所翌日還御無<sub>レ</sub>例之由、有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、如何云々、余云、全不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其故<sub>一</sub>、如何云々、

十一日、<sub>亥</sub>天晴、棟範來、申<sub>二</sub>行幸事、并馬長散狀等、字縣歸路之次、法印被<sub>レ</sub>來、又觀性法橋<sub>レ</sub>來、如法經間

事條々有<sub>二</sub>談議<sub>一</sub>、此日、依<sub>二</sub>神今食延引<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>大祓事<sub>一</sub>、

十二日、<sub>丙</sub>晴、棟範來、申<sub>二</sub>明後日行幸、公卿散狀、并內侍所渡御間事、大夫史廣房來、仰<sub>二</sub>記錄所勘狀不<sub>レ</sub>致

理事、

十三日、<sub>丑</sub>天晴、基親來、申<sub>二</sub>役夫工間事、<sub>仁和寺中祈願由事、爲定申</sub>、棟範又申<sub>二</sub>云<sub>一</sub>、行幸間事、昨院奏勅報等

也、實所渡御事、只可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>下官之計<sub>一</sub>、件事前日棟範申云、高倉院御時、內侍所翌日還御之條、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然之由、

有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、仍爲<sub>レ</sub>避<sub>二</sub>御靈會之路<sub>一</sub>、白地臨<sub>二</sub>幸他所<sub>一</sub>之時、或經<sub>二</sub>中一日有<sub>二</sub>還御<sub>一</sub>云々、今度、何樣可<sub>レ</sub>候哉、

予仰云、內侍所被<sub>レ</sub>憚<sub>二</sub>翌日還御<sub>一</sub>之條、全不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>定有<sub>二</sub>由緒<sub>一</sub>歟、早可<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>先達<sub>一</sub>、又可<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>外記者<sub>一</sub>、後日、棟範

又申云、問<sub>二</sub>兼光卿之處<sub>一</sub>、申云、高倉院御時、雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>此沙汰<sub>一</sub>、詳不<sub>レ</sub>覺悟、但神輒不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>動之故歟云々、又

賴業勘申云、寬治嘉保之比、憚<sub>二</sub>御靈會<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>避<sub>二</sub>皇

居、內侍所猶留御、保延之比、又同、而高倉院御時、更有<sub>二</sub>議<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>人々之處<sub>一</sub>、實所同可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>避<sub>二</sub>御靈會<sub>一</sub>、翌日之還御、更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>憚<sub>二</sub>之旨<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>計申<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、仍每度、內侍所々々隨<sub>二</sub>幸路<sub>一</sub>給<sub>レ</sub>也、實所翌日還御、被<sub>レ</sub>憚<sub>二</sub>之條<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>者、各尋問之處、申旨如此、何樣可<sub>レ</sub>候哉、予仰云、中古例、實所雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>渡御、先朝御時有<sub>二</sub>議<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>避<sub>二</sub>御靈會<sub>一</sub>、是則宸儀臨幸者、爲<sub>レ</sub>避<sub>二</sub>狼藉<sub>一</sub>也、實所獨爭令<sub>二</sub>殘留<sub>一</sub>給<sub>レ</sub>哉、仍相共被<sub>レ</sub>避<sub>二</sub>皇居<sub>一</sub>、敬神之至也、今更難<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>變<sub>二</sub>其議<sub>一</sub>者歟、至于翌日還御被<sub>レ</sub>相憚<sub>二</sub>之條<sub>一</sub>者、自<sub>レ</sub>本如<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰、一切不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>由緒<sub>一</sub>、加之、長承之比、朝從<sub>二</sub>臨幸<sub>一</sub>、夕同還御、依<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>例<sub>一</sub>、去年又如<sub>二</sub>此<sub>一</sub>、況翌日還御哉、連々動座之憚者、無<sub>二</sub>指故<sub>一</sub>時之事也、被<sub>レ</sub>避<sub>二</sub>御靈會<sub>一</sub>、是被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>重<sub>二</sub>實所<sub>一</sub>之儀也、旁不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>之由、所<sub>二</sub>恐案<sub>一</sub>也、但事是公事也、私難<sub>二</sub>進止<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>是等子細<sub>一</sub>、早經<sub>二</sub>院奏<sub>一</sub>者、棟範昨奏<sub>二</sub>此由<sub>一</sub>之處、只可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>下官之策<sub>一</sub>之由、有<sub>二</sub>勅定<sub>一</sub>者也、仍予今夕、從<sub>二</sub>幸路<sub>一</sub>、明夕同可<sub>レ</sub>還御<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>仰下了、棟範又申云、五位藏人、近衛次將、必可<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>奉<sub>一</sub>內侍所、而於<sub>二</sub>次將<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>固辭、責出了、五位藏人定經、宗隆、共釋<sub>レ</sub>病、<sub>定經病、宗隆病、昨</sub>自<sub>レ</sub>院雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>譴責、敢不<sub>二</sub>引身<sub>一</sub>、棟範爲<sub>二</sub>輕服日數之

中、間例於外記之處、服假之人、供奉之例、所見不

詳、輕服之人奉行神事之例、粗有之、但五位故障之

時、六位供奉、其例不可勝計、天永以來、數度所勘

申也者、即副達賴予仰云、神社行幸觸穢服假之人供

奉、其例多存、又神事奉行、何不淮哉、但正供奉神

事之例已不詳、至于六位供奉者、指而勘其例、

最足據用者、今夜、六位供奉云々、二位中將爲供

奉、酉刻參內、深更歸來云、右大將依不參、中將仰御

綱云々、此外無殊事歟、予依所勞所不參也、

十四日、戊時、此夕、自大內還幸開院、二位中將依

所勞不參入、今日、棟範注申昨日行幸供奉人等、日

來、光長令申事等、今日仰子細了、兼時依所勞不

見文書、所仰大概也、祇園御靈會如例云々、

十五日、卯時、天晴、此日、祇園臨時祭也、仍立神馬十列、

但依風病不快、自川原立也、行事職事兼時、棟範來、陰陽師廣元

申行幸之間事、人々散狀也、

十六日、辰時、雨下、此日、法皇渡御花山院大納言五條

亭、即可爲御所云々、營々莫大歟、女房裝束牛馬鴨

等多儲之云々、

不遑具錄、

十八日、壬午、朝暮雨降、晝間暫休、此日、奉始南圓堂

不空絹索觀音、并四天王、六祖師等像、於軍勝金剛

院始之、辰刻、行事家司和泉守長房、陰陽師圖書頭

賀茂朝臣在宣、雖輕服日數內、除服以後也、神事猶有例、仍不憚也、等參上、勘申日

時、以人傳覽、留文返給宮、今月今日壬午、時辰、即長房先參

向軍勝金剛院、爲催具雜事也、大略、相具畢之由

申之、仍余着直衣冠、吉服、二位中將同着冠直衣、同車、詣余車加修理之間、用中將車也、

彼院、前驅衣冠七八人許、隨身布衣、不引移馬、暫

休息堂靈禪邊、佛師康慶未參、當時、御衣木材木等、

削作之間也、日來不致沙汰、當時周章、甚以懈怠也、

及午刻、東寺長者權僧正法務俊證參上、香染法服相具、綱所等

暫候西廊邊、先是、佛師參上、御衣木等、皆悉削

了、率置佛前、其儀、豫正面間也、東底并其南間、敷

差筵數枚、其上置御衣木、木標在東、余仰可在南之山、而佛師仰申云、奉昇立之時、

可爲北面、有其忌、仍以東中尊二支置中央、四天各二支

置南北、其北頭立花机、備香花、只立花一口、燒香許也、左方

立脇机、置瀝水塗香等、右方立磬臺、中央敷半帖、

也、東底副北簾、敷高麗端帖一枚、爲余座、西底寄

北、敷盤一枚、二位中將依余命居之、衣木皆悉置



了、余出座召長房、問時於在宣朝臣、余欲出之時、奉參此也、歸來、申云、吉時午刻已至候者、所載勅文、辰刻也、仍載之、而每事通引之、仰正并佛師等可召之由、自然移、刻及此時也、次權僧正俊證着淨衣、經原業清賜之云々、余所召仰也、次權僧正俊證着淨衣、經南東簀子、直着半帖、從僧相從置香爐、三衣、草坐等、綱次佛師各着淨衣、參候東簀子、大佛師康慶一人、若法正命、重候、僧次僧正校入齋戒於大佛師、次加持御衣木持也、但與佛不可同居、仍於清廊、可始之、加畢、僧正猶滿神咒、候半帖、次大佛師染筆、大佛師等候之、奉圖中尊四天等了、次取斧奉始之、大佛師等始中刻也、奉始中尊了、更始四其後、僧正退下、佛師同退下、余仰可奉昇立中尊之由、而康慶申云、情案思給之處、於小像者、奉倚立堂事也、如此大御衣木、於事有差、又必非可奉倚立事、可隨御定云々、余案之、承久春日御塔御佛被造之時、被寄立高欄、思彼例雖仰之、木大而有事煩、隨又佛師申下非必然之事由、加之、彼永久例、頗有不可追用事等、于細故不記、仍不奉昇立、余進御衣木者、奉念之、中將同之、其後歸九條、此間、長房留候於南廊、奉始六祖師云々、今日、余門內乘手與、寄堂後

戶也、近日、風病相侵、神心不快、然而今日爲最上吉日、仍忘身命、遂此事、神心無爲、又此兩三日、雨脚無間、而今日、余在堂之間、及歸宅之時、不雨、云彼云是、感應先顯、爲悅不少者也、佛等暨奉安堂中、以南廊可爲佛所、東南兩面、可差庇之由、仰長房了、自今夕、余居物付渡邪氣、十九日、癸未天晴、每月舍利講如例、基親朝臣來、申役夫工諸國濟例之間事、奏事由、且可問人々之由仰之、三日祭之中、又棟範來、申神宮上卿之間事、法皇御所、今日、有御遊酒宴等云々、入道相國、并右大臣等、候此座、右大臣、今日始應召云々、右府同亂舞云々、天下之希異在斯歟、廿日、甲天晴、依月忌向堂、及夜漏歸來、此日、奉送春日本地御正體、四所若宮、并五條、於僧正許、爲遂供養也、有思、如法清淨所奉造營也、廿一日、乙天晴、入夜雨降、基親來申役夫工之間事、又條々仰了、棟範又申仁王會之間事、依爲本奉行、可仰宗隆之由仰了、宗能卿來、談世上事等、觀性法橋來、今日、實教朝臣來、申所乘瀧口等初參輩事、又申、神宮上卿、可仰右大臣旨、有勅定之由、申

之、即仰可仰彼大臣之由了、

廿二日、丙戌陰晴不定、棟範來申仁王會事、宗隆申奉

行之由云々、又太神宮禰宜位記、可付月次祭使

事、仰遺宗隆許之處、申不知之由云々、此事去年

公事分配之時、可爲宗隆奉行之由被仰了、而忘却

不申沙汰云々、仍重被仰之時、又不知之由、可謂

不足言、基親朝臣書進平等院庄々役夫工免除證

文、又申他事等、神社佛寺、院宮諸司等領於今者、雖

無免除證文、一切不可被免之由、御定切了云々、

各可下知由仰了、及晚、宗隆來、所勞之後始出仕、申條々

事、余又仰了、神宮禰宜同仰了

廿三日、丁亥天晴、宗隆來、申條々事、自僧正許、被奉

送春日本地供養之間、信心殊發起之由、被示送、爲

悅不少、向堂、入夜歸來、

廿四日、戊子陰晴不定、宗隆來申條々事、宗賴又申條

條事、

廿五日、己丑陰晴不定、法皇自今日、令參籠日吉社

給云々、

廿六日、庚寅觀性法橋來、昨日自山下京云々、

廿七日、辛卯宗隆來申神宮上卿、并役夫工上卿等事、右

大臣辭神宮上卿、堀川大納言辭遷宮上卿、各實教朝

臣奉行也、而宗隆出仕之間、可申沙汰之由、與奪云

云、還御之時、可奏聞之由仰之、未刻、向堂、定經

來申條々事、日來依病籠居、今日始所出仕也、

廿九日、癸巳右少辨親經來、申仁王會之間、諸國一切

無所濟之由、猶奏事由可催、又可尋成功之由

仰之、覺乘來、語南都事、今日、自南都所司等來、

僧綱使也、拂善教之張本一事也、即仰遺能保許了、

返事之體勿論云々、

卅日、甲午天晴、此日、一代一度大仁王會也、檢按權大納

言實家卿、權中納言實宗卿、參議基家卿、親宗卿、行事

辨權右中辨定長朝臣、但院御共候日吉、右少辨親經等也、奉行職

事宗隆、御殿佛具、兼不致沙汰之間、及夜漏、靜賢

來談雜事、今日、向堂、女房修小佛事、內府所持之

笏、非異代之物、手自彫刻率都波、書五輪種子、慈四法印書之、又同手圖寫

大日如來尊像、又以拍子二枚、歌曲習練之間、常所用也、同書率都

波、手自書陀羅尼真言等、以公雅已講爲導師、尊

忠法印、并二位中將等來、同聽聞、說法優美也、佛事

了、入夜歸宅、六月祓如例、余、女房、姬君等居同

所、輕殿南而也、陪膳光輔朝臣、就簾前進贖物、女房取之

居<sub>レ</sub>前、陰陽師大舍人頭業俊朝臣、祓<sub>レ</sub>了撫<sub>二</sub>大麻<sub>一</sub>、其後進<sub>二</sub>管貫之輪<sub>一</sub>、<sub>具</sub>各其事<sub>二</sub>了返給<sub>一</sub>了、今夜、於<sub>二</sub>普成佛院邊<sub>一</sub>、遠<sub>二</sub>遊年方<sub>一</sub>、<sub>具</sub>正<sub>二</sub>方也<sub>一</sub>、一度也、傳聞、法皇可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>六條殿<sub>一</sub>云々、衆徒之使來、明日可<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>向南都<sub>一</sub>云々、仰<sub>二</sub>能保之所<sub>一</sub>示也、先日、仰<sub>二</sub>遣關東<sub>一</sub>返事、今日到來、余世間事欲<sub>レ</sub>遁之間事也、一切不可<sub>レ</sub>然云々、

## 七月

一日、<sub>未</sub>天晴、權右中辨定長朝臣爲<sub>二</sub>院御使<sub>一</sub>來、東大寺鎮守八幡別宮御體之間事也、持<sub>二</sub>來大外記賴業、大史廣房等勘文、并寺家注文等、被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>人々<sub>一</sub>條々、一御體有無事、

官外記勘文、御體無<sub>二</sub>所見<sub>一</sub>、寺家注文、有<sub>二</sub>御體<sub>一</sub>、<sub>一宮、阿尺像、二宮、菩薩一尺餘像、三宮、唐女形、寸法一同二宮云々、</sub>

左大臣、右大臣、右大將、堀川中納言等、被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>不可<sub>一</sub>有<sub>二</sub>御體<sub>一</sub>之由、已一同也、

一可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>授<sub>二</sub>神位<sub>一</sub>哉否事、

賴業勘文、申<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>授之由<sub>一</sub>、

左大臣已下、申<sub>二</sub>不可<sub>一</sub>然之由、但左大臣申云、社司一階、并可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>獻<sub>二</sub>封戸<sub>一</sub>云々、

## 一御座事、

寺家注申、委細又被<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>遣字佐官例<sub>一</sub>了云々、人々且任<sub>二</sub>注文<sub>一</sub>、且任<sub>二</sub>字佐例<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>計<sub>二</sub>行之<sub>一</sub>、

一御座已下何所可<sub>レ</sub>調進<sub>二</sub>哉事<sub>一</sub>、

此條、左大臣被<sub>レ</sub>申出、未<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>人々<sub>一</sub>云々、余申云、御體事、無<sub>二</sub>不審者<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>議之處、菩薩已不<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>其像<sub>一</sub>、加<sub>レ</sub>之、八幡外寶殿、敦實親王造立之像、燒失<sub>レ</sub>之後、依<sub>二</sub>人々議奏<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>造立、今又同前歟、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>如在之儀<sub>一</sub>、何事之有哉、但委見<sub>二</sub>勘文等<sub>一</sub>、追可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>、神位事、已天平勝寶被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>授<sub>二</sub>一品<sub>一</sub>了、其上可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>何位<sub>一</sub>哉、此條不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>歟、社司加級、并封戸事、任<sub>二</sub>左大臣申狀<sub>一</sub>、尤可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、御座事、如<sub>二</sub>人々申狀<sub>一</sub>、可有沙汰、同調進所事、寺家已造<sub>二</sub>營社<sub>一</sub>、同可<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>具鋪設<sub>一</sub>歟、<sub>〔者〕</sub>、定長又仰云、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>造六條殿<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>進西對<sub>一</sub>者、申云、承候了、更不可<sub>レ</sub>煩申、但合期之勤不可<sub>レ</sub>叶、聊可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>延引<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、抑、今度御作事、專不可<sub>レ</sub>然之由、條々申<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>了、雖恐<sub>二</sub>違<sub>一</sub>叙慮、偏存<sub>二</sub>忠之故也<sub>一</sub>、親經、宗隆等、申<sub>二</sub>昨日仁王會之間事<sub>一</sub>、宗賴申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、別當隆房來、示<sub>二</sub>群盜之間事<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜、定長朝臣爲<sub>二</sub>御使<sub>一</sub>又來云、御所伊與國所課事、



改對屋、可<sub>レ</sub>宛<sub>二</sub>南面築垣一町<sub>一</sub>門二字之內、機門一字、築垣(之)下門一字、之

由有<sub>レ</sub>仰、又京御所不<sub>レ</sub>候、尤不便、賜<sub>二</sub>大炊御門殿<sub>一</sub>可<sub>二</sub>

居住<sub>二</sub>云々、兩條申<sub>二</sub>恐畏思給之由<sub>一</sub>、就<sub>レ</sub>中、大炊殿事、

太無<sub>レ</sub>便之由申了、御作事、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>猶豫<sub>一</sub>之由事、爲<sub>二</sub>稱

人<sub>一</sub>之間、不<sub>二</sub>申奉<sub>一</sub>、追可<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>便宜<sub>一</sub>云々、

二日、丙天晴、此日、故鳥羽法皇御國忌也、仍去夜、八

條院御<sub>二</sub>幸鳥羽<sub>一</sub>、今日、法皇同幸云々、棟範持<sub>二</sub>來免物

勘文<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、是今日恒例事也、又基親朝臣來申<sub>二</sub>條々

事<sub>一</sub>、

三日、丁天晴、今日御<sub>二</sub>幸法勝寺<sub>一</sub>云々、未刻、大夫史廣

房持<sub>二</sub>字佐大宮司公通請文<sub>一</sub>先日遣營之間事、又副<sub>二</sub>別奏

狀、仰<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>職事<sub>一</sub>之由了、又申<sub>二</sub>六位上官不<sub>二</sub>出仕<sub>一</sub>

之問事、仰<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>職事<sub>一</sub>可<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>之由仰了、

四日、戊天晴、入<sub>レ</sub>夜、基親來、申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、役夫工之間

事也、又定經問<sub>二</sub>申條々事<sub>一</sub>、宇佐宮造營之間事、大宮司

申狀<sub>二</sub>一通、子細注<sub>二</sub>別紙<sub>一</sub>賜了、

五日、己天晴、彌勒講於<sub>レ</sub>堂修<sub>レ</sub>之、宗賴朝臣來云、八幡

別當成清、御綱神人訴之間事、條々有<sub>二</sub>申旨<sub>一</sub>云々、余

云、凡恩力所<sub>レ</sub>及、去年窮<sub>二</sub>沙汰之淵源<sub>一</sub>了、而能保朝臣

拘而不<sub>二</sub>承引<sub>一</sub>、院宣又不<sub>レ</sub>詳、其上全非<sub>二</sub>微力之所<sub>一</sub>及、

早直可<sub>レ</sub>觸<sub>二</sub>仰關東<sub>一</sub>者、此日有<sub>レ</sub>御<sub>二</sub>幸于法勝寺<sub>一</sub>云々、

又季經朝臣來、語<sub>二</sub>院中亂舞濫吹等事<sub>一</sub>、宗隆來<sub>二</sub>門外<sub>一</sub>、

申云、昨今共有<sub>二</sub>犬死穢<sub>一</sub>、仍太神宮禰宜等位記事、不

能<sub>二</sub>奉行<sub>一</sub>者、仰<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>行定經<sub>一</sub>之由了、入<sub>レ</sub>夜、宗隆

云、定經返<sub>二</sub>文書<sub>一</sub>了、爲<sub>レ</sub>之如何、仍直仰<sub>二</sub>遣定經許<sub>一</sub>、

加勅發有<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>奉行<sub>一</sub>之報<sub>一</sub>、

六日、庚天晴、女房向<sub>レ</sub>堂、棟範來申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、御體御

卜、來十一日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行之由、外記所<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>(也)<sub>一</sub>、神今食、

月次祭等、十二日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行、陰陽師勅申十日也其故、御體御

卜、多在<sub>二</sub>神今食之前<sub>一</sub>之故也、神今食不<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>、御體御

卜許被<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>之時ハ、神今食以後被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御卜奏<sub>一</sub>例

也、於<sub>二</sub>其延引之時<sub>一</sub>者、猶被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>先御卜奏<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、御卜

奏、并月次神今食等日時、明日、明後日之間、可<sub>レ</sub>被

<sub>レ</sub>(定)、於<sub>二</sub>御卜<sub>一</sub>者、明日可<sub>レ</sub>行、三ケ日以後、有<sub>レ</sub>奏定

例也、仍十一日可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御奏<sub>一</sub>也、定經來、恐<sub>二</sub>申禰宜位

記奉行之間事<sub>一</sub>、全不<sub>二</sub>辭申<sub>一</sub>、宗隆觸遣之使者、於<sub>二</sub>門外<sub>一</sub>

申<sub>二</sub>小犬斃之由<sub>一</sub>、仍存<sub>二</sub>虛穢之由<sub>一</sub>、返<sub>二</sub>文書<sub>一</sub>了云々、所

<sub>レ</sub>申無<sub>レ</sub>理、又申<sub>二</sub>他事等<sub>一</sub>、

宗隆又申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、此有<sub>二</sub>東野庄事<sub>一</sub>、左金吾被<sub>レ</sub>爵事也、

七日、辛及<sub>二</sub>晚暴雨<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜止、乞巧奠如<sub>レ</sub>例、又有<sub>二</sub>兩方

節供、陪膳資秦朝臣、兼兩方家司、故也、役供皆束帶、余不就之、今日又有御〔幸〕於法勝寺、右大將已下公卿濟々云々、

八日、壬天陰、微雨下、基親朝臣申、役夫工之間事、親經持來月次神今食、御體御下等日時、昨日被勅、爲內也、餘許此儀也又申、仁王會用途、諸國不進濟、口飼

關如、并神今食神服、供神物等、年來不供、尤不便之由、兩條早可奏聞之由仰之、仰于賴棟範又申、條

條事、左大辨親定持來大宰府解、宇佐宮申、年限已

至廿一年、任例假殿日時、可被勅下之由也、余依

疾不謁、以人傳進之、即賜棟範、而思出服假之

由、召返之、至恐之甚也、仰遣定經明日可參由了、

又宗賴朝臣申、條々事、今曉、內府室家密向嵯峨、今

夜、依方違可宿雲林院邊、明日可歸云々、於嵯

峨墓所修小善云々、

九日、癸雨降、萬民之悅也、今年惣爲第一之豐年云

云、申刻、定經來申、太神宮禰宜等位記之間事、先年

祭主注進、其後無沙汰、經數年了、去年有沙汰、欲

遣之處、依宗隆忘却、無沙汰、仍今年其沙汰出來、

而禰宜交名注進之後、經年序了、定有死亡服假等

之輩歟、仍早々可尋遣能隆朝臣許之由、先日去月事也、

仰定隆、而未尋遣之由、今月定經令申、驚奇不

少、仍可尋申宗隆之由仰了、但於今者、明後日可

被付月次祭使之位記也、更不及問祭主、只暗

可被下遣歟、將延引可被付九月例幣歟、且又

有准據例哉否之由、可問官外記旨仰了、近代職

事、每事如此、實是爲上難堪事歟、昨日、左大辨持

來之符、副付定經了、棟範又申、條々事、其中有

智遍智兩院事、先日以壽海陳狀、被問本寺々々陳

狀所進也、早可奏之由仰之、又持來殺生禁斷宜

旨案、見了返給、寺邊二里可斷之由、見度々官符、而

不見、仍問之、申云、不可必然歟云々、余云、非

勅定者、難改先規歟、早可奏聞、凡寺邊之條、未

代頗可有議、大略大地無其驗、皆是佛閣也、仍難

差寺邊二里歟、然而、代々官符所載也、可奏事

由者、

十日、辰天晴、未刻雨降、自今朝有犬死穢、仍職事

撤神事簡立穢簡了、定經來申云、神宮禰宜等位記

事、宗隆不問祭主之間、神官等之存沒難知、又以

故者、奏狀難被宣下之由、官外記所申也、如何云

云、余仰云、於今者、其力不及、早以此等子細、經奏聞、可被付九月例幣便者、基親朝臣參上、申云、今日雖參院、每事不能奏聞云々、又親經來云、神今食神服神饌等事、雖奏聞、只有聞食驚之仰、無可加苛責之勅、然者、事已爲闕云々、召雜掌可仰子細之由仰了、又宗隆來申云、季御讀經、祈年穀等之間事、廿四日可被始季御讀經、廿二日、若八月一日之間、可被行奉幣之由仰了、件日々不載、可同之由仰了、所據申一日、宣憲之勅文、仍日件日等、仍仰此由也、光長卿氏院之間、申條々事、昨日仰道請文也、

十一日、乙雨下、入夜甚雨、此日、御體御卜奏也、內覽事免了、宗隆來云、八幡神人訴申宗長松井、罪河事奏院、仰云、先可被行罪科之由、思食如何、神社訴、先例雖必不被尋究理非、前任申請被斷罪歟、且可計申者、申云、御定可然、此訴已及三々年、今年、若抑留放生會者、神慮尤可有恐、就中、於此訴者、宗長殺神人之條、更不諍申、只獨強盜之間、事出不慮、仍不誤之由所申也、然者、被行罪科之條、全不可爲非據、早令無科斷之條、世之所奇也、早以此等子細、可被仰能

保朝臣歟者、資元來申云、去月廿四日、白虹見、貫心大星、是希代之變異云々、余仰云、於大事變者、不待三々日、以詞先奏當道之故實也、而及廿日、不奏如何、資元無披陳之方、

十二日、丙雨降、右中辨基親朝臣來云、昨日被勘字佐宮假殿事始、并棟上等日時了云々、依穢中、不進日時勘文、只以詞所申也、又宗隆來云、八幡神人訴申宗長罪科事、以先日余申狀奏聞、仰云、可仰能保朝臣者、即以御教書持來、仰遣之處、請文如斯、猶拘宗長之趣也、今日參院、欲奏聞之處、聊依御風氣、不能申達之由、定長朝臣所申也云々、余仰云、明日、猶可奏聞、此事若無沙汰、今年放生會、違例決定歟、此旨可奏之由、仰含了、終夜甚雨、

十三日、丁天晴、棟範來申條々事、別當仰申、檢非違使經廣場強盜之間事、仰可奏之由了、又持來殺生禁斷宣旨、加載寺邊二里事也、法皇御不豫、猶不快御云々、仍以使者兵部權大輔能等、奉問安否、河水盈溢、然而凌洪水所令進也、御惱自若云々、近日頓病不嫌老少尊卑云々、兼雅、定能等卿以下、御共祗候之輩十餘、同時病惱、各退出云々、公卿御覽、踐祚以後、



未<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行、而今日又日次不<sub>レ</sub>宜、仍無<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>云々、

十四日、戌天晴、向<sub>レ</sub>堂、晚頭歸來、拜<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>例、着<sub>二</sub>冠直衣<sub>一</sub>、心裏於<sub>二</sub>中門廊<sub>一</sub>拜<sub>レ</sub>之、不取<sub>レ</sub>笏、持<sub>二</sub>衣冠<sub>一</sub>、職事兩人

取<sub>二</sub>出之<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>長櫃蓋<sub>一</sub>、各取<sub>二</sub>山、三具<sub>一</sub>、故殿、故女院、皆拜<sub>レ</sub>之、

各奉<sub>二</sub>送之<sub>一</sub>、宗隆來申<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、宗長罪科欲<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>之

處、依<sub>二</sub>洪水<sub>一</sub>、昨日不<sub>二</sub>參入<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>能保請文<sub>一</sub>、遣<sub>二</sub>定長許<sub>一</sub>

之處、件朝臣依<sub>二</sub>頓病<sub>一</sub>退出、蓋隆又日來病惱籠居、無

人于傳奏、但明日還御之後、重可<sub>二</sub>參奏<sub>一</sub>云々、法成

寺自恣事、宗賴朝臣瘡病、仍仰<sub>二</sub>長房<sub>一</sub>了、

十五日、己天晴、向<sub>レ</sub>堂、及<sub>レ</sub>晚歸來、終日念誦、例講於

堂行<sub>レ</sub>之、

十六日、庚午上、天晴、申刻以後天陰、微雨灑、親經來、

申<sub>二</sub>季御講經間事<sub>一</sub>、定經申<sub>二</sub>宇佐宮之間事<sub>一</sub>、先日被<sub>レ</sub>問

人々各申狀等持來也、又役夫工上卿事、實家卿申云、

身無<sub>二</sub>故障<sub>一</sub>、但今暫不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>云々、仍重可<sub>二</sub>仰

遣<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>仰<sub>レ</sub>之、今明物忌也、人々申狀留置、明日可

見之、

廿二日、丙天晴、此日、被<sub>レ</sub>勘<sub>二</sub>宇佐宮若宮遷假殿之日

時、上卿兼光卿、又被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>軒廊御卜<sub>一</sub>、上卿同人、天

御讀經定、春日未<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行也上卿忠親卿、依<sub>二</sub>參議不參<sub>一</sub>、行事辨

親經書<sub>二</sub>定文<sub>一</sub>云々、件親經、至于明日<sub>二</sub>犬死穢<sub>一</sub>、仍今

日定欲<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>之處、上卿參入、仍<sub>二</sub>籠穢人參內之例<sub>一</sub>、親

經書<sub>レ</sub>之、穢限不<sub>レ</sub>幾之故也、余仰<sub>二</sub>合上卿<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行之

由、仰<sub>二</sub>行事職事宗隆<sub>一</sub>了、仍行<sub>レ</sub>之云々、入<sub>レ</sub>夜、親經

持<sub>二</sub>來御讀經定文<sub>一</sub>、又申<sub>二</sub>僧綱不參之由<sub>一</sub>、又定經申<sub>二</sub>宇

佐宮條々事、仰<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>了、又棟範申<sub>二</sub>御祈之間事<sub>一</sub>、

病患御卜同持來

御祈之間子細等仰了、

廿七日、辛酉、此日、御論義也、

一番、貞慶、豐口、

二番、千慶、仁快、

三番、榮雲、景惠、

四番、遍昌、玄圓、

五番、圓賢、公尹、

八月

三日、寅此日、於<sub>レ</sub>堂始<sub>二</sub>如法讀誦之行<sub>一</sub>、慈德寺法印已

下、僧<sub>二</sub>正<sub>一</sub>五口、又女房等同候<sub>レ</sub>之、又經奏列<sub>二</sub>僧末<sub>一</sub>、兼

親爲<sub>二</sub>行事<sub>一</sub>、同雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>此內<sub>一</sub>、聊有<sub>二</sub>所勞<sub>一</sub>、臨<sub>レ</sub>期不

入、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>強行<sub>一</sub>也、

四日、丁此日、北野祭并釋奠也、余早旦、相伴女房姬君等、余乘中將綱代車、在後、前近二人、女房姬君用余綱代車、在君等、前、近八人、地下君達、祓人五位等相交、皆布衣也、出車三兩在、余後、殿、渡大炊御門亭、伴家元左大臣領也、而法皇上人車也、召之、其替賜中御門東洞院、故成親卿家、仍當時爲法皇御所、其後、多被造加舍屋云々、而余依內府事、不能歸渡冷泉、適住九條小屋、法皇痛此事、所借彼御所也、誠是過分之思也、去月中旬之比、以定長朝臣、被仰此由、須即移住也、而連々爲惡日、今日之外、更無宜日、強雖不可撰吉曜、今度有所思、避禁忌等者也、依無日次、懈怠之由、豫奏法皇了、又去々年渡冷泉之時、女房同車也、又引移馬、今日且爲改其儀、且爲省威儀、所用藝儀也、寅刻出九條、五條高倉邊天始略、上下消松明、白晝出行、太見苦、今日可立北野神馬十列、九條亭不能行其儀、仍不待夜漏、催曉更之駕車、依爲院御所、於門外下車、女房車寄寢殿南面、職事長俊爲御所行事、豫祗候日、一昨日、三ヶ日以法成寺僧僧三口、修仁王會講、又昨日仰觀性法橋、就密教、聊以祈請修小鎮也、是皆依或人之密語、件家、頗有冤緣之怨、殊所行也、縱雖無怖畏、久其主不云々、但無指證、歟、

居之所、兼修內外之祈者是例也、於或人之密談者、努力々々、不口外、法皇依莫大之恩、給此家、而付咎加難、太有恐之故也、入門見屋家體太狹少、廢殿母屋一丈二尺、底九尺、甚凡卑也、法皇被作加敷屋之、間、於事得便宜、又鋪設皆在之、居住之間、更無煩者也、申刻、立神馬、先以小浴、使左近將監平時綱陪膳云々、乘尻與廐舍人、聊有諠譁事、仍仰廐司、殊令禁固、舍人無重科、仍不賜檢非違使也、六日、已此日、本命日泰山府君祭也、年來泰茂修之、而去夏卒去、其代圖書頭在宣朝臣勤仕之、今日、依日次不宜、次日始修之、十四日、丁女房、自今日始如法經前方便、仍早旦向九條、余竊相具、入夜歸來、十五日、戊此日、法皇令始如法經前方便給、於白川押小路御所有此事、此日、放生會也、立神馬十列、如例、使親資、祓人、陪膳、、陰陽師、、、十六日、已此夜、駒牽也、上卿定能卿、參議親宗卿、深更引分、使少將成家朝臣、持來馬一疋、職事着衣冠相逢、給祿褂如例、廿日、癸自今晚、院如法經御加行、六時憫法被始行云々、入夜、參內白川殿、仍於道場東庇簾中、

聽聞、先日可聽聞之由、依有仰也、自今日、余始如法經前方便。

廿三日、丙戌此夜、又參院、聽聞如法經懺法、如先日、丹三品以少將親能朝臣、有示旨等、小時退出、

卅日、癸巳此日、如法五種行、三七日已滿、備三十種供養之日也、導師澄憲法印也、寫經雖不用草筆石墨、自余行、皆如法清淨也、仍堂中、非上人之輩不得入、豫觸導師、己巳令加行也、法性寺座主來、被聽聞、又寫經交筆、件人、日來不退如法經精進、仍令書也、如法經之習、雖無施物、此經已有供養、仍導師一重一裘、請僧又一裘也、但不加行之人、不能入堂中、仍無置布施之儀、賜各僮僕、此外、余并女房已下祇候之男女、非疎遠之輩、十許輩、各調三十種供養持物、每物二種、請師供養也於三十種者、給導師、今

〔十〕種分給題名僧等也、堂南緣立棚二脚、取件供具、〔又〕堂中佛左右、立又棚二脚、傳供之、參入之輩、撰精進人、令立、季經朝臣已下、十八許輩傳供之次第、法用如例、說法優美、仍自簾中、押出單重、導師肩之退下、如法五種行目六、

受持、自本備也、之イ、

轉言、百六十一部、

暗誦、或一品一句、或一偈〔半偈〕、或人々塔舌、或想、或只聲、

解脫、

書寫一部、開經、阿彌陀經、般若心經、

此夜、又余參院、又聽聞懺法、法皇仰云、今夜、雖不當巡勤調聲如何、依令參也、奏世承之由、即被始中夜一時、初夜、余參以前、被行了云々法務座主參入、事了、余付親能朝臣、今夜次第、殊恐畏申之、由奏之、有種種仰等、即參內宿仕、今日、當七日、仍不能歸家、所參內也、女房等猶留九條、今四ヶ日可延修云々、仍堂場猶如法清淨也、但於僧徒者、日數已滿了、仍雖不修五種行、日來、每日懺法猶着淨衣、可讀之由仰定了、

### 九月

一日、甲午余今年有所思、不出河原、遣職事一人、修之、由被入夜、自內裏退出大炊御門亭、三日、丙戌中公家御燈御被如例、兼忠朝臣申沙汰云々、五日、戊戌彌勒講、於九條堂行之、自今日、神齋殊密、是例事也、



十日、癸今日、余闕進寫經具、并御裝束等、以定長一

爲、使有御威、此事雖不可必然、如法經之間、於

事有甘言等、且爲謝其惡、且依思結緣也、今日、依思

國物思不出仕、臨晚、內配持來

十一日、甲此日例幣也、上卿右大將、辨親雅、依幣物

不具、及晚發遣之、此日、院如法經筆立云々、法性

寺座主俄被召入書手、依早筆也云々、觀性法橋又

同前、

十二日、乙晴、院如法經十種供養云々、右大將以下、公

卿濟々、余依神事不參、粗檢例未檢得之、仍不

參也、

十三日、丙今日、院相具如法經、參給橫川如法堂、入

夜還御云々、

十四日、丁晴、已刻參內、依御物忌不參御前、於

二間、調女房、此間、棟範來申一條々事、其中有賴

朝卿請文、先日遣與州一官使、持參奏衡請文、并兩府

申狀之返狀也、左右只可在勅定云々、此狀、經房

卿所遣也、且奏聞了、然而、可付奉行人之由、有

之間事、沙汰闕了、法皇八條院、同明曉御下向云々、又

法印奉具御經、同可被下向、路之間、可同船之

由被示、於御經者、如法丑刻可下京、仍於船津

可待之由被示、仍每事夜中所催具也、

十五日、戊自夜雨小降、但不及事妨、此日爲如法

經十種供養結緣、下向天王寺、此事不可必然、身

爲攝政、萬機之繁務、於一日不可空、然而檢先

例、攝政遠所物詣、當寺他寺、其例已多、加之、此如法

經事、始自殖紙扇、終至寫經、無不口入、加之、

願主聖人撰願意趣、余深知之、余及此法印、以兩

人、爲此願之擅越、人不知之、只任冥衆之知見、仍

強忌世間機嫌、所催結緣之志也、仍先日、粗奏法

皇、已有天許、其後、世人多以傾之難之、仍重又奏

之、猶可下向之由有仰、不願人々謗難、只仰佛

之知見者也、寅刻、出九條、于時僕從僅兩三人

也、皆悉欲待調者、更不可叶之故也、余着烏帽直

衣、乘中將綱代車、余綱代車兼遣渡部、須用人車也、而前

駟、殿上人、諸大夫、相并十人許、隨身兩三人、不引

移馬、於高島邊、天始曙、鳥羽南樓邊、并草津邊、依

船〔皆〕在之、尋御經船之處、未〔刻〕到來云々、然而、於此所不可待、仍乘船指波向島方、爲避院御路也、暫相待之處、先女院御下向、其後經一時、院御〔乘〕船、其後經二時、御經船到來、於草津奉乘船云々、法印被相具、即余出船御經、〔已〕奉之移乘他船之間、法印暫不被來、於天河邊、法印被來、此船、同船浮河上、〔達〕思去年八月、衷心難忍、依御瀧下向之時、云船云路一塵無改、只所欠者內府一人也已、觸物之悲〔歎〕雖經切雖隔生、爭休爭堪哉〔申終、觀性法橋相具樂人參來、御經迎、行日、靜清加陀調、聽之者、莫不淚拭渡〕晚頭、付渡部、即乘車、法印下船、於此邊堂、御經相具、追可着天王寺邊堂、〔于時、阿彌陀堂也〕云々、即着西門外北念佛所、〔去年宿所也〕即以季長朝臣、申參入之由於院、小時、以成經爲御使、今夜、〔年〕策無便宜歟、明日可見參者、申畏承之由、此夜、兼光卿來、凡上下結緣之衆、不知何千萬、寺邊之人家盡數、雖然、猶人多家少、空宿道路之者多云々〔也〕、人々善心、以之可知、可貴々々、〔但是假名虛假之善心、多者是人まねのくまのまうて歟云々、且又經王之功用、上人之信

力、自然已動搖國土者也、可仰之、

此夜、於西門、余竊唱念佛、〔今日〕依當十五日也、日次不宜之故、不參堂也、

十六日、〔西晴〕此日、於四天王寺、有法經十種供養事、法皇動隨喜之觀念、動萬念之禱、八條女院、依結緣御志、調十種供養、洛中之細素貴賤、殆殘人少々云云、余又閱萬機之政務、結一乘之善緣者也、昨日、天陰雨降、午後、〔雖雨脚止、雲漢猶掩、風氣有疑、而自夜天快心合力、追覺守善之所、晴、終日雨脚不降、誠是、上宮太子四大天王、同當先於要門內、覽來龜井水、如例〕此後事不注記、

## 十月

一日、〔亥晴〕此日平座如例云々、及晚大外記賴業來、賜維摩會參氏人交名、〔儘可催之由仰之〕今日平座、通親經房兩卿參行之、參議不參、以上卿兩人例行之云々、入夜參內、即歸住大炊殿、女房同行向也、〔甲時雨間濕、入夜、定長來、依召也、光長棟範相轉之間事、可取御氣色之由仰之、此次談雜事、〕三日、〔乙陰晴不定〕法成寺執行泰覺來、仰御堂修理之間事、

四日、丙陰晴不定、小雨、靜賢來、又雅賴入道來、余謂之、及晚、定長朝臣來、仰三院宣云、光長棟範等相轉事聞食了、何事之有哉、早可有恩許也云々、又云、任大臣、忽不可被行、秋除目、御熊野詣來十六日御精進、同廿日御進、以前可被行也云々、此次、密語云、朝方卿任大納言之間事、并前攝政大臣所望之間事等、下官案如何之由、有御尋云々、定長共申、不甘心之由云云、尤有恐事歟、基親朝臣申、役夫工之間事、定長入夜示送云、除目奉行雖候、職事只可計仰云々、可奏事由、申可仰頭辨之由了、仰付也、

五日、丁晴、早旦、兼忠朝臣來、依三作日召也、又陰陽頭宣憲朝臣、同依召參來、問除目日次了、十二四兩日共吉云々、兩日之間、可用何哉之由、以兼忠奏院、即歸來云、十二日除目、十四日下名可宣云々、又外記廳可被修造之由、當時有其沙汰、仍冬節有御方違行幸、其所、押小路殿可宣之由、宣憲令申、同以兼忠取御氣色、但件外記廳造作、冬至以前、冬至以後、乾方不可塞也、難及出木歟、成功者召付哉否、問本奉行職事定經、且所奏也、仰云、若可有、白川御所早可有臨幸也云々、已刻、大外記賴業來、同依召也、

以兼忠仰除目事、賴業授論語於二位中將、定經來問、仰外記廳修理事、又仰行幸可奉行之由、申承了之由、外記廳成功未付云々、仍行幸無所據歟、但若又有他要事、哉否事、可被問陰陽師也、仍明日、宣憲、在宣等、可參之由、可仰旨仰定經了、大夫史廣房參上、仰官奏事、來十日荒奏、十六位和奏、臣參之由仰之、

六日、戊晴、入夜、院宣到來、定長奉書、遣光長許也、維摩會他寺探題事、有人愁云々、能樣可有計沙汰歟云々、此事有子細等、仍以使者國遣定長許、申子細了、定經來申、成功者忽難叶之由、普所申也、行幸事如何、明旦召具宣憲在宣等、可參之由仰之、七日、己晴、早旦、定經召具宣憲參向、公家御方違大略不可候云々、去夜今朝之間、國行兩度參院、謁定長、乍恐所申子細也、猶然而一切不聞食入、及逆鱗云々、勿論々々、仍如本覺憲可勤仕之由、下知了、凡古來未聞事也、可悲々々、

## 十二月

九日、庚朝間天陰、其後雲晴、去夕初雪降、今朝僅稍



地、今年冬天甚和暖、昨日始有<sub>二</sub>寒氣<sub>一</sub>、此日、臨時伊勢奉幣也、上卿權大納言實家卿、辨權右中辨親經、是外宮御戶繼、澁固不被<sub>レ</sub>開事、所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>謝申<sub>一</sub>也、去年大神寶依<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>奉<sub>二</sub>納東寶殿<sub>一</sub>云々、仍及<sub>二</sub>歲末<sub>一</sub>被<sub>二</sub>謝申<sub>一</sub>了、而今年九月例幣之時、猶不<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>開<sub>一</sub>御戶之由、重所<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>也、而上卿、辨官、外記等、皆以懈怠之間、經<sub>二</sub>三ヶ月<sub>一</sub>始奏<sub>二</sub>官外記<sub>一</sub>例、延久永曆之外、此事無<sub>二</sub>所見<sub>一</sub>云々、延久發<sub>二</sub>遣公卿勅使<sub>一</sub>、<sub>其基</sub>永曆臨時有<sub>二</sub>奉幣<sub>一</sub>、但今度、本宮申上云、被<sub>二</sub>下<sub>一</sub>銅細工可<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>修造<sub>一</sub>云々、而大神寶伊勢例幣、公卿勅使之外、無<sub>レ</sub>開<sub>二</sub>御殿戶例<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>披<sub>二</sub>御戶<sub>一</sub>者、又不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>修理鏤<sub>一</sub>之由、祭主能隆朝臣所<sub>レ</sub>申也、頃者、九月例幣之次、被<sub>二</sub>下<sub>一</sub>彼細工也、而本宮不<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>、官外記又不<sub>レ</sub>勘<sub>二</sub>其例<sub>一</sub>、仍所<sub>二</sub>默止<sub>一</sub>也、今依<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>本宮申狀<sub>一</sub>、此沙汰出來、先不<sub>レ</sub>開<sub>二</sub>御戶<sub>一</sub>及<sub>二</sub>兩年<sub>一</sub>、殊有<sub>二</sub>其恐<sub>一</sub>、仍所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>謝申<sub>一</sub>也、今度、勅使下向之次、雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>開<sub>二</sub>御戶<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>造鏤<sub>一</sub>之破損之條、有<sub>レ</sub>憚哉否事、委召<sub>二</sub>問禰宜<sub>一</sub>已下、可<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>言上<sub>一</sub>、兼又可<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>申其例<sub>一</sub>、若有<sub>レ</sub>例者、何去年大神寶、今年例幣等之時、不<sub>レ</sub>申上<sub>一</sub>哉之由、可<sub>レ</sub>尋問<sub>二</sub>旨被<sub>一</sub>仰下<sub>二</sub>了<sub>一</sub>、若不能<sub>二</sub>修造<sub>一</sub>之由言上者、明春爲<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>遣公卿勅使<sub>一</sub>

也、未刻、着<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>參內、先是、上卿參入、奉行職事行事辨等未<sub>レ</sub>參、尤懈怠也、各遣<sub>レ</sub>召了、小時、新五位藏人家實參入、每事可<sub>レ</sub>催行<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>仰之、

此後事<sub>○</sub>事字下<sub>正イ</sub>被<sub>レ</sub>記、  
脫不<sub>レ</sub>歟

廿二日、<sub>未晴</sub>此日、御佛名也、十九日院御渡、廿一日御幸、仍今日所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行也、<sub>廿日、日次</sub>又有<sub>二</sub>不堪荒奏<sub>一</sub>、并

荷前擬侍從定等、又行<sub>二</sub>私荷前<sub>一</sub>、右大臣參陣、先申<sub>二</sub>不堪申文<sub>一</sub>、右中辨親雅候奏、余布袴、<sub>天仁</sub>

私荷前使、<sub>四位光重朝臣、五位賴高</sub>行事國行、余着<sub>二</sub>心喪直衣<sub>一</sub>拜

之、持<sub>レ</sub>笏、依<sub>二</sub>大殿知足院殿御例<sub>一</sub>、着<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>也、先於<sub>二</sub>直應<sub>一</sub>有<sub>二</sub>佛名定<sub>一</sub>、頭中將仰<sub>レ</sub>之、<sub>依<sub>二</sub>式日延<sub>一</sub>、引<sub>二</sub>初日時<sub>一</sub></sub>

廿五日、此日、不堪定施米、并和奏等也、親雅候奏、

玉葉卷第五十四終

## 玉葉

## 卷第五十五

自文治五年正月  
至同年九月

文治五年

正月

一日、<sup>壬辰</sup>陰晴不定、未明拜<sup>三</sup>天地四方<sup>二</sup>如<sup>レ</sup>例、午刻手水、陪膳伊豫守季長朝臣、余吉服直衣、引<sup>三</sup>寄圓座<sup>二</sup>、於<sup>三</sup>奧座上南面<sup>二</sup>着<sup>レ</sup>之也、申刻、大外記賴業持<sup>三</sup>來叙位勘文<sup>二</sup>、宗賴朝臣申<sup>レ</sup>之、余出<sup>三</sup>客亭<sup>二</sup>、<sup>吉直</sup>見<sup>レ</sup>之、今年不出仕、雖<sup>レ</sup>須<sup>三</sup>傳覽<sup>二</sup>、今日非<sup>三</sup>稠人<sup>二</sup>、仍猶爲<sup>三</sup>正禮<sup>二</sup>所<sup>三</sup>出逢<sup>二</sup>也、先<sup>レ</sup>是二位中將參院、前驅六人、共殿上人三人、及<sup>レ</sup>晚齒堅如<sup>レ</sup>例、此日、中御門大納言來、於<sup>三</sup>例上達部座<sup>二</sup>竊謁<sup>レ</sup>之、入<sup>レ</sup>夜兩方節供如<sup>レ</sup>常、二位中將還來云、院拜禮公卿降立之後、右大臣棟始之間參入云々、右大臣棟樣太閑過<sup>レ</sup>法云々、參議已下<sup>レ</sup>後云々、小朝拜、上首同右府云々、節會內辨右大臣、外辨上首右大將兼雅云々、着<sup>三</sup>外辨<sup>二</sup>之後、數刻不<sup>レ</sup>被<sup>下</sup>式宮、內辨就<sup>三</sup>宜陽殿兀子<sup>二</sup>之後被<sup>下</sup>之云々、未聞事也、又云、召<sup>三</sup>參議<sup>二</sup>之詞、左大辨<sup>ハ</sup>用<sup>三</sup>訓詞<sup>二</sup>、實教朝臣をハ聲ニ右近

中將藤原朝臣(ト)被<sup>レ</sup>召云々、實教四位也可<sup>レ</sup>召<sup>レ</sup>名、尤大失也、又不<sup>レ</sup>用<sup>三</sup>訓詞<sup>二</sup>、旁以不審、又云、親宗勸<sup>三</sup>御酒勅使<sup>二</sup>之間、進<sup>三</sup>階間東頭<sup>二</sup>、萬人解<sup>レ</sup>頤云々、又云、外辨別當階間云々、上首之失也、當<sup>三</sup>左仗胡床<sup>二</sup>而立、是故實也、不<sup>レ</sup>知<sup>三</sup>口傳<sup>二</sup>之人、觸<sup>レ</sup>事如此、院拜禮申次定能卿云々、

二日、<sup>癸巳</sup>天陰、終日雨降、已刻手水、陪膳光重朝臣、其次有<sup>三</sup>齒堅事<sup>二</sup>、今日人々不<sup>レ</sup>來、甚雨之故歟、

三日、<sup>甲午</sup>晴、已刻手水、陪膳以政朝臣、齒堅如<sup>レ</sup>例、今日權大納言已下公卿多來、隔<sup>レ</sup>簾謁<sup>三</sup>大納言<sup>二</sup>、上官列參、二位中將參<sup>三</sup>內院<sup>二</sup>、八條院等、棟範宗隆等申<sup>三</sup>吉書<sup>二</sup>、宗賴申<sup>三</sup>政所吉書<sup>二</sup>、此日奉<sup>レ</sup>獻<sup>三</sup>琵琶<sup>二</sup>、<sup>內宮</sup>笙外宮、兩太神宮、去年遣<sup>三</sup>祭主計<sup>二</sup>、今日可<sup>レ</sup>進納<sup>二</sup>之由仰<sup>レ</sup>之、仍自<sup>三</sup>昨日<sup>二</sup>潔齋、今日修<sup>レ</sup>祓、雖<sup>三</sup>三ヶ日內<sup>二</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>憚之由所<sup>レ</sup>存也、陰陽師在宣朝臣也、余着<sup>三</sup>衣冠<sup>二</sup>、祓之後通拜、信心發起尤懇深者歟、

四日、己陰晴不定、頭中將公時申吉書、又申出納事、院宣之趣不能左右、歟、如此事只職事可計申也、上不可知食、歟、入夜參內、直衣、綱代車、隨身布衣、密々出仕也、參院參御前、其後還候公卿座邊、以定長申一條々事、今日不參阿彌堂修正、令參中將也、余參八條院之後退出、

五日、丙終日甚雨、此日、叙位議也、明日公家御衰日、仍今日雖爲余衰日、行之例也、已刻着直衣參內、即內覽申文、定長、家實、他職事遲參、宗親依遲參、家實依爲家司、側仰其旨了、獨申文了、定長依召參院了、〔叙位議之間〕余在簾中、執筆左大辨親宗卿、公卿忠親卿已下十餘人參候、有和泉功過定、與奪忠親卿、見合參議雅長卿、讀帳事大理隆房、執筆源宰相兼忠、文書之中有難云々、仍今夜返下文書、除目可被定之由仰之、然而稱非國司過猶定、親宗卿引成文裏希不似先例、入眼上卿奏通卿、

六日、丁晴、今日始念誦、棟範申御齋會用途、僧名之間事、家實入夜來申明日節會事、

七日、戊陰、小雪、此日、白馬節會也、有加叙事、未刻、定長朝臣爲院御使來、任御定可仰下之由召仰了、余不參內、內辨左大將、外辨上右大將云々、棟範

申御齋會講師關如事、

八日、己雨下、諸寺修正始也、法成寺修正停止咒師散樂、依內府一井內也、此日召頭中將公時朝臣、并陰陽師等、問公家節會御方違之間事、即可奏聞之由仰之、

九日、庚風雪烈、此日、女叙位也、晚頭着直衣參內、先參御前、奉行職事遲參之故也、秉燭向直廬、職事等來、奉行定經也、頭中將頭辨各來申雜事、訖退出、直廬如除目、余於直廬改着束帶出居、去年秋除目、今年叙位等不出座、今日非稠人之上、女叙位簾中之例不許、先是於休所職事等撰申文了、家司權辨親經候其座、他家司等稱除不全、俄儘之故也、而親經爲申還昇座參入、所議定也、撰申文了、余出居也、次以定經召執筆、左大辨參上、執筆作法有不審事等、不遑具錄、先可候公卿座、直參者圓座爲失也、空勘文一切不見、如何々々、又空勘文一切不突點如何、奉行職事每事如泥、余參內之後、更尋披申文、少々書直了、院宮御申文使頭中將也、入眼上卿實宗卿也、其事了、改裝束退出、

十日、辛晴、及晚公時朝臣來仰云、院宣云、御方違行幸不可有云々、子細等不具記、



十一日、壬晴、頭辨定長來傳、院仰云、御齋會次不可有僧事、可存其旨者、又條々有申事等、召前余又仰條々事、棟範來申、貞敏所望事、院仰不分明云云、爲方違向鳥羽、

十二日、癸晴、入夜始修佛眼護摩、姬君祈也、法印來修也、

十三日、甲晴、兵衛尉時定參上、申云、搦取手光七郎了、有九郎還京都之消息等、即持來之、實不可思議事也、

十四日、乙雨降、御齋會竟也、定長朝臣來申條々事、此日無僧事、

十五日、丙晴、棟範來申御齋會之間事、大夫史廣房持來官小草子、又申宇佐大宮司公通申、造宮之間事、

十六日、未陰、微雨下、此日、春除目初日也、已刻着直衣參內、(先內覽申文、執筆左大辨、亥刻議始、子終事了、改着直衣退出)、於直廬先有申文內覽事、兩貫首五位藏人二人、家實不家司遲參仍不覽之、撰申文之間參會、右衛門權佐長房今日、院中有晝咒師、依御所中間、明日可參之由有御定、仍今日不可參院

之由、定長朝臣所申也、秉燭以前撰申文了、人々參入之後、先召仰、定長、上綱按寮朝方卿也次余着布袴、在簾中、召家實、召諸卿、即朝方已下來着座、次辨官四人置宮文、定長、親雅、棟範次召左大辨、即着座、次第如例、任內暨二人之後、召院宮御申文、親雅、持參覽之、此次賜院宮公卿未給名替國辨當年內給等、親宗不拔、笏、即取之復座、其後見院宮御申文了返給之、又押宮參上、取之復座、任四所了、先任當年內給、其後書袖書、召棟範下勸之、其後院宮公卿當年給任了、卷大間封之、又封成柄、加入成殘申文返上、執筆作法、事々不足言、不足記錄、置火櫃衡重如例、但余陪膳親雅朝臣持來欲居之、余命令退歸、依在簾中也、是又例也、次欲居諸卿、而朝方令追歸、若依不居余前、歟、可謂昆龍、勸孟公時朝臣、定長任人之間事注目錄、明(日)可持參院云々、

十七日、戊晴、此日、除目中日也、執筆同人、今日定長朝臣申定任人之事、來直廬(示子細、酉刻着直衣參內、事了改裝衣、又退出)、晚頭着直衣參內、定長爲申定明日任人參院、相待歸參之間、亥刻

事始、執筆左大辨、中御門大納言爲上首、稱所勞、不可仰宮文之由被示、依不當、猶可被仰之由仰之、仍被仰宮文云々、仰宗隆召諸卿也、余在殿中、公卿來着座、置宮文之後、召執筆如恒、即給大間宮、其後儀如例作法無跡方、尤不便也、追出來公卿給等給之、院宮臨時被申外國申文同給之、召辨令下勘之、執筆之所存、兼國以前不可任他者云々、不足言也、持參勘文之間、且可任他者之由仰之、仍懸任之歟、事了封大間成文進之、辨官撤宮文等如去夜、此日有顯官舉、兼忠書定文、宗家爲與奪、

十八日、雪降、入眼也、執筆同人、晚頭參內、向九條已刻定長來、余任去夜仰一定任人注出別紙、以定長奏聞了、晚頭着直衣參內、今夜有可向九條之要、仍人々殊可早參之由、預召仰之、仍公卿上官等、秉燭即參內、而定長遲歸來之間暫遲々、亥一點歸參之後、召諸卿、家實、公卿着座、辨官置宮文、召執筆給大間宮、皆如例、今夜不賜大束申文、爲早速終事、可任之申文等兼撰出、兩度相分テ給之、而執筆猶迷惑、徒經時刻、又任人多無申文、

之間、臨期令書之、仍遲々歟、外記史正闕各一人也、而今夜叙爵其替各又可被任一人、此事先例不審、仍尋外記之處、先例太多、近代諸官大略如此云、仍今夜叙爵之者、替除目任之也、仍轉任勘文相違出來、執筆以辨問外記令行轉任、是又余教訓也、今日忠親實家已下參入、但受領舉以前早出了、受領之舉、賴實泰通兼光許也、事了進大間成文、執筆退下、余召清書上卿給宮、兼光即改着直衣、向九條、于時丑終也、

十九日、庚晴、例講如恒、入夜定長朝臣來、仰下名加任之事等、此堂供僧公衆今日入滅云々、在字仍此堂所作、付寂勝金剛院供僧令續也、未補之間也、

廿日、辛晴、內府月忌也、余猶在堂也、奈良僧正被申大衆張本事、此日下名也、院自今日御參籠日吉社云々、

廿六日、丁巳昨日堅固物忌也、是平等院怪異也、

廿八日、己未自今日日蝕御祈被始、修三字金輪法、仁昭法印修之、御持僧等依辭退也、此日、八幡御幸云々、女房參詣吉田加茂祇園等、

二月

一日、辛晴、此日日蝕也、虧初已刻、加時午刻、復未末刻也、朝間天晴、未刻以後天陰、日來霖雨、今日蝕時天晴、正見之後更又陰、是近代之作法也、此日々蝕殊有余慎云々、

二日、壬戌陰、業俊、廣元、資元、晴光等、持來日蝕奏、廣元資元兩人稱二月之蝕、業俊晴光兩人謂正月蝕、各仰可進勘文之由了、

三日、癸晴、祭主能隆、太神宮司盛家等參上、藏人大輔家實、并大夫史廣房等參會、神宮修理、并齋宮寮米之間事、條々有沙汰、大略沙汰切了、召盛家請文、明白可奏聞之由仰之、又召頭辨定長朝臣、仰大內修造國々、所詮可仰關東事、入夜兼良朝臣爲拜賀來、家司長房申次之、

四日、甲此日、祈年祭也、神齋如例、

七日、丁卯、昨今物忌也、大原野祭、陪膳季長朝臣、陰陽師晴光、又行事爲說等參籠、物忌使十列等不籠候、列門外、神馬籠候、行事取幣、奉幣如例、

十一日、辛未晴、早旦向大炊御門、發遣春日幣、其後參內、入夜歸家、陪膳以政朝臣、使爲說、陰陽師廣基、

舞〔人〕裝束以勾當業家遣使少將宗國朝臣給、

十二日、壬申、春日祭也、神事如例、使少將宗國朝臣、辨右少辨定經、

十三日、癸酉、入夜宿法性寺邊人宅、自九條亭寂勝金剛院堂東方、仍難供養木像佛、今夜以件家爲本所、令宿始者也、

十四日、甲戌晴、此日、故內府周闢法事也、於寂勝金剛院行之、件堂地震以後破壞殊甚、仍加修造所行也、余自夜前渡居、女房今朝來臨、內府女房出車三兩、

地下君達諸大夫等、若布衣前驅、〔法事了〕自今夜女房相共宿堂、已刻率居御佛、佛師給祿、大佛師爲佛師廿人、各布一段、未刻、縹素參入、申刻事始、先奉行家司光綱申事之由、仰鐘之後告公卿、次公卿着座、次衆僧引列參上、庭敷、鐘道、永隆例也、次第如例、說法了行香、其後賜布施、女房有加布施、

參入公卿、  
大納言、宗家、兼雅、兼房、兼光、定能、經房、參議、雅長、隆房、中納言、兼房、兼光、親宗、隆宗、二位中將、瓦經、三位、顯信、光雅、

七僧  
講師 法印澄憲、  
讀師 法印雅緣、



咒願 權大僧都慶智、三禮 權少僧都源實

唄 權律師覺玄、散花 法橋性憲

堂達 已講公雅、

今日事子細可召奉行入記錄、

願文、作者在茂、清書左大辨、堂童子六人、

十六日、丙子此日、密々參<sub>二</sub>嵯峨釋迦堂、供<sub>二</sub>養妙經一

部、又見<sub>二</sub>寶物、即向<sub>二</sub>嵯峨堂、先是女房行向、爲<sub>二</sub>內

府修<sub>二</sub>一善、其事了歸<sub>二</sub>九條、

十九日、己卯此日、懺法結願、其後恒例舍利講、又故殿御

忌日、其後臨時佛事、以<sub>二</sub>證憲法印爲<sub>二</sub>導師、文殊像一

鋪、法華經一部、自筆壽量品一卷、

廿日、庚辰雨降、但法會之間雨止、衆僧列用<sub>二</sub>晴儀也、此

日故內府正日也、(爲<sub>二</sub>內府女房沙汰、兩界)曼陀羅供、

導師法務大僧正公顯、讀衆廿口、有<sub>二</sub>六弟子(僧等)衆

僧列同<sub>二</sub>晴儀、申刻事始、戊刻事了、引<sub>二</sub>布施、事了始

月忌、永代可<sub>レ</sub>行也、於<sub>二</sub>九條堂修也、

參入公卿、

權大納言、兼、權中納言、定能、兼光、二位中將、良、三位、光、願文、作者長守、清書伊經、

廿二日、壬午此夕、內府女房始宿<sub>二</sub>嵯峨、出車二兩、常祇

候男共乘<sub>二</sub>車在<sub>二</sub>共、密儀也、此日、祈年穀奉幣定也、

廿三日、癸未家實申<sub>二</sub>條々、內記持<sub>二</sub>來宣命草、見了返給、

廿四日、甲申今日、小堂修二月也、二位中將行向行之、

女房又密々行向、余依<sub>二</sub>神事不<sub>レ</sub>向、今日、祈年穀奉幣

也、上卿宗家卿、

廿五日、乙酉此日爲<sub>二</sub>方遠一向攝州別業(也)、巳刻(出

京)、酉刻到着、

(廿六日、丙戌卯刻歸洛、午刻到<sub>二</sub>九條亭、)

廿八日、戊子晴、二位中將相伴參內、聊有<sub>二</sub>御不豫事、

廿九日、己丑雨下、自<sub>二</sub>內裏女房告云、頗六借御云々、即

差<sub>二</sub>進定長了、

卅日、庚寅此日、故內府女房於<sub>二</sub>嵯峨堂出家入道、山法

印慈圖爲<sub>二</sub>戒師、依<sub>二</sub>略儀無<sub>二</sub>唄師先例多之故也、自

此夜始<sub>二</sub>小逆修、證憲法印爲<sub>二</sub>開白導師、女房密々行

向云々、今日彼岸初日也、又支干上吉也、仍遂<sub>二</sub>此素

懷、又始修<sub>二</sub>佛事云々、此間事、偏余沙汰也、父大將一

切不<sub>レ</sub>知云々、如何々々、

### 三月

一日、辛卯不出<sub>二</sub>御燈、於<sub>二</sub>河原修<sub>二</sub>由祓如<sub>二</sub>例、此日參

內、御不豫平愈云々、

三日、癸巳平等院一切經會也、宮內少輔盛經爲開封、家司家職事保行信光等爲樂行事、今年有舞、此日歸大炊亭、自今日、於此亭修不動護摩、法印被渡住也、公家御樂之後、未令洛御、仍今日無御祓云々、七日、丁此日、嵯峨逆修結願也、大僧正公顯爲導師云々、以內府假名手跡神力品、訓經置供養之、此外禪尼自筆書樂王品云々、極樂曼陀羅并法華經等如例云々、

八日、辛丑定長朝臣自天王寺歸洛、去夜上洛云々、關東申賴經配流事、可忍申沙汰之故云々、

十一日、辛丑此日被行流人、前刑部卿賴經流伊豆國云々、先例不必然、憚日次之由外記所申也、

十四日、甲辰今日戌刻大地震、亥刻、天文博士廣基持參密奏、此變尤可恐慎云々、

十六日、丙午陰、晚頭小雨、不及濕衣、此日、石清水臨時祭也、寅刻、頭中將公時朝臣來云々、舞人範清、侍從兼保所領狀也、兵衛佐親宗同雖領狀、當時服薙云云、余抑云、服藥人依別御定勤仕、雖有先例、於有他人領狀者、勿論早可被召兼保者、午刻着

束帶、即身堅并故事御禮之相、伴二位中將參內、余前近八

近四人、余左府生忠武賜舞人行、昇自小板敷、欲着殿上、輔仍上藤原身三人也不召候、仍直出上戶參御所、於鬼

之間、御倚子下無疊、仍直出上戶參御所、於鬼間、問事具否於頭中將、申云、使已參入陪從皆候、而

舞人一人未參、公卿兩三人候云々、舞人重可隨資之由仰之、即參御前、召經家朝臣、有御總角事、

先是御浴殿了、此間舞人四五人參入之由、公時申之、仍着御御裝束了、同經家朝臣奉仕之、須先着例御下、然而爲舍煩、若御樓御下重座之由、御路許爲改着御也、且是

先例粗存出御廣庇、自御座間出給、余裏御座、自座後、着御之故也、御廣庇、一件御座南面也、天仁記云、四面云々、然而及和

同里之時、猶南面也、又故殿御記、被注南面之由、是又里內也、據公余奉扶持刷御下重裾、御座東方退候、廣庇次頭辨定長

朝臣獻御笏、次供御贖物、陪膳定長朝臣、役供宗隆、次宮主持參大座、定長取之參進、一吻之後返給、即宮主賜之

着庭中座、次使同着座、其座共南面、使初四面、余仰令南面、共傾向坤也、次牽立御馬、三正、東上南面、次宮主御襖了退下、次撤御贖物、次引

出御馬、此間陪從於西慢外發歌笛聲、次使進寄案下、取合御幣二串、晚指、笏取之如恒、立、坤向、次有御拜、

兩殿再拜次使置幣、笏退下、次定長參上賜御笏、退下、次入御、余裏次敷庭座、二居、衡重、此間頭中將覽宣命、余見了返給、余在鬼此間余出不審、問兩貫

首云、地下諸大夫有勤<sub>レ</sub>仕一舞例哉、定長云、不覺、公時云、近例已流例也、隆親隆信勤<sub>レ</sub>之、面所見也、況舞人之中、無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰一舞之人歟云々、余云、檢舊例、永久四年石清水臨時祭盛家爲第一、重通實衡爲第二三座、而一舞盛家不着座、不立舞云云、件座不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰一舞人、准<sub>レ</sub>彼例者、兼親不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>立舞歟、但若依此例者、社頭又如何、惣以不着座不立舞者、舞人一人闕息歟、仍此例有疑、至于仰一舞者一條者、往代每度事也、中古以來爲選返事、殊有<sub>レ</sub>其人之時事歟、故實是有<sub>レ</sub>大臣子息時事也、先例雖不必然、古傳如此、然者今度無<sub>レ</sub>其人、近例只任位次、惣無<sub>レ</sub>此沙汰歟、然者可<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>近例歟、將可<sub>レ</sub>依永久例歟、公時云、只任<sub>レ</sub>近例可<sub>レ</sub>候歟、人不<sub>レ</sub>存異議歟云々、仍不<sub>レ</sub>仰不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>立舞之由、又恐意有所存、若今度有此沙汰、不立舞者、將來諸大夫舞人永不可<sub>レ</sub>勤仕、若又相交勤仕之時、必喧譁事出來歟、只偏不論是非、就<sub>レ</sub>近例、任<sub>レ</sub>位階之儀、又一之上計也、仍強不<sub>レ</sub>致沙汰、定有<sub>レ</sub>謗難之人歟、改<sub>レ</sub>御裝束了、立<sub>レ</sub>御倚子、又改<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>御青色御袍、又出<sub>レ</sub>御自<sub>レ</sub>御倚子西<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>御之、余經<sub>レ</sub>御前簀子、候<sub>レ</sub>鬼間妻戶內、次公時

參上、余示<sub>レ</sub>氣色、公時退下召<sub>レ</sub>人々歟、次權大納言宗家卿已下着<sub>レ</sub>壁下座、次公時朝臣參<sub>レ</sub>候年中行事障子下、候<sub>レ</sub>氣色退下、徒跣渡<sub>レ</sub>庭中、召<sub>レ</sub>使已下、更歸<sub>レ</sub>出中門了、次使舞人陪從等着<sub>レ</sub>座、次一獻、內藏頭經家朝臣、陪從座定經、次二獻、中御門大納言普重下次立<sub>レ</sub>插頭花臺、堀孟綱孟不見如何次三獻、權中納言實宗卿、陪從座保朝臣次陪從發<sub>レ</sub>哥笛、次置<sub>レ</sub>重盃圓座、左中將公衡朝臣、左少將忠季朝臣、勸<sub>レ</sub>重盃、五位藏人家實勸<sub>レ</sub>陪從、即歸路之次、就<sub>レ</sub>指頭花臺下、次宗家卿已下指<sub>レ</sub>使已下插頭花、公卿不足之間、殿上人次入御、余參上裏<sub>レ</sub>御簾、又改<sub>レ</sub>御裝束、即出御、余渡<sub>レ</sub>御前簀子、就<sub>レ</sub>着座之處、無<sub>レ</sub>厚圓座、又圓座不足、仍仰<sub>レ</sub>定長、以<sub>レ</sub>藏人一令<sub>レ</sub>敷之後着座、次定長參上、候<sub>レ</sub>年中行事障子下、余示<sub>レ</sub>氣色、退下告<sub>レ</sub>公卿、次實宗已下着<sub>レ</sub>座、宗家早出親信已下着<sub>レ</sub>長橋代座、二位中將不着<sub>レ</sub>之、余陳示<sub>レ</sub>之也次殿上人着<sub>レ</sub>壁下座、次定長參<sub>レ</sub>上年中行事障子下、余目<sub>レ</sub>之、定長着<sub>レ</sub>沓渡<sub>レ</sub>先庭、召<sub>レ</sub>使已下、次先使陪從等參入、出<sub>レ</sub>哥之後、良久舞人進舞作<sub>レ</sub>輪歸入了、次祖揭、又參上舞<sub>レ</sub>求子、了歸入、次入御、余褰<sub>レ</sub>御簾、即余自<sub>レ</sub>北陣方<sub>レ</sub>退出、不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>舞人渡<sub>レ</sub>北陣之儀、聊所勞更發之間、所<sub>レ</sub>忍罷出<sub>レ</sub>也、



入公卿、

大納言、宗家、中納言、實宗、參議、親信、雅長、

二位中將、實經、

使、修理大夫定輔朝臣、

歸家之後、召陰陽師等令占春日社恠異、昨日十五

未刻、無吹又無恙柳倒懸幣殿云々、占形云、病事

口舌云々、宗賴今日相具小童參詣春日御社、仍仰

親雅令占之、自昨日、被始唯識會、家印光重下向、

申時、例事也、余神事、又精進、今日依神事、不念佛也、

今日事了可服魚類、神事、而依唯識會、不服魚也、

十七日、丁未、季弘自天王寺歸洛、爲召問替星事、所

召寄也、持參天文奏、載替氣之由、余問云、替星な

れば替星とこそ奏すれ、又異氣なれば妖氣とも客氣

ともこそ奏すれ、乍置替字、改星字、載氣字、古未

見、此奏如何、申云、本無星仍載氣之由也云々、又

問云、元曆本無星、然而獻替星奏、今依無星、非

替星之由申之如何、申云、然者返預テ可獻妖氣

奏、仰旨尤有謂云々、申狀無所據歟、尤不審々々、

定長朝臣參上、以件人問季弘也、

十八日、戊申、晴、今日已刻地震、頻有此變、尤可怖畏歟、

十九日、西晴、此日列見也、又有公卿勅使召仰、酉刻

許、着直衣參內、戌刻許、樞大納言實家卿參上候殿

上、余以奉行職事家實仰云、於鬼問邊、來廿五日可

被發伊勢幣、爲勅使可被參、來廿九日可令

參着者、即實家卿參內侍所、是先例也、次余退出、

此日、季弘業俊等朝臣持來地震密奏、此次問替星

之間事、季弘申出尤旗之由、業俊申替星之由、兄弟

所申又以相違、尤不審、子細不能記盡也、

廿日、戊辰、春日物忌也、於法成寺修仁王講、春日恠

異物忌也、入夜家實來門外、明曉參天王寺令奏

條々事也、宸筆宣命事書消息付之、今日有記錄所

評定云々、

廿一日、亥辛、雨下、物忌也、今日、造東大寺長官定長朝

臣下向彼寺、爲開勅符倉也、大監物有賴辨史等相

具云々、彼倉濕損殊甚、可被忿檢知之由、寺家所

言上也、

廿二日、壬子、晴、公卿勅使行事辨棟範申幣物不足事、宗

隆定經等申條々事、

廿三日、丑癸、晴、此日、公卿勅使定也、上卿權大納言兼房

卿、辨左少辨棟範、申刻、余着直衣參內、棟範持來

日時、逢陣中、余參<sub>ニ</sub>內於鬼間、見<sub>レ</sub>之返給了、職事家實仰<sub>ニ</sub>宣命趣<sub>ニ</sub>云々、秉燭、櫛中納言兼光卿參上、余於<sub>ニ</sub>直廬<sub>ニ</sub>眼前仰<sub>ニ</sub>宸筆宣命事、子細具仰了、

已刻、家實歸<sub>ニ</sub>來自<sub>ニ</sub>天王寺、有<sub>ニ</sub>御返事、宸筆宣命事聞食了、此定可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰云々、又家實仰<sub>ニ</sub>條々事、

宸筆宣命趣事、

一外宮御鎖澁堅事、

一天變事、

一公家御慎事、

一院御慎事、

一可<sub>レ</sub>拂<sub>ニ</sub>餘事<sub>ニ</sub>致<sub>ニ</sub>太平<sub>ニ</sub>事、

一去文治二年祈<sub>ニ</sub>天下靜謐<sub>ニ</sub>、其後國土豐稔、已是靈應也、自今以後彌王法可<sub>レ</sub>反<sub>ニ</sub>淳素<sub>ニ</sub>、寶祚可<sub>ニ</sub>延長<sub>ニ</sub>事、

件六ヶ條外、兼光申云、御元服事、嘉應度前年冬

公卿勅使被<sub>レ</sub>發<sub>ニ</sub>之歟、余云、頗雖<sub>ニ</sub>兼日<sub>ニ</sub>何事之有

哉、可<sub>ニ</sub>加載<sub>ニ</sub>之由仰<sub>レ</sub>之、此旨追可<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>院也、

廿五日、<sub>卯</sub>公卿勅使進發也、

廿六日、<sub>丙</sub>雨下、此夜官奏也、吉香、右中辨親雅朝臣候

奏、右大辨基親參入、余着<sub>ニ</sub>束帶<sub>ニ</sub>、

廿七日、<sub>丁</sub>今日爲<sub>ニ</sub>方違<sub>ニ</sub>向<sub>ニ</sub>水田庄南邊<sub>ニ</sub>、

## 四月

一日、<sub>辛</sub>平座、上卿兼光卿、參議親宗卿云々、

三日、<sub>癸</sub>入<sub>レ</sub>夜歸<sub>ニ</sub>大炊<sub>ニ</sub>、<sub>昨日</sub>拾<sub>ニ</sub>九<sub>ニ</sub>、今日戌刻、自<sub>ニ</sub>天王

寺<sub>ニ</sub>定能卿傳<sub>ニ</sub>院宣<sub>ニ</sub>、余女子入<sub>ニ</sub>內事聞<sub>ニ</sub>食了<sub>ニ</sub>、縱雖<sub>ニ</sub>他人

令<sub>レ</sub>申、如此令<sub>ニ</sub>申上<sub>ニ</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>ニ</sub>異議<sub>ニ</sub>、況無<sub>ニ</sub>他人申

事、早可<sub>レ</sub>致<sub>ニ</sub>沙汰<sub>ニ</sub>、又有<sub>ニ</sub>宸筆勅報<sub>ニ</sub>、其趣惟同、歡喜之

思、千廻萬廻也、

今夜、公卿勅使入浴、日次依<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>宜不<sub>ニ</sub>參內<sub>ニ</sub>、來九日

可<sub>ニ</sub>參內<sub>ニ</sub>云々、

四日、<sub>甲</sub>去夜公卿勅使入浴、送<sub>ニ</sub>書於家實<sub>ニ</sub>許<sub>ニ</sub>曰<sub>ニ</sub>、外宮

御戶無爲被<sub>レ</sub>開了云々、此事實希代事也、世間有<sub>レ</sub>憑者

歟、今日此由申<sub>ニ</sub>院了<sub>ニ</sub>、又入<sub>ニ</sub>內事畏<sub>ニ</sub>申了<sub>ニ</sub>、入<sub>ニ</sub>夜歸<sub>ニ</sub>來自<sub>ニ</sub>

天王寺、賴朝卿申、朝方卿同<sub>ニ</sub>意行家<sub>ニ</sub>之間事、所<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>

仰下<sub>ニ</sub>也、

五日、<sub>乙</sub>定長朝臣來、祭除目任人等注立了、

六日、<sub>丙</sub>卯刻、定長朝臣來、賴朝卿重申<sub>ニ</sub>朝方卿<sub>ニ</sub>事、件

消息去夜半自<sub>ニ</sub>帥卿<sub>ニ</sub>之許<sub>ニ</sub>所<sub>レ</sub>遣也、只今參<sub>ニ</sub>天王寺<sub>ニ</sub>、先

所<sub>ニ</sub>內覽<sub>ニ</sub>也云々、且又今日可<sub>レ</sub>來之由所<sub>レ</sub>仰也、余申<sub>ニ</sub>

存旨了、

七日、丁依上卿不參、擬階奏延引、

八日、戊辰、雨下、法印被來、中將密々和四三會、

云々、公卿勅使參宮以後歸參以前、先例非神事也、

九日、已依山科祭神事也、定長朝臣歸參、朝方卿事

可被解所職、又可被停國云々、此事偏帶亞相

之口滿之令、然也可恐也、今日、大外記賴業持來御

元服雜例一卷、留之、

### 閏四月

八日、此日有臨時除目、晚頭五位藏人家實自天王

寺歸參、余召廉前問子細、家實仰條々事、

一、奧州追討事

仰云、追討事自本可然之由、思食之上、如此令申

光神妙歟、思食早可成、賜宣旨、來六月塔供養之由

聞食、若遇彼間可遣歟、將今明可遣歟、可隨令

申、且又官使出立之間、自經日數歟、仍且爲用意

所仰遣也、抑、伊勢遷宮、并造東大寺者、我朝第一

之大事也、而赴征伐之間、諸國定不靜歟、然者可

成、彼兩事之妨、件條殊召仰不可致、造宮造寺之害、

爲公爲私以之可用、追討之祈禱也者、以此趣、

經房卿可書遣御教書於賴朝卿許者、

余仰、早行、向彼卿亭、可仰此子細者也、

### 五月

三日、戊午、雨降、辰刻出門、已刻於草津乘船、酉刻

着窪津、乘燭參寺門、先着宿所、以兵部大輔能季

申參入之由、明日可參御所、只今御行法之間也

云々、仍今夜不參入、依日次不宜、明曉可奉禮舍

利、今日、余烏帽子直衣、於窪津乘車、隨身上薦乘

移馬在車前、殿上人諸大夫相并千餘人着布衣、前

驅、余宿所先々所也、四門北殿念佛堂也、右大將、藤中納言定長

〔等〕來宿所、

四日、癸卯、天陰、此日、太上天皇於四天王寺供養

千部法華千口持經者等、自去二月廿二日御參、

當寺、手自轉讀千部經、令修、每日三時護摩、給、凡

其外御行業不可勝計、今日相當結願、殊所被修、

此大善也、余雖不可必參入、非曾隨喜御願、又結

緣之志尤深之故也、始百々日御參隨、萬人不甘心、而

一日無退轉、如思食被逐御願、今日有此作善、

道俗還所奉歸伏渴仰也、寅一點、先小浴、着烏帽



直衣、密々參金堂、先於西內以龜井水入椀、洗手、西面二度禮拜之後、入自中門參金堂、先三度禮拜了、著正南疊、千僧等少々已、次申上正廳經御燈明等、於後戶方給次奉出舍利、三粒無爲出給、尤爲供、種々念誦相殿、如例、奉進之後、奉以唐物二段爲布施、其後暫小念誦、信心殊發、可悅々々、即欲參聖靈院之處、天已欲曙、仍不參、已刻、着束帶、不帶、但持笏、前數十人、殿胡如例、各參院御座、西門中門金堂北等參也、撤笏、笏着三公卿座、與右大將已下四人、召別當左中辨定長朝臣五人許在座、問僧參否、申皆參之由、即被奏事由、仰可始之由、便被仰鐘歎、此事等皆請、小時定長朝臣來召余已下、先是、法皇出御、座、左方僧第三不、戒、依之、年、令着給云々、草座三衣等役、責任法印獨勤、次余已下着佛前正面以北廣庇座、東面、左大將追參加之、次左右亂聲振揮、天王寺舞、如例、次右方樂行事、實明朝臣率師子已下、經金堂前寶塔東等、出南中門、雜人充、前殿、仰、隨身并檢非違使等、讓拂退也、參聖靈院、右僧等起堂上座、從之、次左方樂行事、成經朝臣率師子已下、進寶塔良邊、次左方僧等起座參金堂、法皇同令列參給、實任法印、御身廣、如次第、仍余已下列居前庭、法皇令進、金堂前庭、給之後、余退起、次太子御

與入自南中門、奉昇立寶塔東庭、次舍利御與自金堂渡御道場、自正面西階、奉昇上、三綱、安堂中、次奉安太子御與、舍利南、此間、余於閑所、公卿座、也、奉禮之次於庭上、衆僧讚歎誦加陀三段、拜、此間備百種供具并布施物等於佛前、取居次讚歎頌文了、衆僧復座、法皇御即余復座、次公卿等復座、次講讀師法印、着禮盤、次衆僧惣禮、三度、了登高座、此間撤地鋪、給布也、爲、敷、惣禮座、也、近年法勝寺千僧敷弘蓮、長、次余已下起座下堂、取笏着惣禮座、先例上官列之、今度不、仍右方公卿一列、左先立座後揭シテ突、方殿上人一列也、經、後、着之也、余練步如常人別如此、公卿南上、殿上人北上、皆東面也、次公卿侍臣皆悉着了、余已下置笏於右、更起テ束手三拜、依爲右突右膝、敬、御所方之儀也、而訖取笏居揖、乍座着沓、揖右廻、上方、退下、於公卿座末程一練止、則以復座、諸卿同復座、次撤惣禮座、如本敷地鋪、次供花、先發菩薩已下自樂屋、捧之持參、三綱於堂上、傳供之、次師子菩薩鳥蝶等次第出舞、次堂童子着座、左右各三人、其人說侍臣、此次唄師二人着佛前座、一、枚也、即發音發樂、次堂童子分花筥、次散花師二人進立佛前、發音、發、此間樂人等左右分進、到正面南北、左方、行、右方

事各相副也、堂上衆僧降、自正面、次第相從、法皇同令  
列給、仍公卿又降立、余同降立之間、法皇依左方、令  
加南列、給、公卿例立之所太遠、仍各歸昇了、行道之  
間、公卿等在公卿座、暫之行道之導師已下復座、次  
公卿還着御前座、大堂童子收花宮、退下、次講師啓  
白、此間公家御誦經使內藏頭經家朝臣、院司修理大  
夫定輔朝臣  
申、次之、先願、答於余、依余、召着圓座、持給、祿如例、  
定輔取經家進、出砌外、拜舞了退下、此間威儀師取、院司內藏頭經家朝臣  
經文、授導師、次度者使左近中將公衡朝臣、院司內藏頭經家朝臣  
取、參上、  
院司內藏頭經家朝臣、次公衡朝臣就、惣講師高座右邊、仰之、  
臣申、事由如始、  
退下着圓座、件圓座等共  
藏人數之、經家取、祿、公衡進、出庭中、拜  
舞退出、次余召、頭辨定長朝臣、座中、非常教可被行之  
由奏、事由、逆、御座邊、仰、聞食之由、即以同人、仰、左  
大將、伏座第一人也、國太神宮所  
之、重非、教限、其外、告免云々、實房卿起、座、於公卿座  
末、召、內記、以、圓月、之、仰、之、以、乘也、、次召、右衛門權佐  
長房、仰、之、復座、其後別當隆房卿起座降立、立庭上、  
仰、子細於長房、歟、次講師說法訖、下、座禮拜廿一反、  
此間余又召、定長、奏、實事、即仰、右大將、院司、大將  
進、寄寺家別當僧正座頭、仰、之、復座、爲、院司方、仰  
之、仍不被、仰、官也、件實以、寄寺、學頭、實然、可、被、叙、法、叙、  
又爲、水代例、以、學頭、一、每年、可、被、叙、叙、

云、次引、布施、余不、取、之、講師、一、畫、一、畫、自他、只、一、畫、法皇、御前  
云、次引、布施、不、取、之、抑、寺司、僧正、相施、若、可、加、一、重、歟、如何、  
次從僧撤、布施香爐宮等之間、狼藉殊甚、次行香威儀  
師分輪、余已下八人立之、藏人取火蝟、法皇令、列  
給、令、受、香給也、了還居、机下、返、置机了復座、次  
僧徒轉讀經一部、此間左右奏、舞安座二舞了、蘇合  
進舞間、余依、所勞更發、退出宿所、一寢、曉頭定長  
朝臣爲、御使、來、被、仰、參入之悅、乘燭參、聖靈院、奉  
禮、御影、修、誦誦了、參、御所、七、日御講結願座、  
範玄法印說法之間也、以、定長、申入、依、召、參、藏前、  
佛後、明、致、說法了退、下於西門、暫念佛之後退出、亥刻  
盤一枚、  
到、窪津、即着、膳、丑刻許解、獲、京上僧名并役人等  
可、注入也、  
五日、卯亥刻、着、大渡、於、船中、着、冠直衣、乘輿到、  
鳥羽、乘、移網代車、前驅之中兩三人前陣、於、鳥羽邊、  
改着衣冠、即入洛、申刻、參入內、今日依、可、被、行、  
詔書并流人被、召返、事等也、而上卿兼光卿及、乘燭、  
不、歸洛、仍余退仰、明日可行之由了、  
六日、乙曉頭參內、於、鬼間、書、詔書御書、院司、四、日、是、法  
初、也、上卿兼光卿、此後行、流人被、召返、官符事、云々、  
故也、  
是、高野西徒三人、并松井藏人宗長等也、依、八幡、新、去年、  
被、配、流、者、也、

十四日、四嵯峨如法經、今日始寫經云々、此日、中納言中將拜賀也、前驅廿一人、此中四位二人、六位二人、五位十七人、殿上人三人、自院給御牛、近武相具來、給祿、季經朝臣取之、隨身府生番長壺經巾、本隨身垂袴也、八條院般富門院共有送物云々、

十八日、丑午刻甚雨、未參以後雨止、此日、嵯峨如法經十種供養也、余女房相具密々行向、隆憲啓白也、入夜〔歸〕來、

廿一日、辰晴、此日、宸勝講初日也、未刻參內、自今日宿候直廬、余着殿上行事、又立行香、但不候夕座、左大將實房已下公卿八人參入、朝座講師證義者覺兼、夕座辨曉、秉燭以後事了、藏人役章燈、今日仰御願趣、頭辨定長朝臣仰之、今日、小童院也、依所勞參詣熊野、余見之、

廿二日、辛巳宸勝講第二日也、着直衣候、簾中、

廿三日、壬午宸勝講第三日也、着束帶參御所、然而大納言已上不參、仍候簾中、

廿四日、癸未宸勝講第四日也、今日候、簾中、然而束帶也、

廿五日、甲申宸勝講結願也、余着束帶行朝夕座事、但

不立行香、上臈不參之故也、新大納言爲上首也、證義者大僧正公顯、初中後許參入也、

廿六日、乙酉晴、此日、季御讀經初日也、巳刻、祭主能隆朝臣申云、去廿三日午時內宮子良一人於女良館、今日死去之由所申也、次第解遲々之間且所申也云々、

召廣房內々問例、申不分明之由、神宮不穢云云、棟範申造內裏之間事、今日依上臈不參、余不着座、但着束帶、事始啓白以後參院、申僧事之間條々

事退出、上西門院六借御座云々、院可遣喪之由風聞、仍乍恐獻諫言、今日季御讀經、納言一人候、仍

令御前參議候南殿、然間兼光卿參入候、南殿、

廿八日、丁亥晴、今日物忌也、業俊來云、昨晚有變太白犯東井第一星云々、此日被行僧事、又季御讀經

御論義也、一番公雅已講、今日可任律師、仍暫抑僧事、御論義以後被行僧事、此夜仰下山階寺別當權

別當等辨別當、以長者宣告別當、又召大夫史仰之、又職事仰上卿、令成官符云々、

廿九日、戊戌季御讀經結願也、着直衣參院、先參內、

依公卿遲參事遲始、仍余不待事始參院也、以定長申入退出、依女院御不豫六借御座、御其御方、仍



不謂之由有仰、今日、能保朝臣告送云、九郎爲泰衡被誅滅了云々、天下之悅何事如之哉、實佛神之助也、抑又賴朝、卿之運也、非言語之所及也、

## 六月

一日、己未、今日神今食齋如例、但散齋也、子良死去事進次第解、申穢之由、不載子細、依不審一重道尋了、待使歸來之間、猶可爲神事也、

二日、庚申、此日、爲御方違、行幸鳥羽南殿、即被用御本所也、內侍所依爲京外不渡御、又須有吉事也、然而檢先例無其事、加之造作仗座之間可及犯土々用中有憚、仍無之、余乘車參會鳥羽也、法皇密々渡御、

三日、辛酉、曉天還御、其後退出、

五日、癸巳、今日、右少辨定經辭兩職云々、

六日、甲午、參內、入夜歸來、此日被仰五位藏人左京權

大夫光綱也、依余申也、奉行故內府事、依思其事所推舉也、又被○兩按穀倉院別當季弘朝臣、此事不當、尤可被仰隆職宿禰也、

九日、丁酉、中納言中將着直衣始出仕、前座四人、衣冠、

網代車、車副共殿上人三人、帶劔持笏、隨身布衣帶劔、參內般富門院八條院等、法皇參籠今熊野給也、今日不出衣、極熱之間先例不然之故也、

十日、戊戌、召曆道宿曜道平博士行衡等問來十六日月他現否事、職事宗隆奉行也、

十一日、己亥、今日依神宮穢神今食延引、仍被行大祓、依延引、公私無神齋之儀、

十三日、辛丑、此夜爲避御靈會、行幸大炊御門亭、日來余所居住也、仍女房等去夜向九條、余獨候西廊、

戊刻參內、即行幸、余宿候、中納言中將參入勅劔置役、內侍所渡御、仍御經廻之間、無警固儀、

十四日、壬寅、今日雖可有還御、依御物忌延引、來十六日可有云々、御靈會、法皇於新造棧敷雖可有

御見物、依上西門院危急、忽停止、右大將兼雅日來造營御棧敷、雖土用中居土居造之、人以不甘心、

置御物并女房裝束等、依無御幸併進納了云々、十五日、癸卯、臨臨時祭也、使行輔、余着束帶候御

傍、陪膳公時朝臣、奉行光綱、各籠候御物忌、垂母屋御簾、卷庇御簾、御座東面、事了余退下宿廬、宣命上

卿經房卿於陣座奏下云々、此仗座用常殿上、有便



口、五獻如例、穩座勸盃右衛門督、穢事家經、稔事、稔事召人、

拍子、定能賴、付哥、公綱、笛、實藤、笙、隱房、篳篥、觀能、箏、笙、琵琶、言輪、已上兩大同前、和琴、左大將修雅、右大將公行、

曲

左大將、宮、席田、鳥朝兼、更衣、萬歲樂、  
右大將、宮、美作、伊勢海、萬歲樂、

八月

一日、戊子晴、右衛門權佐長房補三年預之後申吉書、余依所勢不出客亭、以人傳覽之、加賀國御封解文、及晚左大辨基親朝臣來申拜賀、中余及女房、即申吉書、傳之人、今日請法然房之聖人、談法文語及往生業、

二日、己丑晴、女房相共密々向九條、依大納言灸治也、召知康法師令指驗灸所三十ヶ所、賜牛一頭、左衛門尉信弘引之、其後招故女院古者女房二人、宰相殿、土間、入內之間舊事定、御服以下衣色、入夜歸大炊亭、於九條堂宗賴申御方違行幸之間事、

三日、庚寅晴、東大寺聖人重源來、余謁之、語御柱百五十餘本採了、十餘本已付御寺了、上御沙汰不緩者、

三ヶ年之内可造畢云々、而如當時者、周防國中無御沙汰、又彼國被付造寺以後、新立莊及五六ヶ所了、如此者始終不可叶、諸國麻苧并人夫一切不叶、然間空領一州無成之由、必蒙謗難歟、仍只奉行御佛事、欲辭造寺事云々、余再三加制止了、此日、宗隆申御修法之間事、宗賴朝臣又申數ヶ條事、又季長自南都歸來、語小童下向南都之間事、僧正殊入心頻以憂慮云々、尤爲本意者歟、  
四日、卯晴、此日、北野祭也、余欲立神馬十列等、而聊有觸丙穢之疑、仍下筵之處、申不淨之由、仍不獻之、於河原修由祓、宗賴朝臣宗隆等申一條事、入夜宗賴朝臣自內裏來云、主上自今朝聊有御不豫事云々、仍乍驚令歸參宗賴尋申子細、又今日復日也、明日可行御占、又明日無殊障之日也、可始神事御祈等之由仰之、小時歸來云、御有穢無殊事、小御溫氣御、又御咳氣歟云々、明日可奏院之由仰之、依多武峯恠異命占之、恠所并長者可慎口舌云々、明日明後日物忌也、

五日、壬辰晴、多武峯物忌也、早旦、宗隆來、殊事不御云



云、以宗賴申院了、又今日依障召、陰陽師等於藏人所、行御占、御膳誤之由占云々、今日始行御祈等、即功土公兒氣御祭、各五泰山府君御祭、又二間仁王、七七瀬御祝等也、親雅長房等來申一條々事、來廿一日余爲奉禮、南圓堂并御佛可下、向南都、事可奉行、之由仰長房了、

六日、已晴、物忌如昨、自今夜始、四季秋分護摩、不動、法住寺主上御不豫令減給了云々、御溫氣快散云云、尤爲悅々々々、今日以宗賴朝臣奏院云、付定能然而御未承可傳奏之仰、直不申付女房令申云々、上西門院御事、舉哀過禮、人感其御志深、凡太上天皇者同正帝、絕傍其、然而依養母之儀、御着服、又有天養之例、二條大宮崩御例、爲羽院依養母御着服、不能左右、其上御遺喪之條無例之由、天下頷之、其上開門戶、下格子、已經旬日云々、准天子不事親之儀者不可過三日、數日被開門之條、事涉禁忌、加之、諸奏事等、職事成、仰不奏聞、適雖參入無傳奏之人、自門外空歸、大略奏事不通了、旁爲天下大事、於今者上格子被開門戶、尤宜歎和譏雖有恐、存忠所具上二者、七日、甲陰雨下、入夜向九條堂、先是洗頭自明旦可

始恒例念佛之故也、放生會辨親雅聊申故障、仍可催他辨之由仰家實了、家實依祖親雅有觸產穢之事、而宮寺申可忌卅日之由、余仰不可然之由、公家之法、依無忌卅日之例之故也、而宗賴朝臣勘進先例、或雖卅日內參勤、但不或又依卅日內被憚之云々、依神事有恐、可催他人之由所下知也、但依產穢改定之由、暫不可被仰、猶乖道理之故也、此事奏聞之後有穢可被定仰、難是非事歟、雖爲聖代之例、猶以不甘心、如此之事、私記只注內議歟、重委可有沙汰事也、此日、大納言侍始之間事、條々仰親雅了、長房注申南都御出雜事、又召職事兼資、仰御出可奉行之由、

八日、乙雨下、辰刻、法然聖人來授戒、其後始念佛、家實放生會辨申棟範丙穢之由、仰可催兩少辨之由了、南圓堂四天御衣木探進之由、慶俊申之、仰可付木津之由了、今日定能卿以消息傳仰院宣、先日所令申之可被開御門事也、仰云、所申可然、始日被開門、以後依何事可被開了不思食之間、自然所過御也、依重令申可被開云々、

申早可被開之由了、入夜家實申云、兩少辨固辭云、仰重可催由了、

九日、丙晴念佛如昨日、召宗賴朝臣賜定經宗隆等請文、仰可奏聞之由、歸來云、如此事一切不可聞食之由有仰者、未申其事、只聞食入之由、爲余神事、不可申之由有仰云々、余

仰云、猶參上可奏子細、神事欲闕如、非御定者不可叶者、即歸參了、又仰可問人々之由了、寺中狀、外記勅例等、又自院宗賴歸來申云、可催定經之由仰、應德寬治例等、有仰、仍仰遣之處、申所勞之由云々、

十日、丁頭中將成經朝臣來云、內大臣申云、明日欲着陣、而辨官一切不候、自上可被催出歟云々、親雅朝臣可參之由仰了、宗賴入夜又來云、院宣云定經辭申、可催宗隆者、即遣御教書了、自其向所々、人々申狀、一向任宮寺申旨、并應德等例可被

憚卅日、止親雅可被遣他人云々、但公家自今以後可被產穢卅日之條不可然、只今度件任先例可有沙汰云々、

十一日、戊此日、右內兩府着陣云々、右大辨定長候申文云々、此夜、大納言方侍始也、余依念佛不向其家、先日家司已下仰親雅朝臣了、今日來仰任先日

仰下旨、可成令旨之由、又名簿直可覽大納言、又家司已下拜賀於彼御所、可申兩方之由仰了、家司三人、伊豫守季長朝臣、右衛門權佐長房、職事二人、數位源國行、同高院仲實、侍十六人、余時例也、交名在別、所司宮內丞高行、下家司三人、知家事親賴年預也、案主季俊久經、今日事、親雅朝臣奉行也、即書下令旨云々、十二日、亥兩少辨猶辭退、仍仰子細之間、兩人又領狀云々、

十三日、庚以宗賴申兩人領狀之由、定經可宜之由有仰、仍仰其旨了、

十四日、辛子刻念佛了、向大納言許、灸治之後無殊事云々、其後歸大炊御門亭、光綱來申云、造宮使爲定服假之替事、人々被申旨不同、內大臣申云、今月可被逐棟上者、被補有能爲定、可宜歟云々、右大臣堀川大納言等申云、可被行御下者、

左大臣在德大寺、上卿通親卿在久我、仍此兩人未能尋問云々、余仰云、明日可向德大寺、又通親卿可忿參上之由可仰遣、又明日來大炊亭可申子細者、放生會上卿別當隆房卿、辨左少辨定經等下向

云々、

十五日、壬王物忌也、宗賴申云、春日行幸事仰寺家之處、申承了之由云々、來十月廿一日也、入夜光綱來

申云、人々申狀申院之處、有能可補之由有仰云々、

又外宮造宮使事可計之由有仰云々、

十六日、癸卯法印被來、光綱來、有能事今日可宣下云

云、又外宮造宮使事可仰合上卿之由仰了、即參內

仰之、歸來云、定輔就上臈可被仰云々、仰可奏

聞之由了、

十七日、甲此日、始護摩二壇、不勅、毗沙門、觀性、

十八日、乙召右大辨定長條々事奏院、其中有追討

御祈事、

廿日、丁未雨降、入夜大風、早旦洗頭、可參御寺、依

精進也、申刻、向八條堂、內府月忌也、其事了向南

家宿之、入夜宗賴來云、追討御祈事付定長奏聞

之處、仰云、惣爲天下尤可有御祈、早可令計沙

汰者、大略無御甘心歟、但依不分明、猶明日可

伺之由仰了、祈年穀奉幣來廿八日可宜之由仰了、

廿一日、戊申陰雨時々下、依去夜大風、京中人屋多以損

亡、東北院半作堂顛倒云々、又法成寺破損殊太云々、

召三家司彈正大弼資奏明臣、仰法成寺修理事可奉

行之由、宗賴朝臣且遣行事侍等、實檢損壞事、

廿二日、己晴、此日下向南都、爲奉禮南圓堂佛、

不空顯衆又爲檢知造寺也、先例上棟以後不經幾

程長者必有下向、而去年正月雖上南堂棟、依家

大事出來、拋萬事了、人命有期慙生、去春以後更

致造寺沙汰、法華會以前於南圓堂行此會例也可造畢南圓

堂之由結構、佛又同前、去夏間依病空過了、去月上

西門院崩、法皇之悲哀過法、又以延息、仍自然遲引

及今日也、下向儀追承德例、丑刻出京、宇治渡了、

於一坂邊日始出、已刻着木津、依船乏少經時刻、

一昨日大風雨之未刻着佐保殿、依承德例大般不拜直

昇、解脫休息、申刻參御寺、入自西門、經假屋

北東、并中門跡等、先向金堂、此間、堂中鹿一出現、

自東走四方了、事之希異更以不記書、余迷惑合掌小禮、緇素

拭隨喜之淚者也、凡下向南京而詣御社之人以

逢鹿爲第一之吉慶、又其身可有慶之時、必有此

瑞應、是皆山岳原野之間也、鹿鹿之爲體、深疎人衆、

而當堂之西方自昨日騷動掃除之人夫見物之衆徒

所、而無有其隙、而忽不憚稠人、況又顯現金堂



中哉、向長者至告瑞、感淚數行、一恐一悅、身雖不劣、志存謹信、是以有靈應者歟、此堂半作、未及張齋、余佇立堂砌隙、次向東金堂、別當權別當同以相伴、金堂前參會也、余昇壇上、脫香階上壇下也、招上別當覺憲一人、問佛之間事、此佛、先年堂衆等取山田寺金銅佛奉安置也、彼時雖有沙汰、遂以止住、今奉拜見之處、亦大相應、次向食堂、奉安十一面觀音像一體、次檢知經藏付房等之跡、御詣講堂、昇自南階、看正面圓座、先禮之後若之、假引上床一脚、其上敷大文高麗疊一枚也、公卿二人在正面已西壇上、殿上人已在前面庭、正權別當着正面以東之床、不敷疊如何、大修誦、傳師得業者也、尤可點僧綱、奉行家司最難進上機之證請得誦業王、忽不能改定也、自身坐堂之時尤可請僧綱也、雙墮物百段、手作布十段也、誦兩教化之後槌鐺如例、燈明五其後給緣、大掛一領、親雅朝臣取之、加布施之時可以爲被物歟、給大褂之時不加布施也、此事又違先例者也、但如此事無定法、何事之有哉、此間小雨霽、余中心所念、卽雨止、次經鐘樓南假屋東南面金堂、同昇自東階、奉見佛、未押薄白木佛事光見苦、寺家之沙汰緩々歟、次向南圓堂、三重組上張齋、葺正面檜皮、大略於作事者成寄歟、會以前必可造畢歟、庭中雖儲座、余不着之、依凡卑

五百五十四

保殿之後別當法印來、隔簾謁之、相續僧正相具悉  
意小童被來、數刻言談之後被歸了、今日僧正鈍色  
裝束也、依余示也、  
今日出行儀、

余冠直衣、京出入寺  
宮同

底車、依道所不懸  
下簾故實也車副六人、布衣不刻禮、

隨身上膳四人、一人不參、依重喪也、  
仍三人見參御移馬、布衣冠、狩  
胡蘇也

下膳六人、布衣在車後、檢非違使後也、

檢非違使尉明基、明法博士、  
在車後

前班殿上人四人、利部卿宗雅朝臣、右中將伊輔朝臣、  
前兵部大輔能季、右衛門權佐長房

諸大夫十二人、

公卿二人、宮內卿季經卿、  
源宰相兼忠

侍五人、

下家司二人、

衣櫃一雙如例、

自余雜事如例、

廿三日、庚戌晴、卯刻、着冠直衣、重向佛所、一乘  
院相毫猶  
有不雅、仍所參向也、重見出其難、仰佛師康慶、  
大略承伏款、即歸京、于時日出  
以後也未刻着宇治、巡檢經  
時刻、申刻歸京、日沒後秉燭以前到着九條、此夜宿、

廿四日、辛亥天晴、職事等來申、條々事等、入夜參院、上  
西門院穢以後今日始參也、以右大辨定長入見參、  
法皇御母三品私家云々、仍數刻以後來示御返事、此  
陰以後可見參也、當時無寸暇云々、即參內、未御  
寢以前也、小時歸大炊亭、

廿五日、壬子天晴、此日、奉書金泥如法心經一卷、可  
奉龍佛身之經內也、用竹膠也、但寫經之法、強  
不如如法經書寫之體也、

廿八日、乙卯天晴、此日、南都小童歸京、爲加少灸治  
也、此日、秋季祈年穀奉幣也、上卿內大臣兼雅、當日  
先有定、辭別被載、追討事、其外社々等恠異各載  
之、

卅日、丁巳自此日、女房始湯治、五木湯也、

### 九月

九日、平座也、

十六日、癸酉此日有臨時除目、以宗賴朝〔臣〕奏任人  
之間事、藏人辨宗隆任延尉佐、直在左

十八日、乙亥晴、此日、大納言拜賀也、晚頭人々來、堀川  
大納言忠親、左衛門督定能、帥中納言經房、已上直別當  
衣

隆房、藤中納言兼光<sup>已上</sup>等也、

廿日、<sup>丑</sup>白地向九條、依<sup>三</sup>內府月忌也、

廿一日、<sup>戌</sup>大納言勅授事下、宣旨云々、

廿二日、<sup>卯</sup>歸大炊亭、忠親卿來示<sup>三</sup>合南圓堂佛奉渡

之間事、

廿四日、<sup>巳</sup>詔書覆奏之由、兼不聞之間不<sup>三</sup>參內、而內

記持來、不<sup>三</sup>參內、於<sup>三</sup>里第書御畫、依<sup>三</sup>不審忽問例

之間、粗檢<sup>三</sup>出先例、書<sup>三</sup>可字了返給、

廿五日、<sup>壬</sup>參八條院、賜佛舍利八粒、<sup>佛舍利也、爲奉</sup>

廿七日、<sup>甲</sup>陰不雨、丑終出京、下<sup>三</sup>向南都、依<sup>三</sup>明日可

奉渡南圓堂御佛也、毛車直衣、隨身<sup>三</sup>上臈冠、下臈

布衣、前臈衣冠、大納言衣冠毛車、午刻着<sup>三</sup>佐保殿、申

刻參南圓堂、見<sup>三</sup>廻作事、又參佛所、奉<sup>三</sup>禮御佛、密

密手自取<sup>三</sup>筆奉<sup>三</sup>開眼、入<sup>三</sup>夜歸<sup>三</sup>佐保殿、

廿八日、晴、風靜、此日參<sup>三</sup>春日御社、并奉<sup>三</sup>渡<sup>三</sup>新造御

佛於南圓堂、寅刻着<sup>三</sup>束帶、<sup>有文帶、大納言</sup>先參<sup>三</sup>御

社、經<sup>三</sup>御寺西北東等、并一鳥居北邊春日林等、列<sup>三</sup>二

鳥居下、下<sup>三</sup>車、先着<sup>三</sup>祓戶座、公卿同着<sup>三</sup>之、御幣神寶

神馬等列立、<sup>神寶、只金銀幣也、白妙幣三人取之、大社四神</sup>

了經<sup>三</sup>着到殿南、入<sup>三</sup>南門、經<sup>三</sup>幣殿、着<sup>三</sup>庭中座、大納言

同着<sup>三</sup>之、宗賴來授<sup>三</sup>金銀幣、藤氏五位<sup>大納言</sup>授<sup>三</sup>大納言

幣、余并大納言相共兩段再拜了、余幣神主受<sup>三</sup>取之、大

納言幣又他社司來受<sup>三</sup>取之、神主入<sup>三</sup>中門、申<sup>三</sup>祝、此間

引<sup>三</sup>廻神馬八匹、<sup>引廻中門前都也、八正</sup>訖神主歸出<sup>三</sup>於中

門外壇上、申<sup>三</sup>還祝不聞、受<sup>三</sup>取神馬、引<sup>三</sup>入中門內了、

次給<sup>三</sup>社司祿、先是昇<sup>三</sup>入祿幸櫃於西廊邊、藤氏諸大

夫等取<sup>三</sup>之、次第給<sup>三</sup>社司、々々等於<sup>三</sup>羅西頭、賜<sup>三</sup>之、次

第歸<sup>三</sup>入中門也、皆給<sup>三</sup>之、此間、余<sup>三</sup>心祈<sup>三</sup>請天下并

家門事、又祈<sup>三</sup>申入內事、聊有<sup>三</sup>所願成就之瑞、次余起

座、<sup>揖如</sup>經<sup>三</sup>本路、於<sup>三</sup>初所帶劔、出<sup>三</sup>中門、於<sup>三</sup>鳥居外、乘

車、經<sup>三</sup>本路、於<sup>三</sup>興福寺西御門、下<sup>三</sup>車、爰已奉<sup>三</sup>昇<sup>三</sup>佛

於<sup>三</sup>一乘院門外、仍忽余不<sup>三</sup>着<sup>三</sup>假屋、直進<sup>三</sup>佛邊、公卿同

之、余立<sup>三</sup>四足門、已次其以西列<sup>三</sup>立東上南面、僧徒

列<sup>三</sup>南方、次樂人進出、即引<sup>三</sup>寶車、兩家下戶引<sup>三</sup>之、付<sup>三</sup>

綱二筋、布綱下臈等付<sup>三</sup>之、後綱氏殿上人諸大夫付<sup>三</sup>

之、余已下列<sup>三</sup>行佛後、見者莫不<sup>三</sup>落<sup>三</sup>隨喜淚、經<sup>三</sup>公

卿假屋東、到<sup>三</sup>南圓堂前、暫留<sup>三</sup>之、氏公卿等懸<sup>三</sup>裾

入<sup>三</sup>幔門、付<sup>三</sup>綱、即引<sup>三</sup>入幔門、余隨<sup>三</sup>後立<sup>三</sup>佛北方、僧

徒本自御堂南北列立、<sup>次佛所、載在幔門南、然而諸人</sup>

梵音錫杖、次引<sup>三</sup>寄壇下、爰余進寄解<sup>三</sup>寶蓋綱、右方、別



當法印覺憲又進寄解之、左方、其後造寺長官親雅行事  
家司長房等撤之、賜造寺判官并造佛行事下家司、  
持出慢門了、次余已下着假屋、此間奉安佛、經  
數刻、入三申刻、申奉安了之由、仍余已下着堂前  
座、壇上、余着正面座、建立小床、數高麗疊、其上敷次開眼導師  
座、管則座一、公卿座列其北、皆向堂方坐之  
東寺一長者法務權僧正俊證入東慢門、昇自南階  
着座、即登禮盤、開眼了着下座、南方、又置禮盤一、居  
先、是着長床座、北方、次權中納言兼光卿取開眼導師  
祿、取布施、次宗賴親雅取別當權別當等祿、續被物  
次導師已下退下、次佛前庭敷三懸禮座、次余已下着  
其座、三度禮佛了、歸着假屋、給佛師祿、引馬又給大  
召行事重永給三掛一領、此事雖不可必然、依有  
殊功、爲令勇將來殊所賜也、見者驚目、又於同  
所給三祿、是又初雖有誤、其後更以有功、仍所  
優賞也、次歸佐保殿、改裝束、晚頭參東大寺、即歸  
京、子刻着宇治一宿、良後房法印所傳領也、  
今日奉籠佛像之中、於佛舍利經卷已下目六、注  
左、爲顯來葉也、

草創以來火災雖及、度々、佛像未化灰、今治承之  
回祿、始遭此災、爰當微臣之時、再奉彫刻尊像、

情憶機緣之不淺、誠催信心之甚深、仍御身之中奉  
籠金色蓮花一莖、其中奉納五輪塔之中奉籠金  
之種子、銀之絹索、并佛舍利三粒、五輪種子等、又塔  
婆四隅、奉立金字經典一卷、所謂寶篋印陀羅尼  
經、法花經、觀音品、不空羂索經、般若心經、後金剛  
等也、云佛云經、如法造之、清淨寫之、蓋惡賊之  
至也、先年所祈佛眼之少種誓願目錄同籠之、其外  
仰一身有三種之望、雖似身祈、猶是爲世也、冥  
衆定知見歟、然則廣略二種之願望定應早垂、順次  
九品之往生精祈不空歟、于時文治五年九月廿一  
日、攝政兼實謹記、

玉葉卷第五十五終

日本漢文史

籍叢刊

卷二

維史

[General Information]

书名=14664075

SS号=14664075